流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書4

－ 流山市市野谷二反田遺跡 －

平成21年８月

独立行政法人　都 市 再 生 機 構
財 団 法 人　千 葉 県 教 育 振 興 財 団

流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書4

— 流山市市野谷二反田遺跡 —

1-1-1
1-1-2
1-1-3
1-1-4
2-2-1
不明
2-2-2
不明
2-2-3
不明
2-3-1
2-3-2
3-4-1
3-4-2
3-4-3
不明
3-4-4
3-4-5
3-4-6
3-4-7
3-4-8
3-4-9
3-4-33
3-4-34
3-4-35
3-4-36
3-4-37
3-4-38
3-4-39
3-4-40
3-4-41
3-4-42
3-4-66
不明
3-4-67
3-4-68
3-4-69
不明
3-4-70
3-4-71
不明
3-4-72
3-4-73
3-4-79
3-4-80
3-4-74
3-4-75
和田峠群
3-4-76
和田峠群
3-4-77
不明
3-4-78
男女倉群
3-5-1
3-5-2
3-5-3
3-5-4
3-5-5
3-5-6
3-5-8
3-5-9
3-5-10
3-5-11
3-5-12
3-5-7
3-7. 10-1
3-9-14
3-9-28
＊巻頭写真１での黒曜石の原産地無記入は、
高原山甘湯沢群産である。
0
5cm

旧石器時代　主要石器(1)

3-10. 11-36
3-11-38
3-11-39
3-6. 10-45
3-7-48
3-7. 8-51
3-10-86
3-10-76
3-10-70
3-10-88
3-9-89
3-10-43
3-10-90
3-10-98
3-12-1
3-12-16ba
3-12-16
経過図
3-12-16
接合図
3-12-5
単独出土 1
単独出土 2
単独出土 3
0
5cm

旧石器時代　主要石器(2)

序　文

財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その結果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告書第629集として、独立行政法人都市再生機構の流山新市街地地区土地区画整理事業に伴って実施した流山市市野谷二反田遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、旧石器時代のブロック群や縄文時代の石器集中地点が発見されており、この地域の歴史を知る上で多くの貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、本書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を始めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成21年８月

財団法人　千葉県教育振興財団
理事長　　篠　塚　俊　夫

凡　例

1　本書は、独立行政法人都市再生機構による流山新市街地地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　本書に収録した遺跡は、千葉県流山市市野谷689ほかに所在する市野谷二反田遺跡（遺跡コード220-047）である。

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は、独立行政法人都市再生機構の委託を受け、財団法人千葉県教育振興財団が実施した。

4　発掘調査及び整理作業の担当者並びに実施期間は本文中に記載した。

5　本書の執筆・編集は以下のとおりである。
執筆は第１章を上席研究員　新田浩三、第２章、第３章第５節、第５章を整理技術員　山岡磨由子、第３章第１～４節、第４章を主席研究員兼副部長　伊藤智樹が担当した。編集は新田が担当した。

6　発掘調査から報告書の刊行に至るまで、下記の諸機関・諸氏から多くの御指導、御協力を得た。記して感謝申し上げたい。（敬称略）
千葉県教育庁教育振興部文化財課、独立行政法人都市再生機構、流山市教育委員会
田村　隆、望月明彦、池谷信之、小菅将夫、島立　桂、矢本節朗、永塚俊司、宇井義典

7　本書で使用した地形図は以下のとおりである。
第１・２図　都市基盤整備公団　流山新市街地地区現況図　1/2,500（平成13年３月調整）
第３・７図　都市基盤整備公団　流山新市街地地区現況図「№９・13」1/1,000（平成９年１月作成）
第５図　参謀本部陸軍測量局第１軍管地方迅速測図　「流山村」「我孫子宿」（明治13年測量）
「野田町」「守谷町」（明治14年測量）
第６図　国土地理院発行　1/25,000地形図「流山」［Ｎ１-54-25-１-２］（平成17年８月発行）

8　周辺航空写真は、京葉測量株式会社による昭和48年撮影のものをもとに、第２図を合成修正した。

9　本書で使用した図面の方位は、すべて座標北であり、測量値は日本測地系による。

10　第２章第７節の黒曜石産地推定に当たっては、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団（主に大屋道則氏、国武貞克氏）の御厚意により、黒曜石原産地を特定することができた。御指導、御協力に対して感謝の意を表します。この分析結果を基に文化層別の黒曜石産地の変遷を記載した。

11　巻末に添付したCD-ROMには、旧石器属性表（全点）、母岩別組成表、本書掲載の表・写真図版の一部、及び、旧石器のカラー写真のデータが収録されている。CD-ROMのフォーマットは、Windows、Macに対応する。ファイル形式は、表についてはXLS（Excel）、写真についてはJPEGである。ファイル目次は、CD-ROMに収納した。また、本書と同じ内容をPDF形式（中解像度、標準圧縮版）で収納した。

旧石器属性表の見方

属性表(添付CDに収録)の記載事項は以下の通りである。

挿図番号　実測図として掲載した遺物の番号であり、写真図版の番号とも一致する。ブロックごとに１から順につけた。

打面　Ｃは自然面、Ｐは点状打面、Ｌは線状打面、１は平坦剥離、２以上は複剥離打面で、-は欠損等による打面なし・計測不可を示す。

打角・剥離角

打角は剥片の打面とポジティブバルブが作る角度、剥離角は石核の打面とネガティブバルブが作る角度。

背面構成　素材の情報が失われている石器に関しては記載しないが、背面構成のわかるものに関しては観察される範囲で記入した。Ｈは主要剥離面と同一方向、Ｔは主要剥離面と逆方向、Ｒは右方向、Ｌは左方向、Ｄは背面方向、Ｖは腹面方向からの加撃による剥離、Ｃは自然面、Ｊは節理面。

末端形状　Ｆは直線状、Ｈは蝶番状、Ｓは階段状、Ｏは石核の内側に力が向かったためにアーチ状またはＬ状になったもの。

調整角　削器の刃部、ナイフ形石器の刃潰しなどの調整剥離角。

刃部角　主にナイフ形石器の刃部の角度。

使用痕　N(Nicked edge)は刃こぼれ、H(Heated marks)は被熱痕。

欠損　定形的な石器で、欠損部分のあるものを＋で表した。

遺存部位　折れたあとに残存している部位。背面側から見た部位を表す。

Ｈ：頭部

Ｔ：尾部

Ｌ：背面側から見て左部

Ｒ：背面側から見て右部

中間部の表し方

Ｖ-Ｍ：垂直方向の中間部

Ｈ-Ｍ：水平方向の中間部

以下、アルファベットの組み合わせによって遺存部位を示す。

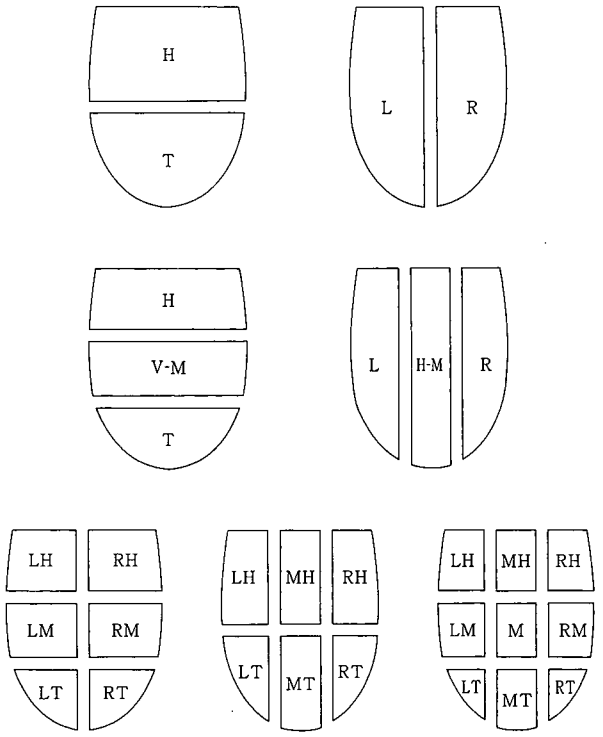
ＬＨ：左頭部　ＲＨ：右頭部

ＬＭ：左中間部　ＲＭ：右中間部

ＬＴ：左尾部　ＲＴ：右尾部

ＭＨ：中央頭部　ＭＴ：中央尾部

Ｍ：９分割された中間部



折れによる遺存部位の表示

目　次

第１章　はじめに…… 1
第１節　調査の概要…… 1
1　調査の経緯と経過…… 1
2　調査の方法と概要…… 1
3　遺跡の位置と環境…… 5
第２章　旧石器時代…… 9
第１節　概要…… 9
第２節　基本層序…… 12
第３節　第１文化層…… 13
第４節　第２文化層…… 15
第５節　第３文化層…… 19
第６節　単独出土石器…… 125
第７節　黒曜石産地推定結果について…… 127
第３章　縄文時代…… 128
第１節　概要…… 128
第２節　竪穴住居跡…… 128
第３節　埋甕…… 142
第４節　陥穴…… 142
第５節　土坑…… 144
第６節　縄文時代石器…… 149
第７節　グリッド出土の遺物…… 164
第４章　古代・中～近世…… 173
第１節　遺構…… 173
第２節　遺物…… 174
第５章　まとめ…… 175
報告書抄録……巻末

挿図目次

第１図　流山新市街地地区遺跡位置図…… 2
第２図　調査区区域と周辺の地形…… 3
第３図　上層確認調査トレンチ配置及び遺構分布図…… 4
第４図　グリッドの呼称例…… 5
第５図　遺跡分布と周辺の地形(旧況図)…… 6
第６図　遺跡分布と周辺の地形(現況図)…… 7
第７図　旧石器時代石器集中地点位置図…… 10
第８図　市野谷二反田遺跡土層図…… 12
第９図　第１文化層ブロック配置図…… 13
第10図　第1文化層第1ブロック遺物分布 …… 13
第11図　第1文化層第1ブロック出土石器 …… 14
第12図　第２文化層ブロック配置図 …… 15
第13図　第２文化層第２ブロック遺物分布 …… 16
第14図　第２文化層第２ブロック出土石器 …… 16
第15図　第２文化層第３ブロック器種別分布 …… 17
第16図　第２文化層第３ブロック母岩別分布 …… 18
第17図　第２文化層第３ブロック出土石器 …… 19
第18図　第３文化層ブロック配置図 …… 19
第19図　第３文化層 第４ブロック器種別分布(その１) … 20
第20図　第３文化層 第４ブロック器種別分布(その２) … 22
第21図　第３文化層 第４ブロック母岩別分布 …… 23
第22図　第３文化層 第４ブロック出土石器(1) …… 24
第23図　第３文化層 第４ブロック出土石器(2) …… 25
第24図　第３文化層 第４ブロック出土石器(3) …… 27
第25図　第３文化層 第４ブロック出土石器(4) …… 28
第26図　第３文化層 第４ブロック出土石器(5) …… 29
第27図　第３文化層 第４ブロック出土石器(6) …… 30
第28図　第３文化層 第４ブロック出土石器(7) …… 31
第29図　第３文化層 第４ブロック出土石器(8) …… 32
第30図　第３文化層 第４ブロック出土石器(9) …… 33
第31図　第３文化層 第５ブロック器種別分布 …… 35
第32図　第３文化層 第５ブロック母岩別分布 …… 36
第33図　第３文化層 第５ブロック出土石器(1) …… 38
第34図　第３文化層 第５ブロック出土石器(2) …… 39
第35図　第３文化層 第５ブロック出土石器(3) …… 40
第36図　第３文化層 第５ブロック出土石器(4) …… 41
第37図　第３文化層 第５ブロック出土石器(5) …… 42
第38図　第３文化層第６～11ブロック石器分布 …… 43
第39図　第３文化層　第６～11ブロック出土石器
接合状況(剥片・石器類) …… 44
第40図　第３文化層　第６～11ブロック礫・礫片
接合状況(石材別) …… 47
第41図　第３文化層　第６ブロック母岩別分布 …… 48
第42図　第３文化層　第６ブロック器種別分布 …… 49
第43図　第３文化層　第７ブロック遺物分布 …… 51
第44図　第３文化層　第８ブロック遺物分布 …… 53
第45図　第３文化層　第９ブロック器種別分布 …… 55
第46図　第３文化層　第９ブロック母岩別分布 …… 56
第47図　第３文化層　第10ブロック器種別分布 …… 57
第48図　第３文化層　第10ブロック剥片・石器類
器種別分布(その１) …… 58
第49図　第３文化層　第10ブロック剥片・石器類
器種別分布(その２) …… 59
第50図　第３文化層　第10ブロック剥片・石器類
器種別分布(その３) …… 60
第51図　第３文化層　第10ブロック母岩別分布 …… 61
第52図　第３文化層　第11ブロック遺物分布 …… 63
第53図　第３文化層　第６～11ブロック出土石器(1) … 67
第54図　第３文化層　第６～11ブロック出土石器(2) … 68
第55図　第３文化層　第６～11ブロック出土石器(3) … 69
第56図　第３文化層　第６～11ブロック出土石器(4) … 70
第57図　第３文化層　第６～11ブロック出土石器(5) … 71
第58図　第３文化層　第６～11ブロック出土石器(6) … 72
第59図　第３文化層　第６～11ブロック出土石器(7) … 73
第60図　第３文化層　第６～11ブロック出土石器(8) … 74
第61図　第３文化層　第６～11ブロック出土石器(9) … 75
第62図　第３文化層　第６～11ブロック出土石器(10) … 77
第63図　第３文化層　第６～11ブロック出土石器(11) … 78
第64図　第３文化層　第６～11ブロック出土石器(12) … 79
第65図　第３文化層　第６～11ブロック出土石器(13) … 80
第66図　第３文化層　第６～11ブロック出土石器(14) … 81
第67図　第３文化層　第６～11ブロック出土石器(15) … 82
第68図　第３文化層　第６～11ブロック出土石器(16) … 83
第69図　第３文化層　第６～11ブロック出土石器(17) … 84
第70図　第３文化層　第６～11ブロック出土石器(18) … 85
第71図　第３文化層　第６～11ブロック出土石器(19) … 86
第72図　第３文化層　第６～11ブロック出土石器(20) … 88
第73図　第３文化層　第６～11ブロック出土石器(21) … 89
第74図　第３文化層　第６～11ブロック出土石器(22) … 90
第75図　第３文化層　第６～11ブロック出土石器(23) …91
第76図　第３文化層　第６～11ブロック出土石器(24) … 92
第77図　第３文化層　第６～11ブロック出土石器(25) … 93
第78図　第３文化層　第６～11ブロック出土石器(26) … 94
第79図　第３文化層　第６～11ブロック出土石器(27) … 95
第80図　第３文化層　第６～11ブロック出土石器(28) … 96
第81図　第３文化層　第６～11ブロック出土石器(29) … 97

第82図　第３文化層　第６～11ブロック出土石器(30) … 98
第83図　第３文化層　第６～11ブロック出土石器(31) … 99
第84図　第３文化層　第６～11ブロック出土石器(32) … 100
第85図　第３文化層　第６～11ブロック出土石器(33) … 101
第86図　第３文化層　第６～11ブロック出土石器(34) … 102
第87図　第３文化層　第６～11ブロック出土石器(35) … 103
第88図　第３文化層　第６～11ブロック出土石器(36) … 104
第89図　第３文化層　第６～11ブロック出土石器(37) … 105
第90図　第３文化層　第６～11ブロック出土石器(38) … 107
第91図　第３文化層　第６～11ブロック出土石器(39) … 108
第92図　第３文化層　第６～11ブロック出土石器(40) … 109
第93図　第３文化層　第12ブロック器種別分布
（ガラス質黒色安山岩・頁岩・ホルンフェルス）　110
第94図　第３文化層第12ブロック器種別分布
（チャート）…… 111
第95図　第３文化層　第12ブロック母岩別分布 …… 112
第96図　第３文化層　第12ブロック出土石器(1)…… 114
第97図　第３文化層　第12ブロック出土石器(2)…… 115
第98図　第３文化層　第12ブロック出土石器(3)…… 116
第99図　第３文化層　第12ブロック出土石器(4)…… 117
第100図　第３文化層　第12ブロック出土石器(5)　…… 118
第101図　第３文化層　第12ブロック出土石器(6)　…… 119
第102図　第３文化層　第12ブロック出土石器(7)　…… 120
第103図　第３文化層　第12ブロック出土石器(8)　…… 121
第104図　第３文化層　第12ブロック出土石器(9)　…… 122
第105図　第３文化層　第12ブロック出土石器(10) …… 123
第106図　第３文化層　第12ブロック出土石器(11) …… 124
第107図　旧石器時代の単独出土石器分布 …… 125
第108図　旧石器時代の単独出土石器 …… 126
第109図　SI001・002 …… 130
第110図　SI001出土土器・石器 …… 131
第111図　SI003 …… 132
第112図　SI004 …… 133
第113図　SI005 …… 134
第114図　SI006・007（1） …… 135
第115図　SI006・007（2） …… 136
第116図　SI008 …… 137
第117図　SI009 …… 138
第118図　SI010・011 …… 139
第119図　SI010・011出土土器 …… 140
第120図　SI012・013 …… 141
第121図　SK005 …… 142
第122図　SK001・003・007・011 …… 143
第123図　SK002・004 …… 145
第124図　SK006・008・009 …… 146
第125図　SK010・012・013 …… 147
第126図　縄文時代石器集中域 …… 150
第127図　石器集中Ａ遺物分布 …… 151
第128図　石器集中Ａ出土石器 …… 151
第129図　石器集中Ｂ遺物分布 …… 152
第130図　石器集中Ｃ出土石器 …… 153
第131図　石器集中Ｃ遺物分布 …… 153
第132図　石器集中Ｄ器種別分布 …… 155
第133図　石器集中Ｄ石材別分布 …… 156
第134図　石器集中Ｄ出土石器(1) …… 157
第135図　石器集中Ｄ出土石器(2) …… 159
第136図　石器集中Ｄ出土石器(3) …… 160
第137図　石器集中Ｄ出土石器(4) …… 161
第138図　縄文時代の単独出土石器分布 …… 162
第139図　縄文時代の単独出土石器 …… 163
第140図　グリッド出土土器(1) …… 165
第141図　グリッド出土土器(2) …… 166
第142図　グリッド出土土器(3) …… 167
第143図　グリッド出土土器(4) …… 168
第144図　グリッド出土土器(5) …… 170
第145図　グリッド出土土器(6) …… 171
第146図　グリッド出土土器(7) …… 172
第147図　グリッド出土土器(8) …… 173
第148図　SK014 …… 174
第149図　グリッド出土須恵器 …… 174
第150図　第４・５ブロック主要石器 …… 176
第151図　Ⅳ下Ⅴ層段階における石器群と礫群の分布状況　178
第152図　第６～11ブロック主要石器 …… 179
第153図　第６～11ブロック 石核…… 180
第154図　第12ブロック主要石器 …… 182

表目次

第１表　発掘調査一覧 …… 1
第２表　周辺遺跡一覧表 …… 8
第３表　文化層別器種別組成表 …… 11
第４表　第１文化層 第１ブロック組成表 …… 15
第５表　第２文化層 第２ブロック組成表 …… 16
第６表　第２文化層 第３ブロック組成表 …… 18
第７表　第３文化層 第４ブロック組成表 …… 34
第８表　第３文化層 第５ブロック組成表 …… 42

第９表　第３文化層 第６～11ブロック
(剥片・石器類)組成表(1) …… 45
第10表　第３文化層 第６～11ブロック
(剥片・石器類)組成表(2) …… 46
第11表　第３文化層 第６～11ブロック礫・礫片
石材別組成表 …… 47
第12表　第３文化層 第６ブロック組成表 …… 50
第13表　第３文化層 第７ブロック組成表 …… 52
第14表　第３文化層 第８ブロック組成表 …… 52
第15表　第３文化層 第９ブロック組成表 …… 54
第16表　第３文化層 第10ブロック組成表 …… 62
第17表　第３文化層 第11ブロック組成表 …… 64
第18表　第３文化層 第６～11ブロック
母岩観察表(1) …… 65
第19表　第３文化層 第６～11ブロック
母岩観察表(2) …… 66
第20表　第３文化層 第12ブロック組成表 …… 115
第21表　旧石器時代の単独出土石器組成表 …… 126
第22表　黒曜石産地同定結果一覧表 …… 127
第23表　調査遺構新旧対応表 …… 128
第24表　石器集中Ａ石材別組成表 …… 149
第25表　石器集中Ｂ石材別組成表 …… 152
第26表　石器集中Ｃ石材別組成表 …… 154
第27表　石器集中Ｄ石材別組成表 …… 161
第28表　礫・礫片の旧石器、
縄文時代別対比表 …… 181
第29表　文化層別器種別組成表
(剥片・石器類) …… 184
第30表　文化層別石材別組成表
(剥片・石器類) …… 184

図版目次

巻頭図版１　旧石器時代　主要石器(1)
巻頭図版２　旧石器時代　主要石器(2)
図版１　遺跡周辺航空写真
図版２　２区・３区・５区調査前風景
図版３　旧石器第１～５ブロック遺物分布状況
図版４　旧石器第６・７・９・10ブロック遺物分布状況
旧石器第６・７ブロック土層断面
図版５　旧石器第10～12ブロック遺物出土状況
49U-47グリッド土層断面
縄文時代石器集中Ｃ・Ｄ地点遺物出土状況
図版６　第１文化層　第１ブロック出土石器
第２文化層　第２・３ブロック出土石器
図版７　第３文化層　第４ブロック(1)出土石器
図版８　第３文化層　第４ブロック(2)出土石器
図版９　第３文化層　第４ブロック(3)出土石器
図版10　第３文化層　第５ブロック(1)出土石器
図版11　第３文化層　第５ブロック(2)出土石器
図版12　第３文化層　第６～11ブロック(1)出土石器
図版13　第３文化層　第６～11ブロック(2)出土石器
図版14　第３文化層　第６～11ブロック(3)出土石器
図版15　第３文化層　第６～11ブロック(4)出土石器
図版16　第３文化層　第６～11ブロック(5)出土石器
図版17　第３文化層　第６～11ブロック(6)出土石器
図版18　第３文化層　第６～11ブロック(7)出土石器
図版19　第３文化層　第６～11ブロック(8)出土石器
図版20　第３文化層　第６～11ブロック(9)出土石器
図版21　第３文化層　第６～11ブロック(10)焼礫
図版22　第３文化層　第12ブロック(1)出土石器
図版23　第３文化層　第12ブロック(2)出土石器
図版24　第３文化層　第12ブロック(3)出土石器
図版25　第３文化層　第12ブロック(4)出土石器
図版26　第３文化層　第12ブロック(5)出土石器
図版27　旧石器時代　単独出土石器
縄文時代　石器集中Ａ・Ｃ地点出土石器
図版28　縄文時代　石器集中Ｄ地点(1)出土石器
図版29　縄文時代　石器集中Ｄ地点(2)出土石器
図版30　縄文時代　石器集中Ｄ地点(3)出土石器
図版31　縄文時代　単独出土石器
図版32　SI001、SI001遺物出土状況、SI002
図版33　SI003～SI005、SK008
図版34　SI005遺物出土状況、SI006、SI007
図版35　SI008、SI009、SI012
図版36　SI013、SK005遺物出土状況、SK005
図版37　SK001～SK004、SK006、SK007、SK009、SK011
図版38　SK010、SK012～SK014
図版39　遺構出土土器
図版40　遺構・グリッド出土遺物
図版41　グリッド出土土器(1)
図版42　グリッド出土土器(2)
図版43　グリッド出土土器(3)
図版44　グリッド出土土器(4)

第１章　はじめに

第１節　調査の概要

１　調査の経緯と経過

独立行政法人都市再生機構は、茨城県つくば市と都心を結ぶつくばエクスプレス（常磐新線）の沿線整備計画に関連して、千葉県流山市市野谷から東初石、十太夫地区一帯の土地区画整理事業を計画した。この事業は流山市新拠点構想として位置づけられ、施行にあたり、独立行政法人都市再生機構から区域内の「埋蔵文化財の所在の有無とその取り扱いについて」の照会文書が千葉県教育委員会宛に提出された。区域内には本遺跡（市野谷二反田遺跡）を含め市野谷宮尻遺跡、市野谷入台遺跡等の包蔵地14か所、野馬土手３か所が所在しており（第１図）、その取り扱いについて千葉県教育委員会との間で度重なる協議が行われた。その結果、事業区域内には山林・雑木林・畑地のほか既存の住宅地が点在していることから、住宅地や緑地など現状保存する区域を策定し、現状保存が困難な区域については、やむを得ず記録保存の措置を講ずることで協議が整い、財団法人千葉県教育振興財団が発掘調査を実施することとなった。

市野谷二反田遺跡の発掘調査は、平成12年12月からの第１次の確認調査を皮切りに、平成16年度まで５次にわたって実施し、調査対象面積36,124㎡のうち上層調査4,268㎡、下層調査2,531㎡を実施した（第２図）。各年度毎の調査内容及び担当者等は第１表のとおりである。

第１表　発掘調査一覧

年度	調査次	対象面積	確認調査（㎡）		本調査（㎡）		調　査　期　間	調査部長	調査事務所長	担当者
			上層	下層	上層	下層				
平成 12	(1)	5,600	664	249	0	0	12.12.8 ～ 13.3.27	沼澤　豊	及川淳一	雨宮龍太郎
平成 15	(2)	7,000	780	380	0	552	15.4.14 ～ 15.4.30	斎木　勝	田坂　浩	高橋博文
	(3)	8,640	1,014	380	0	0	15.10.1 ～ 15.12.19	斎木　勝	田坂　浩	立石圭一
	(4)	10,850	1,192	413	0	0	16.1.7 ～ 16.3.4	斎木　勝	田坂　浩	立石圭一
平成 16	(5)	4,034	618	136	0	421	16.5.24 ～ 16.7.30	矢戸三男	田坂　浩	高橋博文

なお整理作業は平成19年度から実施した。

平成19年度　記録整理～母岩分類　　調査研究部長　矢戸三男
　　整理課長　高田　博
　　上席研究員　新田浩三　　整理技術員　山岡磨由子

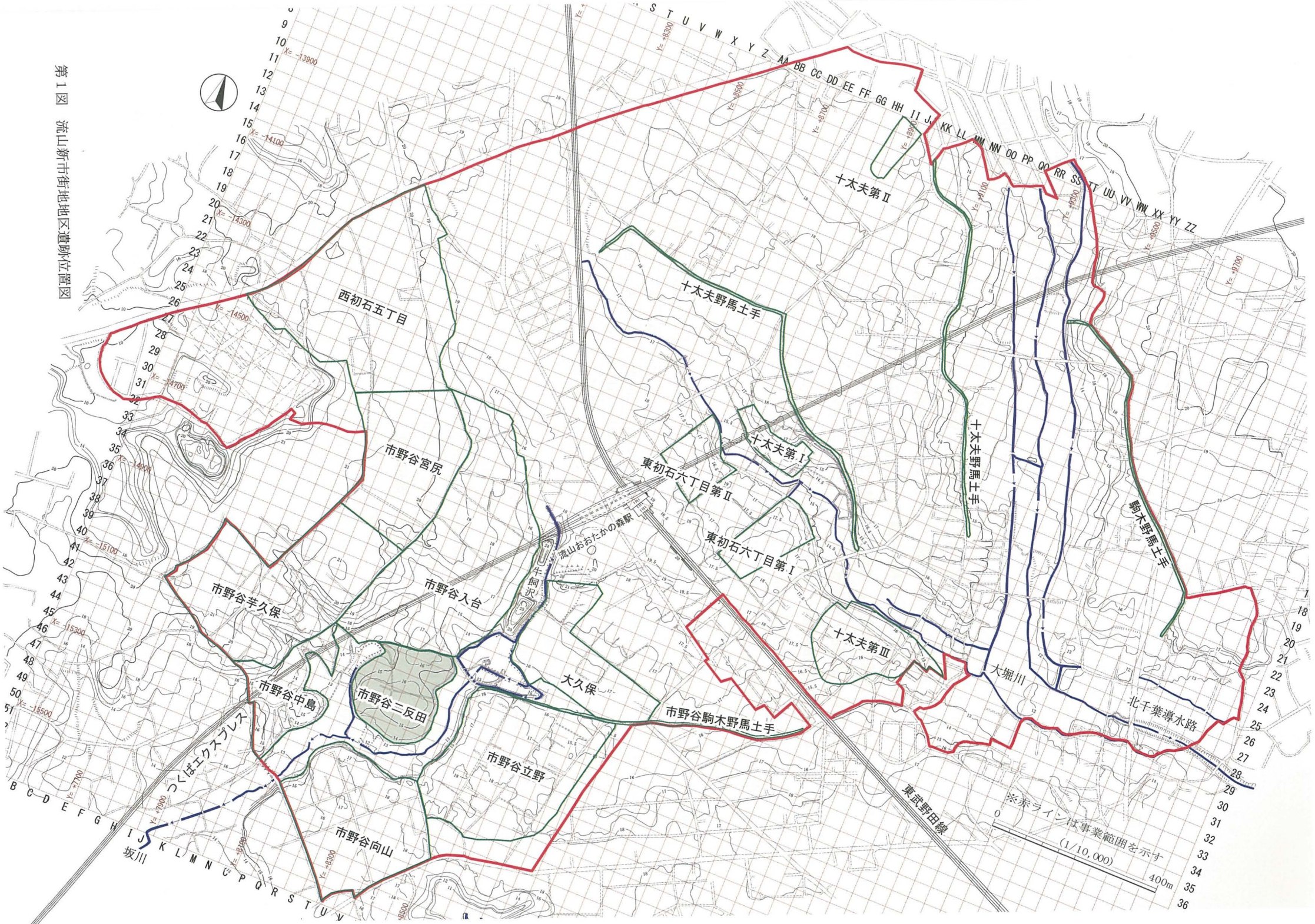
平成20年度　接合～原稿の一部　　調査研究部長　大原正義
　　整理課長　高田　博
　　主席研究員　伊藤智樹　　整理技術員　山岡磨由子

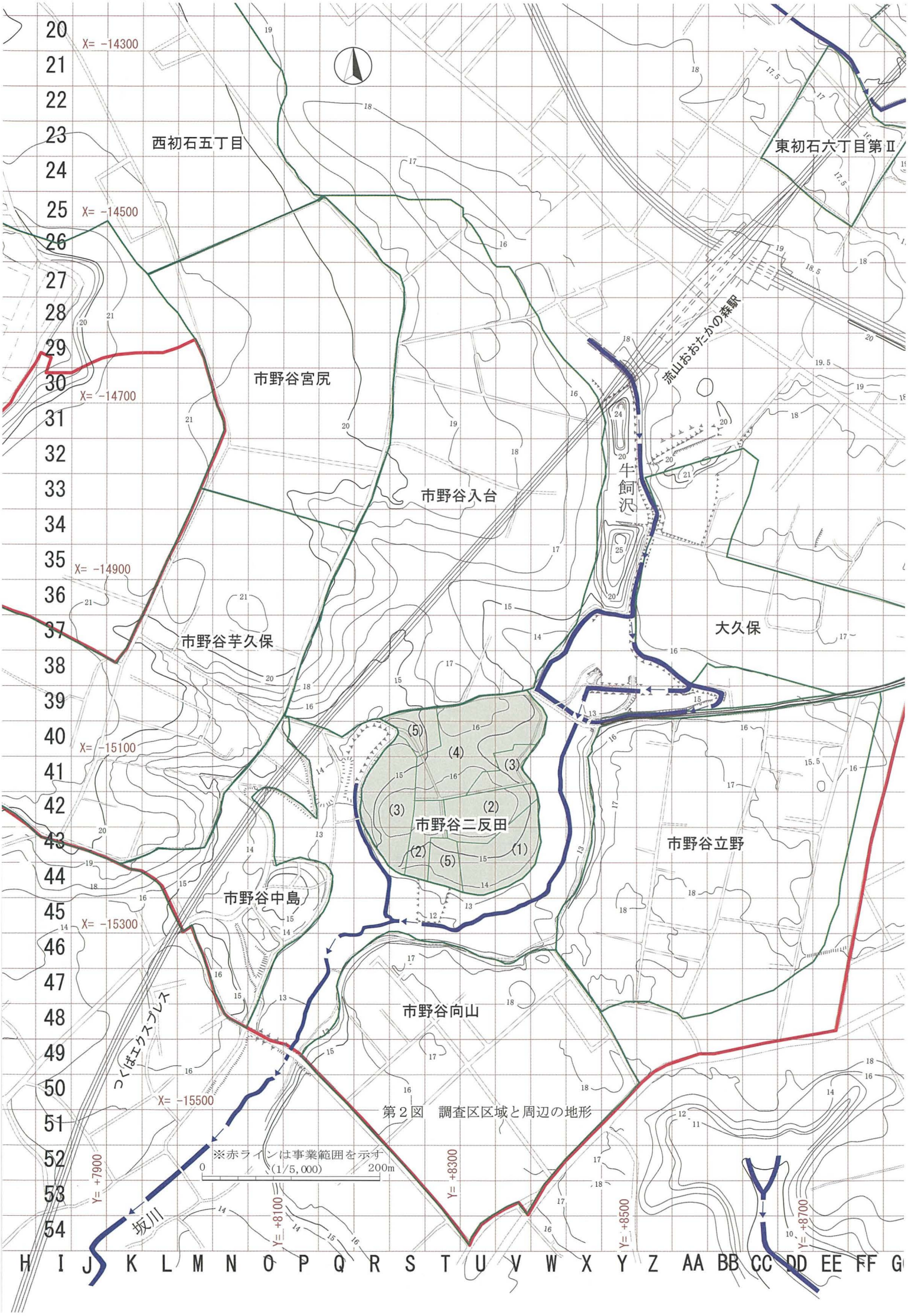
平成21年度　原稿の一部～刊行まで　調査研究部長　及川淳一
　　主席研究員兼副部長　伊藤智樹　　整理課長　高田　博
　　上席研究員　新田浩三　　整理技術員　山岡磨由子

２　調査の方法と概要

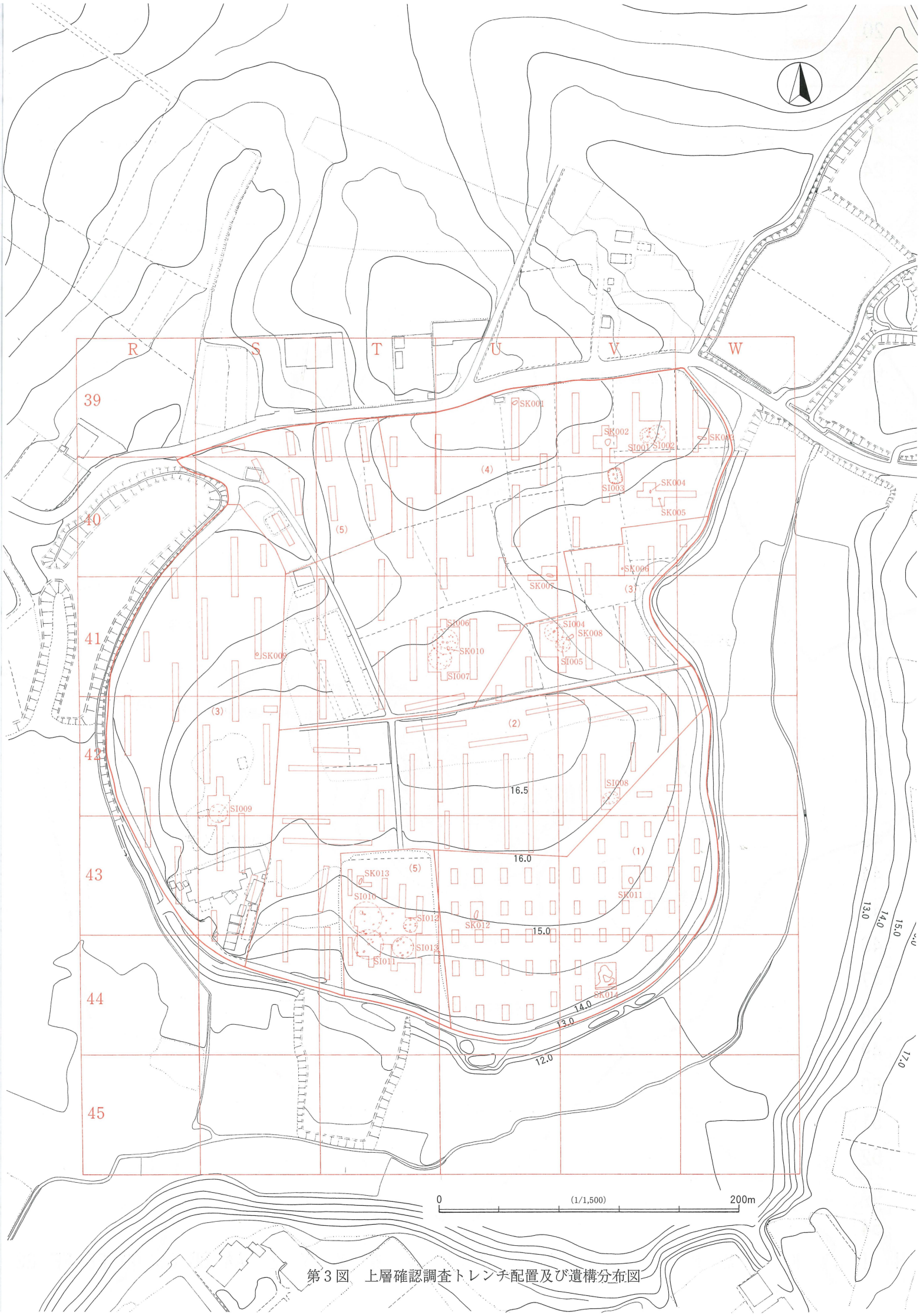
調査にあたり、国土方眼座標（第Ⅸ座標系）に基づいてグリッドの設定を行っている。新市街地地区内に所在する遺跡群全体に調査対象範囲を覆うように、40ｍ×40ｍの方眼網を設定し、南北方向を北から１、２、３…、東西方向は西からＡ、Ｂ、Ｃ…とし、この数字とアルファベットを組み合わせて大グリッド名

第１図　流山新市街地地区遺跡位置図





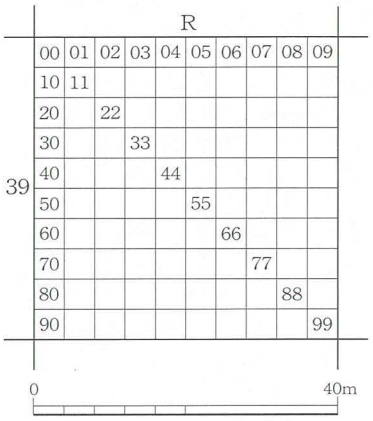
第２図　調査区区域と周辺の地形



第３図　上層確認調査トレンチ配置及び遺構分布図

とした。本遺跡の調査範囲が含まれるグリッドは東西方向にR～W、南北方向に39～44である（第４図）。さらに大グリッドを４ｍ×４ｍの小グリッドに100分割し、北から00～90、西から00～09とした。グリッド名は、大グリッドと小グリッドを組み合わせ、例えば39Ｒ-00と呼称した。

上層の調査では、調査対象面積の10％についてトレンチを設定し、確認調査を実施した。トレンチの設定方向は各調査区の地形などに即しており、必ずしも方眼に沿っていない。確認調査で検出された遺構が希薄な場合は、トレンチを適宜拡張して精査し、遺構が広範囲に分布する場合は、本調査範囲を設定し引き続き調査を行った（第３図）。



第４図　グリッドの呼称例

下層の調査は上層の調査が終了した後、調査対象面積の４％について２ｍ×２ｍのグリッドを設定し確認調査を行った。石器等の遺物が集中的に出土した箇所については拡張後、本調査に移行した（第７図）。

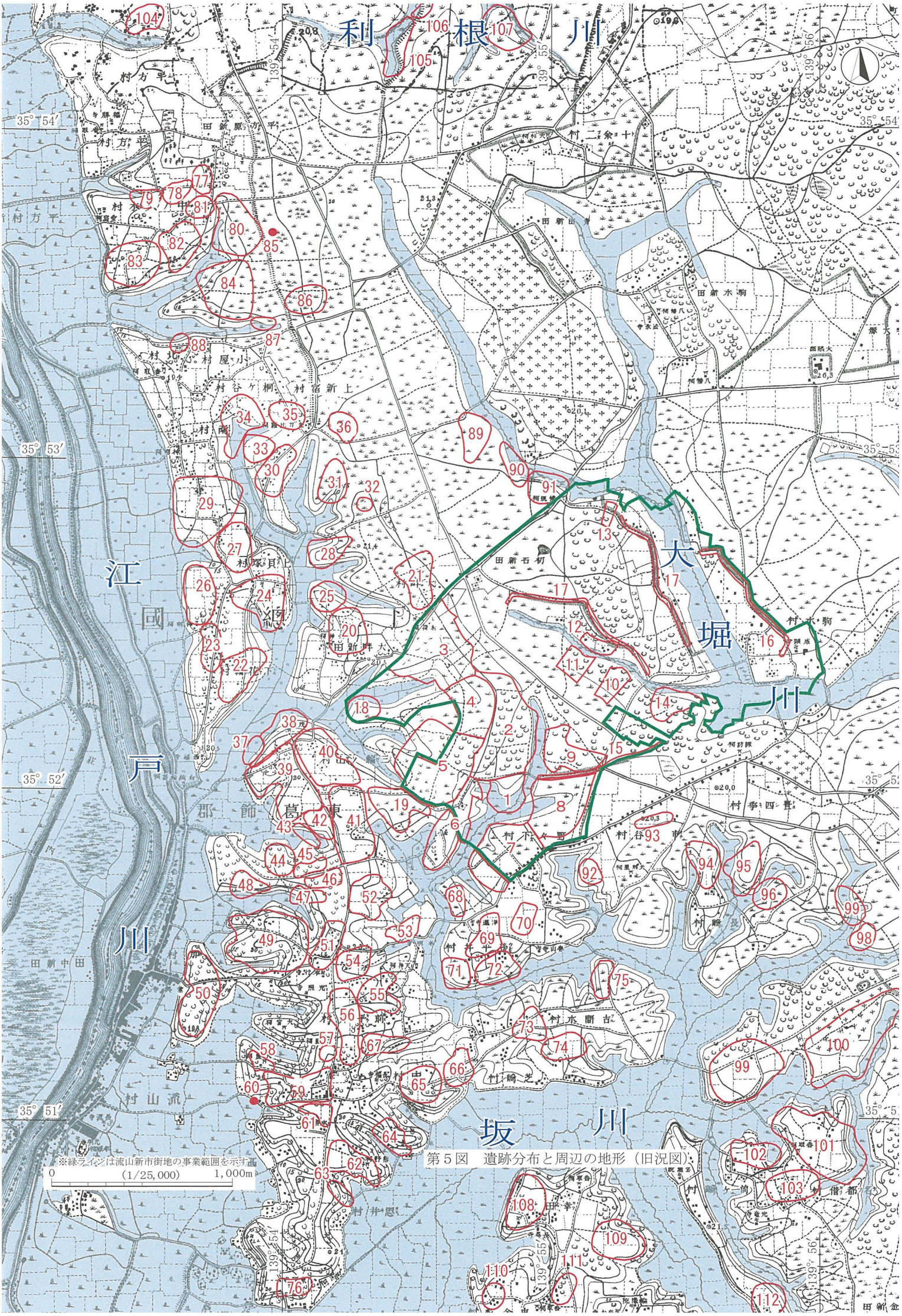
３　遺跡の位置と環境（第１・２・５・６図、第２表）

市野谷二反田遺跡の所在する流山市は、千葉県の北西部に位置し、東京湾に注ぐ江戸川に沿って南北に長い市域を形成している。江戸川に沿った市の西部は平坦な沖積低地であり、東部は高低差のある台地が広がっている。近年ではＪＲ武蔵野線、東武野田線の在来線に加え、つくばエクスプレスの開通等都心からの利便性が高まり、急激な住宅都市化が進んでいる。市野谷二反田遺跡は、このつくばエクスプレス線の流山おおたかの森駅の南西に位置する。

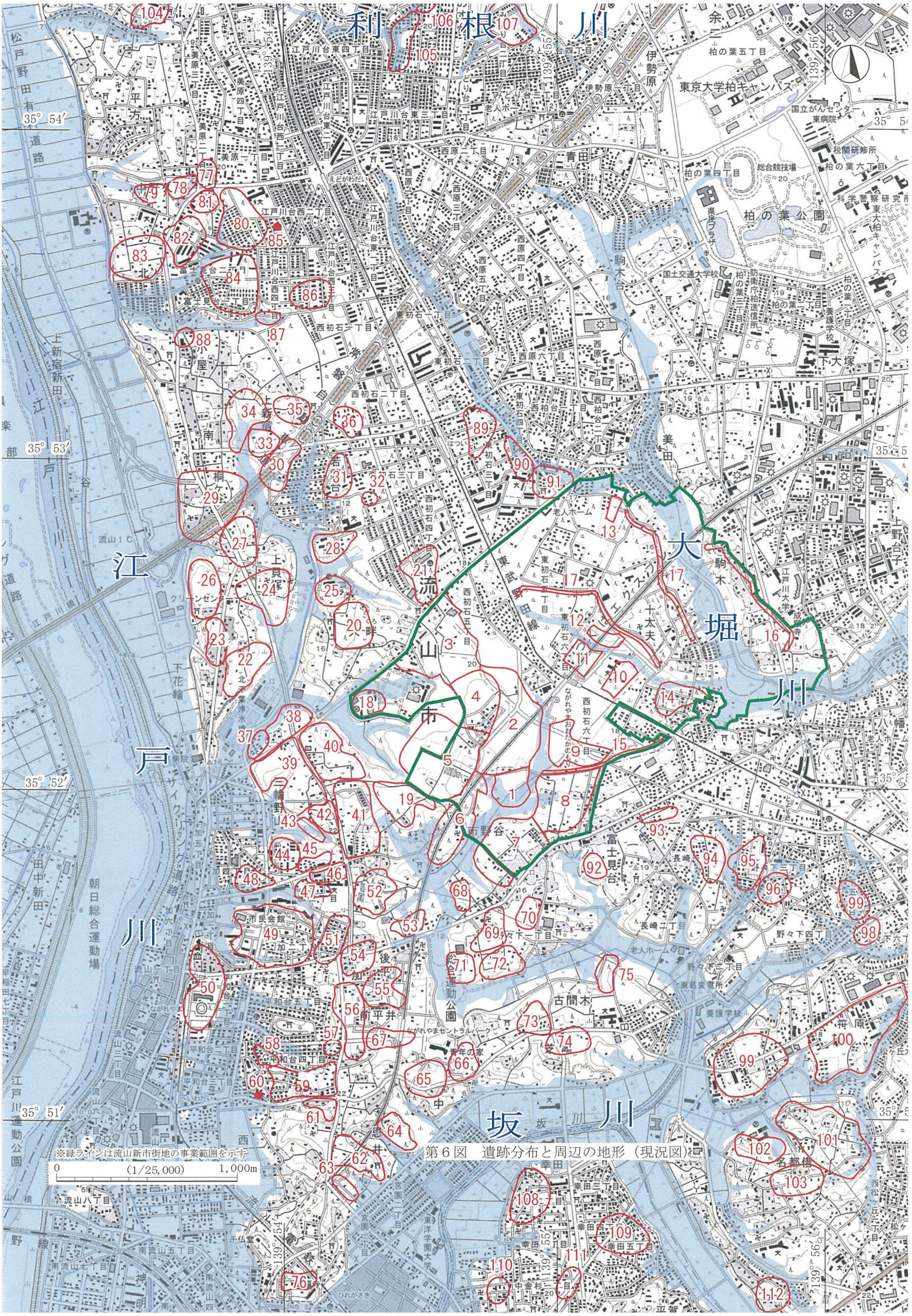
第５図では周辺の旧地形と遺跡立地を把握するために、明治13・14年測量の迅速測図を用いて、低地（水色）と台地・微高地とを区分し、水系を示した。これらの区分に基づいて、第６図では平成17年発行の国土地理院の地形図に遺跡位置を示した。第５・６図に示した遺跡の概要は、第２表のとおりである。

第２図によると、市野谷二反田遺跡の北東部、流山おおたかの森駅の北西部29Xグリッド付近（標高15ｍ～16ｍ）に坂川の源流とされる湧水地が所在する。そこから「牛飼沢」を通り、38X・Y、39X・Yグリッド付近で蛇行して湿地帯を形成する。流路はさらに蛇行しながら当遺跡の北東から南西方向に続く。一方、遺跡西側の41Rグリッド付近でも湧水地があり、湧き出た水は45Sグリッドあたりで北東からの流れと合流し氾濫原のような湿地帯を形成している。水位面と遺跡南半部は僅か１ｍ～３ｍ程であり、標高13ｍ～16ｍのテラス状の地形を呈する市野谷二反田遺跡が、坂川の源流域に所在し、低位段丘面に立地していることが読み取れる。

このような特徴を有する地点は、近隣では、市野谷入台遺跡の南東部と大久保遺跡の南半部があげられ、共に旧石器時代のⅣ層下部からⅤ層の時期に、多数の礫群と角錐状石器・ナイフ形石器を伴う石器群が検出されている。この時期は最寒冷期で、海面が低下し、谷が最も深く刻まれた時期とされており、河川によって浸食され露出した遺跡近在の段丘礫層の礫を用いて礫群を形成したことが推察される。



第５図　遺跡分布と周辺の地形（旧況図）



第６図　遺跡分布と周辺の地形（現況図）

第２表　周辺遺跡一覧表

番号	県分布図番号	遺　　跡　　名	時　　代	番号	県分布図番号	遺　　跡　　名	時　　代
1	222	市野谷二反田遺跡	旧石器、縄文（前）	57	204	宮本遺跡	縄文（早）、平安
2	210	市野谷入台遺跡	旧石器、縄文、古墳（前・中）、中近世	58	184	大原神社遺跡	縄文（早）、古墳（後）、平安
3	202	西初石五丁目遺跡	旧石器、縄文、古墳（前）	59	170	平和台遺跡	縄文（中）、古墳、平安、中近世
4	218	市野谷宮尻遺跡	縄文、古墳（後）、奈良、平安	60	47	流山廃寺遺跡	奈良
5	219	市野谷芋久保遺跡	旧石器、縄文（早）、近世	61	228	西平井二階畑遺跡	縄文、古墳（後）、奈良・平安
6	156	市野谷中島遺跡	旧石器、縄文（前・中）、平安、近世	62	169	思井堀ノ内遺跡	旧石器、縄文（中）、平安
7	39	市野谷向山遺跡	旧石器、縄文（前・中）、古墳（後）	63	193	思井鷹の見遺跡	縄文（早・前）、古墳、近世
8	223	市野谷立野遺跡	旧石器、縄文（前）、古墳（後）、近世	64	229	思井上ノ内遺跡	古墳（後）、奈良・平安
9	221	大久保遺跡	旧石器、縄文（前）、古墳、近世	65	167	中中屋敷遺跡	縄文（前・中・後）、平安
10		東初石六丁目第Ⅰ遺跡	旧石器、縄文、近世	66	36	古間木三王第Ⅰ遺跡	縄文（前）、平安
11		東初石六丁目第Ⅱ遺跡	旧石器、縄文	67	226	前平井堀米遺跡	古墳（後）、奈良・平安
12	145	十太夫第Ⅰ遺跡	縄文（中・後）、平安、近世	68	40	市野谷梶内第Ⅰ遺跡	縄文（前・中）、古墳（中・後）
13	122	十太夫第Ⅱ遺跡	旧石器、縄文（前）、平安、近世	69	41	野々下山中遺跡	縄文（前）、平安
14		十太夫第Ⅲ遺跡	旧石器、縄文（早・前・中）	70	81	野々下貝塚	縄文（前・中・後・晩）
15		市野谷駒木野馬土手	近世	71	42	野々下西方遺跡	縄文（前・中）
16		駒木野馬土手	近世	72	43	野々下大屋敷遺跡	縄文（後）、平安
17		十太夫野馬土手	近世	73	158	古間木芳賀殿第Ⅰ遺跡	縄文（前・中）、平安
18	208	三輪野山向原古墳	縄文（前）、弥生、古墳（前）	74	159	芝崎大囲遺跡	縄文（前・中）、古墳、平安
19	220	市野谷宮後遺跡	縄文	75	82	古間木茱萸木谷遺跡	縄文（早・前・後）
20	152	大畔中ノ割遺跡	縄文（早・前・中）、平安	76	33	鰭ヶ崎貝塚	縄文（早・中・後）、平安
21	203	花山東遺跡	旧石器、縄文、奈良、平安	77	198	美原二丁目遺跡	縄文（前・中）、近世
22	29	下花輪荒井前遺跡	弥生、古墳、平安	78	17	中野久木貝塚	縄文（早・前・中）
23	209	下花輪西山遺跡	縄文、古墳、中世	79	114	中野久木日暮第Ⅰ遺跡	縄文（後）
24	28	桐ヶ谷浅間後遺跡	旧石器、縄文（前・後）、平安	80	75	中野久木谷頭遺跡	縄文（中）、古墳
25	80	大畔台遺跡	縄文（前）、古墳、中世	81	123	中野久木囲ノ内遺跡	縄文（前・中）、平安
26	27	上貝塚大門遺跡	縄文（前・後）、平安	82	18	中野久木遺跡	縄文（早・前・中・後）、古墳（中）
27	26	上貝塚貝塚	縄文（前・中・後）	83	139	中野久木米の台遺跡	縄文（前・中・後）、平安
28	136	西初桜窪遺跡	縄文（前・中・後）、近世	84	20	富士見台第Ⅱ遺跡	奈良・平安
29	24	桐ヶ谷南割遺跡	旧石器、縄文、古墳（中）、平安	85	205	中野久木谷頭古墳	古墳
30	130	若葉台遺跡	旧石器、縄文（前・中）	86	137	江戸川台第Ⅰ遺跡	縄文（後）、中近世
31	135	桐ヶ谷新田第Ⅰ遺跡	旧石器、縄文、平安	87	21	小谷貝塚	縄文（中）、平安
32	195	西初石三丁目遺跡	縄文（前・中・後・晩）	88	201	小屋神明脇遺跡	縄文（前・後）、近世
33	129	上新宿向宿遺跡	縄文（前・中）	89	119	東初石三丁目第Ⅰ遺跡	縄文（晩）
34	23	上新宿貝塚	縄文（後・晩）	90	120	東初石三丁目第Ⅱ遺跡	縄文（早）、古墳（後）、平安
35	127	上新宿宿後遺跡	縄文（前・後）、平安	91	121	東初石三丁目第Ⅲ遺跡	縄文（早）、平安、近世
36	134	西初石二丁目遺跡	縄文（中・後）	92	164-1	富士見台（Ⅰ）遺跡	不明
37	79	三輪野山第Ⅲ遺跡	縄文、古墳（後）、平安、近世	93	164-2	富士見台（Ⅱ）遺跡	縄文（中・後）
38	78	三輪野山北浦遺跡	旧石器、縄文（前・後）、古墳、平安、近世	94	149	長崎五牧割遺跡	縄文（前・中）、平安
39	211	三輪野山道六神遺跡	縄文、古墳、平安、近世	95	51	長崎遺跡	縄文（早・前・中・後）
40	154	三輪野山宮前遺跡	縄文（前）、古墳（後）、平安、近世	96	55	野々下長田遺跡	縄文（早・前・中・後）
41	153	三輪野山八幡前遺跡	縄文、古墳、平安、近世	97	57	野々下御成堤遺跡	縄文（前・中）
42	31	三輪野山貝塚	旧石器、縄文（前・中・後・晩）	98	58	野々下金クソ遺跡	縄文（前・中）
43	213	三輪野山低地遺跡	縄文（後・晩）	99	168-1	笹原（Ⅰ）遺跡	縄文（中）、弥生、古墳
44	185	三輪野山八重塚	縄文、古墳、平安	100	168-2	笹原（Ⅱ）遺跡	縄文（中）
45	197	三輪山八重塚Ⅱ遺跡	縄文（早）、平安	101	66	名都借並木遺跡	縄文（中）
46	190	加若宮第Ⅱ遺跡	縄文、平安	102	162	清流院前遺跡	縄文（前）、平安、近世
47	188	加北谷津第Ⅰ遺跡	旧石器、縄文、平安	103	67	名都借笹堀込遺跡	縄文（前・中）、平安
48	189	加北谷津第Ⅱ遺跡	旧石器、縄文、平安	104	109	西深井一の割第Ⅰ遺跡	旧石器、縄文、奈良、平安、中近世
49	186	加町畑遺跡	縄文、古墳、奈良、平安	105	98	こうのす台第Ⅳ遺跡	縄文（早・前・中・後）
50	90	加村台遺跡	弥生（中）、古墳（後）、平安、近世	106	200	鴻ノ巣遺跡	縄文（早・前・中・後）
51	187	加若宮第Ⅰ遺跡	旧石器、縄文、平安	107	191	猪ノ尻遺跡	縄文（早）
52	215	市野谷地蔵谷ッ遺跡	古墳（後）、平安	108	1	幸田貝塚	旧石器、縄文（前・中・後）、古墳
53	224	市野谷梶内第Ⅱ遺跡	縄文	109	2	中芝遺跡	弥生（後）、古墳（前・中・後）
54	212	加東割遺跡	縄文（前）、中近世	110	4	道六神遺跡	縄文（早・前・中・晩）弥生（後）、奈良・平安
55	225	後平井中道遺跡	古墳（後）、奈良・平安	111	3	木戸口（中金）遺跡	縄文（前）、古墳（中）
56	32	前平井遺跡	縄文（前・中）、平安	112	69	前ヶ崎貝塚	縄文（前・中・後）

第２章　旧石器時代

第１節　概要（第５～７図、第２・３表）

市野谷二反田遺跡は、江戸川の支流によって開析された小支谷をのぞむ標高13～17ｍほどの低位段丘面に所在し、その形状は南に向かって円形を描き、北側の西・東がくびれている為、巾着袋のような様相を呈する。明治13・14年測量の迅速測図を見ると台地の南方は川、あるいは湿地帯となっており、二反田の台地の東側を南下する流路と合わさって坂川へ向かい、江戸川に注ぐ。江戸川は、江戸幕府による利根川東遷事業によって現在のような流路となったことは周知の事実であるが、もとは野田市付近に源を発し、松戸市付近で旧利根川と合流、市川となって内海の東京湾に注いでいた。

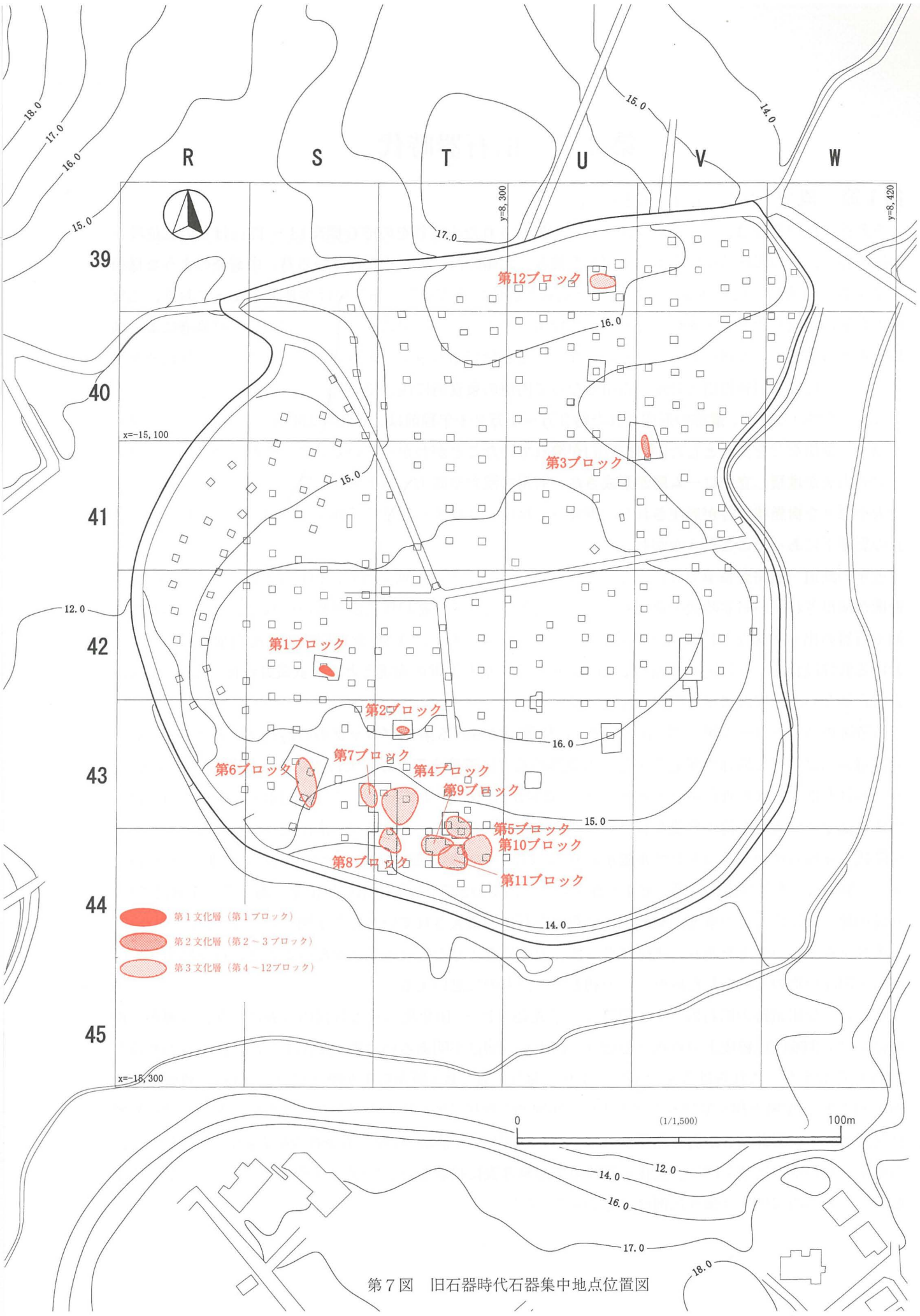
また、そのはるか昔、遺跡の形成された約３万～１万２千年程前は、東京湾は陸地化しており、利根川・荒川・多摩川などを支流とした「古東京川」が流れていたことがわかっている。この時期、台地上には富士山の火山灰が堆積し立川ローム層が形成され、河川の浸食や降雨・地下水の影響によりさらなる段丘地形や大小様々な樹脂状の谷が形成された。市野谷二反田の立地する低位段丘面も、河川の氾濫や地下水の侵食の影響下にあったことがうかがわれる。

近年の鉄道・道路整備事業に伴う発掘調査により，流山新市街地を始め、柏北部地域から多数の遺跡・遺構が検出され、旧石器時代の遺物も大量に発見されている。整理作業が進むにつれて、遺跡間の石材流通や石器の出土状況などに共通点が見出せることも確認された。下野-北総回廊の下総台地西部分水界における低位段丘という「場」の概念は、当地域のⅣ下Ⅴ層石器群の充実とともに武蔵野台地・相模野台地・大宮台地との比較検討に足る広がりを見せている。

当遺跡のハードローム層上部（Ⅳ・Ⅴ層）に位置づけられる第12ブロックの石器石材のあり方は、柏市元割遺跡№２地点と同様の組成を示し、当遺跡の北方に隣接する市野谷入台遺跡第23・24ブロックとは、同一石材と推定される青色系のチャート（珪質頁岩か）が使用されている。これは柏市・流山市の遺跡に多出する油脂状の光沢を持つ良質な石材であり、遠く離れた栃木・茨城県の八溝山地より持ち運ばれて（田村隆氏より原石産地からのサンプル提示あり：千葉県立中央博物館）、当地で分配されたことが推察される。また、黒曜石の産地同定の結果、第４・５ブロック出土の897点は栃木県高原山産であることが確認され、八溝山地、高原山一帯の東部関東地域に分布する石材が搬入されていることが明らかとなった。

陸地を歩き、川や海を渡り、流路に乗ってこの地に営まれた人々の生活を鑑みるとき、古鬼怒川・旧利根川・旧江戸川のもたらした恩恵、地の利といったものに思い至る。

市野谷二反田遺跡の旧石器時代の遺物は、平成12・15～16年度に亘る５回の調査により、Ⅸ層からⅣ層にかけて3,664点（組成上の点数は2,625点）出土し、層位不明あるいは単独で出土した石器を合わせると3,712点を数えた。これらは３文化層に分かれており、Ⅶ～Ⅸａ層から１か所（17点）、Ⅵ層～Ⅶ層から２か所（13点）、Ⅳ層下部～Ⅴ層からは９か所（3,634点）の石器集中域を検出した。なかでもⅣ層下部～Ⅴ層に包含される石器群は５か所の礫群を伴っており、剥片・石器類、礫片とも密接な接合関係が確認された。各集中地点の位置は第７図に、全体の器種組成は第３表に掲載した。黒曜石の産地については第７節に記載した。石器の属性及び属性凡例は添付CDに収めた。



第７図　旧石器時代石器集中地点位置図

第３表　文化層別器種別組成表

文化層	ブロック	ナイフ形石器	角錐状石器	石鏃	削器	掻器	石錐	楔形石器	打製石斧	二次加工のある剥片	使用痕のある剥片	石核	剥片	砕片	敲石	磨石	台石	凹石	石皿	砥石	礫	礫片	土器	点数	点数比	重量（g）	重量比
第1文化層	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	1	4	0	0	0	0	0	0	0	4	3(5)	0	15(17)	0.46%	534.06	0.69%
第1文化層 小計		0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	1	4	0	0	0	0	0	0	0	4	3(5)	0	15(17)	0.46%	534.06	0.69%
第2文化層	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0.14%	14.53	0.02%
	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	5	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8	0.22%	45.81	0.06%
第2文化層 小計		0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	1	7	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	13	0.35%	60.34	0.08%
第3文化層	4	24	0	0	2	1(2)	0	0	0	30(31)	71(77)	10(11)	318	167	0	0	0	0	0	0	0	3	0	626(635)	17.33%	971.32	1.25%
	5	8	0	0	4(6)	0	0	0	0	5	44(51)	10	157	52	0	0	0	0	0	0	0	1	0	281(290)	7.91%	521.75	0.67%
	6	0	0	0	0	1	0	0	0	1	5	3(4)	20	0	0	0	0	0	0	0	7	238(526)	0	275(564)	15.39%	18776.37	24.14%
	7	0	0	0	0	5	0	0	0	1	3	6	31(32)	10	0	0	0	0	0	0	10	39(120)	0	105(187)	5.10%	10068.15	12.94%
	8	0	0	0	0	0	0	0	0	1	8	2	20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	31	0.85%	127.49	0.16%
	9	1	0	0	1	2	0	0	0	6	5	12	70	2	1	0	1	0	0	0	6	235(381)	0	342(488)	13.32%	12558.18	16.14%
	10	4	0	0	1	3	0	0	0	26(30)	33(34)	13(15)	136(142)	7	1(2)	0	0	0	0	0	20	405(823)	0	649(1081)	29.50%	28194.23	36.24%
	11	0	0	0	2(3)	1	0	1	0	6	6	3(4)	35	1	0	0	0	0	0	0	7	67(123)	0	129(187)	5.10%	4825.29	6.20%
	12	1	2(3)	0	0	0	1	0	0	12(14)	20(23)	11	96(102)	15	0	0	0	0	0	0	0	1	0	159(171)	4.67%	1154.16	1.48%
第3文化層 小計		38	2(3)	0	10(13)	13(14)	1	1	0	88(95)	195(212)	70(75)	883(896)	254	2(3)	0	1	0	0	0	50	989(1978)	0	2597(3634)	99.18%	77196.94	99.24%
旧石器　合計		38	2(3)	0	10(13)	13(14)	1	1	0	91(98)	198(215)	72(77)	894(907)	256	2(3)	0	1	0	0	0	54	992(1983)	0	2625(3664)	100.00%	77791.34	100.00%
縄文	石器集中A	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	1	0	68	703(754)	62	840(891)	52.35%	20959.56	46.07%
	石器集中B	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	5	2	8	0.47%	488.62	1.07%
	石器集中C	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	29(34)	17	50(55)	3.23%	1855.26	4.08%
	石器集中D	0	0	1	0	1	0	2	0	2	3	5	53	2	3	2	0	1	0	3	72	427(445)	153	730(748)	43.95%	22193.79	48.78%
縄文 合計		0	0	4	0	1	0	2	1	2	3	5	56	2	3	2	0	1	1	3	144	1164(1238)	234	1628(1702)	100.00%	45497.23	100.00%

※（　）は出土点数

第２節　基本層序（第８図、図版３・４）

基本層序(43S-47グリッド)

Ⅰ　：表土層　　黒色。

Ⅱａ：新期テフラ層　赤褐色。

Ⅱｂ：漸移層　　暗褐色。

Ⅲ　：軟質ローム層　黄褐色。

Ⅳ　：硬質ローム層　明黄褐色。微細な赤色スコリアを少量含む

Ⅴ　：硬質ローム層　やや暗い黄褐色。Ⅳ層よりも赤色スコリアを多く含み、上下層より黒味を帯びる。第１黒色帯。

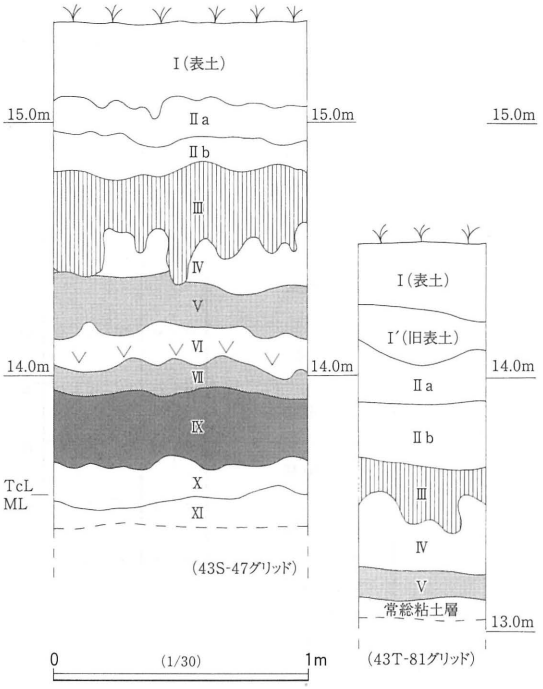
Ⅵ　：硬質ローム層　明黄褐色。AT層

Ⅶ　：硬質ローム層　暗めの黄褐色。大きめの赤色スコリアを含む。

Ⅸ　：硬質ローム層　暗褐色。赤色スコリアはⅦ層よりも多い。Ⅶ・Ⅸ層は第2黒色帯。

Ⅹ　：硬質ローム層　黄褐色。やや軟質。

ⅩⅠ：　　青味を帯びる。Ⅹ層より軟質。武蔵野ローム層に相当。



第８図　市野谷二反田遺跡土層図

当遺跡では水辺に臨む南縁辺に石器ブロックが集中し、谷に向かって下降するため土層の堆積状況が特異な様相を呈する場が存在する。特に第４ブロックの所在する43S-61・71グリッド付近は南側に傾斜(傾斜角約３度)する傾向にあり、土層断面図のⅣ層をみると表層の傾斜より急である(傾斜角約５度)。

発掘時のスライド写真・土層記載と、隣接する市野谷入台遺跡等の地形形成から総合的に判断した結果、「Ⅴ層より下位の土層は、火山灰が降下しても堆積せずに流失したか、あるいはⅤ層段階の直前に海水面上下変動に伴って粘土層(常総粘土層)までローム層が流失したと思われる。のちに、Ⅴ層より上位の土層の堆積が安定したため、平坦面に比べて傾斜面にロームが厚く堆積している。おそらくⅤ層上部の時期に地形や生活立地環境が良好になったため、第４～11ブロックに石器群が形成されたと思われる」との見解に至った。また、出土石器の特徴から、『チョコレート色で非常に粘性の強い土』直上から検出された大量の石器の出土層位をⅣ層下部からⅤ層段階と捉えた。

本遺跡からは12か所の石器集中地点が検出され、産出層準に基づき3枚の文化層に区分した。

第１文化層　Ⅶ層～Ⅸａ層　　１か所　第１ブロック

第２文化層　Ⅵ層下部～Ⅶ層　２か所　第２・３ブロック

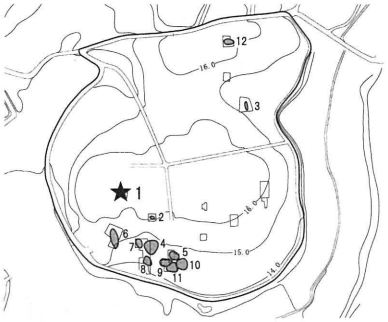
第３文化層　Ⅳ層下部～Ⅴ層　９か所　第４～12ブロック　６・７、９～11ブロックは礫群を伴う。

なお、各々の文化層におけるブロック形成の時間的な前後関係は明確ではない。

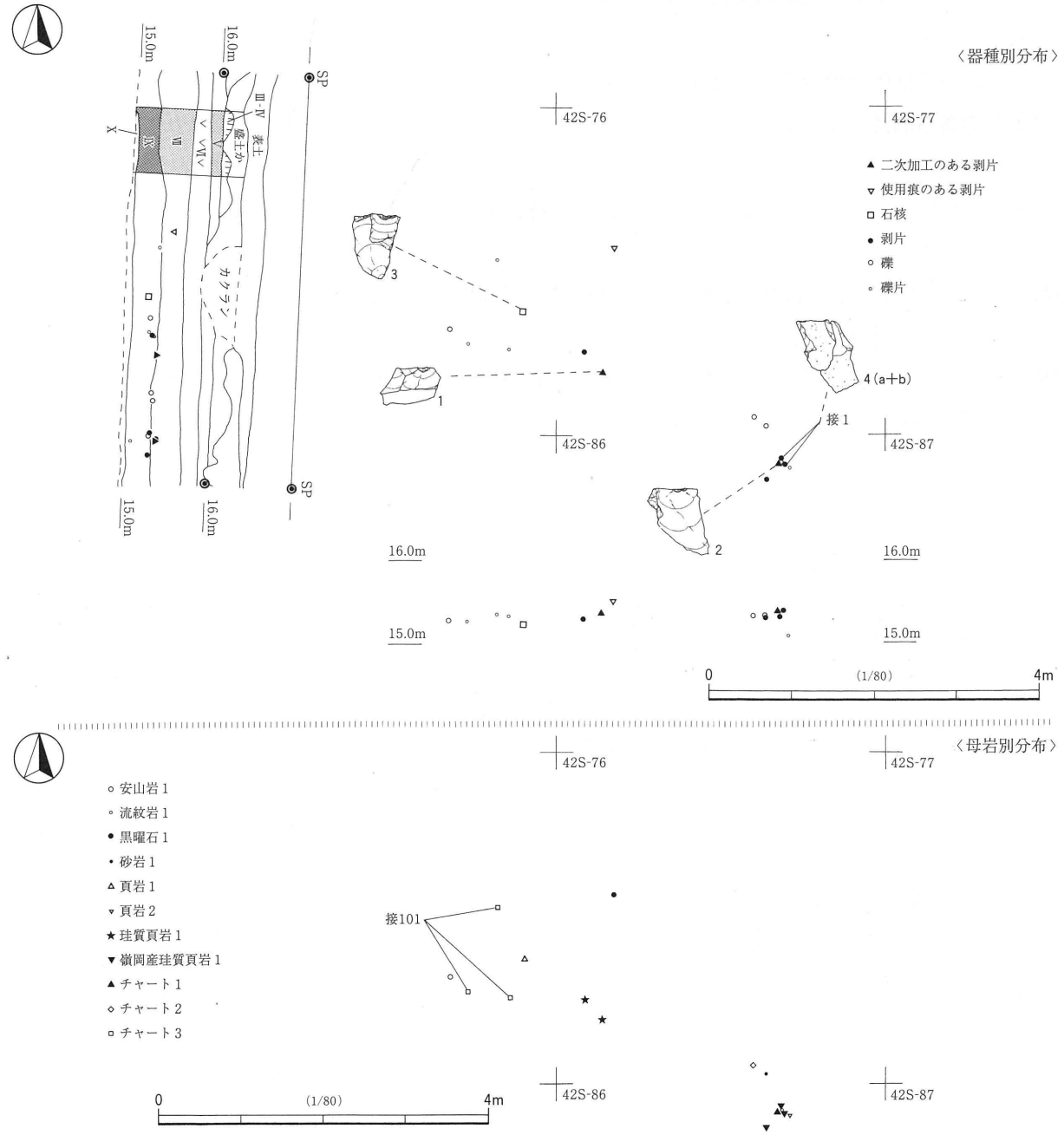
以下、それぞれの文化層・ブロックの項にて報告する。

第３節　第１文化層

Ⅶ層からⅨａ層にかけて石器が出土したブロックは、第１ブロック１か所（右図の★印）のみである。42S-75・76・86グリッドに位置し、南北約２ｍ、東西約4.4ｍの範囲に所在する。標高は16.6ｍを測り、当遺跡が標高14ｍから17ｍであるので遺跡内では比較的小高い場所に立地していると言えるだろう。



第９図　第１文化層 ブロック配置図



第10図　第１文化層 第１ブロック遺物分布

第１ブロック(第10・11図、第４表、図版３・６)

遺物分布状況

第１ブロックは遺跡の南西に位置し、標高約16.6ｍの比較的高めの場所に所在する。遺物は17点出土しており、器種内訳は二次加工のある剥片２点、使用痕のある剥片・石核各１点、剥片・礫各４点、礫片５点である。石材は安山岩・流紋岩・黒曜石　各１点、砂岩・頁岩(黒色頁岩)・珪質頁岩各２点、嶺岡産珪質頁岩３点、チャート５点である。遺物は北西から東南4.4ｍの帯状に、疎らに分布する。平均レベルは15.305ｍで、出土石器の高低差は0.41ｍを測る。土層断面図に石器を投影したところⅦ層とⅨ層のライン上に並ぶ。Ⅶ層下部に生活面を持つものと思われる。

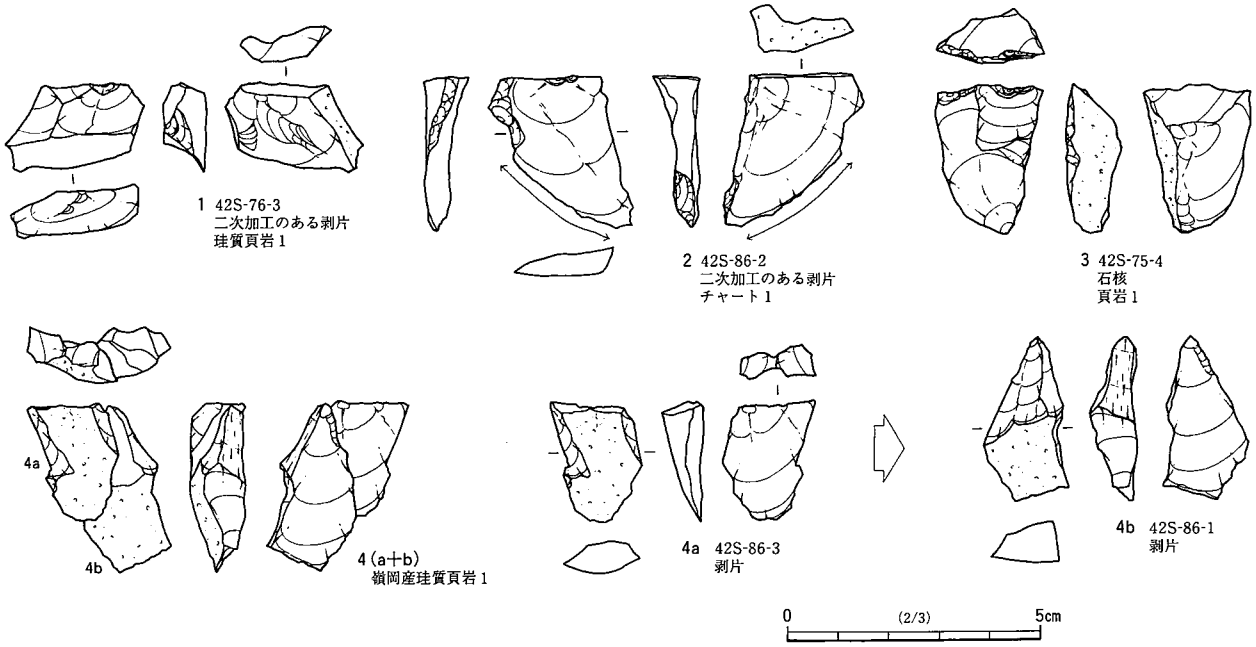
出土石器

器種名に続く括弧内の数字は、挿図番号を示す。

二次加工のある剥片（１・２）　１は下部折れの後、背面から右側縁に向かって加撃されている。石材は緑がかった淡褐色で、粒子が緻密な珪質頁岩である。２の母岩の自然面は灰色、剥離面は黒色のチャート１である。平坦な自然面から加撃された直下折れの為、左部のみ残存する。左側面と右側面下部に二次加工痕、左下縁辺に使用痕がみられる。

石核(3)　縦長剥片を上下に折り、折れ面を打面にして加撃された、やや青みがかった濃灰色の頁岩(黒色頁岩)を用いた石核である。

剥片(4)　母岩の自然面は明るい黄褐色、剥離面には暗褐色の紡錘状斑紋が入る灰色の嶺岡産珪質頁岩であり、保田層の産かと思われる。３点が出土し、２点が接合するが、一撃の下に砕かれたものである。



第11図　第１文化層 第１ブロック出土石器

第４表　第１文化層第１ブロック組成表

母岩名／器種	二次加工のある剥片	使用痕のある剥片	石核	剥片	礫	礫片	点数	点数比	重量(g)	重量比
安山岩 1	0	0	0	0	1	0	1	5.88%	78.71	14.74%
流紋岩 1	0	0	0	0	1	0	1	5.88%	93.97	17.60%
黒曜石 1	0	1	0	0	0	0	1	5.88%	1.13	0.21%
砂岩 1	0	0	0	0	1	0	1	5.88%	82.04	15.36%
砂岩 2	0	0	0	0	0	1	1	5.88%	38.36	7.18%
頁岩 1	0	0	1	0	0	0	1	5.88%	6.62	1.24%
頁岩 2	0	0	0	0	0	1	1	5.88%	0.07	0.01%
珪質頁岩 1	1	0	0	1	0	0	2	11.76%	5.98	1.12%
嶺岡産珪質頁岩1	0	0	0	3	0	0	3	17.65%	7.38	1.38%
チャート 1	1	0	0	0	0	0	1	5.88%	5.04	0.94%
チャート 2	0	0	0	0	1	0	1	5.88%	140.86	26.38%
チャート 3	0	0	0	0	0	1(3)	1(3)	17.65%	73.90	13.84%
合計	2	1	1	4	4	3(5)	15(17)	100.00%	534.06	100.00%

※（　）は出土点数

第４節　第２文化層

第２文化層は第２・３ブロック（右図の★印）が相当する。立川ロームのⅥ層～Ⅶ層を石器産出層準とする。

第12図　第２文化層ブロック配置図

第２ブロック（第13・14図、第５表、図版３・６）

遺跡範囲内の南西、やや内側に入った標高16.0ｍに位置し、石器出土レベルは14.755ｍ～14.941ｍ、高低差は0.186ｍである。43T-21・22グリッドの3.5㎡の範囲内から出土した石器は全て良質な黒曜石であり、二次加工のある剥片、使用痕のある剥片、石核がそれぞれ１点ずつと剥片２点のわずか５点で構成されるが、調査時の所見と出土石器からⅥ層からⅦ層に包含されると判断した。

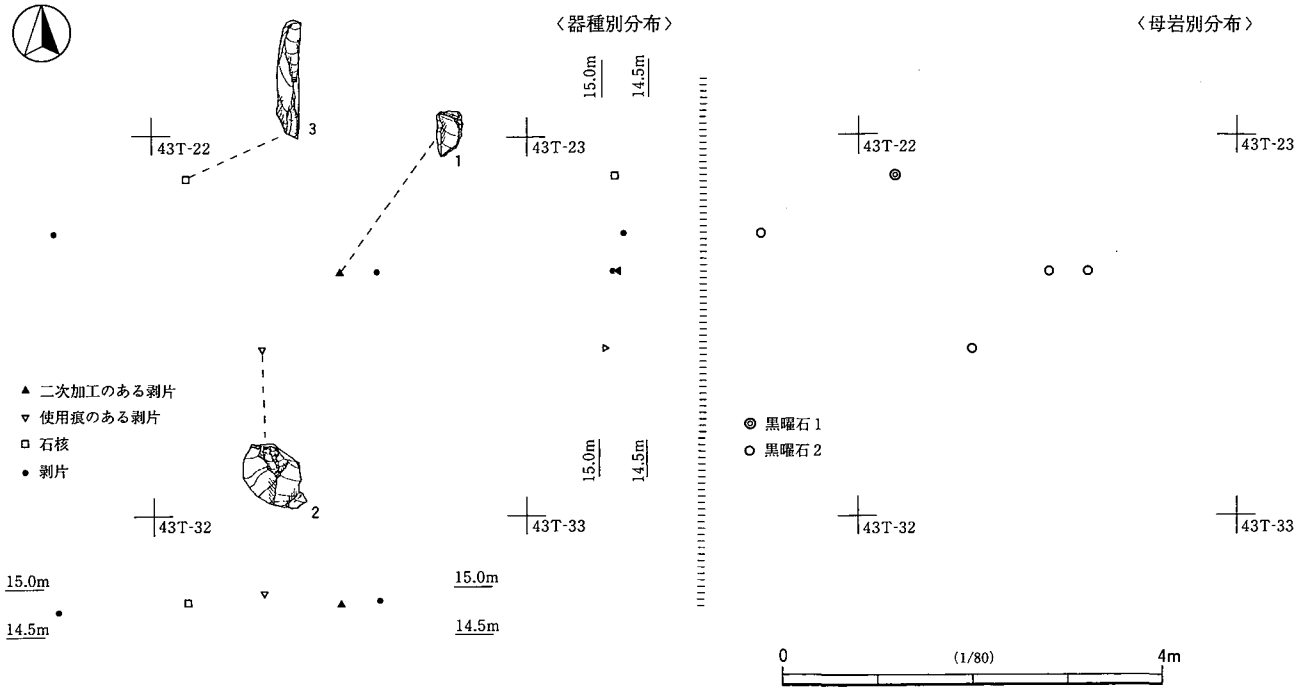
出土石器

器種名に続く括弧内の数字は、挿図番号を示す。

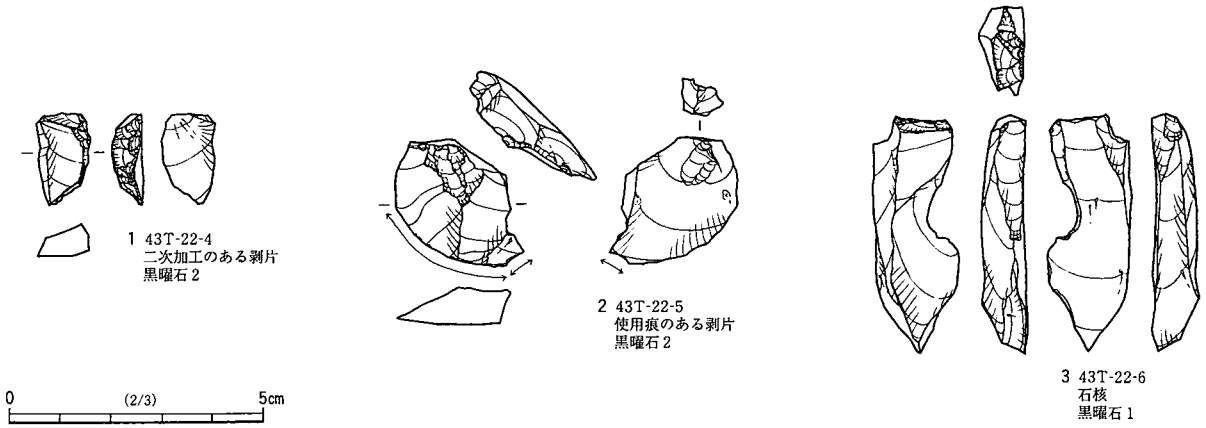
二次加工のある剥片（1）　上部が折れた、あるいは折られたのちに、外周が主要剥離面側から急角度に加撃されており、緩やかな半円弧を描く形状となっている。

使用痕のある剥片（2）　打面から右側面にかけて、背面を打面にした剥離痕が４面みられることから、荒れた打面を打ち欠いて器面を整えるために剥離された剥片であるが、弧状の縁辺には細かな刃こぼれが看取される。実測図では、同一剥離工程を示す為に打面・右側面を含めた展開図を右斜上に示した。１・２は、薄く墨色が滲むが透明度は高く、夾雑物を全く含まない黒曜石２を母岩とする。

石核（3）　灰黒色で夾雑物を含まない黒曜石１を母岩とする。濃淡のある墨色で、器厚の薄い部分は半透明である。大型で厚みの均一な板状の剥片を素材とし、設定された小口打面から同一方向に加撃して幅・長さの等しい石刃を規則的に作出しようとしており、下総型石刃再生技法に準ずる剥離工程がうかがえる。打面は再生され、何度も石刃作出が試みられてはいるが、末端に向かう力は外にそれて徐々に有効な剥片は得られなくなり、遺棄されたものと思われる。



第13図　第２文化層 第２ブロック遺物分布



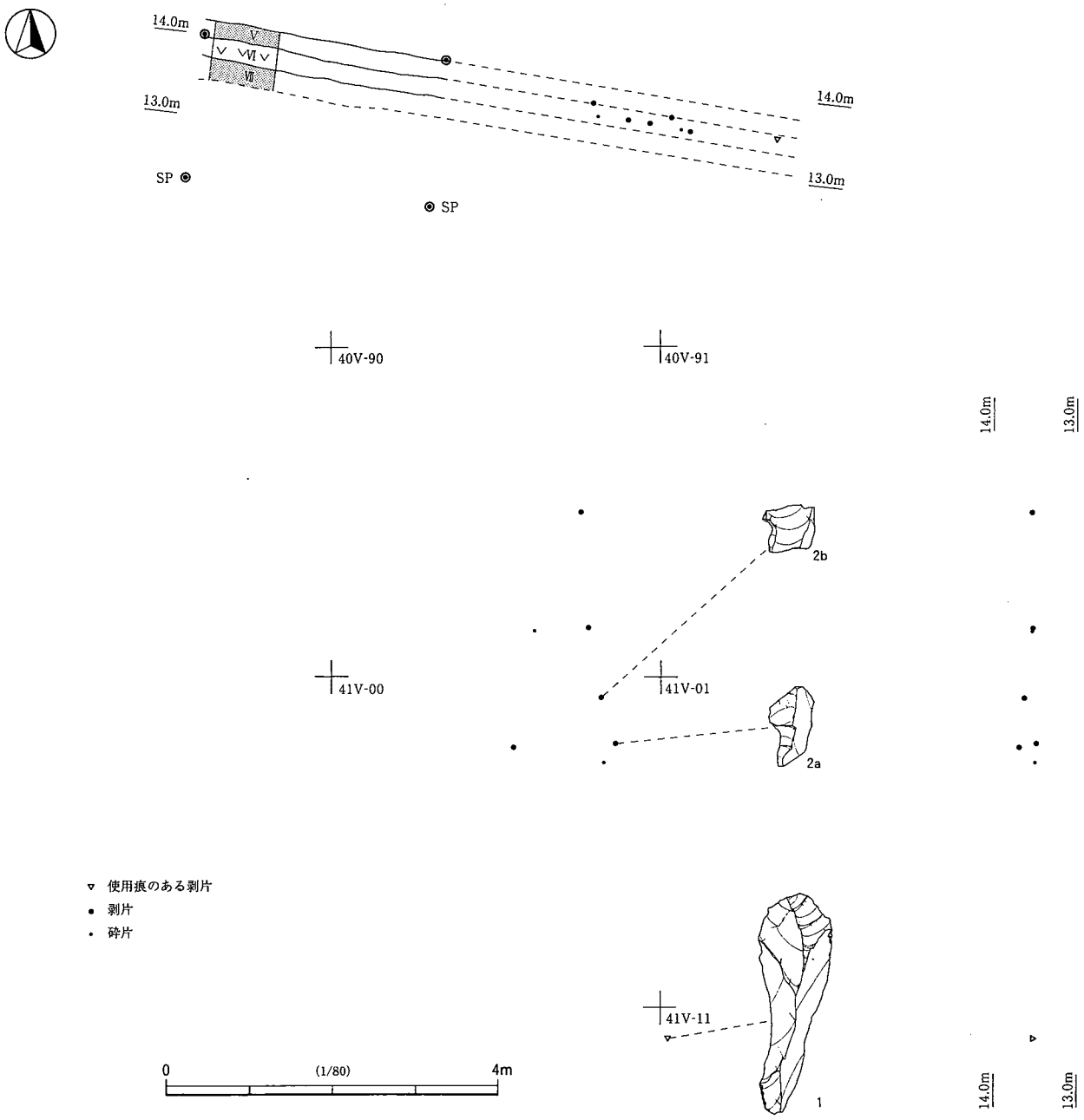
第14図　第２文化層 第２ブロック出土石器

第５表　第２文化層 第２ブロック組成表

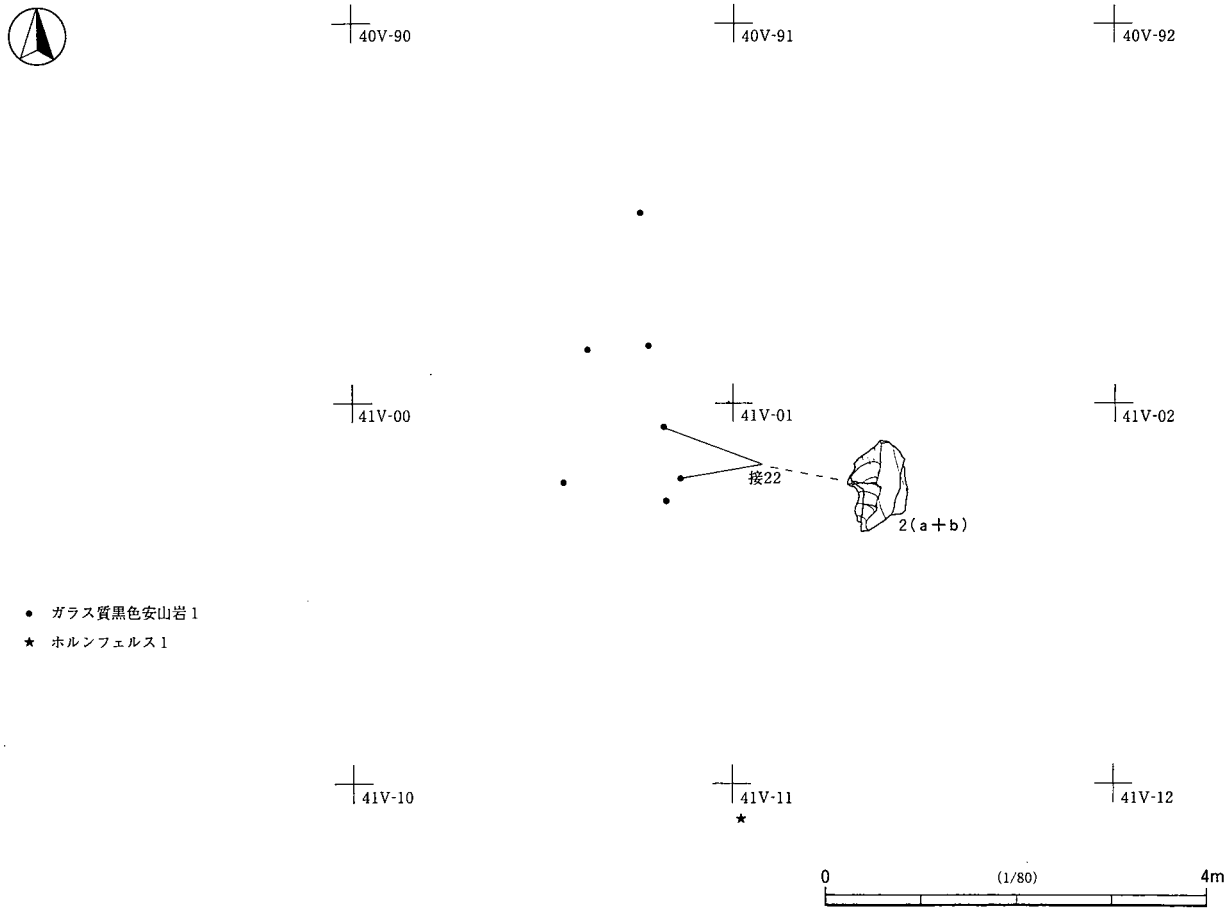
母岩名／器種	二次加工のある剥片	使用痕のある剥片	石核	剥片	点数	点数比	重量(g)	重量比
黒曜石 1	0	0	1	0	1	20.00%	6.54	45.01%
黒曜石 2	1	1	0	2	4	80.00%	7.99	54.99%
合計	1	1	1	2	5	100.00%	14.53	100.00%

第３ブロック（第15～17図、第６表、図版３・６）

遺跡の北東、西から東に下降する40V-90・41V-00グリッドを中心とした標高約15.0ｍに立地する。調査区の東側は谷に深く入りこんでおり土層の識別が困難であったため，土層区分が確実な範囲のみ調査が行われ、作図上はセクション図を延長したものに石器を投影する形を取った。また、調査時の所見である「Ⅵ～Ⅶ層より出土した」こと、客体的な大型石刃の出土などを鑑みて、第２文化層に帰属するブロックであると捉えた。全８点が短径1.4ｍ、長径6.4ｍの範囲に、垂直レベルでは13.477ｍ～13.684ｍの約20cmの間に分布する。このうち７点（剥片５点、砕片２点）はガラス質黒色安山岩で、ひとまとまりになっており、このまとまりの中心から約４ｍ離れてホルンフェルスの石刃（使用痕のある剥片に分類した）１点が出土した。



第15図　第２文化層 第３ブロック器種別分布



第16図　第２文化層 第３ブロック母岩別分布

出土石器

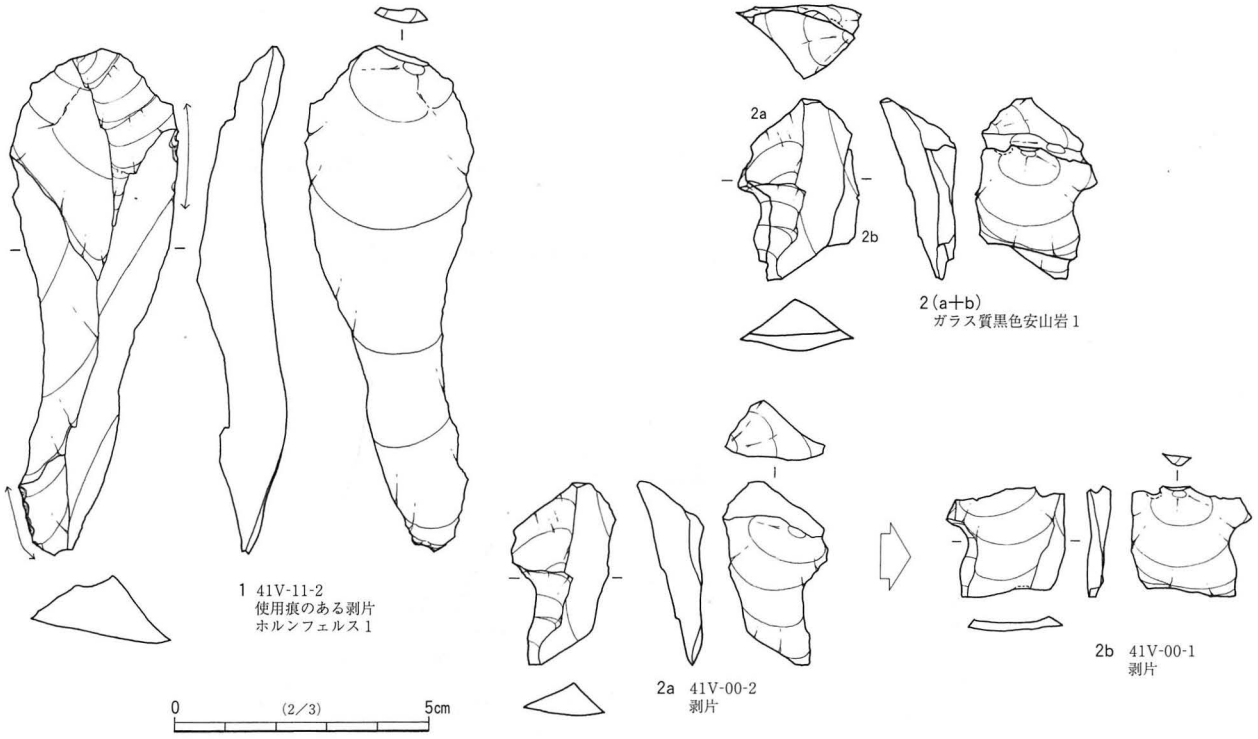
器種名に続く括弧内の数字は、挿図番号を示す。

使用痕のある剥片(1)　器軸に沿って背稜が通る器長10.2cmの石刃状である。最大幅は上部にあり、張り出した右側縁と下端左側縁に使用による刃こぼれがみられる。両側縁は末端部で収束する。火成岩起源のホルンフェルスであり、濃灰色を基調に、針でつついたような細かい点紋が全体を覆う。同一母岩はなく、客体と思われる。

接合資料(2)　剥片２点が接合する。2a→2bの順に剥離され、二次加工痕・使用痕はみられない。

第６表　第２文化層 第３ブロック組成表

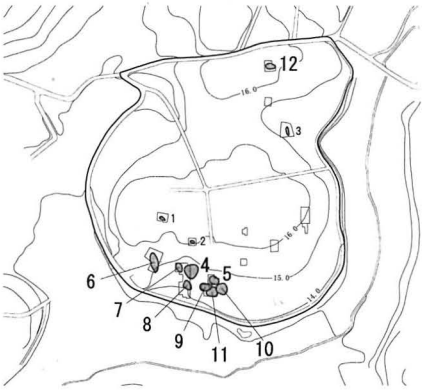
母岩名／器種	使用痕のある剥片	剥片	砕片	点数	点数比	重量(g)	重量比
ガラス質黒色安山岩1	0	5	2	7	87.50%	14.04	30.65%
ホルンフェルス1	1	0	0	1	12.50%	31.77	69.35%
合計	1	5	2	8	100.00%	45.81	100.00%



第17図　第２文化層 第３ブロック出土石器

第５節　第３文化層

立川ロームⅣ層からⅥ層において検出された文化層で、第４ブロックから第12ブロックの９地点が該当する（第18図、太字で示す）。セクション図・調査時の所見・石器の形状・他遺跡の出土状況などを鑑みて、Ⅳ層下部からⅤ層に生活面を持つものと考えられ、各々特徴的なブロックを形成している。



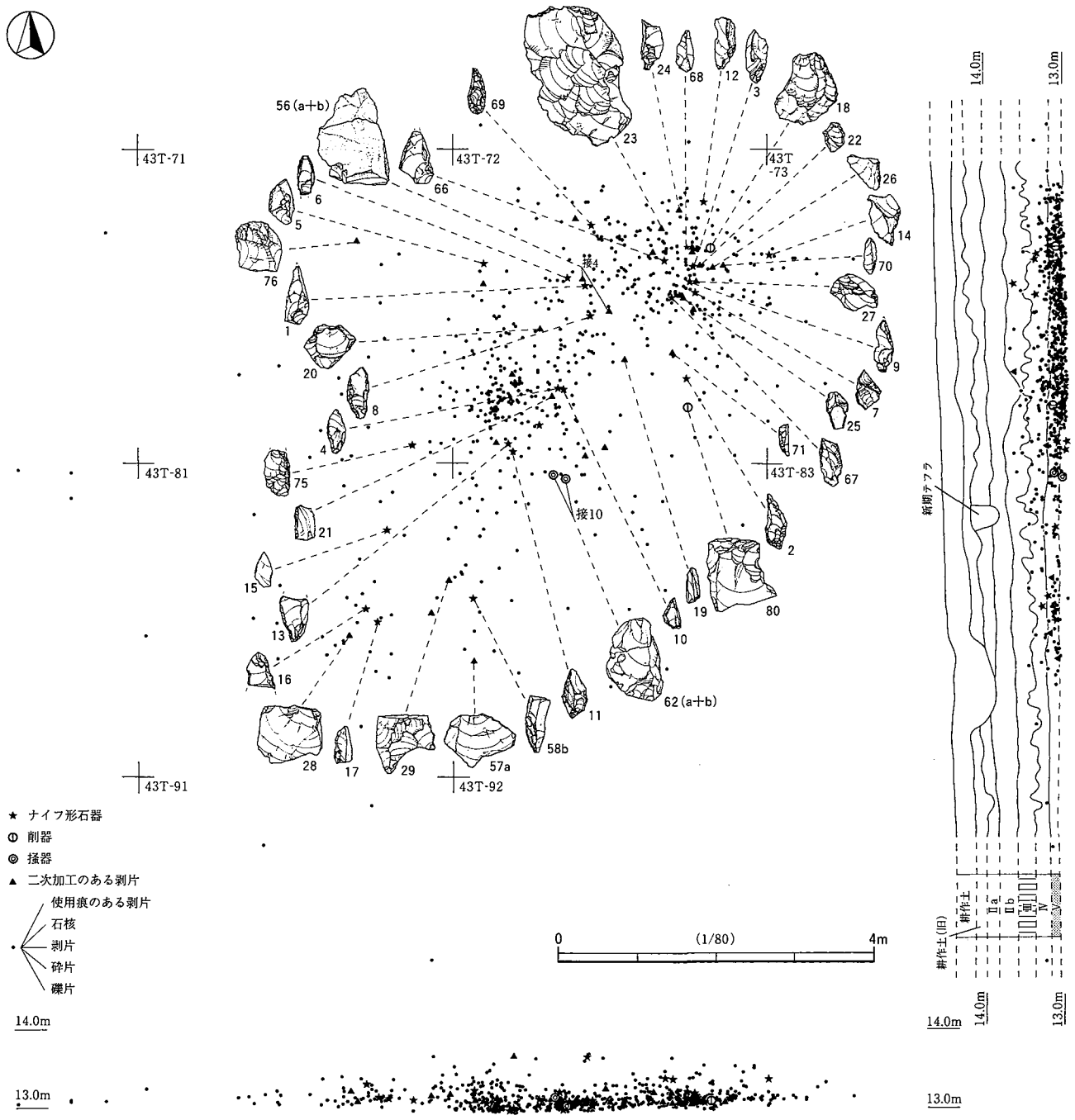
第18図　第３文化層 ブロック配置図

基本土層の項にも記したが、この第４ブロックから第11ブロックが所在する台地南縁辺は、Ⅴ層段階からロームの堆積が始まったと推測される傾斜地であるため、常総粘土層直上が黒味の強い第１黒色帯となっている。はじめに、高原山の黒曜石を携えた先人が２か所（第４・５ブロック）で石器製作を行い、時を経て下野-北総回廊を経由したと見られる幾種類もの原石石材が持ち込まれ、６か所の石器集中部（第６～11ブロック）で加工が施されたものと思われる。さらに、遺跡北部では東部関東（八溝山地）から運ばれた青緑灰色のチャート（珪質頁岩）とガラス質黒色安山岩の、２種類の石材のみで構成されるブロックが所在する。石器の出土状況を鑑みると、第４・５ブロックが第６～12ブロックに先んじてはいるが、第６～11ブロックと第12ブロックの新旧は不明である。

石器類の石材をみると、第４・５ブロックは黒曜石が主体であり、第６～11ブロックはガラス質黒色安山岩と珪質頁岩が多出し、第12ブロックはほとんどがガラス質黒色安山岩と青緑色で油脂状光沢を持つチャートで占められる。第４、５、12ブロックはブロック内のみの接合であるが、南側の第６～11ブロッ

ク間においては石器類・礫片とも濃密な接合結線が引かれ、頻繁な石器のやり取りや、場としての機能性をうかがい知ることができる。礫・礫片が多量に伴うが、分離して別ブロックと捉えず平面分布上での粗密をもとに集中区域を抽出し、剥片石器類と礫・礫片の混在するブロックとした。第6～11ブロック全体での剥片・石器類接合状況及び礫片の接合状況は第38～40図に示した。出土器種・石材組成は第9～11表を参照されたい。

石器実測図の掲載は母岩ごとに行い、まとめの項では器種別に並べた。



第19図　第3文化層 第4ブロック器種別分布(その1)

第４ブロック（第19～30図、第７表、図版３・７～９）

遺跡の南西に位置し、第５ブロックの西隣である。43T-62・70～73・80～82・91グリッドから高原山産黒曜石が600点以上出土した。標高約14.3ｍ、石器出土の平均レベルは13.110ｍ、高低差は0.736ｍを測る。

Ⅳ層下部～Ⅴ層に生活面を持つ石器群であり、石器の分布は２か所の濃密な集中域と、そこから派生し南西に向かう石器の流れが疎らな広がりを見せる。石材は出土点数635点のうち97.8%が黒曜石であり、621点を数える。わずかにガラス質黒色安山岩３点、流紋岩１点、頁岩３点、珪質泥岩１点、珪質頁岩４点、チャート１点、不明１点が混じる。

器種組成上の合計数626点の内訳は、ナイフ形石器24点、削器２点、掻器１点、二次加工のある剥片30点、使用痕のある剥片71点、石核10点、剥片318点、砕片167点、礫片３点である。このうち36点、12個体が接合した。

第４ブロックの大部分を占める黒曜石を６母岩に分類したが、黒曜石１～４は高原山・甘湯沢群に産を発しており、同一母岩である可能性も否めない。以下それぞれの特徴を記し、母岩別に記載する。

なお第４・５ブロックにおいては下記に黒曜石の原産地を記載しているが、財団法人 埼玉県埋蔵文化財事業団に依頼し、蛍光Ｘ線による分析で得られた推定産地である。

黒曜石１　高原山・甘湯沢群：石基には透明感はない。光沢のある黒色を基調として、赤褐色の霜状部分がある。赤褐色～淡黄色の斑晶は直径0.5㎜～2.5㎜、１㎠につき３～６個含まれる。563点が出土しており、第４ブロックの主体となる。

黒曜石２　高原山・甘湯沢群：石基・斑晶とも黒曜石１と同様だが、石基の光沢が若干鈍い。26点出土。

黒曜石３　高原山・甘湯沢群：石基・斑晶とも黒曜石１と同様だが、石基に艶・光沢がない。４点出土。

黒曜石４　高原山・甘湯沢群：石基・斑晶とも黒曜石１と同様だが、わずかに透明度が高い。15点出土。

黒曜石５　信州・和田峠：石基は薄い墨色を呈し透明度が高い。夾雑物を含まず、極めて良質。６点出土。

黒曜石６　信州・男女倉：石基は青みを帯びた薄墨色が縞状になる。夾雑物僅少。７点出土。

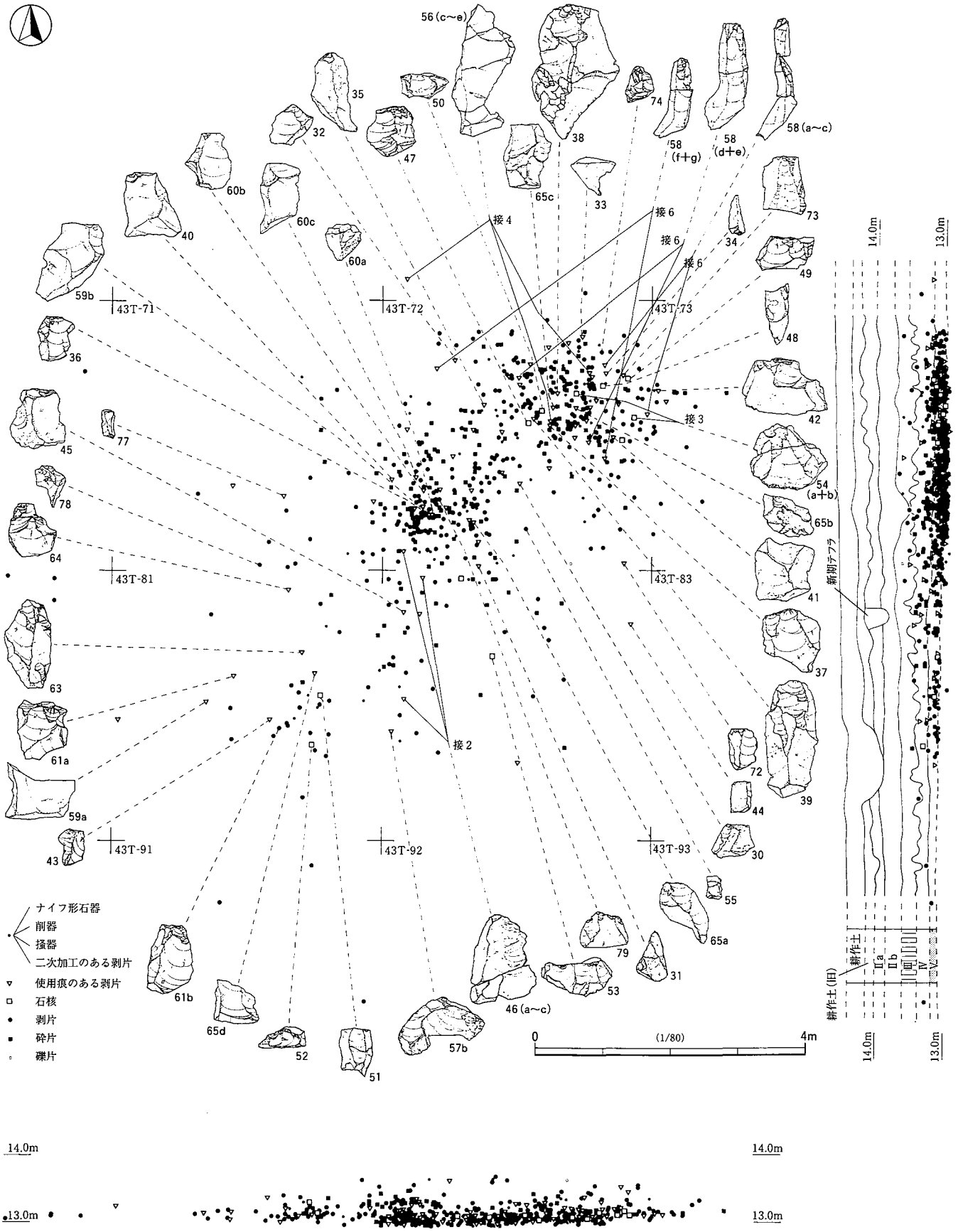
出土石器

母岩ごとに記載する。器種名に続く括弧内の数字は、挿図番号を示す。

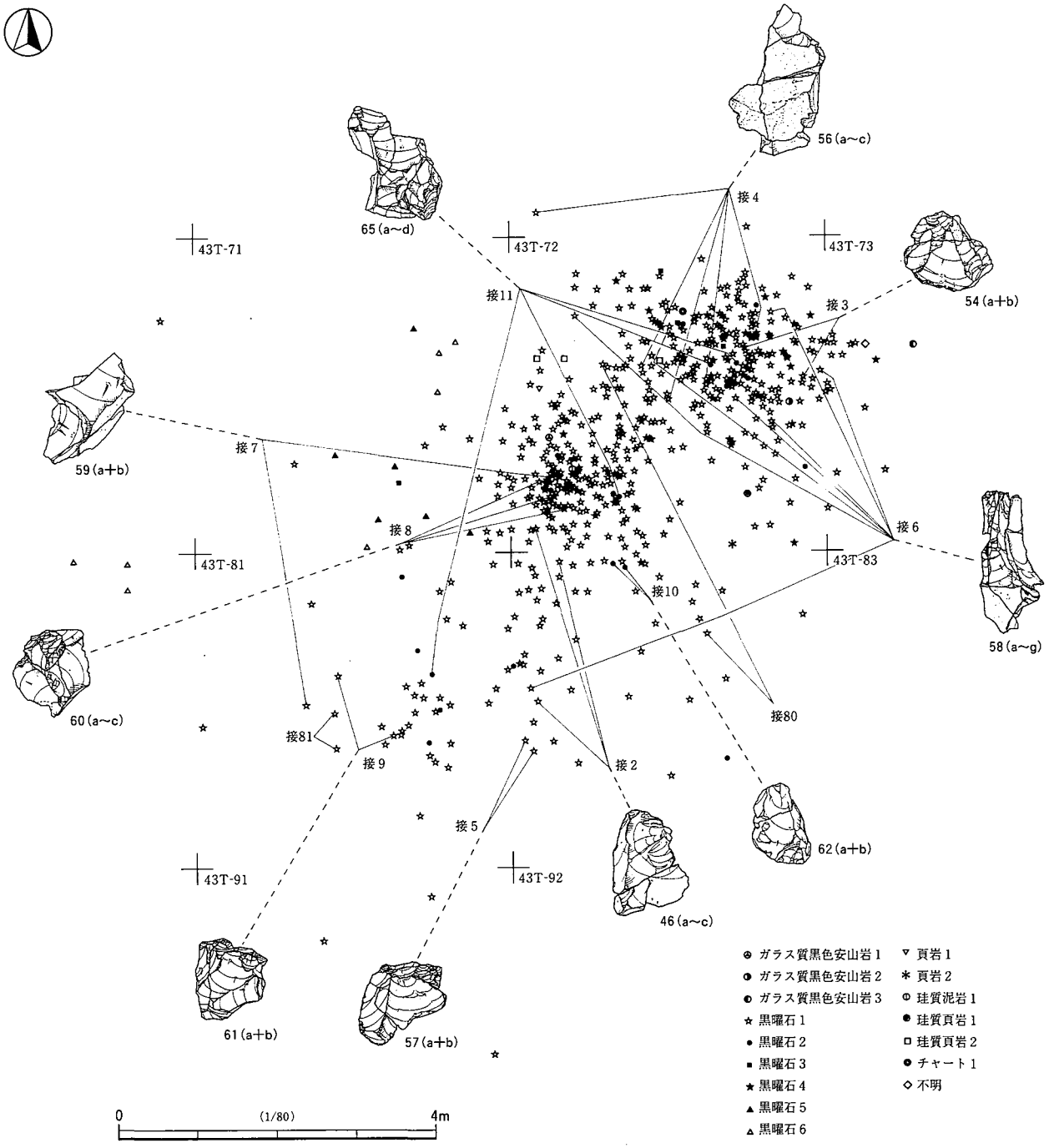
黒曜石１

ナイフ形石器（１～17）　厚みのある板状剥片の平坦面、あるいは小口面を打面にして剥離された小剥片を素材に用いたものは12点であり、このうち平坦面から加撃された幅広の素材は２・３・８・14・16、縦長の剥片を素材にしたものは４・５・６・９・12・13・17である。

１は板状剥片の打面付近から断面三角形状の剥片を剥離し、素材とする。剥離の末端が作る稜は54°、使用痕あり。２は１同様、基部加工は顕著ではないが、形状は近似する。刃部（先端）には抉入部があり、尖端をしつらえる。錐としての使途もあったものと思われる。３は横長剥片を素材とする。基部は素材時の形状が活かされる。剥片時の主要剥離面と背稜から加撃された剥離面によって55°～62°の刃部を作出し、使用される。４は基部に厚みと幅を持つ。５の背面には風化した剥離面が残る。一側縁を正・裏面から加工したナイフ形石器である。６は20㎜に満たない小さな縦長剥片を素材とし、周縁に78°～88°の刃

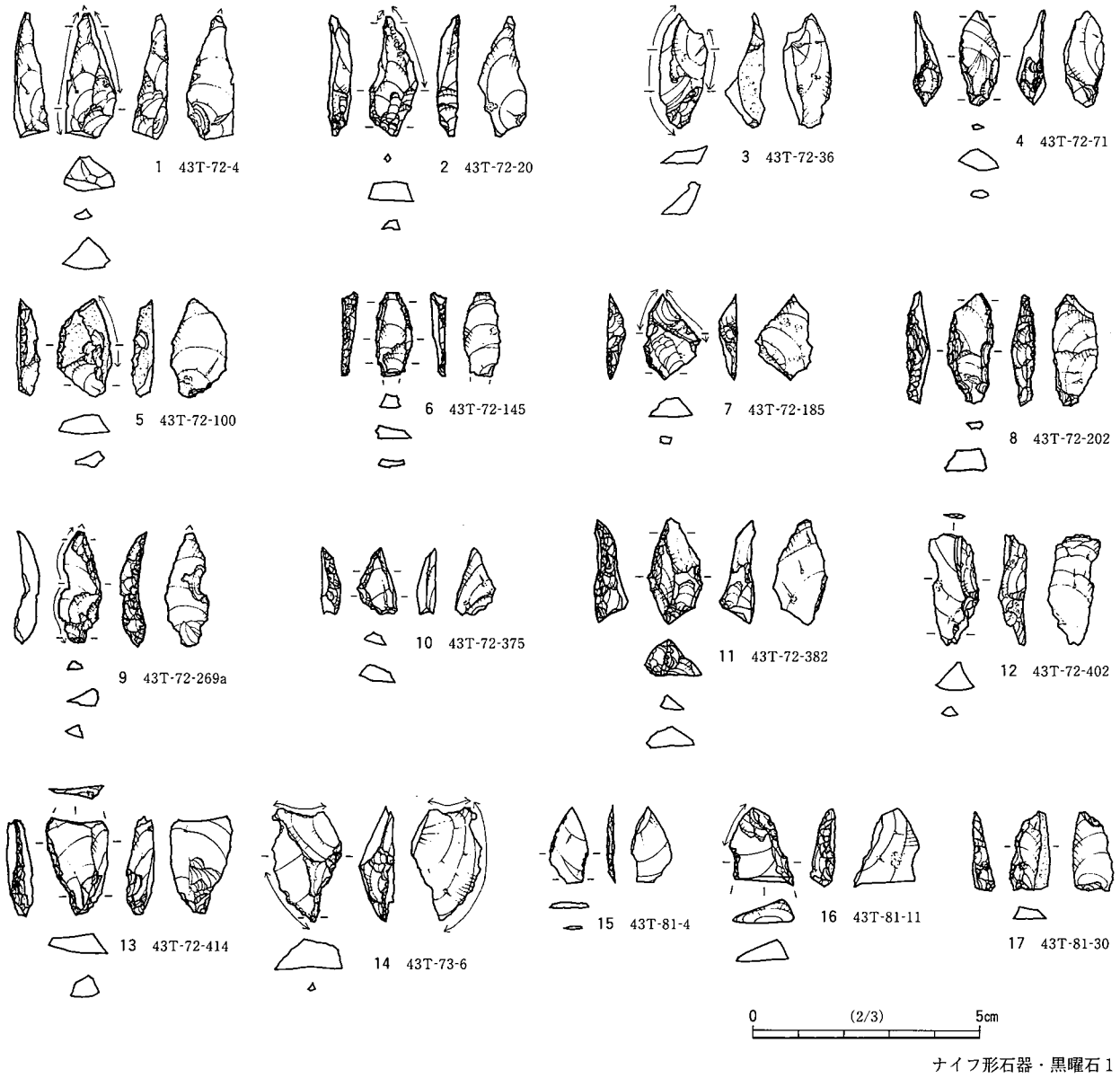


第20図　第３文化層 第４ブロック器種別分布(その2)



第21図　第３文化層 第４ブロック母岩別分布

潰し加工が施される。７は左側縁に刃潰し加工が施され、刃部には使用痕が看取される。８は横長剥片を素材とする。二側縁加工のナイフ形石器である。９は長さ25㎜の縦長剥片を素材に、一側縁を刃潰し加工したナイフ形石器である。対縁には使用によると思われる刃こぼれ痕あり。10はナイフ形石器の先端部である。欠損後に再加工されている。11は一側縁加工のナイフ形石器である。４と同様、厚みの中心は基部付近にある。12は直径３㎜ほどの茶褐色の球顆が集まった部分が基部である。積極的な刃潰し加工ではない。13の左側縁は主要剥離面側から加撃されるが、基部は稜上からも加撃され矩形となる。上部は折れて欠損する。12・13は素材剥片打面付近を基部に、末端部分が刃部となる。14は横長剥片が素

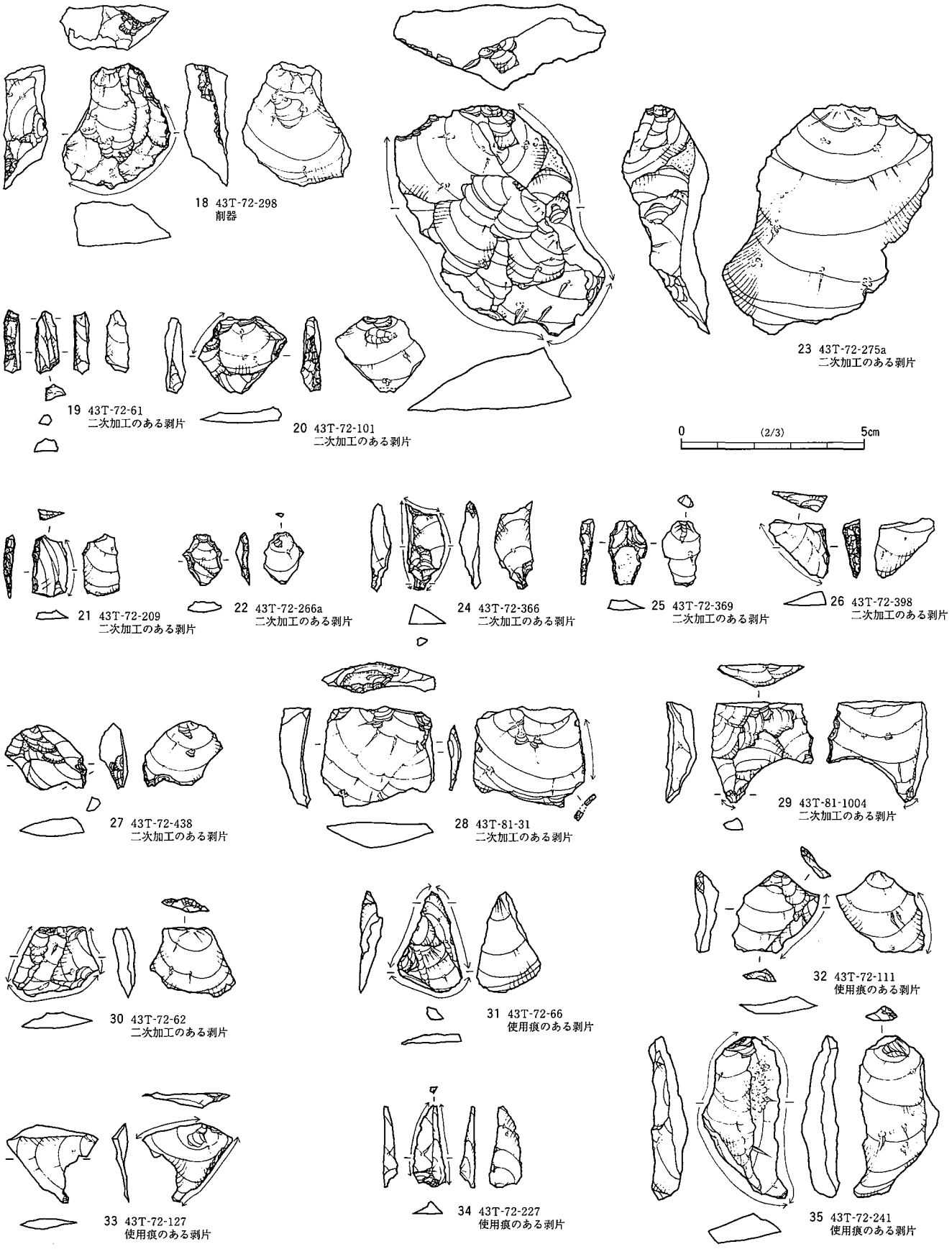


第22図　第３文化層 第４ブロック出土石器（１）

材であり、幅広の末端縁辺が刃部として使用される。15は厚みのない剥片が素材である。左側縁は刃潰し、右側縁は折れにより面として認識される。刺突具としての用途を持つものか。16の基部（下半部）は折れて欠損する。二側縁加工であり、左側縁部の加工はわずかに抉入する。刃部には使用痕がみられる。17は一側縁加工のナイフ形石器である。素材剥片の打面部分は加工により削除される。

削器(18)　背面には剥片剥離の痕が顕著であり、器面を調えるために剥離されたものと思われる。厚みを持ち、打点対縁は広く、加工には使用痕が廻る。

二次加工のある剥片(19～29)　19は58bと同様、二次加工剥片として実測したが錐として用いられた可能性がある。石刃を素材とし、先端の断面形は四角形である。明確な調整痕や打点を持たないが、使用の際に欠けたものであろうか。20は剥片剥離の際の加撃により打点部が欠落したものである。側縁の加工は74°～90°を計り、刃潰し加工と認識されるが、刃部はない。21の上部は左側縁を加工する際の折れと思われる。22は15㎜に満たない小片であるが側面に二次加工痕が廻る。23は器面調整を目的として剥離



黒曜石 1

第23図　第３文化層 第４ブロック出土石器(2)

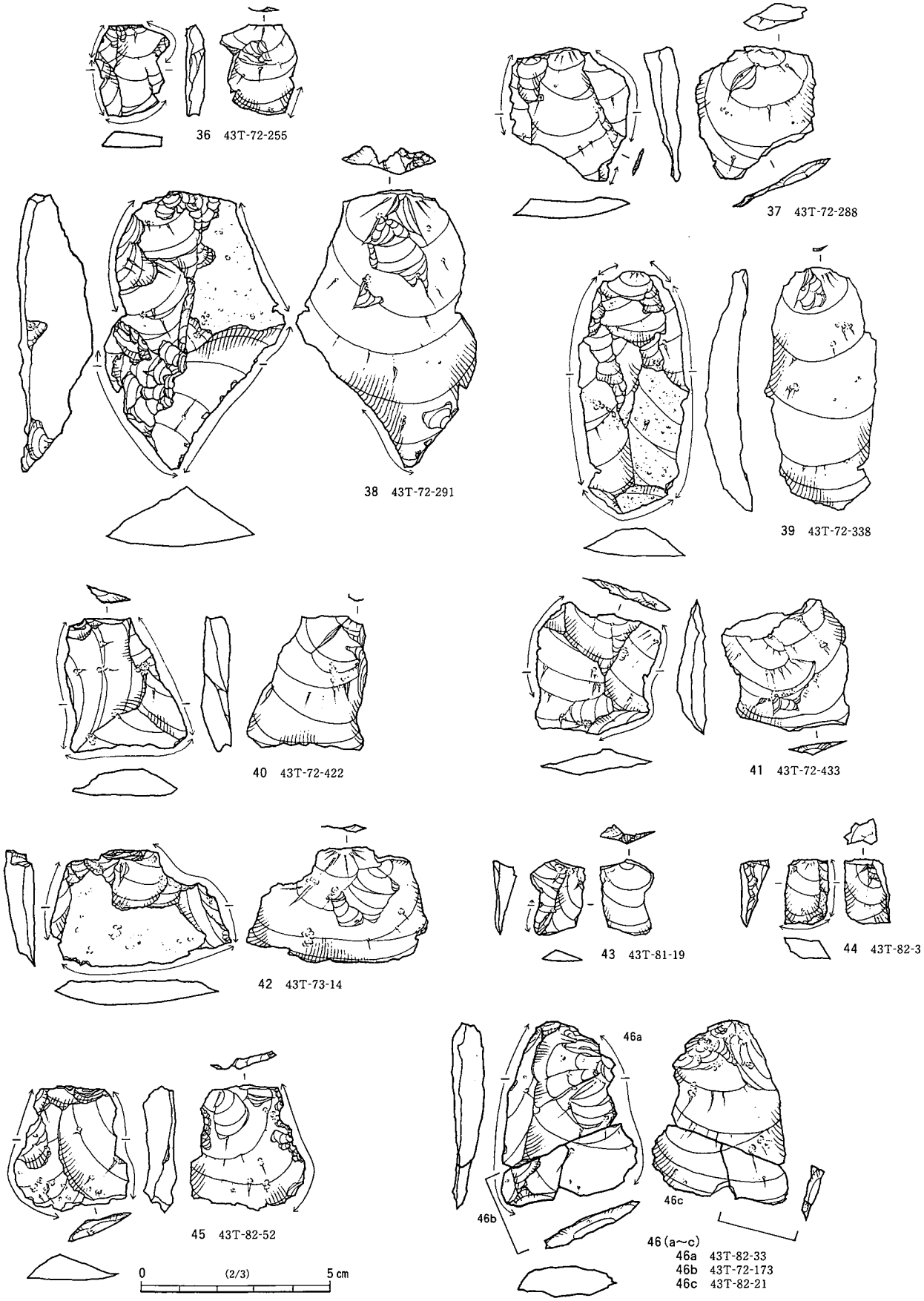
されたものである。背稜から左へ向かう剥離痕は石核時の、連続した剥片剥離の痕である。打面は二次加工により、点状となる。周縁部には満遍なく使用痕が廻る。24は刃潰し加工の施されていない二次加工剥片ではあるが、第４ブロック特有の形状を鑑みてナイフ形石器として設置・実測を行った。基部は打点を持たない複数の剥離(砕け)により、つまみのような形状であり、素材剥片の打面部分にあたる。周縁には使用痕がみられ、折れて厚くなった末端部は再加工され、尖端が作出される。25は小型剥片の外縁部に急角度剥離痕がみられる。加工途中の折れにより末端部は欠損する。26の上部は加工途中で折れたものである。縁辺には刃こぼれあり。27は抉入部を持つ二次加工剥片であるが、ナイフ形石器の基部や錐状工具の可能性もある。28は打面を加工される。側縁は使用により線状となる。29は下部のみ残存する。末端付近の抉れは夾雑物から派生したものである。抉れにより現れた末端部には使用による剥離・潰れがみられる。

使用痕のある剥片(30～46)　30は打面・頭部調整され、打面を除く全周に使用痕が観察される。31は第４ブロックに多出するナイフ形石器の亜形と思われる。折れた後の縁辺は鋭く、薄い。使用による刃こぼれは、この縁辺をも含み全周に看取される。32・36・43・44は背面に打撃方向を一にする剥離痕があり、連続した剥離工程の所産と思われる。33は使用による潰れにより直線的な縁辺となる。34もまた当ブロックに多出するナイフ形石器の素材と思われる。明瞭な基部加工はないが、剥離の際の背面まで及ぶ打撃痕があり、打面部を下方に据えて実測した。両側縁は末端で収束し、縁辺には使用痕が残る。１・２・９・24・25と大きさ・形態が近似する。35の下端（底部）には風化剥離面が残る。両側縁に使用痕がみられるが右側縁の刃こぼれは顕著である。37・40・41・45は打点対縁が広く、35㎜前後の器長を持つ。また器体の一部は折れて使用痕を寸断する。38は器長が73.44㎜、器幅が48.84㎜と大型の剥片である。使用痕は全周に及ぶが左側縁の刃こぼれは特に顕著である。39 は小さく設定された打面から剥離された、整った長楕円形状の石刃様剥片であり、全周に使用痕が廻る。背面下半部は風化剥離面である。原石を持ち出したのち加工され、さらに時を経て剥片剥離に及んだものと思われる。42は背面に自然面を残す、打点対縁の広い剥片である。全周に使用痕が廻る。46は3点で１点の使用痕のある剥片である。46aの端部には折れた後も使用された痕跡が残る。

石核(47～54)　47は稜に調整を加えながら多方向からの加撃により剥片剥離された石核である。部分的に溶けかかった樹脂のような器面であり、被熱痕跡かと思われる。51は大まかな剥片剥離を行ったあと、打面を設定し、稜を調整しながら縦長の剥片を作出している。54は上下に折れているが折れ面からの加工・使用痕はなく、2点で1点の石核とみなした。下縁辺に潰れがみられるが、剥片が作出されたあとに刃器として使用されていた可能性がある。48・49・50・52・53・は厚みのある剥片を素材にした石核である。加撃方向がほぼ一方向に向かうもの(48・49・52)、打面が回され求心的な剥離痕を残すもの(50・53)の２パターンがあるが、平坦面を打面にして、打点対縁の広い剥片を作出しようとした意図がうかがえる。作り出された剥片類は２～５、７・８・11・14などのナイフ形石器、24の二次加工のある剥片、30・34の使用痕のある剥片に加工・使用されたものと思われる。

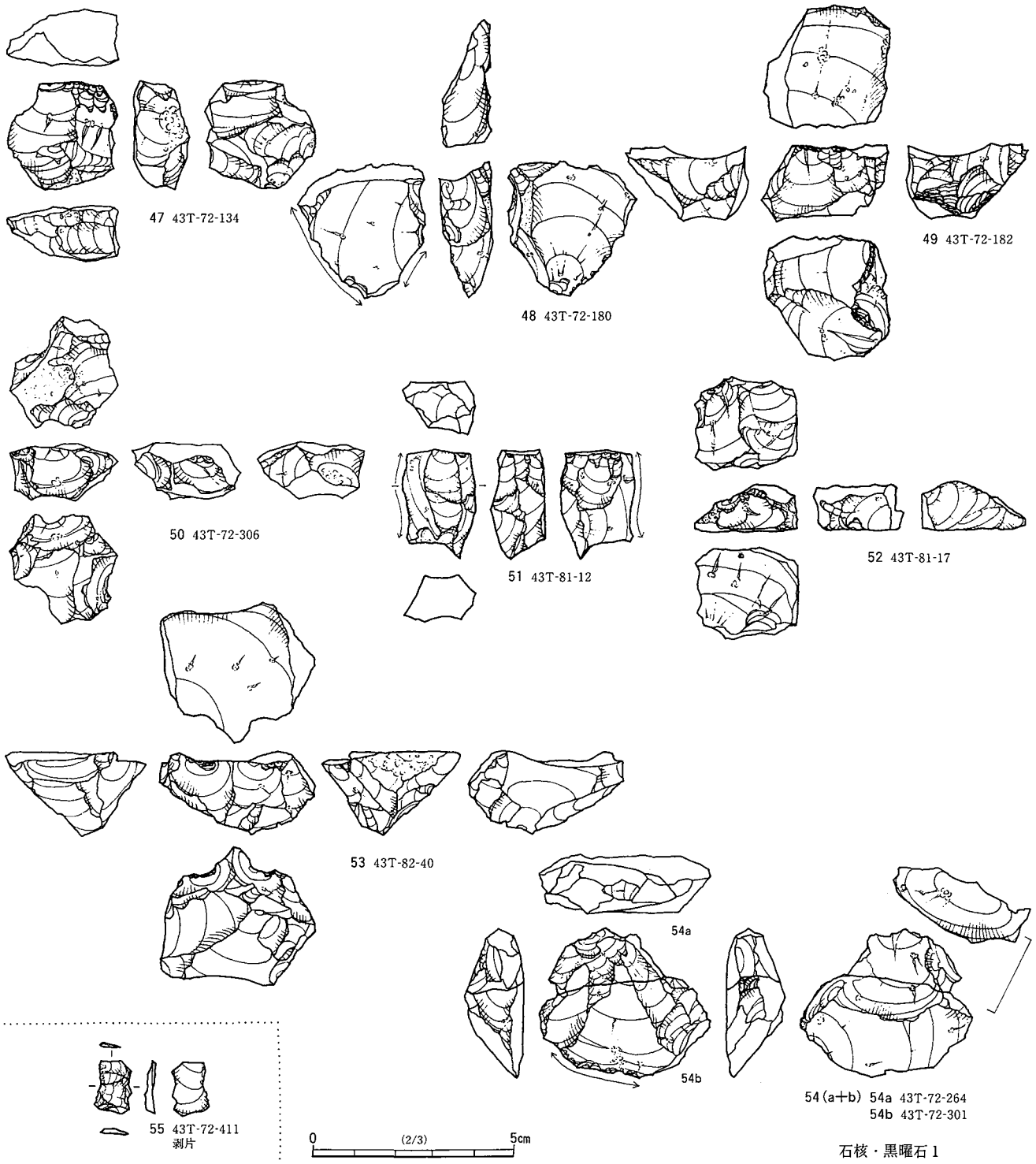
剥片(55)　55は上部の折れた剥片である。背面には左方向から少なくとも５面剥離される。器面の荒れを調整するための剥片である。

接合資料(56～61)　56の５点は第４ブロックの北側、北東集中域から出土した。組成上は二次加工のある剥片(56a+56b)と使用痕のある剥片(56c+56d+56e)の２点接合資料である。56a+56b剥離後に素材が



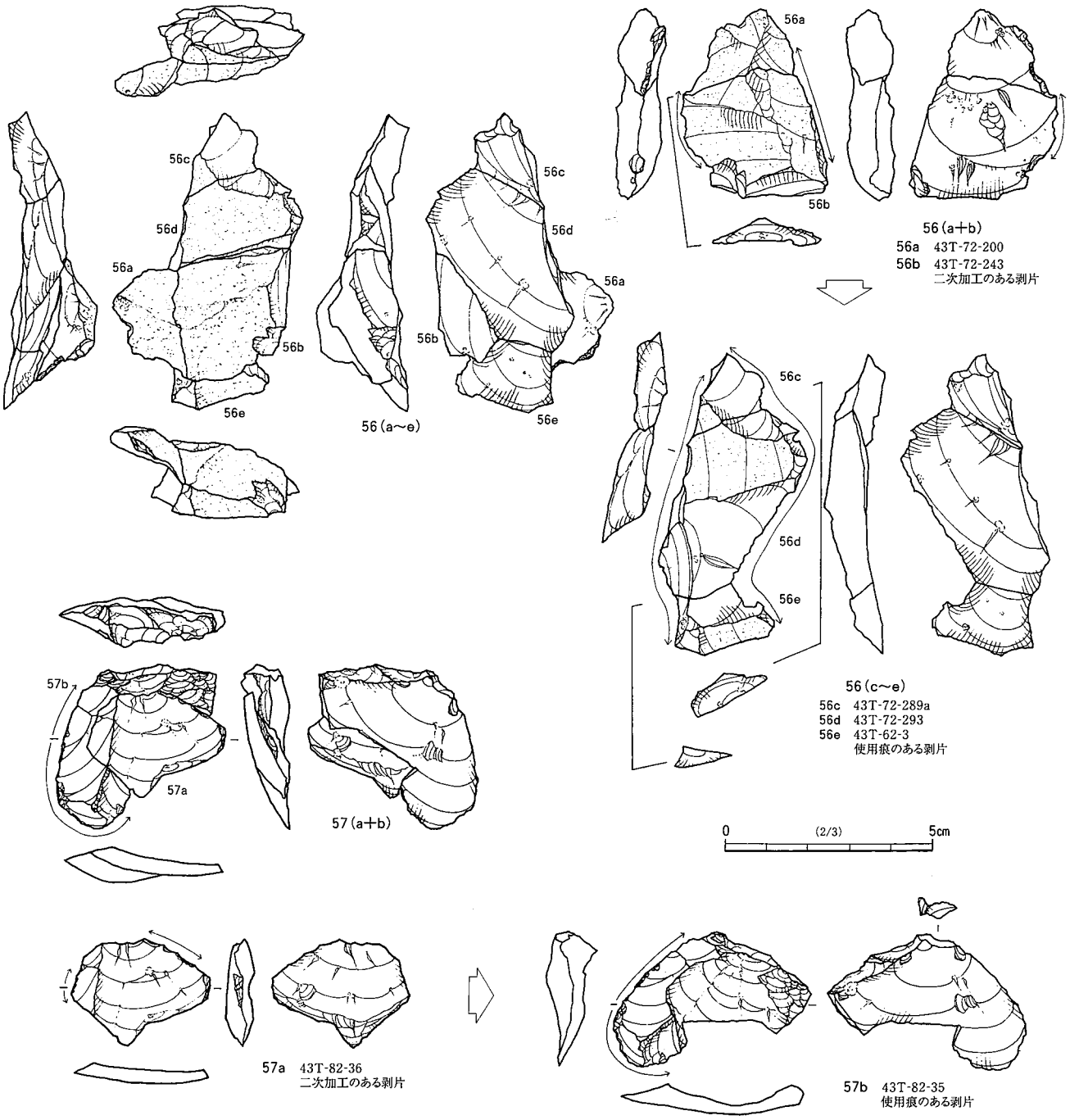
使用痕のある剥片・黒曜石1

第24図　第3文化層 第4ブロック出土石器(3)



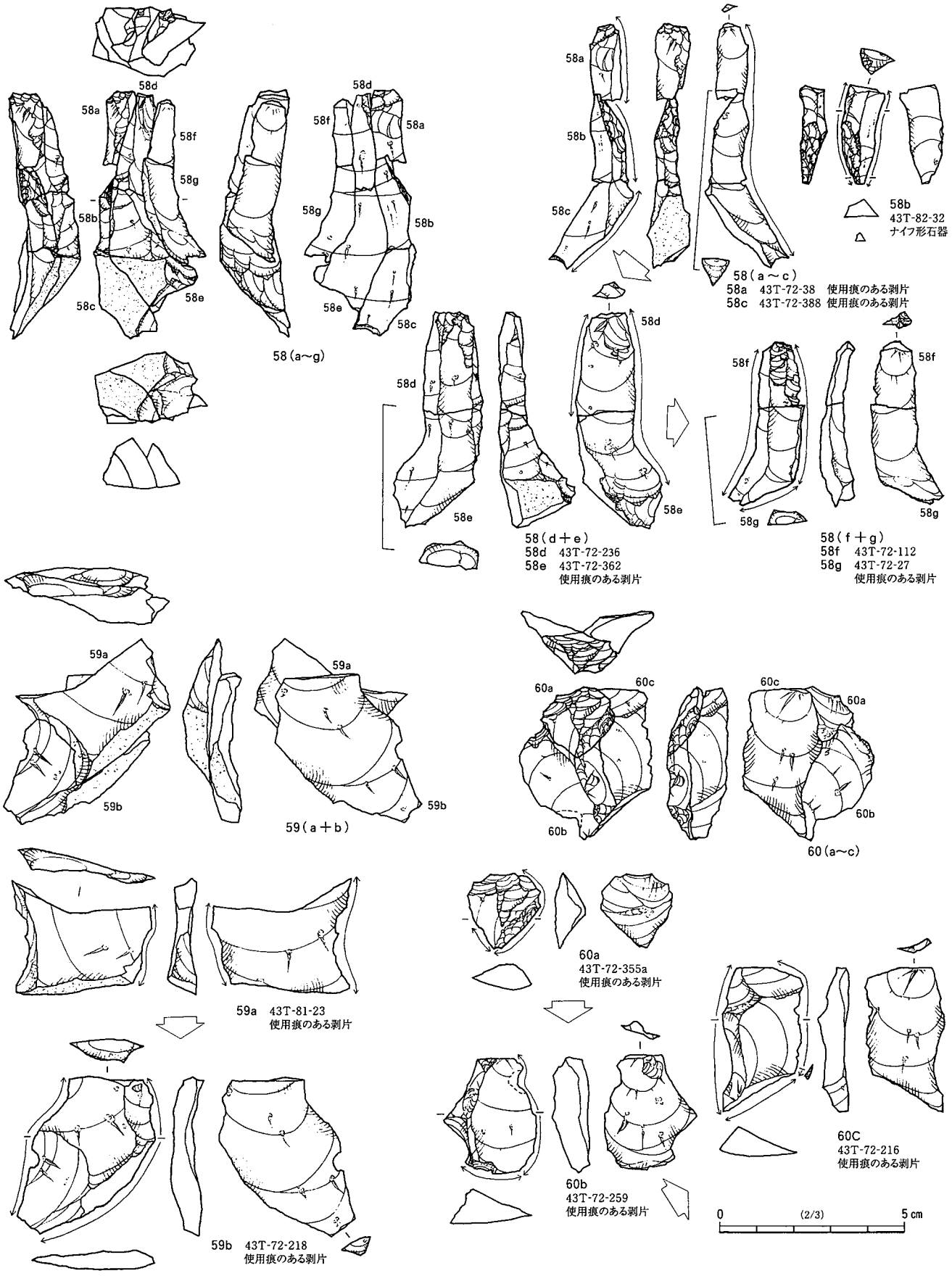
第25図　第３文化層 第４ブロック出土石器(4)

90°持ちかえられ、56c+56d+56eが剥離される。この際の打点直下の折れにより、56c+56dの右面が作られたものである。背面は剥離痕の観察される風化面であり、多重パティナ(時間差のある風化剥離面)として実測した。二次加工痕は56aにのみ看取される。57の２片は一撃の下に作出され、57aは地滑り状に剥落したものである。57a、57bとも使用痕が観察されるが57aの右上部には二次加工痕が観察される。２点間の距離は20cmに満たない。58は７点接合資料である。使用痕のある剥片６点は43T-72グリッドの北半



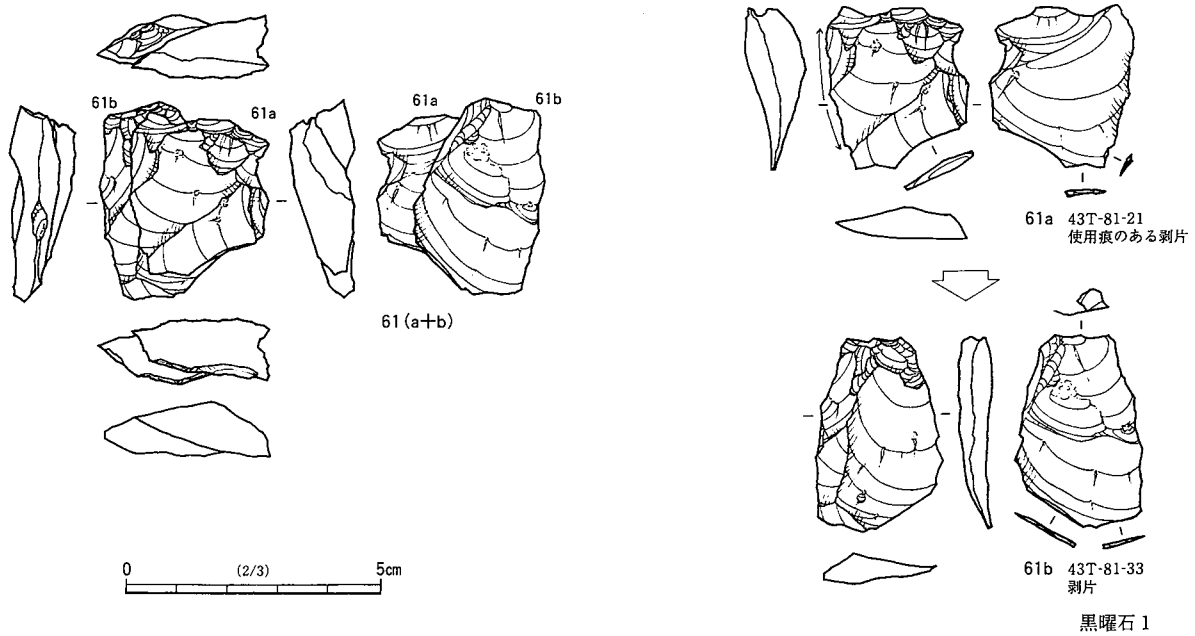
第26図　第３文化層 第４ブロック出土石器(5)

部、1.5ｍ×３ｍ内にあり、ナイフ形石器１点は６点のまとまりから南西に５ｍ離れて出土している。大型の板状剥片を石核とし、打点を直線的に移動して３点の石刃が作出されている。各々、末端部が石核内部に向かうウートラパッセで、頭部調整痕がみられる。３石刃は各々２～３分割され、このうちの58bは主要剥離面側から急角度で加工された後、グラインディングによる刃潰し加工が施されている。59は使用痕のある剥片２点の接合資料である。59a・59bとも周縁に使用痕が廻るが上部は残存していない。自然面として実測した部分は風化の進んだ古い剥離面である。２点間の距離は約4.3ｍである。60は使用痕のある剥片が３点接合した資料である。60a剥離後、加撃方向は上下に180°入れ換わる。後、１点以上の剥



黒曜石１

第27図　第３文化層 第４ブロック出土石器(6)



第28図　第３文化層 第４ブロック出土石器(7)

片が剥離され、60bが剥がされる。再び上下に180°持ちかえ60cが剥がされる。60cの下面は60bの打面である。60aは素材に垂直に加えられた打撃により、割れ円錐の原理が働いた剥片であり、打面が破砕している。３点は43T-72の西南隅の30cm²内にまとまって分布する。61は、同じ方向から連続して剥離された使用痕のある剥片と剥片の接合資料であり、61aの打面は弾けて欠けているが、61bを剥離する際には頭部調整が加えられている。下端部は器厚の薄さもあいまってか折れて欠ける。

黒曜石２

掻器（62）　２点が上下に分離した状態で、約15cmの距離を置く。底部付きの厚みのある素材下部を加工した掻器であり、刃部は背面側で成形された後、主要剥離面側で調整加工され、使用される。

使用痕のある剥片(63・64)　頭部調整された打面から剥離され、周縁に使用痕が廻る。

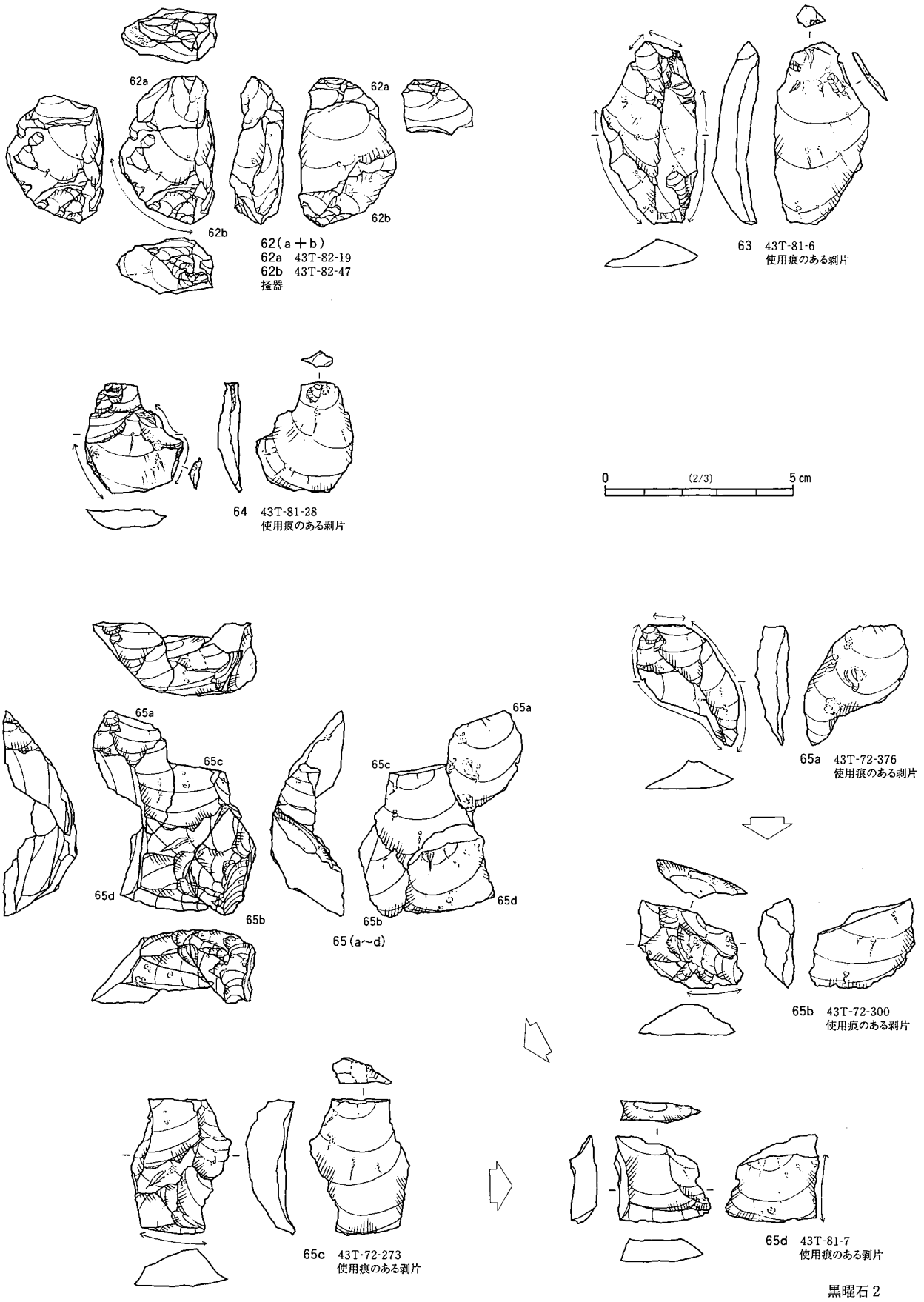
接合資料(65)　使用痕のある剥片４点の接合資料である。最長で5.6ｍ離れており、北東集中域から２点、南西集中域から１点、さらに南西の疎らな分布域から１点が出土している。４点全てに剥離時の打点はない。65aの背面には加撃時の衝撃による剥離痕がみられる。65b・65dは下部のみ遺存する。65cの打面の一部はガジリにより欠損している。上部の不在は石器素材作出を意図したものであろうか。

黒曜石３

ナイフ形石器(66)　基部は素材時の形状が活かされ、一側縁に加工が施されている。先端欠損。

黒曜石４

ナイフ形石器（67～69）　67～69は器長が19.8mm～23.2mmと小型であり、いずれも第４ブロックの北東集中域から出土している。67は、素材剥片の主要剥離面から斜めに加撃されたことにより、背面とこの剥離面との末端が鋭い刃部を作り出しているナイフ形石器である。基部加工は粗い。68は両側縁が末端で収束する剥片を素材とする。左側縁から先端にかけて加工される。基部は加工されない69は基部及び一側縁に刃潰し加工される。



第29図　第3文化層 第4ブロック出土石器(8)

第30図　第３文化層 第４ブロック出土石器(9)

二次加工のある剥片(70・71)　70は16.6㎜に満たない長楕円形をした剥片の側縁端部を加工したものである。加工はわずかで器形には影響しない。71は上部の折れた角柱状の剥片の先端部を二次加工している。

使用痕のある剥片(72・73)　72・73とも頭部調整され、主要剥離面と同一方向からの剥離痕があり、周縁部には使用痕がみられる。

剥片(74)　荒れた器面を整えるための剥片と思われる。

黒曜石５

黒曜石１～４とは違い、透明度が高い。薄く墨色がかるが、夾雑物は殆ど含まない。分布域は第４ブロッ

クの集中域から外れた西側に点在する。

ナイフ形石器(75)　横長剥片の打面部に主要剥離面側から急角度剥離で加工を施す。先端部は折れている。

二次加工のある剥片(76)　貝殻状剥片の縁辺に二次加工によって角を作り出したものであり、その尖端にはわずかに刃こぼれ痕がみられる。

使用痕のある剥片(77)　器長は15.6㎜、幅7.3㎜の小さな剥片であるが、縁辺には使用の際の刃こぼれにより鋸歯状に欠ける。

黒曜石６

黒曜石５と同様、第４ブロックの集中域からはずれた西側から７点が出土している。

剥片（78）　薄墨色と半透明の部分が縞状をなす黒曜石である。検出された７点のうち、78の剥片１点のみを実測した。

珪質泥岩１

剥片（79）　79の珪質泥岩剥片は灰白色で細粒。遺跡からこの１点のみの出土である。第４ブロックの北東集中域のやや東南寄りから出土した。主要剥離面は末端まで厚さが持続するヒンジ・フラクチャーとなっており、一部背面に回り込んでいる。

珪質頁岩１

削器（80）　80は黄色を帯びた灰白色の珪質頁岩であり、第４ブロックの西南集中域の中心部からこの１点のみ出土した。打面・頭部調整された剥片の両側縁辺から器厚を削ぐように加工され、下縁辺は二次加工の後、使用され、緩く抉れている。

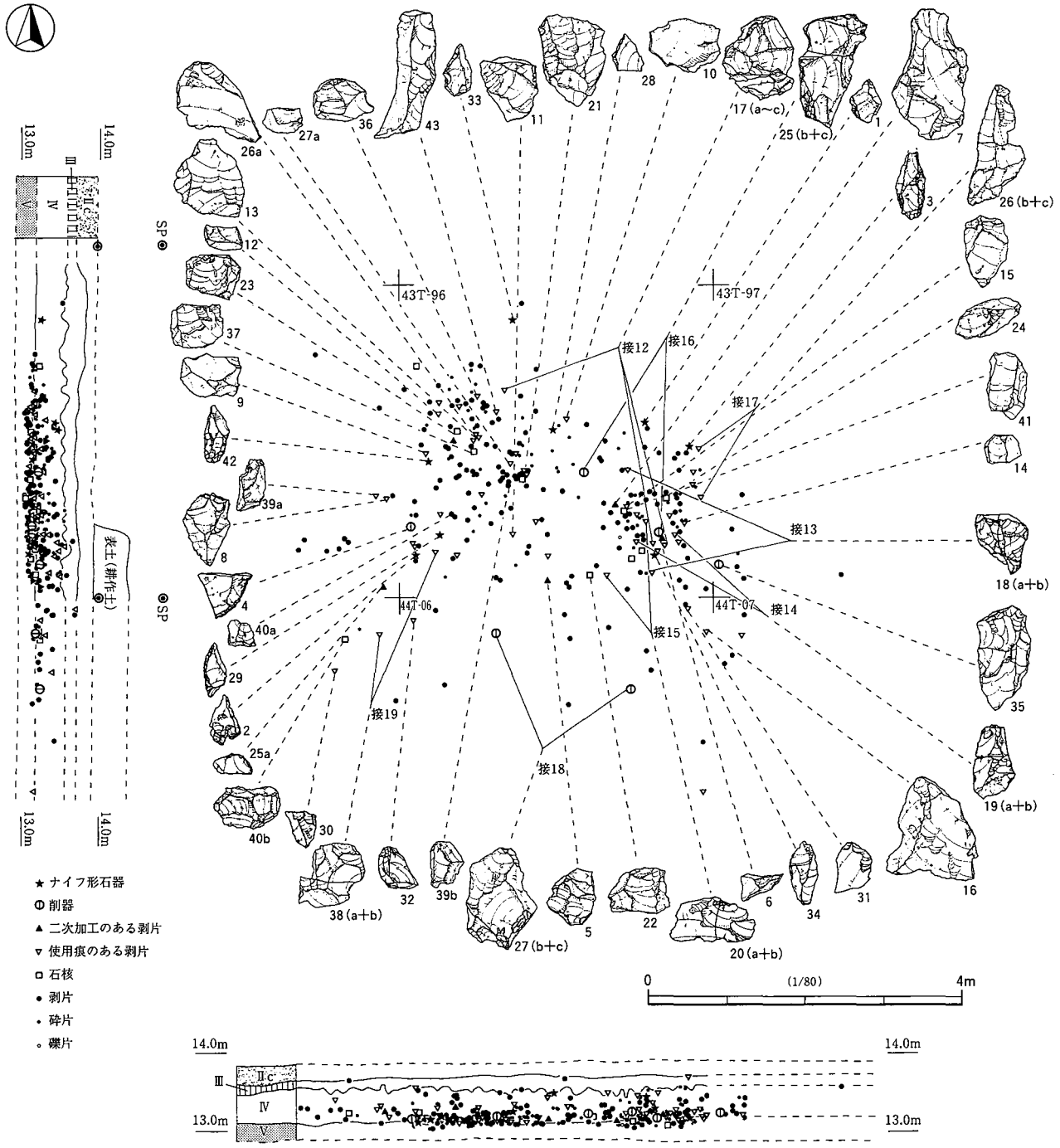
第７表　第３文化層 第４ブロック組成表

母岩名／器種	ナイフ形石器	削器	掻器	二次加工のある剥片	使用痕のある剥片	石核	剥片	砕片	礫片	点数	点数比	重量(g)	重量比
ガラス質黒色安山岩1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0.16%	0.38	0.04%
ガラス質黒色安山岩2	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.16%	15.05	1.55%
ガラス質黒色安山岩3	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0.16%	0.02	0.00%
流紋岩 1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.16%	33.83	3.48%
黒曜石 1	19	1	0	27(28)	56(62)	9(10)	285	158	0	555(563)	88.66%	760.62	78.31%
黒曜石 2	0	0	1(2)	0	9	0	10	5	0	25(26)	4.09%	57.80	5.95%
黒曜石 3	1	0	0	0	0	0	3	0	0	4	0.63%	4.74	0.49%
黒曜石 4	3	0	0	2	2	0	7	1	0	15	2.36%	14.68	1.51%
黒曜石 5	1	0	0	1	2	0	2	0	0	6	0.94%	6.48	0.67%
黒曜石 6	0	0	0	0	0	0	6	1	0	7	1.10%	4.19	0.43%
頁岩 1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0.16%	1.77	0.18%
頁岩 2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.16%	2.82	0.29%
頁岩 3	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.16%	52.92	5.45%
珪質泥岩 1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0.16%	3.24	0.33%
珪質頁岩 1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0.16%	9.39	0.97%
珪質頁岩 2	0	0	0	0	0	0	3	0	0	3	0.47%	1.86	0.19%
チャート 1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0.16%	1.52	0.16%
不明	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0.16%	0.01	0.00%
合計	24	2	1(2)	30(31)	71(77)	10(11)	318	167	3	626(635)	100.00%	971.32	100.00%

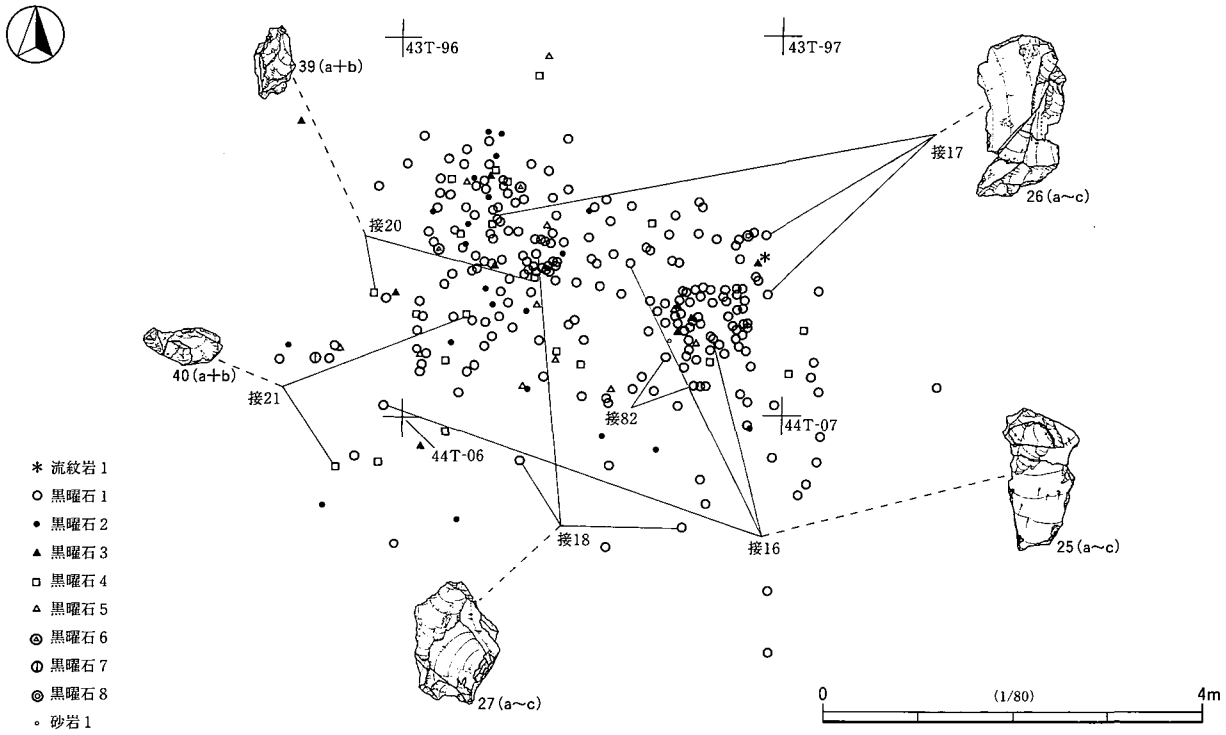
※（　）は出土点数

第５ブロック（第31～37図、第８表、図版３・10・11）

第５ブロックは遺跡南側の中央付近である43T-95～97、44T-05～07グリッドに位置し、標高14.56ｍを測る。石器は直径7.2ｍの円内に分布するが、分布密度の濃い範囲は43T-96グリッドのほぼ4㎡内であり、石器出土点数290点のうち288点が黒曜石である。他の２点は流紋岩の砕片、砂岩の礫片である。これらの平均出土レベルは13.231ｍである。



第31図　第３文化層 第５ブロック器種別分布



第32図　第３文化層 第５ブロック母岩別分布

組成上の器種はナイフ形石器８点、削器４点、二次加工のある剥片５点、使用痕のある剥片45点、石核10点、剥片157点、砕片51点、礫片１点である。

第４ブロック同様、黒曜石を肉眼観察により８母岩に細分したが、石基の色や透明感など共通する要素が多く、また同一の石塊の中にも外面と内面では様相が異なるため、この第５ブロック出土の黒曜石１～８の全てが同一母岩である可能性も否めない。さらに第４ブロックの黒曜石１～４とも酷似するが接合関係は確認されなかった。同じ地域から採取された石塊が持ち込まれ、それぞれのブロックに分配されたものと思われる。なお、第５ブロック出土の黒曜石はすべて高原山の甘湯沢に産を発する。

以下それぞれの特徴を記し、母岩別に記載する。

黒曜石１　石基には透明感はない。光沢のある黒色を基調とするが、赤褐色の靄状部分を含む。赤褐色～淡黄色の斑晶は直径0.5㎜～2.5㎜、１㎠につき３～６個含まれる。225点が出土し、ブロックの主体となる。

黒曜石２　石基・斑晶とも黒曜石１と同様であるが、石基の光沢が若干鈍く、灰色を帯びる。21点出土。

黒曜石３　石基・斑晶とも黒曜石１と同様であるが、灰色を帯び、斑晶が少ない。６点出土。

黒曜石４　石基・斑晶とも黒曜石１と同様であるが、赤褐色の靄はない。20点出土。

黒曜石５　石基は透明感のない、銀の粉を吹いたような濃灰～黒色。黒曜石１に似るが黒味は薄く、光沢も鈍い。斑晶は赤褐色。12点出土。

黒曜石６　石基・斑晶とも黒曜石１と同様だが、茶褐色の靄が満遍なく混じる。２点出土。

黒曜石７　石基・斑晶とも黒曜石１と同様だが、茶褐色の靄が混じる。１点出土。

黒曜石８　石基・斑晶とも黒曜石１と同様だが、灰茶褐色の靄が混じる。１点出土。

出土石器

母岩ごとに記載する。器種名に続く括弧内の数字は、挿図番号を示す。

黒曜石１

ナイフ形石器（１～３）　１・２は不定形な剥片の形状を利用したナイフ形石器であるが、３は横長剥片の打面部を主要剥離面側から加撃して刃潰しを行い、末端縁辺を刃部にしつらえたナイフ形石器である。先端は欠損する。

削器(4)　剥片の側縁に二次加工を施し、緩やかな弧を描くスクレーピングエッジを作出している。上部は折れた後、使用される。

二次加工のある剥片(５～７)　５・６は上部折れ、7は器長62.5㎜の比較的大きな剥片の縁辺が加工される。

使用痕のある剥片（８～20）　８・15・18・19は末端が収斂する剥片であり、使用痕は両側縁にみられる。９・10・20は器軸よりも横幅の広い板状の剥片であり、広い縁辺に使用痕が廻る。11・13・16は不定形剥片の縁辺の所々に刃こぼれ痕がみられる。12・14は丸みを帯びた貝殻状剥片である。14は下部折れにより、使用痕は寸断される。17は３点が接合しているがそれぞれに加工・使用痕は確認できなかったため、１点の剥片とみなした。17b+17cは、折り取りによる石器素材の作出が意図された可能性がある。

石核(21 ～ 24)　21の平面形はヘラ状であり、斜めに再生された打面から縦長の剥片が複数枚剥離されているのがみて取れるが、ここに至るまでには左側面→右側面→上面と、頻繁な打面の置き換えが行われている。22は剥片素材の石核であり、素材側面が打面とされる。23は打面転移の激しい石核であり、末端縁辺の広い貝殻状剥片の作出を目的とするものである。24は一面一剥離の様相を呈する。

接合資料(25 ～ 27)　25は削器と二次加工のある剥片の接合資料である。素材剥片の平坦面(背面・側面)を打面として、側面から横長、あるいは貝殻状の剥片が剥がされている。削器としての用途よりもむしろ小型剥片を作出するための石核か。25aはバルバースカーであるが、刃潰しのような急角度剥離が側縁に施されている。26は３点が接合しているが、組成上は使用痕のある剥片２点の接合資料であり、２点間の距離は約2.8ｍである。25a、25(b+c) とも頭部調整ののちに剥離され、鋭い縁辺には使用による刃こぼれが廻る。27は削器と削器調整剥片の接合資料である。削器調整剥片は第５ブロックの西側集中域、削器は分布が疎らになる南側から出土している。

黒曜石２

ナイフ形石器(28・29)　28は横長剥片を用い、打点対縁にブランティングが施される。基部は欠損する。刃部に使用痕あり。29は板状剥片を用いた二側縁加工のナイフ形石器である。

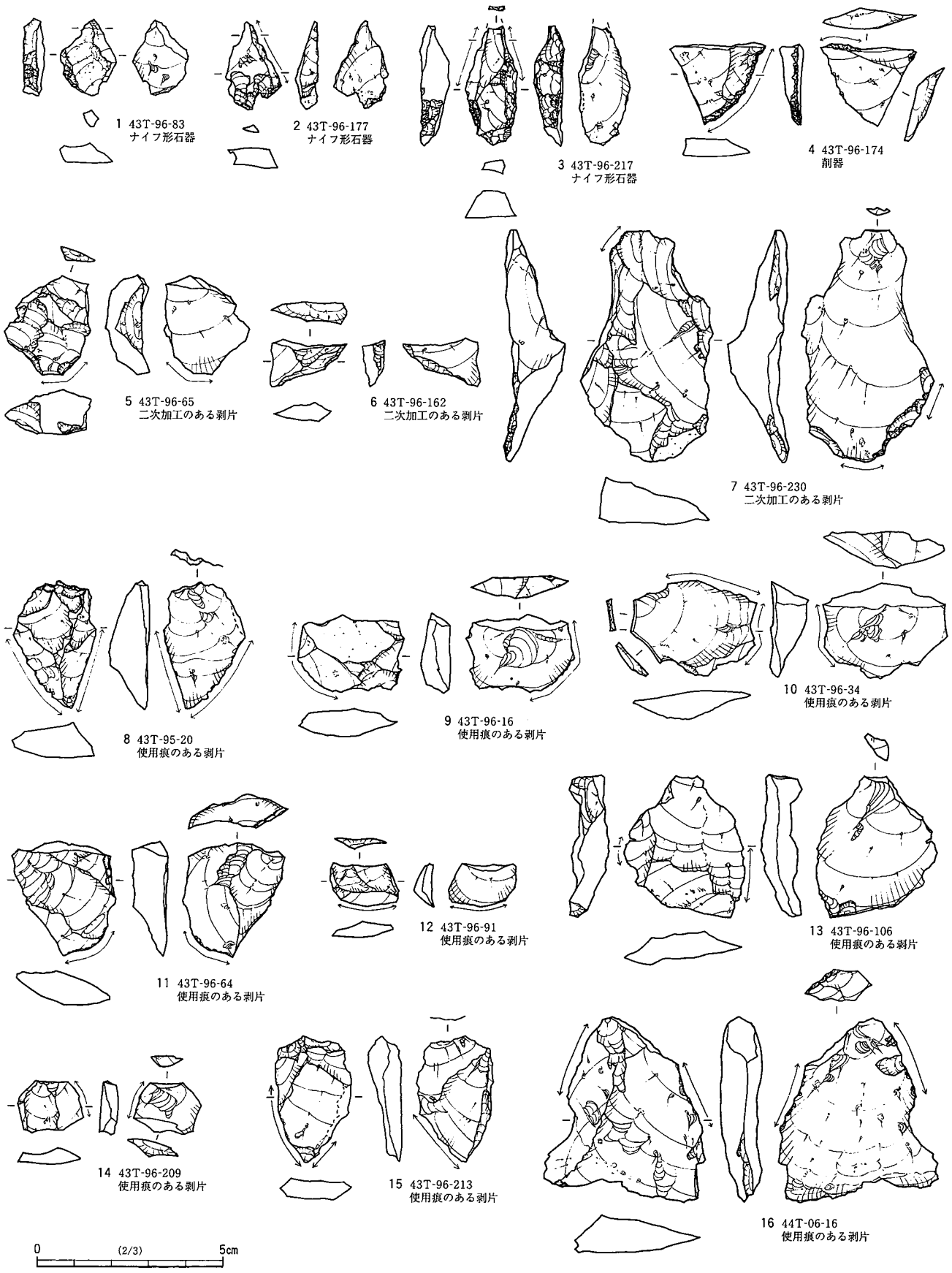
使用痕のある剥片(30・31)　背面に残る剥離痕は全て同一打面を加撃した痕であり、この30も同じ作業工程のうちに剥がされた剥片である。両側縁は鋭角な鋭い刃部となり、使用によると思われる微細剥離が観察される。31は風化した剥離面を打面に、頭部調整された後、加撃される。右側縁から下縁辺は、明確な区別なくなだらかな打点対縁をなし、使用される。

黒曜石３

使用痕のある剥片(32)　31と同様である。

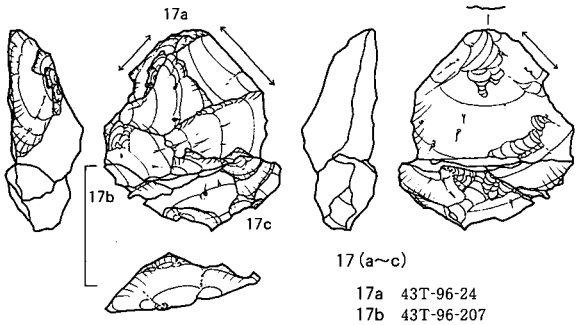
黒曜石４

ナイフ形石器(33・34)　側縁が末端で収束する剥片の一側縁を腹面側から加工している。打面部を基部に設定しているが加工は甘い。34は横長剥片が素材である。打面部は急角度剥離によってブランティン



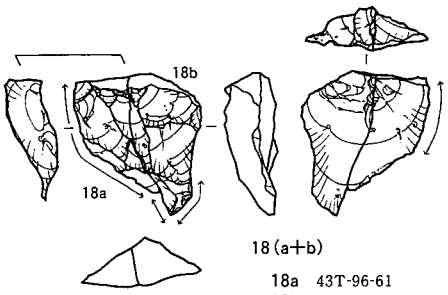
黒曜石 1

第33図　第３文化層 第５ブロック出土石器(1)



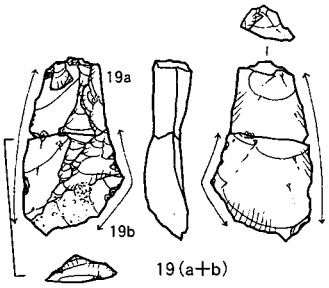
17(a～c)

17a　43T-96-24
17b　43T-96-207
17c　43T-96-208
使用痕のある剥片



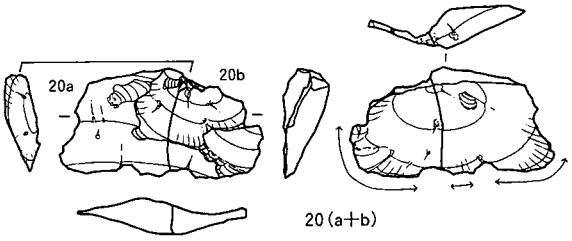
18(a+b)

18a　43T-96-61
18b　43T-96-54
使用痕のある剥片



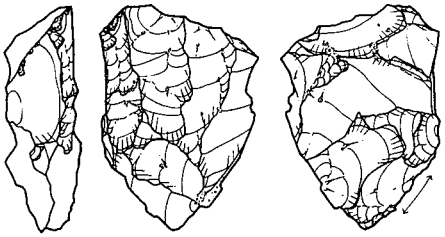
19(a+b)

19a　43T-96-166
19b　43T-96-56
使用痕のある剥片

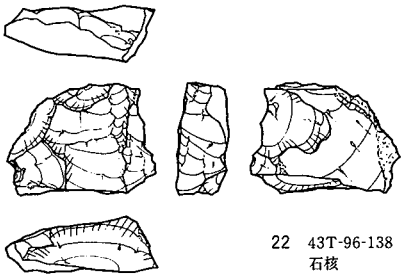


20(a+b)

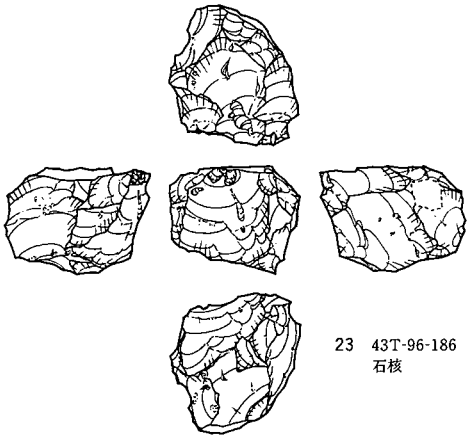
20a　43T-96-52
20b　43T-96-211
使用痕のある剥片



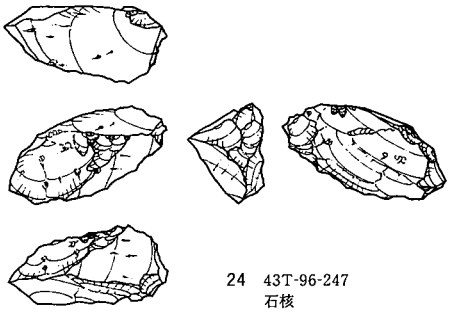
21　43T-96-114
石核



22　43T-96-138
石核



23　43T-96-186
石核

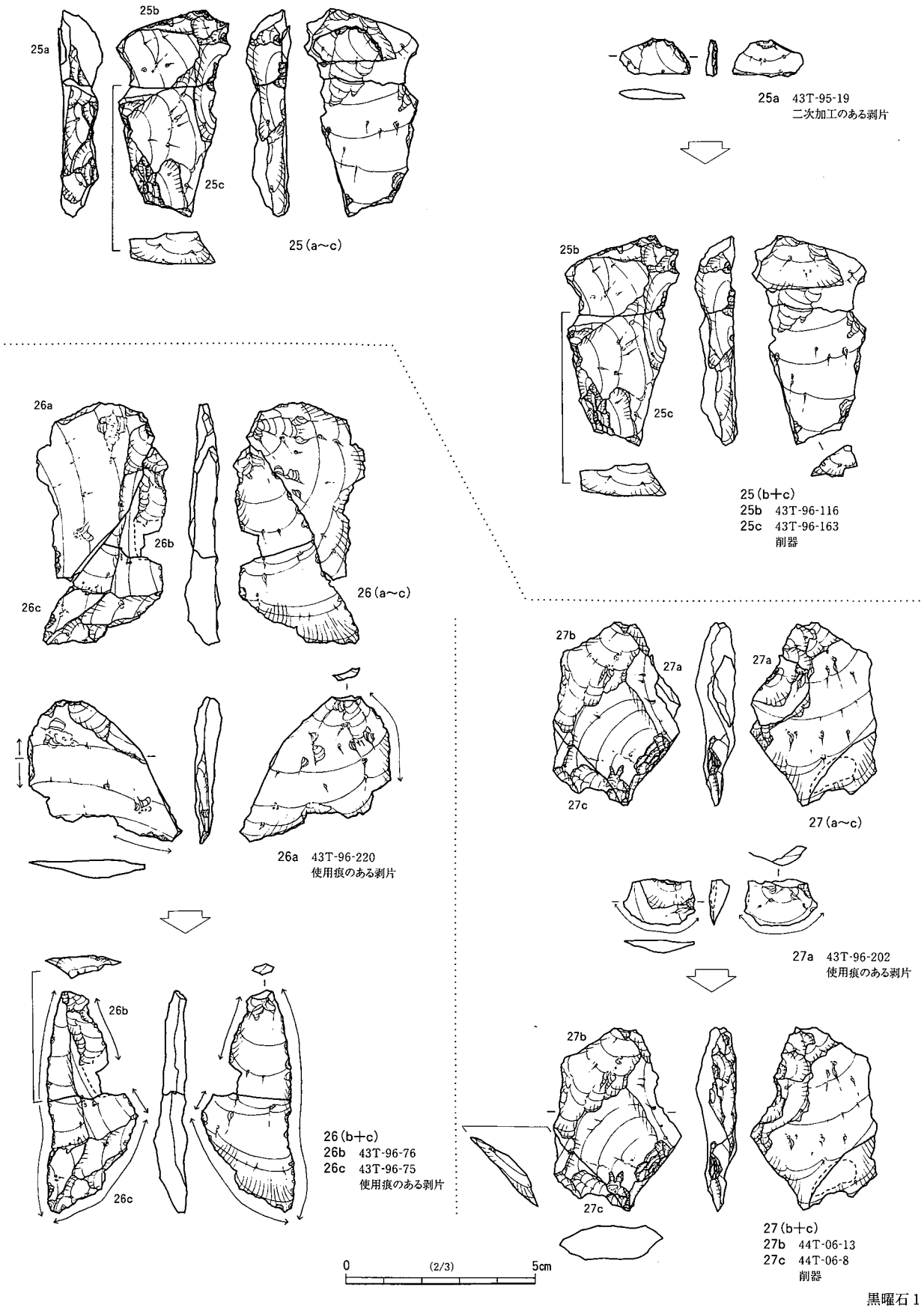


24　43T-96-247
石核

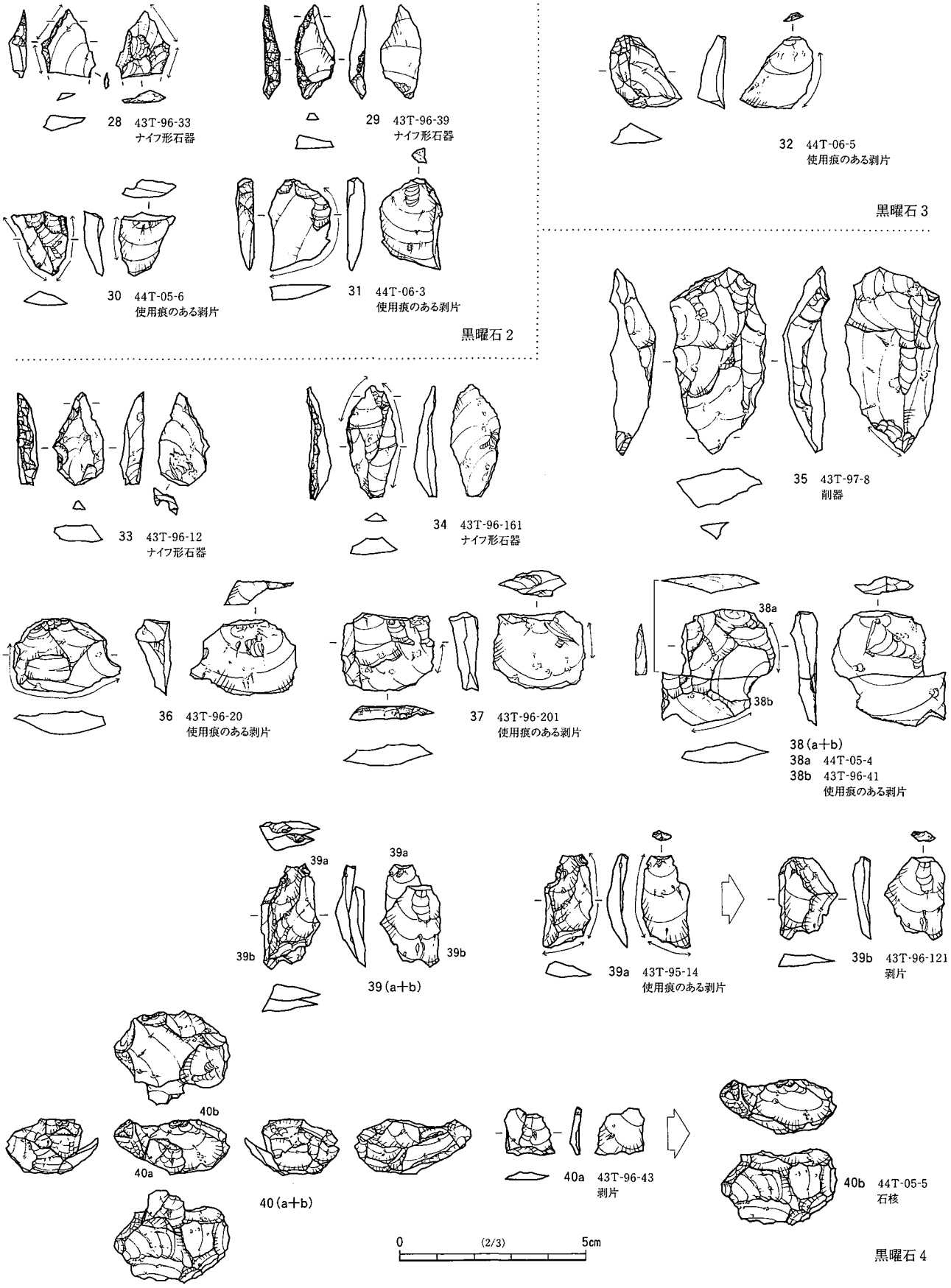
0　(2/3)　5cm

黒曜石 1

第34図　第３文化層 第５ブロック出土石器(2)



第35図　第３文化層 第５ブロック出土石器(3)



第36図　第３文化層 第５ブロック出土石器(4)

グされ、木葉形をなす。基部わずかに欠損し、周縁には使用痕が廻る。

削器（35） 左側縁は67°～70°の粗い加工（石核としての剥離痕か）があり、下端は尖端が意識された抉入加工が施され、使用痕が残される。縁辺を削器、端部は錐として機能していた可能性がある。

使用痕のある剥片（36～38） 36～38は頭部調整された打面から穿たれた対縁の広い使用痕のある剥片である。

接合資料（39・40） 39は1.6m離れた剥片2点が接合した。39aが剥離された後、39bの打面が作出されるが、その間には2面以上の剥離作業が行われている。39aの縁辺には使用痕がみられる。40は石核と剥片の2点接合資料である。厚みのある素材の外周から小型の貝殻状剥片が少なくとも6片以上作出されている。

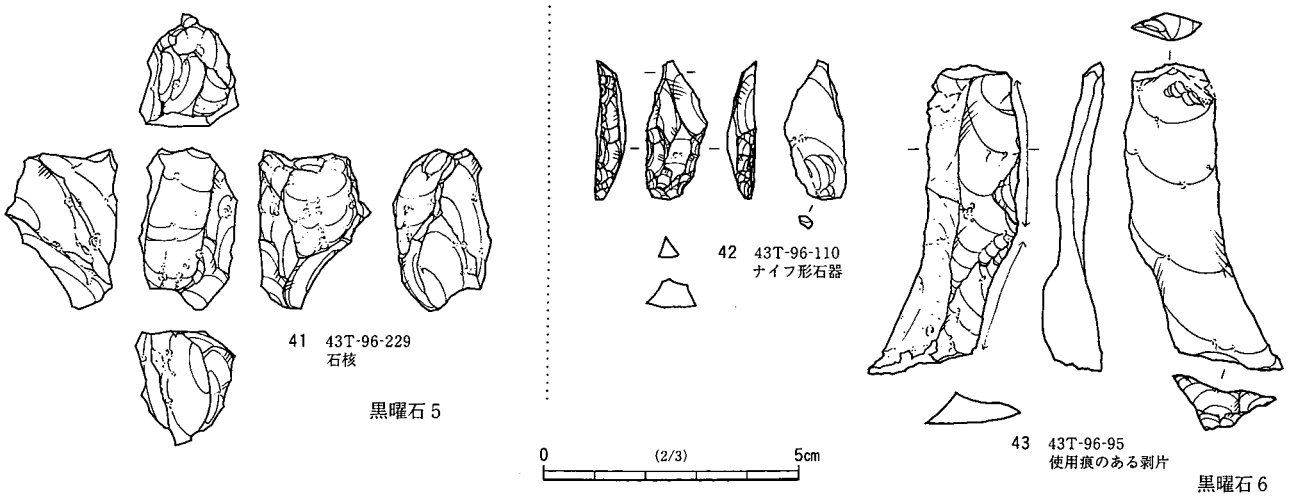
黒曜石5

石核（41） 頻繁な打面転移が行われた石核である。剥離作業時の調整痕は認められない。

黒曜石6

ナイフ形石器（42） 横長剥片を素材にした二側縁加工であり、68°～78°で調整される。刃部角は51°であるが使用痕は看取されない。

使用痕のある剥片（43） 調整のない切子打面から剥離された石刃であり末端近くに最大幅を持つ。下端は折れて欠損する。右側縁には隈なく使用痕がみられる。



第37図 第3文化層 第5ブロック出土石器(5)

第8表 第3文化層 第5ブロック組成表

母岩名／器種	ナイフ形石器	削器	二次加工のある剥片	使用痕のある剥片	石核	剥片	砕片	礫片	点数	点数比	重量(g)	重量比
流紋岩 1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0.34%	0.11	0.02%
黒曜石 1	3	3(5)	4	32(38)	8	119	48	0	217(225)	77.59%	399.16	76.50%
黒曜石 2	2	0	1	2	0	14	2	0	21	7.24%	15.19	2.91%
黒曜石 3	0	0	0	2	0	4	0	0	6	2.07%	5.31	1.02%
黒曜石 4	2	1	0	6(7)	1	8	1	0	19(20)	6.90%	57.85	11.09%
黒曜石 5	0	0	0	1	1	10	0	0	12	4.14%	28.88	5.54%
黒曜石 6	1	0	0	1	0	0	0	0	2	0.69%	10.57	2.03%
黒曜石 7	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0.34%	0.85	0.16%
黒曜石 8	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0.34%	0.11	0.02%
砂岩 1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.34%	3.72	0.71%
合計	8	4(6)	5	44(51)	10	157	52	1	281(290)	100.00%	521.75	100.00%

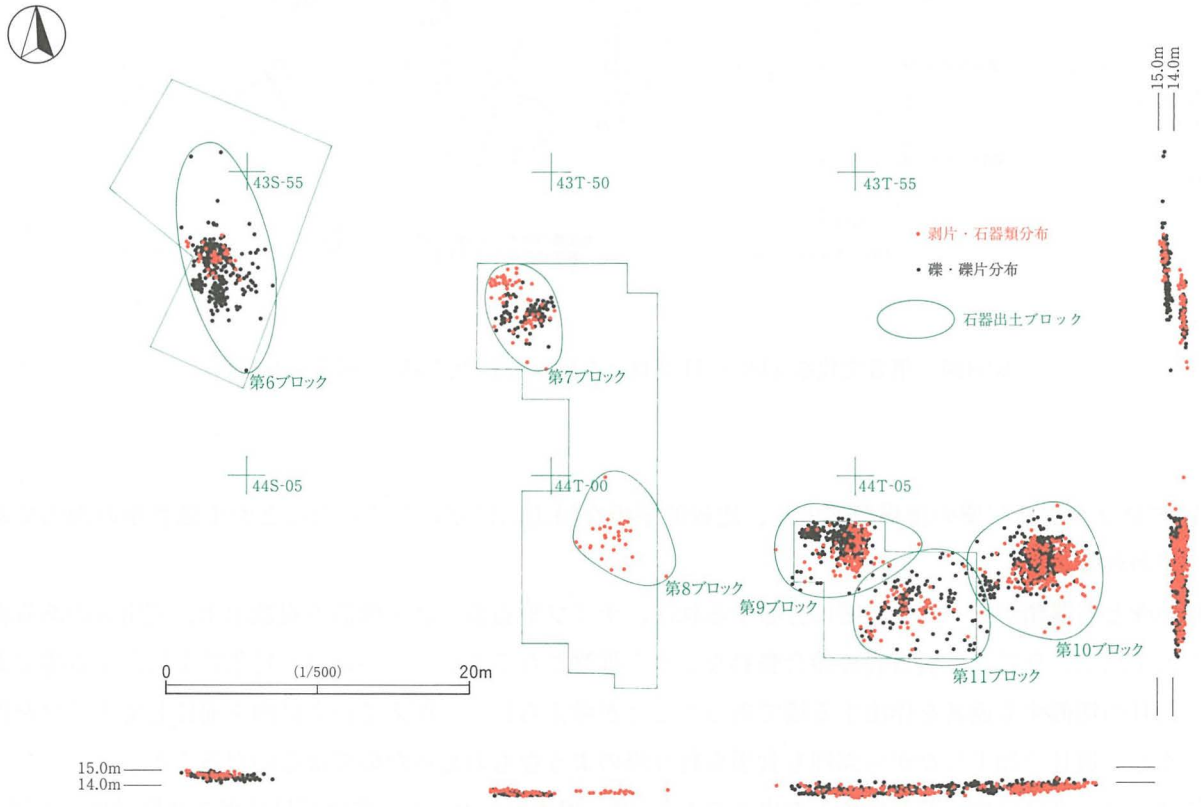
※（ ）は出土点数

第６～11ブロックについて

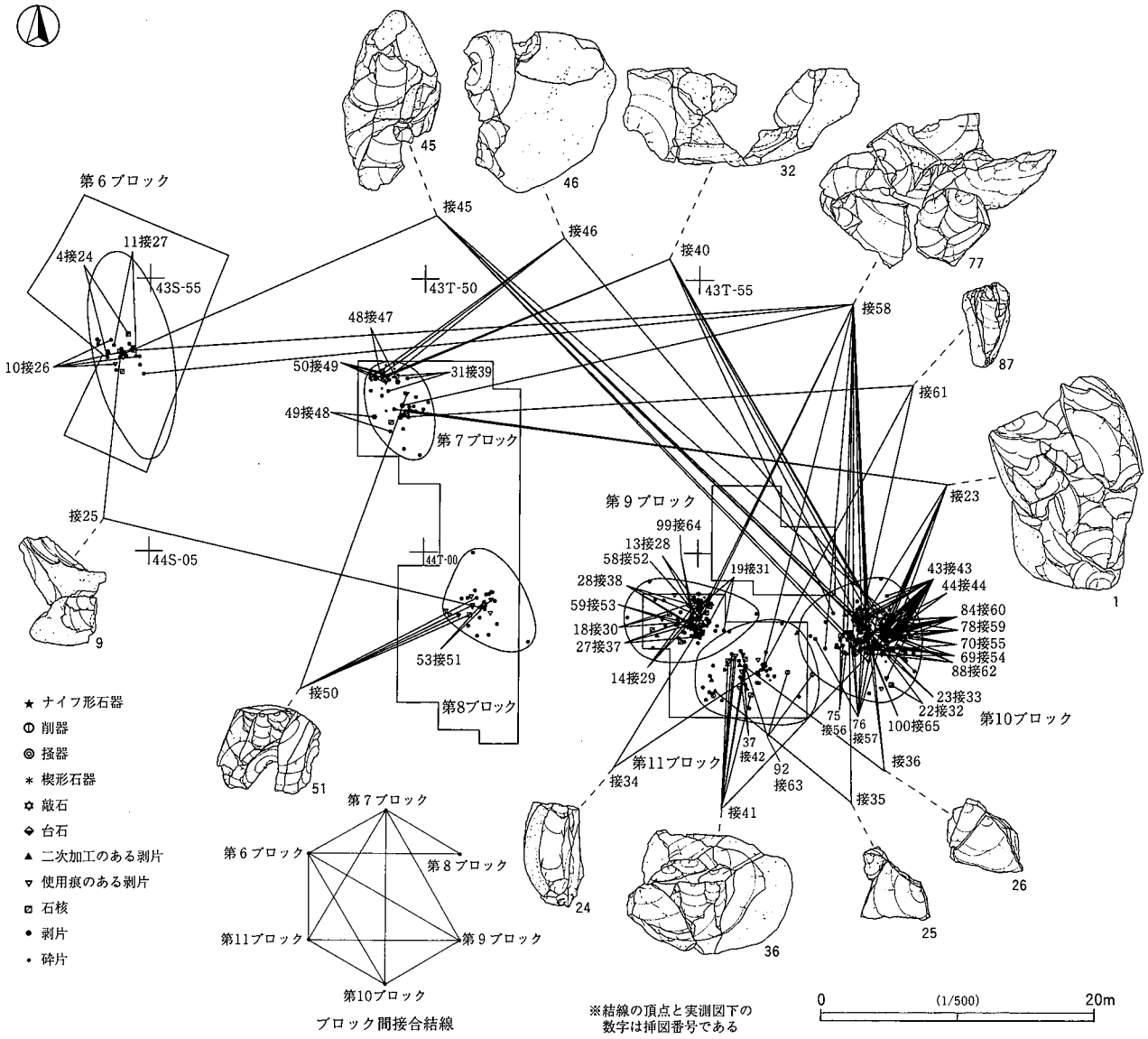
第６～11ブロックから出土した遺物の総数は2,538点であり、剥片・石器類515点のうち212点が、また礫・礫片では2,023点のうち1,149点が接合した。礫・礫片の殆どは被熱による変色が見られ、石材分類に困難を来たすものも多かった。円礫が熱を受けて脆くなり自然破砕したもの、均一化を図るために砕いたものの別は定かではないが、原形を推測しながら全ての礫片を母岩分けし、石材別にまとめた。それぞれの出土点数は組成表を参照されたい(第11表)。

この場(ブロック)における剥片・石器類と礫・礫片類の接合関係であるが、剥片類は市野谷二反田遺跡の東側に位置する第10ブロックを拠点に石のやり取りが行われ、各ブロック間に複数の接合資料が存在する。隣接するブロック間のみでの接合関係は５個体(24～26、36、51)であるが、40メートル離れた第7、10ブロック間で接合するものも５個体(１、32、46、77、87)存在する。接合資料の最長距離は挿図番号45(接合番号45)、挿図番号77(接合番号58)の約60ｍである。礫・礫片はその半数以上が接合したにもかかわらず、隣接するブロック間か最長約40ｍの距離内の接合であり、母岩の分配範囲は剥片・石器類と比べて狭い(第38～40図)。

また、第10ブロックから出土した剥片・石器類と礫・礫片の数は他ブロックと比べ圧倒的に多く、剥片・石器類の238点は次に多い第９ブロックの101点の２倍以上であり、礫・礫片類の843点は次に続く第６ブロックの533点より300点以上も多い。これは遺跡の東側から南方に流れる川(牛飼沢)の影響、つまり、



第38図　第３文化層 第６～11ブロック石器分布



第39図　第３文化層 第6～11ブロック出土石器 接合状況(剥片・石器類)

第10ブロックが河床礫の獲得源に近く、比較的平坦な縁辺部に立地していたことが土地利用の理由であると思われる。

被熱礫と石器類が同一面上で密に分布する状況、ナイフ形石器、掻・削器の複数出土、使用痕のある剥片の大量出土、良質な珪質頁岩の接合資料などから推察されることの一つには、対象物を切截する場であり、尚且つ切截する道具を作出する場であったことが考えられる。例えていえば肉を前にしてナイフを作るような、道具を加工しながら調理も食事も行う場のようなものだったのではないだろうか。

第８ブロックは剥片・石器類のみの出土であり、礫・礫片は伴わない。使用石材はガラス質黒色安山岩・珪質頁岩・玉髄(メノウ含む)に限られ、31点中８点に使用痕が認められる。

以下、出土石器を中心に各ブロックの特徴を探る。

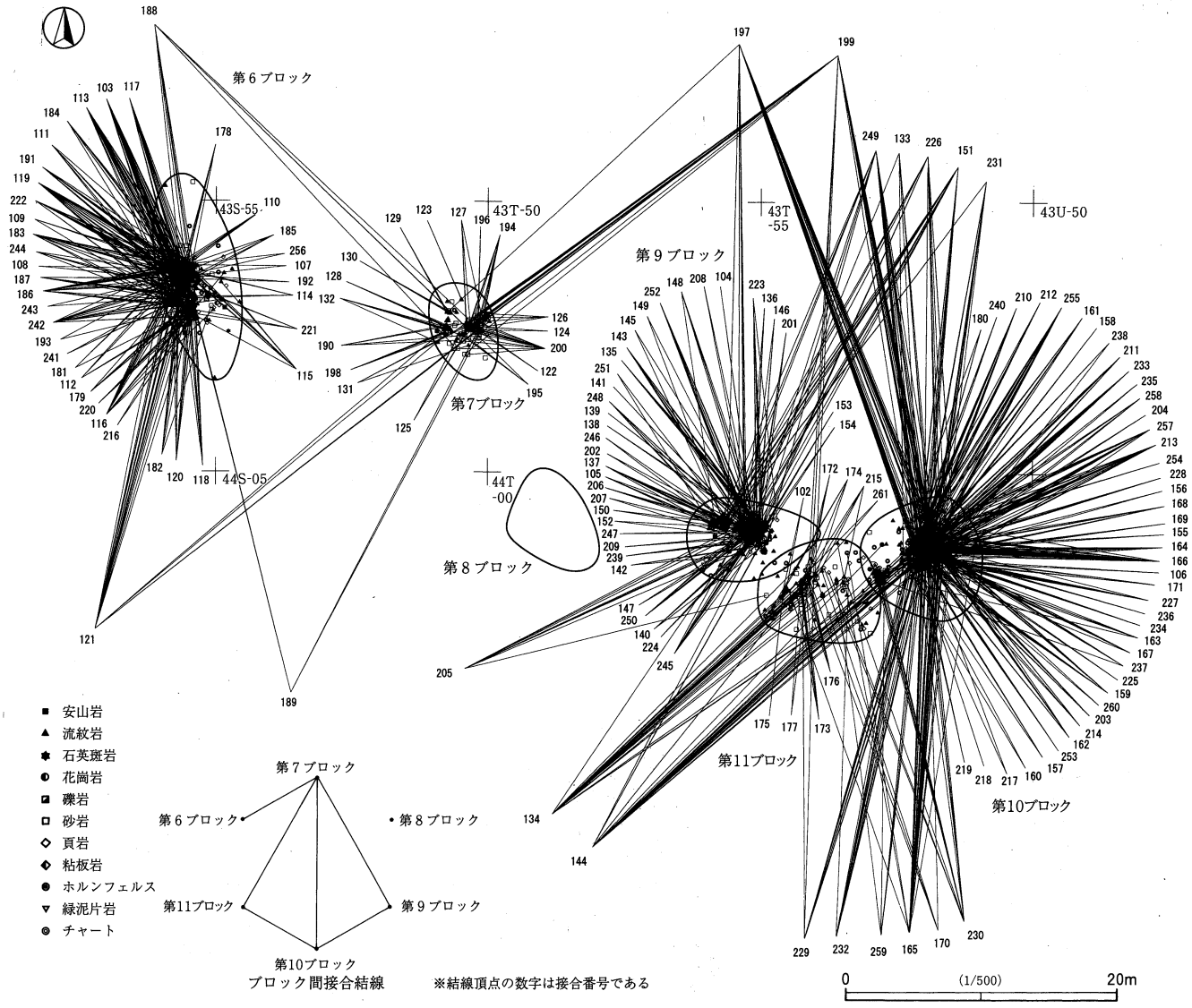
第９表　第３文化層 第６～11ブロック(剥片・石器類)組成表(1)

母岩名	ブロック	ナイフ形石器	削器	掻器	楔形石器	二次加工のある剥片	使用痕のある剥片	石核	剥片	砕片	敲石	台石	点数	点数比	重量(g)	重量比
ガラス質黒色安山岩1	6	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.19%	3.81	0.06%
	7	0	0	0	0	0	0	1	8	0	0	0	9	1.75%	153.73	2.49%
	10	0	0	2	0	1	0	0	4(5)	0	0	0	7(8)	1.55%	130.08	2.11%
ガラス質黒色安山岩2	6	0	0	1	0	0	0	2	1	0	0	0	4	0.78%	60.13	0.97%
ガラス質黒色安山岩3	6	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	2	0.39%	5.86	0.09%
ガラス質黒色安山岩4	6	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.19%	4.00	0.06%
ガラス質黒色安山岩5	6	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.19%	7.24	0.12%
ガラス質黒色安山岩6	7	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.19%	13.95	0.23%
ガラス質黒色安山岩7	7	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0.19%	83.85	1.36%
ガラス質黒色安山岩8	10	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.19%	5.29	0.09%
ガラス質黒色安山岩9	6	0	0	0	0	0	1	0	9	0	0	0	10	1.94%	52.51	0.85%
	8	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.19%	7.23	0.12%
ガラス質黒色安山岩10	9	0	0	0	0	0	2	0	10	0	0	0	12	2.33%	141.80	2.30%
ガラス質黒色安山岩11	8	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	3	0.58%	14.49	0.23%
	9	0	0	1	0	0	0	3	25	1	0	0	30	5.83%	196.12	3.18%
	10	1	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	3	0.58%	45.73	0.74%
ガラス質黒色安山岩12	6	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.19%	3.01	0.05%
	7	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0.19%	12.20	0.20%
	9	0	0	1	0	2	0	5	14	0	0	0	22	4.27%	319.95	5.18%
	10	0	0	0	0	1	0	1(2)	19(21)	1	0	0	22(25)	4.85%	90.68	1.47%
	11	0	0	0	0	1	0	0	13	1	0	0	15	2.91%	38.74	0.63%
ガラス質黒色安山岩13	7	0	0	0	0	0	0	1	3(4)	1	0	0	5(6)	1.17%	53.21	0.86%
	10	0	0	0	0	0	0	2	7	0	0	0	9	1.75%	148.71	2.41%
ガラス質黒色安山岩14	9	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2	0.39%	49.40	0.80%
トロトロ石1	7	0	0	0	0	0	0	0	8	1	0	0	9	1.75%	22.56	0.37%
安山岩1	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1(2)	0	1(2)	0.39%	431.24	6.99%
流紋岩1	7	0	0	0	0	1	0	0	2	0	0	0	3	0.58%	44.98	0.73%
	10	0	0	0	0	1	0	0	8	0	0	0	9	1.75%	132.95	2.15%
流紋岩2	7	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.19%	2.51	0.04%
流紋岩3	9	1	0	0	0	1	0	1	2	0	0	0	5	0.97%	45.35	0.73%
流紋岩4	10	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0.19%	48.13	0.78%
	11	0	0	1	0	1	1	3(4)	5	0	0	0	11(12)	2.33%	81.80	1.33%
流紋岩5	11	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2	0.39%	17.52	0.28%
流紋岩6	11	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.19%	20.60	0.33%
黒曜石1	11	0	0	0	0	1	0	0	3	0	0	0	4	0.78%	16.40	0.27%
黒曜石2	11	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	2	0.39%	0.68	0.01%
黒曜石3	9	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.19%	0.06	0.00%
砂岩1	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.19%	1270.00	20.58%
砂岩2	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0.19%	200.81	3.25%
砂岩3	10	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.19%	20.03	0.32%
頁岩1	9	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0.19%	12.73	0.21%
珪質頁岩1	6	0	0	0	0	0	1	0	2	0	0	0	3	0.58%	47.24	0.77%
	10	0	0	1	0	7(8)	6	2	17(18)	2	0	0	35(37)	7.18%	386.95	6.27%
珪質頁岩2	6	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0.19%	5.88	0.10%
	9	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.19%	6.06	0.10%
	10	0	0	0	0	2	3	0	5	0	0	0	10	1.94%	53.91	0.87%
珪質頁岩3	7	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	3	0.58%	148.73	2.41%
	10	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0.19%	12.69	0.21%
珪質頁岩4	7	0	0	1	0	0	0	0	1	1	0	0	3	0.58%	16.03	0.26%
	8	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	2	0.39%	3.07	0.05%
	10	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0.19%	1.76	0.03%
珪質頁岩5	7	0	0	1	0	0	1	1	4	1	0	0	8	1.55%	19.56	0.32%
珪質頁岩6	7	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	2	0.39%	2.60	0.04%
	8	0	0	0	0	0	2	1	2	0	0	0	5	0.97%	33.45	0.54%

第10表　第３文化層 第６～11ブロック(剥片・石器類)組成表(2)

母岩名	ブロック	ナイフ形石器	削器	掻器	楔形石器	二次加工のある剥片	使用痕のある剥片	石核	剥片	砕片	敲石	台石	点数	点数比	重量(g)	重量比
珪質頁岩7	8	0	0	0	0	1	1	1	8	0	0	0	11	2.14%	44.97	0.73%
珪質頁岩8	8	0	0	0	0	0	3	0	1	0	0	0	4	0.78%	7.55	0.12%
珪質頁岩9	9	0	1	0	0	1	0	0	3	1	0	0	6	1.17%	54.99	0.89%
珪質頁岩10	9	0	0	0	0	0	0	1	2	0	0	0	3	0.58%	26.82	0.43%
珪質頁岩11	9	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0.19%	43.46	0.70%
珪質頁岩12	6	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.19%	18.17	0.29%
	9	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	2	0.39%	6.08	0.10%
	10	1	0	0	0	1	10	0	12	1	0	0	25	4.85%	51.31	0.83%
珪質頁岩13	6	0	0	0	0	0	0	1(2)	1	0	0	0	2(3)	0.58%	24.55	0.40%
	7	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.19%	25.66	0.42%
	9	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2	0.39%	10.31	0.17%
	10	1	0	0	0	4(7)	5(6)	2	16(17)	0	0	0	28(33)	6.41%	168.06	2.72%
	11	0	0	0	1	0	2	0	1	0	0	0	4	0.78%	7.97	0.13%
珪質頁岩14	10	0	0	0	0	3	1	1	2	0	0	0	7	1.36%	94.97	1.54%
珪質頁岩15	10	0	0	0	0	0	2	0	5	0	0	0	7	1.36%	18.36	0.30%
	11	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	2	0.39%	4.78	0.08%
珪質頁岩16	10	0	1	0	0	2	0	3(4)	32	3	0	0	41(42)	8.16%	488.60	7.92%
珪質頁岩17	10	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0.19%	17.96	0.29%
珪質頁岩18	7	0	0	1	0	0	0	0	2	0	0	0	3	0.58%	15.62	0.25%
	10	0	0	0	0	0	1	0	2	0	0	0	3	0.58%	20.75	0.34%
	11	0	0	0	0	0	1	0	4	0	0	0	5	0.97%	6.69	0.11%
珪質頁岩19	10	0	0	0	0	1	0	0	3(4)	0	0	0	4(5)	0.97%	41.56	0.67%
珪質頁岩20	10	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.19%	3.81	0.06%
珪質頁岩21	9	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.19%	28.50	0.46%
珪質頁岩22	10	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0.19%	3.70	0.06%
珪質頁岩23	6	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.19%	0.75	0.01%
珪質頁岩24	7	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.19%	1.85	0.03%
珪質頁岩25	8	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2	0.39%	7.23	0.12%
珪質頁岩26	8	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.19%	2.93	0.05%
珪質頁岩27	8	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.19%	0.61	0.01%
珪質頁岩28	11	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2	0.39%	0.90	0.01%
横岡産珪質頁岩1	10	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0.19%	19.65	0.32%
硬質頁岩1	9	0	0	0	0	0	1	1	2	0	0	0	4	0.78%	5.46	0.09%
粘板岩1	11	0	1(2)	0	0	0	0	0	2	0	0	0	3(4)	0.78%	45.96	0.74%
チャート1	6	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0.19%	1.16	0.02%
チャート2	11	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	2	0.39%	7.90	0.13%
チャート3	11	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.19%	0.28	0.00%
チャート4	9	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2	0.39%	3.86	0.06%
玉髄(メノウ含む)1	6	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0.19%	9.59	0.16%
	8	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.19%	5.96	0.10%
玉髄(メノウ含む)2	9	0	0	0	0	0	0	1	3	0	0	0	4	0.78%	22.75	0.37%
	10	0	0	0	0	0	1	1	2	0	0	0	4	0.78%	46.84	0.76%
	11	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0.19%	4.50	0.07%
石英1	7	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0	0	5	0.97%	0.53	0.01%
合計		5	4(5)	12	1	41(45)	60(61)	39(43)	312(319)	20	2(3)	1	497(515)	100.00%	6171.91	100.00%

※（　）は出土点数



第40図　第３文化層 第６～11ブロック礫・礫片接合状況(石材別)

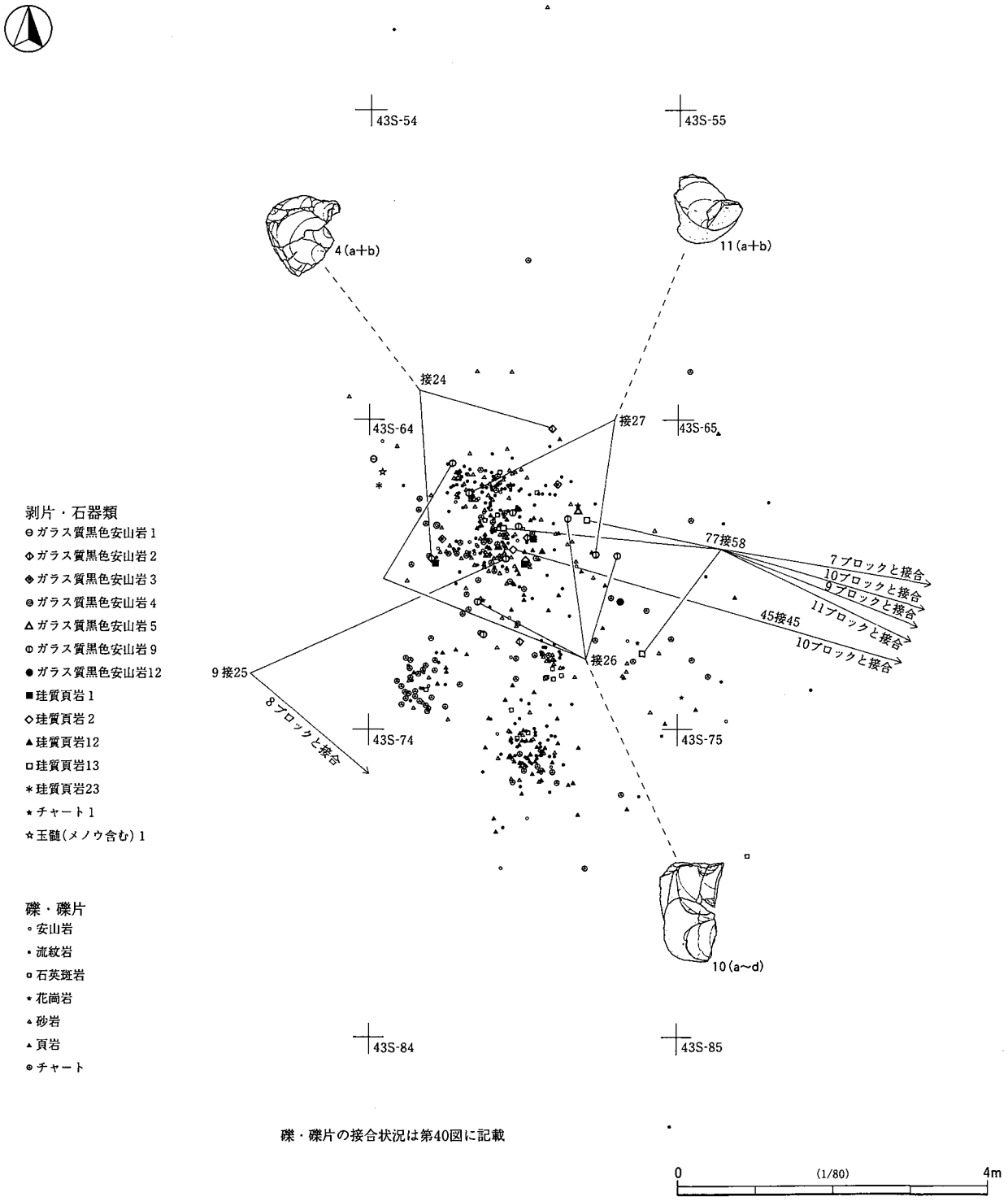
第11表　第３文化層 第６～11ブロック礫・礫片石材別組成表

器種/石材		安山岩	流紋岩	石英斑岩	花崗岩	礫岩	砂岩	頁岩	粘板岩	ホルンフェルス	緑泥片岩	チャート	合計
礫	点数	6	31	0	0	1	8	1	0	1	0	2	50
	点数比	0.30%	1.53%	–	–	0.05%	0.40%	0.05%	–	0.05%	–	0.10%	2.47%
	重量(g)	1761.42	8598.60	–	–	99.97	2529.86	189.60	–	259.33	–	8.90	13447.68
	重量比	2.58%	12.58%	–	–	0.15%	3.70%	0.28%	–	0.38%	–	0.01%	19.67%
礫片	点数	31(63)	297(730)	5(19)	3	0	249(506)	148(274)	1(3)	8(10)	1	241(364)	984(1973)
	点数比	3.11%	36.09%	0.94%	0.15%	–	25.01%	13.54%	0.15%	0.49%	0.05%	17.99%	97.53%
	重量(g)	2099.22	29145.24	1853.36	2.86	–	12689.31	4432.84	22.56	627.91	1.95	4054.87	54930.12
	重量比	3.07%	42.65%	2.71%	0.00%	–	18.57%	6.49%	0.03%	0.92%	0.00%	5.93%	80.38%
合計点数		37(69)	328(761)	5(19)	3	1	257(514)	149(275)	1(3)	9(11)	1	243(366)	1034(2023)
合計重量(g)		3860.64	37743.84	1853.36	2.86	99.97	15219.17	4622.44	22.56	887.24	1.95	4063.77	68377.80

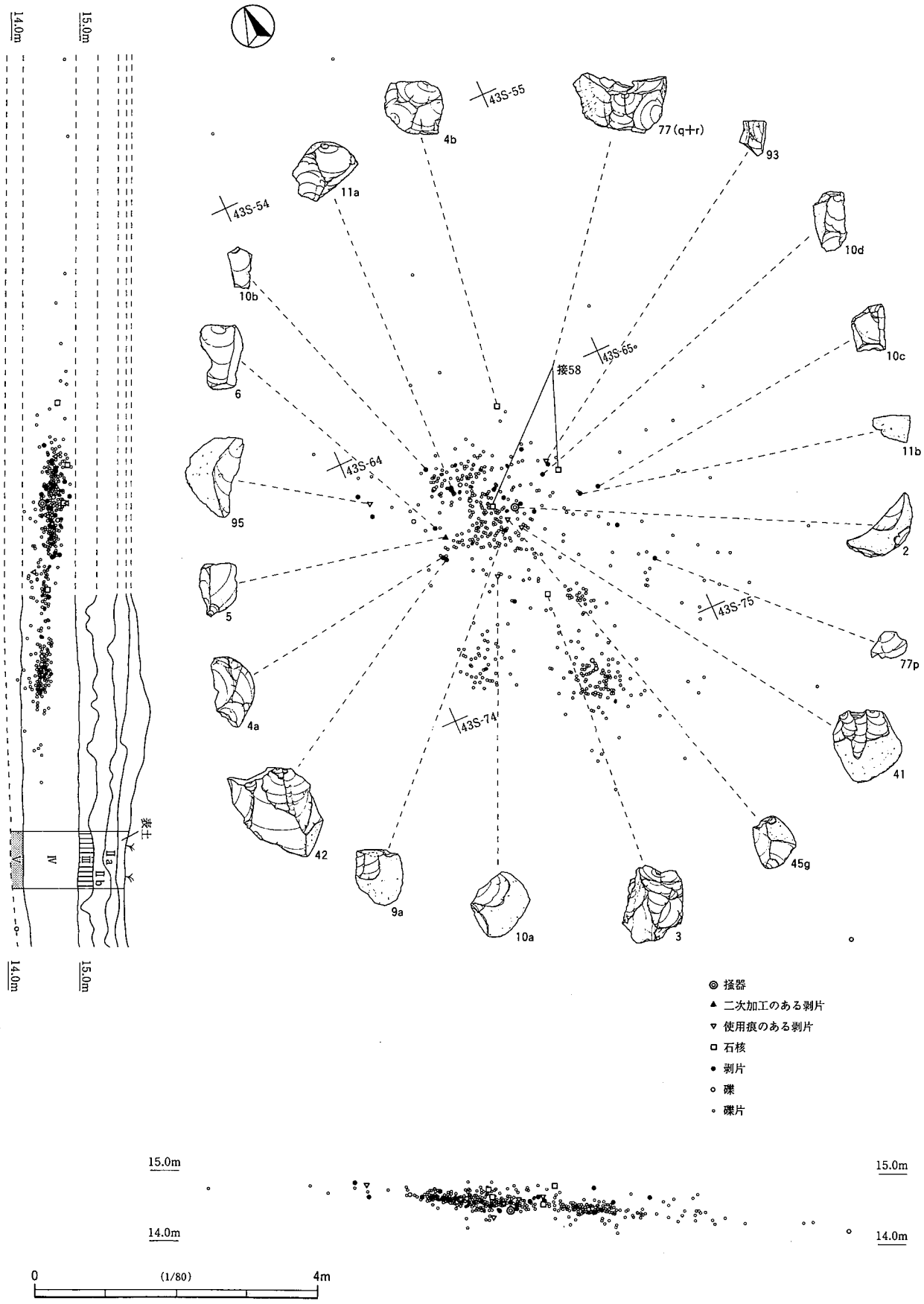
※（　）は出土点数

第６ブロック（第41・42図、第12表、図版４・12～21）

当遺跡の南西、標高15.8ｍに位置し、東南に向かって下降する。石器は14.136ｍ～14.861ｍの72.5cmの間に包含され、地形の傾斜に沿って直線状に分布する。平均出土レベルは15.443ｍである。剥片・石器類31点と礫・礫片類533点は出土層を一にするが、南側は礫・礫片のみ分布する。剥片・石器類の器種組成



第41図　第３文化層 第６ブロック母岩別分布



第42図　第３文化層 第６ブロック器種別分布

は掻器・二次加工のある剥片が各々１点ずつ、使用痕のある剥片５点、石核３点、剥片20点である。石材はガラス質黒色安山岩20点、珪質頁岩８点、チャート・玉髄(メノウ含む)各々１点ずつ出土した。ブロック内のみの接合は３個体、ブロック間接合も３個体あり、第６～11ブロックの全てに接合関係を持つ。

第12表　第３文化層 第６ブロック組成表

母岩名／器種	掻器	二次加工のある剥片	使用痕のある剥片	石核	剥片	点数	点数比	重量(g)	重量比
ガラス質黒色安山岩1	0	0	0	0	1	1	3.23%	3.81	1.56%
ガラス質黒色安山岩2	1	0	0	2	1	4	12.90%	60.13	24.65%
ガラス質黒色安山岩3	0	1	0	0	1	2	6.45%	5.86	2.40%
ガラス質黒色安山岩4	0	0	0	0	1	1	3.23%	4.00	1.64%
ガラス質黒色安山岩5	0	0	0	0	1	1	3.23%	7.24	2.97%
ガラス質黒色安山岩9	0	0	1	0	9	10	32.26%	52.51	21.53%
ガラス質黒色安山岩12	0	0	0	0	1	1	3.23%	3.01	1.23%
珪質頁岩1	0	0	1	0	2	3	9.68%	47.24	19.37%
珪質頁岩2	0	0	1	0	0	1	3.23%	5.88	2.41%
珪質頁岩12	0	0	0	0	1	1	3.23%	18.17	7.45%
珪質頁岩13	0	0	0	1(2)	1	2(3)	9.68%	24.55	10.07%
珪質頁岩23	0	0	0	0	1	1	3.23%	0.75	0.31%
チャート1	0	0	1	0	0	1	3.23%	1.16	0.48%
玉髄（メノウ含む）1	0	0	1	0	0	1	3.23%	9.59	3.93%
合計	1	1	5	3(4)	20	30(31)	100.00%	243.90	100.00%

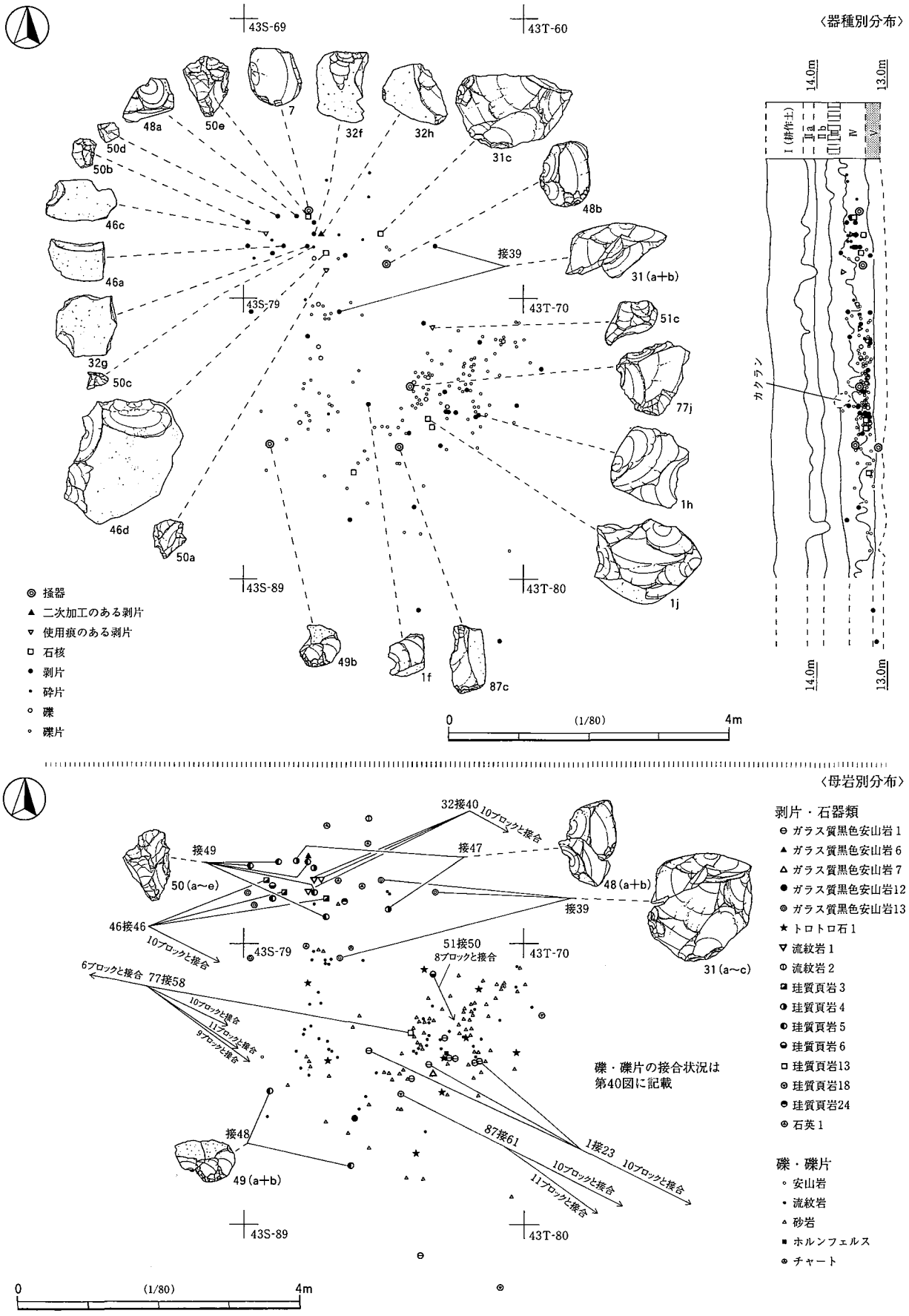
※（　）は出土点数

石材／器種	礫	礫片	点数	点数比	重量(g)	重量比
安山岩	1	6(32)	7(33)	5.85%	1135.13	6.13%
流紋岩	4	51(177)	55(181)	32.09%	9680.82	52.24%
石英斑岩	0	3(15)	3(15)	2.66%	1562.27	8.43%
花崗岩	0	3	3	0.53%	2.86	0.02%
砂岩	1	55(136)	56(137)	24.29%	4698.68	25.35%
頁岩	0	66(87)	66(87)	15.43%	632.29	3.41%
チャート	1	54(76)	55(77)	13.83%	820.42	4.43%
合計	7	238(526)	275(564)	100.00%	18532.47	100.00%

※（　）は出土点数

第７ブロック(第43図、第13表、図版４・12～21)

第６ブロックから約20ｍ東に位置し標高は14.8ｍである。表層は平坦に均されているが石器が包含されるⅣ層は南に向かって下降し、それに伴って石器は13.099ｍ～13.631ｍの53.2cmの間に帯状に分布する。剥片・石器類は57点がブロック内に満遍なく分布するが、礫・礫片130点はブロックの東南部に偏る。第７ブロックでは剥片・石器類57点のうち５点が掻器であり、他ブロックで製作され第７ブロックに持ち込まれたと思われる資料(77j・87c)、当ブロックで製作、あるいは調整されたもの(48b・49b)が出土している。他には二次加工のある剥片１点、使用痕のある剥片３点、石核６点、剥片31点、砕片10点があり、剥片・砕片、石核の割合も高い。使用石材は珪質頁岩、ガラス質黒色安山岩の２種類で68%が占められ、トロトロ石、石英、流紋岩が続く。石英は無色透明の砕片５点がブロックの北側1.5㎡にまとまって分布していた。ブロック内では４個体、他ブロックとは６個体に接合関係が認められる。



第43図　第３文化層 第７ブロック遺物分布

第13表　第３文化層 第７ブロック組成表

母岩名／器種	掻器	二次加工のある剥片	使用痕のある剥片	石核	剥片	砕片	点数	点数比	重量(g)	重量比
ガラス質黒色安山岩1	0	0	0	1	8	0	9	15.79%	153.73	24.89%
ガラス質黒色安山岩6	1	0	0	0	0	0	1	1.75%	13.95	2.26%
ガラス質黒色安山岩7	0	0	0	1	0	0	1	1.75%	83.85	13.58%
ガラス質黒色安山岩12	0	0	0	1	0	0	1	1.75%	12.20	1.98%
ガラス質黒色安山岩13	0	0	0	1	3(4)	1	5(6)	10.53%	53.21	8.62%
トロトロ石 1	0	0	0	0	8	1	9	15.79%	22.56	3.65%
流紋岩 1	0	1	0	0	2	0	3	5.26%	44.98	7.28%
流紋岩 2	0	0	0	0	1	0	1	1.75%	2.51	0.41%
珪質頁岩 3	0	0	1	1	1	0	3	5.26%	148.73	24.08%
珪質頁岩 4	1	0	0	0	1	1	3	5.26%	16.03	2.60%
珪質頁岩 5	1	0	1	1	4	1	8	14.04%	19.56	3.17%
珪質頁岩 6	0	0	1	0	0	1	2	3.51%	2.60	0.42%
珪質頁岩 13	1	0	0	0	0	0	1	1.75%	25.66	4.15%
珪質頁岩 18	1	0	0	0	2	0	3	5.26%	15.62	2.53%
珪質頁岩 24	0	0	0	0	1	0	1	1.75%	1.85	0.30%
石英 1	0	0	0	0	0	5	5	8.77%	0.53	0.09%
合計	5	1	3	6	31(32)	10	56(57)	100.00%	617.57	100.00%

※（ ）は出土点数

石材／器種	礫	礫片	点数	点数比	重量(g)	重量比
安山岩	1	1	2	1.54%	259.10	2.74%
流紋岩	6	16(44)	22(50)	38.46%	5532.98	58.55%
砂岩	2	21(74)	23(76)	58.46%	3309.59	35.02%
ホルンフェルス	1	0	1	0.77%	259.33	2.74%
チャート	0	1	1	0.77%	89.58	0.95%
合計	10	39(120)	49(130)	100.00%	9450.58	100.00%

※（ ）は出土点数

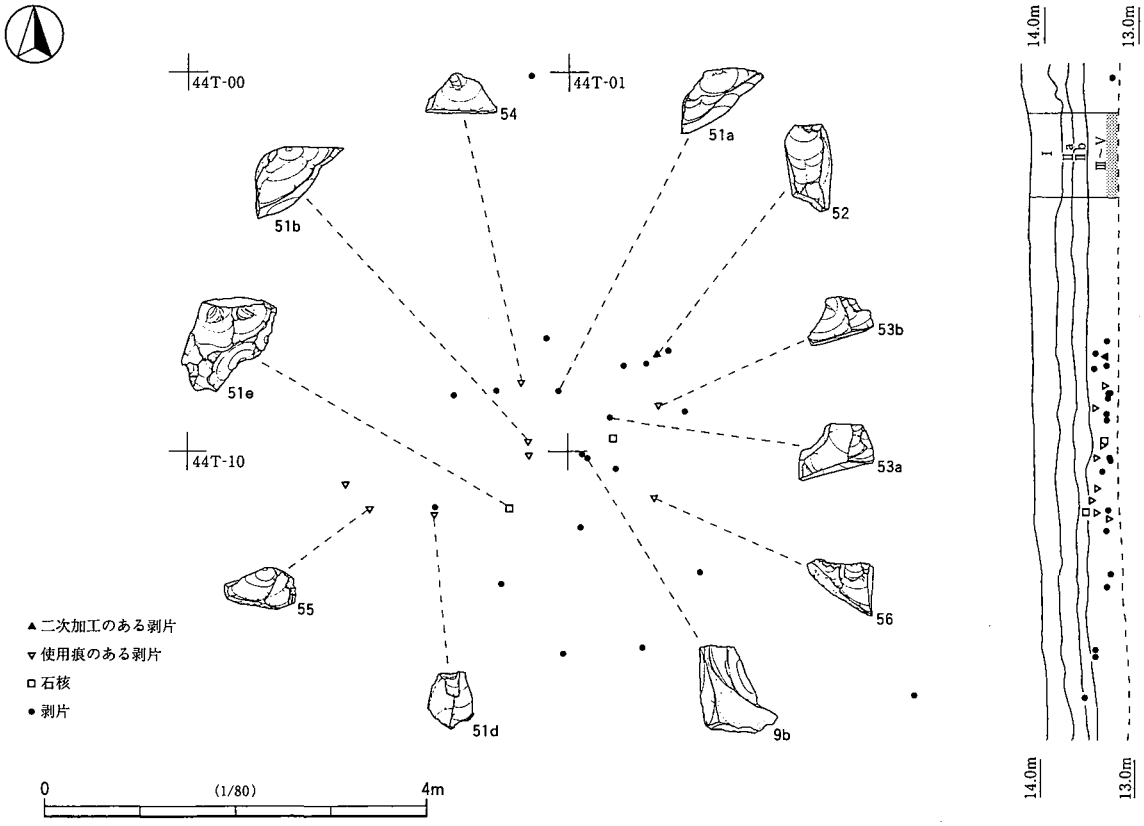
第８ブロック（第44図、第14表、図版12～20）

第８ブロックはこの６か所のブロック中で唯一、礫・礫片を伴わない特異なブロックである。第７ブロック東南の標高14.2ｍに位置し、遺物は13.260ｍ～13.527ｍの26.7cm間に分布し、Ⅲ～Ⅴ層に包含される。剥片・石器類のみで構成され、その器種内訳は二次加工のある剥片１点、使用痕のある剥片８点、石核２点、剥片20点が44T-11グリッドを中心に分布している。使用石材はガラス質黒色安山岩、珪質頁岩、玉髄（メノウ含む）の３種類が使われており、ガラス質黒色安山岩は約30ｍ離れた第６ブロック、珪質頁岩は約17ｍ離れた第７ブロックと接合関係が認められた。第８ブロック内で接合する資料は１個体のみである。

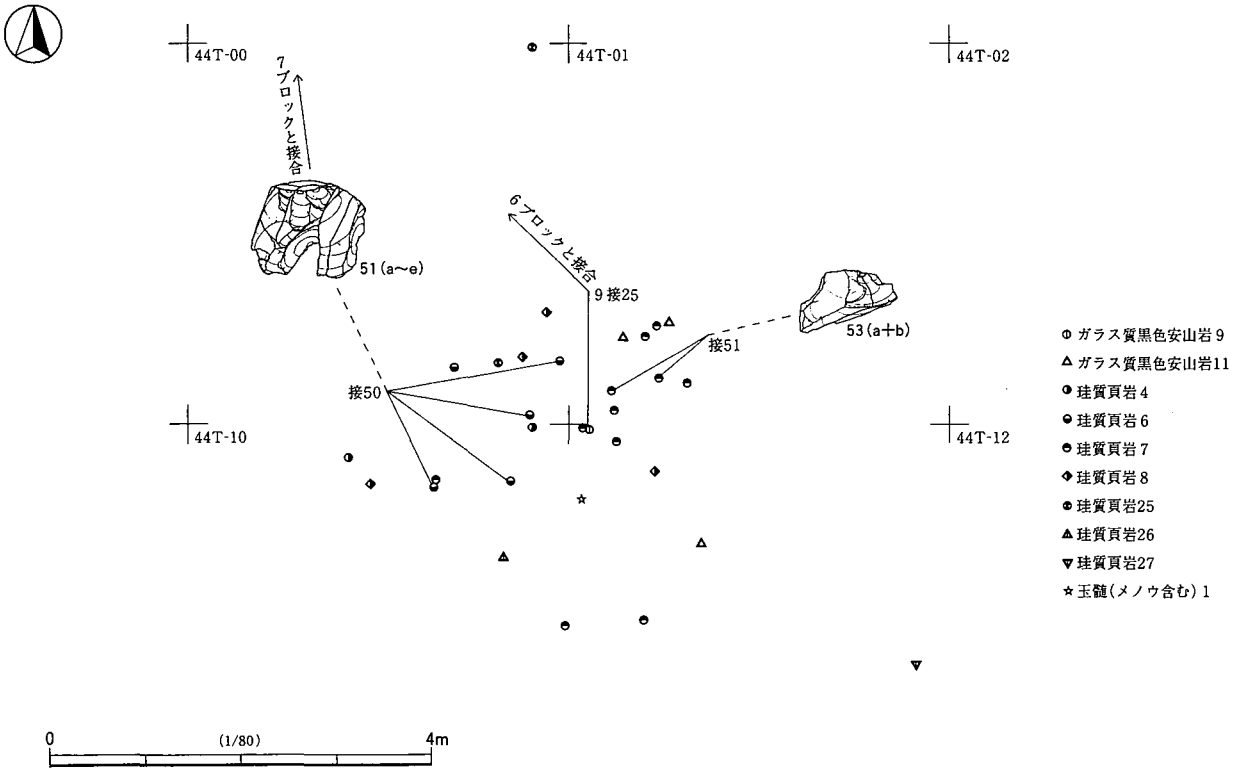
第14表　第３文化層 第８ブロック組成表

母岩名／器種	二次加工のある剥片	使用痕のある剥片	石核	剥片	点数	点数比	重量(g)	重量比
ガラス質黒色安山岩9	0	0	0	1	1	3.23%	7.23	5.67%
ガラス質黒色安山岩11	0	0	0	3	3	9.68%	14.49	11.37%
珪質頁岩 4	0	2	0	0	2	6.45%	3.07	2.41%
珪質頁岩 6	0	2	1	2	5	16.13%	33.45	26.24%
珪質頁岩 7	1	1	1	8	11	35.48%	44.97	35.27%
珪質頁岩 8	0	3	0	1	4	12.90%	7.55	5.92%
珪質頁岩 25	0	0	0	2	2	6.45%	7.23	5.67%
珪質頁岩 26	0	0	0	1	1	3.23%	2.93	2.30%
珪質頁岩 27	0	0	0	1	1	3.23%	0.61	0.48%
玉髄（メノウ含む）1	0	0	0	1	1	3.23%	5.96	4.67%
合計	1	8	2	20	31	100.00%	127.49	100.00%

〈器種別分布〉



〈母岩別分布〉



第44図　第３文化層 第８ブロック遺物分布

第９ブロック（第45・46図、第15表、図版４・12～21）

第８ブロックから約16ｍ東に位置し、南東隣の第11ブロックと重なりを持つ。標高は14.2ｍ、石器は13.004ｍ～14.054ｍの105cmに亘って出土し、分布の中心はⅣ～Ⅴ層にあたる。剥片・石器類は101点、礫・礫片は387点を数え、台石と敲石が分布の中心からやや離れて検出された。台石は第９ブロックの北西端から出土しており、出土面の標高はブロックの中心部より高位に所在する。調査時の所見では当該期の遺物とされるが、便宜的に延長線を引いたセクション図ではⅡｃ層に包含され、他時代（縄文時代）の台石である可能性も否めない。

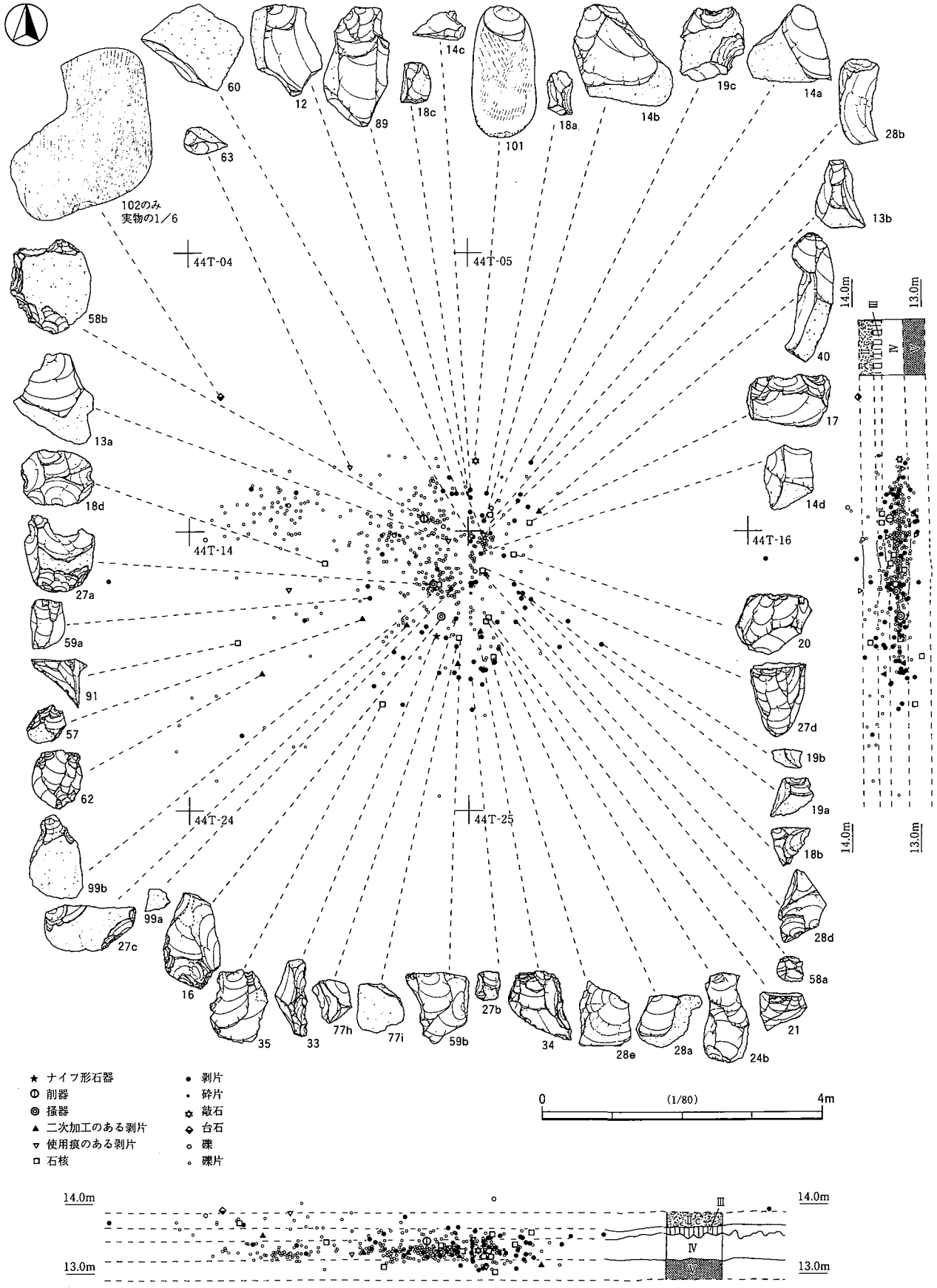
器種・石材とも多様でありナイフ形石器・削器・敲石・台石が各々１点、掻器・砕片が各々２点、二次加工のある剥片６点、使用痕のある剥片５点、剥片70点、石核12点を数えた。剥片・石器類の石材は、ガラス質黒色安山岩が66点で65%、ついで珪質頁岩が16点であり約16%、その他は流紋岩・黒曜石・砂岩・頁岩・硬質頁岩・チャート・玉髄（メノウ含む）が少量出土している。６ブロックの中では剥片・石器類における剥片、石核の比率が一番高い。また剥片・石器類のブロック内での接合は９個体、ブロック間接合を含めると11個体となる。

第15表　第３文化層 第９ブロック組成表

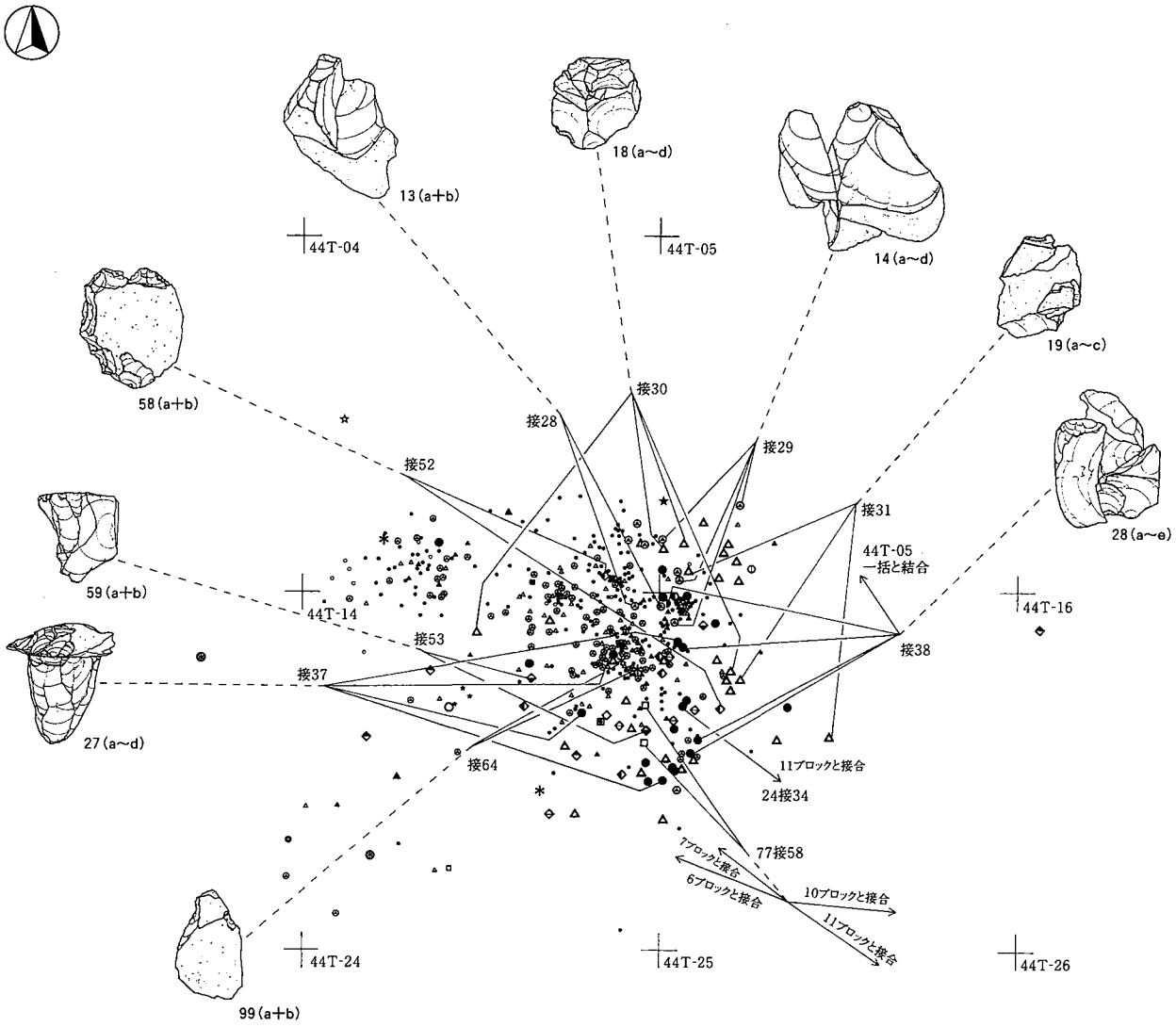
母岩名／器種	ナイフ形石器	削器	掻器	二次加工のある剥片	使用痕のある剥片	石核	剥片	砕片	敲石	台石	点数	点数比	重量(g)	重量比
ガラス質黒色安山岩10	0	0	0	0	2	0	10	0	0	0	12	11.88%	141.80	5.80%
ガラス質黒色安山岩11	0	0	1	0	0	3	25	1	0	0	30	29.70%	196.12	8.02%
ガラス質黒色安山岩12	0	0	1	2	0	5	14	0	0	0	22	21.78%	319.95	13.09%
ガラス質黒色安山岩14	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2	1.98%	49.40	2.02%
流紋岩 3	1	0	0	1	0	1	2	0	0	0	5	4.95%	45.35	1.86%
黒曜石 3	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.99%	0.06	0.00%
砂岩 1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.99%	1270.00	51.95%
砂岩 2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0.99%	200.81	8.21%
頁岩 1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0.99%	12.73	0.52%
珪質頁岩 2	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.99%	6.06	0.25%
珪質頁岩 9	0	1	0	1	0	0	3	1	0	0	6	5.94%	54.99	2.25%
珪質頁岩 10	0	0	0	0	0	1	2	0	0	0	3	2.97%	26.82	1.10%
珪質頁岩 11	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0.99%	43.46	1.78%
珪質頁岩 12	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	2	1.98%	6.08	0.25%
珪質頁岩 13	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2	1.98%	10.31	0.42%
珪質頁岩 21	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.99%	28.50	1.17%
硬質頁岩 1	0	0	0	0	1	1	2	0	0	0	4	3.96%	5.46	0.22%
チャート 4	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2	1.98%	3.86	0.16%
玉髄（メノウ含む）2	0	0	0	0	0	1	3	0	0	0	4	3.96%	22.75	0.93%
合計	1	1	2	6	5	12	70	2	1	1	101	100.00%	2444.51	100.00%

石材／器種	礫	礫片	点数	点数比	重量(g)	重量比
安山岩	3	10(14)	13(17)	3.48%	1491.70	14.75%
流紋岩	2	127(189)	129(191)	40.16%	4907.99	48.53%
石英斑岩	0	1	1	0.20%	50.76	0.50%
礫岩	1	0	1	0.20%	99.97	0.99%
砂岩	0	30(54)	30(54)	11.48%	1470.16	14.54%
頁岩	0	15(34)	15(34)	7.17%	973.09	9.62%
粘板岩	0	1(3)	1(3)	0.61%	22.56	0.22%
ホルンフェルス	0	1	1	0.20%	50.52	0.50%
緑泥片岩	0	1	1	0.20%	1.95	0.02%
チャート	0	49(84)	49(84)	17.62%	1044.97	10.33%
合計	6	235(381)	241(387)	81.35%	10113.67	100.00%

※（　）は出土点数



第45図　第３文化層 第９ブロック器種別分布



礫・礫片の接合状況は第40図に記載

剥片・石器類

- ガラス質黒色安山岩10
- ガラス質黒色安山岩11
- ガラス質黒色安山岩12
- ガラス質黒色安山岩14
- 流紋岩3
- 黒曜石3
- 砂岩1
- 砂岩2
- 頁岩1
- 珪質頁岩2
- 珪質頁岩9
- 珪質頁岩10
- 珪質頁岩11
- 珪質頁岩12
- 珪質頁岩13
- 珪質頁岩21
- 硬質頁岩1
- チャート4
- 玉髄(メノウ含む)2

礫・礫片

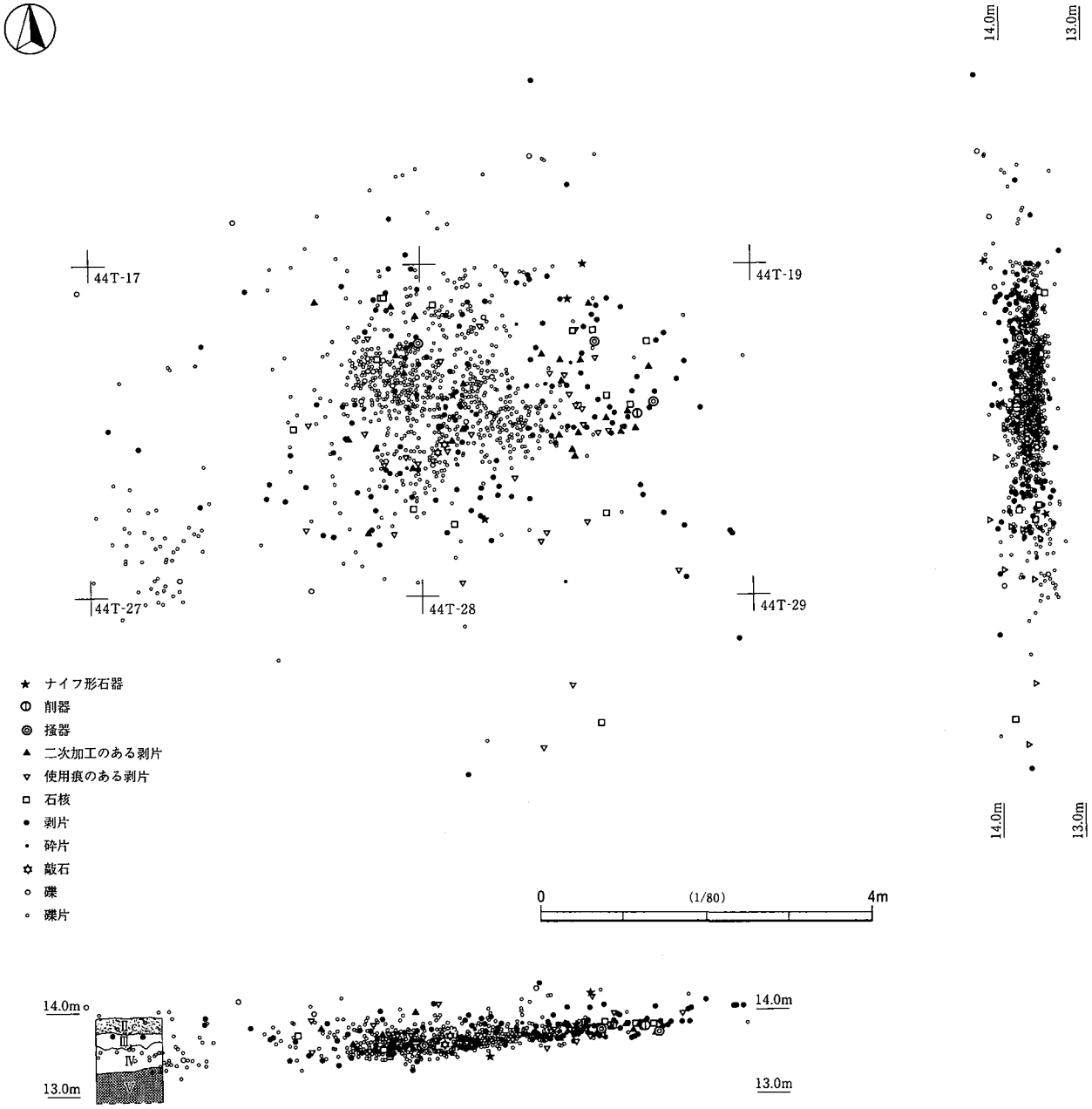
- 安山岩
- 流紋岩
- 石英斑岩
- 礫岩
- 砂岩
- 頁岩
- 粘板岩
- ホルンフェルス
- 緑泥片岩
- チャート

0 (1/80) 4m

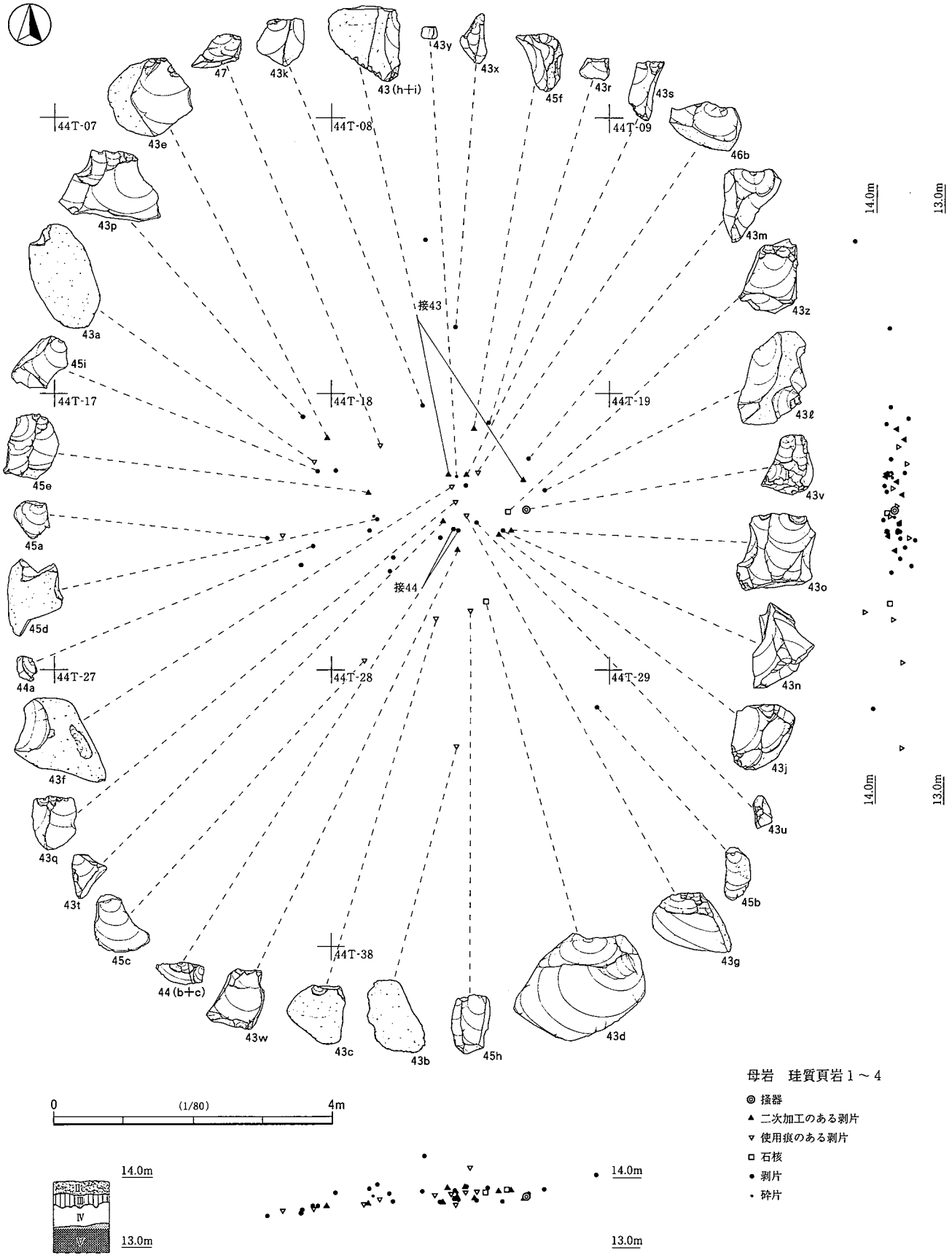
第46図　第3文化層 第9ブロック母岩別分布

第10ブロック（第47～51図、第16表、図版４・５、12～21）

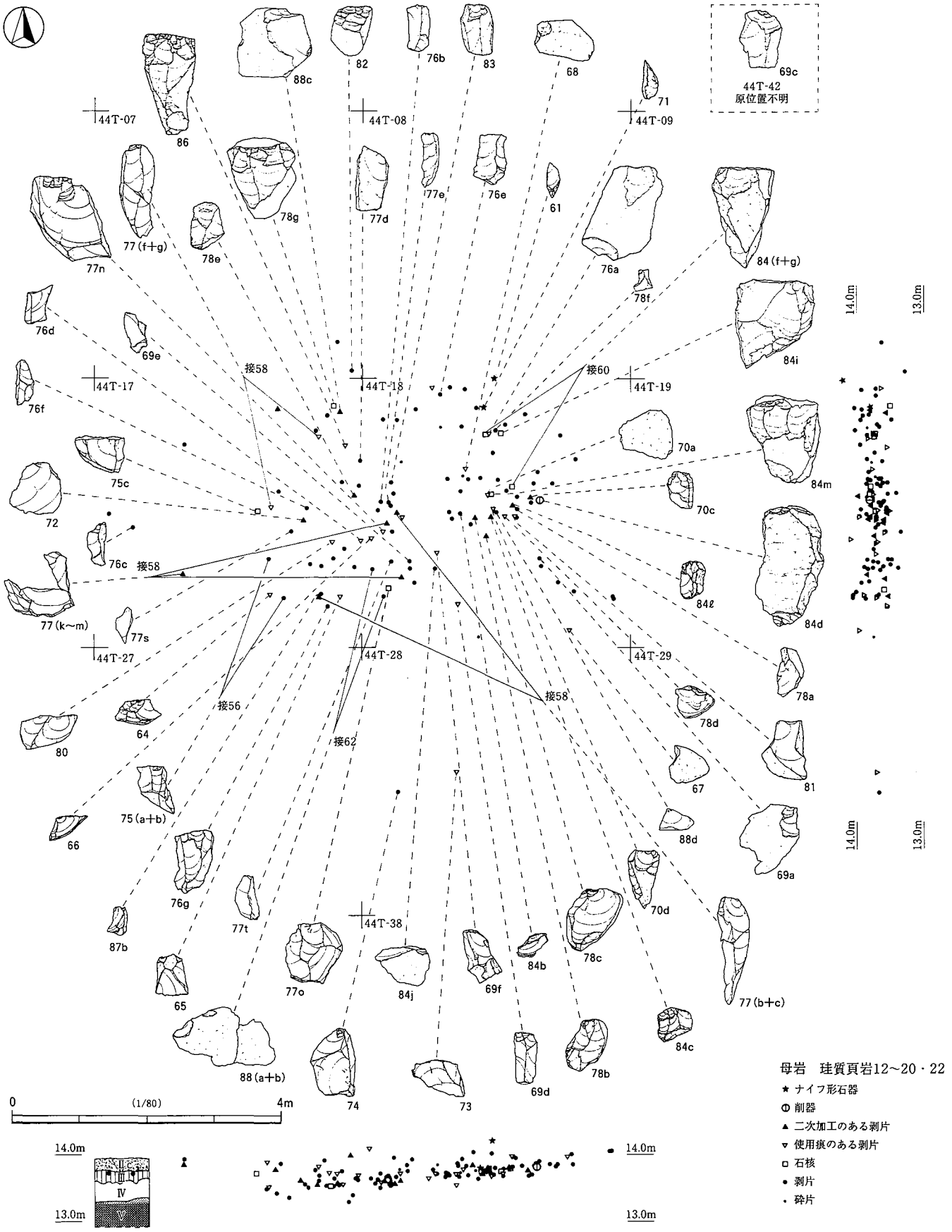
６か所の中では最も東側にあり標高14.5ｍ、遺物は13.216ｍ～14.312ｍの102.4cmの間に包含される。東に向かって上昇するような傾斜があり、遺物分布の中心を線に表すと10ｍで70cmの比高差となる。東西8.5ｍ、南北9.1ｍに1,081点の遺物が出土した。剥片・石器類238点、礫・礫片843点であり、出土した遺物の量は６か所中最多である。組成上の器種はナイフ形石器４点、削器１点、掻器３点、二次加工のある剥片26点、使用痕のある剥片33点、石核13点、剥片136点、敲石１点、砕片７点である。石材は珪質頁岩が174点で73%を占め、ついでガラス質黒色安山岩が46点で約19%、以下安山岩・流紋岩・砂岩・嶺岡産珪質頁岩・玉髄（メノウ含む）が少量出土した。ブロック内では13個体、ブロック間では９個体に接合関係がみられる。



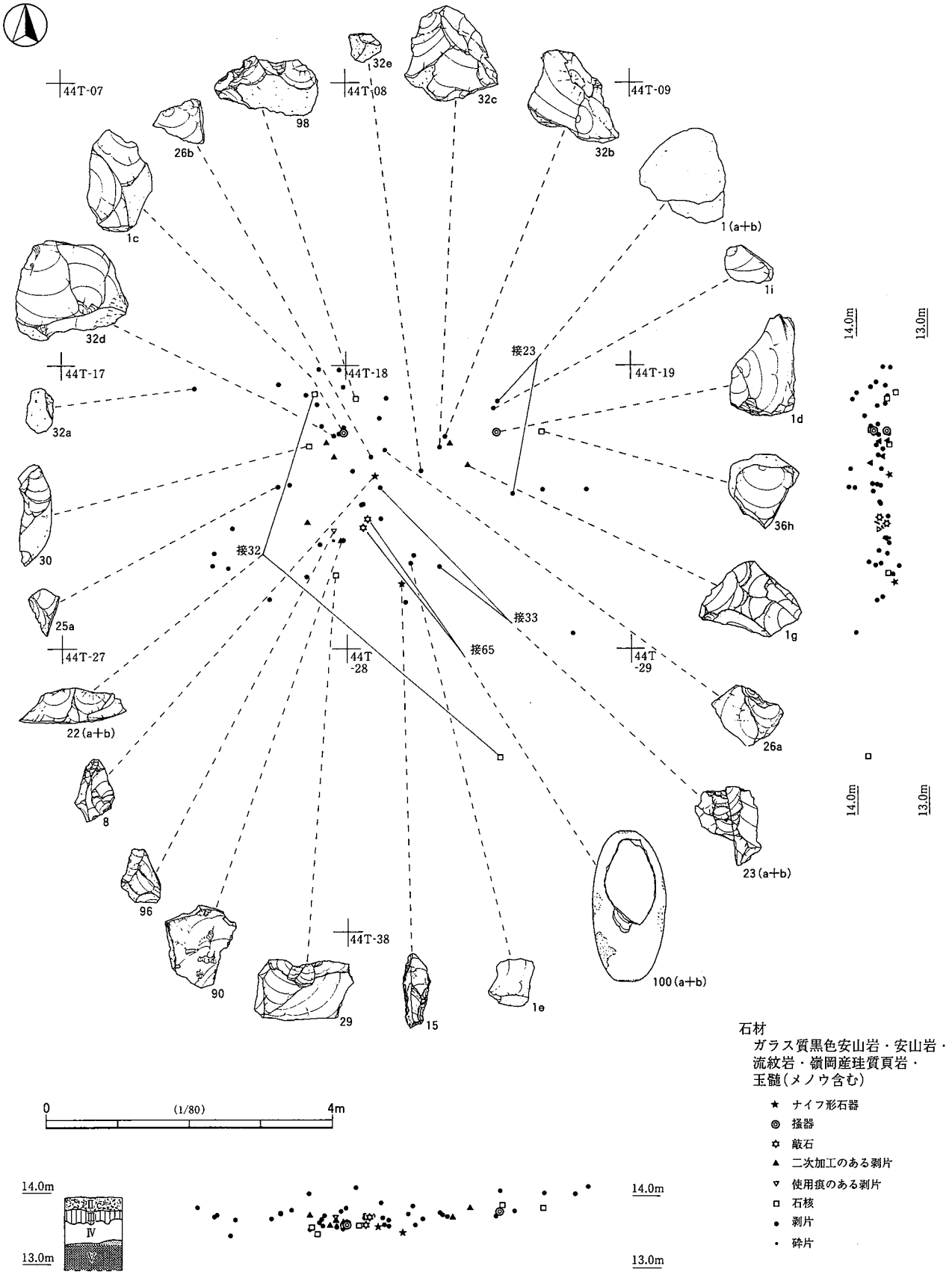
第47図　第３文化層 第10ブロック器種別分布



第48図　第3文化層 第10ブロック剥片・石器類器種別分布(その1)

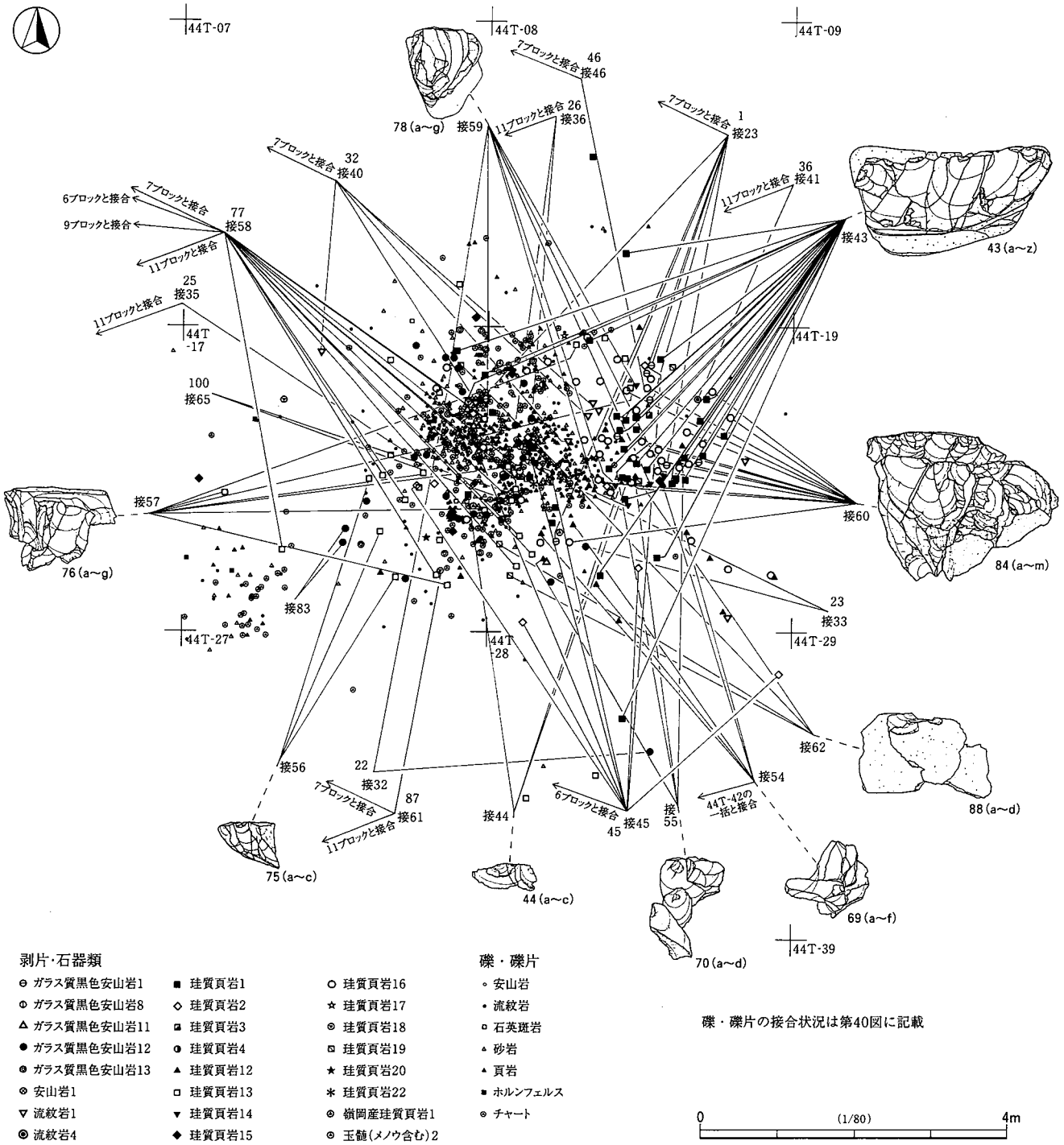


第49図　第３文化層 第10ブロック 剥片・石器類器種別分布(その2)



第50図　第３文化層 第10ブロック剥片・石器類器種別分布(その3)

接合資料を構成する石片及び実測を要する石器の分布状況を示すため、器種別分布図は、珪質頁岩１～４、珪質頁岩12～20・22、その他（ガラス質黒色安山岩・安山岩・流紋岩・嶺岡産珪質頁岩・玉髄（メノウ含む））の３枚に分けて作図した。第10ブロックの剥片・石器類の全点表示は母岩別分布図に記し、併せて接合状況を示した。



第51図　第３文化層 第10ブロック母岩別分布

第16表　第３文化層 第10ブロック組成表

母岩名／器種	ナイフ形石器	削器	掻器	二次加工のある剥片	使用痕のある剥片	石核	剥片	砕片	敲石	点数	点数比	重量(g)	重量比
ガラス質黒色安山岩1	0	0	2	1	0	0	4(5)	0	0	7(8)	3.36%	130.08	5.24%
ガラス質黒色安山岩8	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.42%	5.29	0.21%
ガラス質黒色安山岩11	1	0	0	2	0	0	0	0	0	3	1.26%	45.73	1.84%
ガラス質黒色安山岩12	0	0	0	1	0	1(2)	19(21)	1	0	22(25)	10.50%	90.68	3.65%
ガラス質黒色安山岩13	0	0	0	0	0	2	7	0	0	9	3.78%	148.71	5.99%
安山岩 1	0	0	0	0	0	0	0	0	1(2)	1(2)	0.84%	431.24	17.36%
流紋岩 1	0	0	0	1	0	0	8	0	0	9	3.78%	132.95	5.35%
流紋岩 4	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.42%	48.13	1.94%
砂岩 3	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0.42%	20.03	0.81%
珪質頁岩 1	0	0	1	7(8)	6	2	17(18)	2	0	35(37)	15.55%	386.95	15.58%
珪質頁岩 2	0	0	0	2	3	0	5	0	0	10	4.20%	53.91	2.17%
珪質頁岩 3	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0.42%	12.69	0.51%
珪質頁岩 4	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0.42%	1.76	0.07%
珪質頁岩 12	1	0	0	1	10	0	12	1	0	25	10.50%	51.31	2.07%
珪質頁岩 13	1	0	0	4(7)	5(6)	2	16(17)	0	0	28(33)	13.87%	168.06	6.77%
珪質頁岩 14	0	0	0	3	1	1	2	0	0	7	2.94%	94.97	3.82%
珪質頁岩 15	0	0	0	0	2	0	5	0	0	7	2.94%	18.36	0.74%
珪質頁岩 16	0	1	0	2	0	3(4)	32	3	0	41(42)	17.65%	488.60	19.67%
珪質頁岩 17	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0.42%	17.96	0.72%
珪質頁岩 18	0	0	0	0	1	0	2	0	0	3	1.26%	20.75	0.84%
珪質頁岩 19	0	0	0	1	0	0	3(4)	0	0	4(5)	2.10%	41.56	1.67%
珪質頁岩 20	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0.42%	3.81	0.15%
珪質頁岩 22	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0.42%	3.70	0.15%
嶺岡産珪質頁岩 1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0.42%	19.65	0.79%
玉髄（メノウ含む）2	0	0	0	0	1	1	2	0	0	4	1.68%	46.84	1.89%
合計	4	1	3	26(30)	33(34)	13(15)	136(142)	7	1(2)	224(238)	100.00%	2483.72	100.00%

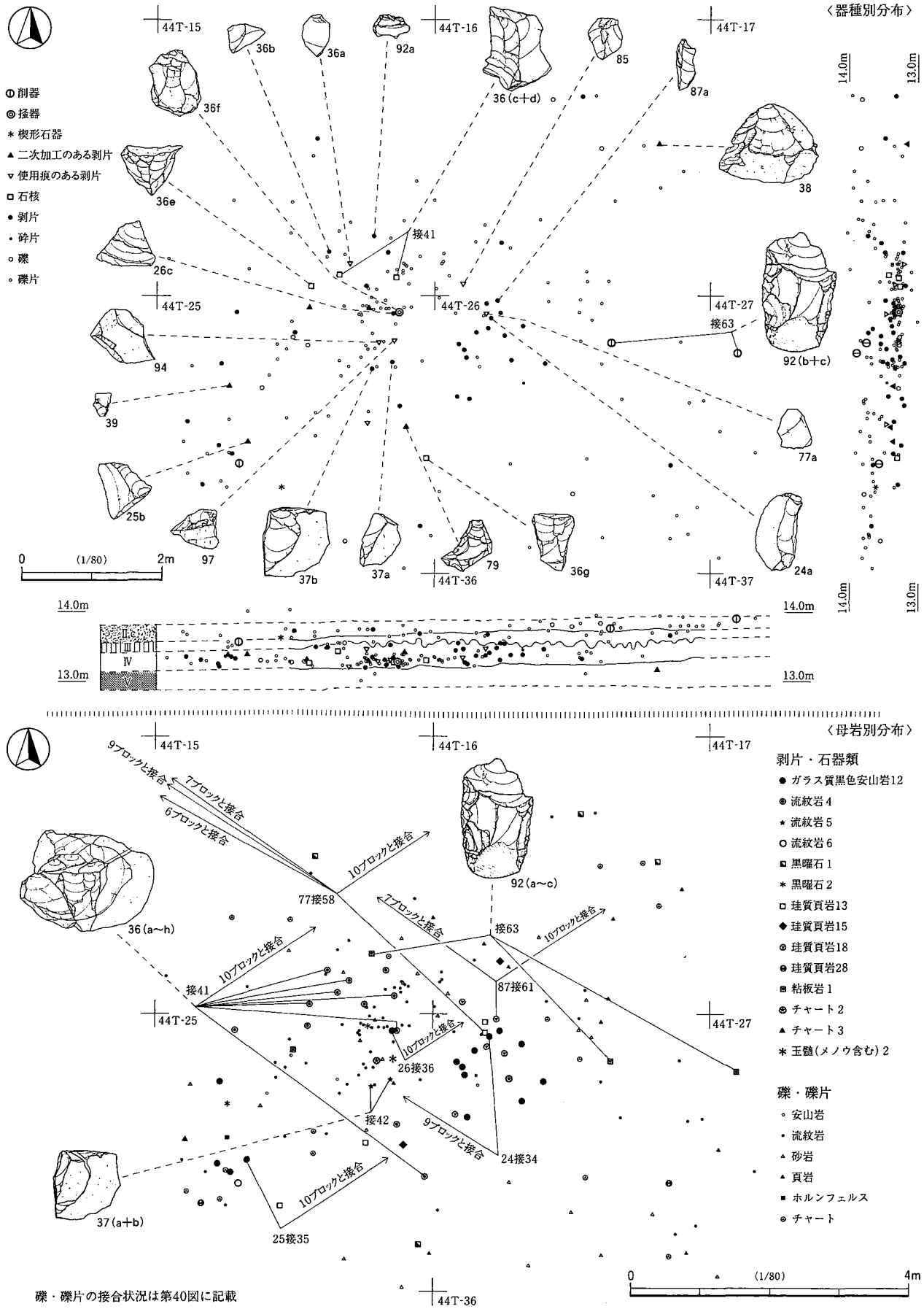
※（　）は出土点数

石材／器種	礫	礫片	点数	点数比	重量(g)	重量比
安山岩	0	12(13)	12(13)	1.54%	666.81	2.59%
流紋岩	17	70(248)	87(265)	31.44%	14256.66	55.45%
石英斑岩	0	1(3)	1(3)	0.36%	240.33	0.93%
砂岩	2	130(221)	132(223)	26.45%	5128.52	19.95%
頁岩	1	61(141)	62(142)	16.84%	2824.27	10.98%
ホルンフェルス	0	6(8)	6(8)	0.95%	574.90	2.24%
チャート	0	125(189)	125(189)	22.42%	2019.02	7.85%
合計	20	405(823)	425(843)	100.00%	25710.51	100.00%

※（　）は出土点数

第11ブロック（第52図、第17表、図版５・12～21）

西に第９ブロック、東に第10ブロックと交わり、６ブロック中最南部に位置する。標高約14.3ｍに立地するが、東に向かってわずかながら高くなる。短径7.6ｍ、長径8.4ｍの円形の中に剥片・石器類57点、礫・礫片130点が出土した。剥片・石器類は全体に満遍なく分布するが、44T-26付近では礫片が高密度で分布の中心を形成している。遺物の出土レベルは13.011ｍ～14.035ｍで高低差は102cm、平均レベルは13.432ｍである。器種としては削器２点、掻器・楔形石器・砕片各々１点、二次加工のある剥片・使用痕のある剥片各々６点、剥片35点、石核３点である。使用石材はガラス質黒色安山岩・流紋岩・珪質頁岩が全体の75%を占め、黒曜石・粘板岩・チャート・玉髄（メノウ含む）が少量出土した。ブロック内では２個体、ブロック間では６個体に接合関係がみられる。



第52図　第３文化層 第11ブロック遺物分布

第17表　第３文化層 第11ブロック組成表

母岩名／器種	削器	掻器	楔形石器	二次加工のある剥片	使用痕のある剥片	石核	剥片	砕片	点数	点数比	重量(g)	重量比
ガラス質黒色安山岩12	0	0	0	1	0	0	13	1	15	26.32%	38.74	15.21%
流紋岩 4	0	1	0	1	1	3(4)	5	0	11(12)	21.05%	81.80	32.11%
流紋岩 5	0	0	0	0	0	0	2	0	2	3.51%	17.52	6.88%
流紋岩 6	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1.75%	20.60	8.09%
黒曜石 1	0	0	0	1	0	0	3	0	4	7.02%	16.40	6.44%
黒曜石 2	0	0	0	2	0	0	0	0	2	3.51%	0.68	0.27%
珪質頁岩 13	0	0	1	0	2	0	1	0	4	7.02%	7.97	3.13%
珪質頁岩 15	0	0	0	1	0	0	1	0	2	3.51%	4.78	1.88%
珪質頁岩 18	0	0	0	0	1	0	4	0	5	8.77%	6.69	2.63%
珪質頁岩 28	0	0	0	0	0	0	2	0	2	3.51%	0.90	0.35%
粘板岩 1	1(2)	0	0	0	0	0	2	0	3(4)	7.02%	45.96	18.04%
チャート 2	0	0	0	0	1	0	1	0	2	3.51%	7.90	3.10%
チャート 3	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1.75%	0.28	0.11%
玉髄（メノウ含む）2	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1.75%	4.50	1.77%
合計	2(3)	1	1	6	6	3(4)	35	1	55(57)	100.00%	254.72	100.00%

※（ ）は出土点数

石材／器種	礫	礫片	点数	点数比	重量(g)	重量比
安山岩	1	2(3)	3(4)	3.08%	307.90	6.74%
流紋岩	2	33(72)	35(74)	56.92%	3365.39	73.63%
砂岩	3	13(21)	16(24)	18.46%	612.22	13.39%
頁岩	0	6(12)	6(12)	9.23%	192.79	4.22%
ホルンフェルス	0	1	1	0.77%	2.49	0.05%
チャート	1	12(14)	13(15)	11.54%	89.78	1.96%
合計	7	67(123)	74(130)	100.00%	4570.57	100.00%

※（ ）は出土点数

第６～11ブロックでは、剥片・石器類12個体、礫片19個体にブロック間接合が確認されたため、接合した母岩の表記を統一し、母岩ごとに出土石器の所見を述べることとする。（第18・19表　母岩観察表参照）

第６～11ブロック出土石器（第53～92図）

挿図番号に続く括弧内は接合番号を表す。

１．（接23）　10点接合　第７ブロックの剥片２点・石核１点、第10ブロックの掻器２点・二次加工のある剥片１点・剥片４点が接合した。２地点間は最長40ｍの距離を測る。剥離順と分布に相関関係はなく、第10ブロックで剥離された石片10点のうちの３点が第７ブロックに運ばれたものと思われる。自然面を剥いで打面を作出した後は剥離面と打面を頻繁に置き換えながら剥離作業が行われる。1c・1dはともに横長剥片が用いられ、素材側縁である短辺に80°前後の急角度剥離が施されている。1c背面には打点を持たない多方向からの剥離痕がみられ、器面を調整する目的の剥片が加工されているものである。ガラス質黒色安山岩１

２．掻器　基部は欠損。刃部は97°～108°で緩やかな半円弧を描く。

３．石核　頻繁に打面を換えて剥離作業が行われているが最終的には設定された打面から両側面・正面が剥離される。

４．（接24）　２点接合　第６ブロック出土　剥片と石核の接合資料である。下端は自然面を薄く剥離するように加工されている。4a剥離後に現れた面を打面にして4bが剥がされる。２～４はガラス質黒色安山岩２

５．二次加工のある剥片　上・下・左面は折れ（折り取りか）。下部には尖端作出の後、下方からの剥離痕がみられるが、おそらく錐状工具として使用された際のものと思われる。ガラス質黒色安山岩３

６．剥片　下部に自然面を持つ、打点直下折れ剥片。ガラス質黒色安山岩４

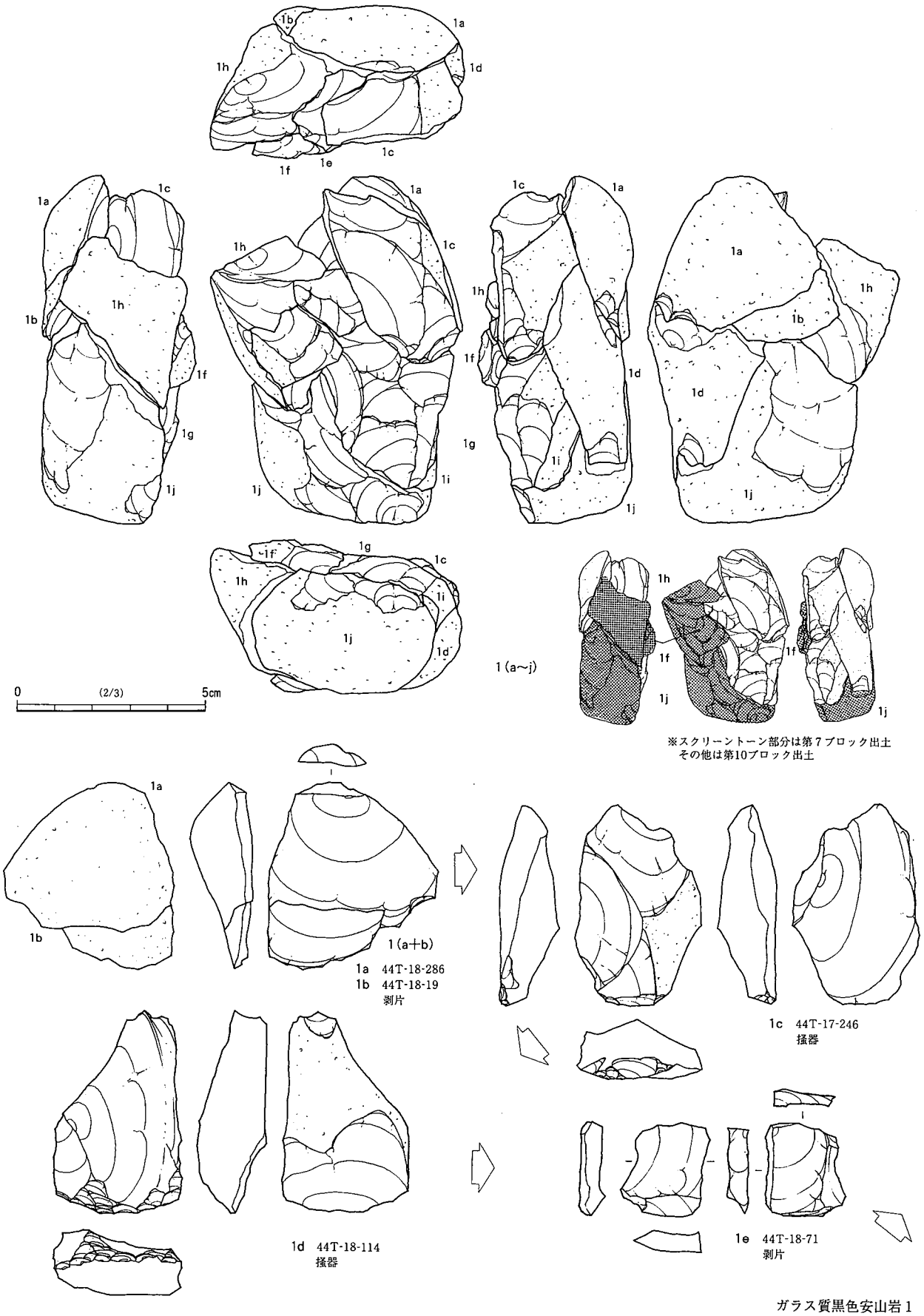
第18表　第３文化層 第６～11ブロック母岩観察表(1)

母岩名	色相　明度/彩度　色名			特徴
	剥離面	自然面	節理・ガジリ	
ガラス質黒色安山岩1	10YR6/4 にぶい黄橙	2.5Y6/2 灰黄	ガジリ 10Y2/1 黒	風化面は黄粉のように黄褐色～黄橙色　φ0.3mmほどの淡黄色・黒色斑晶あり
ガラス質黒色安山岩2	10GY2/1 緑黒	5Y5/1 灰	-	風化面は角ばった黒である　斑晶はφ0.3mm淡いベージュ
ガラス質黒色安山岩3	5Y5/1 灰	5Y5/1 灰	ガジリ 5Y4/1 灰	石基は灰色　斑晶はφ0.8mm　黒色と淡いベージュの斑晶あり ガジリ部分は暗灰色
ガラス質黒色安山岩4	10GY2/1 緑黒	5Y3/2 オリーブ黒	-	暗灰というよりも黒色の石基である　ガラス質黒色安山岩2と近似するが斑晶は少ない
ガラス質黒色安山岩5	2.5Y3/2 黒褐	2.5Y3/2 黒褐	-	濃灰～黒褐色　斑晶は石英質のものと淡いベージュ　いずれもφ0.3mmほど
ガラス質黒色安山岩6	2.5Y6/4 にぶい黄	-	-	ガラス質黒色安山岩1と近似
ガラス質黒色安山岩7	2.5Y6/4 にぶい黄	2.5Y6/4 にぶい黄	-	にぶい黄～明るい黄褐色　斑晶は極小粒の石英質 自然面は細かい網目状溝の上に黄粉がかかった様相
ガラス質黒色安山岩8	2.5Y4/2 暗灰黄	-	-	わずかに赤みを帯びた濃い灰色であるが風化してやや黄みも帯びる 灰白色の斑晶は極少量
ガラス質黒色安山岩9	5Y5/1 灰(灰～緑)	2.5Y5/2 暗灰黄	-	緑灰色を基調とし青みを帯びる黒い筋が年輪のように等間隔に入っている
ガラス質黒色安山岩10	2.5Y3/2黒褐～ 10YR4/3にぶい黄褐	10YR4/3 にぶい黄褐	-	全体的に黒みを帯びる　針でついたような細かな穴が器面に広がる 熱による接触変成が進んだもの(ホルンフェルス化)か
ガラス質黒色安山岩11	2.5Y5/2 暗灰黄	10YR5/6 黄褐	ガジリ 5Y2/1 黒	所々筋層状の部分あり　黒色透明な斑晶(φ1～2mm) ガラス質黒色安山岩11～13は同一母岩?
ガラス質黒色安山岩12	2.5Y5/2 暗灰黄	10YR5/6 黄褐	ガジリ 5Y2/1 黒	所々筋層状の部分あり　黒色透明な斑晶(φ1～2mm) ガラス質黒色安山岩11～13は同一母岩?
ガラス質黒色安山岩13	2.5Y5/2 暗灰黄	2.5Y5/3 黄褐	-	所々筋層状の部分あり　黒色透明な斑晶(φ1～2mm) ガラス質黒色安山岩11～13は同一母岩?
ガラス質黒色安山岩14	2.5Y4/1 黄灰	2.5Y5/4 黄褐	-	ガラス質黒色安山岩11～13と近似　青みを帯びた濃灰色の塊が内包される φ0.8mmほどの黄褐色～灰白色の斑晶がまばらに点在する
トロトロ石1	10Y7/1 灰白	10YR5/4 にぶい黄褐	-	わずかに緑色を帯びた灰色のトロトロ石　自然面はにぶい黄褐 斑晶は白色φ0.2mm極微量含む
安山岩1	-	-	-	被熱による赤化
流紋岩1	7.5Y6/2 灰オリーブ	10Y7/1灰白～ 10Y6/2オリーブ灰	-	緑色を帯びる灰白色の濃淡が基調であるが，一部凝灰岩である 斑晶は白・黒・褐色のφ0.5mm粒が点在する
流紋岩2	2.5GY7/1 明オリーブ灰	-	-	滑らかで微光沢を放つ緑色を帯びた灰色の石基に白色の斑晶が疎らに散る流紋岩　部分的に臙脂色がにじむように広がる
流紋岩3	5Y8/2 灰白	10YR7/6 明黄褐	-	わずかに緑色を帯びた灰白色に白色部分が泡のように混じる 銀色に輝くφ0.2mm程の斑晶が全体に均一に散る
流紋岩4	10YR8/3 浅黄橙	10YR7/8 黄橙	-	黄みを帯びた白色の石基にφ1mm程の石英の斑晶が入る もろく溶けて丸味のある角を作る
流紋岩5	2.5GY5/1 オリーブ灰	2.5Y5/2 暗灰黄	-	緑灰色を基調とし淡灰色の泡のような部分が混じる　斑晶は石英の微粒子
流紋岩6	10Y8/2 灰白	2.5Y7/4 浅黄	-	緑灰色の石基に石英・緑色・白色のφ2～3mm程の斑晶が詰まる 斑晶の勝つ流紋岩
砂岩1	-	-		被熱して赤みを帯びる
砂岩2	10Y5/1 灰	10Y5/1 灰	-	細粒の硬砂岩　剥離面・自然面とも同色で青みを帯びた灰色
砂岩3	2.5GY5/1 オリーブ灰	-	-	砂粒の粗い緑色を帯びた灰色を呈す　石英質の結晶が点在する　流紋岩か
頁岩1	2.5Y8/2灰白～ 2.5Y7/4浅黄	10YR7/4 にぶい黄橙	-	やや黄土色を帯びた灰白色でチョークを固くしたような質感である 細粒で艶や光沢はない
珪質頁岩1	2.5Y5/3黄褐～ 7.5YR3/1黒褐	7.5YR4/6 褐	-	自然面は明るい褐色だが剥離面は黄灰～黒色まで色のバリエーションが多様 φ0.5mm程の黒褐色斑が密集する箇所もあり 珪質頁岩11と酷似するが自然面の色がやや濃い
珪質頁岩2	7.5YR4/6褐～ 7.5YR5/4にぶい褐	7.5YR4/6 褐	-	自然面は珪質頁岩1と同じ色合いだが，剥離面は青・赤褐・黄白・褐色が混在する 器面の肌ざわりも部位により様々で珪化して玻璃質になった部分と粉っぽいザラつきを持つ部分が混じる
珪質頁岩3	10YR5/8 黄褐	7.5YR4/6褐～ 10Y7/2灰白	-	剥離面・自然面とも赤みを感じさせる黄褐色であり，細粒で滑らか
珪質頁岩4	7.5Y5/2 灰オリーブ	5YR4/4 にぶい赤褐	-	自然面と剥離面は極端に見れば赤と緑ほどの色の差がある 細粒で均質だが艶や光沢はない
珪質頁岩5	2.5Y6/3 にぶい黄	7.5YR5/4 にぶい褐	-	剥離面は珪化が強く青みを帯びた玻璃質部分あり 基調は明るめのベージュから青灰色であり珪質頁岩というよりむしろ玉髄化する
珪質頁岩6	10Y5/2オリーブ灰・10YR4/6褐	10YR3/4 暗褐	-	剥離面は艶はないが細粒・均質なわずかに緑色を帯びた暗褐色 自然面は光沢のある暗褐色

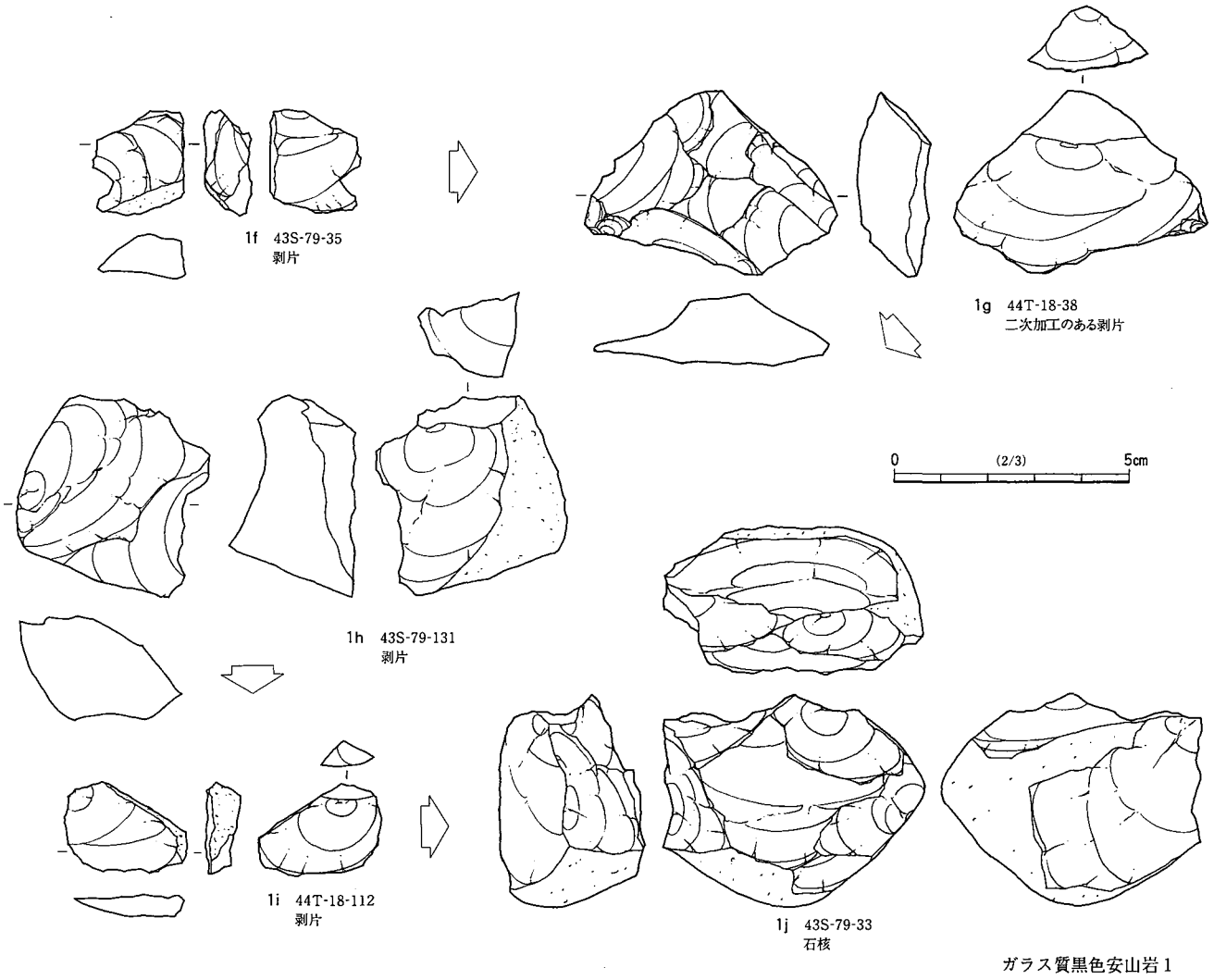
第19表　第３文化層 第６～11ブロック母岩観察表(2)

母岩名	色相　明度/彩度　色名			特徴
	剥離面	自然面	節理・ガジリ	
珪質頁岩7	2.5Y5/2 暗灰黄	10YR5/4 にぶい黄褐	－	灰白色から濃褐灰色が基調だが自然面付近はベージュ色である 細粒だが艶はない
珪質頁岩8	5GY7/1 明オリーブ灰	－	節理 7.5YR4/4 褐	珪質頁岩22と同一母岩か
珪質頁岩9	10GY8/1明緑灰～ 2.5Y7/3浅黄	10GY8/1明緑灰～ 2.5Y7/3浅黄	－	淡緑色を基調にして緑灰色の線が幾筋も流れている 細粒で艶やか　鈍いが油脂状光沢がある
珪質頁岩10	5Y7/3 浅黄	7.5YR4/6 褐	－	自然面はミルクチョコレート色で艶やかだが，剥離面は浅く緑色を帯び細粒で緻密
珪質頁岩11	7.5YR3/1 黒褐	7.5YR4/6 褐	－	珪質頁岩11の黒い部分と近似する
珪質頁岩12	10YR7/3にぶい黄橙～ 7.5GY8/1明緑灰	2.5Y8/6黄～ 2.5Y4/2暗灰黄	－	珪化度が高く滑らかで艶やかな質感
珪質頁岩13	10YR6/4にぶい黄橙と 10YR2/2黒褐が筋状	7.5YR4/6 褐	－	自然面が艶やかな明るい褐色であるのに対し，剥離面は黄褐と暗灰(黒褐色)のツートーンである　オリーブ色の部分も混在 緻密で珪質だが光沢や艶はあまり感じられない
珪質頁岩14	5Y6/3 オリーブ黄	2.5Y5/4 黄橙	－	剥離面はオリーブみを帯びた黄色であるが，自然面はそれにやや橙色を帯びる 滑らかな光沢をもつ
珪質頁岩15	7.5YR5/3 にぶい褐	10YR8/4 浅黄橙	－	自然面と剥離面は白と茶ほどの差があるが，一部の風化した剥離面は自然面に近い黄灰白色となっている 砂粒が肉眼観察され，珪質であるが滑らかさには欠ける
珪質頁岩16	5GY7/1明オリーブ灰～ 5GY4/1暗オリーブ灰	5Y7/2灰白 (縞部分5Y4/1灰)	節理 7.5YR5/6 明褐	節理面や小礫が混在する部位が多いが，滑らかな光沢をもつ部分も存在する
珪質頁岩17	2.5Y8/3 浅黄	2.5Y7/6 明黄褐	－	全体に白っぽい　砂岩質の部位あり
珪質頁岩18	5Y7/3浅黄～ 5Y6/2灰オリーブ	2.5Y6/6 明黄褐	－	青みを帯びた灰黄色に白っぽい楕円形の小玉模様が入った珪質頁岩
珪質頁岩19	10YR3/2黒褐～ 10YR7/4にぶい黄橙	2.5Y8/6黄～ 10YR4/3にぶい黄褐	－	剥離面・自然面とも黒褐に淡黄灰の筋が入るツートーン 滑らかで光沢のある緻密な珪質頁岩
珪質頁岩20	5Y5/3灰オリーブ～ 5YR3/6暗赤褐	2.5Y4/3オリーブ褐	－	珪質頁岩に分類したが碧玉(黄玉)か　石質は油脂状光沢を帯びた滑らかな泥岩質であり赤褐色から黄色みを帯びたオリーブ色がグラデーションを織りなす美しい石片
珪質頁岩21	7.5Y6/2灰オリーブと 2.5Y6/4にぶい黄が層状ツートーン	2.5Y5/4 黄褐	－	灰オリーブとにぶい黄部分が層状にツートーンを区画している 細粒・均質だが艶はない
珪質頁岩22	5GY7/1 明オリーブ灰	－	節理 7.5YR4/4 褐	珪質頁岩としては珪化度は高くない　光沢は少ないが滑らかな器面を持つ 自然面は残存していないが節理は茶，剥離面は緑灰と色の差が際立っている
珪質頁岩23	5Y6/2 灰オリーブ	－	－	珪質頁岩18に近い　もしくは同一母岩か
珪質頁岩24	5Y8/2 灰白	2.5Y8/4 淡黄	－	自然面・剥離面とも灰白色で淡い色調である　細粒であるが光沢は少ない
珪質頁岩25	10YR4/1 褐灰	10YR6/3 にぶい黄橙	－	珪質であるが艶や光沢はあまりない　パキパキと割れるような鋭さを持つ
珪質頁岩26	2.5Y7/4 浅黄	10YR5/8 黄褐	－	剥離面は明るいベージュ　細粒均質　光沢は低いが極めて良質
珪質頁岩27	10YR5/4 にぶい黄褐	－	－	ミルクチョコレート色　細粒均質　艶や光沢は僅かであるが良質
珪質頁岩28	2.5Y7/2 灰黄	7.5YR4/3 褐	－	珪質頁岩13と近似するが剥離面はやや明るい
嶺岡産珪質頁岩1	7.5Y4/1 灰	－	－	白滝層の中でも特に保田で産出する極めて良質な珪質頁岩である　暗灰色を基調として灰白・濃灰部分が混じるが珪化度は高く紡錘状の斑紋が認められる
硬質頁岩1	10YR5/3 にぶい黄褐	－	－	ミルクチョコレートのような色合いの硬質頁岩　滑らかでにぶい光沢を持つ
粘板岩1	－	N2/0 黒	－	風化してやや黄色味を帯びるが暗灰～黒色の粘板岩である 筋状の層となる部分がある
チャート1	2.5Y5/1 黄灰	5YR4/4 にぶい赤褐	－	赤みの強い黄灰色
チャート2	2.5Y4/1黄灰～ 2.5Y6/2灰黄	2.5Y6/3 にぶい黄	－	網目状の筋はない　チャートというよりむしろ珪質頁岩に近い 珪化度は高く油脂状の光沢を持つ
チャート3	10YR4/3 にぶい黄褐	－	－	赤みを帯びた黄褐色　網目状の構造はない
チャート4	10Y3/1 オリーブ黒	－	節理 2.5Y5/4 黄褐	暗黒色で黒い筋が縦横に走るチャート
玉髄(メノウ含む)1	2.5Y7/1灰白～ 7.5YR4/2灰褐	2.5Y8/2灰白・7.5YR4/6褐	－	剥離面・自然面とも白・茶・灰赤褐色・黄土色・暗赤紫など様々な色を含む 雲母や石英のような輝く斑晶が所々にみられることから一部流紋岩質となっている
玉髄(メノウ含む)2	5B7/1明青灰～ 2.5Y8/4淡黄	2.5Y7/6明黄褐	－	青灰色～淡黄色で油脂状光沢を放つ　部分的に白くオパール化する
石英1	無色透明	無色透明	－	無色透明　ガラスのようであるが角の鋭さはない

(『新版 標準土色帖』(発行:日本色研事業株式会社)に準拠)



第53図　第3文化層 第6～11ブロック出土石器(1)



第54図　第３文化層 第６～11ブロック出土石器(2)

7．掻器　剥片を横位に用い、側縁が刃部となる。この刃部のうねりを助長するかのように66°～71°に調整され、S字のような曲線を描く。また、剥片時の側面を打面として末端部から打点部へと打点を直進させながら剥片が剥離された痕跡が残ることから、剥片→石核→掻器の変遷がうかがえる。ガラス質黒色安山岩6

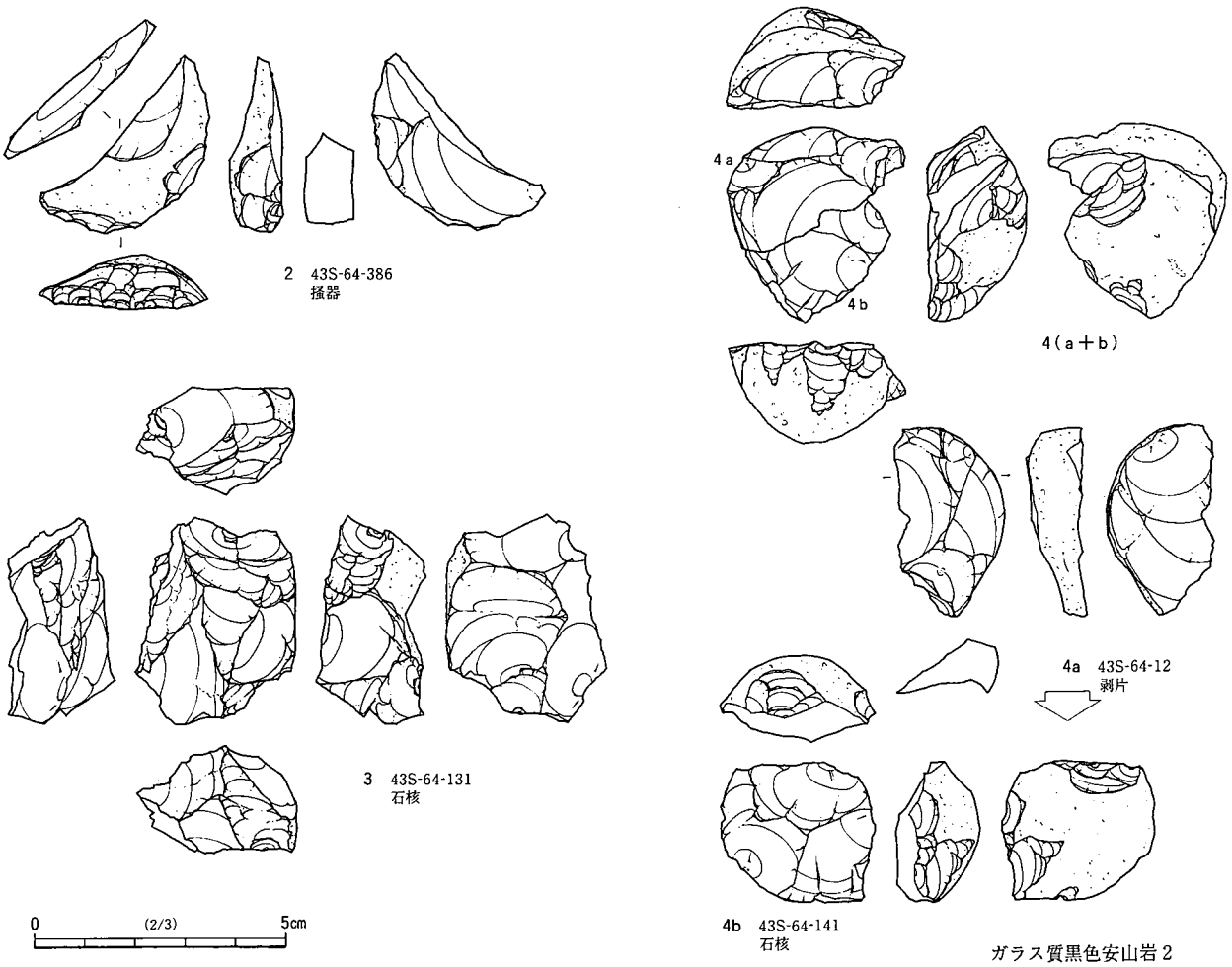
8．ナイフ形石器　剥片の打面部を基部とする。先端は主要剥離面側から加撃され、丸みを帯びる。掻器としての機能も考えられる。ガラス質黒色安山岩８

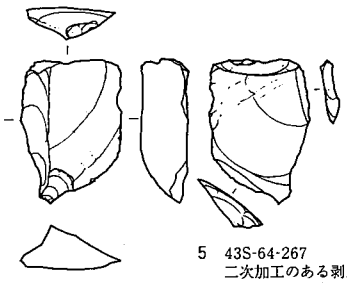
9．(接25)　２点接合　第６ブロックと第８ブロックから出土した剥片２点の接合資料である。約32ｍ離れており、第６ブロックに属する9aが最初に剥がされる。

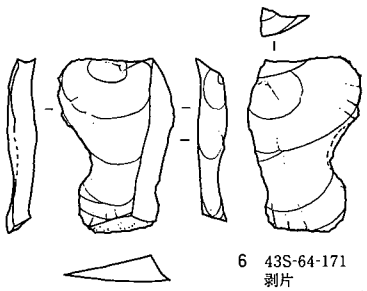
10．(接26)　４点接合　すべて第６ブロックに帰属する。10aが剥離された後、10b、10c、10dは上下に打点を入れ替えながら剥離される。

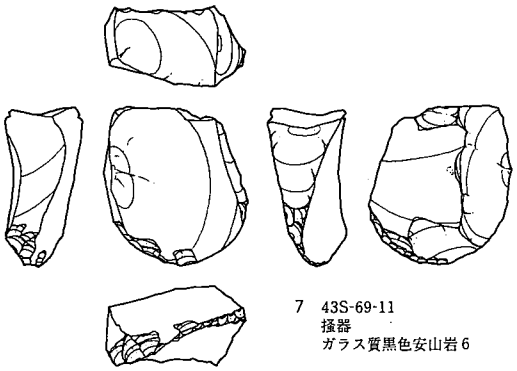
11．(接27)　２点接合　第６ブロックから出土した。11aは打面再生剥片であり、この11aが剥離された後に現れた面を打面にして11bが剥離される。９～11はガラス質黒色安山岩９

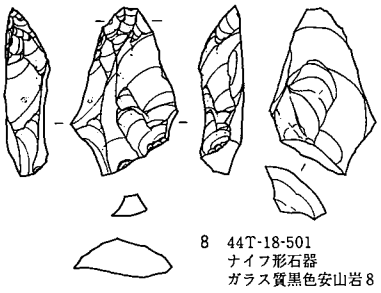
12．剥片　左側面に自然面を残す板状の剥片である。



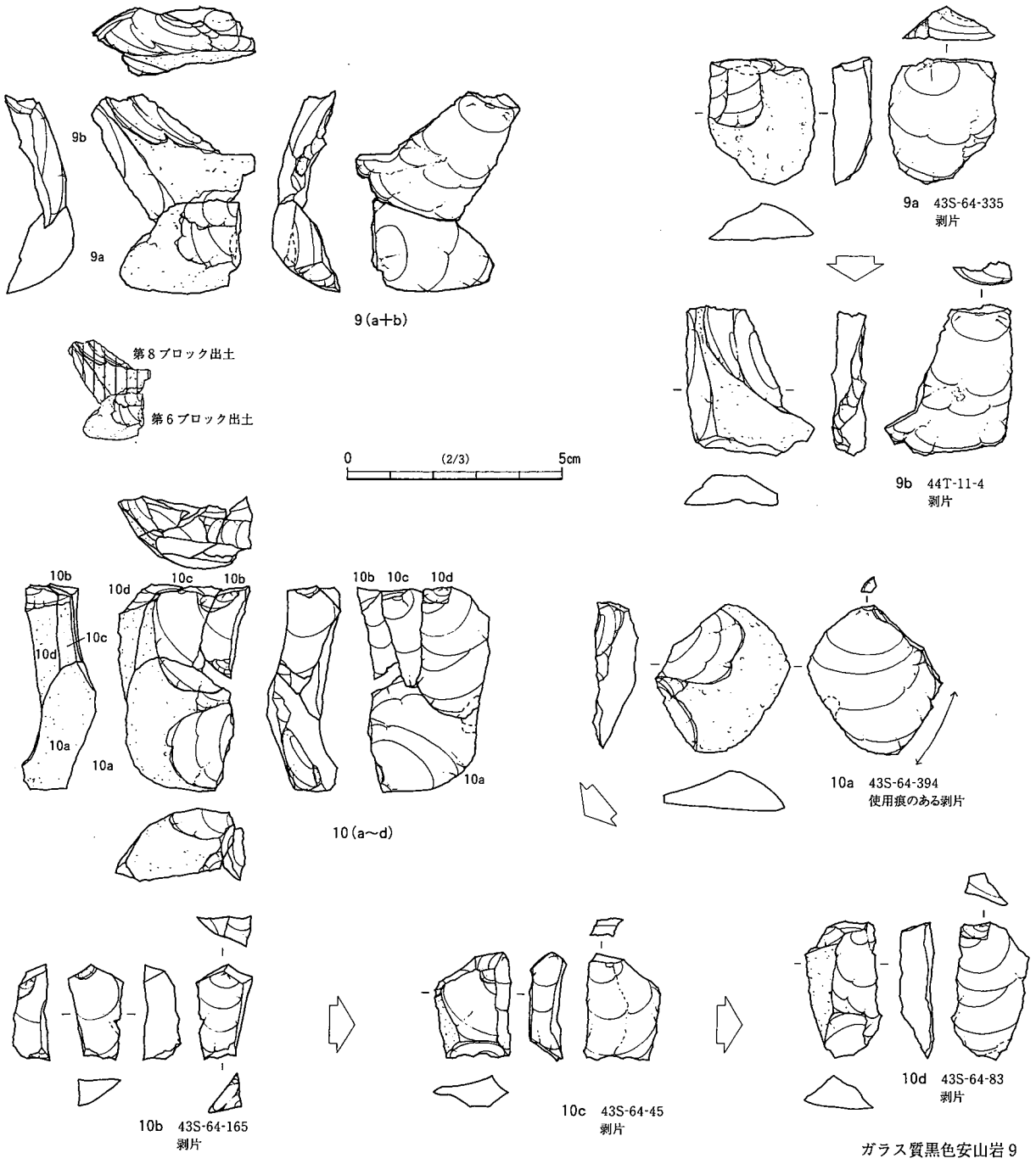








第55図　第3文化層 第6～11ブロック出土石器(3)

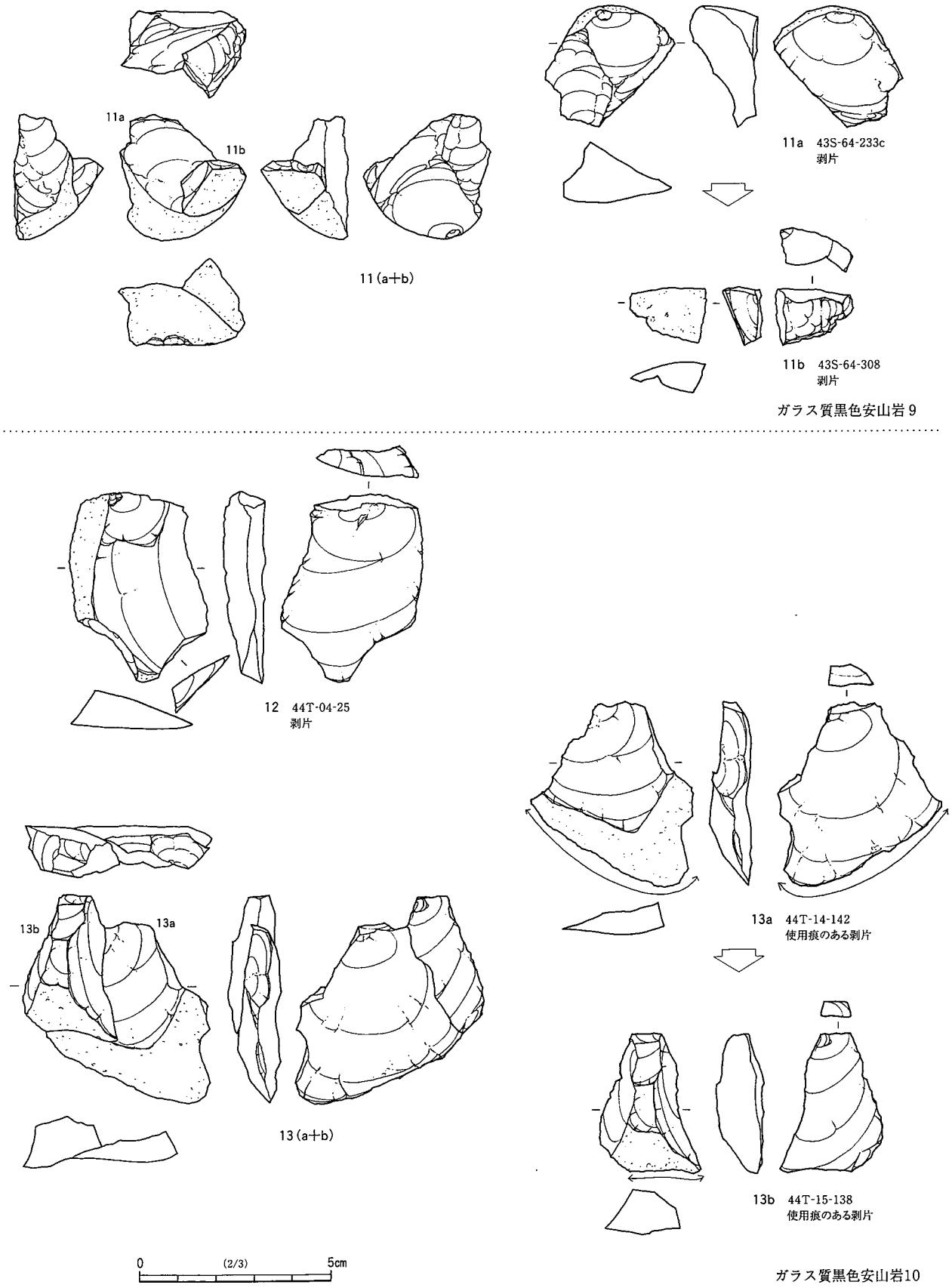


第56図　第３文化層 第６～11ブロック出土石器(4)

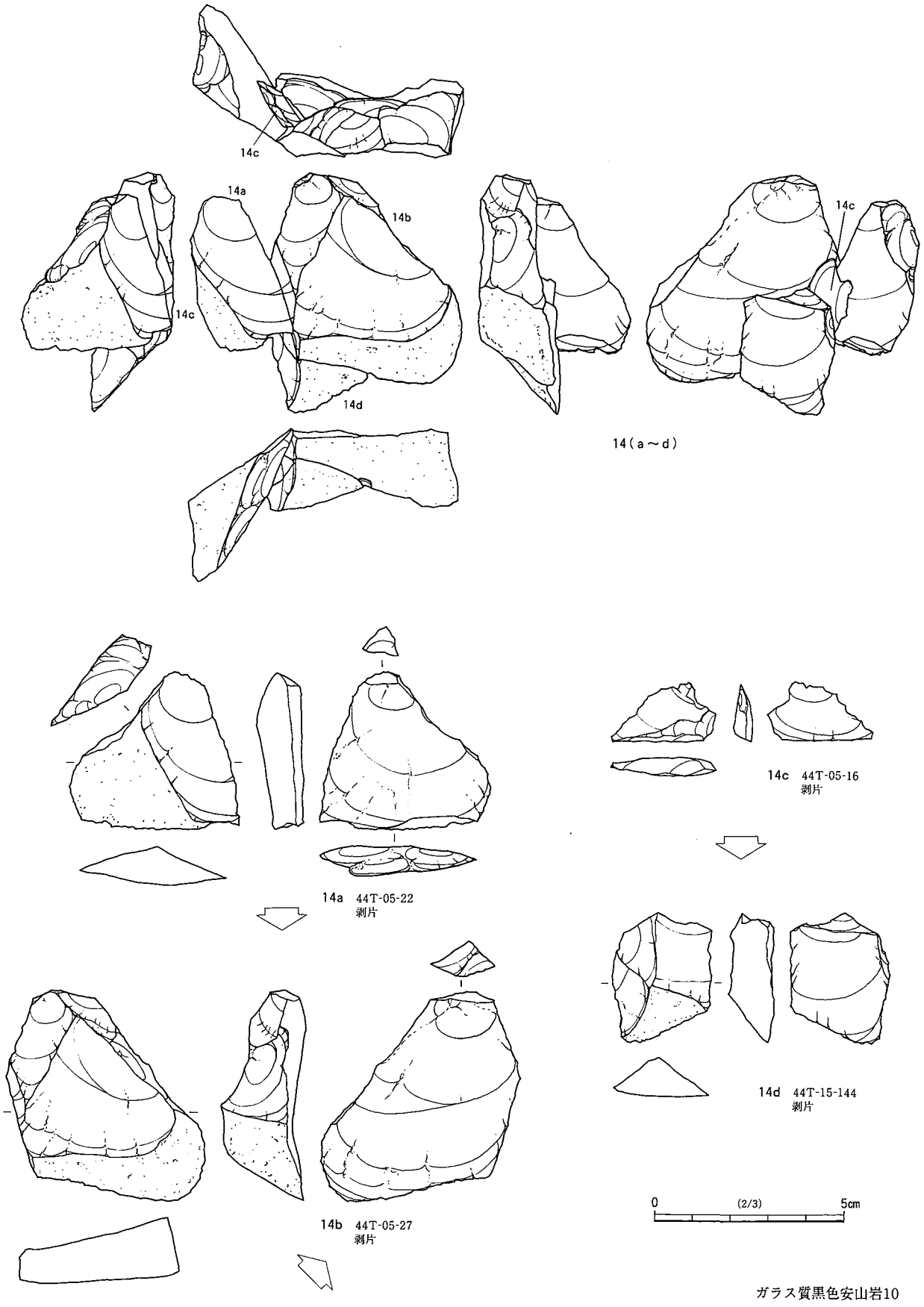
13.（接28）　２点接合　第９ブロックから出土した。13a、13bとも広い打点対縁に使用痕が廻る。

14.（接29）　４点接合　第９ブロックから出土した。14a剥離後、同一方向から数枚剥離され、14bに至る。その後は打撃方向を変えて14c、さらに戻して14dが剥離される。14b右側面の２面は主要剥離面と同時に弾けたものであり、リングの流れや打点は不明確である。また下縁辺の微細な欠けは使用痕かと思われるが風化により不鮮明である。12～14はガラス質黒色安山岩10

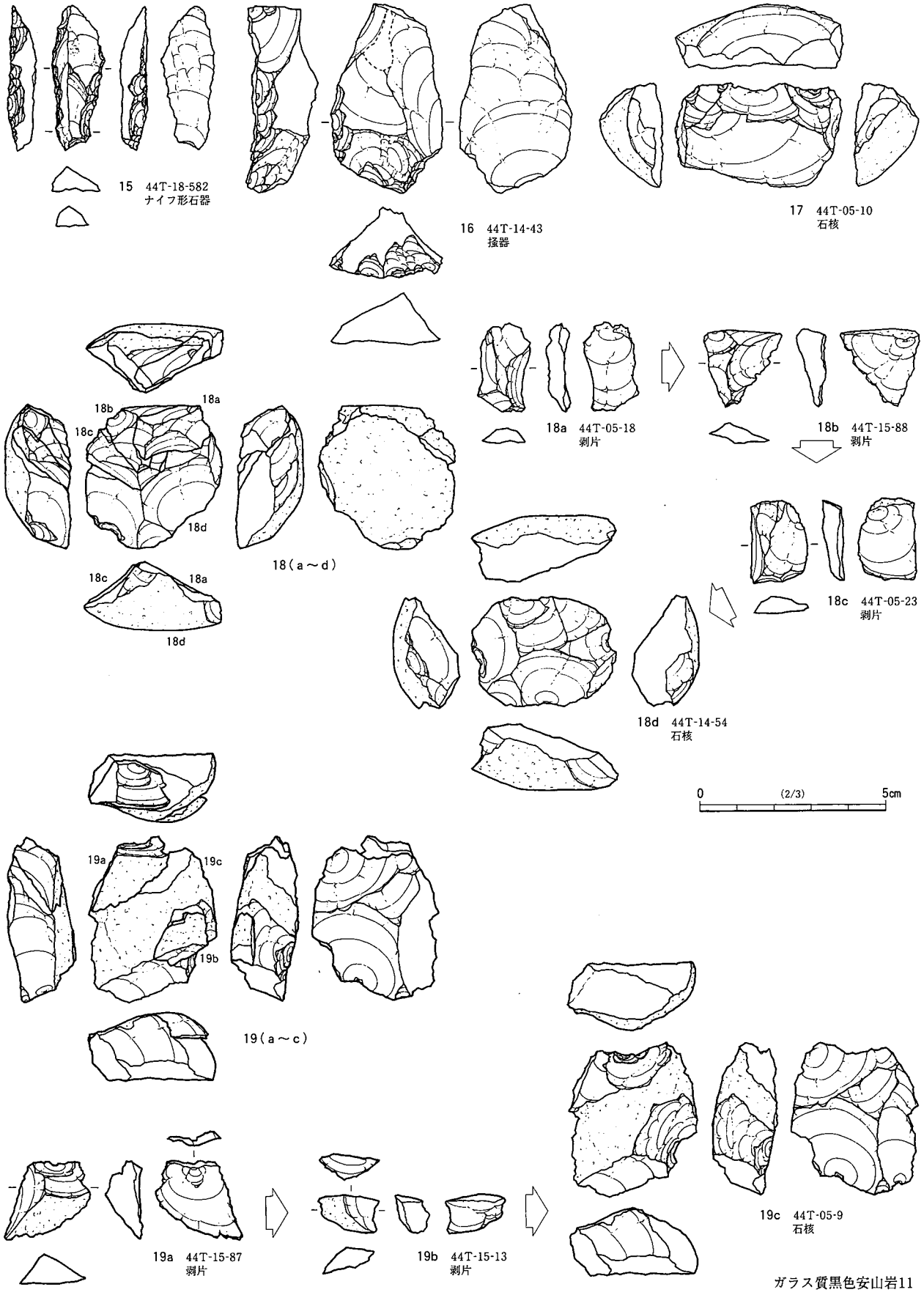
15. ナイフ形石器　基部加工のため素材打面部が除去される。二側縁加工。刃部角は41°を測る。



第57図　第3文化層 第6～11ブロック出土石器(5)



第58図　第３文化層 第6～11ブロック出土石器(6)



第59図　第３文化層 第６～11ブロック出土石器(7)

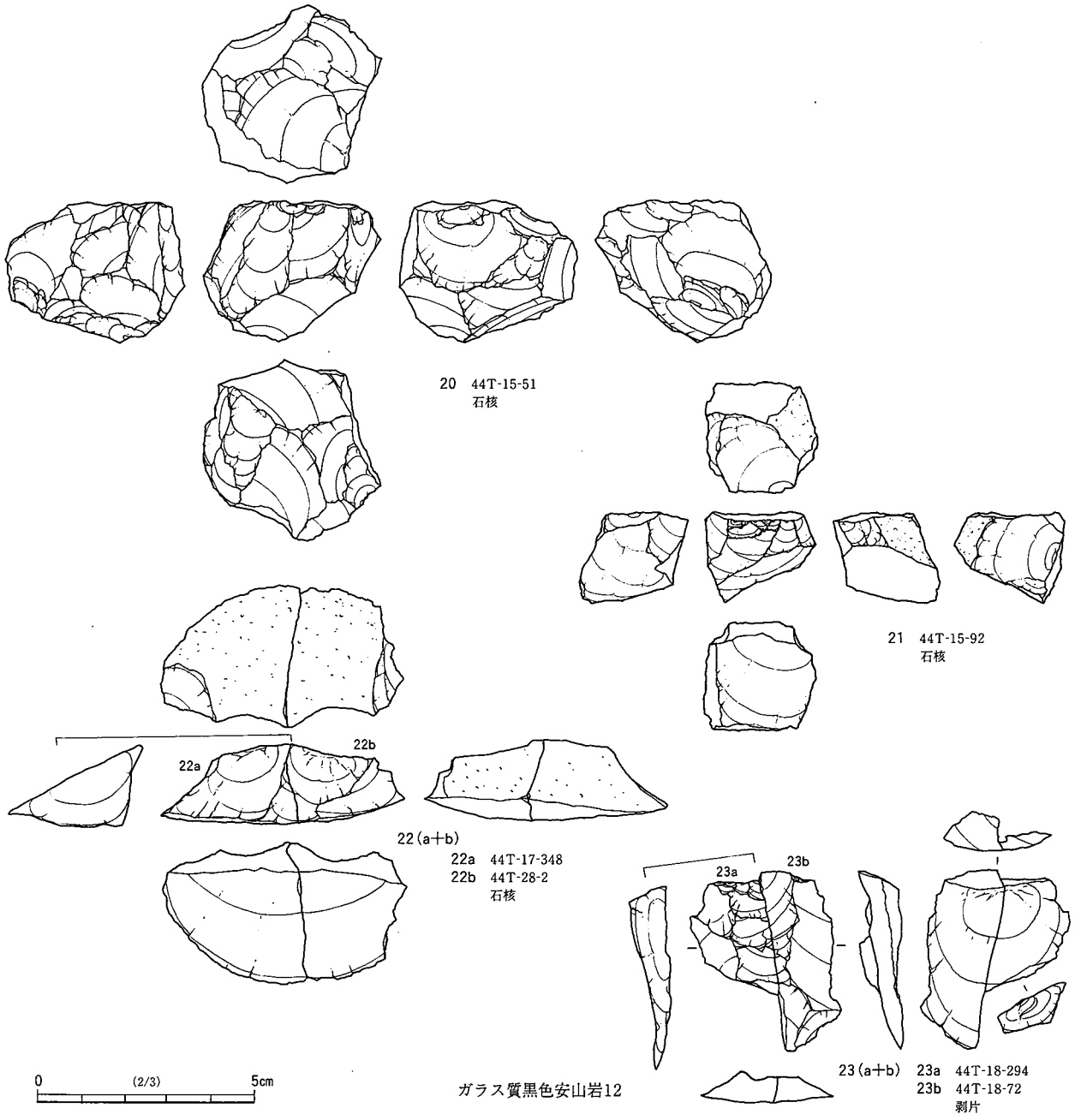
16. 掻器　下半部に最大幅を持つ。左側面から下端部は63°～80°、右下端部は急角度で剥離される。

17. 石核　外皮を剥ぐように左右の自然面を削ぎ、打面部を作出した後、加撃される。中央部に残る最終剥離痕は打面を深く抉るが、一側縁に連なる加工痕は削器作出を目的としたものと思われる。

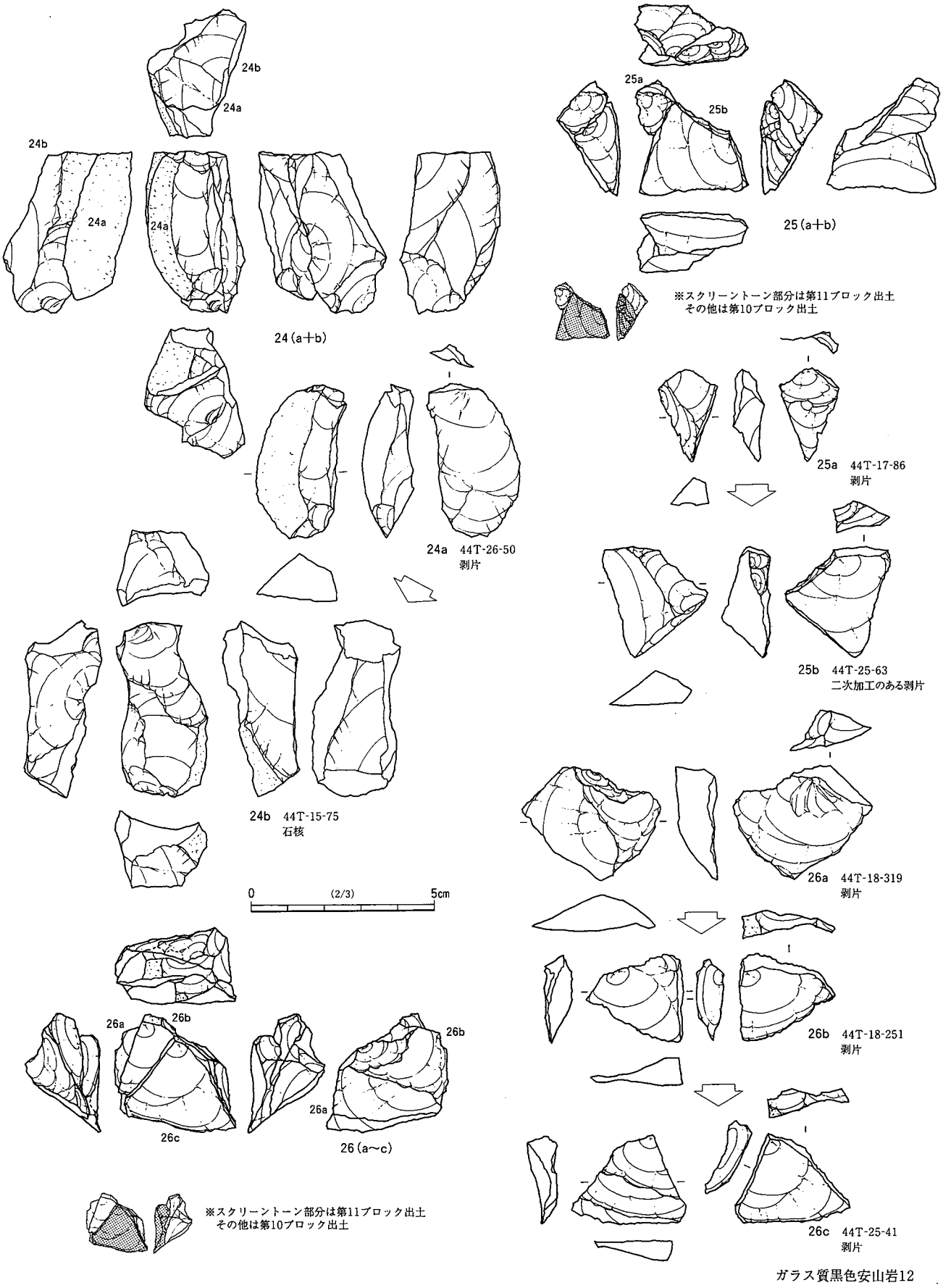
18.（接30）　４点接合　18a・18b・18cとも自然面から順に剥がされた後の18dからは、求心的な加撃により貝殻状の剥片が剥離される。

19.（接31）　３点接合　打点を移動し、多方向から剥片剥離が行われる。15は第10ブロック、16～19は第９ブロックから出土した。15～19はガラス質黒色安山岩11である。

20・21. 石核　打面作業面置換型の石核である。共に第９ブロックから出土している。



第60図　第３文化層 第6～11ブロック出土石器(8)



第61図　第３文化層 第６～11ブロック出土石器(9)

22.（接32） ２点接合　第10ブロックから出土した。剥片素材の石核である。17と同様、礫両端を落とした後、厚みのある板状剥片を作出し、平坦面から加撃される。打点対縁の広い剥片作出が目的であろう。

23.（接33） ２点接合　第10ブロックから出土した。打点直下折れの剥片である。

24.（接34） ２点接合　第９ブロックの石核と第11ブロックの剥片の接合資料である。

25.（接35） ２点接合　第10ブロックから剥片、第11ブロックからは二次加工のある剥片が11ｍ離れて出土した。

26.（接36） ３点接合　第10ブロックから26a・26bの剥片、第11ブロックからは26cが出土している。25、26のブロック間接合資料からは、第10ブロックで剥離されたものが第11ブロックに持ち込まれたか、剥離作業の場が移された可能性が考えられる。５点はおおむね三角形状である。

27.（接37） ４点接合　第９ブロックから出土した。大型の素材礫を目的に応じて剥離していく工程が確認できる資料である。27a ～ 27cは27dの打面部分であるが２片に切断（折断か）した上で27aは掻器に、27cは二次加工のある剥片に加工される。27dの作業面は、すべて打面からの加撃による剥離痕であるが、この石核に接合する剥片は検出できなかった。

28.（接38） ５点接合　第９ブロックから出土した。28aを剥いだ後の剥離面を打面として、28b ～ 28dの順に剥離される。20 ～ 28はガラス質黒色安山岩12

29・30. 石核　第10ブロックから出土した。17、22同様、表皮に自然面を多く残した板状剥片を素材にした石核である。29は平坦な自然面を、30は剥離した小口面を打面に設定した石核である。

31.（接39） ３点接合　第７ブロックから出土した。剥片２点、石核１点の接合資料である。器面調整を目的とした剥片を素材として、背面からの加撃で31a、31bを含む剥片が剥がされ、31cの成形と端部の調整加工が施されている。29 ～ 31はガラス質黒色安山岩13

32.（接40） ８点接合　第７ブロックから二次加工のある剥片１点・剥片２点、第10ブロックから剥片５点が出土した。ソフトボール大の自然礫が素材であり、出土ブロックの違う２つの塊は、自然面の一部がわずかに接合することから、分割された素材が各々のブロックにおいて剥離されたものと思われる。打点を上下に入れ替えながら32b、32c、32dが剥離される。32f、32g、32hは剥離の末端が三つ巴に入れ込み、新旧不明である。流紋岩１

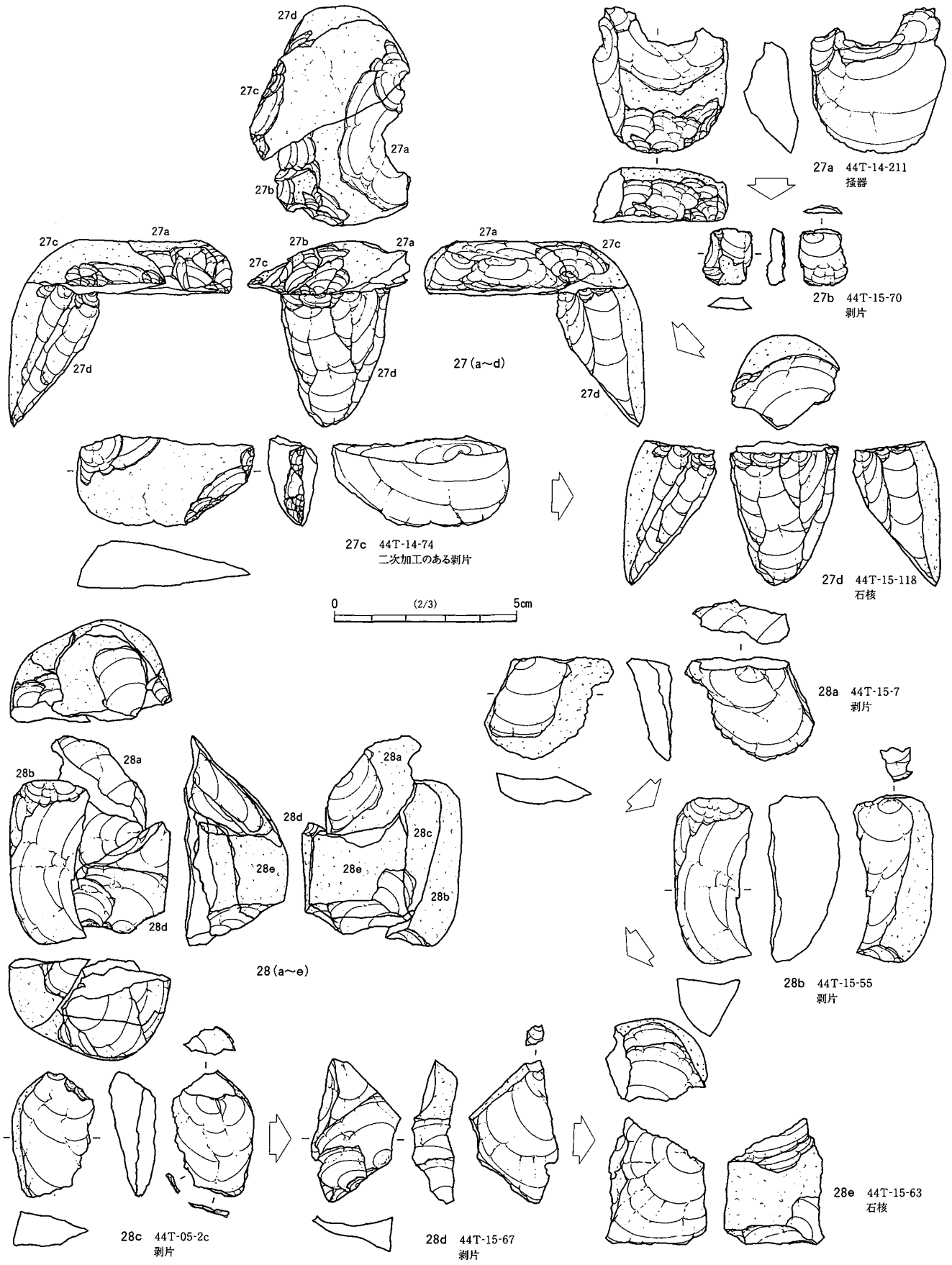
33. ナイフ形石器　一側縁加工であり、基部が背稜からも加工される。断面は中高三角形状を呈する。

34. 二次加工のある剥片　剥片の周縁は加工痕が廻る。特に両側縁の収斂する端部には尖端を意図するような加工が施され、錐状となっている。

35. 石核　素材の一端を剥いで打面を作出し、剥片剥離が行われた石核。33 ～ 35は第９ブロック出土の流紋岩３

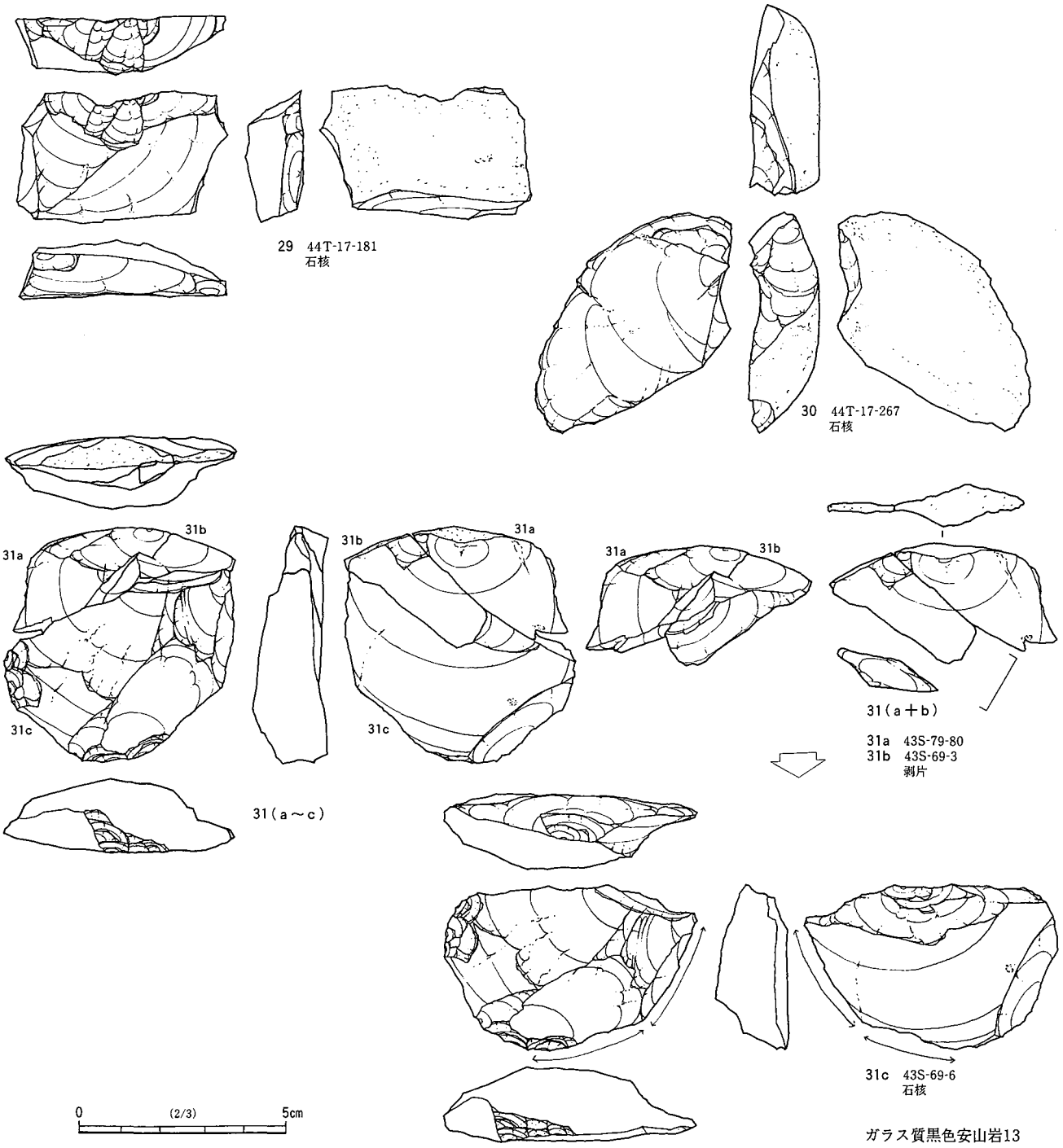
36.（接41） ８点接合　36a ～ 36gの７点は第11ブロック、36hは第10ブロックから出土した。２地点間は10ｍである。36a ～ 36eを素材塊Ａ、36f ～ 36hを素材塊Ｂとして剥離工程をみていく。素材塊Ａは厚みのある剥片素材の石核であり、36b ＋ 36c ＋ 36dと36eに分割され、中でも36eは平坦な自然面が打面に設定され、規則的な剥片生産が行われている。素材塊Ｂは36f、36g、36hの３片に分割される。36fは末端周縁に急角度の調整加工が施されて掻器にしつらえられる。36gは設定された打面から同一方向に加撃を進めて、小型の縦長剥片を作出した痕跡がうかがえる。36hは残核である。流紋岩４

37.（接42） ２点接合　剥片２点の接合資料　第11ブロック出土。流紋岩５



ガラス質黒色安山岩12

第62図　第３文化層 第６～11ブロック出土石器(10)

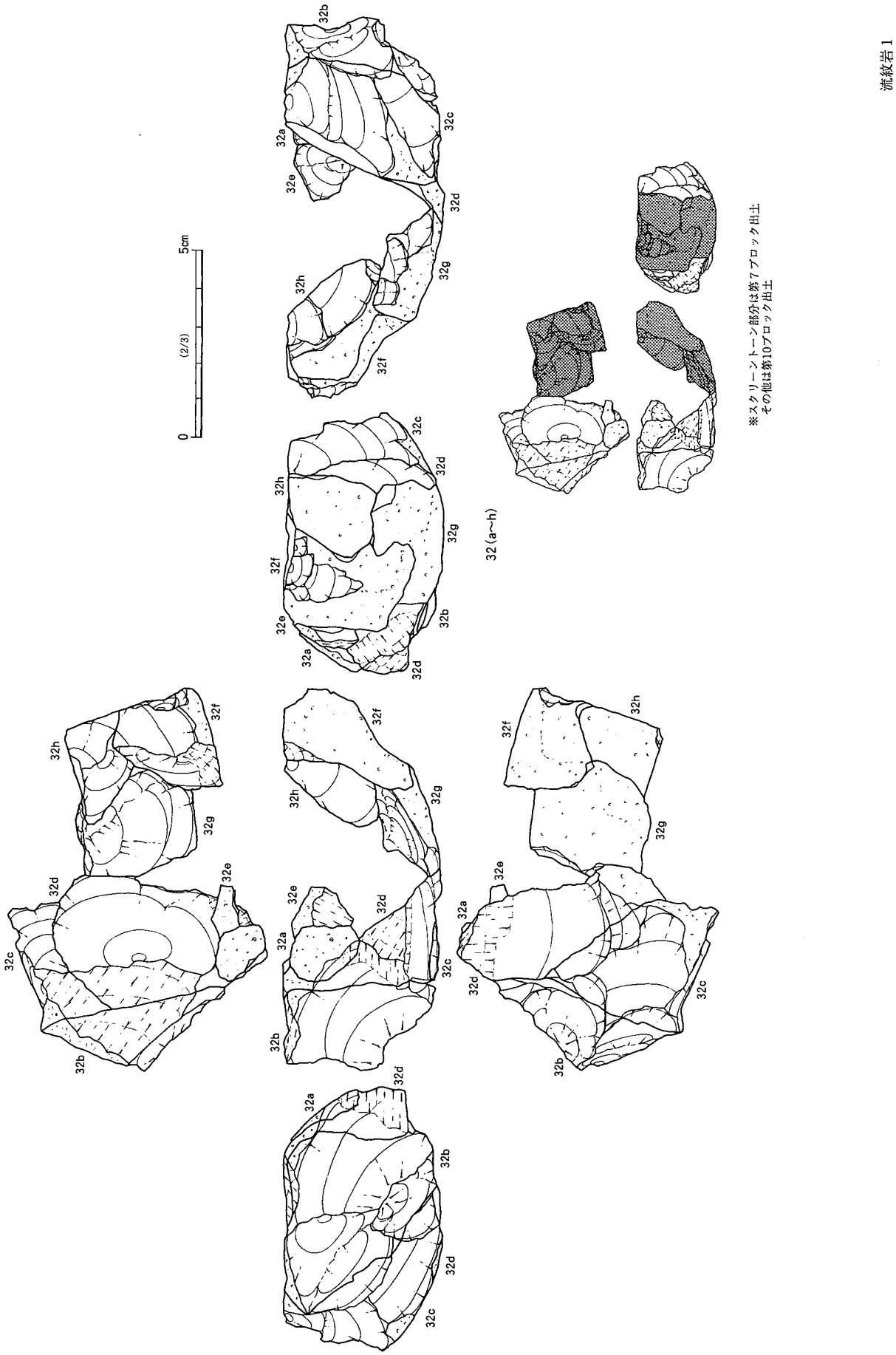


第63図　第３文化層 第６～11ブロック出土石器(11)

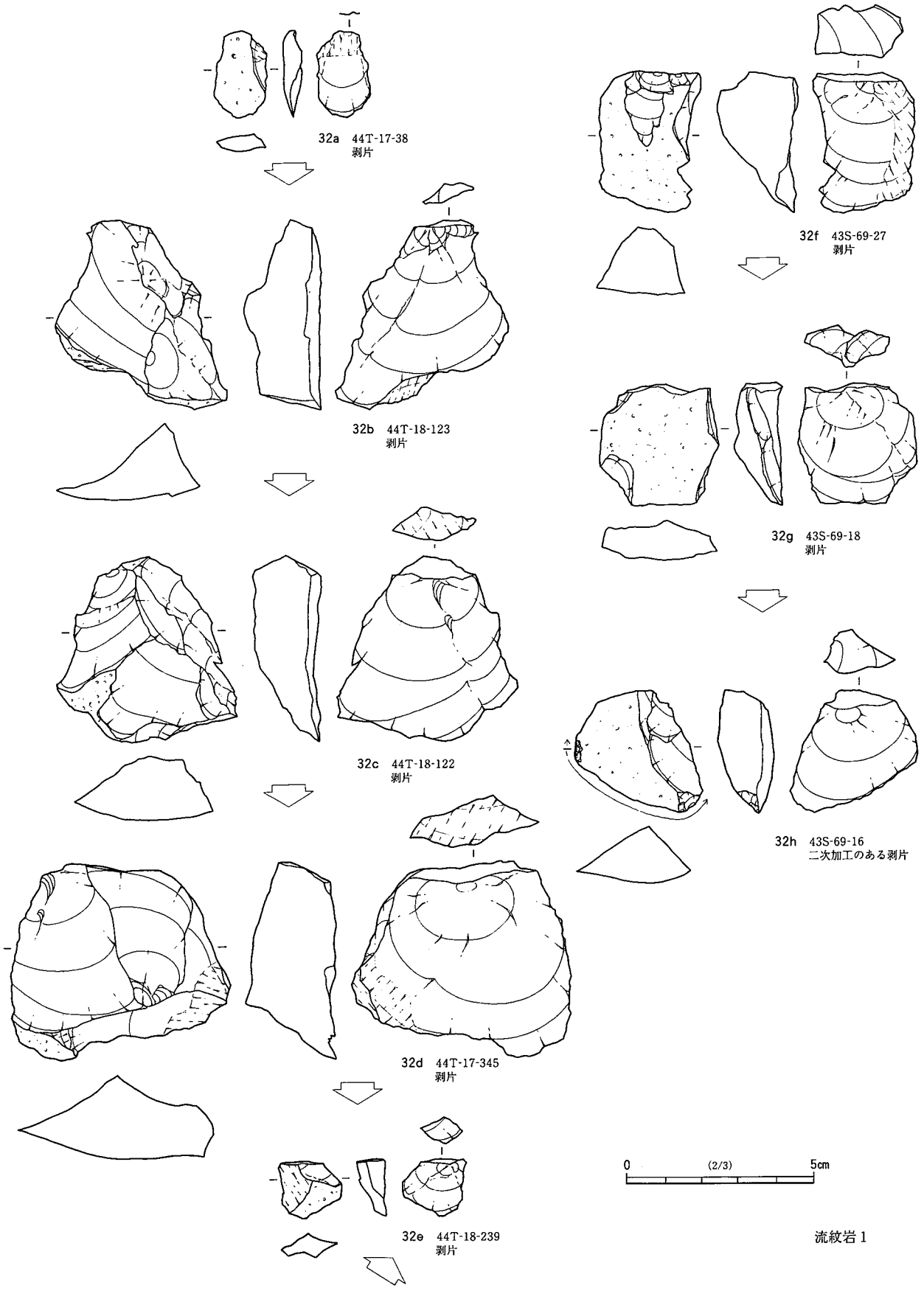
38. 二次加工のある剥片　第11ブロック出土　背面は剥離痕(リング・フィッシャー)が観察される風化剥離面である。丸みのある三角形は蛤の様であり、縁辺は二次加工された後に使用される。黒曜石１

39. 二次加工のある剥片　第11ブロック出土　右側縁下部に潰れ状の加工痕があり、ナイフ形石器の基部加工に通じる。上部は折れて欠損する。黒曜石２

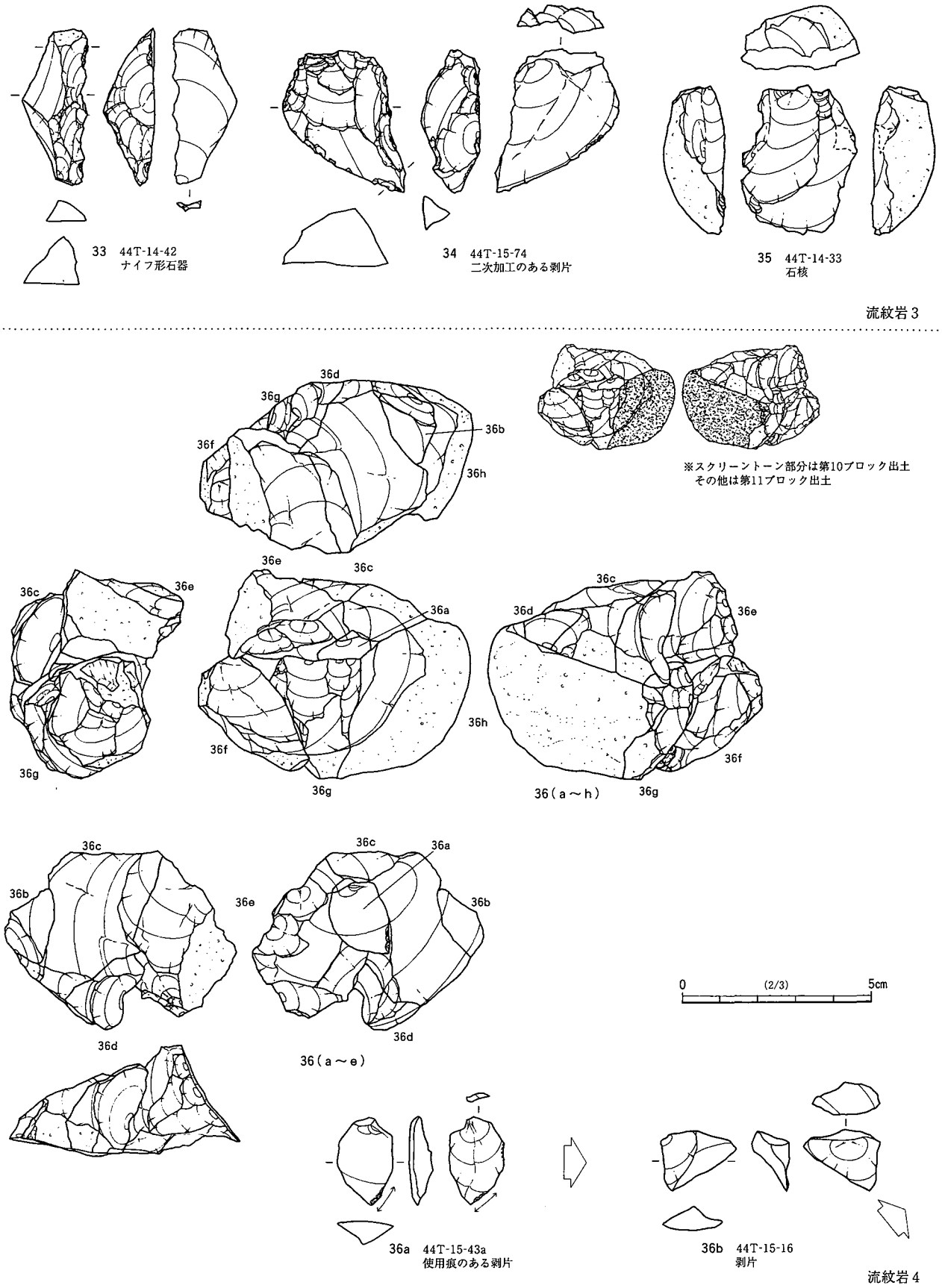
40. 二次加工のある剥片　第９ブロック出土　自然面と主要剥離面のなす右側縁下部には使用による微細剥離痕があり、器体左部は腹面から加撃されて抉れる。頁岩１



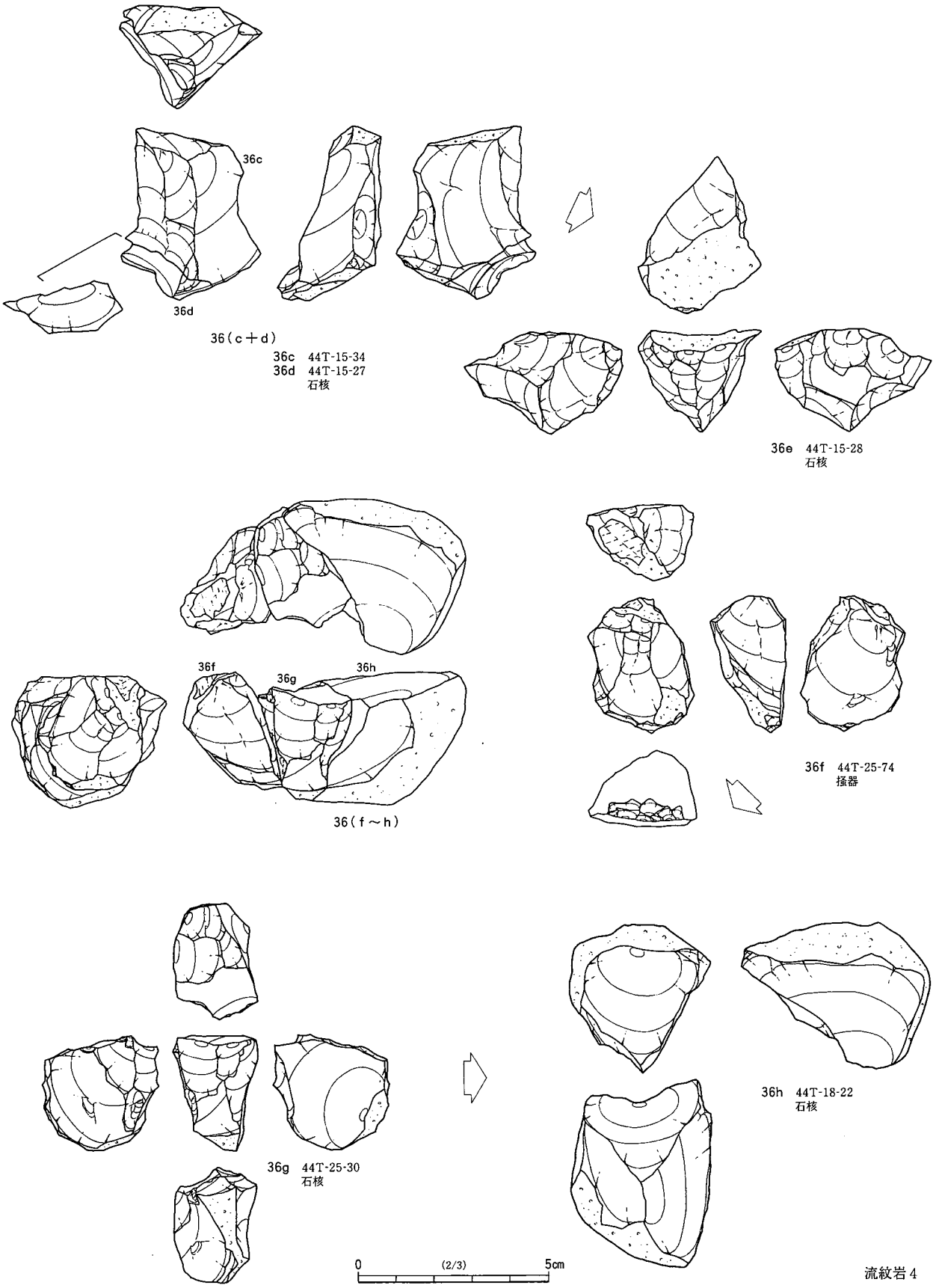
第64図　第3文化層 第6～11ブロック出土石器(12)



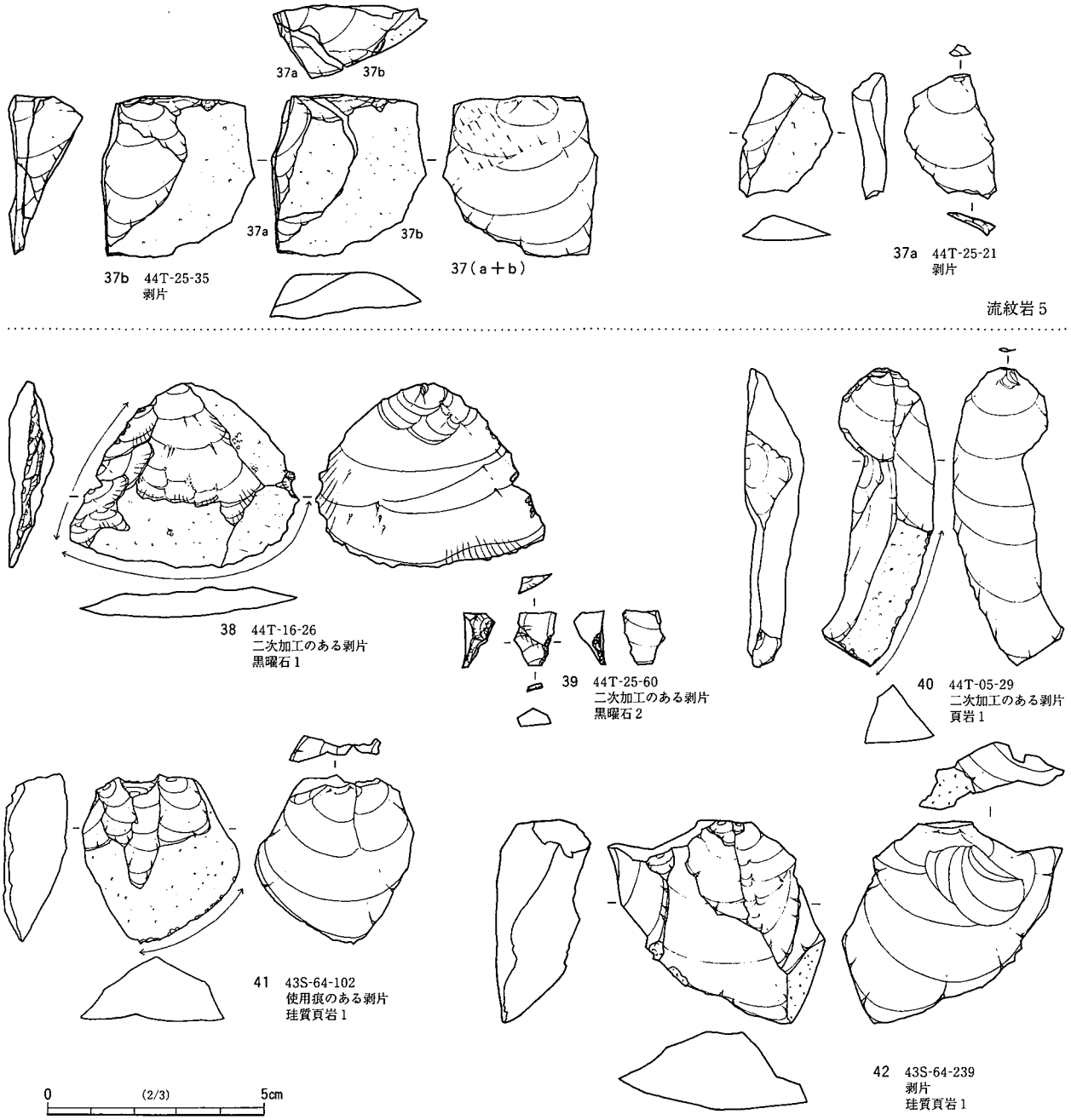
第65図　第3文化層 第6～11ブロック出土石器(13)



第66図　第3文化層 第6～11ブロック出土石器(14)



第67図　第３文化層 第６～11ブロック出土石器(15)

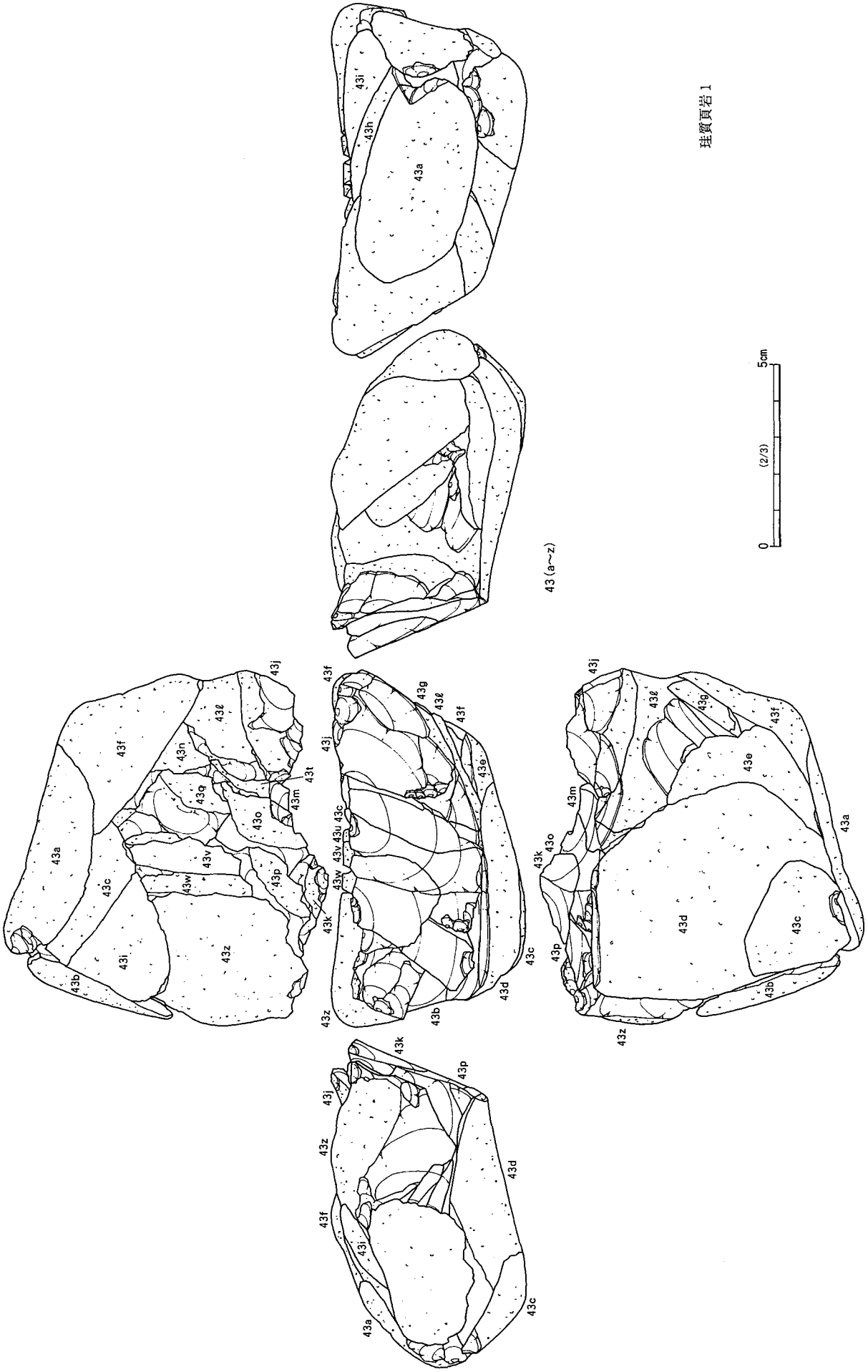


第68図　第3文化層 第6～11ブロック出土石器(16)

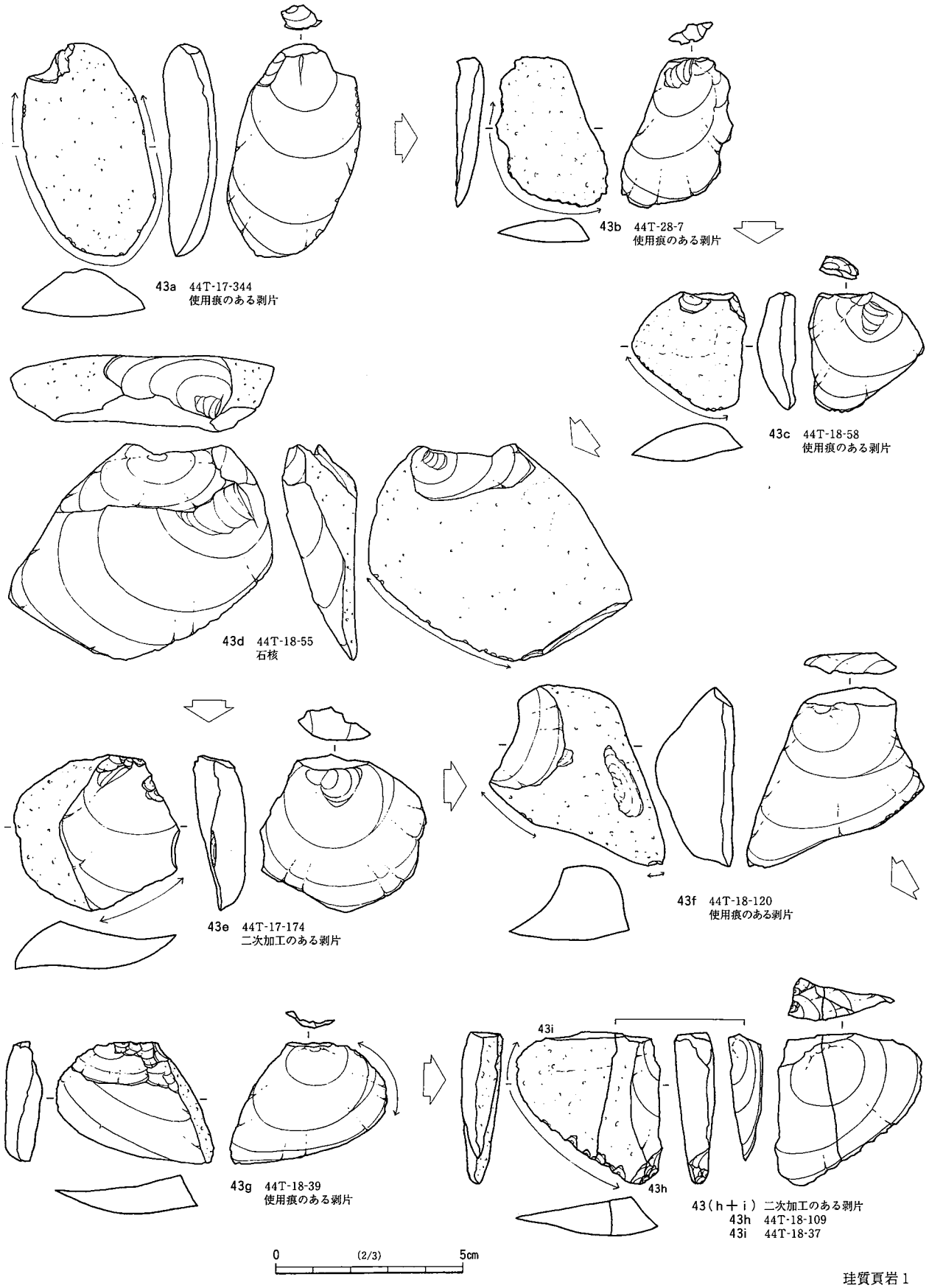
41. 使用痕のある剥片　頭部調整のある剥片の縁辺に使用による刃こぼれあり。

42. 剥片　背面には3面以上の剥片剥離痕あり。一連の流れで42も剥離されている。41､42とも第6ブロック出土　珪質頁岩1

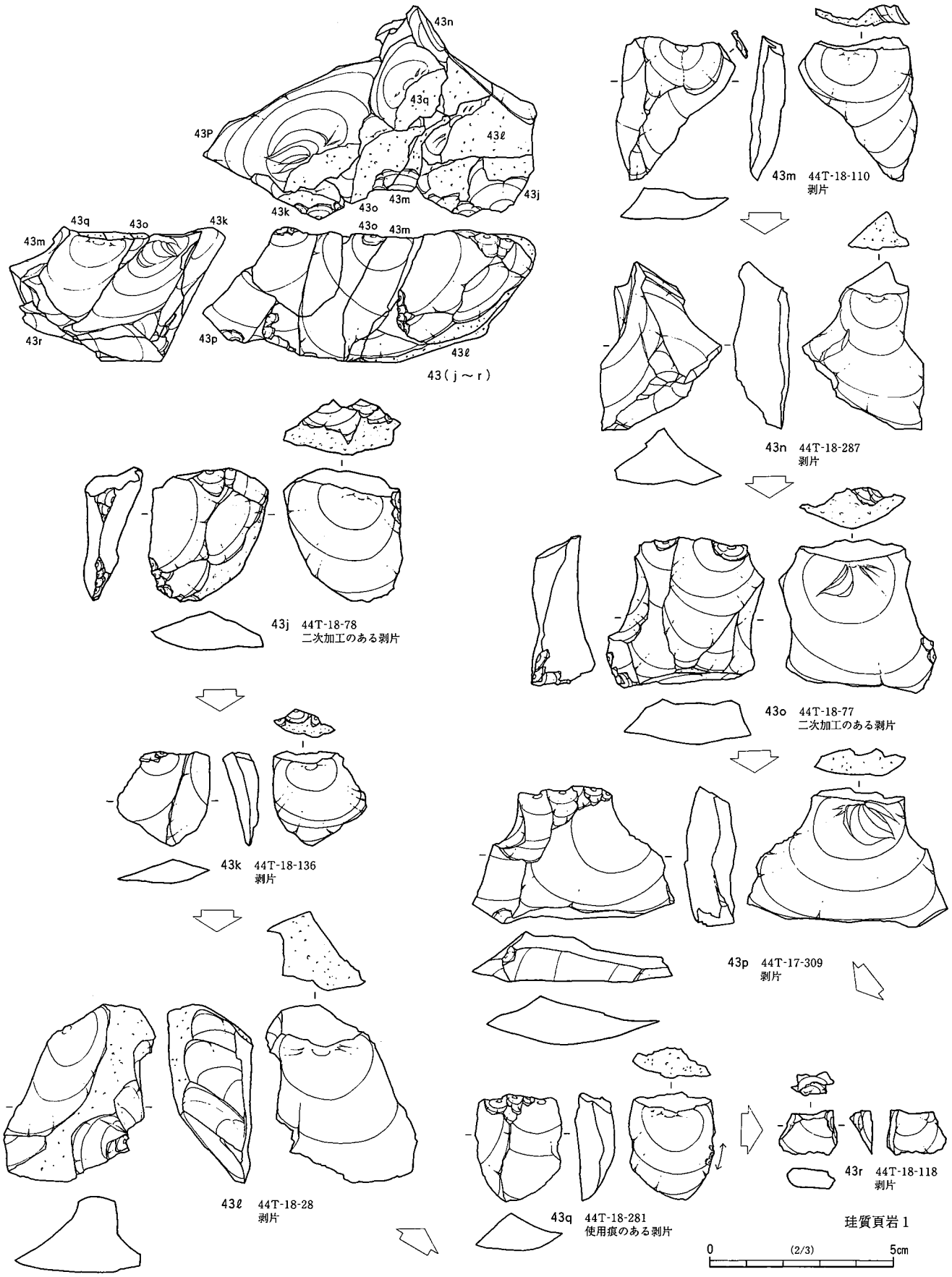
43.（接42）　26点接合　第10ブロック出土　礫端を加撃して自然面を削いだのち、43aが剥離される。43aはこの珪質頁岩1の尾根ともいうべき角状の稜であり、この剥離によって43c・43d・43eの打面が作出される。43h＋43i剥離後に現れた面はB塊（43s～43z）の打面となり、打点は打面の稜を調整しながら進み、直線的な軌跡を辿る。こうしてできた剥片のうち、43s・43t・43v・43wは末端が加工され、二次加工のある剥片や掻器となる。A塊（43j～43r）は43rを除いた8点が自然面打面であり、この広い打面を



第69図　第３文化層 第６～11ブロック出土石器(17)



第70図　第3文化層 第6～11ブロック出土石器(18)



第71図　第３文化層 第６～11ブロック出土石器(19)

振り子のように左右に行きつ戻りつしながら加撃して剥片剥離が行われている。このうち２点は二次加工され、１点は使用による微細剥離痕が看取される。

44.（接44） ３点接合　第10ブロック出土　組成上は剥片２点の接合資料である。41～44は珪質頁岩１を母岩とする。珪質頁岩１は第６ブロックに３点、第10ブロックに37点の計40点が出土した。接合関係がみられたものは接43が26点、接44が３点の計29点である。

45.（接45） ９点接合　８点は第10ブロック、１点は第６ブロックから出土した。最長で60ｍ離れている。第10ブロックで剥離された剥片のうちの１点を第６ブロックにて使用したものと思われる。剥離工程は礫端片である45aを始め、外皮を削ぐように45dまでの作業が進められ、頭部あるいは打面を調整しながら45e～45iが順次剥片剥離されていく。二次加工が２点、使用痕が４点に認められる。珪質頁岩２

46.（接46） ４点接合　３点が第７ブロック、１点が42ｍ離れた第10ブロックから出土した。第７ブロックで剥離された１点が第10ブロックに運ばれたものである。器種組成は使用痕のある剥片２点、剥片１点、石核１点である。厚みのある珪質な素材礫の一稜をチョッピングトゥールのように交互から加撃し横長の剥片を作出した後、剥離面打面から46cを含む数片が剥離されている。珪質頁岩３

47. 使用痕のある剥片　直線的な打点対縁に刃こぼれ痕あり。第10ブロック出土　珪質頁岩４

48.（接47） ２点接合　第７ブロック出土　厚みのある大型の剥片から剥片と掻器が作出されている。48bの端部は70°～74°で加工される。珪質頁岩４

49.（接48） ２点接合　第７ブロック出土　48と同様である。端部は65°～70°で加工される。

50.（接49） ５点接合　第７ブロック出土　使用痕のある剥片、砕片、石核が１点ずつ、剥片は２点である。49・50は珪質頁岩５

51.（接50） ５点接合　４点が第８ブロック、１点が第７ブロックから出土した。器種組成は使用痕のある剥片３点、剥片１点、石核１点であり、第８ブロックで作出された剥片のうちの１片が第７ブロックに持ち込まれたものと思われる。17ｍ～17.5ｍの距離を移動している。珪質頁岩６

52. 二次加工のある剥片　厚みのある縦長剥片の自然面を残す末端部に連続した小剥離痕がみられる。

53.（接51） ２点接合　剥片と使用痕のある剥片が接合した。52・53は第８ブロック出土で珪質頁岩７

54～56. 使用痕のある剥片　母岩である珪質頁岩８は４点出土中３点を実測しているが、全て同一工程の所産である。頭部・打面は調整された小打面であり、広い打点対縁（末端縁）は底面を有し、使用痕が観察される。54～56は第８ブロック出土

57. 二次加工のある剥片　58aと同様、58bの器形を調整するための剥片であるが、剥離後に両側縁が加工され、下縁辺には使用痕がみられる。57には目的的剥片作出の意図が推察されるが、58との間には接合関係はない。

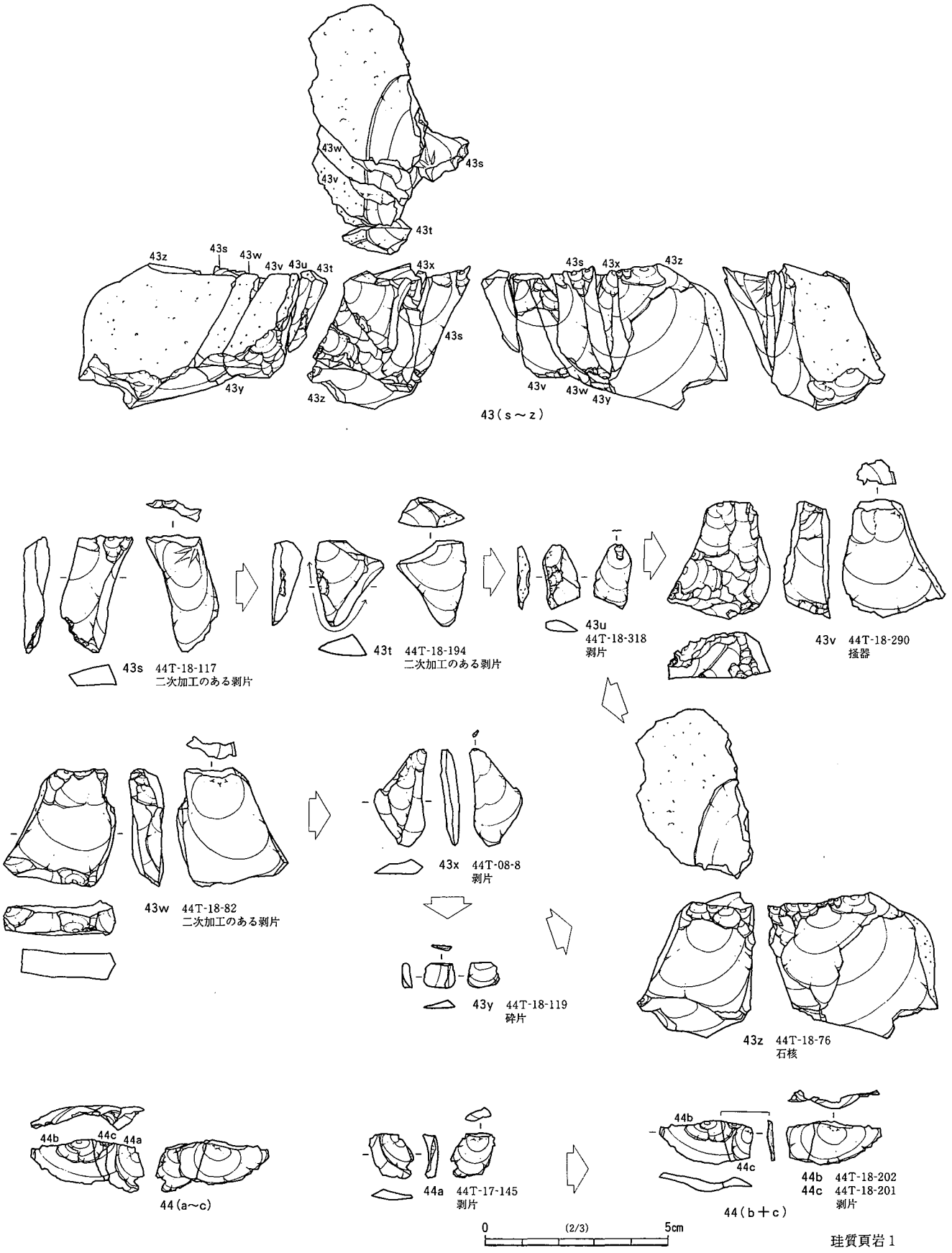
58.（接52） ２点接合　削器とそれを調整するための剥片の接合資料である。素材である分割礫の形状を活かし、主要剥離面側から加撃して急角度剥離で成形されている。57・58は第９ブロック出土　珪質頁岩９

59.（接53） ２点接合　第９ブロック出土　稜上調整された石核から剥片が作出されている。珪質頁岩10

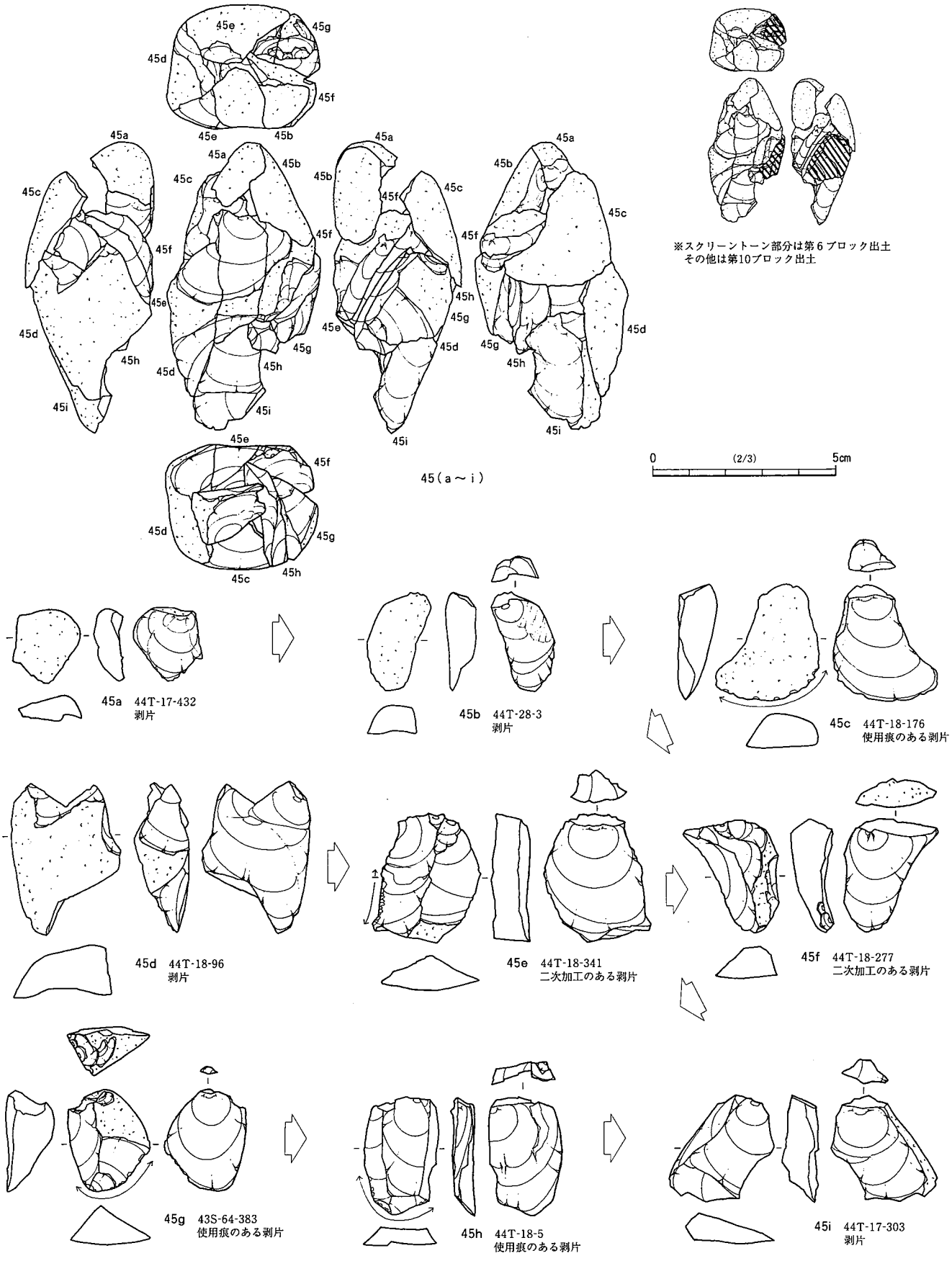
60. 使用痕のある剥片　第９ブロック出土　厚みのある剥片の直線的な縁辺に使用痕が廻る。珪質頁岩11

61. ナイフ形石器　基部加工され、刃部に使用痕あり。器長は約20㎜である。

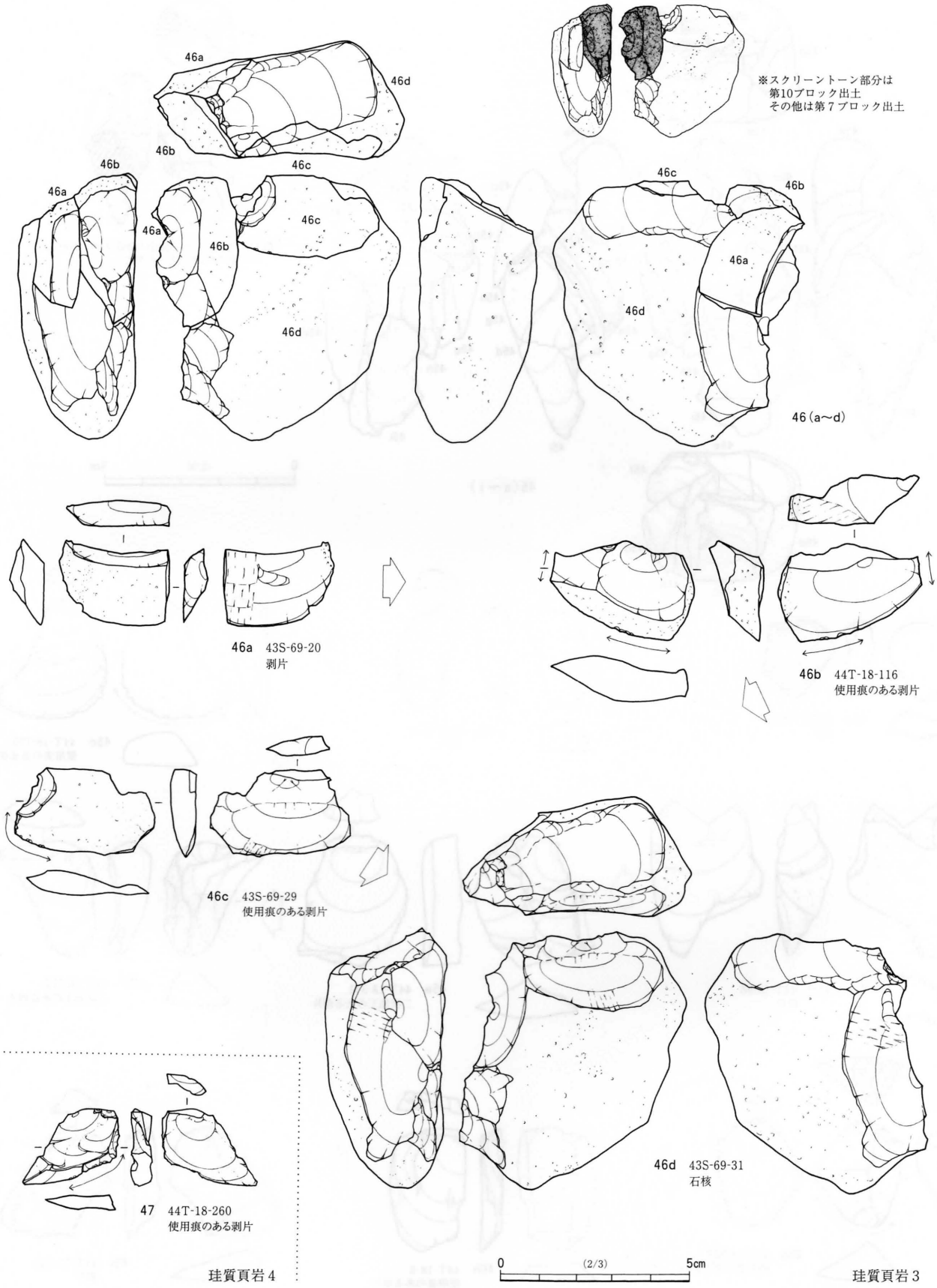
62. 二次加工のある剥片　丸みのある剥片の末端部に背腹両面から加工される。打面部～左肩部にかけては背面にのみ加工痕が残る。



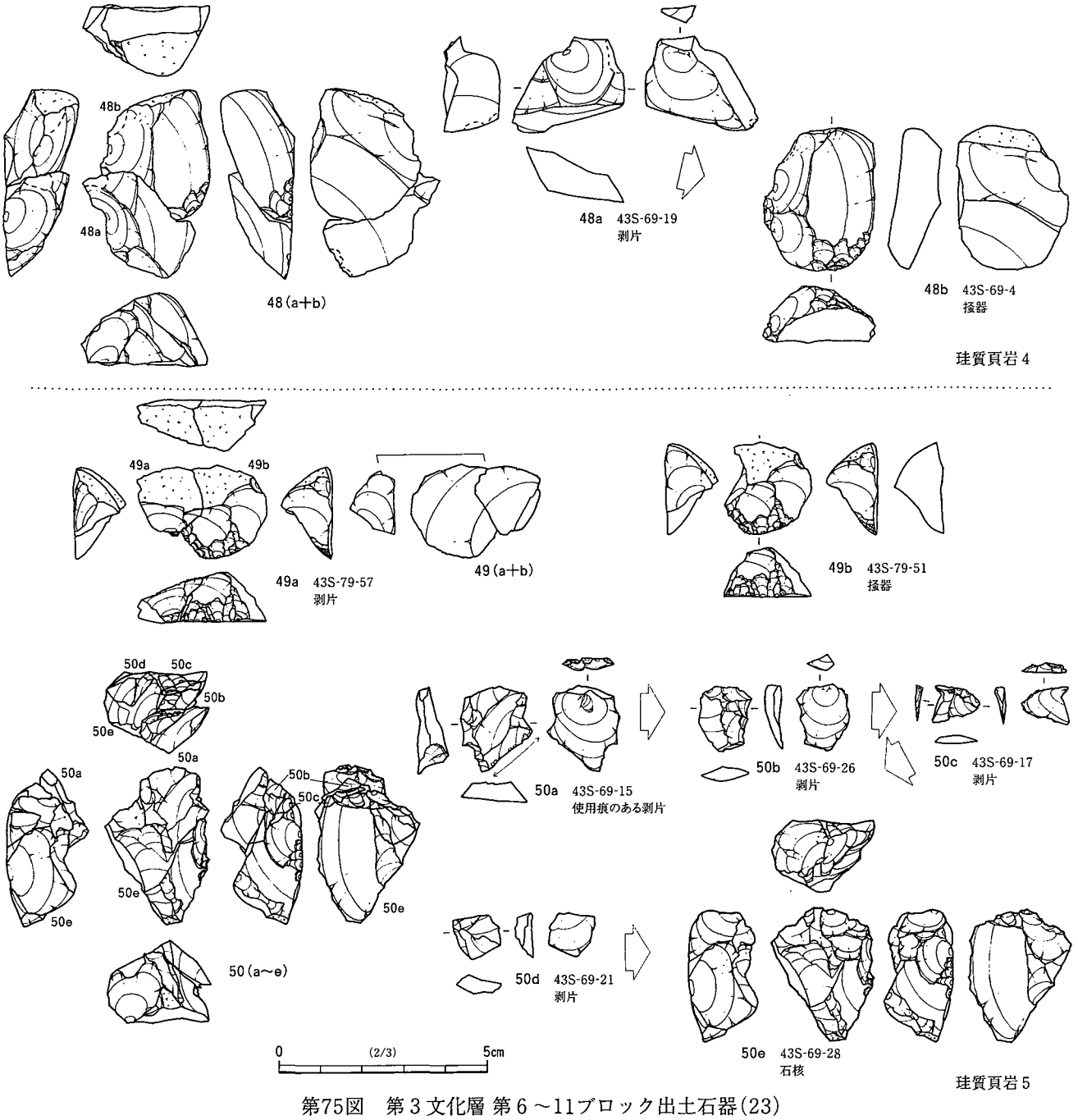
第72図　第3文化層 第6～11ブロック出土石器(20)



第73図　第3文化層 第6～11ブロック出土石器(21)



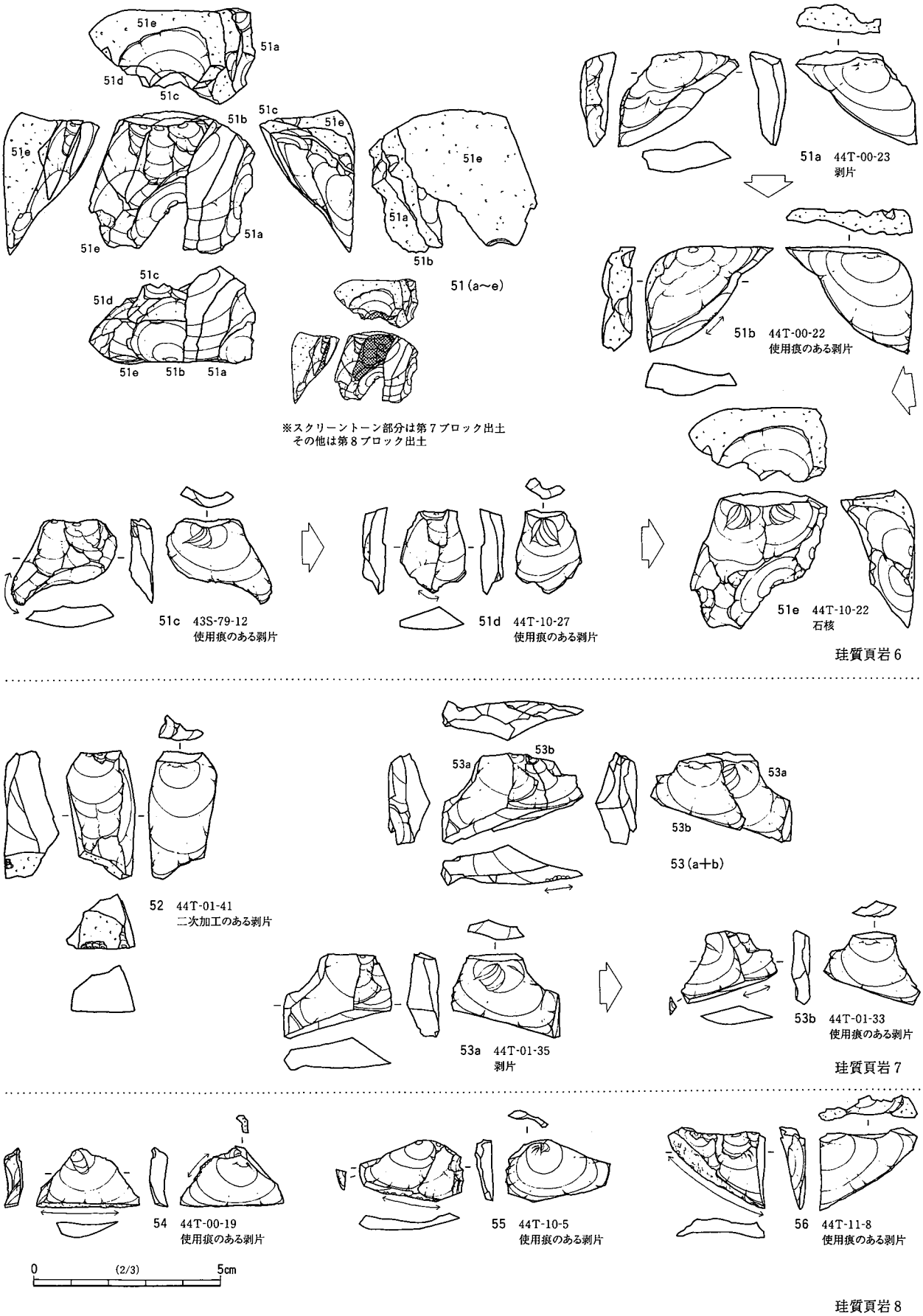
第74図　第３文化層 第６～11ブロック出土石器(22)



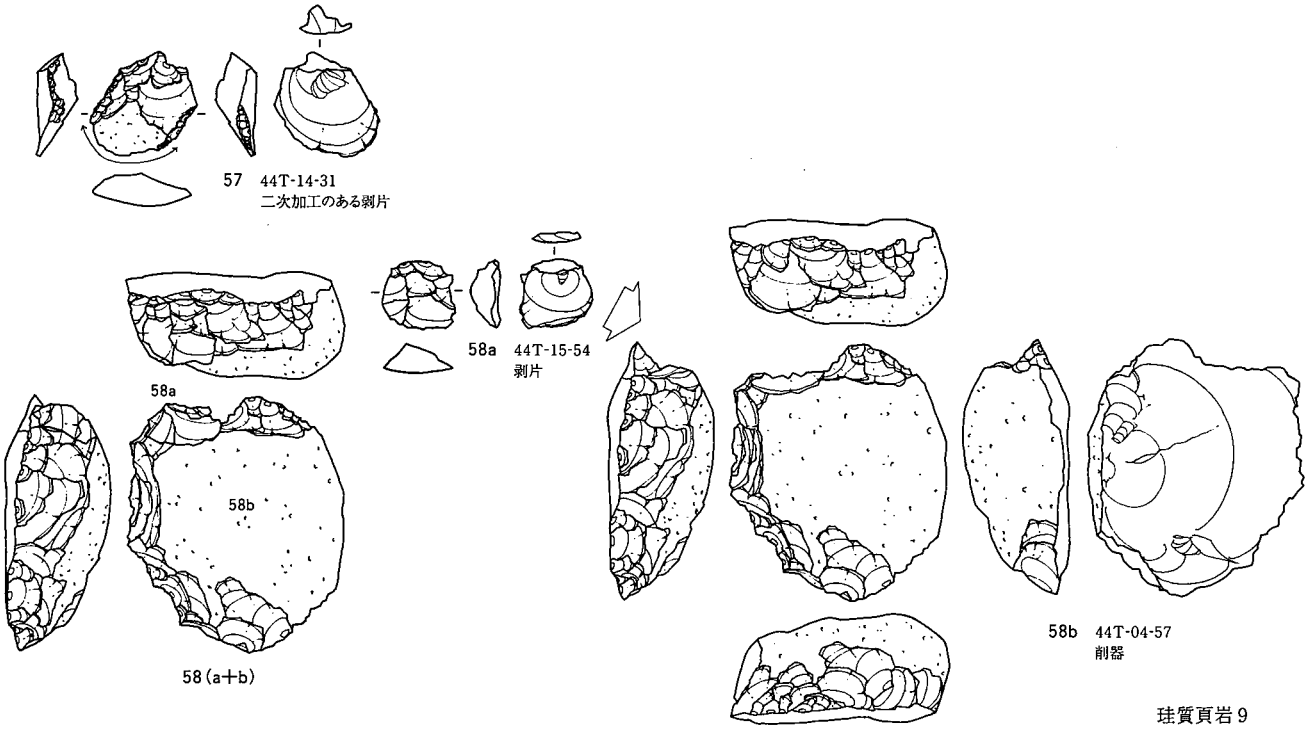
第75図　第３文化層 第６～11ブロック出土石器(23)

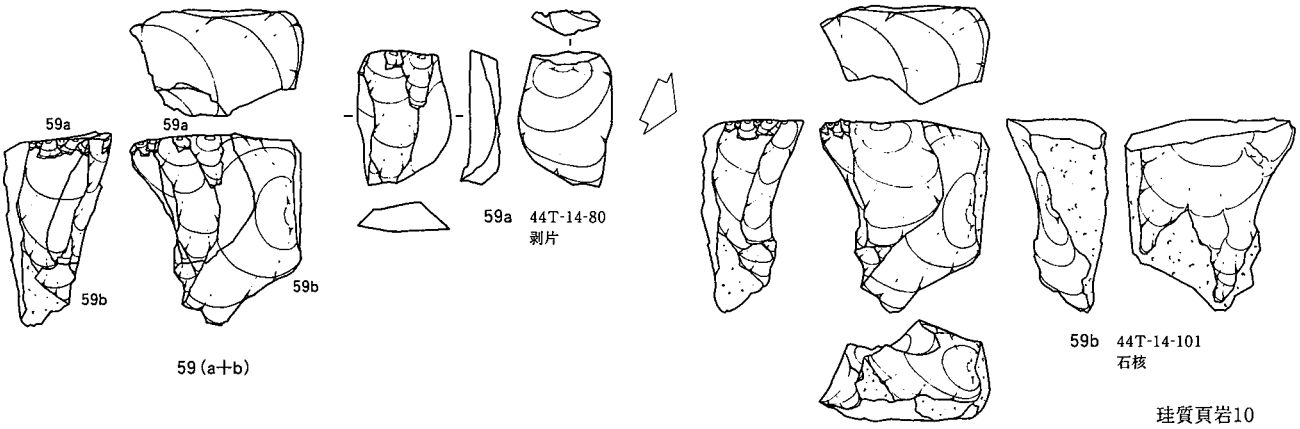
63～68. 使用痕のある剥片　広い打点対縁に使用痕が廻る。63の末端曲線部は磨かれたような艶を持つ。62・63は第９ブロック、61、64～68は第10ブロックから出土した。

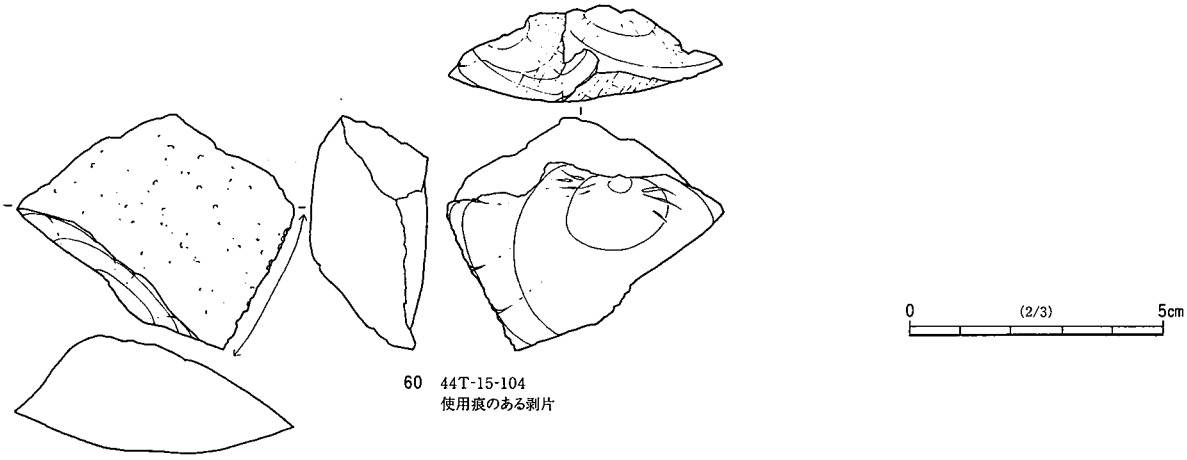
69.（接54）　剥片３点と使用痕のある剥片３点の計６点が接合した。69cは21.6m～32m離れた44T-42グリッド(一括)、その他の５点は第10ブロックの44T-18グリッドから出土した。以下、剥片の剥離工程をしめす。69bは69aが加撃された際に剥落したものであり、個別に実測はしていない。69a・69cは背面に自然面を残す早い工程の剥片であり、同一方向から加撃される。69c剥離後の作業面を打面にして69dが剥離され、90°右回りに持ちかえて、69e・69fが順に剥離される。



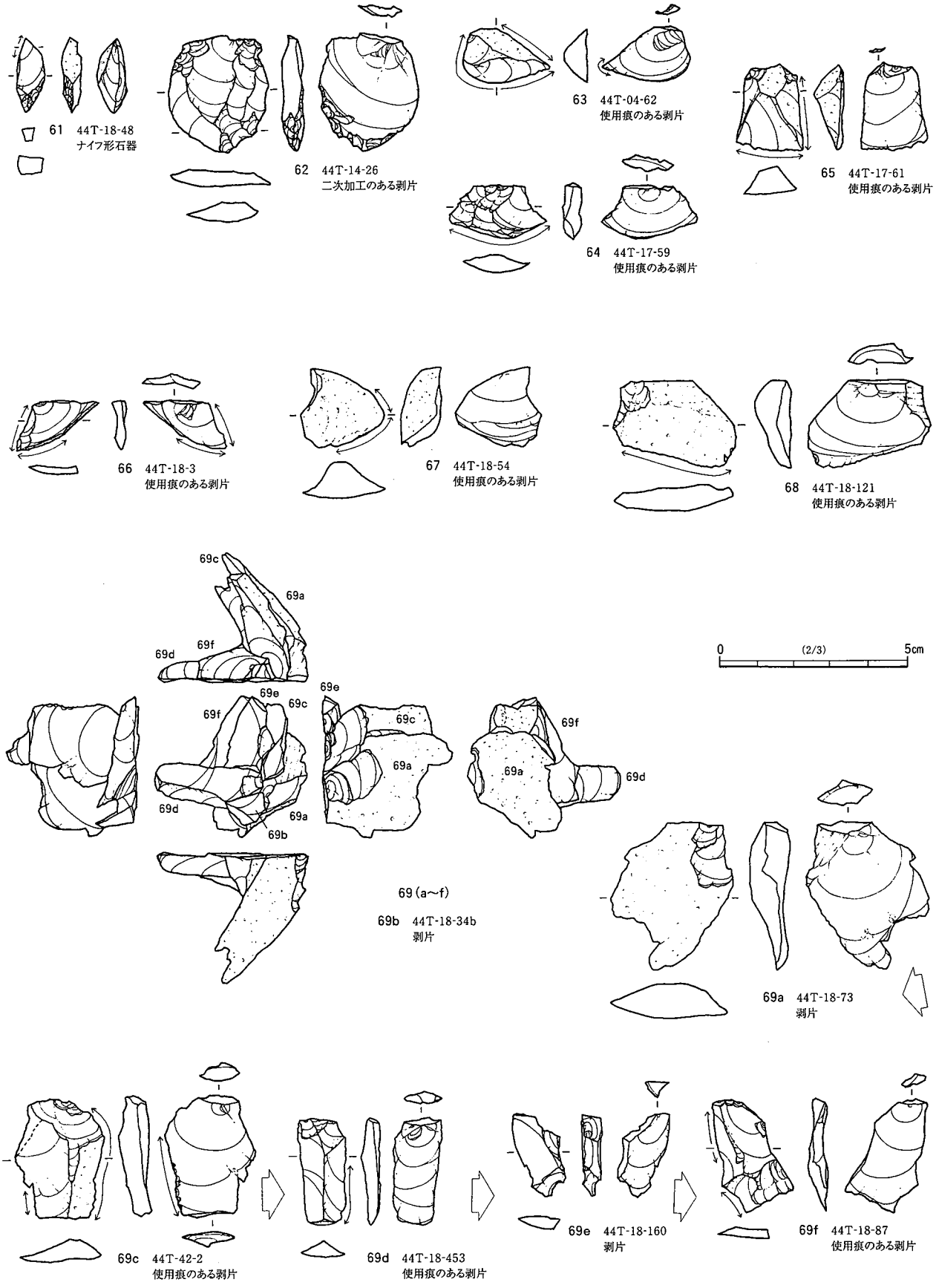
第76図　第3文化層 第6～11ブロック出土石器(24)





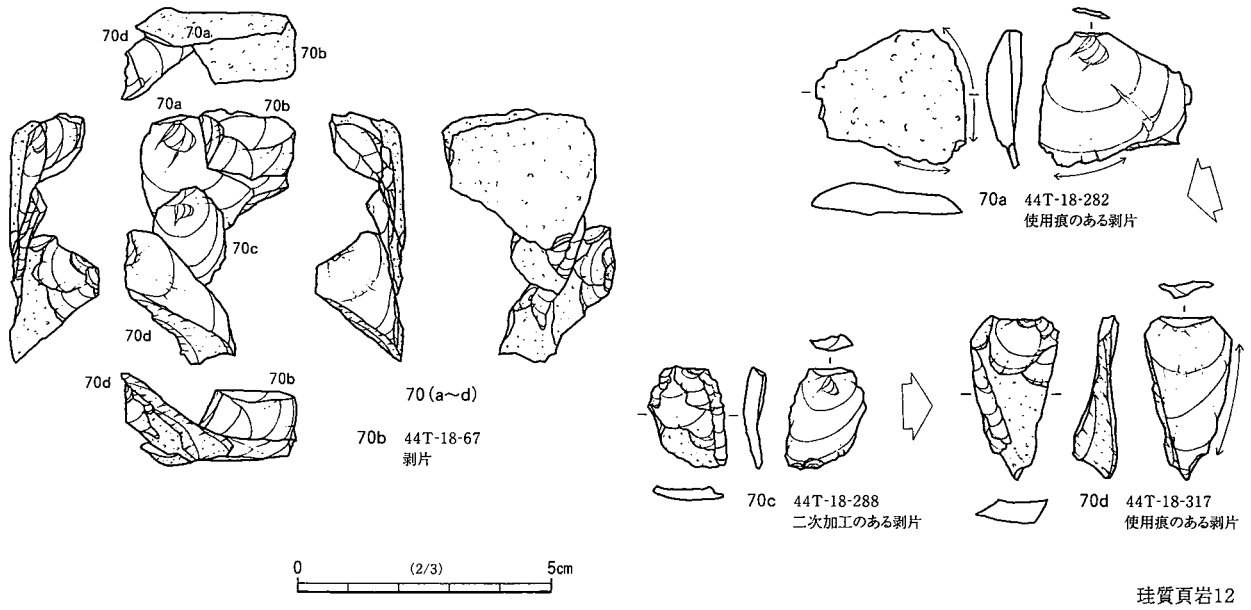


第77図　第３文化層 第６～11ブロック出土石器(25)



珪質頁岩12

第78図　第３文化層 第６～11ブロック出土石器(26)



第79図　第３文化層 第６～11ブロック出土石器(27)

70.（接55）　二次加工のある剥片・剥片が各々１点ずつ、使用痕のある剥片２点の計４点の接合資料。第10ブロック出土。70a→70dの順に剥離されるが70bは節理折れのため個別には実測しない。70c・70dは同一打面から頭部調整されつつ作出される。61～70は珪質頁岩12

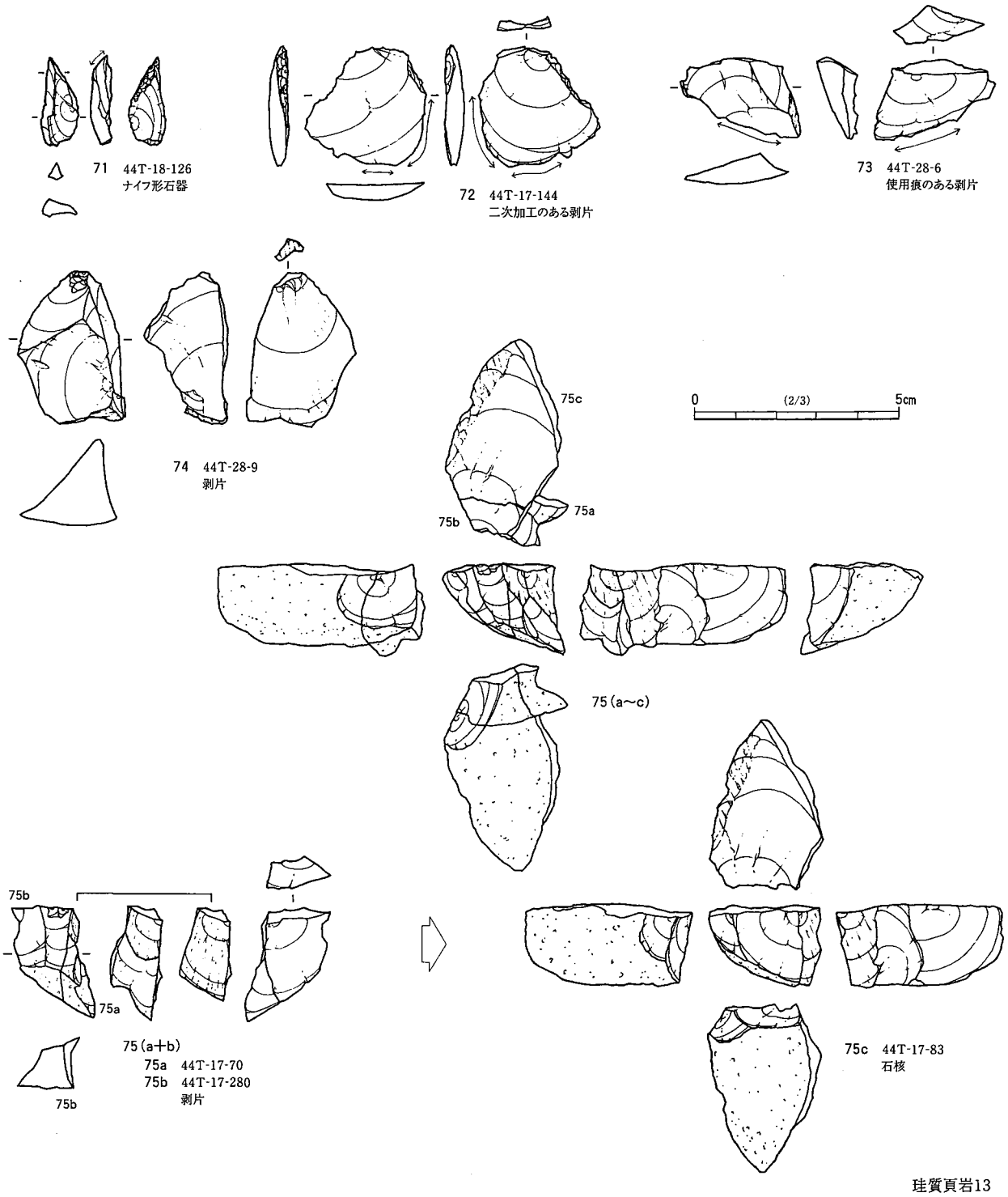
71. ナイフ形石器　背面にみられる小剥離痕は素材時の頭部調整痕の可能性があるが、背稜の使用痕や尖端部に及ぶ調整痕から、刃器としての機能を持つものと思われる。刃部は右側面図に表した。

72～74. 二次加工のある剥片他　77（接58）のC塊の一部であり、77l・77nと同一工程上で剥離されたものである。一側縁は急角度の加工により直線的に成形され、打点対縁には使用痕が廻る。73の使用痕のある剥片、74の剥片も同様の剥離工程における所産である。

75.（接56）　剥片２点、石核１点の接合資料　75aは75bの敲打時に折れたものであり、75cは厚みのある素材剥片の主要剥離面を打面にして、末端縁辺の広い剥片を作出するための石核である。

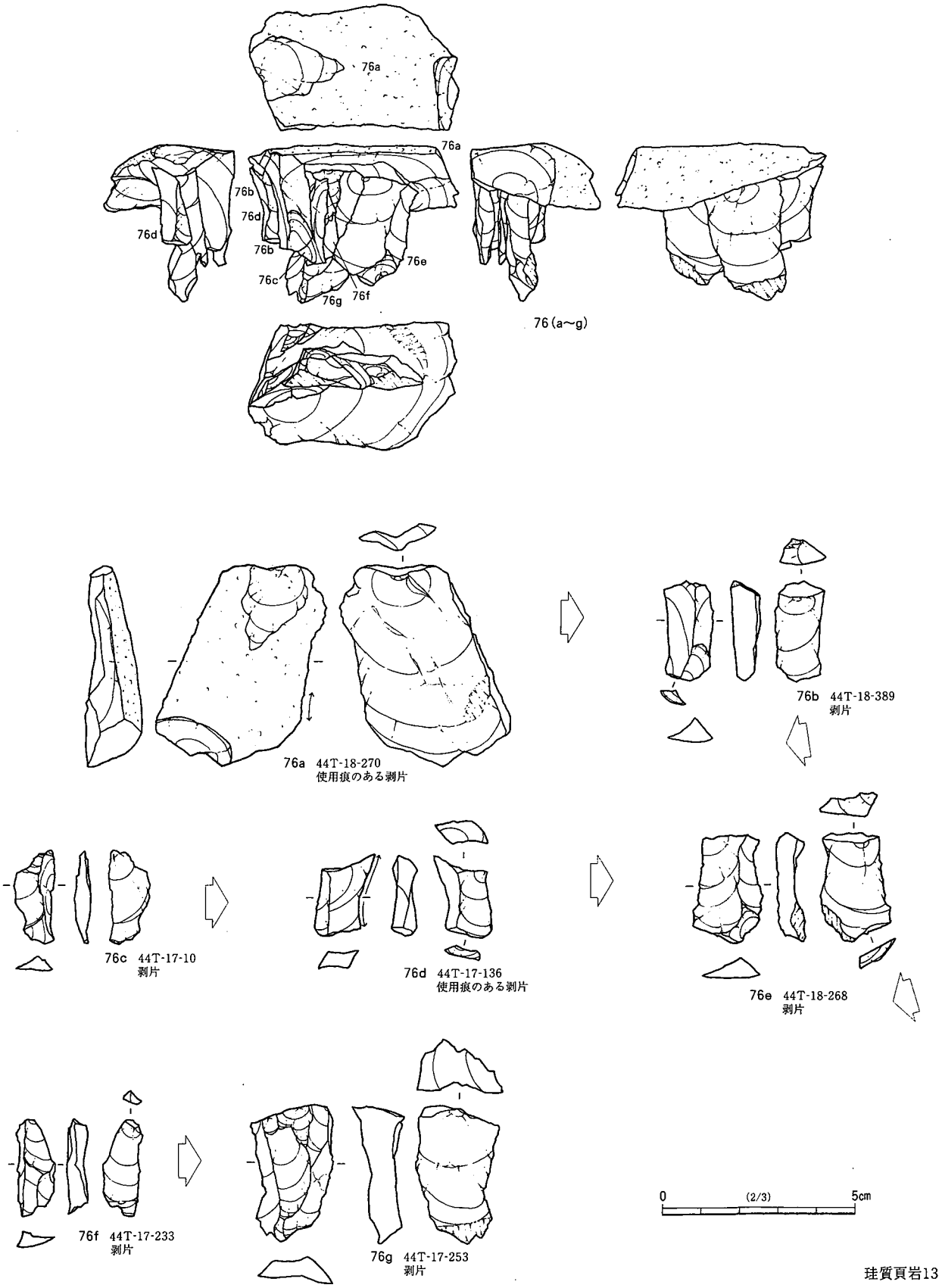
76.（接57）　使用痕のある剥片２点、剥片５点の計７点の接合資料である。屋根を剥がすように76aが剥離された後の面を打面として76b～76gが剥離される。

77.（接58）　掻器１点、二次加工のある剥片５点、使用痕のある剥片４点、剥片７点、石核３点の20点接合資料である。第６・７・９・10・11ブロックに各々３・１・２・13・１点出土し、接合した。工程上A～D塊に４分割されるため、A塊を77a～77d、B塊を77e～77j、C塊を77k～77o、D塊を77p～77tとした。A塊は77a→77b＋77c→77の順に同一方向から一打一剥離で石刃が作出され、この石刃３点は上下に折れている。77aの折れ跡の縁辺には使用痕がみられたため、意図された折れの可能性がある。A塊剥離後の面を打面にして、B塊の77e→77f＋77gの順に剥離される。B塊77h～77jは77j作出のための素材塊である。77jは、77h→77i剥離後、正面図下部及び左部に素材器形を利用した張り出し部が作出される。下端部は70°～92°、左部は64°～93°の急角度の調整加工が施される。石核素材の掻器であり、複合石器の様相を呈する。C塊の77k～77mは、77nと同一の打面から剥離された１片の剥片であり、複雑に発達した節理により砕けたものである。77lの下部には主要剥離面側から加撃された剥離痕が残るが

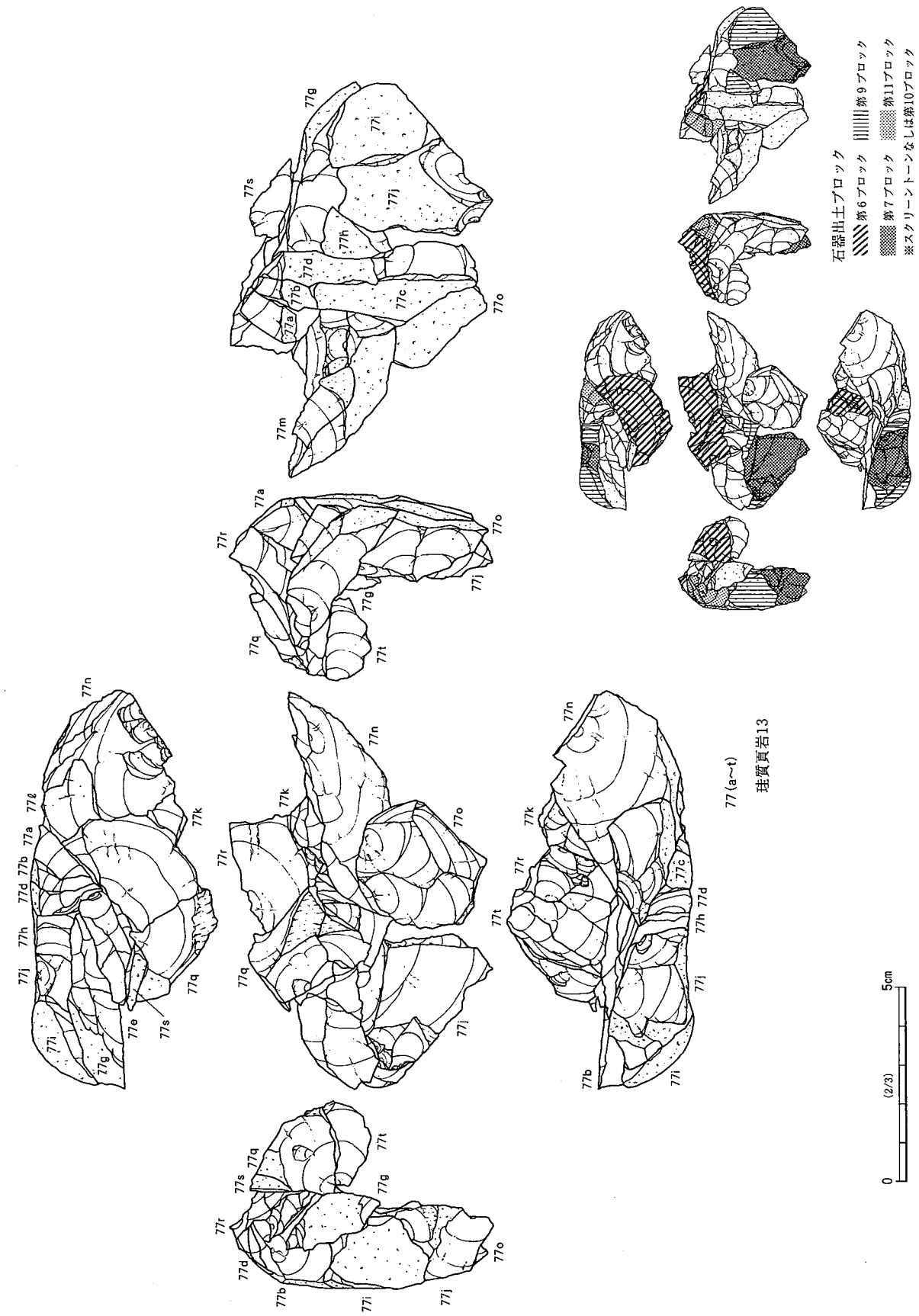


第80図　第３文化層 第６～11ブロック出土石器(28)

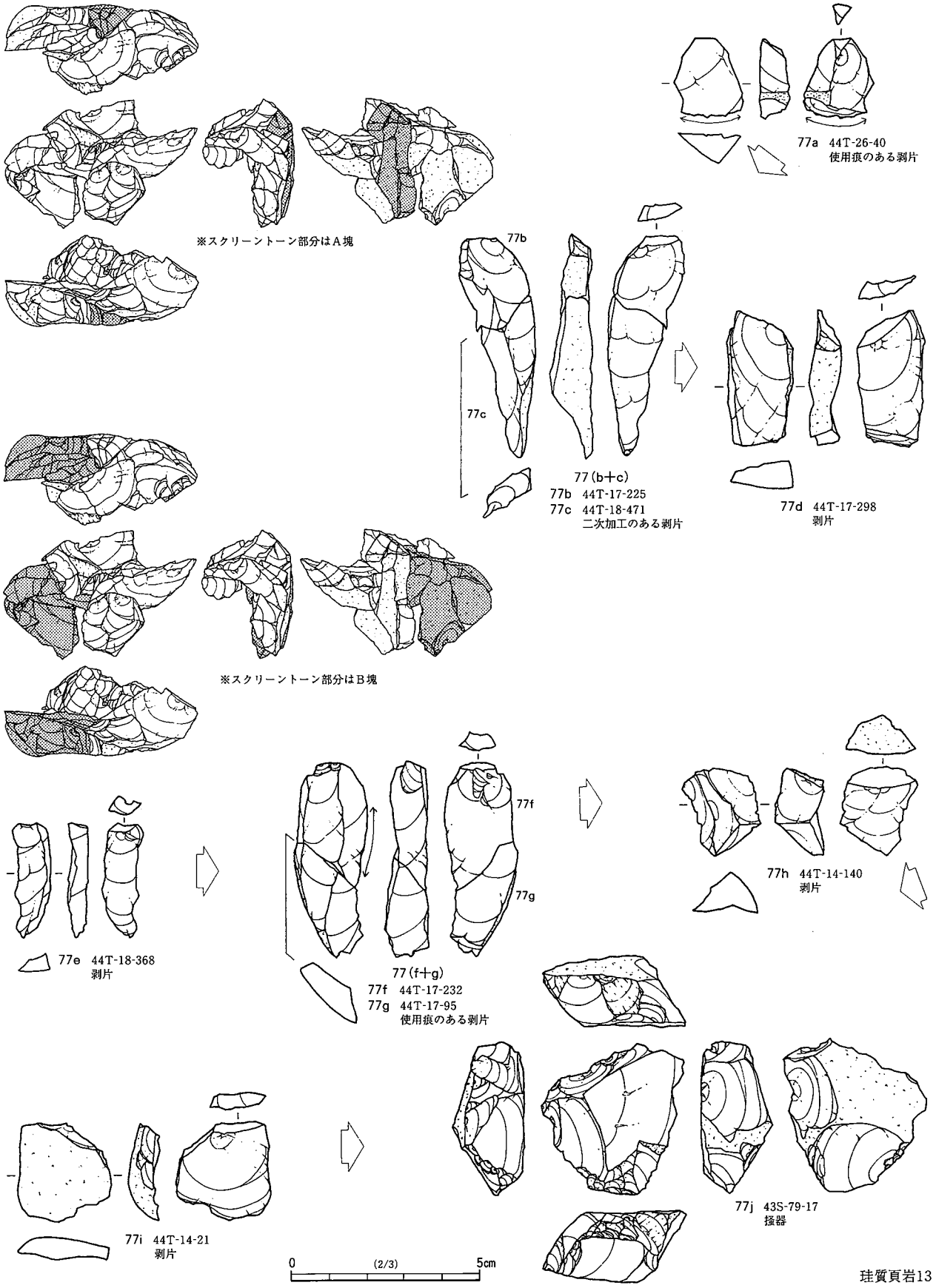
一面に留まり、広がりや使用痕は看取されない。D塊は77p～77tとしたが、77s、77tは別個体の所産であり、主核をなすものは77q＋77rである。77qは上面(打面)を剥離した際のバルバースカー片と思われる。D塊は珪質頁岩13において最も発達した節理を包含する部位であり、77q・77tでは石英の結晶によって、また77rでは赤化(鉄成分か)した節理面によって、同時折れをおこしている。各々の剥片には使用・加工のあとはない。77p・77q・77rは第６ブロックで出土しているが、77s・77tは第10ブロックから出土した。



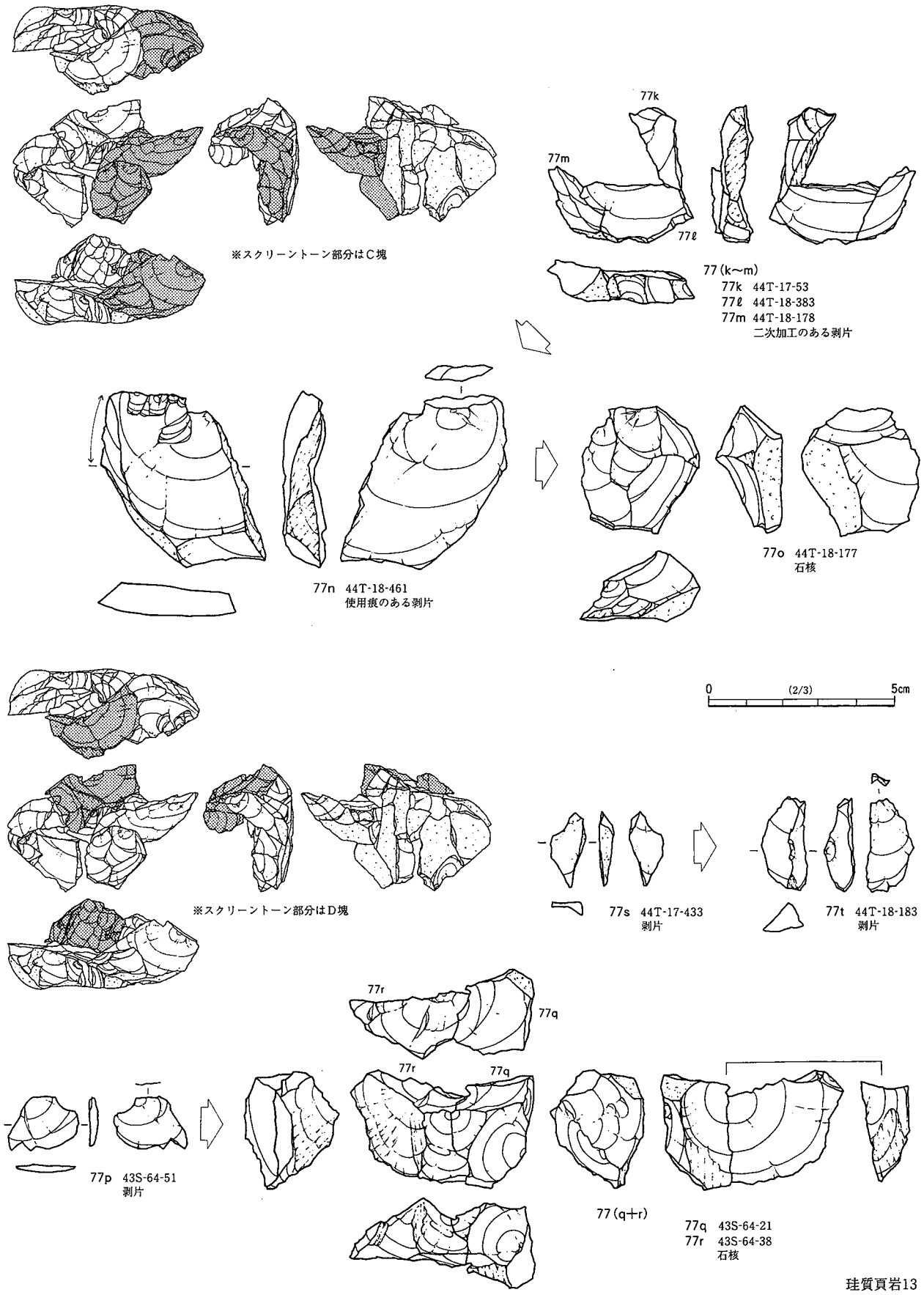
第81図　第３文化層 第６～11ブロック出土石器(29)



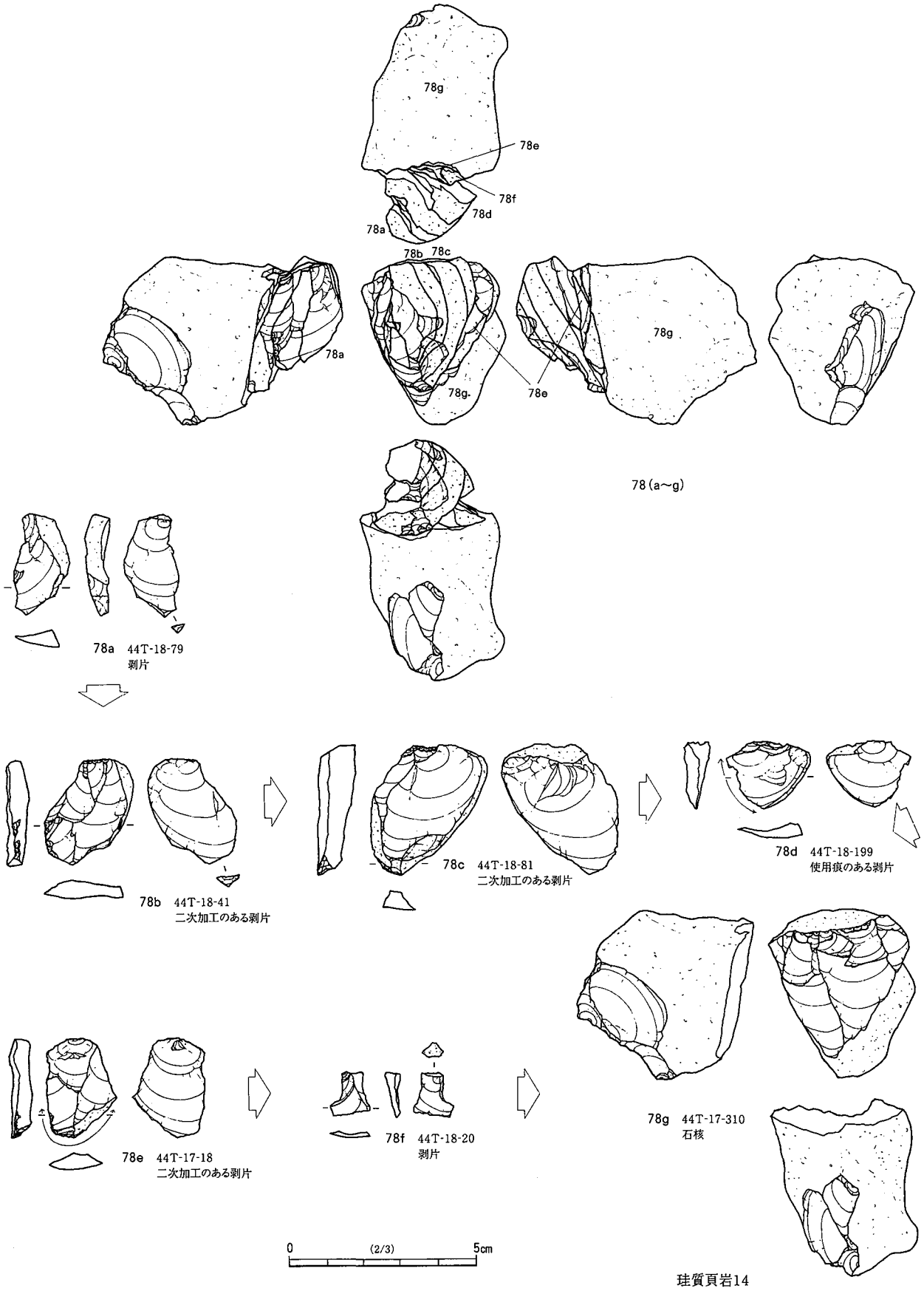
第82図　第3文化層 第6～11ブロック出土石器(30)



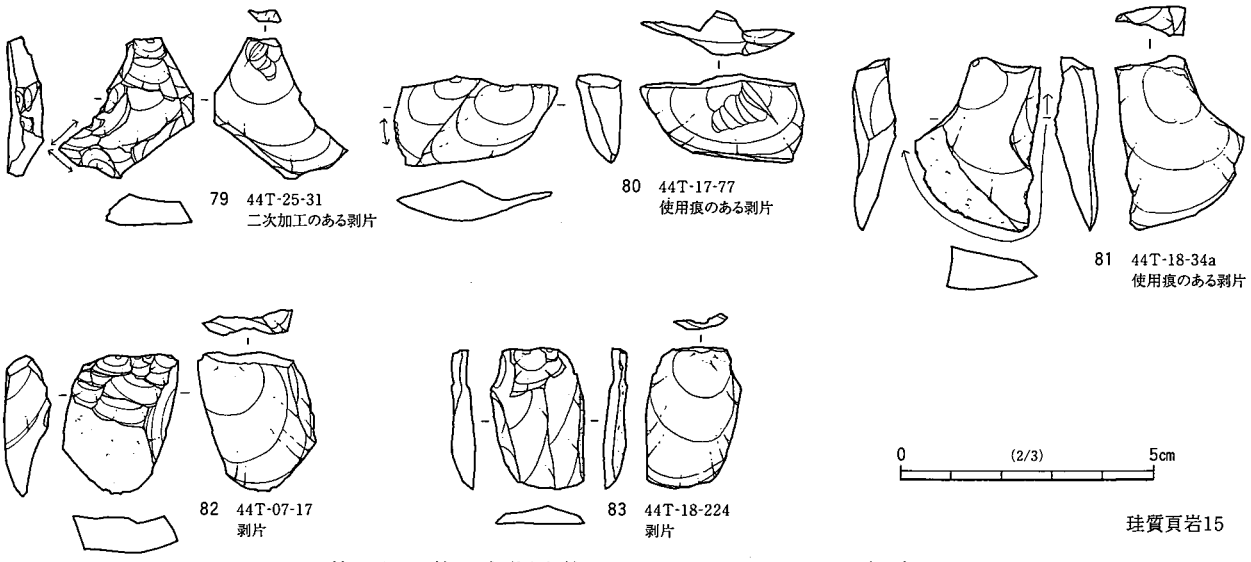
第83図　第３文化層 第６～11ブロック出土石器(31)



第84図　第3文化層 第6～11ブロック出土石器(32)



第85図　第３文化層 第６～11ブロック出土石器(33)



第86図　第３文化層 第６～11ブロック出土石器(34)

第10ブロックで不要となった残核が第６ブロックに持ち込まれ、分割されたものと推察される。71～77は珪質頁岩13

78.（接59）　二次加工のある剥片３点、使用痕のある剥片１点、剥片２点、石核１点の計７点が第10ブロックから出土した。母岩である珪質頁岩14の全点が接合したが、間隙多く、完形には至らない。78a～78fまで、全て同一打面から加撃されるため、単体図における打面の抜き出しは省略した。78f以外の78a～78eは頭部調整、78b～78cの末端部には二次加工痕がみられ、急角度の成形がなされているようだが、使用頻度の高さにおいて縁辺に丸みがもたらされた可能性も否めない。77d・77eには使用による微細剥離痕が観察される。

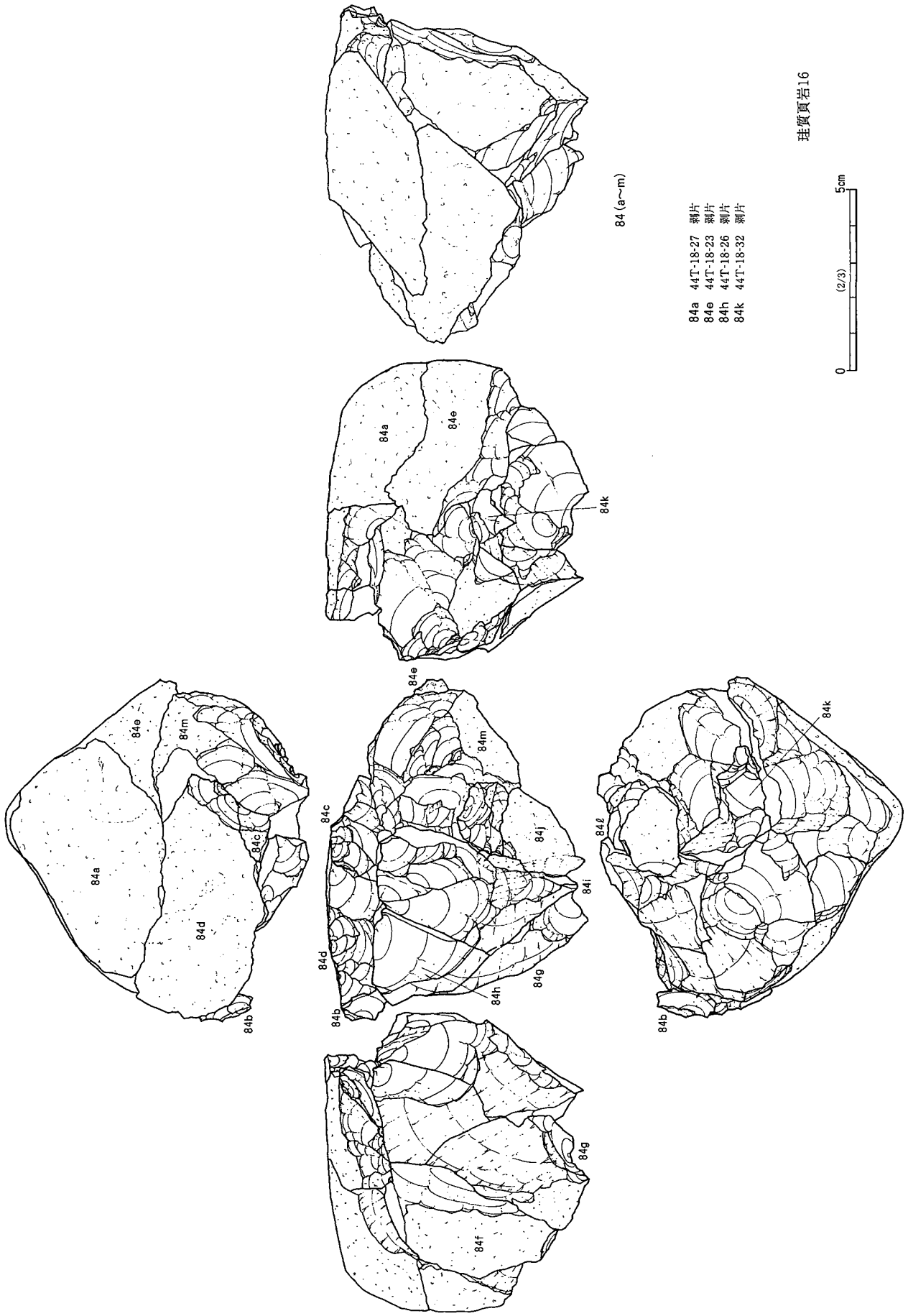
79. 二次加工のある剥片　末端縁辺、左側縁辺に主要剥離面側から二次加工される。使用痕は加工痕に切られる。

80・81. 使用痕のある剥片　80は同一打面・同一方向に加撃されて剥離された横長剥片のうちの１点であり、底面が帯状に薄く残る。側縁の一部に微細剥離痕がみられる。81は打点対縁の広い剥片であり、周縁に微細剥離痕が廻る。

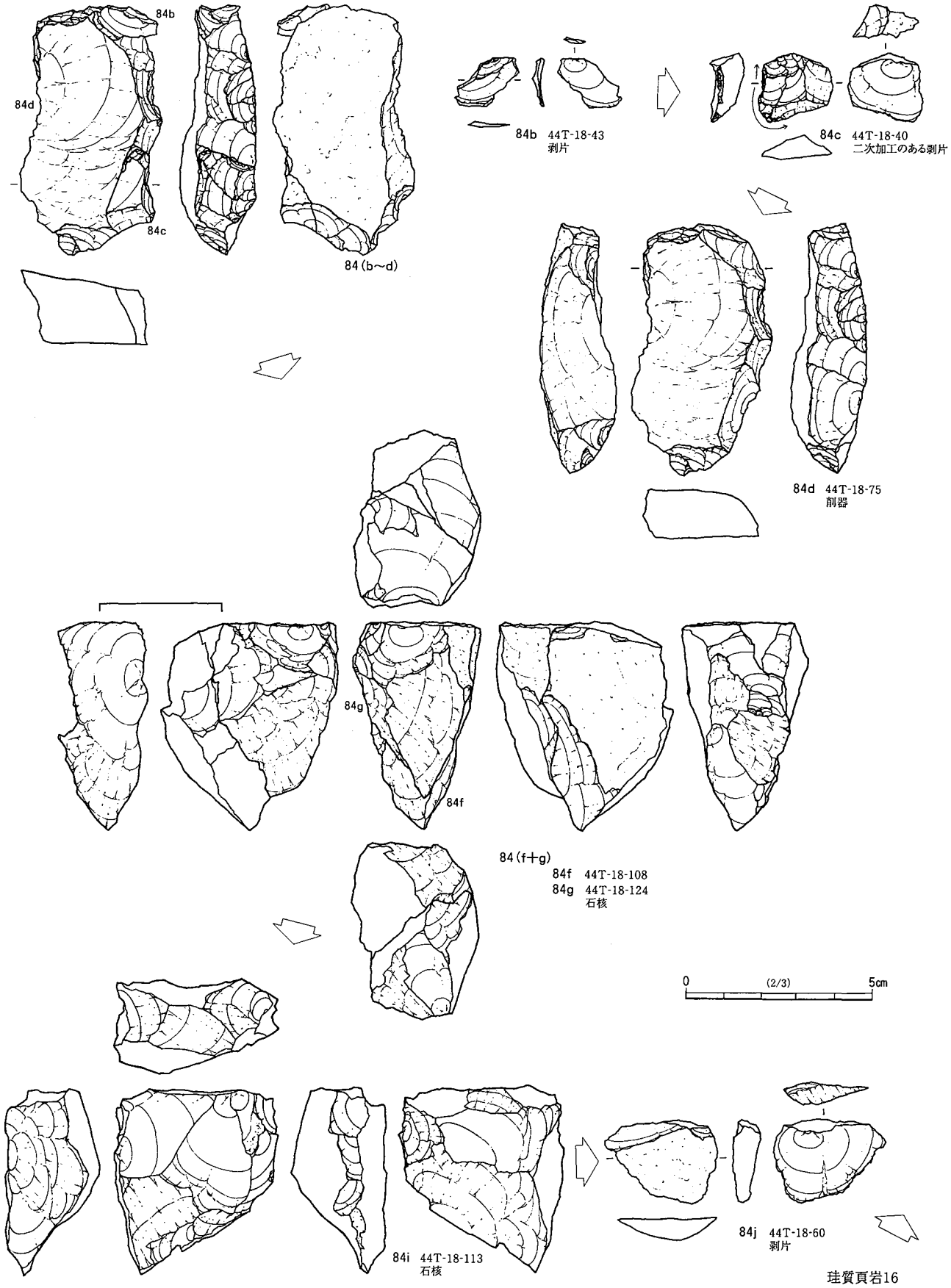
82・83. 剥片　背面に自然面を有し、頭部調整痕を持つ。79～83は珪質頁岩15を母岩とし、第10ブロックから７点、隣り合った第11ブロックから２点が出土しているが接合はしない。

84.（接60）　母岩である珪質頁岩16は第10ブロックから42点が出土し、そのうちの13点が接合した。素材礫はソフトボール大ほどと推測される。発達した節理と打点の不在により、初期の剥離工程は明確ではないが、おそらく、投げ割りによる礫分割が行われたものと思われる。途中経過図の１枚目は削器を調整する工程、２枚目は石核から剥片を作出する工程図である。節理折れや砕けによる剥落などは単体図の実測は省略した。

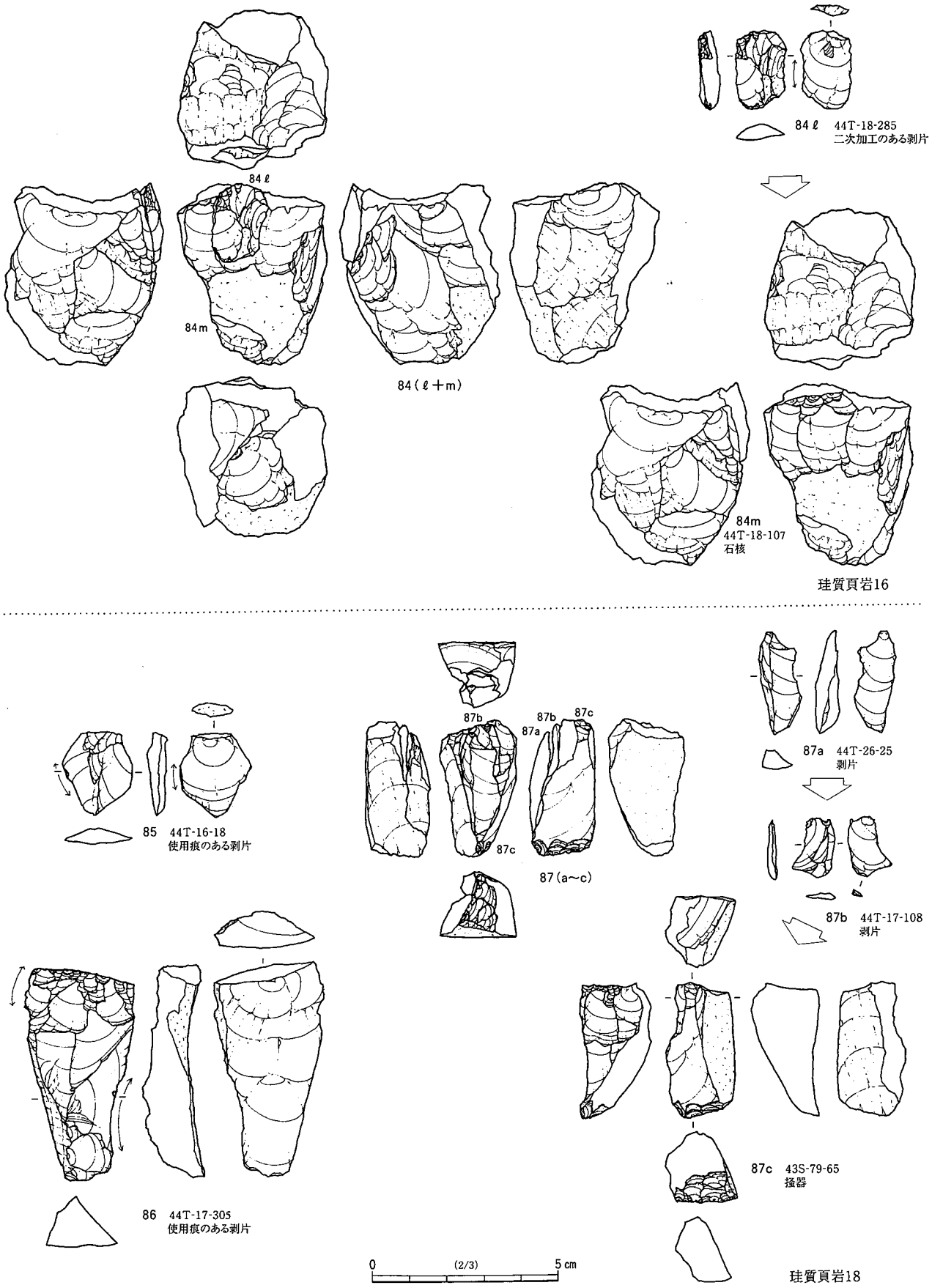
85・86. 使用痕のある剥片　85は全体に丸みを持ち幅広の感はあるが、両側縁は最大幅が測られた中央部以下で急速に収斂する。縁辺は30°～35°の鋭さを持つが、使用により丸みを帯びる。86は、背面上方に頭部調整痕がみられ、小型剥片が作出された後の器面調整剥片であるが、縁辺には使用痕が廻る。下部背



第87図　第３文化層 第６～11ブロック出土石器(35)



第88図　第３文化層 第６～11ブロック出土石器(36)



第89図　第３文化層 第６～11ブロック出土石器(37)

稜の剥離痕は早い時期の工程によるものである。85・86はそれぞれ第11・10ブロックから出土している。

87.（接61） 掻器１点は第７ブロックから、剥片２点は約32～35ｍ離れて隣接する第10・11ブロックから出土し、計３点が接合した。設定された打面から石刃が剥離される工程が看取される。石核87cは第７ブロックに持ち込まれ、掻器として加工・利用されたと推察される。85～87は珪質頁岩18を母岩とし、第７・10・11ブロックから各々３・３・５点の計11点が出土している。

88.（接62） 珪質頁岩19は第10ブロックから５点出土し、そのうちの二次加工のある剥片１点と剥片３点が接合した。自然面・剥離面とも滑らかな褐色（チョコレート色）であるが、黄白色の筋が縞状に流れている。自然面を削ぐように88a＋88b、88c＋88dが剥離され、88cの右側縁には二次加工痕・使用痕が看取される。88dは88cのバルバースカーである。

89. 剥片 母岩である珪質頁岩21はこの１点のみが第９ブロックから出土した。器面を調整するための剥片と思われる。主要剥離面は底部を抉るウートラパッセとなっている。

90. 二次加工のある剥片 剥離面は灰白～薄墨色で、紡錘形の斑紋と黒っぽい筋状の縞が入る嶺岡産珪質頁岩1が母岩であり保田層産かと推測される。同母岩はこの１点のみが第10ブロックから出土している。縁辺を潰すような微細な剥離で打面を調整してから剥片が作出されている。右側縁は二次加工された後、使用される。

91. 石核 剥片を素材に剥片剥離された後、鋭角な縁辺が使用され、刃こぼれが看取される。極めて良質な淡褐色の硬質頁岩１を母岩とする。

92.（接63） 削器と削器調整剥片の接合資料である。第11ブロックから出土し、調整剥片と削器は最長5.6ｍ離れている。石斧として機能していたと推測される礫器の側縁をチョッピングトゥールのように交互剥離し、鋭い、直線的な側縁を作出しており、上部が破損したことで再加工・再利用されたものと思われる。粘板岩１

93. 使用痕のある剥片 打点直下折れの剥片縁辺に使用痕が看取される。第６ブロック出土　チャート１

94. 使用痕のある剥片 直線的な縁辺は刃部として使用されている。第11ブロック出土　チャート２

95. 使用痕のある剥片 打面や頭部に調整痕はなく、工程的には早い段階に剥離された剥片である。打点対縁の刃こぼれは特に顕著である。第６ブロック出土　玉髄（メノウ含む）１

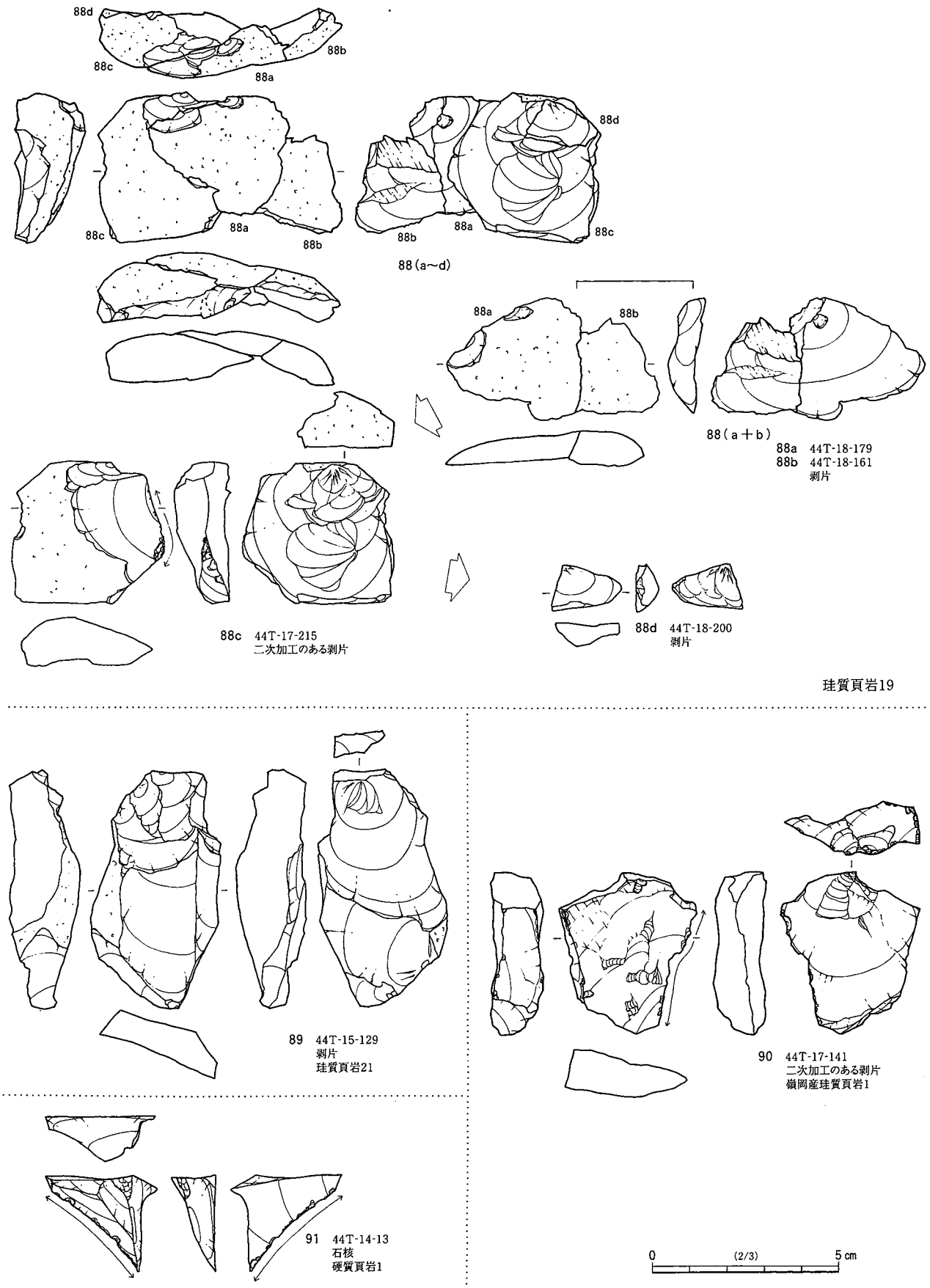
96・97. 使用痕のある剥片 96は第10ブロック、97は第11ブロックから出土した。

98. 石核 厚みのある剥片の縁辺を交互剥離し、小型の貝殻状剥片を作出した石核である。第10ブロック出土。

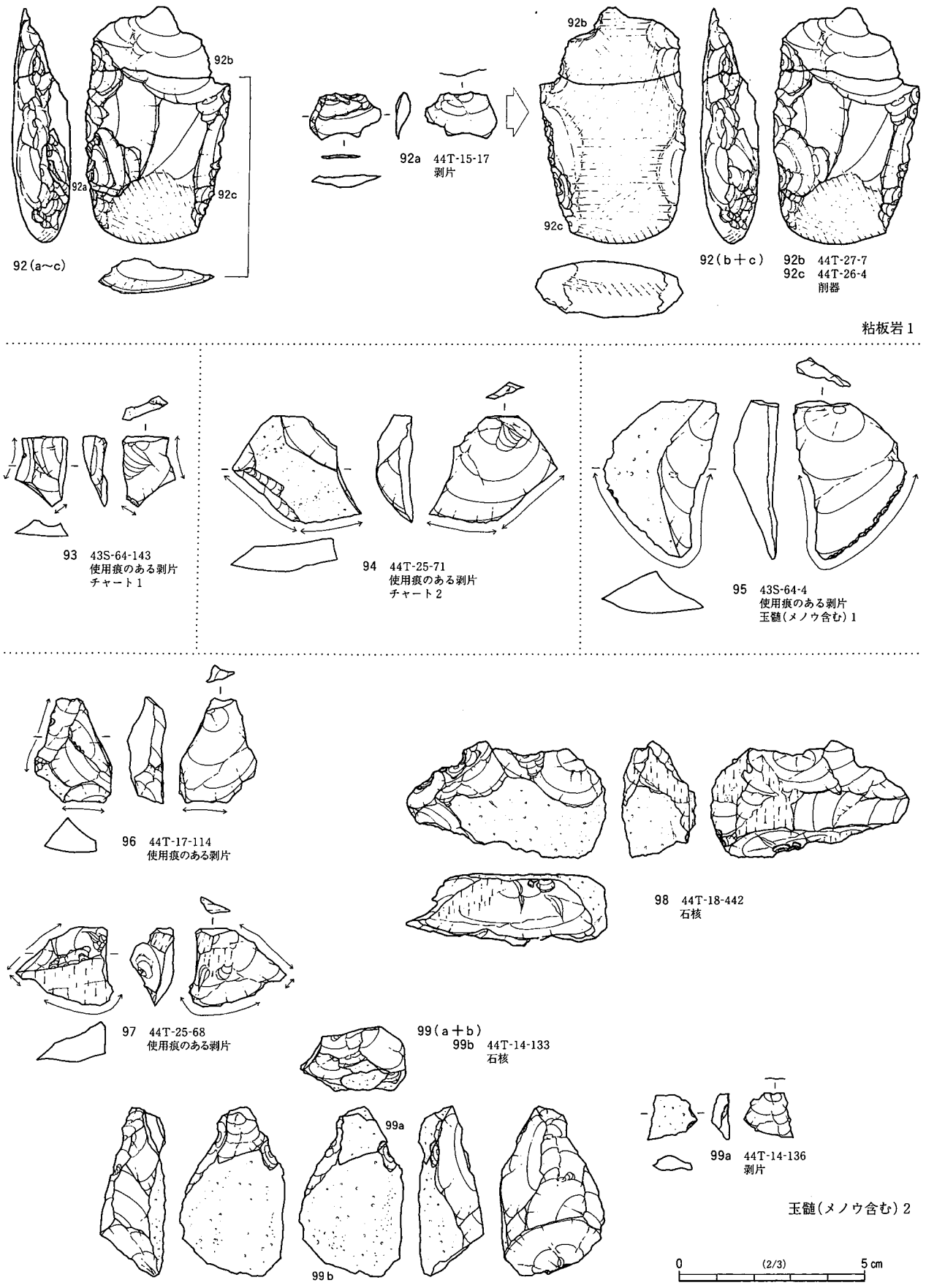
99.（接64） 剥片と石核の２点接合　第９ブロック出土。　99aは端部に打点があり、先端部を使用した際に破損した可能性がある。96～99は玉髄（メノウ含む）２が母岩であり、第９・10・11ブロックに分布する。

100.（接65）　敲石 第10ブロックの中心から出土　全体的に焼けて赤褐色を呈する。長軸方向の両端部には敲打による潰れがみられ、下端部には敲きの後、磨られて平坦面を作っている。100aは被熱により剥落したものである。安山岩１

101. 敲石 第９ブロックの遺物の分布密度がやや薄くなる北側から出土した。長軸方向の両端部に敲打痕があり、上端の剥離は敲打の際の衝撃剥離、下端の潰れは中心から側縁へと派生する。平坦部は光沢と



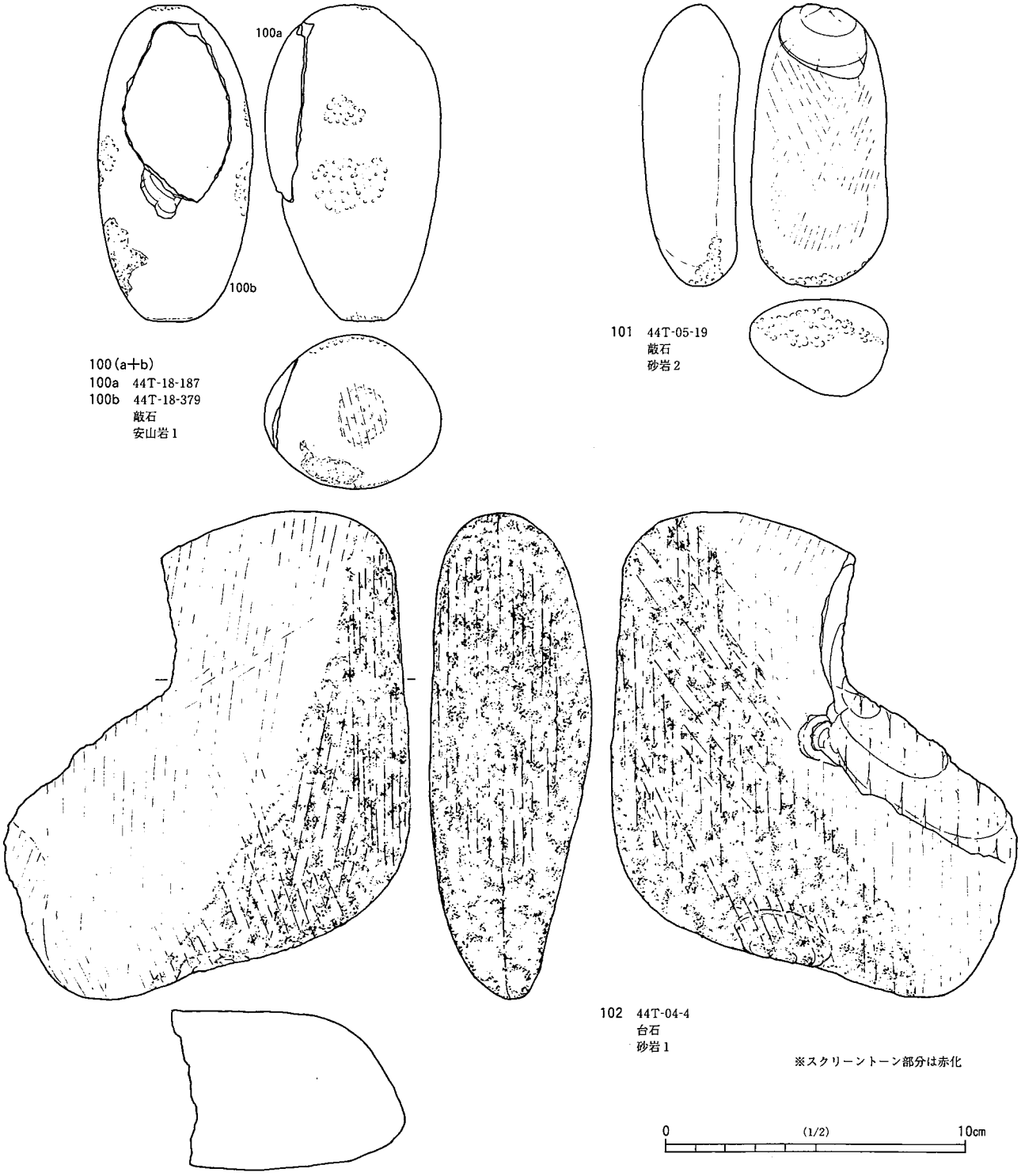
第90図　第３文化層 第６～11ブロック出土石器(38)



第91図　第3文化層 第6～11ブロック出土石器(39)

擦痕が看取される。砂岩２

102. 台石　第９ブロックの中心部から外れた北西端に出土した。４分の３ほどが遺存しており、台石として使用されていた際の衝撃により欠けたものと思われる。平面部・側面部ともに擦痕が流れ、下部の欠けは磨りにより補修されている。部分的に被熱により赤化する。砂岩１

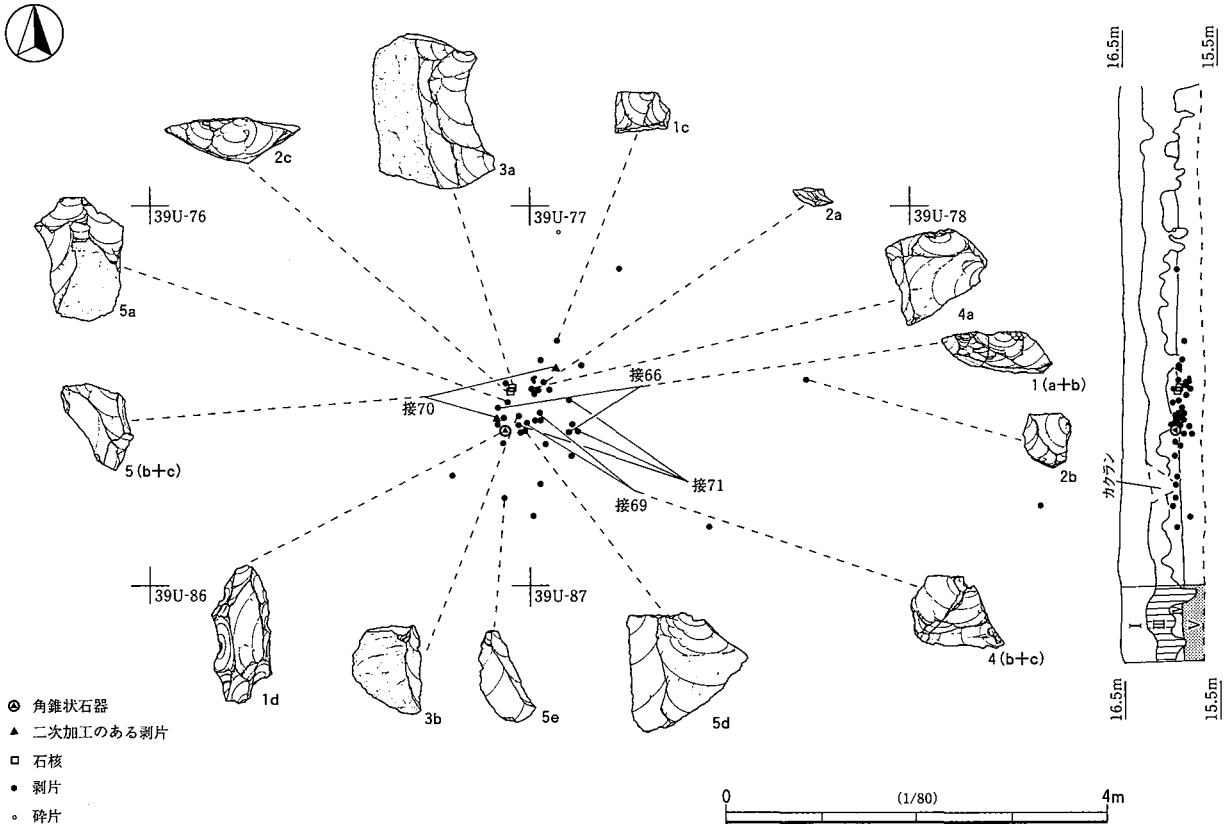


第92図　第３文化層 第６～11ブロック出土石器(40)

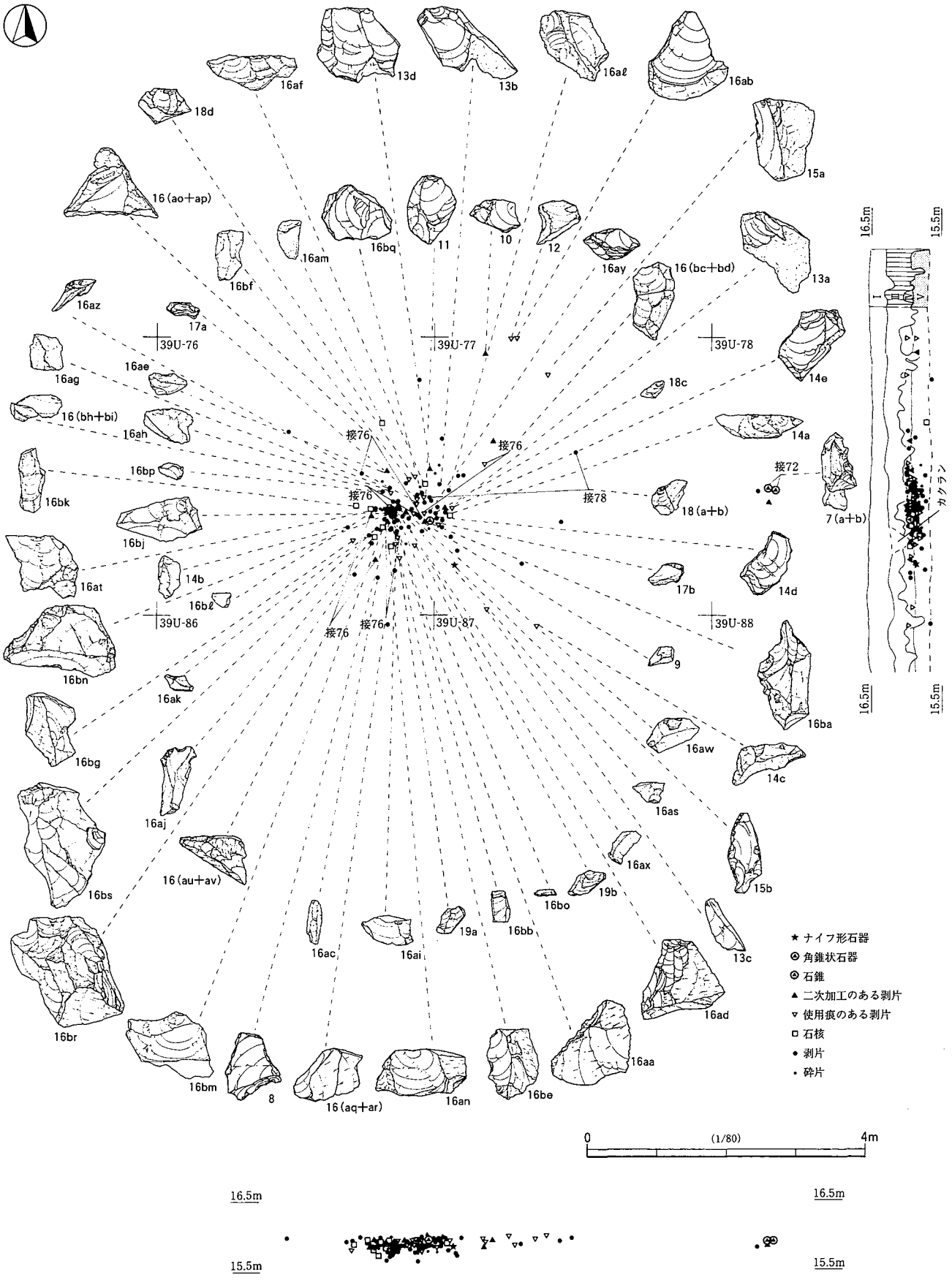
第12ブロック(第93～106図、第20表、図版5・22～26)

市野谷二反田遺跡北端、39U-76～78、86・87グリッドに位置し、標高16.3m～16.6mの比較的平坦な高台に立地する。ブロック範囲としては南北4.3m、東西7.8mを測るが、遺物の殆どは39U-76・77グリッドを中心とする直径1.2m内に収まる。石器159点(石器出土総数171点)の器種組成はナイフ形石器1点、角錐状石器2点、石錐1点、二次加工のある剥片12点、使用痕のある剥片20点、石核11点、剥片96点、砕片15点、礫片1点である。また、14個体86点に接合関係が確認され、ガラス質黒色安山岩1では6個体、チャート1では8個体を数えた。中でも挿図番号16は45点が接合し、中空ではあるが既存値は高さ11.5cm、幅13cm、厚さ7.2cmの角柱状となった。また、2石材合わせて11点出土した石核には、そのすべてにおいて何らかの接合関係が認められ、作出された剥片などのいくつかはこの場所で消費された可能性も推測される。

第12ブロックでは直径1.2mの中に171点が密集しており、便宜的に石材を分けて作図した。第93図ではガラス質黒色安山岩・頁岩・ホルンフェルスを、第94図ではチャートのみを取り上げた。7割以上をチャートが占める上、出土位置が平面的にも垂直方向にも同位地であるため、第94・95図の石器出土位置を示すドットは幾重にも重なっている。



第93図　第3文化層 第12ブロック器種別分布(ガラス質黒色安山岩・頁岩・ホルンフェルス)

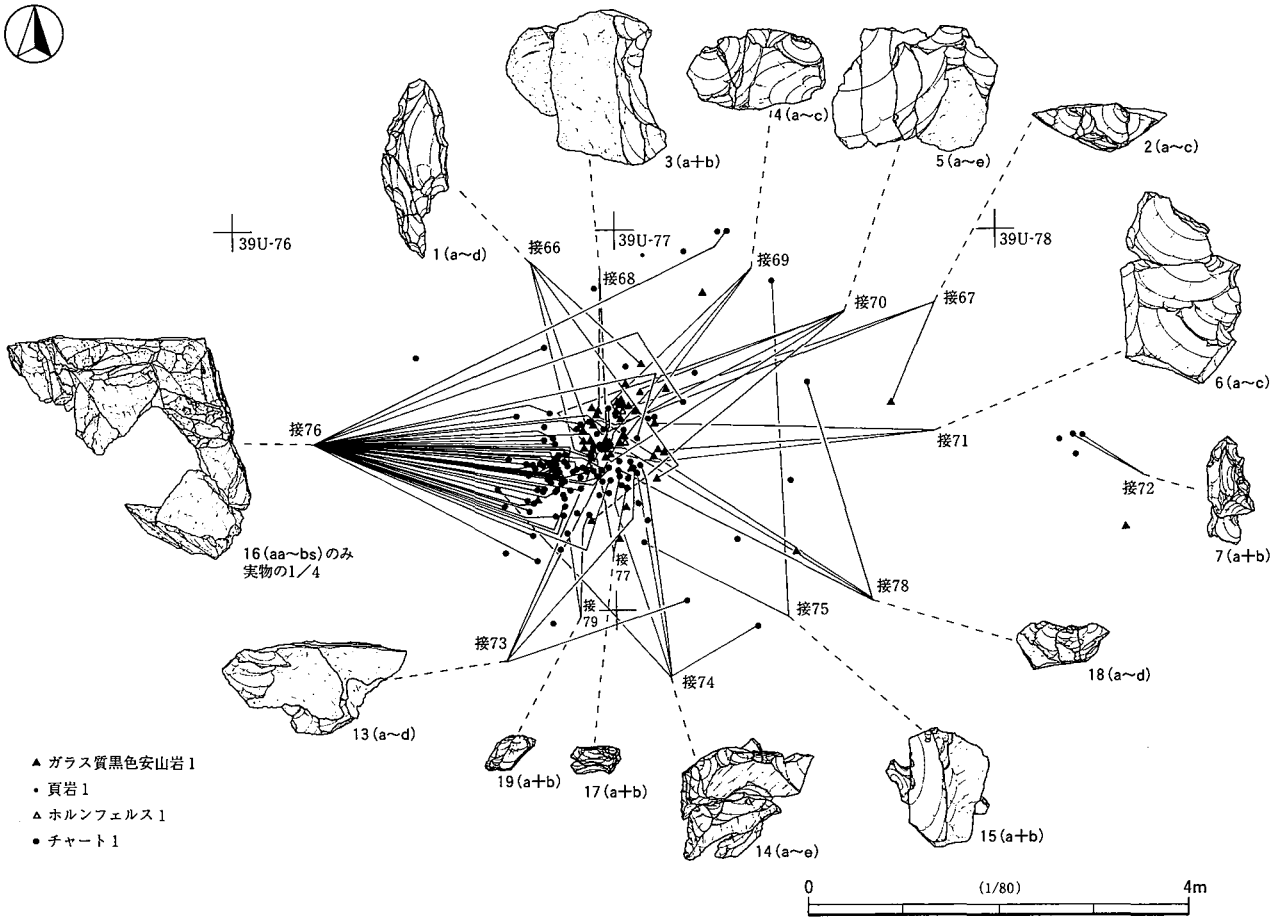


第94図　第３文化層 第12ブロック器種別分布（チャート）

石材消費形態は特異であり、４石材４母岩で構成される。点数比においては、ガラス質黒色安山岩１が36点24%、ホルンフェルス１が３点1.7%、頁岩１が１点0.6%、チャート１が119点73.7%であり、緑を帯びた青灰色で油脂状光沢を持つチャート１が他を圧倒する。重量比では、ガラス質黒色安山岩１が35.9%で１点あたりの平均重量は11.5gであり、チャート１が61.7%で１点あたりの平均重量は5.9g、チャート１の方が石核数は多い（チャート９点、ガラス質黒色安山岩２点）にもかかわらず平均重量は約半分である。優れた石材は、小片に至るまで消費しようとする行為の表れであろう。

このような石材の偏用は搬入素材塊の大きさに拠るとも思われるが、色・艶・質などを重用するというこだわりが感じられる。同様の石材組成を持ち、同材を扱うブロックは、当遺跡北側に隣接する市野谷入台遺跡と柏市の元割遺跡があり、下総台地の北側では、栃木県と茨城県にまたがる八溝山地に産を発するチャート（珪質頁岩）の搬入が認められ、活用されていることが確認されている。

実測した遺物はガラス質黒色安山岩1とチャート１の２石材のみであることと、接合資料中にも主要石器が含まれるため、器種別ではなく、母岩を優先して挿図を組んである。また分布図版は石材別に作成したが、平面・垂直分布とも2石材間に言及すべき特徴はなく、同じ場、同じ層位から出土していることが認められた。



第95図　第３文化層 第12ブロック母岩別分布

出土石器

1.（接66） 角錐状石器１点と剥片３点の接合資料であるが、当初は４点を含めた全長70㎜ほどの角錐状石器であったものが再加工されている。1a～1cは角錐状石器調整剥片であり1dの基部を整えている。厚みのある横長剥片を素材とし、打面部及び末端部のほぼ全周に71°～91°の調整加工が施されている。

2.（接67） 石核１点と剥片２点の接合資料。背面の約70%が自然面で厚みのある剥片を素材とし、その主要剥離面を打面として貝殻状の剥片数点が剥離されている。2b・2cの弧状を描く縁辺は形態的には使用に適していると思われるが、微細剥離痕は看取されない。

3.（接68） 石核と剥片の接合資料。接合関係は見られるが、工程的には開きがあり、3aを含む剥片と3b を含む石核に二分され、別々に加工されたものである。この大型剥片素材である3aの主要剥離面の流れは、２に受け継がれることから原石の大きさは最低でも10cm以上であることが推定される。3aはいずれも剥片時の主要剥離面を打面として加撃される。3bは調整された打面から剥離された剥片である。

4.（接69） 剥片２(3)点の接合資料。4a剥離後、打面を変えて数片を剥離した後、４(b+c)が剥離される。

5.（接70） 打面を同じくする剥片５点の接合資料であり同一方向に規則的に剥離されてはいるが、打面部は残存しない。５(b+c)の左側縁部には二次加工痕跡が認められる。

6.（接71） ３点で１点の剥片である。打面は残存せず、加撃の際に砕けたものと思われる。

１～６はガラス質黒色安山岩１が母岩である。

7.（接72） ２点で１点の角錐状石器と捉えたが、製作途中あるいは再生加工途中の仕掛かり品である可能性がある。7bは厚みのない部分で折れたものである。先端部には微細剥離痕が看取される。

8～10. 二次加工のある剥片 ８は厚みの均一な板状剥片の下端部が折れた（もしくは折られた）後に、小剥離によって調整が加えられている。2c・3b・14a・16aiなど、平坦面打面から規格的な剥片が剥離される例とも近似するため、剥片素材の石核である可能性も否めない。９・10は末端部が加工されている。

11・12. 使用痕のある剥片 下部縁辺に使用による微細剥離痕が看取される。

13.（接73） 二次加工のある剥片・使用痕のある剥片各々１点と剥片２点の接合資料。同一打面から打点を直進させて剥離された４点である。13d末端部に連続した小剥離痕あり。

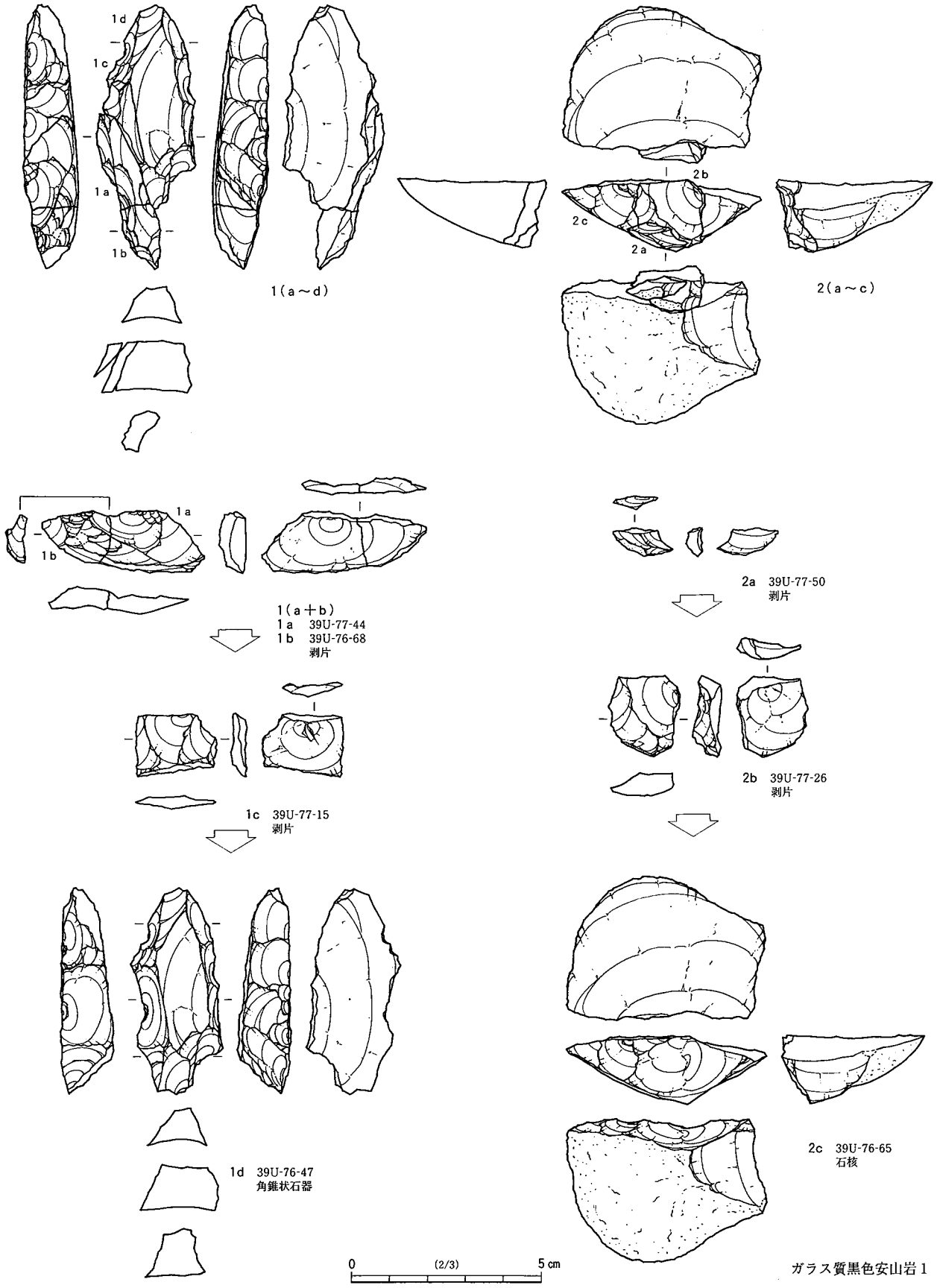
14.（接74） 使用痕のある剥片２点・剥片２点・石核１点の接合資料。剥離順は14a→14（b+c)→14d→14eであり、14bと14dの打面は同一である。14aは主要剥離面側から加撃して打面部分を除去している。14eの直線的な末端部と14cの先端部分に使用による刃こぼれがみられる。

15.（接75） ナイフ形石器と使用痕のある剥片の接合資料。15bは横長剥片を素材にしたナイフ形石器である。打面部は加工され、基部は抉られてつまみのような形状となっている。

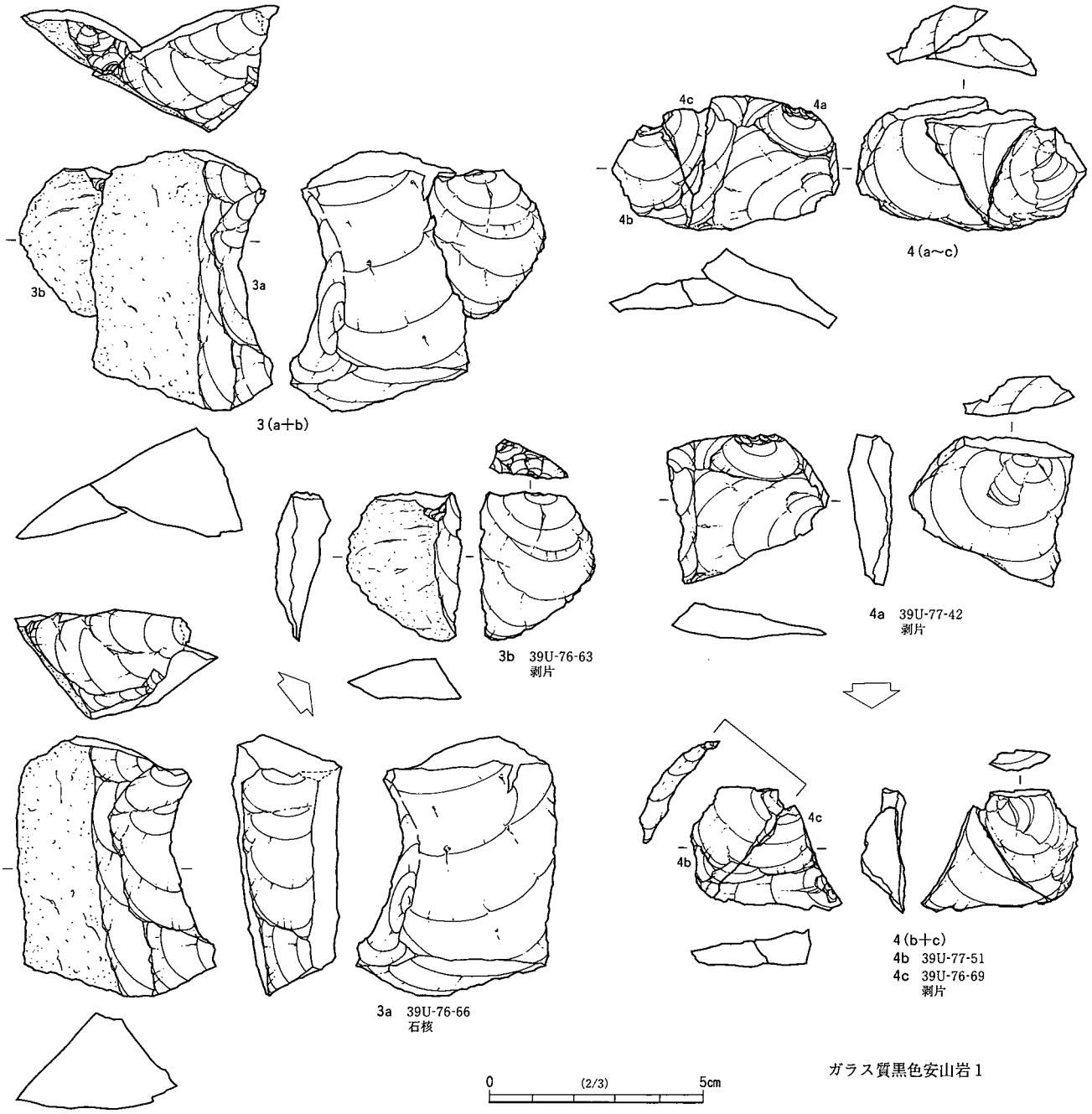
16.（接76） 45点接合し、重量は540.75gである。剥離面は青みを帯びた濃い灰色で油脂状光沢があり、緑色の強い部位も認められる。明るい灰黄褐色の節理面が発達しているが自然面はなく、原産地の露頭から打ち割られ、大型の塊として搬入されたものと推察される。この接合塊は石錐１点、二次加工のある剥片５点、使用痕のある剥片12点、剥片18点、砕片１点、石核８点で構成される。

工程には剥片剥離を目的としたものと石器を作出するためのものがあり、剥離された剥片に二次加工が施されたもの・使用痕のあるものが17点を数える。石核のうち、剥片の平坦面を打面に設定したものは16af、剥片の小口面を打面に設定したものは16aj・16bj・16bkである。以下、剥離工程を述べる。

16aa、16abは早い段階において一撃のもと、ほぼ同時に剥離されており、打点を数度変えた後に16ac・



第96図　第3文化層 第12ブロック出土石器(1)

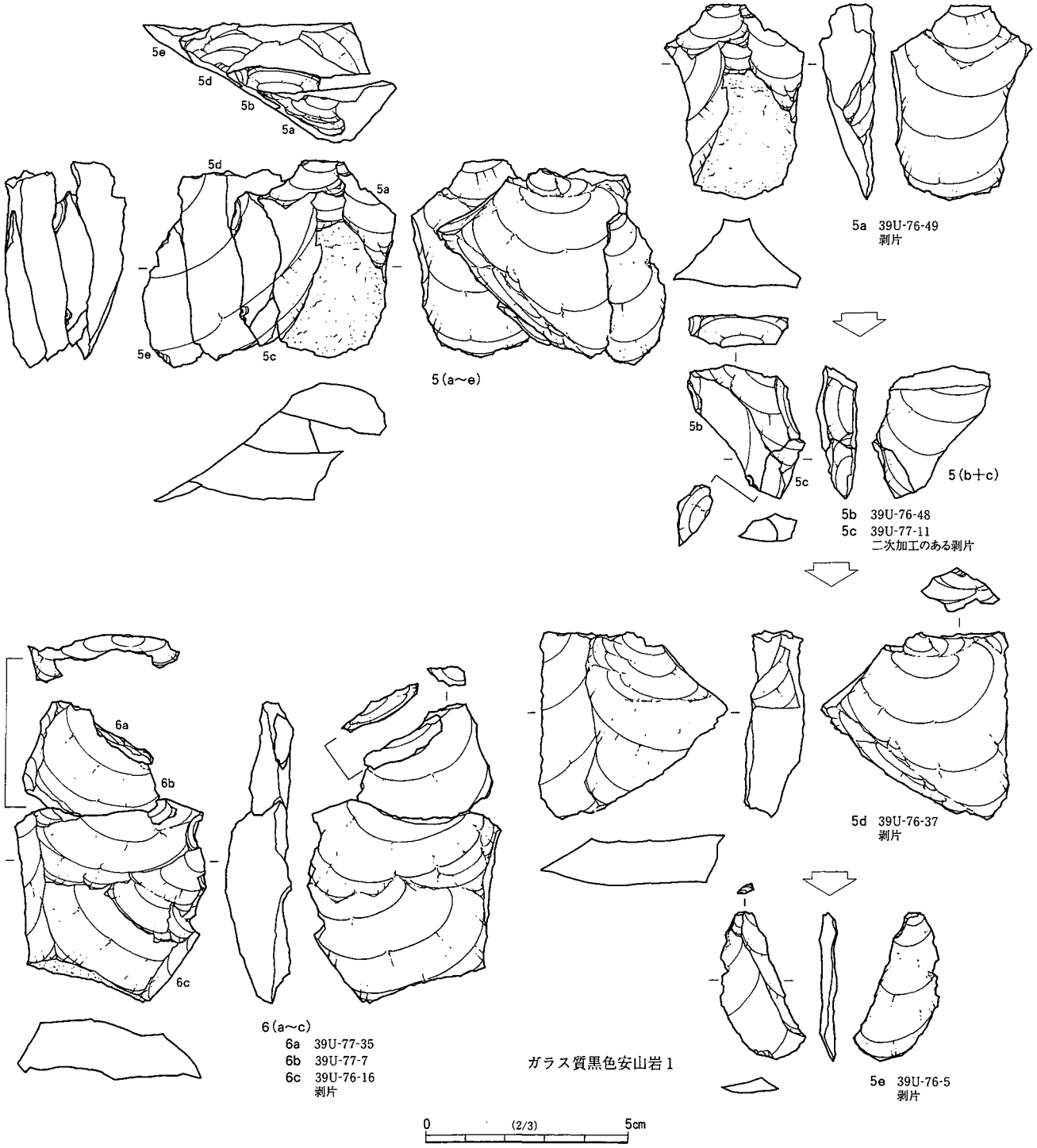


第97図　第３文化層 第12ブロック出土石器(2)

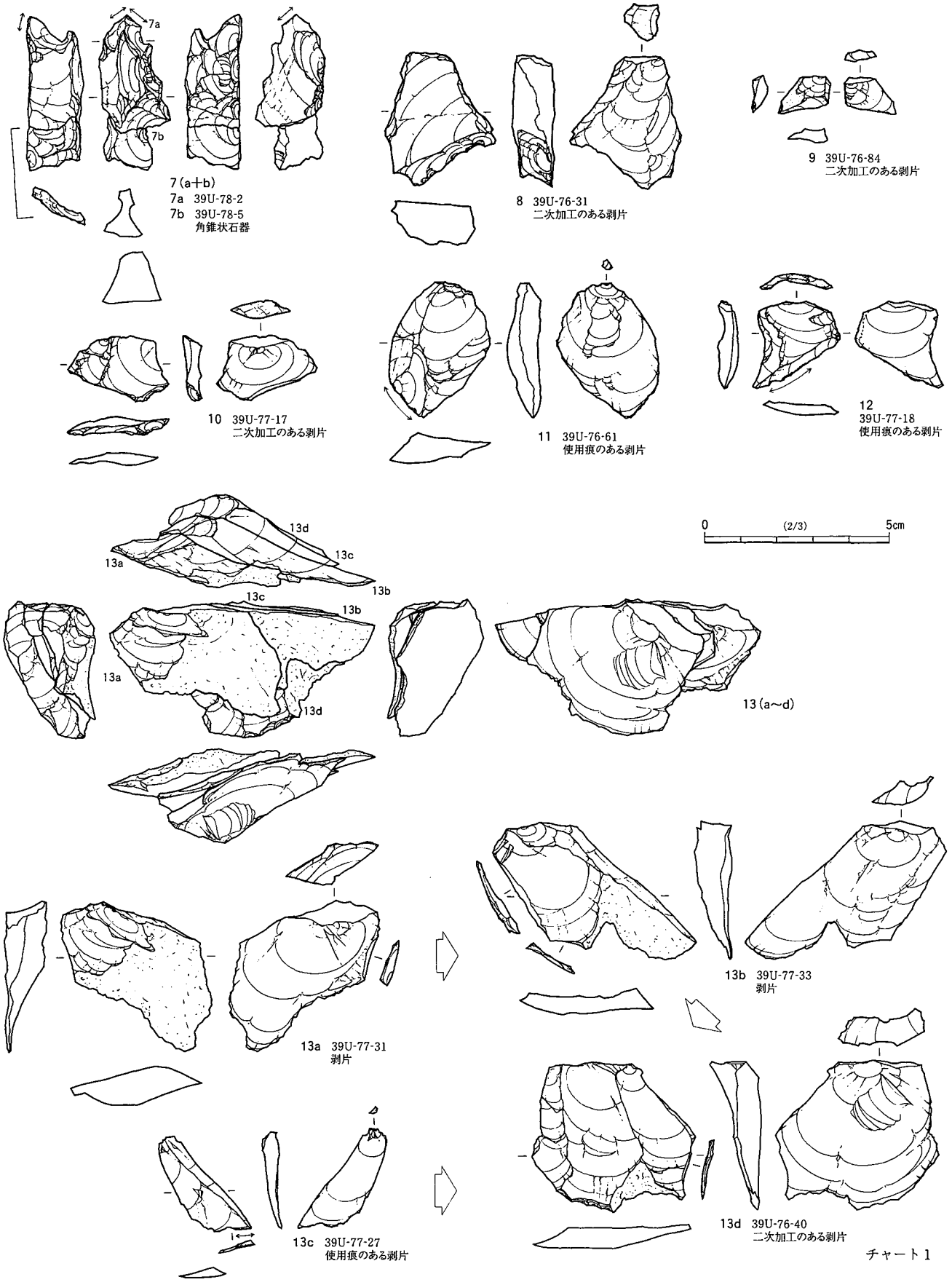
第20表　第３文化層 第12ブロック組成表

母岩名／器種	ナイフ形石器	角錐状石器	石錐	二次加工のある剥片	使用痕のある剥片	石核	剥片	砕片	礫片	点数	点数比	重量(g)	重量比
ガラス質黒色安山岩1	0	1	0	1(2)	0	2	29(33)	3	0	36(41)	23.98%	414.57	35.92%
頁岩 1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.58%	10.37	0.90%
ホルンフェルス1	0	0	0	0	0	0	3	0	0	3	1.75%	17.19	1.49%
チャート 1	1	1(2)	1	11(12)	20(23)	9	64(66)	12	0	119(126)	73.68%	712.03	61.69%
合計	1	2(3)	1	12(14)	20(23)	11	96(102)	15	1	159(171)	100.00%	1154.16	100.00%

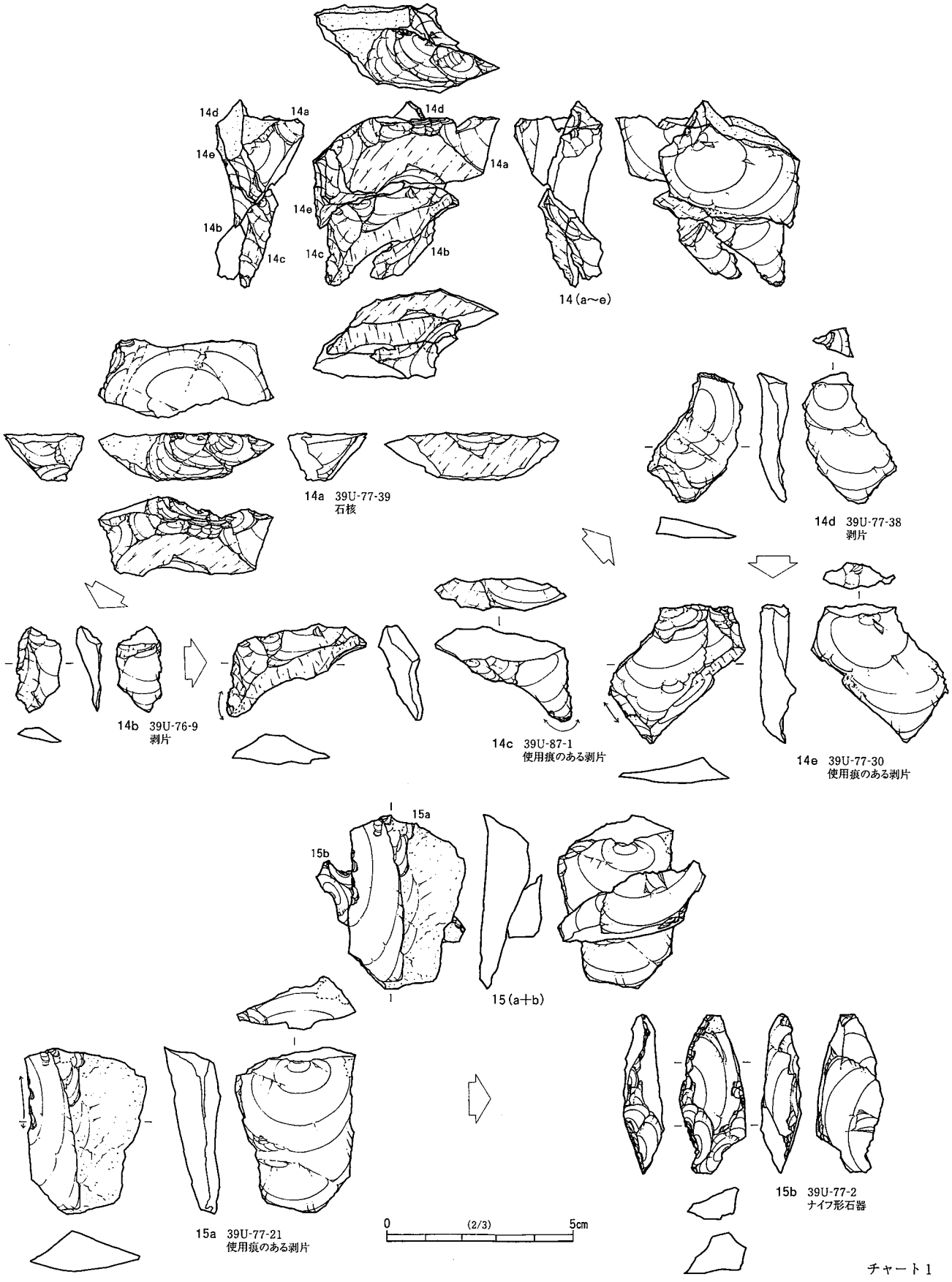
※（ ）は出土点数



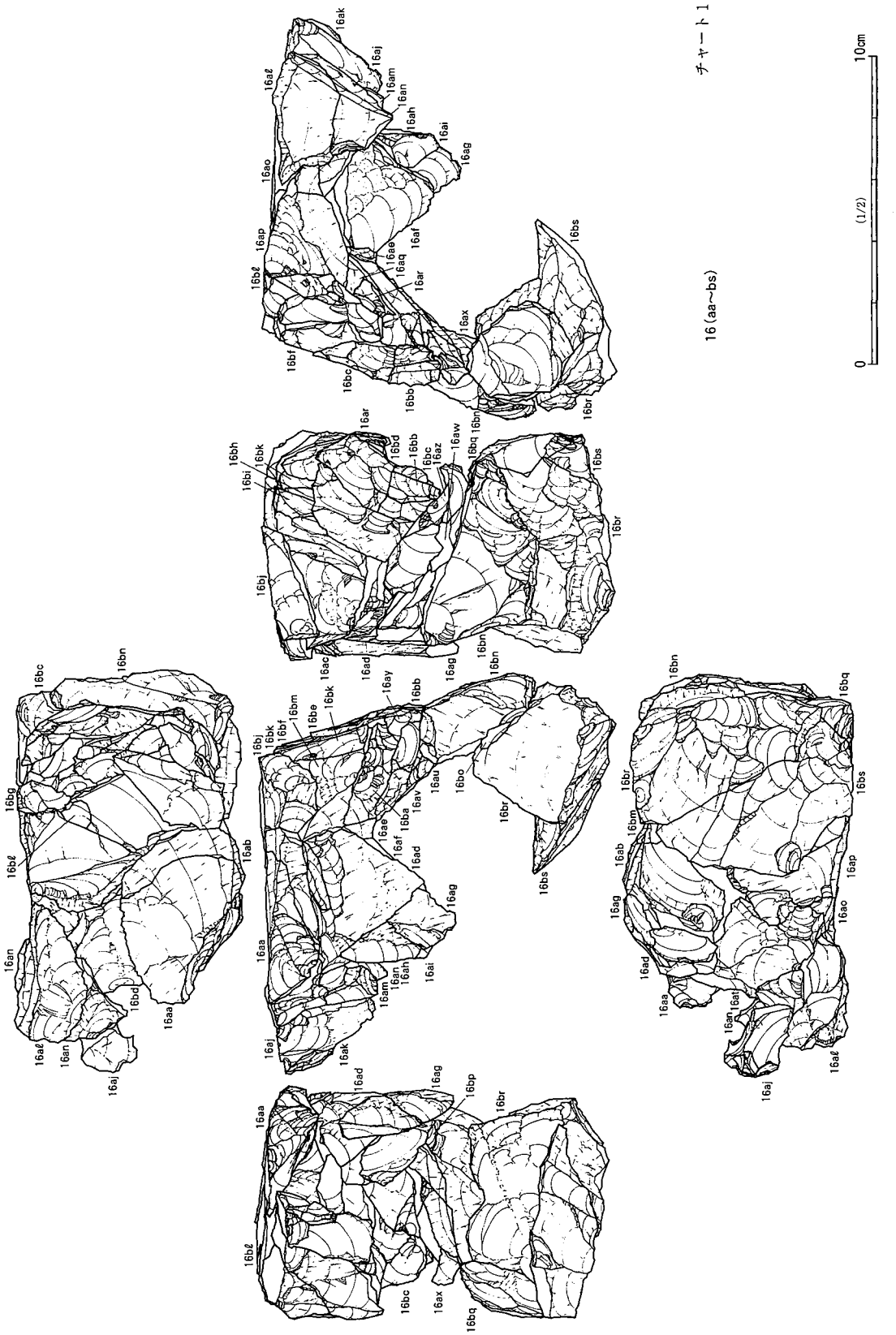
第98図　第３文化層 第12ブロック出土石器(3)



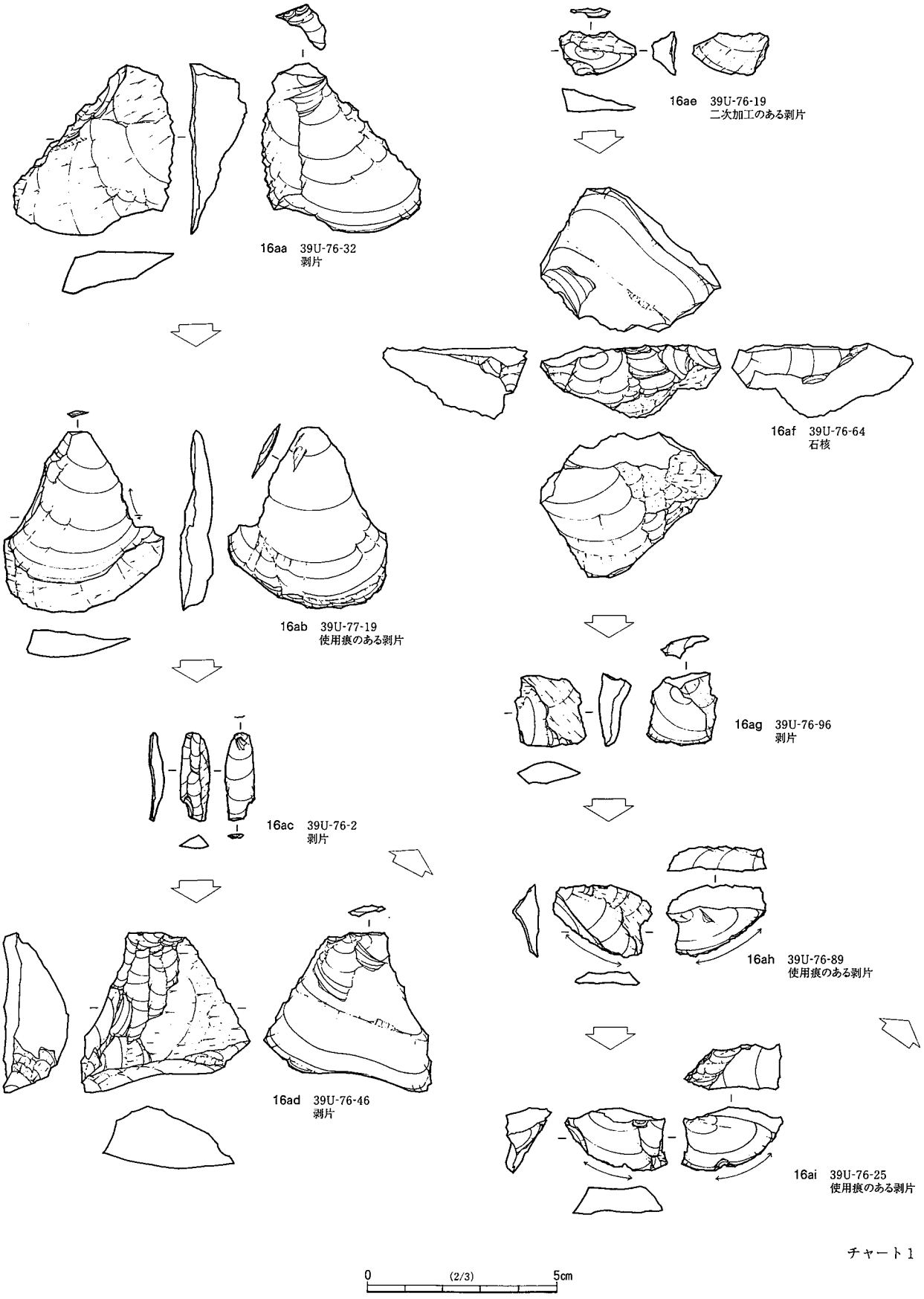
第99図　第３文化層 第12ブロック出土石器(4)



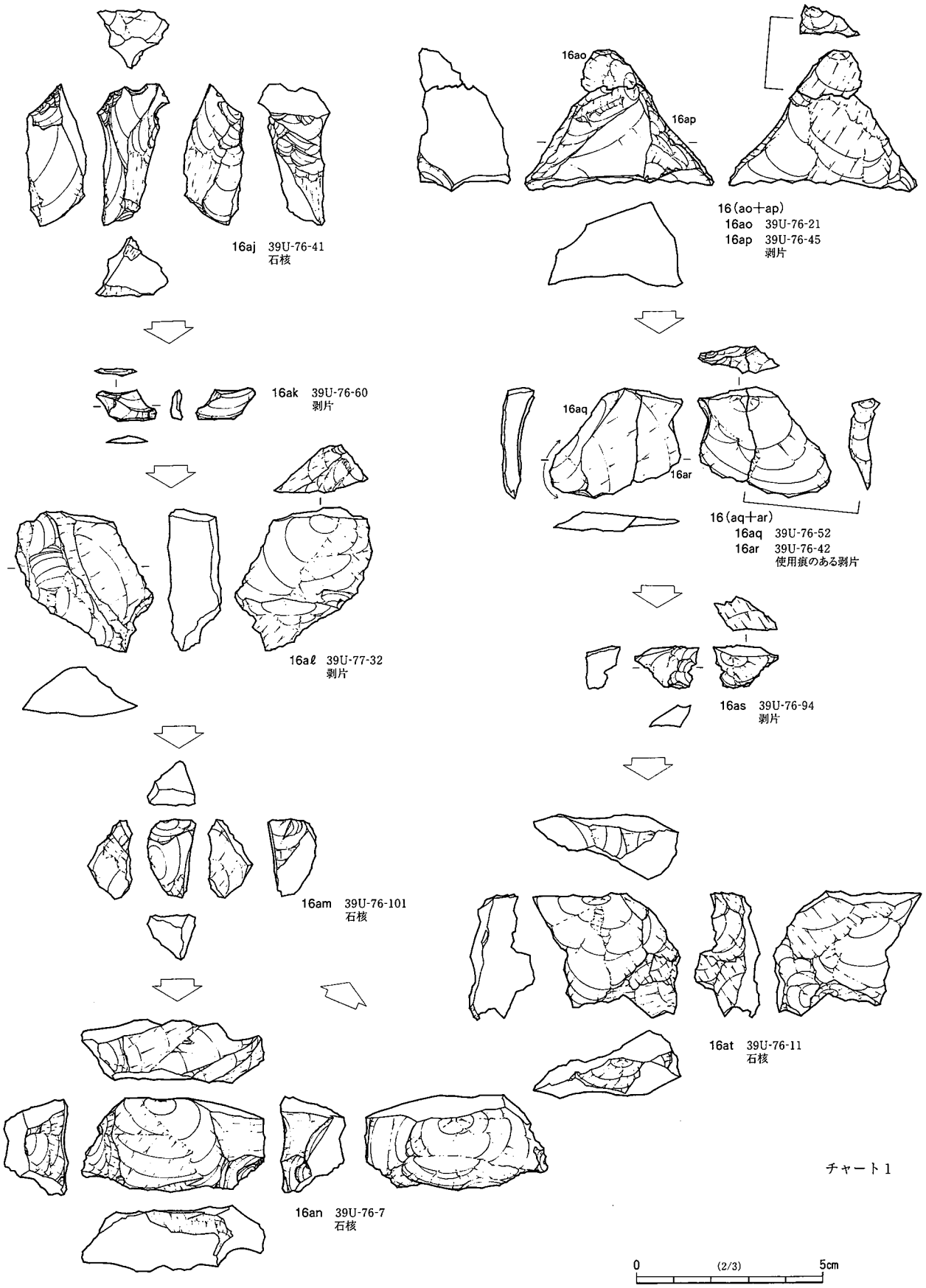
第100図　第３文化層 第12ブロック出土石器(5)



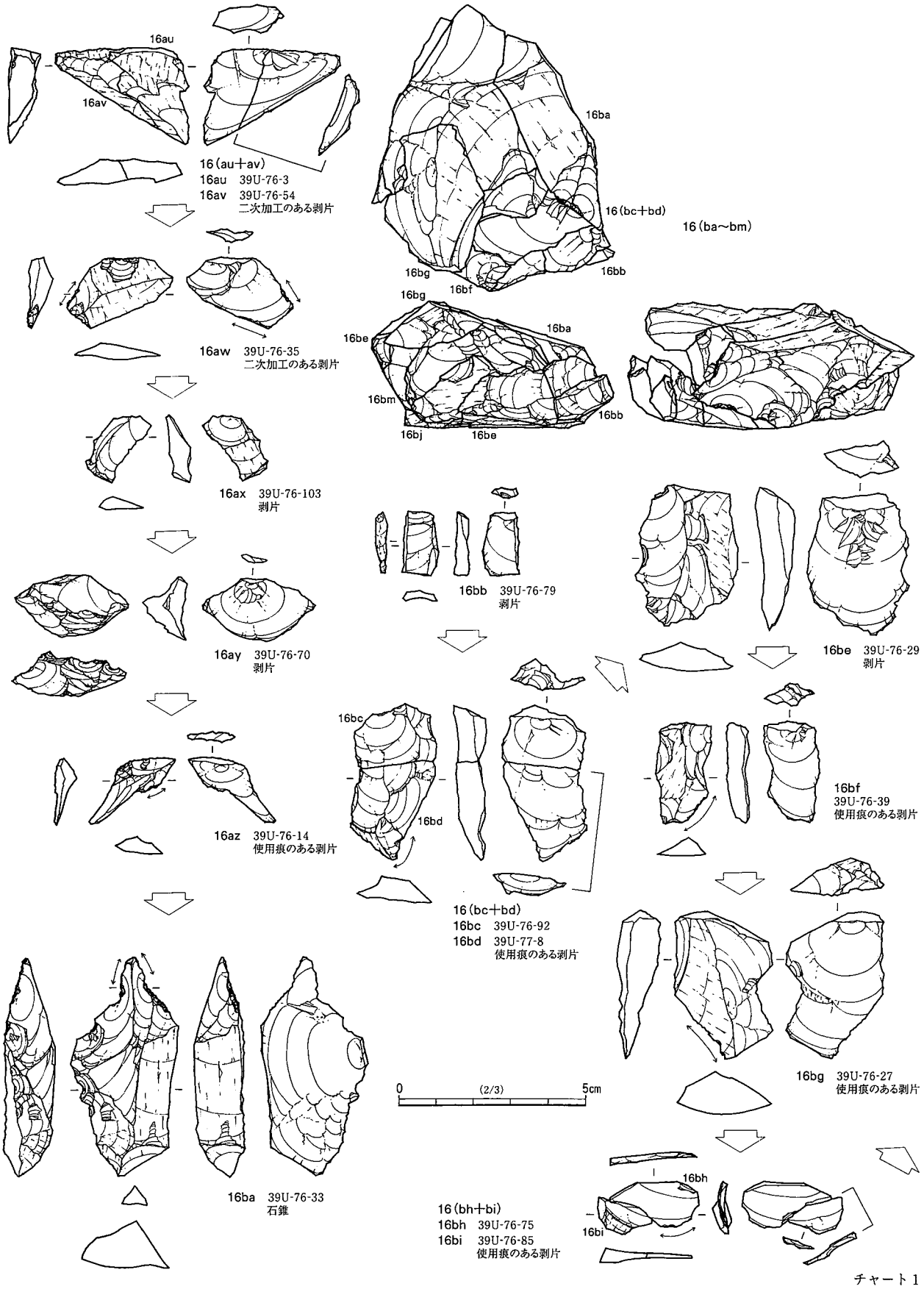
第101図　第3文化層 第12ブロック出土石器(6)



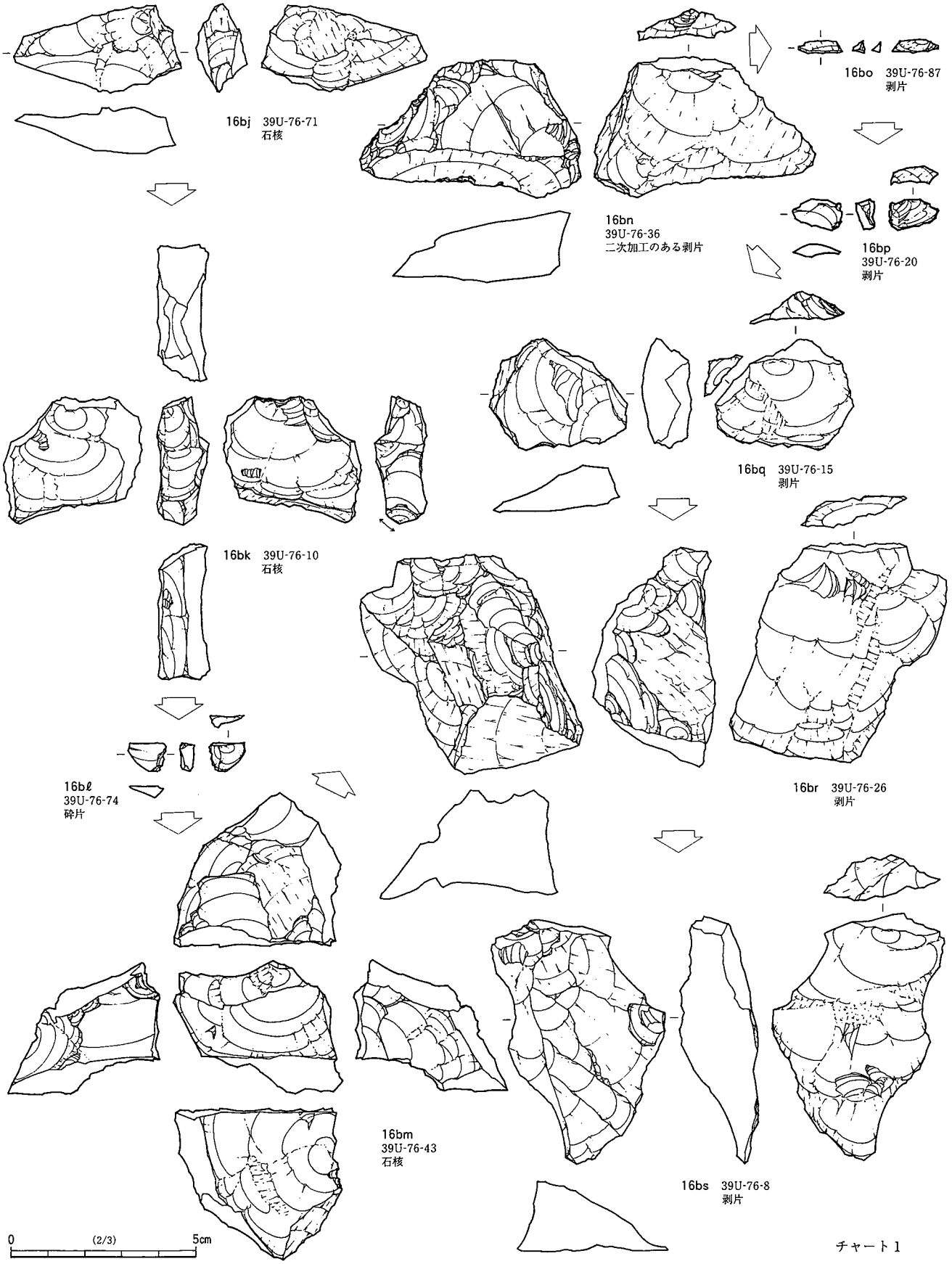
第102図　第３文化層 第12ブロック出土石器(7)



第103図　第３文化層 第12ブロック出土石器(8)



第104図　第3文化層 第12ブロック出土石器(9)



第105図　第３文化層 第12ブロック出土石器(10)

16ad・16aeが剥離される。16ag・16ah・16aiを含む石片も同様に16afから剥離され、さらに小型の剥片に加工される。

16aj ～ 16atではまず、16ajがこの塊から剥離され、石核として16akを含む数片が剥離される。この後は16al→16am→16anが剥離され、90°持ちかえた後の節理面打面からは16ao+16ap→16aq＋16ar→16as→16atが順に剥がされる。

16ba、16au ～ 16azは石錐とその加工工程にある調整剥片の接合状況が表れている。角柱状の素材から横長の小剥片が16au+16av→16aw→16ax→16ay→16azの順に剥離されるが、石錐16baの最終調整剥片は検出されなかった。

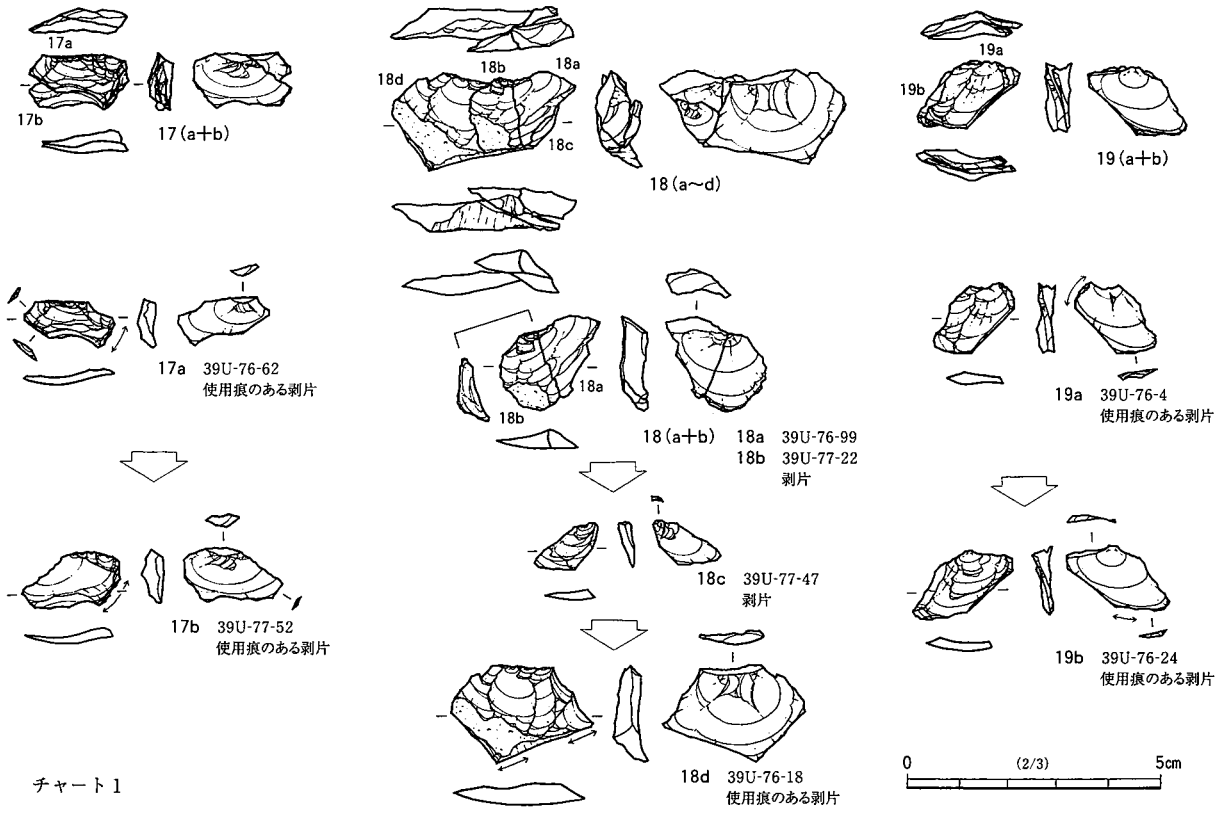
この後、16bb→16bc+16bd→16beの順に剥離されたあとは頻繁に打面転移が繰り返され、16bf→16bg→16bh+16bi→16bj→16bk→16blが剥離され、16bmが残される。

16bn ～ 16bsの16boは節理折れした小片であり、16bpも16bnが剥離される際の弾けと思われる。16bqの剥離面は16brと16bsの打面になっている。

17.（接77） 使用痕のある剥片２点の接合資料。打面を同じくする２剥片はともに頭部調整され、右側下部に使用痕がみられる。

18.（接78） 組成上では使用痕のある剥片１点と剥片２点の３点接合資料である。17同様に、同一打面から連続して剥離されたものであり、18d下縁辺には微細剥離痕がみられる。

19.（接79） 使用痕のある剥片2点の接合資料。同一打面から順に剥離される。薄い縁辺が刃部として使用されるが器厚の薄さも相まって末端部が欠けている。７～19はチャート１が母岩である。



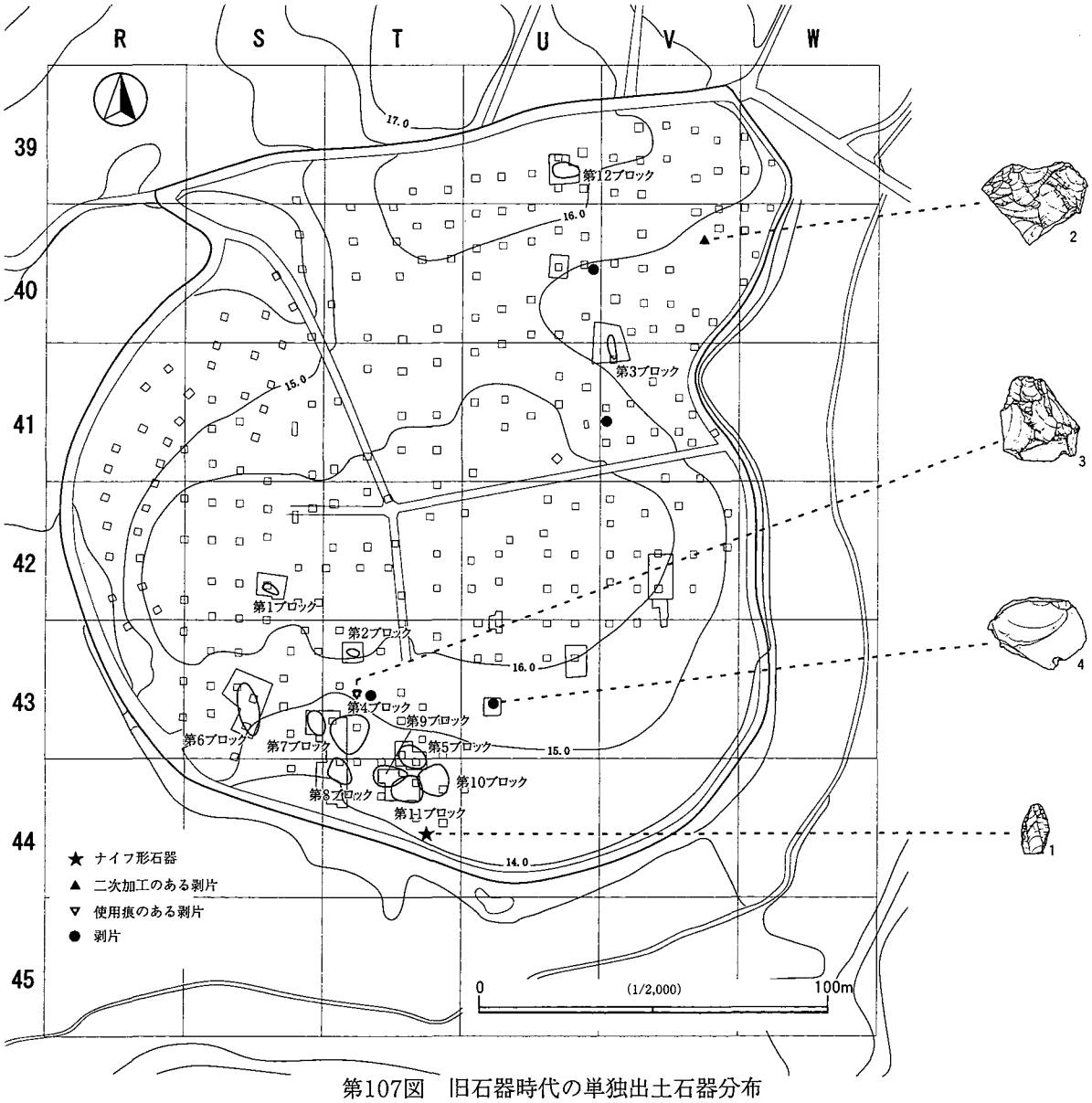
第106図　第３文化層 第12ブロック出土石器(11)

第６節　単独出土石器（第107・108図、第21表、図版27）

旧石器時代の遺物のうち、ブロック外及び単独で出土した剥片・石器７点について図示し、４点を実測した。石材は黒曜石４点のほか、ガラス質黒色安山岩・頁岩・ホルンフェルスが各々１点ずつ出土しており、ブロック内石材との接合を試みたが、同一母岩は確認されなかった。土層投影図は作成されていないが、調査時の所見があるものは記載した。

出土石器

１．ナイフ形石器　透明度が高く、夾雑物を含まない黒曜石製である。肉眼観察では信州産と推察され、素材剥片の形状が活かされた周縁加工であり、先端には刺突による衝撃剥離痕がみられる。基部は折れて欠損する。縄文石器集中Ｄの下層に包蔵され、標高13.212ｍ、当遺跡の所在する台地の最南端から出土している。調査時の所見ではＶ層相当と記載されている。

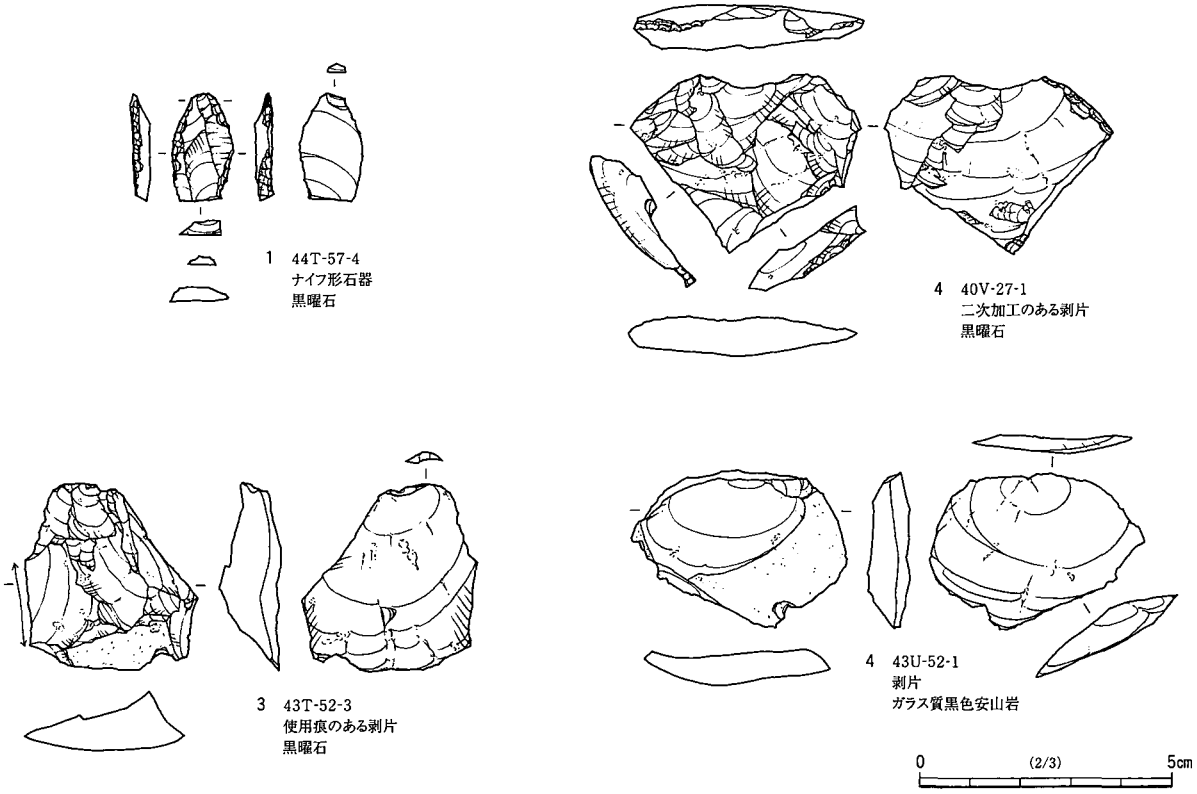


第107図　旧石器時代の単独出土石器分布

2．二次加工のある剥片　光を透過させると不透明な漆黒部分と濃灰部分、透明度の高い部分が層になっており、夾雑物はφ0.8㎜の白色粒が少量混じる良質な黒曜石である。主要剥離面側の右肩部に二次加工痕が並ぶが、折れ（折られ）た為に90°に近い端部が作出され、小剥離による加工が施される。横長の二次加工剥片を折断して、再利用したものか。グリッド一括出土の為、標高・層位は不明である。

3．使用痕のある剥片　不透明な濃灰色で、鉄錆様の赤褐色部分が目立ち、夾雑物も赤錆色である。器面の荒れを調整するための剥片であると思われるが、鋭角な縁辺には使用痕が看取される。高原山産黒曜石が多出する第4ブロックの北14ｍの標高14.822ｍから出土し、調査時の所見ではⅥ層と記されている。

4．剥片　同一打面から同一方向に連続剥離された横長剥片のうちの一片である。打角は80°、打面は細い帯状に残る。幅広い末端の一部は斜めに折れており、ナイフ形石器の基部として作出された可能性がある。ガラス質黒色安山岩製である。調査区から単独出土したものであり、標高・所見は記載されていない。



第108図　旧石器時代の単独出土石器

第21表　旧石器時代の単独出土石器組成表

石材／器種	ナイフ形石器	二次加工のある剥片	使用痕のある剥片	剥片	点数	点数比	重量(g)	重量比
ガラス質黒色安山岩	0	0	0	1	1	14.29%	11.68	29.77%
黒曜石	1	1	1	1	4	57.14%	25.13	64.04%
頁岩	0	0	0	1	1	14.29%	0.75	1.91%
ホルンフェルス	0	0	0	1	1	14.29%	1.68	4.28%
合計	1	1	1	4	7	100.00%	39.24	100.00%

第７節　黒曜石産地推定結果について

(1) 分析方法と分析委託機関

今回黒曜石産地推定を委託した機関は、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団である。委託先機関においては、2005年度より黒曜石の産地推定が行われ、その成果は『研究紀要　第21号』(2006　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団)等に記載されている。

市野谷二反田遺跡では第３文化層で黒曜石が出土しており、周辺の遺跡の出土状況を鑑みても時期的な石材搬入経路を明確にするためには、黒曜石産地推定成果を得ることが必要であった。そこで、黒曜石産地推定に積極的に取り組まれてきた財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団に分析依頼をしたところ快諾頂き、本節においてその成果を記載する機会を得た。紙面において、感謝の意を表するとともに、今後も共同研究が円滑に進むことを望みます。

分析方法は、前述の『研究紀要　第21号』(2006) に記載されているので、詳細についてはそちらを参照いただきたい。分析方法の概要は、波長分散型蛍光Ｘ線分析装置ＺＳＸ-miniを用いて、元素組成を確認し、産地を推定する方法である。また、産地推定の誤差の目安をmm±ｎσ法を用いて表記してある。

(2) 産地推定結果の概要

分析資料には、第３文化層の第４・５ブロックの黒曜石909点から目視による母岩分類を行い、各々から数点ずつピックアップした。今回推定された産地を県-エリア-判別群の順に記載すると下記のとおりとなる。

①長野県-和田-和田峠群

②長野県-和田-男女倉群

③栃木県-高原山-甘湯沢群

以上、３か所の判別群に識別された。第４ブロックは18点中10点が③の高原山の甘湯沢産、①は２点、②は１点であり、不明５点であった。第５ブロックの15点中14点が③であり、残りの１点は不明であった(第22表では不明・計測不能分は省いてある)。

黒曜石の産地別の数量は高原山産(不明分を含む)が98%を占めており、残りの２%が和田峠産となっている。この高原山産の黒曜石を多用する傾向は当市野谷二反田遺跡の北側に隣接する市野谷入台遺跡においても顕著であり、流山新市街地における、いわゆるⅣ下Ⅴ層の黒曜石搬入経路の解明の端緒を握るものであると期待される。

第22表　黒曜石産地同定結果一覧表

	挿図番号	母岩番号	遺物番号	器種	重量(g)	推定された産地	誤差の目安
第3文化層第4ブロック	2	OB-1	43T-72-　0020	ナイフ形石器	1.05	高原山 甘湯沢群	m－m±2σ
	37	OB-1	43T-72-　0288	使用痕のある剥片	6.03	高原山 甘湯沢群	m－m±0σ
	45	OB-1	43T-82-　0052	使用痕のある剥片	6.82	高原山 甘湯沢群	m－m±1σ
	64	OB-2	43T-81-　0028	使用痕のある剥片	3.40	高原山 甘湯沢群	m－m±2σ
	72	OB-4	43T-72-　0012	使用痕のある剥片	1.37	高原山 甘湯沢群	m－m±0σ
	73	OB-4	43T-72-　0037	使用痕のある剥片	4.58	高原山 甘湯沢群	m－m±0σ
	67	OB-4	43T-72-　0050	ナイフ形石器	0.83	高原山 甘湯沢群	m－m±1σ
	68	OB-4	43T-72-　0124	ナイフ形石器	0.48	高原山 甘湯沢群	m－m±1σ
	74	OB-4	43T-72-　0367	剥片	1.58	高原山 甘湯沢群	m－m±1σ
	70	OB-4	43T-72-　0436	二次加工のある剥片	0.17	高原山 甘湯沢群	m－m±5σ
	-	OB-5	43T-71-　0005	使用痕のある剥片	3.69	和田 和田峠群	m－m±2σ
	75	OB-5	43T-71-　0020	ナイフ形石器	1.14	和田 和田峠群	m－m±3σ
	78	OB-6	43T-71-　0018	剥片	0.67	和田　男女倉群	m－m±3σ

	挿図番号	母岩番号	遺物番号	器種	重量(g)	推定された産地	誤差の目安
第3文化層第5ブロック	19b	OB-1	43T-96-　0056	使用痕のある剥片	2.65	高原山 甘湯沢群	m－m±1σ
	8	OB-1	43T-95-　0020	使用痕のある剥片	5.83	高原山 甘湯沢群	m－m±1σ
	11	OB-1	43T-96-　0064	使用痕のある剥片	6.36	高原山 甘湯沢群	m－m±1σ
	15	OB-1	43T-96-　0213	使用痕のある剥片	4.76	高原山 甘湯沢群	m－m±0σ
	3	OB-1	43T-96-　0217	ナイフ形石器	3.14	高原山 甘湯沢群	m－m±2σ
	28	OB-2	43T-96-　0033	ナイフ形石器	0.93	高原山 甘湯沢群	m－m±2σ
	29	OB-2	43T-96-　0039	ナイフ形石器	0.71	高原山 甘湯沢群	m－m±2σ
	30	OB-2	44T-05-　0006	使用痕のある剥片	0.84	高原山 甘湯沢群	m－m±1σ
	31	OB-2	44T-06-　0003	使用痕のある剥片	1.65	高原山 甘湯沢群	m－m±0σ
	32	OB-3	44T-06-　0005	使用痕のある剥片	1.58	高原山 甘湯沢群	m－m±1σ
	33	OB-4	43T-96-　0012	ナイフ形石器	1.58	高原山 甘湯沢群	m－m±2σ
	36	OB-4	43T-96-　0020	使用痕のある剥片	3.15	高原山 甘湯沢群	m－m±0σ
	34	OB-4	43T-96-　0161	ナイフ形石器	1.52	高原山 甘湯沢群	m－m±2σ
	37	OB-4	43T-96-　0201	使用痕のある剥片	3.67	高原山 甘湯沢群	m－m±2σ

第３章　縄文時代

第１節　概要（第３図、第 23 表）

縄文時代の遺構は竪穴住居跡、埋甕、土坑がある。住居跡の大部分は竪穴の壁面が検出されず、炉と柱穴、遺物の出土状況からその範囲を推定した。分布密度は散漫であり、調査区中央部と標高15ｍ～ 16ｍのコンタライン沿い、台地縁辺部に分布している。また、複数の建物が重複していることも特徴の一つである。上層遺構の調査時と本報告での遺構番号の呼称を変更した。新旧遺構番号対応表は第23表のとおりである。大半の遺構が縄文時代に帰属するので、本章において掲載した。

第23表　調査遺構新旧対応表

新番号	旧遺構番号	種　別	時　期
ＳＩ００１	（４）004	竪穴住居跡	縄　文
ＳＩ００２	（４）005	竪穴住居跡	縄　文
ＳＩ００３	（４）008	竪穴住居跡	縄　文
ＳＩ００４	（３）003	竪穴住居跡	縄　文
ＳＩ００５	（３）004	竪穴住居跡	縄　文
ＳＩ００６	（４）010	竪穴住居跡	縄　文
ＳＩ００７	（４）011	竪穴住居跡	縄　文
ＳＩ００８	（２）001	竪穴住居跡	縄　文
ＳＩ００９	（３）006	竪穴住居跡	縄　文
ＳＩ０１０	（５）003	竪穴住居跡	縄　文
ＳＩ０１１	（５）002	竪穴住居跡	縄　文
ＳＩ０１０・０１１	（５）004	ピット群（竪穴住居跡）	縄　文
ＳＩ０１２	（５）006	ピット群（竪穴住居跡）	縄　文
ＳＩ０１３	（５）005	ピット群（竪穴住居跡）	縄　文

新番号	旧遺構番号	種　別	時　期
ＳＫ００１	（４）001	土　坑	縄　文
ＳＫ００２	（４）009	土　坑	縄　文
ＳＫ００３	（４）002	土　坑	縄　文
ＳＫ００４	（４）006	土　坑	縄　文
ＳＫ００５	（４）003	土　坑	縄　文
ＳＫ００６	（３）002	土　坑	縄　文
ＳＫ００７	（４）007	土　坑	縄　文
ＳＫ００８	（３）005	土　坑	縄　文
ＳＫ００９	（３）001	土　坑	縄　文
ＳＫ０１０	（４）012	土　坑	縄　文
ＳＫ０１１	（１）004	陥　穴	縄　文
ＳＫ０１２	（１）003	陥　穴	縄　文
ＳＫ０１３	（５）001	陥　穴	縄　文
ＳＫ０１４	（１）002	地下式坑	中～近世

第２節　竪穴住居跡

SI001（第109・110図、図版32・39・40）

遺跡の北東側、39Ｖ-87 ～ 39Ｖ-98グリッドに位置する。壁の掘り込みは検出確認されず、炉跡と柱穴群を検出した。炉を中心として柱穴が円形に配列する２棟の竪穴住居跡が重複していると推定される。

SI001は南西側の炉を中心とした住居跡で、柱穴の分布状況から推定径５ｍ前後である。床面と思しい硬化面は確認されていない。炉はやや形の崩れた楕円形の地床炉で、長径76cm、深さ32cmである。炉の

周辺は焼けて赤化していたが、覆土は暗褐色土が主体で、焼土粒の混入は少ない。柱穴は大小15基が検出されて、南側から西側の柱穴間の間隔が詰まっている。柱穴の規模は径24cm～52cm、深さ18cm～89cmである。また、Ｐ３及びＰ４は覆土中に深鉢が埋設された埋甕である。Ｐ３は径約30cm、検出面からの深さ13cmで、深鉢の底部だけが残存していた(4)。Ｐ４は平面形が楕円形のピットで、径約45cm、検出面からの深さ32cmである。深鉢(1)は口縁部から胴部上位が欠けているが、ピットの掘り方に沿って正位に埋設されていた。遺物はこの２点のほか土器片と石斧１点が出土した。

遺物　１はＰ４で埋甕として利用された深鉢で、口縁部と底部が欠落している。胴部中位は全面に縄文が施されるが、下位は縦方向にナデ調整がされ無文となる。器形と文様の施文の特徴は後期前半、堀之内式と考えられる。２は胴部の破片で、沈線区画内に縄文が充填される。沈線はわずかに曲線を描き、下方で収束するようである。３は縄文のみが施された胴部の破片である。４・５は深鉢の底部である。６は打製石斧で、形態は分銅形と思われる。平坦面、剥離面、側縁とも丁寧に磨られている。石材は粘板岩で、現存長63mm、最大幅68mm、最大厚11mm、重さ62.04gである。

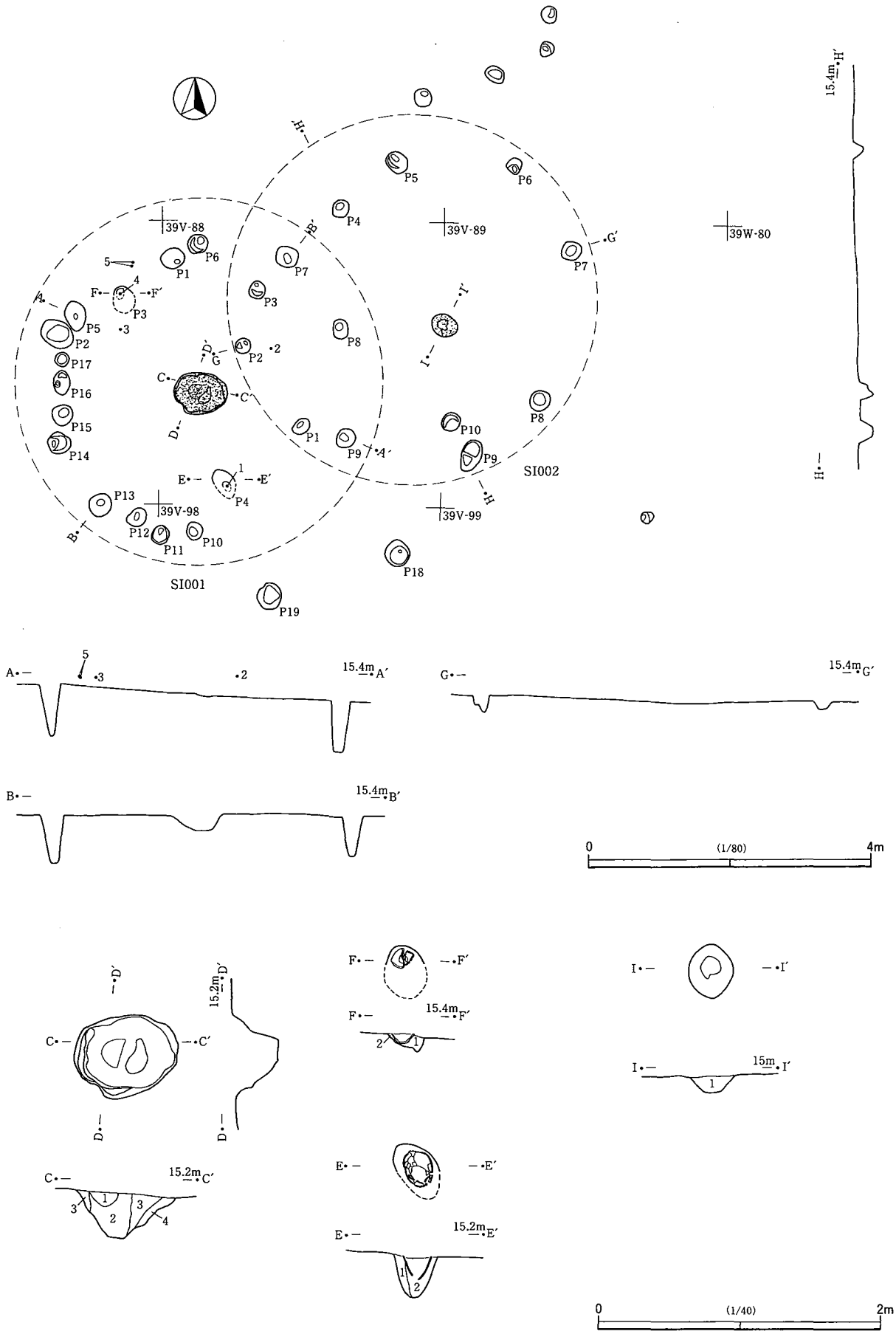
SI002(第109図、図版32)

SI002はSI001の東側、39Ｖ-89グリッドに中心をもつ。炉を中心に柱穴が円形に巡るタイプの住居となろう。炉は径40cmの円形の地床炉で、周囲から底面まで良く焼けた痕跡がある。柱穴の規模は径45cm～25cm、深さ30cm～11cmである。Ｐ５が最も深く、Ｐ７が最も浅い。硬化面は確認されていない。

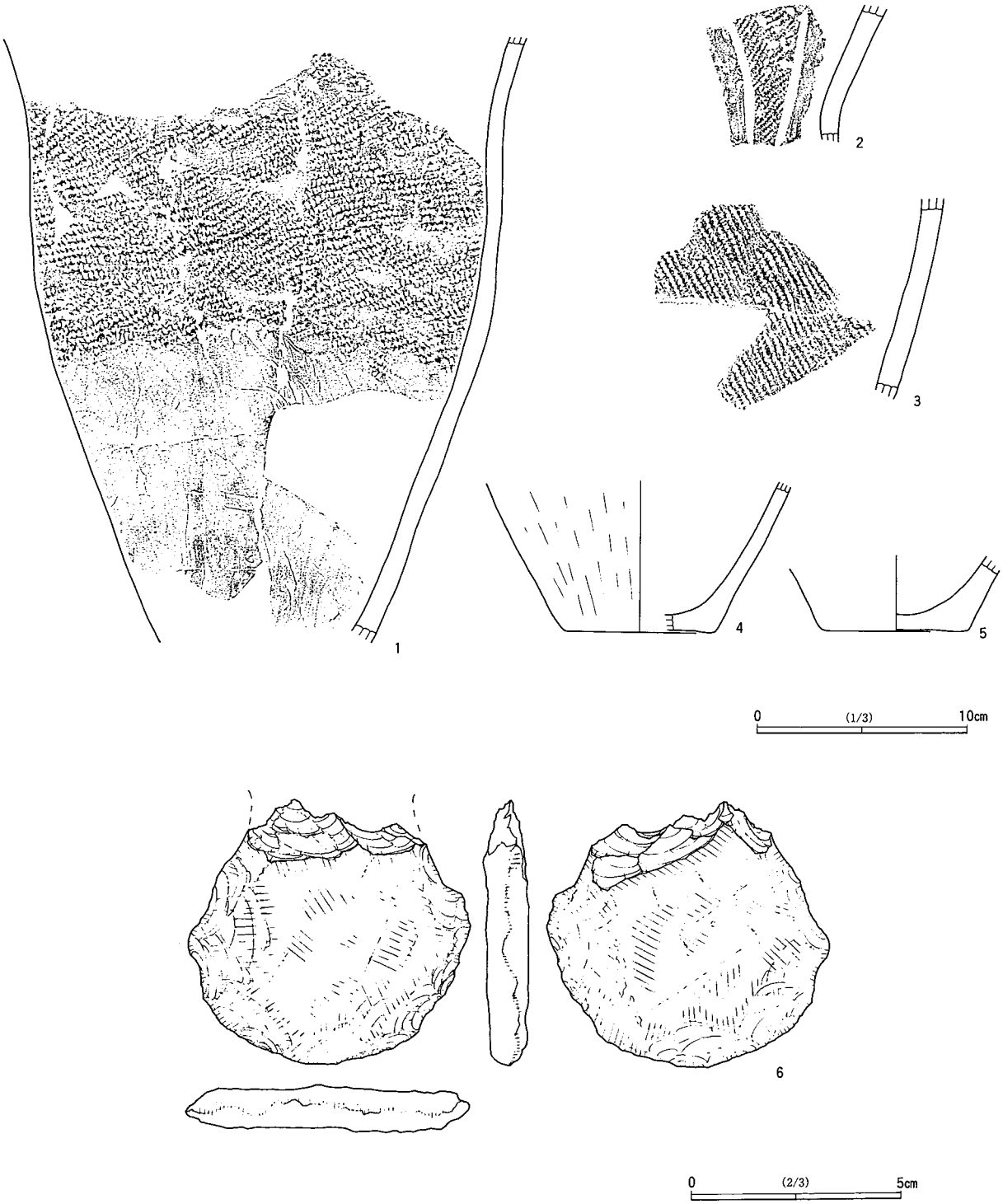
SI003(第111図、図版33・39)

遺跡の北東側、40Ｖ-14～25グリッドに跨って位置し、SI001から南西に約12ｍの距離にある。この遺跡で唯一壁面がしっかり遺存する住居跡である。平面形はほぼ楕円形で、西壁側がやや張り出している。規模は長軸5.75ｍ、短軸4.92ｍである。床面は全体に起伏があり、中央付近からやや北側が高くなっている。炉は中央付近に地床炉２基が存在する。北側の炉Ａは長径58cmの楕円形で、深さは20cmである。底面から炉の周囲まで火を受けた痕跡が広がっている。南側の炉Ｂは径62cmのほぼ円形で、深さは19cm。底面に焼けた痕跡を留めている。共に炉の上層に焼土が堆積し、下層は焼土粒が混ざる程度である。壁は住居跡が北から南に傾斜する緩い斜面に立地しているため、北側で遺存が良い。確認面からの深さは18cm～52cmである。炉Ａの北に位置する不整形の土坑Ｐ48は径78cm、深さ39cmである。柱穴は大小46基が検出されている。壁に接するＰ１～Ｐ22とその内側のＰ23～Ｐ35はほぼ同心円状に巡っている。２基の炉の位置関係を考慮すると、この住居が内側から外側へ、炉Ａから炉Ｂを中心とする住居へと建て替えが行われた可能性が高い。遺物は土器片が40点ほど出土している。住居の南東隅にややまとまりがあるもののその多くが小破片で、床面から10cm前後上で出土している。図に示したように前期の土器片も混在しているが主体となるものは後期初頭のものであり、本住居もこの時期に相当すると考えられる。

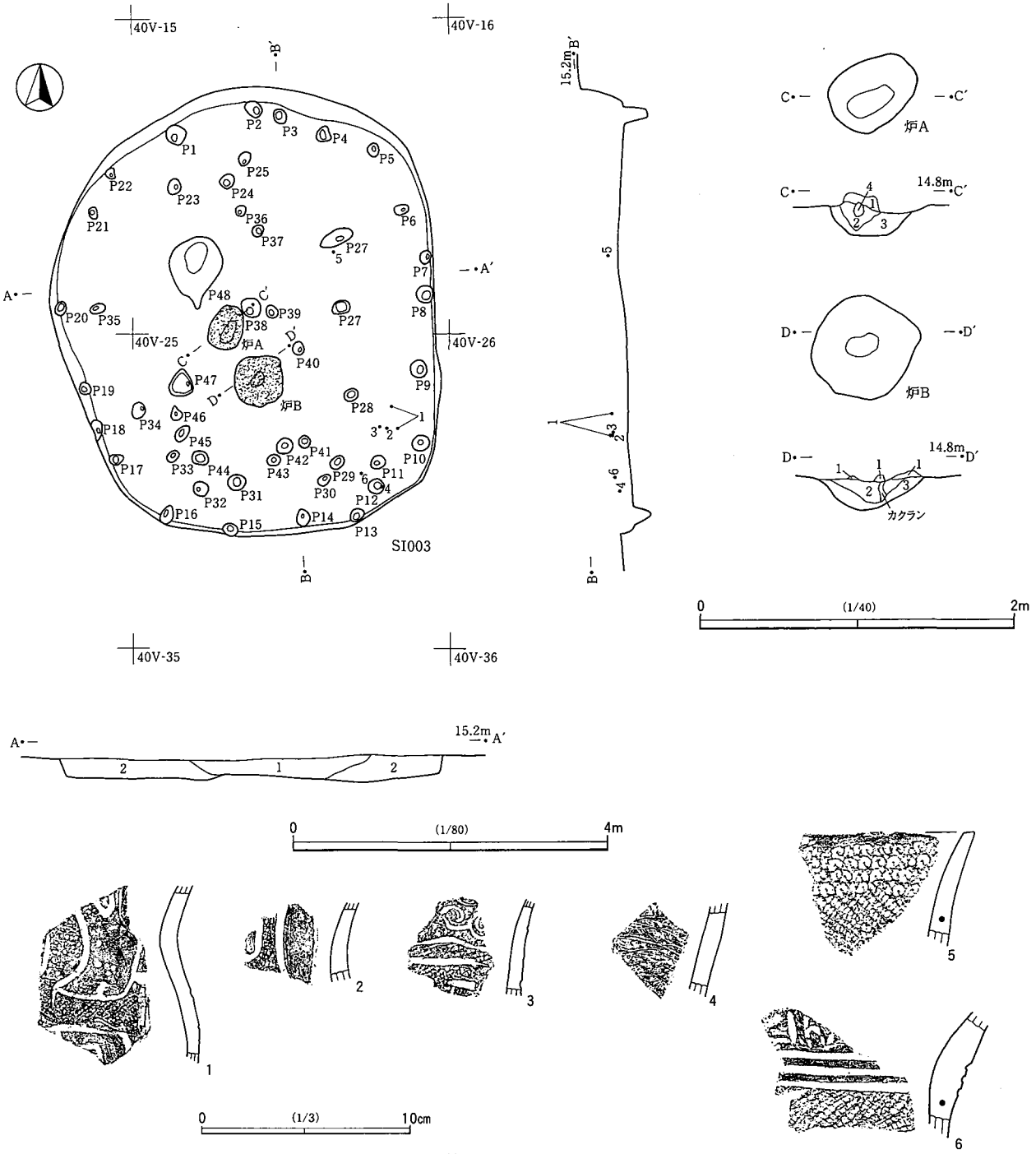
遺物　１・２は沈線による意匠文区画内に縄文を充填する。３は縄文を地文として、細い沈線で直線、渦巻文等を施す。４は縄文を地文として細かな条線が加えられている。５・６は胎土に繊維を含む関山式の土器である。５は口縁部で、ループ文を重層的に施している。６は横方向の沈線で文様帯を区画し、下位に縄文を施している。



第109図　SI001・002



第110図　SI001出土土器・石器

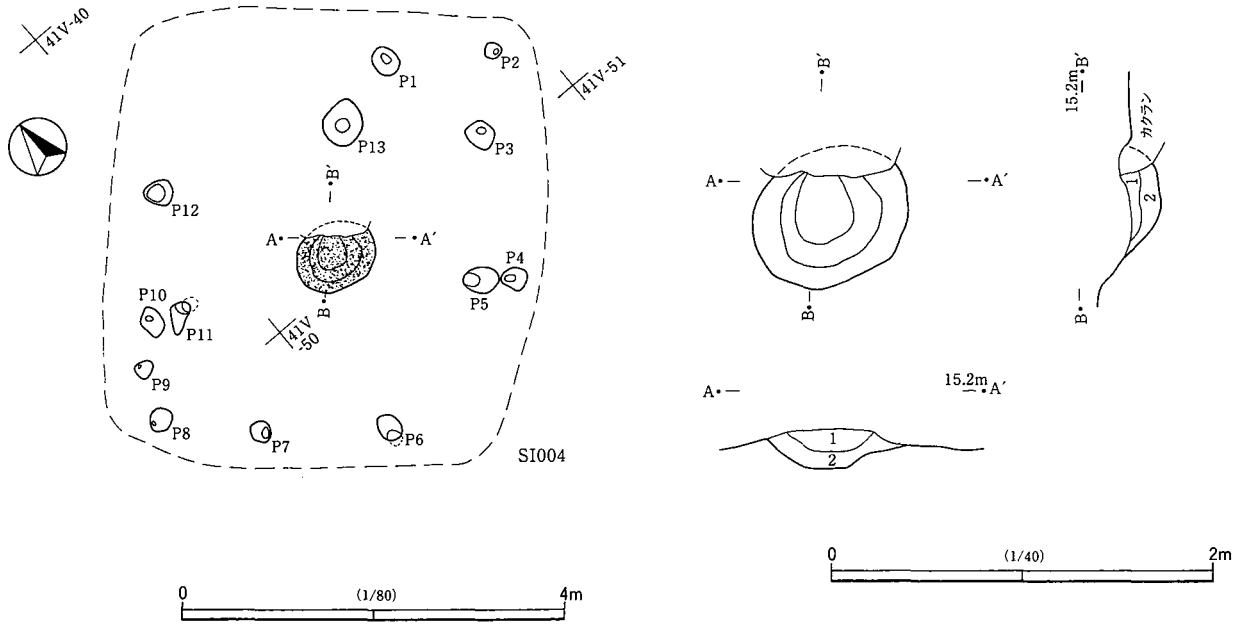


第111図　SI003

SI004(第112図、図版33)

遺跡の中央からやや東寄り、41U-49グリッド～41V-50グリッドに跨って位置する。壁の掘り込みは検出、確認されず、炉跡と柱穴群を検出した。住居の平面径は、柱穴の分布状況から一辺4.5m～4.8m程の方形の竪穴を想定した。南東側にSI005を構成するピット群が位置するが重複はしていない。炉はほぼ

円形の地床炉で、最大径85cm、検出面からの深さは32cmである。北側の一部が攪乱されているが、底面から検出面周囲まで良く焼けた痕跡を留めていた。炉の覆土は２層に分けられ、下層に焼土を含む赤褐色土が厚く堆積していた。柱穴は13基検出されている。径18cm（Ｐ２）～44cm（Ｐ13）、深さ３cm（Ｐ７）～35cm（Ｐ３）で、規模が不規則である。遺物は炉の周辺で土器片２点が出土したが、何れも細片で時期は不明である。

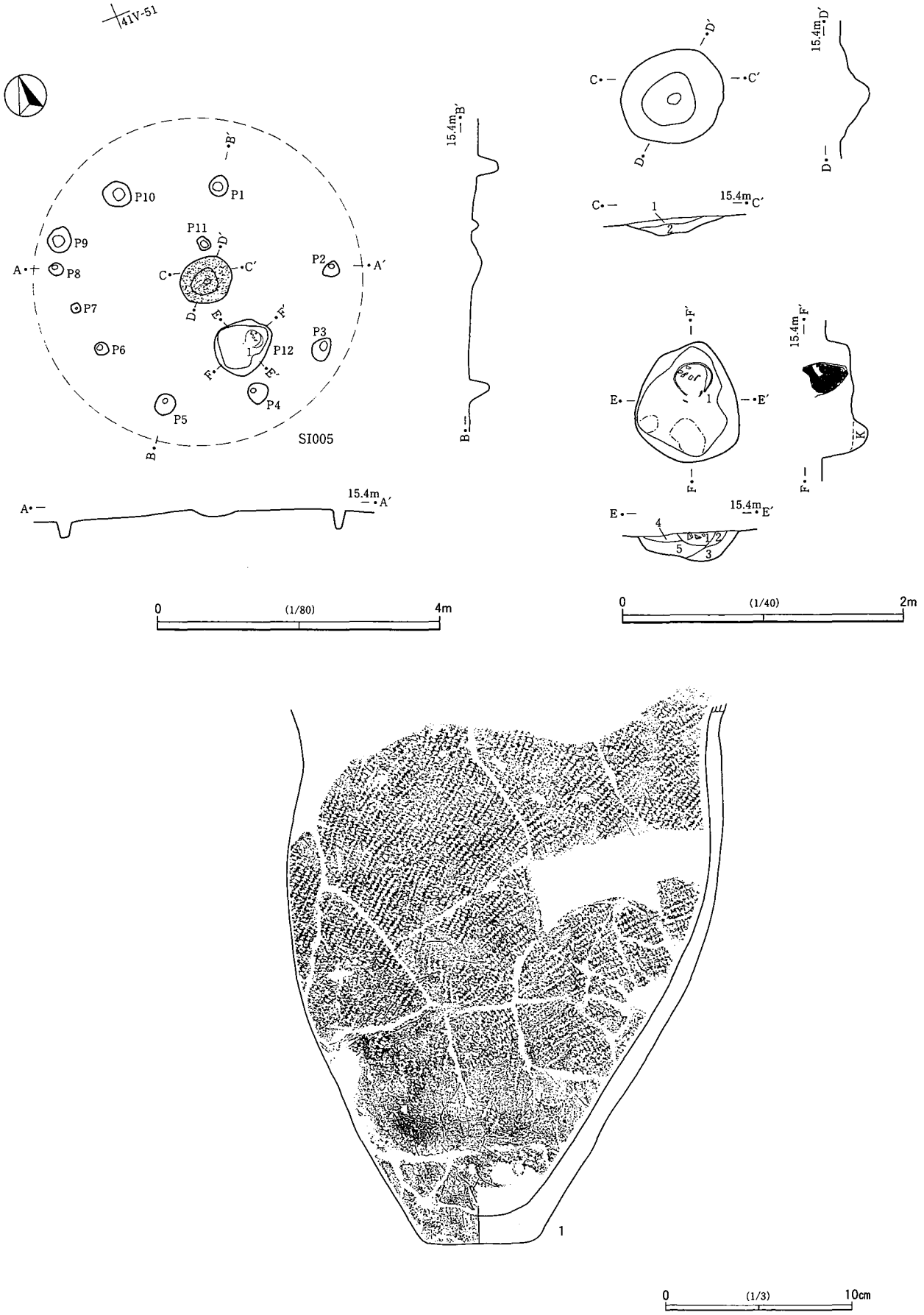


第112図　SI004

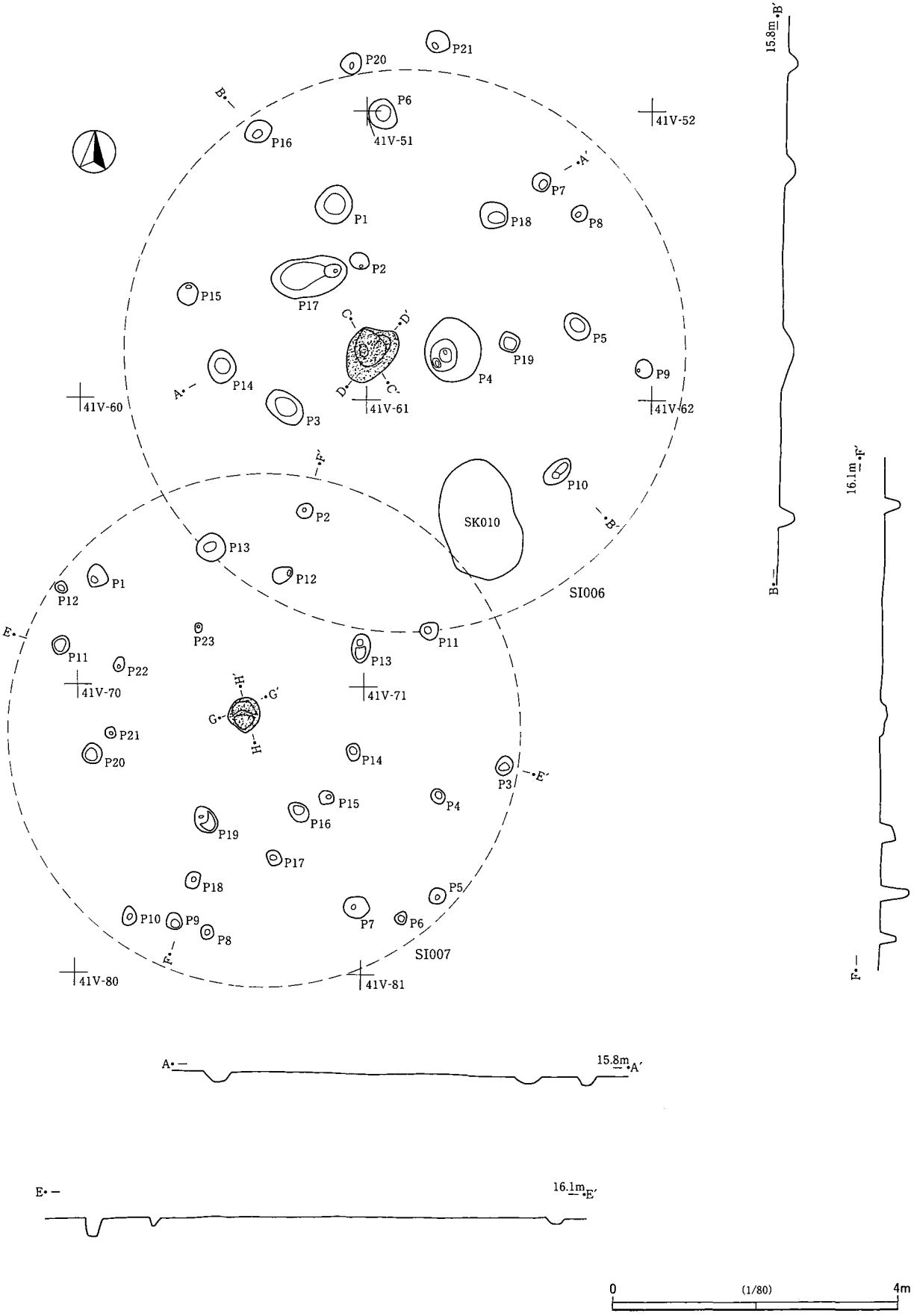
SI005（第113図、図版33・34・40）

SI004の南東側、41Ｖ-50～61グリッドに跨って位置し、北側でSI004と重複する。壁の掘り込みは確認されず、炉跡と埋甕、柱穴群を検出した。住居の平面形は不明だが、柱穴の分布状況からすると炉を中央に置く円形若しくは楕円形の竪穴になると思われる。炉はほぼ円形の地床炉で、最大径76cm、検出面からの深さは23cmである。底面を中心に良く焼けた痕跡を留めていた。埋甕は炉の南側に位置し、長さ87cmの不整形の土坑の東端に寄った位置にほぼ正位に埋設されていた。土坑の規模は土器に比べてかなり大きく、西側に攪乱が２か所あることを踏まえると、本来は埋甕が収まる程度のものであったかもしれない。柱穴は10基検出されている。Ｐ１～Ｐ10が炉を中心に円形に配置され、Ｐ11は炉の脇に掘り込まれている。径14cm（Ｐ７）～38cm（Ｐ10）、深さ12cm（Ｐ７）～36cm（Ｐ10）で、西側のＰ６～Ｐ８の規模が他に比べ小さく、柱穴の間隔が詰まっている。住居の時期は埋甕から後期初頭と判断した。

遺物　１は深鉢で、口縁部が欠落している。文様は縄文が主体であり、胴部下位から底部は無文で縦方向にナデ整形されている。器形と施文の特徴から堀之内式の範疇に入るものと考えられる。


41V-51
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
SI005
15.4m
0
(1/80)
4m
(1/40)
2m
(1/3)
10cm

第113図　SI005

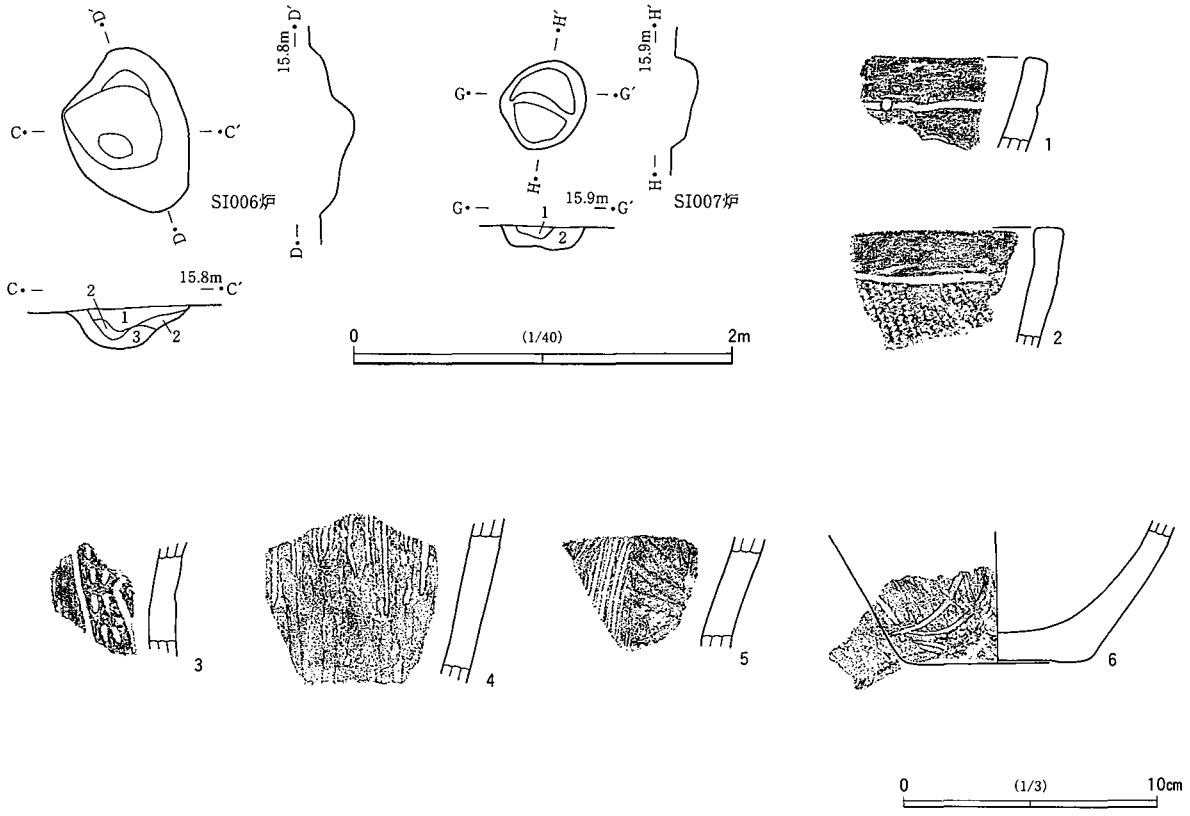


第114図　SI006・007(1)

SI006(第114・115図、図版34・39)

遺跡のほぼ中央、41Ｖ-40～61グリッドに跨って位置し、南側でSI007と重複する。壁の掘り込みは確認されず、炉跡と柱穴群を検出した。住居の平面形は不明だが、柱穴の分布状況から径約８ｍ前後の円形の竪穴を想定した。炉は不整形の地床炉で、長径90cm、検出面からの深さは23cmである。中央部が窪み、底面を中心に良く焼けた痕跡を留めている。柱穴は21基検出されている。このうちＰ４とＰ17は他の柱穴に比べ規模が大きい。Ｐ４はほぼ円形で、底面が中心から僅かにずれて斜めに掘り込まれている。長径84cm、深さ54cmである。Ｐ17は楕円形の平面形で、底面が二段に掘り込まれる。長径1.09ｍ、深さ45cmである。これ以外の柱穴は長径27cm(P11)～58cm(Ｐ３)、深さ11cm(Ｐ７)～47cm(P12)である。またこれとは別にSK010とした楕円形の土坑がある。遺物はＰ１～Ｐ５から土器片、礫片等が出土している。図示した土器片は１・２がＰ３、３～５がＰ４出土のものであり、住居の時期は称名寺式期に相当する。

遺物　１は深鉢の口縁部である。平縁で僅かに内湾し、沈線によって口縁部無文帯を区画する。下端には弧状の沈線の端がかろうじて残っている。２も同じく平縁の口縁部で、沈線によって無文帯を区画し、以下は単節縄文を施文している。３～５は胴部の破片である。３は沈線で意匠文を描き、意匠文内を列点文で充填している。枠外は丁寧に磨かれている。４は底部に近い部位になろう。上位に間隔の空いた条線文が施され、下位は縦方向にナデられている。５は櫛歯状の細かい条線文が施される。



第115図　SI006・007(2)

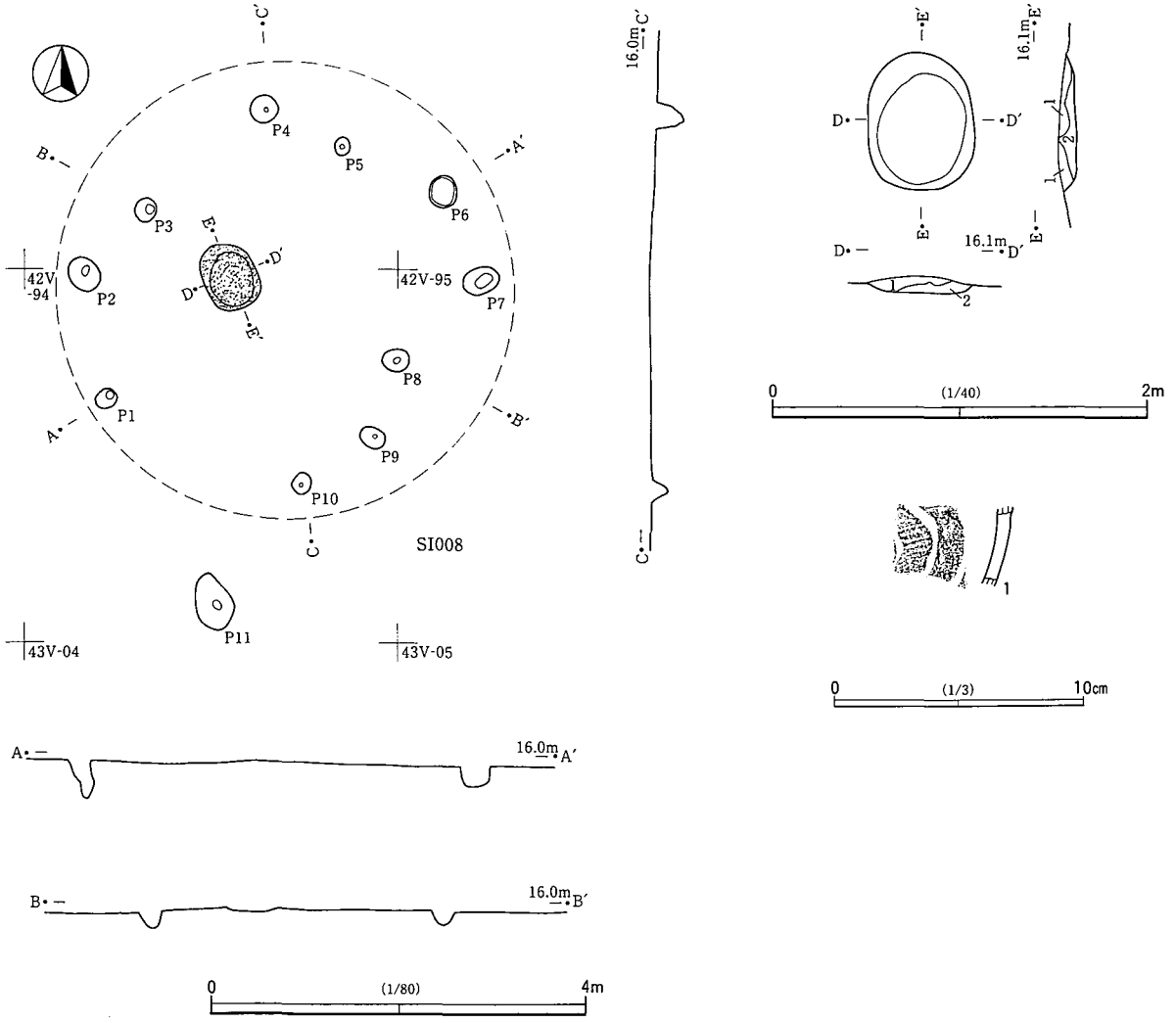
SI007(第114・115図、図版34・39・40)

SI006の南側で重複する住居跡で、41U-69～41V-71グリッドに跨って位置する。壁の掘り込みは確認されず、炉跡と柱穴群を検出した。住居の平面形は不明だが、柱穴の分布状況から径約7m前後の円形の竪穴を想定した。炉は楕円形の地床炉で、長径50cm、検出面からの深さは12cmである。炉の底面は段差があり北側で深くなっている。柱穴は大小23基検出されている。規模は長径15cm(P23)～42cm(P19)、深さ8cm(P8)～40cm(P1)である。遺物はP1～P4で出土しているが量は少ない。住居跡の時期は図示した深鉢の底部から、後期前半に相当する。

遺物　第115図6は底部で、浅い沈線で曲線が描かれる。

SI008(第116図、図版35・39)

遺跡の中央から南東側、42V-84～95グリッドに跨って位置し、SI007から南東に約70mの距離にある。壁の掘り込みは確認されず、炉跡と柱穴群を検出した。住居の平面形は不明だが、柱穴の分布状況から径約5m前後の円形の竪穴を想定した。炉は楕円形の地床炉で、長径74cm、短径57cm、検出面からの深さは10cm前後である。底面は良く焼けて赤く変色し、硬化している。柱穴は円形に配列するP1～P



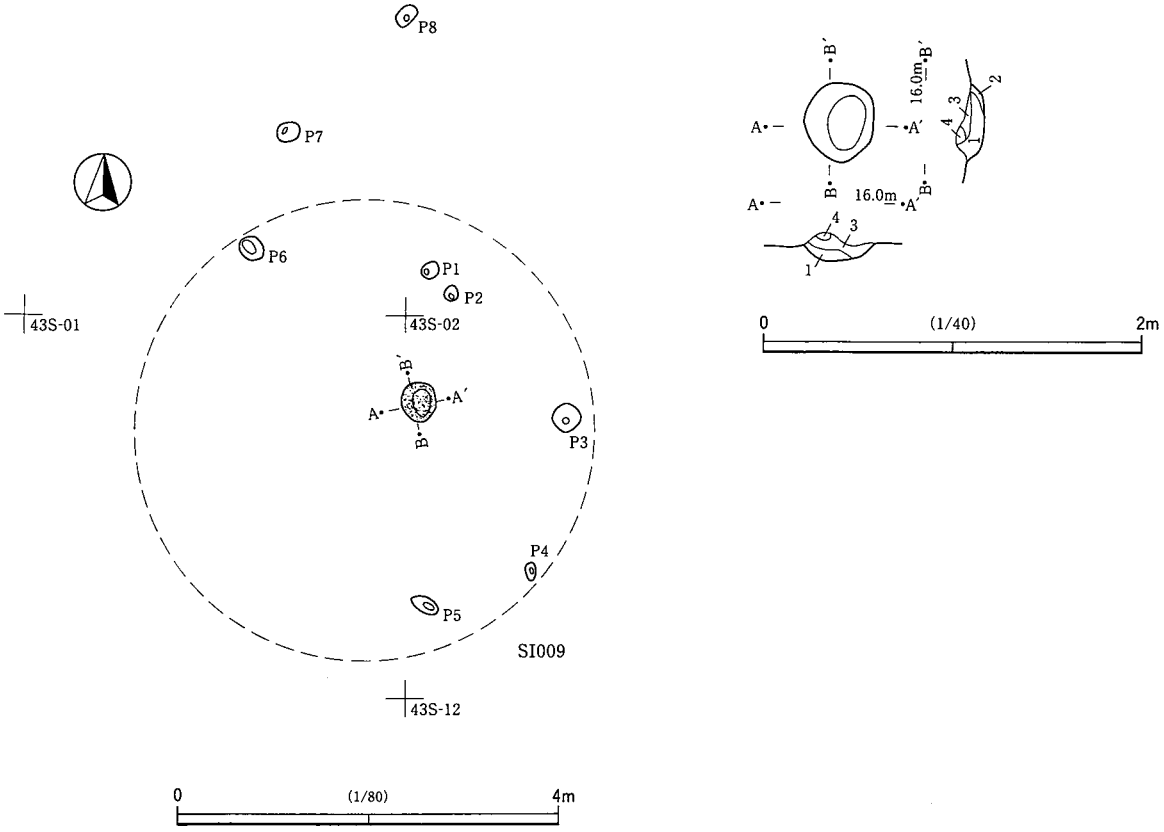
第116図　SI008

10とその南側にＰ11の合計11基検出した。Ｐ１～Ｐ10は径20cm（Ｐ５）～40cm（Ｐ７）、深さ13cm（Ｐ５）～41cm（Ｐ１）である。遺物はＰ１と炉跡から土器片が少量出土している。住居跡の時期は断片的な資料ではあるが、後期前半、称名寺式期と考えておきたい。

遺物　１は深鉢の胴部片で、渦巻き状の意匠文内側に縄文が充填されている。

SI009（第117図、図版35）

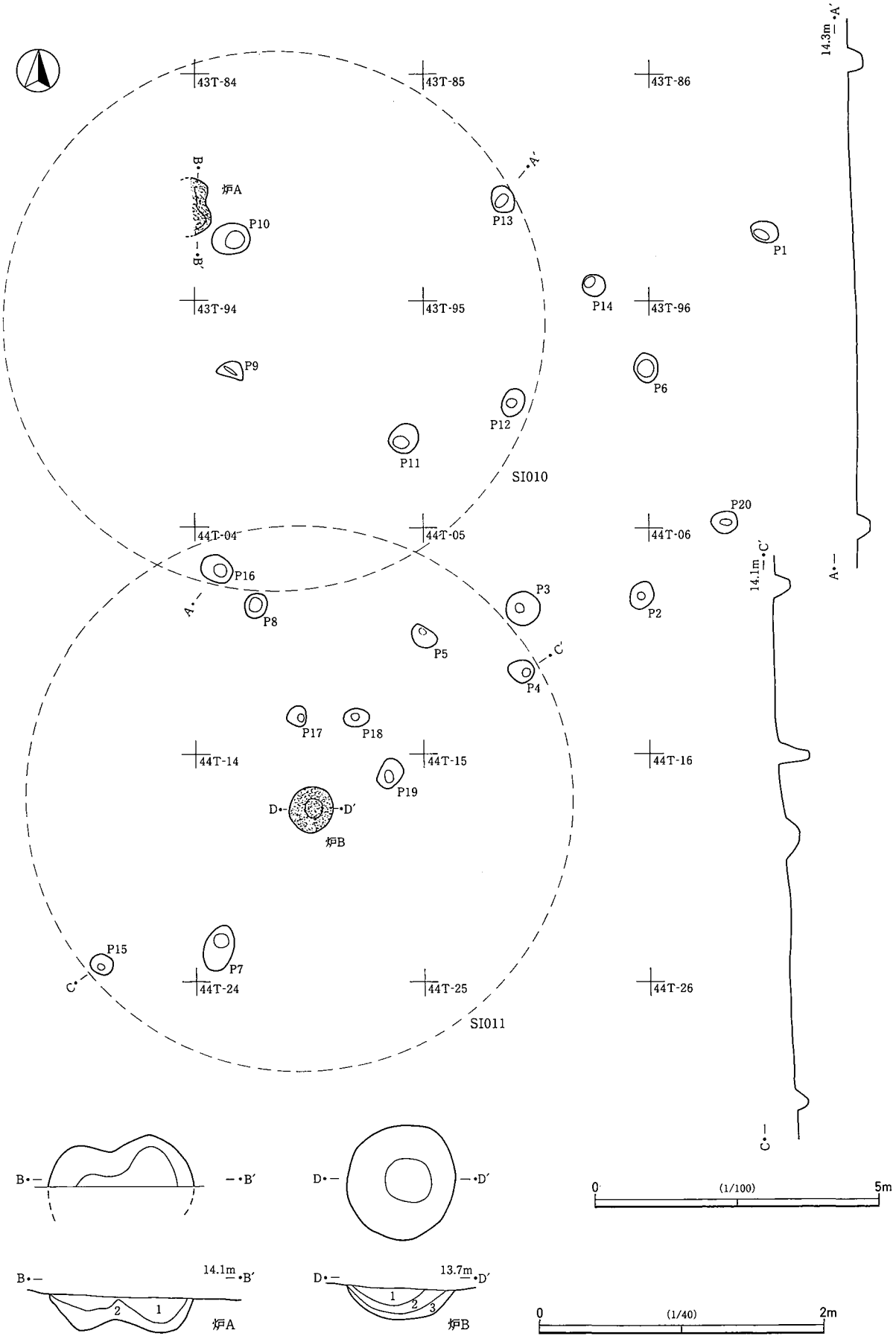
遺跡の南西側、42Ｓ-91グリッド～43Ｓ-02グリッドに跨って位置する。壁の掘り込みは確認されず、炉跡と柱穴群を検出した。住居の平面形は不明だが、柱穴が炉跡を中に半円形に配列するため、径５ｍ前後の円形の竪穴を想定した。炉は楕円形の地床炉で、長径42cm、短径38cm、検出面からの深さは10cm前後である。底面を中心に良く焼けた痕跡を留めていた。柱穴は半円形に巡るＰ１～Ｐ６の６基とその北側に２基検出されているが、配置からみてこの６基が住居に伴うものと判断される。径18cm（Ｐ２）～30cm（Ｐ３）、深さ15cm（Ｐ２）～37cm（Ｐ５）である。柱穴内、炉跡から遺物は出土していない。なお、北側のＰ８付近に礫片８点と黒浜式の土器片２点が散布していたが、本跡の時期を決定するには至らなかった。



第117図　SI009

SI010・SI011（第118・119図、図版39）

遺跡の南端、43Ｔ-84グリッド～44Ｔ-15グリッドと東側の43Ｔ-86グリッドにかかる範囲には、炉跡２基と総数20基から成る柱穴群が検出されている。柱穴の配置状況は不規則であるが、炉跡と柱穴それぞれの位置関係から重複する二つの竪穴住居跡SI010とSI011を想定した。

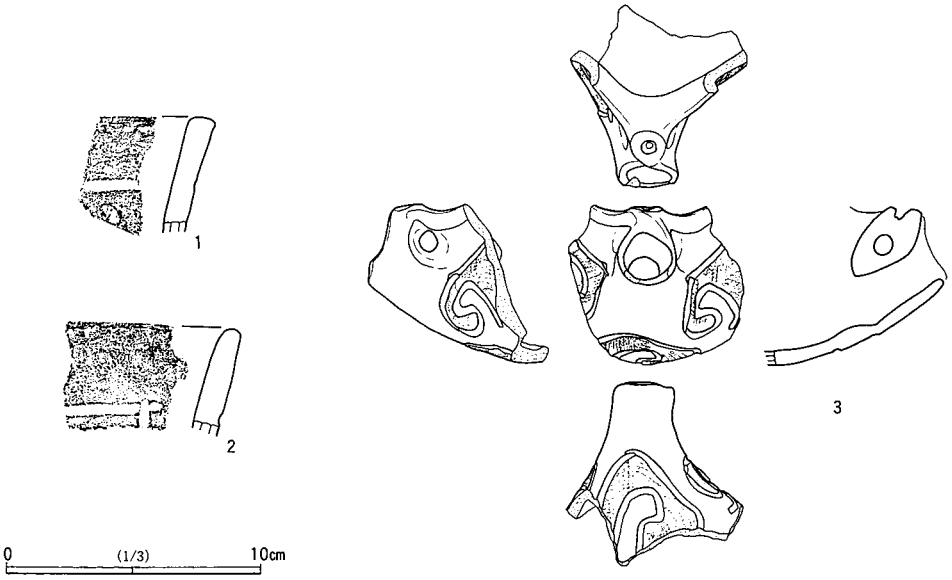


第118図　SI010・011

SI010は炉跡Ａとその周囲の柱穴群で構成される住居跡である。炉跡の位置が柱穴群の分布範囲から見ると北西端に偏在しているが、西側及び北側が部分的に削平を受けていたことを考慮すると、本来はこの周辺にも柱穴が存在した可能性が高い。炉跡Ａは西側を削平され、全体の形状・規模が不明である。残存部での長軸は1.04ｍ、深さ25cmで、底面に凹凸がある。本住居跡に伴うと思われる柱穴は６基で、径45cm（Ｐ９）～68cm（Ｐ10）、深さ20cm（Ｐ16）～26cm（Ｐ13）である。遺物はＰ12から土器片(1)が出土している。

SI011は炉跡Ｂとその周囲の柱穴群で構成される住居跡である。炉跡Ｂはほぼ円形の地床炉で、径82cm、深さ23cmである。底面は軟質で、あまり強い火熱を受けていない。本住居跡に伴うと思われる柱穴は８基で、径36cm（Ｐ17）～84cm（Ｐ７）、深さ10cm（Ｐ15）～26cm（Ｐ４）である。遺物はＰ７・Ｐ19から土器片（２・３）が出土している。SI010・SI011の時期は、後期前半の称名寺式期と考えたい。

遺物　１は深鉢の口縁部である。平縁で、横走する沈線で上部無文帯を画し、その下端に刺突文が施されている。区画内に列点文を充填する構成となろうか。称名寺式である。２も平縁の口縁部だが、口唇端がやや丸味を帯びる。口縁と平行する沈線とこれに直交する沈線が施される。３は注口土器の口縁～注口部である。注口部上部にやや深い円形刺突文、胴部にはＪ字状の意匠文が描かれ、意匠文内に縄文が充填されている。



第119図　SI010・011出土土器

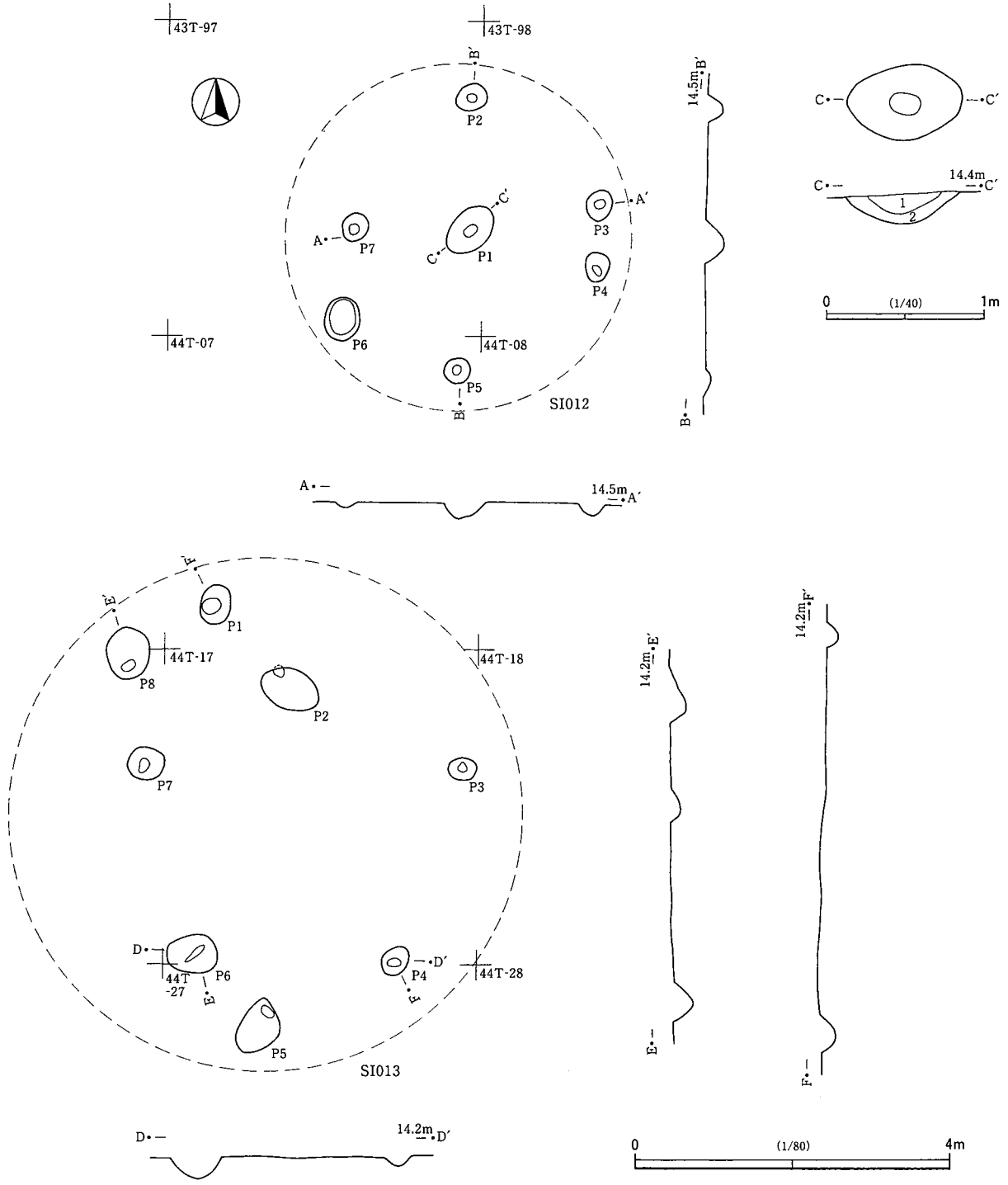
SI012（第120図、図版35）

遺跡の南端、43Ｔ-97グリッド～44Ｔ-27グリッドにかかる範囲では、総数15基から成る柱穴群が検出された。この柱穴群の分布は、北側の43Ｔ-97、98グリッドを中心に分布する一群と、南側の44Ｔ-17グリッドを中心に分布する一群に分けられたため、、北側の一群をSI012、南側の一群をSI013とした。

SI012は、南側中央のＰ１を中心にして直径約4.5ｍの想定円内に収まる柱穴７基で構成される。Ｐ１は平面形が楕円形で、長径74cm、深さ23cmである。軟質で粘性のある黒褐色土が堆積していた。Ｐ２～Ｐ７は円形を基調とした平面形で、径36cm（Ｐ５）～57cm（Ｐ６）、深さ10cm（Ｐ５）～20cm（Ｐ２）である。柱穴内からは遺物が出土していないため、時期は判断できない。

SI013(第120図、図版36)

前述したように44T-17グリッドを中心に分布する柱穴群で、直径約6.5mの想定円内に収まる柱穴8基で構成される。柱穴の平面形や規模が不規則で炉跡も検出されていないが、P5やP7の周辺で土器片が出土しているため、住居跡と判断した。楕円形の柱穴P2、P5、P6，P8は長径62cm～80cm、深さ22cm～62cm。円形の柱穴P1，P3，P4は径38cm～52cm、深さ14cm～22cmである。P7の覆土中から土器片1点が出土したが、摩滅が著しいため遺構の時期は判断できない。周辺では後期前半の称名寺式、堀之内式の土器片が出土している(第144図78、第146図108・109)。



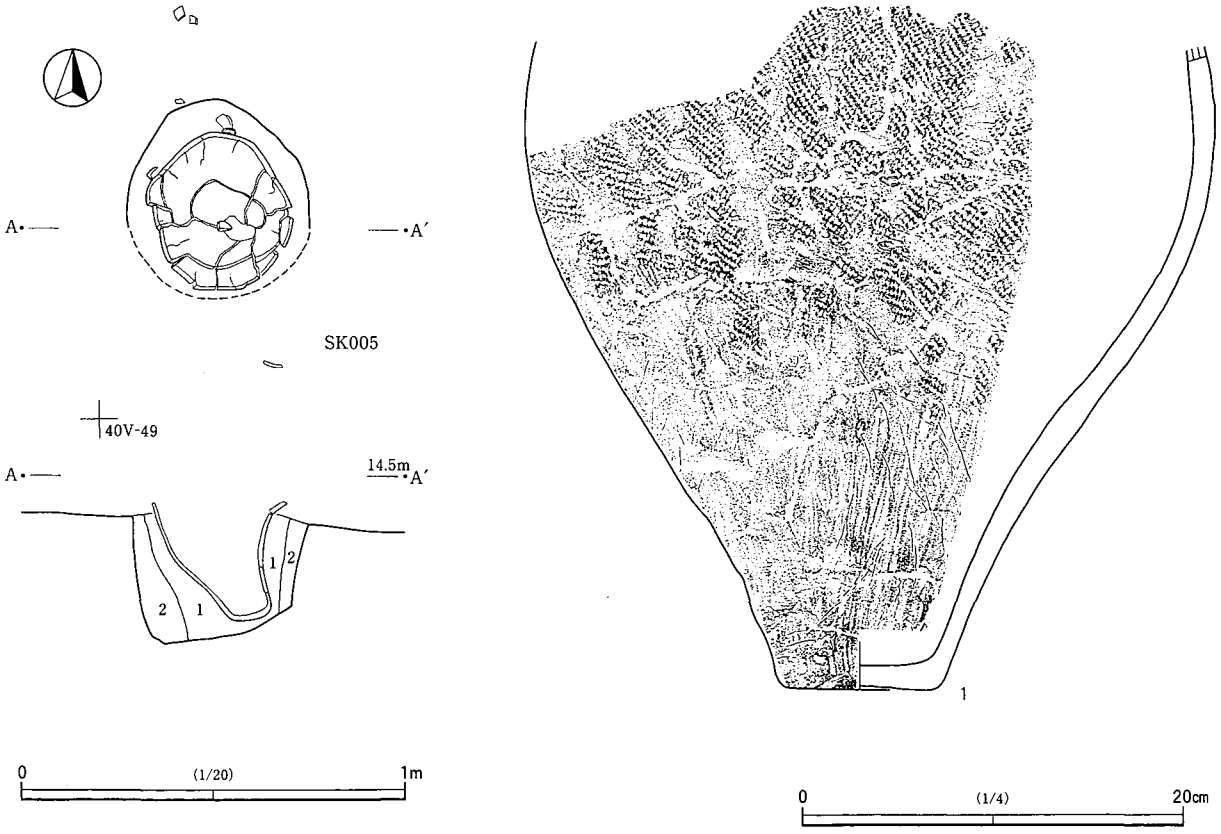
第120図　SI012・013

第３節　埋甕

SK005（第121図、図版36・40）

遺跡の北東側、40Ｖ-39グリッドに位置する。埋甕は径48cm、深さ33cmの土坑に正位の状態で埋設されていた。ただし、調査時に半截してしまったため、全体の形状、規模等の詳細は確認できなかった。周辺に炉跡や柱穴等住居跡と思われる施設が存在しないことから、屋外埋甕と考えられる。

土器（第121図-１）は深鉢で、胴部中位から底部が遺存している。胴部文様は単節ＬＲの縄文で、下半の無文部は丁寧にナデ調整を施している。上半部が欠落しているが、残存する器形及び施文の状況から後期前半に相当すると考えられる。



第121図　SK005

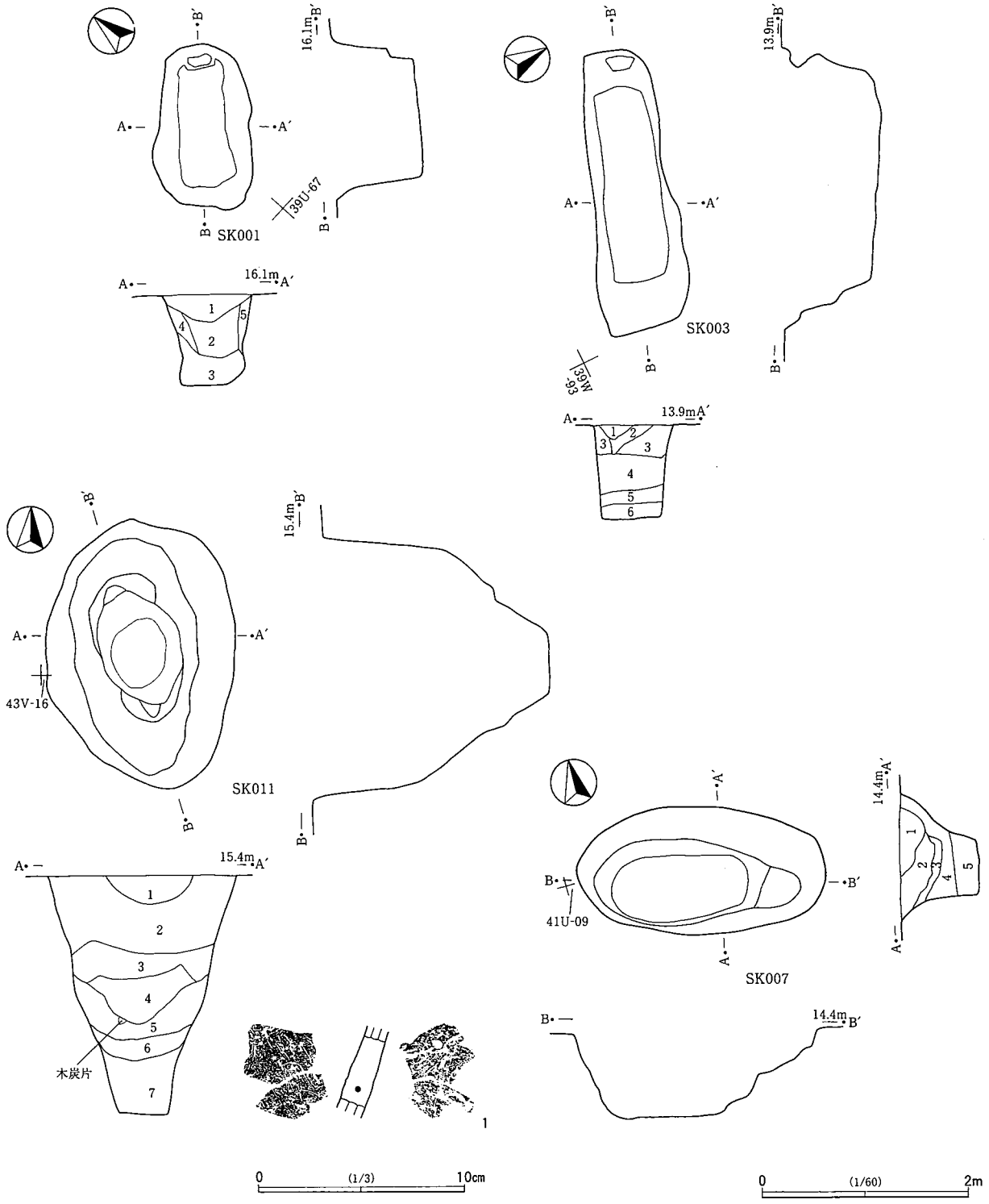
第４節　陥穴

SK001（第122図、図版37）

調査区の北端、39Ｕ-56・57グリッドに跨って位置する。平面形は長楕円形で、開口部長さ1.59ｍ、幅98cm、長軸方位はＮ-46°-Ｅを指す。底面はほぼ平坦で、長さ1.31ｍ、幅48cm～53cm、確認面からの深さは85cmである。北東側小口壁面の底面から高さ23cmの箇所には、奥行き20cm程の段が設けられている。覆土は１層～５層に分けられる。暗褐色土が主体を成す自然堆積で、下層にはロームブロックが多く含まれている。遺物は出土していない。

SK003（第122図、図版37）

遺跡の北東端、39W-82グリッドに位置する。平面形は長方形で、開口部長さ2.72m、幅69cm～90cm、長軸方位はN-71°-Wを指す。底面は若干起伏があり、長さ1.91m、幅46cm～58cm、確認面からの深さは80cm～91cmである。壁は長辺側がほぼ垂直に立ち上がるのに対して、短辺側は壁面の崩落により凹凸が目立っている。覆土は自然堆積で1層～6層に分けられる。1層～4層に暗褐色土と黄褐色土、5層～6



第122図　SK001・003・007・011

層に灰白色粘質土が堆積する。遺物は出土していない。

SK007(第122図、図版37)

遺跡の中央からやや北側、40U-99グリッドと41U-09グリッドに跨って位置する。平面形は楕円形で、開口部は長さ2.41m、幅1.26m、長軸方位はN-74°-Wを指す。底面はほぼ平坦で、長さ1.34m、幅66cm、確認面からの深さは75cm～89cmである。壁は上面に向かって大きく開いており、東側では凹凸が著しい。覆土下層にローム主体の暗褐色土が厚く堆積することから、壁面が崩落したものと考えられる。遺物は胎土に繊維を含む縄文時代前期の土器片が1点出土している。遺構の時期は、出土土器から縄文時代前期前半と考えられる。

SK011(第122図、図版37・39)

遺跡の南側、43V-56、66グリッドに跨って位置する。平面形は概ね楕円形で、長さ2.60m、幅1.86m、長軸方位はN-21.5°-Wを指す。底面の平面形はほぼ円形で、中央部が周囲から一段深く窄まっている。壁は開口部に向かって大きく開き、長軸方向の両端の壁面は階段状に小さな窪みが掘り込まれている。確認面からの深さは2.3mである。覆土は1・4・7層が黒色土主体、2・3・6層がローム質の暗黄褐色土主体の層であり自然堆積の様相を呈している。遺物は縄文時代早期撚糸文系の土器片が2点、条痕文系の土器片が2点出土しているが1点のみ掲載した。遺構の時期は、出土土器から縄文時代早期末と考えられる。

第5節　土坑

SK002(第123図、図版37・39)

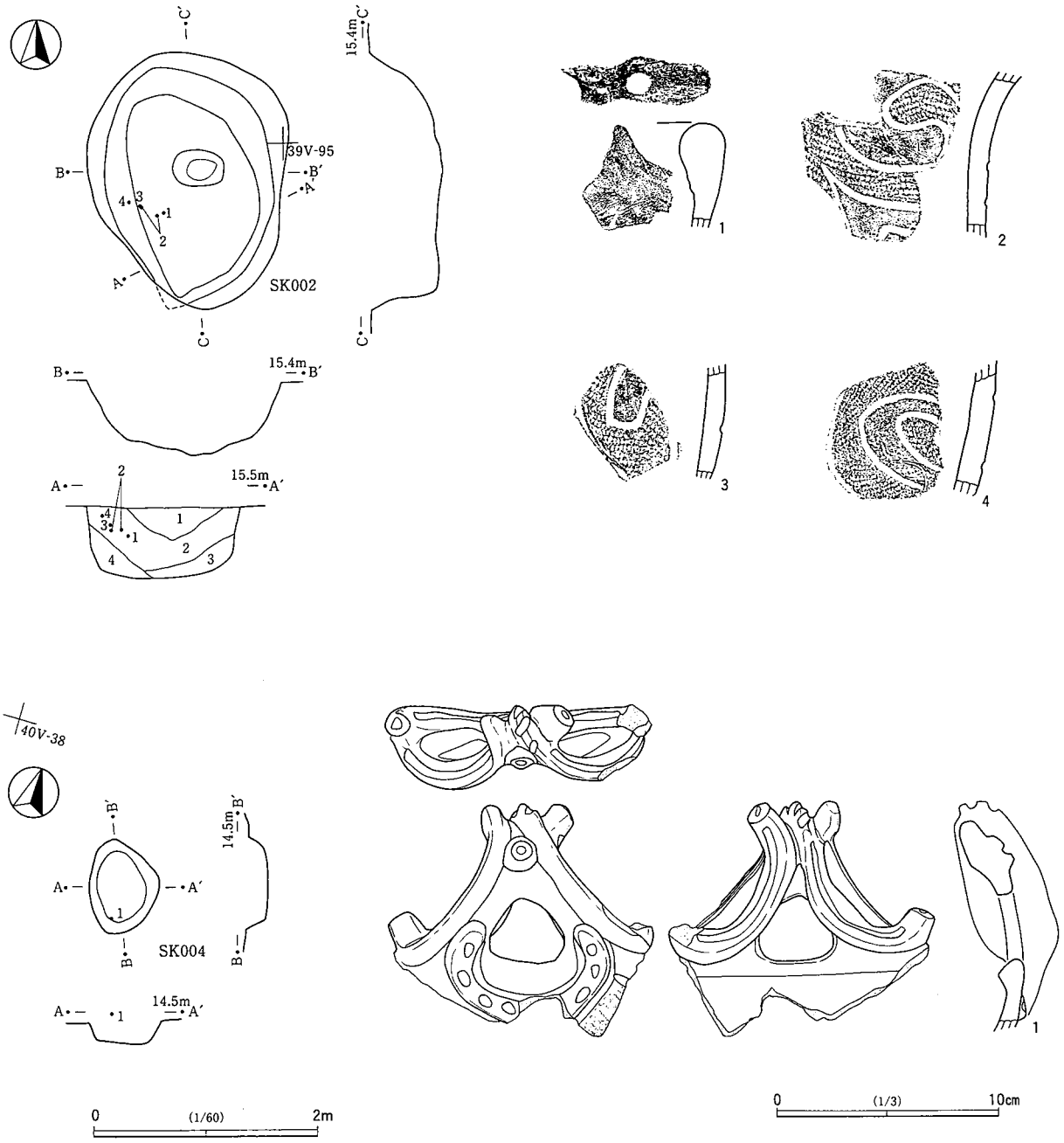
遺跡の北側でSI001の西約10m、39V-84・94グリッドに跨って位置する。平面形はほぼ楕円形で、長径2.35m、短径1.83m、長軸方位はN-7°-Wを指す。底面は弱い起伏があり、中央部が楕円状に窪んでいる。壁面は南側の傾斜が強く、東から北側でやや緩やかに立ち上がっている。確認面からの深さは67cmである。覆土は自然堆積である。1層～4層に分けられ、1層に暗褐色土、2層に黄褐色土、3・4層に褐色土が堆積する。遺物は2層中から土器片12点が出土している。土坑の用途は不明であるが、時期は出土土器から後期前半と考えられる。

遺物　1は深鉢の口縁部である。波状口縁の波頂部で、右側面に円形刺突が穿たれている。2～4は深鉢の胴部である。J字状文と思われる意匠文の枠内に縄文を充填し、枠外は丁寧に磨り消している。文様から称名寺式に相当する。

SK004(第123図、図版37・39)

遺跡の北東側、40V-38グリッドに位置する。平面形は概ね楕円形で、長径85cm、短径63cmである。底面は西側から東側にやや傾斜しており、確認面からの深さは20cmである。土坑の用途は不明である。遺物は、遺構上面から土器片が若干出土している。

遺物　1は口縁部に付随する橋状突手である。前面は刺突のある上向きのC字状の貼付文と縄文、把手側面は沈線と刺突が加えられる。堀之内式に相当する。

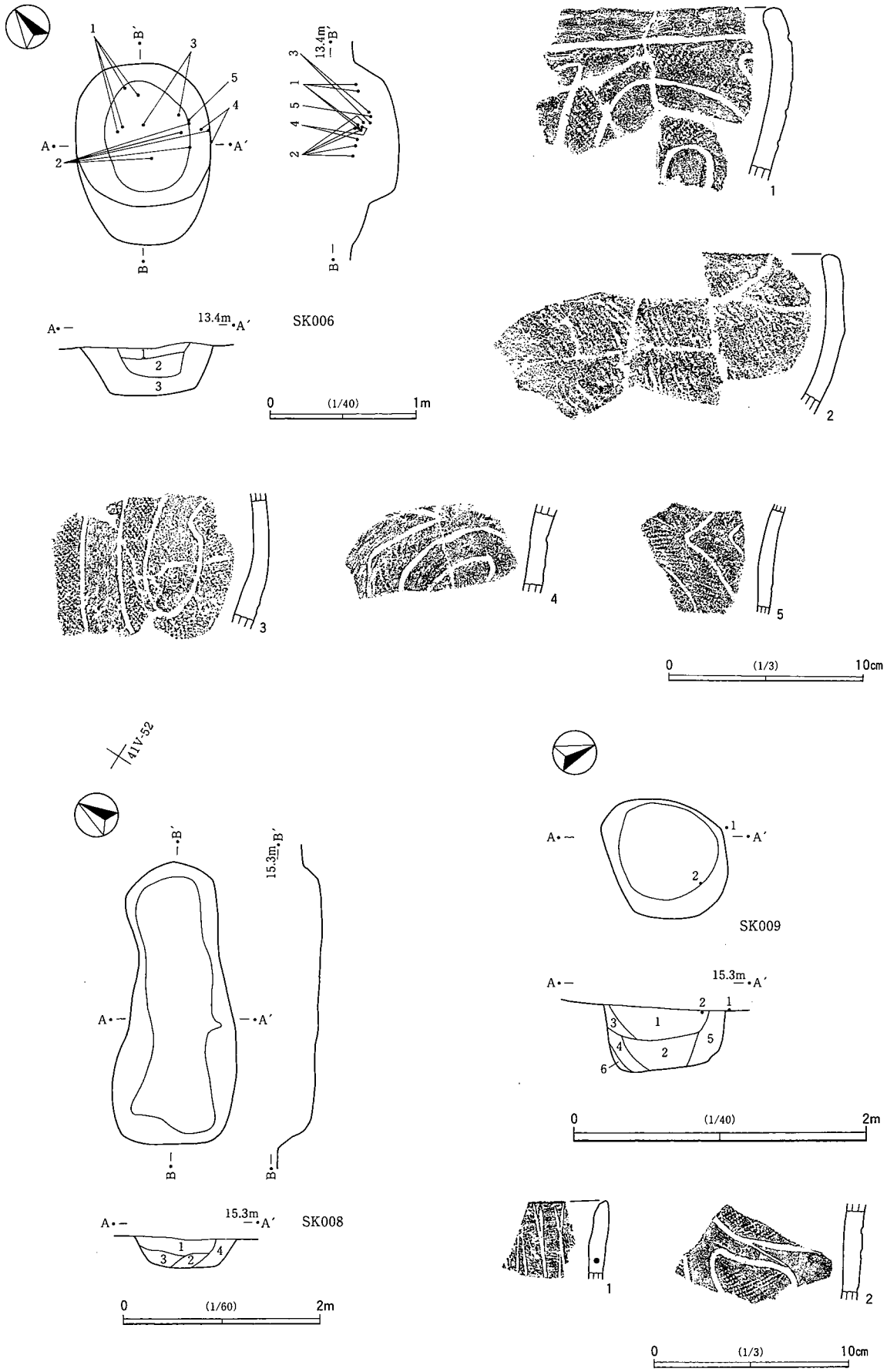


第123図　SK002・004

SK006（第124図、図版37・39）

遺跡の中央から東、台地緩斜面の40Ⅴ-95グリッドに位置する。全体の平面形はほぼ楕円形で、長さ1.25m、幅83cm、長軸方位はN-40°-Eを指す。土坑の主要部は円形の掘り方となり、南西側は浅いテラス状になって外側に延びている。主要部の底面はほぼ平坦で、壁が斜めに立ち上がっている。覆土は1層～3層に分けられ、ちょうど3層中にすっぽり1層・2層が包まれた様な堆積状況である。全体に茶褐色土が主体で、3層にロームブロックを含む締まりの強い層、1・2層にやや締まりのある黒色土粒を含む層が観察されている。また1・2層を中心に土器片が50点ほど出土している。上面からの観察記録がないため平面的に1層がどのような広がり方だったのか不明だが、覆土の堆積状況や土質の違い、遺物の分布状況から推定すると、土坑中央に何らかの埋設物があった可能性が考えられる。土坑の時期は、出土土器から後期前半の称名寺式期に相当する。

遺物　1・3～5は沈線による意匠文内に縄文を充填する。1の口唇部直下は無文帯が横沈線で区切られ

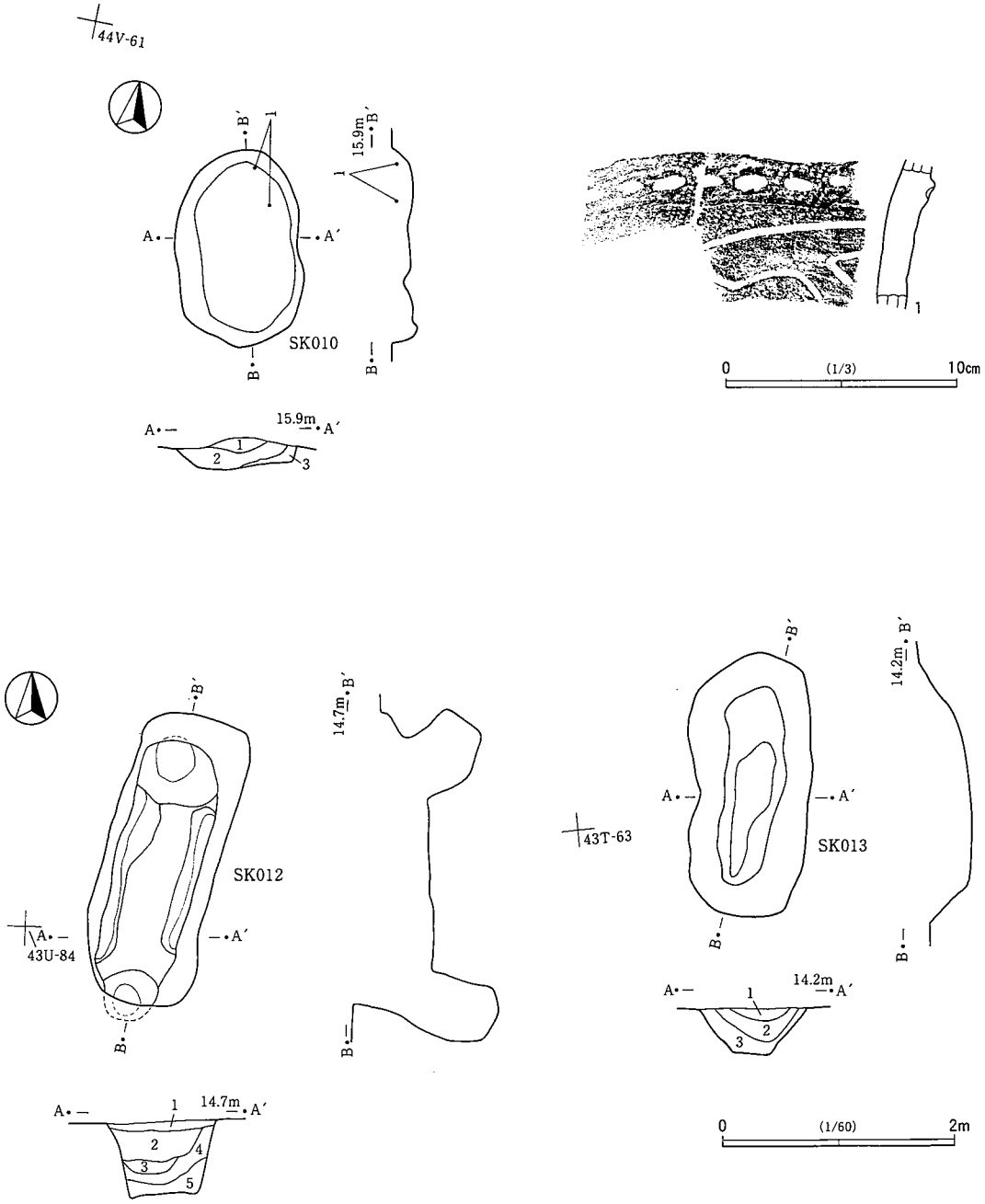


第124図　SK006・008・009

る。２は直立ぎみの口縁部で、下部が微隆起状にごく僅かに盛り上がる。文様は縄文を全体に施し、口唇部で磨り消している。

SK008（第124図、図版33）

遺跡の中央から東側、41Ｖ-51グリッドに位置し、SI005の北東側に隣接する。平面形は不定形で長さ2.90ｍ、開口部の幅は81cm～1.24ｍと一定せず、北東側から南西側に向かって広くなっている。底面は若干起伏があり、中央部から壁際に向かって僅かに高くなっている。確認面からの深さは16cm～35cmである。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積で、１層～４層に分けられる。遺物は１層中から黒浜式土器の破片が３点出土しているが、何れも小片のため図示しなかった。土坑の時期は断定できない。



第125図　SK010・012・013

SK009（第124図、図版37・39）

遺跡の中央から西側、41Ｓ-65グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、長径96cm、短径82cm、確認面からの深さは52cmを測る。底面は西側から東側に向かって僅かに傾斜し、壁がほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は全体に暗褐色土が主体の自然堆積で１層～６層に分層される。中央に堆積する１・２層には径２cm～３cm大のロームブロックが多く含まれる。遺物は主に１層中から土器片が出土している。その多くは細片だが図示できた２点の内、２を含めた10点は後期初頭の称名寺式に相当するため、土坑もこの時期に相当すると考えられる。なお、１は遺構外のものである。

遺物　１は深鉢の口縁部である。細い棒状施文具で斜格子状文が施される。胎土に繊維を含み、前期黒浜式に相当する。２は胴部の破片で、意匠文内に縄文が充填される。後期前半の称名寺式に相当する。

SK010（第125図、図版38・39）

遺跡のほぼ中央、41Ｖ-61グリッドに位置する。SI006の範囲に収まるが住居に付属する施設かどうか判断できないため、調査時のまま土坑として扱った。平面形は楕円形で、長径1.69ｍ、短径1.07ｍ、長軸方位はＮ-14°-Ｗを指す。底面は起伏があり、特に南側は凹凸が著しい。確認面からの深さは12cm～20cmである。覆土は暗褐色土が主体の自然堆積で、１層～３層に分けられる。遺物は土器片が13点、礫片が１点出土しているがすべて底面から浮いた状態であった。小破片が多く、図示できたものは１点だけである。

遺物　１は深鉢の胴部破片である。縄文を地文として、上部に幅広の列点文を加えた低い隆帯を配し、下部に沈線で意匠文を施す。器面が摩滅しているため、文様は不鮮明である。堀之内式に相当すると考えられる。

SK012（第125図、図版38）

遺跡の南側斜面、43Ｕ-83・93グリッドに跨って位置する。平面形は隅の丸い長方形で、長さ2.54ｍ、幅96cm、長軸方位はＮ-13.5°-Ｅを指す。確認面からの深さは42cm～66cmである。底面は中央部がほぼ平坦だが、長辺の壁際に沿って浅い溝と長軸線上の両端には袋状のピットが壁面に対して斜めに掘り込まれている。ピットの深さは北側が44cm、南側が57cmであるが、用途は定かではない。 覆土は自然堆積で１層～５層に分けられる。上位の層に大きめのローム粒を多く含む暗褐色土、４層にローム粒やロームブロックを含む暗黄褐色土、５層にローム粒を含む黒色土が堆積している。覆土内から遺物は出土していないが、周辺の出土土器の様相から縄文時代の遺構と考えられる。

SK013（第125図、図版38）

遺跡の南側、43Ｔ-53・63グリッドに跨って位置し、SI010を構成する柱穴群から北に約10ｍの距離にある。平面形は概ね長楕円形だが、西壁側が歪んでいる。開口部は長さ2.26ｍ、幅96cm～1.05ｍ、長軸方位はＮ-7°-Ｅを指す。底面はほぼ平坦だが、幅が10cm～30cmと一定せず、南側から北側に向かって広くなっている。確認面からの深さは46cmである。壁面は開口部に向かって大きく開いており、北側では特になだらかな傾斜である。覆土は自然堆積で、１層～３層に分けられる。１・２層は黒褐色土、３層はローム主体の黄褐色土である。覆土内から遺物は出土していないが、周辺の出土土器の様相から縄文時代の遺構と考えられる。

第6節　縄文時代石器

石器集中分布域の概要(第126図)

縄文時代の石器集中分布域は、石器集中A～石器集中Dの4か所で確認された。4か所の集中域から出土した石器は総計1,621点である。各集中域の石器石材組成は、第24～27表のとおりである。礫・礫片が9割以上の高い割合を示していることから、礫群を形成していたと判断される。これらの礫群に伴ってわずかながら出土した縄文土器は、早期・前期・後期が混在した状況であった。

石器集中A(第127・128図、第24表、図版27)

市野谷二反田遺跡の東側、やや南東寄りの標高15.9m～16.3mに位置し、高密度の石器集中分布域を形成している。南北に21.9m、東西に6.7mの長方形状に891点が集中するが、これはグリッド線により調査域が限定されているためである。891点の内訳は礫・礫片822点で集中地点A全体の92.3%を占め、以下土器62点、石鏃・剥片各々3点、石皿1点が出土した。

礫片は891点の91.6%にあたる816点に被熱によると思われる変色が目立ち、石材の特定に苦慮したものも多かった。また接合点数は一割に満たず、86点36個体に留まる。最長で頁岩25が12.2m、続いてチャート3が7.9m離れて接合したが、比較的近い距離での接合が多い。

礫68点の平均重量は77.6g、礫片754点の平均重量は20.5gであり、一つの礫が、被熱により3～4個に割れたものが礫片である、と言えるだろう。使用石材は流紋岩が圧倒的に多く、412点、12,074.3gであり、点数比46.2%、重量比57.6%である。以下、砂岩→チャート→頁岩→ホルンフェルス→ガラス質黒色安山岩→珪岩→安山岩・トロトロ石・玉髄(メノウ含む)と続く。

1の出土位置は不明であるが、2・3は42V-74グリッドの礫片集中域から、4は礫片集中域から外れた42V-83グリッドから土器片と伴に出土している。

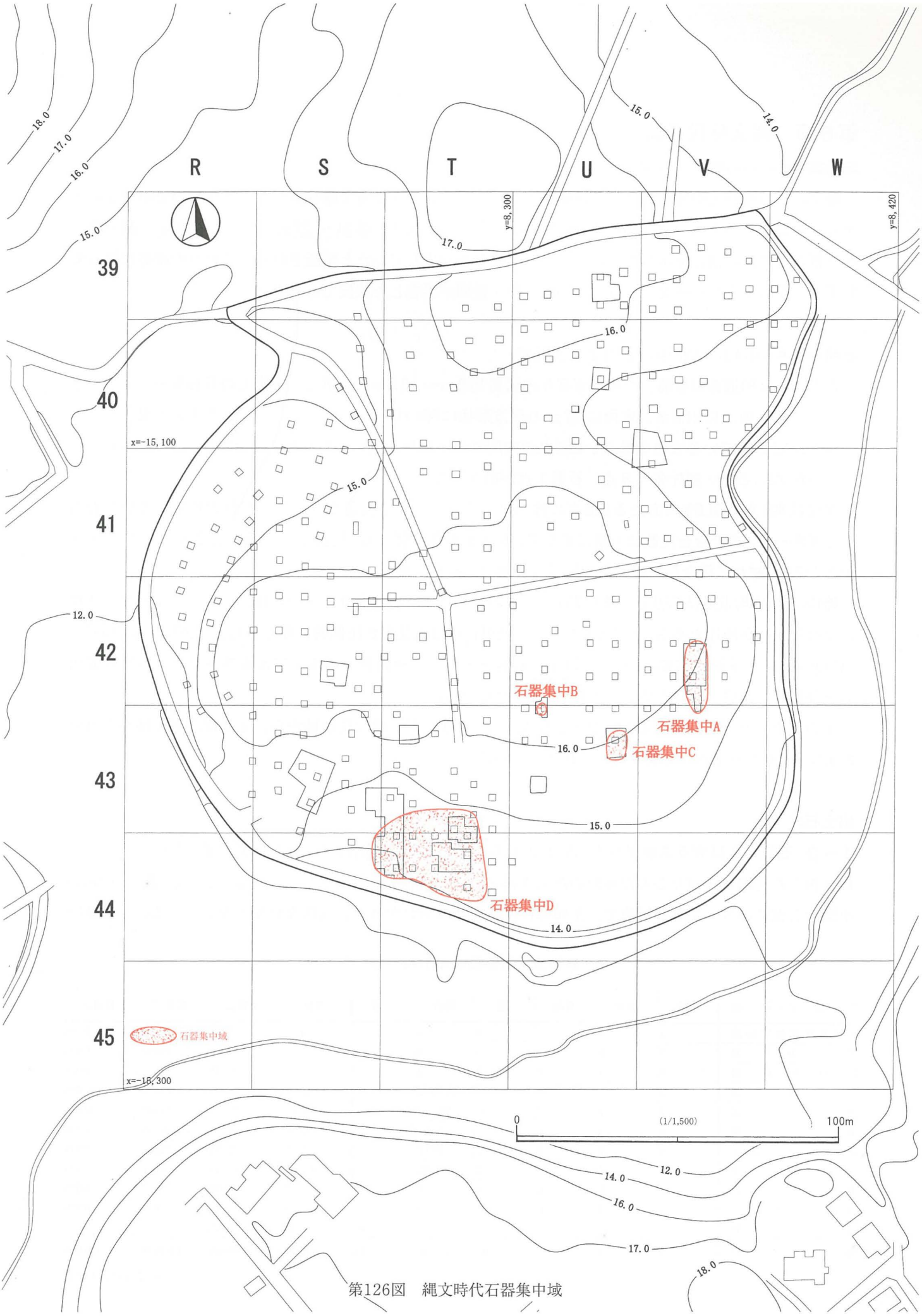
出土石器

1～3. 石鏃　1はガラス質黒色安山岩製の有茎石鏃である。裏面には素材の主要剥離面が残る。正面には欠損した先端から回りこんだ衝撃剥離痕がみられる。2はガラス質黒色安山岩製であり、器長13.3mmの小型の石鏃である。左右非対象で、左側縁には素材時の折れが残り、面的な様相となっている。3は濃灰

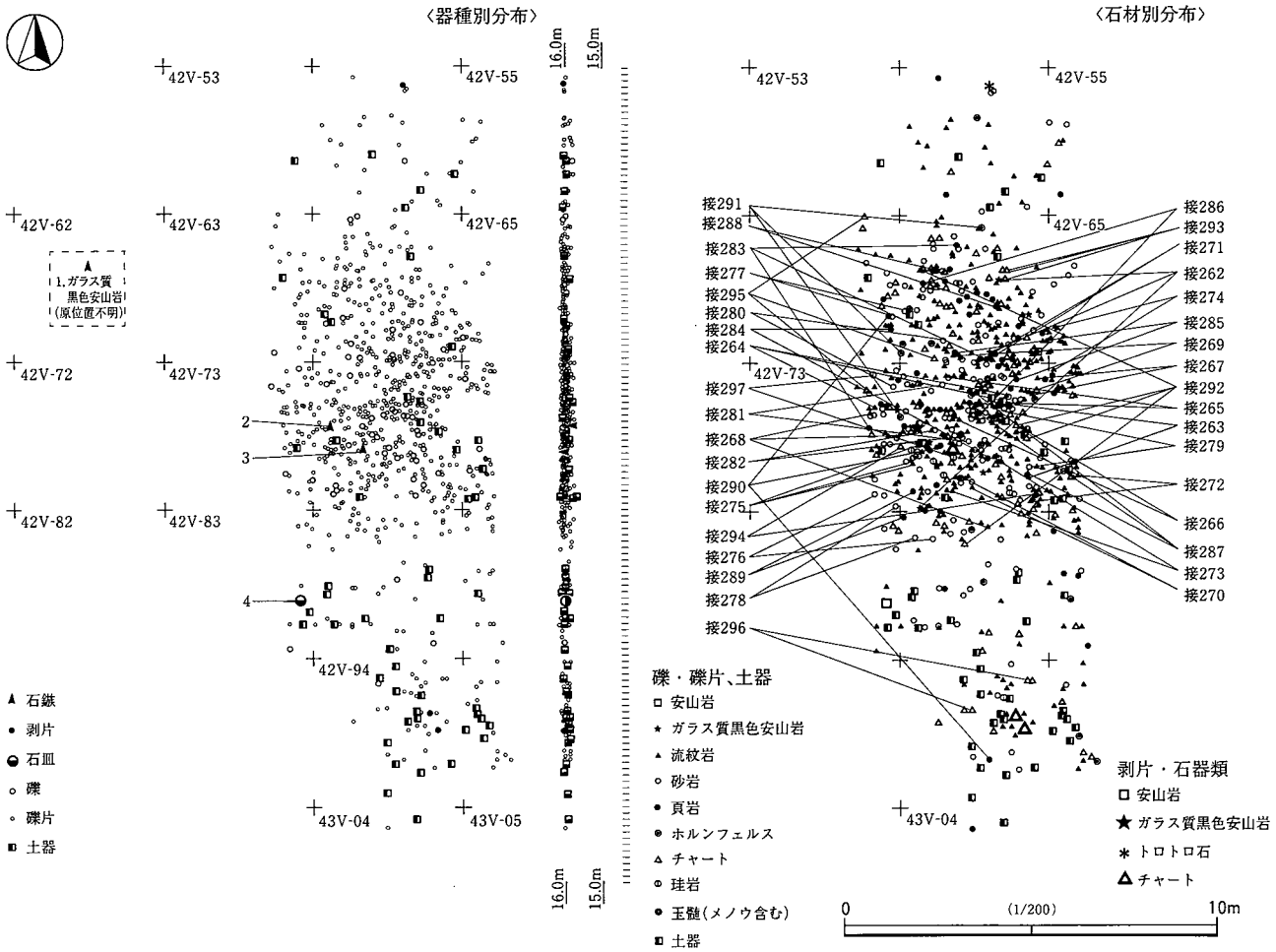
第24表　石器集中A 石材別組成表

石材／器種	石鏃	剥片	石皿	礫	礫片	土器	点数	点数比	重量(g)	重量比
ガラス質黒色安山岩	2	0	0	0	7(9)	–	9(11)	1.23%	191.24	0.91%
安山岩	0	0	1	0	0	–	1	0.11%	196.00	0.94%
トロトロ石	0	1	0	0	0	–	1	0.11%	3.20	0.02%
流紋岩	0	0	0	49	347(363)	–	396(412)	46.24%	12074.27	57.61%
砂岩	0	0	0	11	164(172)	–	175(183)	20.54%	4933.66	23.54%
頁岩	0	0	0	3	70(81)	–	73(84)	9.43%	1621.25	7.74%
ホルンフェルス	0	0	0	3	15(17)	–	18(20)	2.24%	768.18	3.67%
チャート	1	2	0	2	92(102)	–	97(107)	12.01%	1053.23	5.03%
珪岩	0	0	0	0	7(9)	–	7(9)	1.01%	116.27	0.55%
玉髄(メノウ含む)	0	0	0	0	1	–	1	0.11%	2.26	0.01%
土器	–	–	–	–	–	62	62	6.96%	–	–
合計	3	3	1	68	703(754)	62	840(891)	100.00%	20959.56	100.00%

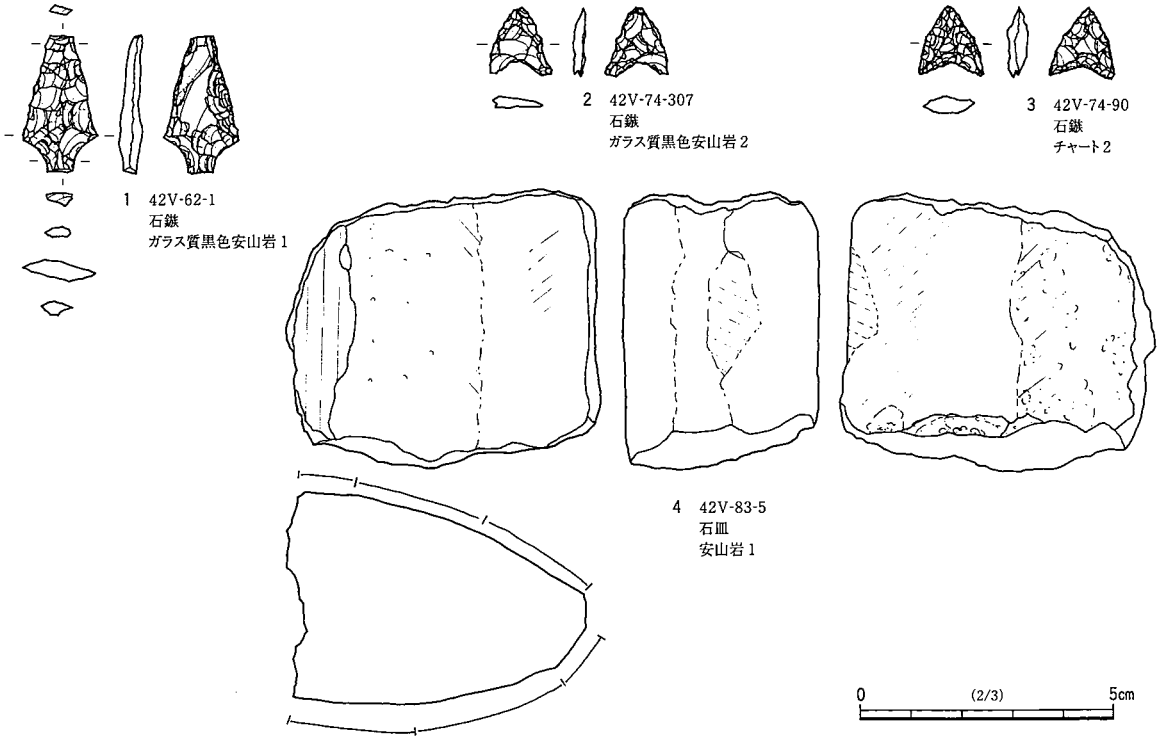
※(　)は出土点数



第126図　縄文時代石器集中域



第127図　石器集中Ａ遺物分布



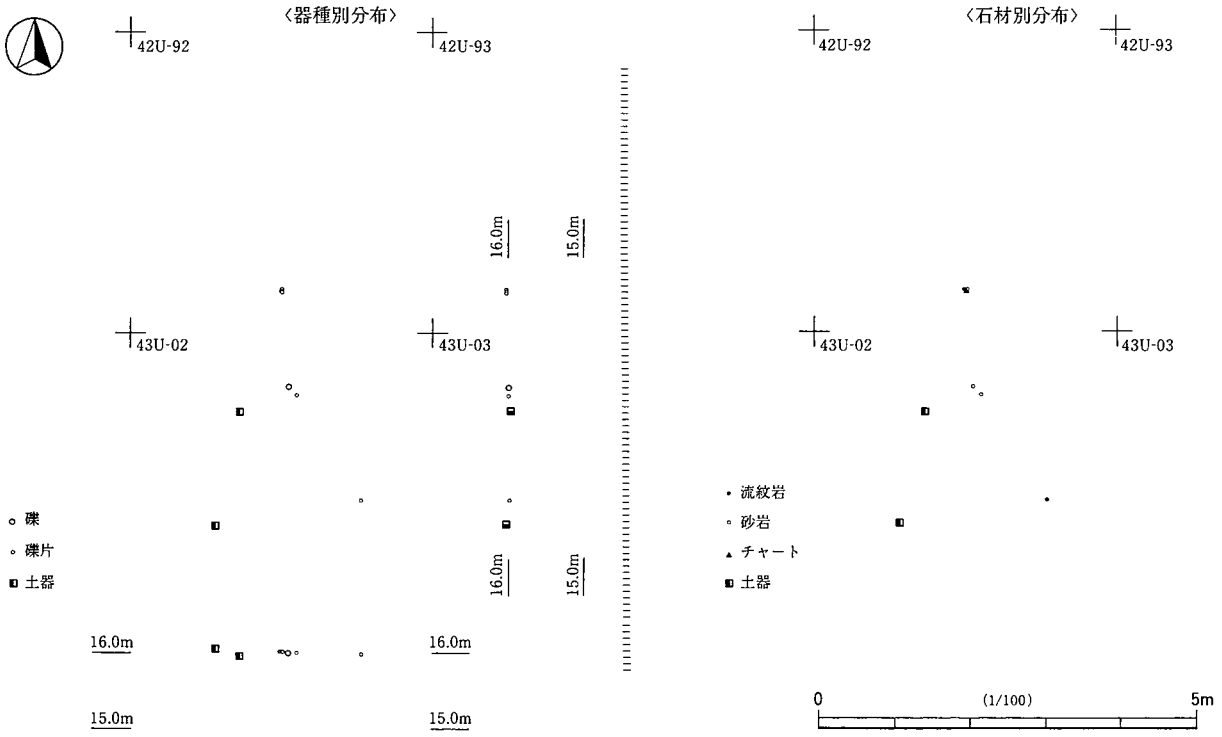
第128図　石器集中Ａ出土石器

色のチャート製である。器長は２と同様に13.95㎜と小型であるが、精緻な整形により、正三角形状を呈する。裏面中央部には素材剥片時の剥離痕が残る。

４．石皿　黒色の鉱物を含む多孔質安山岩である。裏面には凹状痕があり、磨石、あるいは砥石として利用されていた可能性がある。正面左部に石皿の平坦面が残る。

石器集中Ｂ　（第129図、第25表）

遺跡の中央部からやや南寄りに位置し、標高は16.3ｍである。遺物８点の平均レベルは16.0ｍであり、礫１点、礫片５点、土器２点が３㎡内から出土した。石材は流紋岩・砂岩・チャートである。礫・礫片６点のうち、４点に被熱痕が認められた。主要な石器の出土はなく、実測は行っていない。



第129図　石器集中Ｂ遺物分布

第25表　石器集中Ｂ 石材別組成表

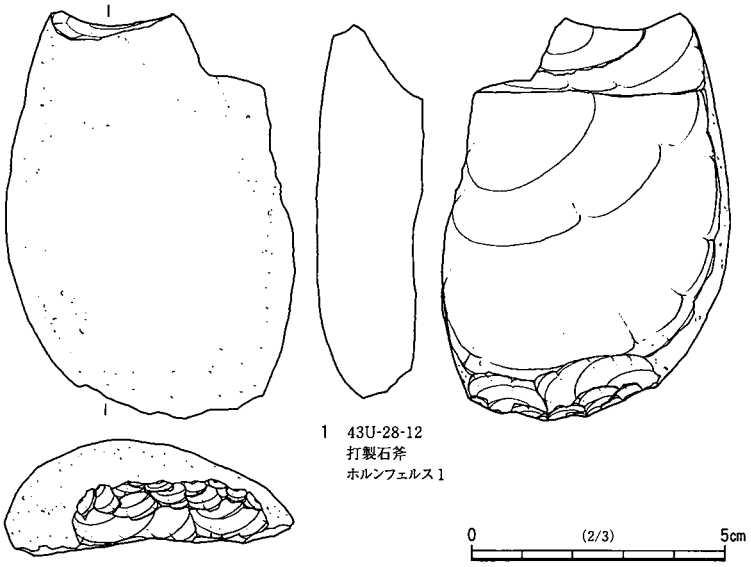
石材／器種	礫	礫片	土器	点数	点数比	重量(g)	重量比
流紋岩	0	2	－	2	25.00%	155.60	31.84%
砂岩	1	2	－	3	37.50%	318.73	65.23%
チャート	0	1	－	1	12.50%	14.29	2.92%
土器	－	－	2	2	25.00%	－	－
合計	1	5	2	8	100.00%	488.62	100.00%

石器集中C　（第130・131図、第26表、図版5・27）

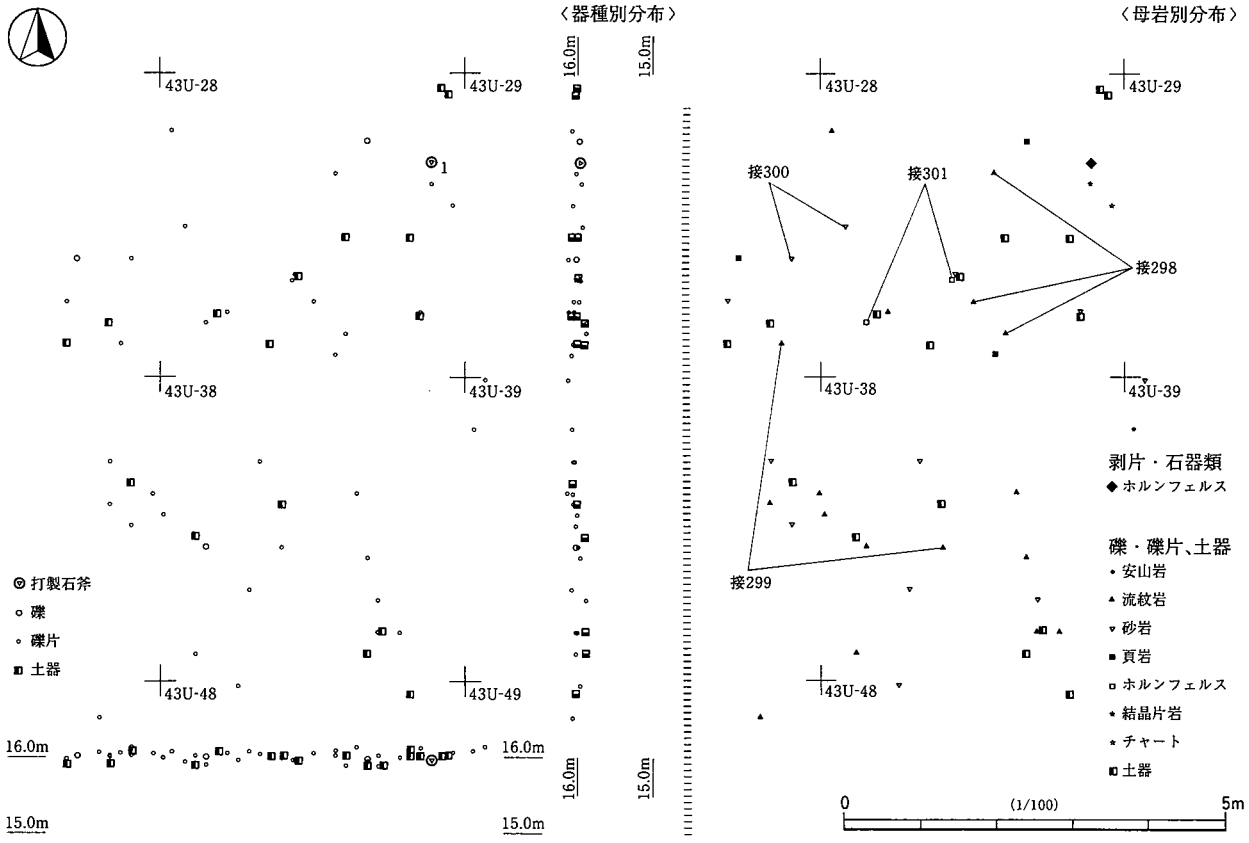
遺跡南東の中心付近に位置し、標高は16.1ｍほどである。遺物55点の平均出土レベルは16.0ｍであり、打製石斧１点、礫３点、礫片34点、土器17点が南北9.3ｍ、東西に5.1ｍの範囲に散漫に分布する。礫・礫片の76.3%は流紋岩・砂岩で占められる。礫・礫片37点のうち28点に被熱による変色痕がみられた。

出土石器

1.打製石斧　暗灰色で、器面全体に針でつついたような穴状痕を持つホルンフェルス製の打製石斧である。縦に折れた素材礫から厚みのある下部の器厚を減じ、丁寧な小剥離を施して刃部を作出している。１を調整した剥片・砕片などは出土していない。



第130図　石器集中Ｃ出土石器



第131図　石器集中Ｃ遺物分布

第26表　石器集中C 石材別組成表

石材／器種	打製石斧	礫	礫片	土器	点数	点数比	重量(g)	重量比
安山岩	0	0	1	−	1	1.82%	106.98	5.77%
流紋岩	0	1	13(16)	−	14(17)	30.91%	815.40	43.95%
砂岩	0	0	11(12)	−	11(12)	21.82%	442.37	23.84%
頁岩	0	2	1	−	3	5.45%	261.46	14.09%
ホルンフェルス	1	0	1(2)	−	2(3)	5.45%	157.89	8.51%
結晶片岩	0	0	1	−	1	1.82%	67.94	3.66%
チャート	0	0	1	−	1	1.82%	3.22	0.17%
土器	−	−	−	17	17	30.91%	−	−
合計	1	3	29(34)	17	50(55)	100.00%	1855.26	100.00%

※（　）は出土点数

石器集中D　（第132～137図、第27表、図版5・28～30）

遺跡南端の南西寄りの43T・44S・44Tグリッドに位置し、南北25.2m、東西34.1mの範囲に748点の遺物が包含されている。標高は13.7m～14.8m、南に向かって落ち込む谷の縁辺であり、耕作土の直下から出土している。石器集中Dを含む土層は旧石器時代のブロック（第4・5、8～11ブロック）に被さるように、あるいは薄く覆うような堆積状態であったが、出土遺物に土器片、石鏃、磨・凹石など、器種の違いが顕著であったことと、旧石器ブロックにおける垂直分布にも明らかな層位差が確認された為、上層と下層に分けて図化した。

遺物748点は遺跡の南縁辺を弧状に分布しており、礫・礫片517点は縁辺に沿って満遍なく出土し、土器片153点は北西部に集中する。礫・礫片及び土器を除く剥片・石器類の内訳は剥片53点、石核5点、使用痕のある剥片・敲石・砥石は各々3点、楔形石器・二次加工のある剥片・砕片・磨石は各々2点、石鏃・掻器・凹石は1点であり、石材はチャート36点、ガラス質黒色安山岩12点、砂岩8点、頁岩・ホルンフェルス5点ずつ、黒曜石4点、流紋岩・玉髄（メノウ含む）3点ずつ、石英斑岩・閃緑岩・緑泥片岩1点ずつである。礫・礫片は流紋岩、砂岩、チャート、頁岩の4石材で89.2%を占める。

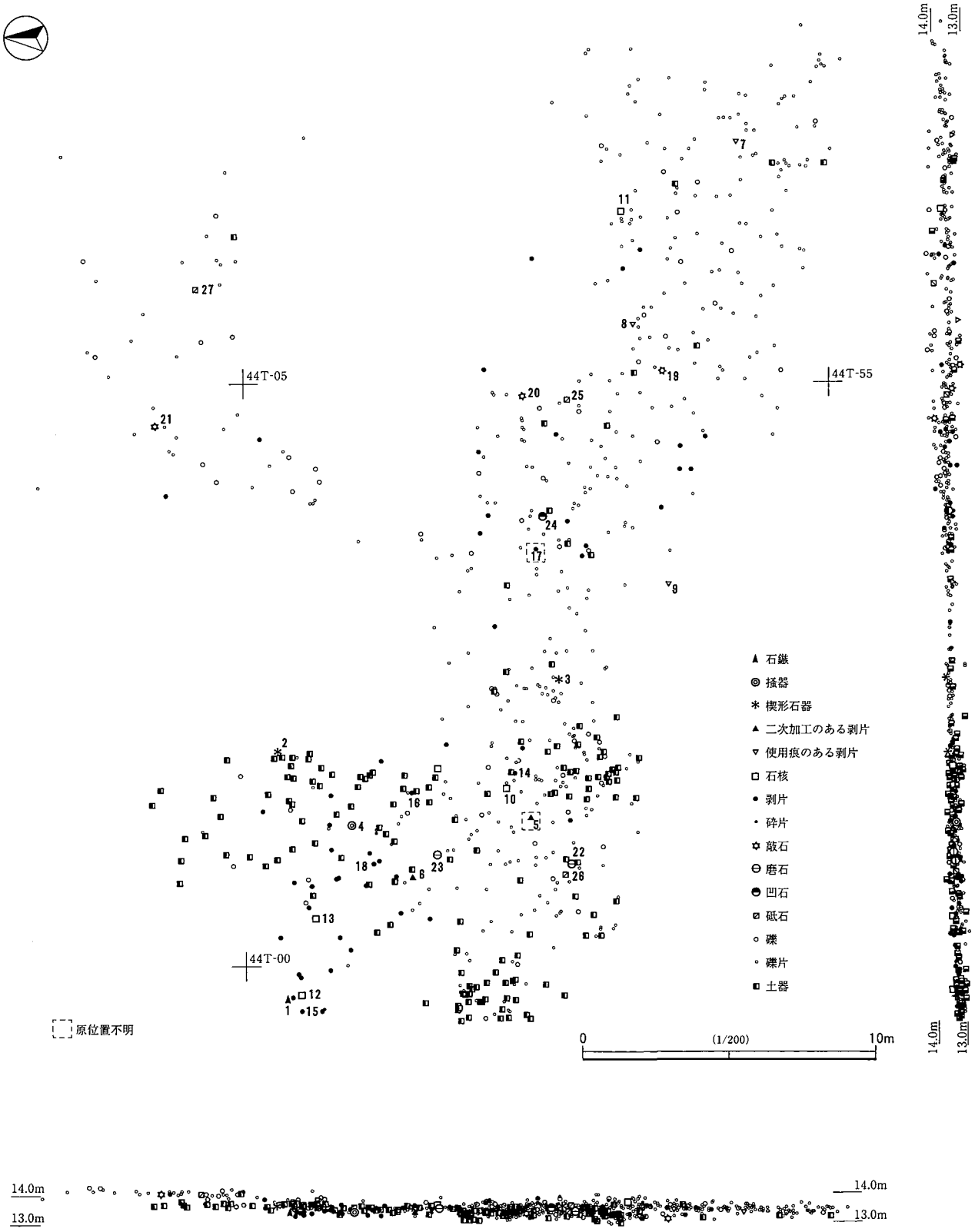
出土石器

1.石鏃　厚みのない板状剥片を素材とする。左上部の連続した小剥離痕は整形後の加工であり、先端作出のために再加工された部位と思われる。黒色で光沢のあるチャート製であり、基部の抉れ部分の剥離が自然面との稜を持たないことから、平坦面を磨って仕上げた可能性がある。

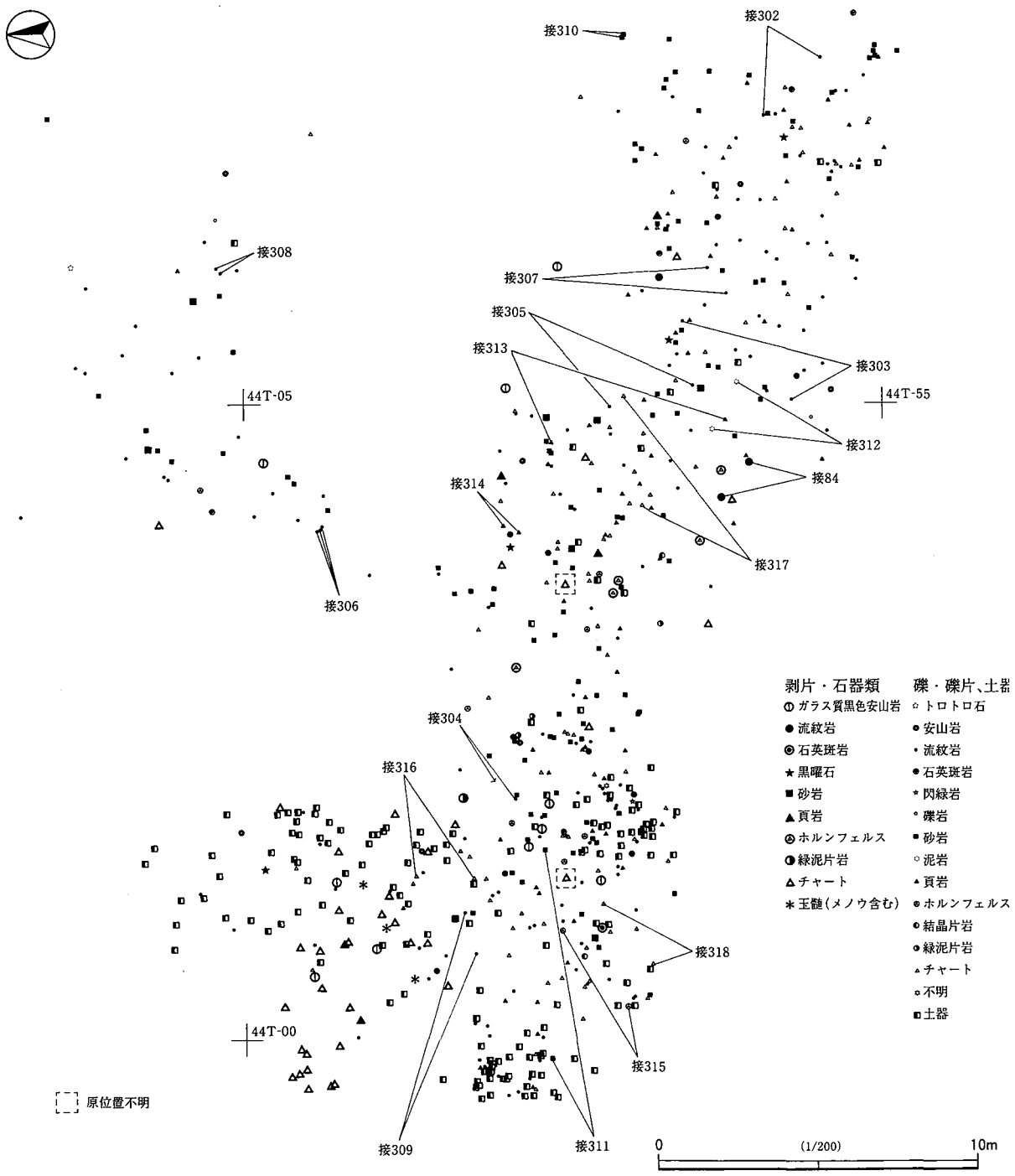
2・3. 楔形石器　2は両極から加撃された厚みのある長方形状を呈する。青灰白色のチャートを素材とする。3は素材剥片の厚みを減じるために下端を固定し、上部から細かく加撃して成形されており、石鏃未製品の可能性がある。黒色チャートが使われており、右側面上部に自然面を残す。

4. 掻器　玉髄（メノウ含む）の剥片を素材に、側縁部から末端を加工した小型の掻器である。特に下端部の剥離は大まかな成形の後、小剥離で丁寧に加工され、鋭角な刃部となっている。

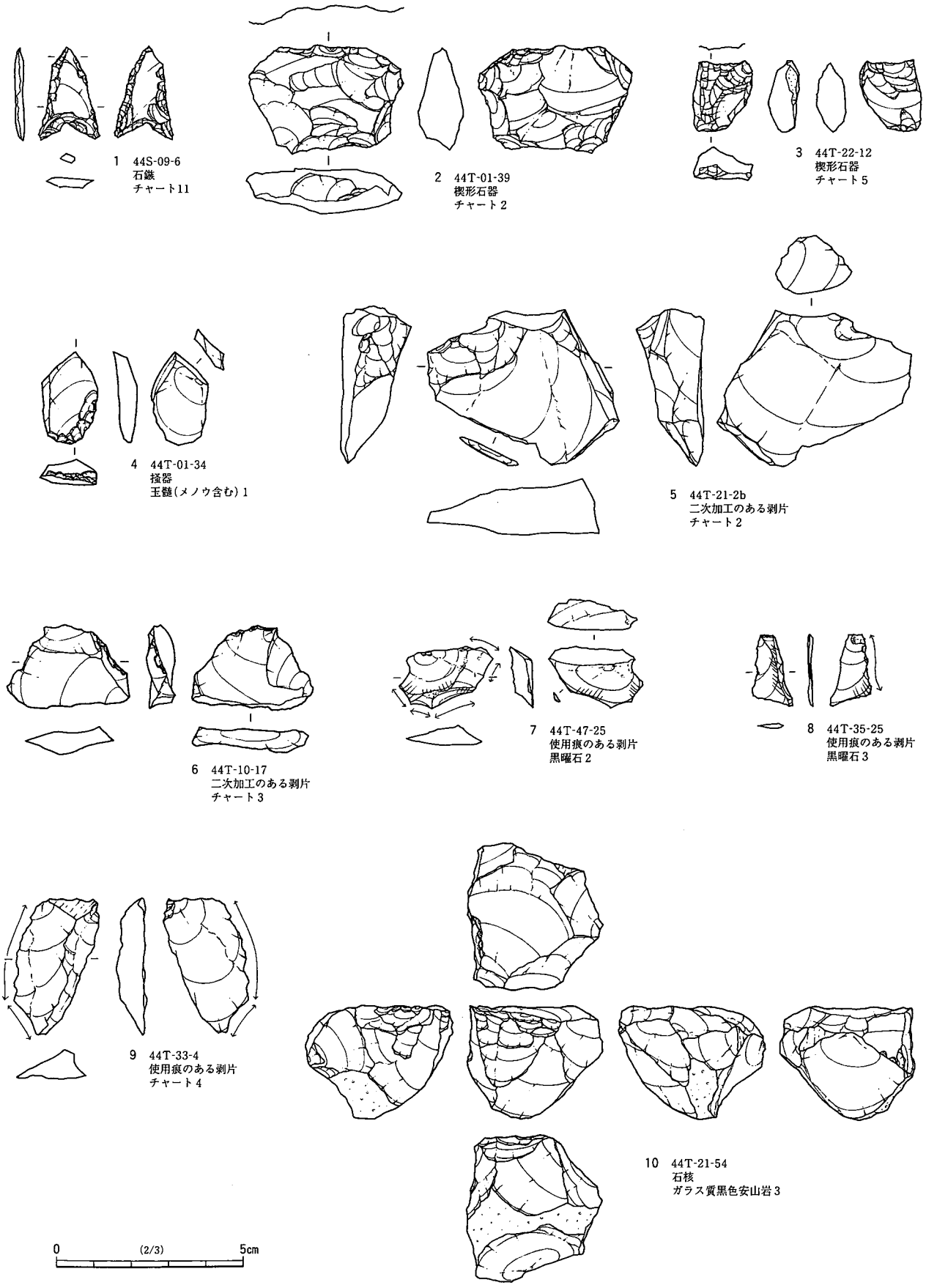
5・6. 二次加工のある剥片　5の板状剥片の上面に器面削ぐような二次加工痕がみられる。6の上・側縁には小剥離痕が並んでおり、石鏃の素材剥片と思われる。チャート製である。



第132図　石器集中D器種別分布



第133図　石器集中D石材別分布



第134図　石器集中D出土石器(1)

7～9. 使用痕のある剥片　7の背面には主要剥離面と同一方向の剥離痕があり、連続した工程で作出された剥片のうちの一片である。角張った周縁には使用による微細剥離痕が看取される。石材は夾雑物を含むものの、透明度の高い、やや茶色みを帯びた良質な黒曜石である。8は20㎜に満たない黒曜石の石刃であり、その薄さゆえに透明度は高い。一側縁に使用痕が看取される。9はチャート製の縦長剥片であり、使用痕範囲は左側縁辺である。

10～13. 石核　10は打面・作業面置換型の石核であり、稜上を調整しながら剥片を剥離した工程がうかがわれる。自然面・風化面とも黄褐色のガラス質黒色安山岩である。11は発達した節理を持つ淡黄褐色の頁岩剥片が素材であるため、加撃部とは違った部位での剥落により剥離面の新旧がわかりにくくなっている。厚みのある剥片の主要剥離面を打面にして剥離作業が行われる。12は多方向から加撃されたチャートの石核である。上面稜上には敲き潰されたような調整痕が残る。13 は青灰色を基調に、白色半透明～淡褐色部分が混在するチャートであり、自然面はない。上下からの加撃よって分割された石核素材である。

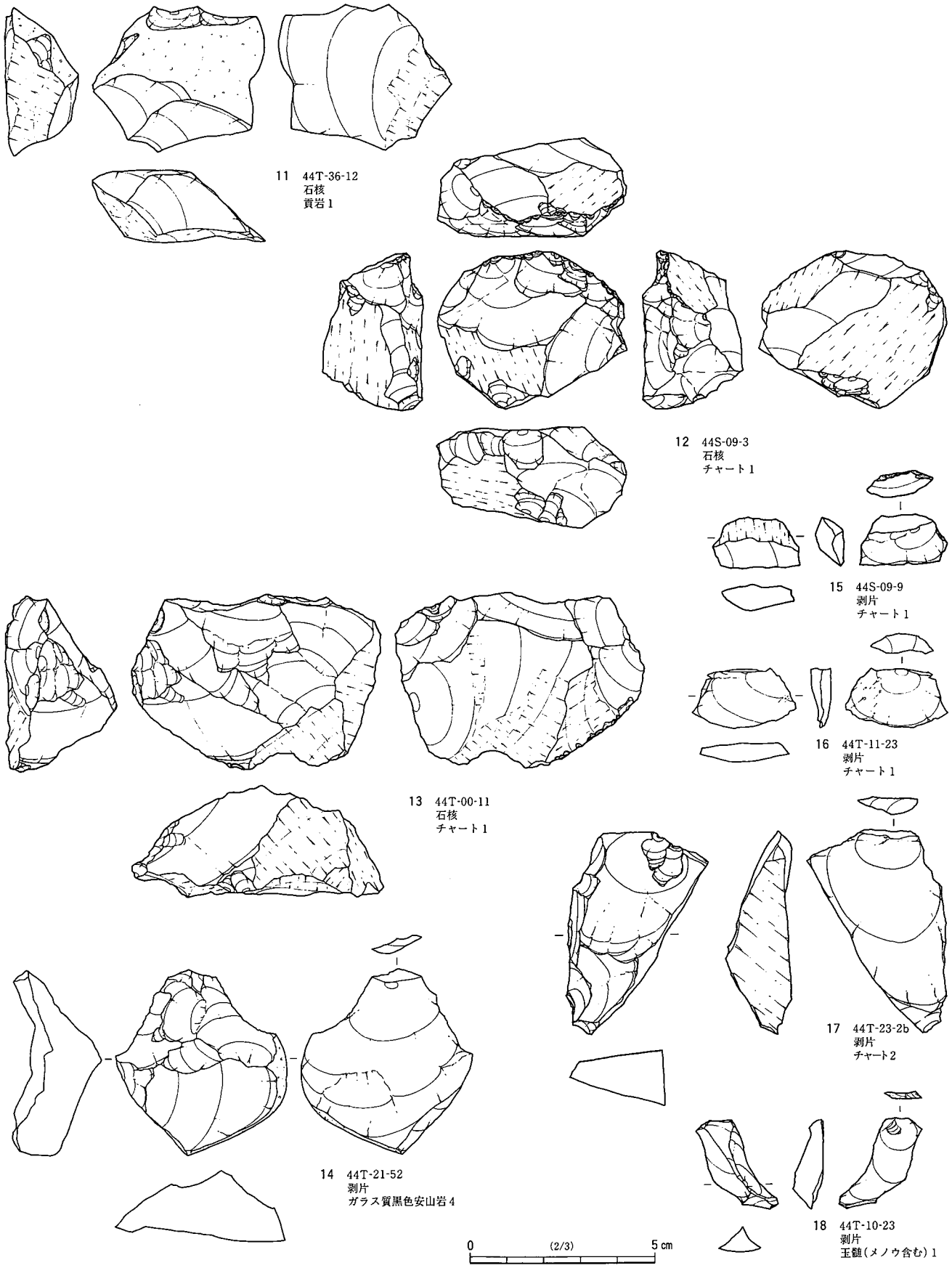
14～18. 剥片　14は器面を整えるための剥片であり、側面から下端にかけて帯状に自然面が残るガラス質黒色安山岩である。15・16はチャートの剥片であり、広い打点対縁を持つ。17は厚みのあるチャートの板状剥片であり発達した節理を持つ。18は黄褐色で珪質であり、白い斑晶のような斑紋が入った玉髄(メノウ含む)の剥片である。背稜から敲打された後に90°回転させて剥片剥離に至る。

19～21. 敲石　長軸方向の端部に敲打痕あり。20の平坦面は緩やかに窪み、光沢が感じられる。磨り、敲きなどを行った複合用途を持つ加工具である。21の自然面は被熱して赤化している。丸みのある三角柱状であるが下端部は折れた後に擦り、あるいは敲打に用いられており、脆い砂質面がのぞく。3点とも砂岩製である。

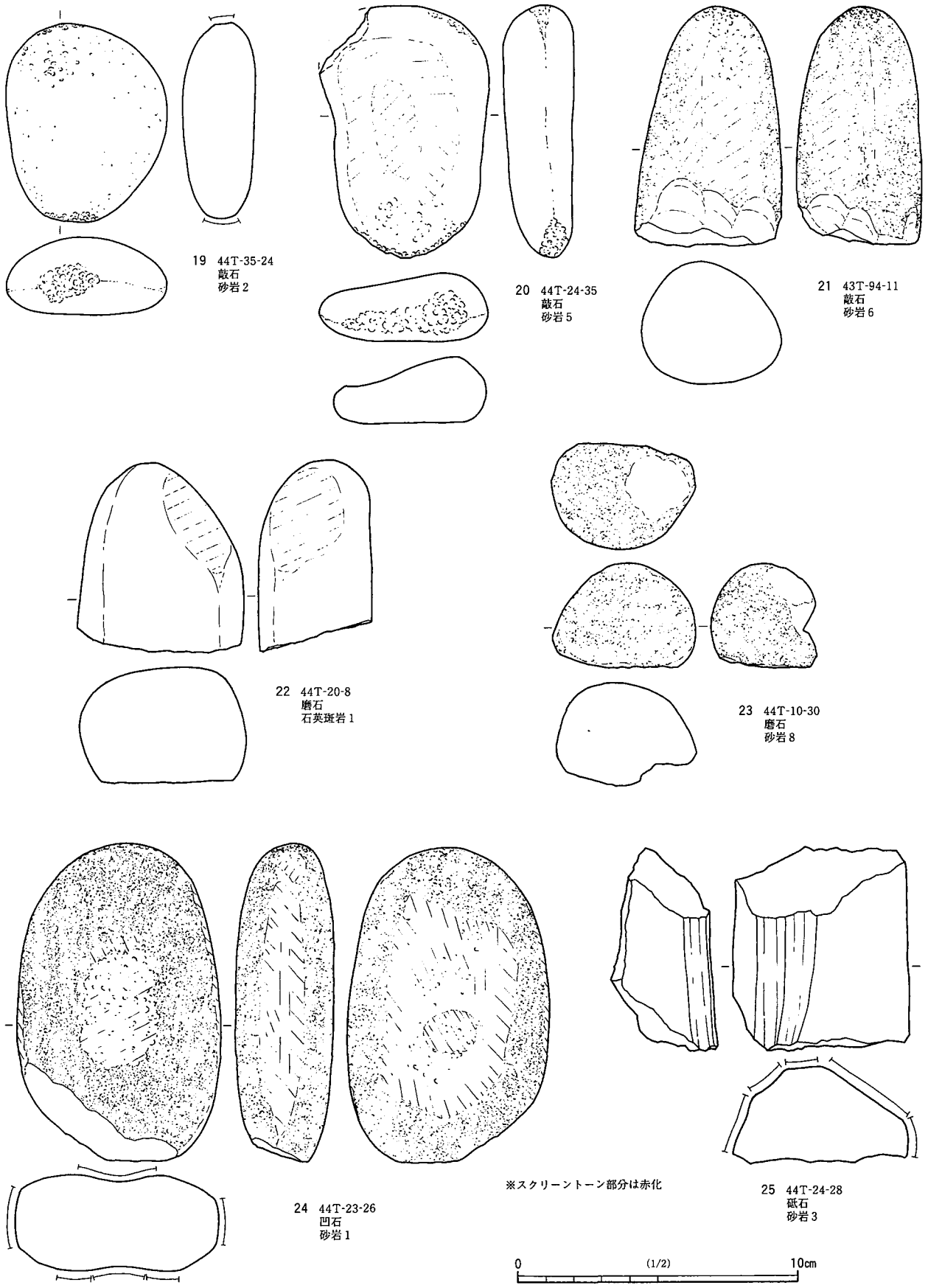
22・23. 磨石　22は石英斑岩製の厚みのある楕円形自然礫が素材である。もともと丸みのある素材であるが、磨りにより平坦な面が存在する。設置面(裏面)は節理面である。23は砂岩製であるが、被熱しており、黒色～赤黒色となっている。石棒の先端部分である可能性がある。

24. 凹石　被熱のため全体的に赤黒く変色するが、器面は滑らかな砂岩である。平坦面には正・裏面とも窪みがみられ、その内外には擦痕が走る。側縁は弱い敲打痕と擦りによって面的な様相となり、厚みのあるハンバーグのようである。

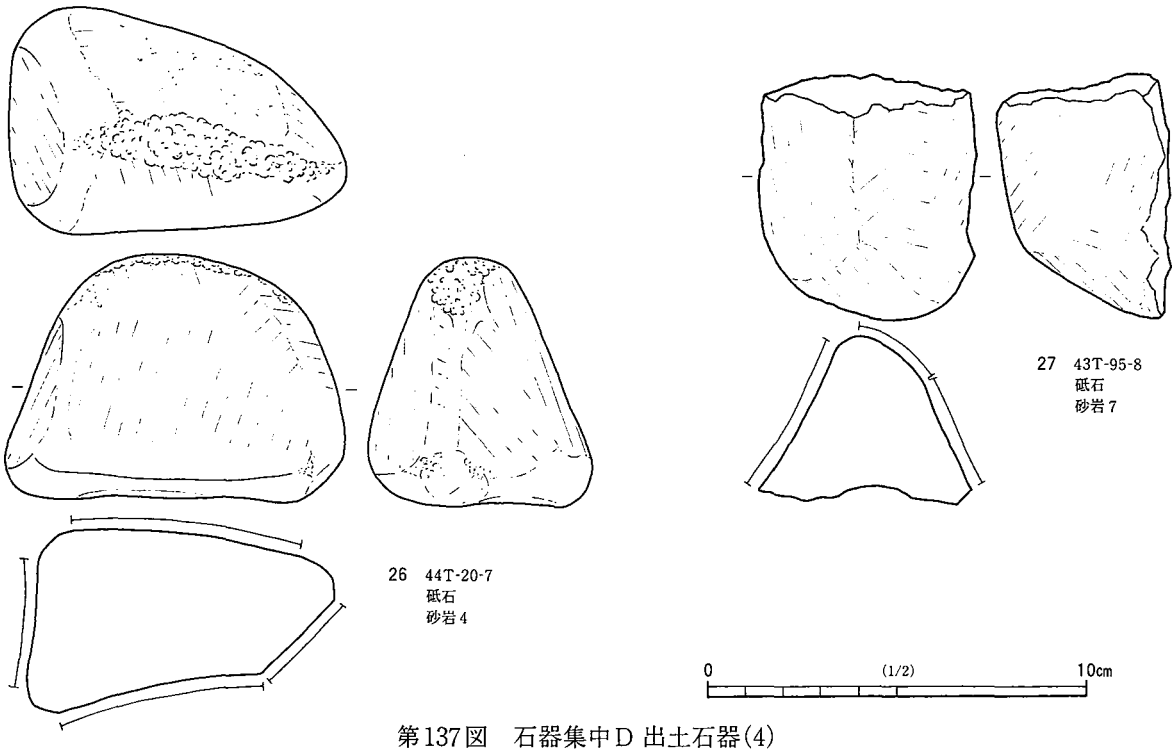
25～27. 砥石　25の石材は砂粒の細かな、やや緑色を帯びる砂岩である。全体に擦られており滑らかな光沢がある。溝状痕は2条あり、凹みは浅い。26も砂岩であるが大粒の砂粒である。隅丸の三角錐状を呈し、頂部に敲打痕、平坦面には擦りによる凹みがみられる。27の自然面は淡褐色、剥離面は灰白色の砂岩である。擦痕により面的に区画される。



第135図　石器集中D出土石器(2)



第136図　石器集中D出土石器(3)



第137図　石器集中D 出土石器(4)

第27表　石器集中D 石材別組成表

石材／器種	石鏃	掻器	楔形石器	二次加工のある剥片	使用痕のある剥片	石核	剥片	砕片	敲石	磨石	凹石	砥石	礫	礫片	土器	点数	点数比	重量(g)	重量比
ガラス質黒色安山岩	0	0	0	0	0	1	11	0	0	0	0	0	0	0	-	12	1.60%	153.15	0.69%
トロトロ石	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	-	1	0.13%	14.36	0.06%
安山岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	4	-	11	1.47%	1224.18	5.52%
流紋岩	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	27	144(153)	-	174(183)	24.47%	8190.65	36.91%
石英斑岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	8	10	-	19	2.54%	1379.55	6.22%
黒曜石	0	0	0	0	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	-	4	0.53%	3.77	0.02%
閃緑岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	-	1	0.13%	5.83	0.03%
礫岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	-	3	0.40%	211.84	0.95%
砂岩	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1	1	3	14	105(107)	-	127(129)	17.25%	6211.15	27.99%
泥岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1(2)	-	1(2)	0.27%	81.68	0.37%
頁岩	0	0	0	0	0	1	4	0	0	0	0	0	2	65(67)	-	72(74)	9.89%	1827.44	8.23%
ホルンフェルス	0	0	0	0	0	0	5	0	0	0	0	0	2	10(11)	-	17(18)	2.41%	515.65	2.32%
結晶片岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	-	3	0.40%	78.60	0.35%
緑泥片岩	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	3	-	4	0.53%	45.82	0.21%
チャート	1	0	2	2	1	3	25	2	0	0	0	0	9	79(82)	-	124(127)	16.98%	2231.99	10.06%
玉髄（メノウ含む）	0	1	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	-	3	0.40%	4.36	0.02%
不明	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	-	1	0.13%	13.77	0.06%
土器	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	153	153	20.45%	-	-
合計	1	1	2	2	3	5	53	2	3	2	1	3	72	427(445)	153	730(748)	100.00%	22193.79	100.00%

※（ ）は出土点数

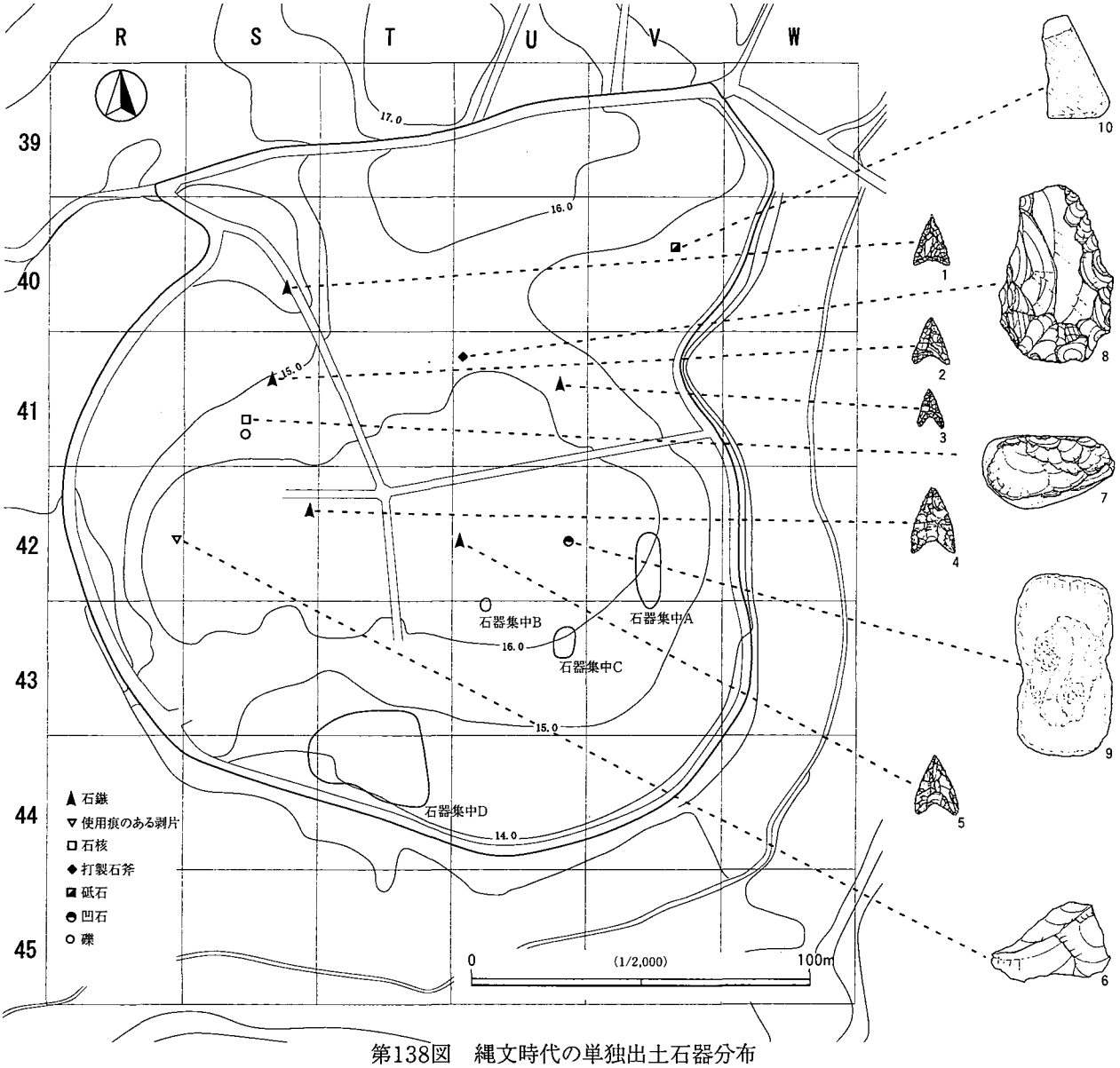
縄文時代　単独出土石器(第138図)

石器集中区域外から出土した縄文時代の石器について記載する。

石鏃５点、使用痕のある剥片・石核・打製石斧・砥石・凹石・礫が各々１点ずつの計11点が出土しており、礫以外の10点を実測した。標高16.4ｍほどの遺跡中央部及び標高15ｍほどの高さに散在するが、南の谷付近からは出土しない。

出土石器(第139図、図版31・40)

１～５．石鏃　１は黄褐色の混じった灰色の流紋岩製である。基部の抉れは浅く、平基に近い。側縁は直線的である。２は濃灰色のガラス質黒色安山岩製である。裏面中央部に褐灰色の自然面を残す。両側縁は直線的であり、薄くシャープな形態となっている。３は黒曜石製で基部の抉れは深い。４はチャート製で側縁は緩やかなふくらみを持つ。５は濃灰色チャートの凹基鏃であり、裏面の脚端部に素材時の打面及び



第138図　縄文時代の単独出土石器分布

主要剥離面が残る。両側縁は直線的だが、脚部にさしかかる辺りで緩くふくらむ。

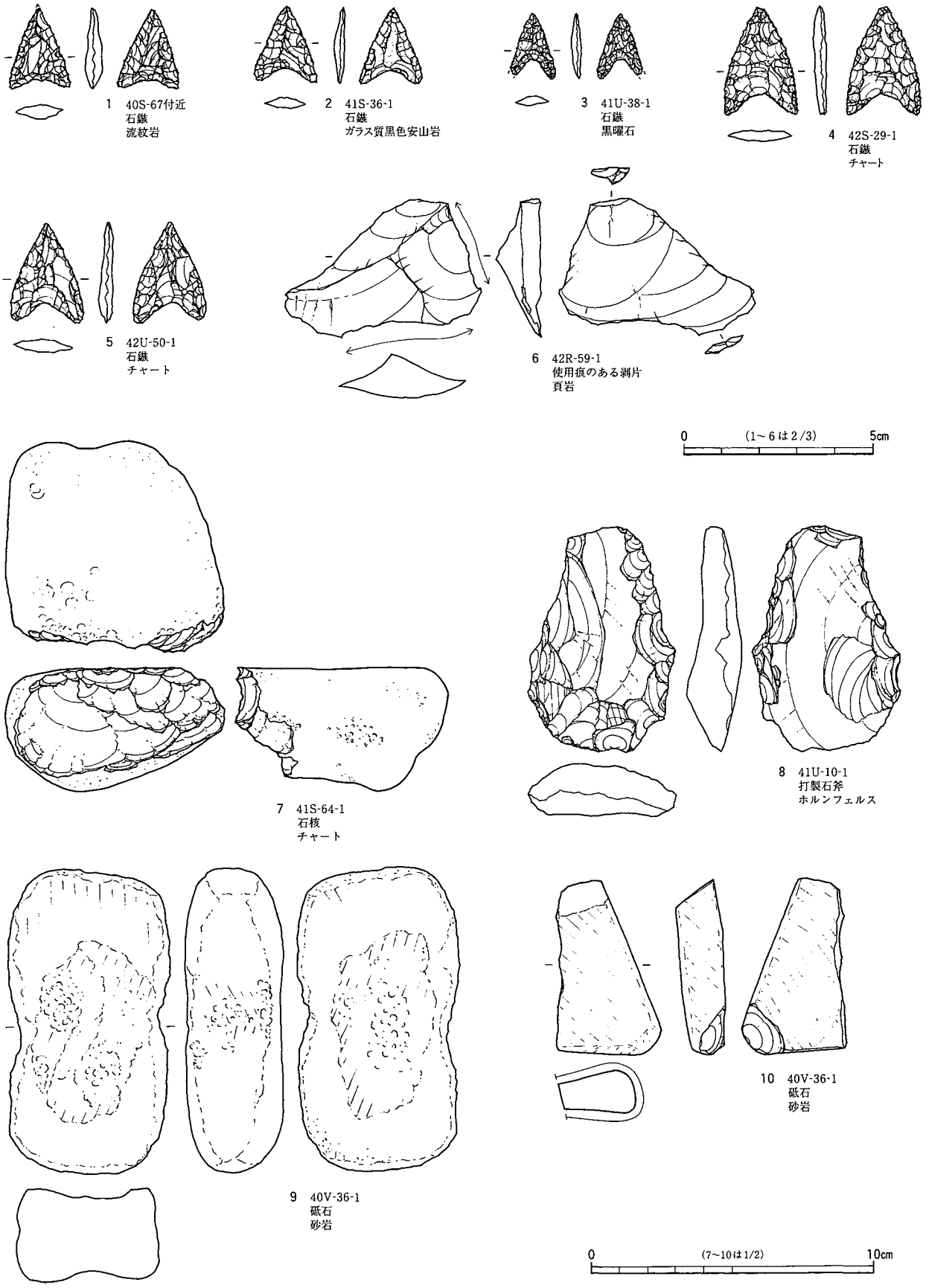
6. 使用痕のある剥片　赤茶色の筋が入る濃灰色の頁岩製である。右側縁・下縁辺には使用痕がみられる。

7. 石核　大型で厚みのあるチャート礫である。平坦面に多数の加撃痕がみられることから、台石として使用された後に石核に転用されたものと思われる。

8. 打製石斧　厚みのあるホルンフェルスの横長剥片が素材である。背面刃部剥離痕に滑らかな擦り痕が看取されるが刃縁からの加撃によって切られる。縄文時代早期後葉から前期中葉にかけて出土し、類例としては柏市復山谷遺跡、東京都西山野遺跡が挙げられる。

9. 凹石　φ１～３㎜程の角張った黒色粒を含んだ、重みのある安山岩製である。厚さが35㎜で、器長は107㎜、器幅が56.7㎜の角柱状を呈する。平坦面、側面に窪み状の使用痕が残されており、窪みの中心部ほど深く抉られているが、筋状の擦痕と敲打によると思われる凹凸がみられる。市原市武士遺跡の縄文中・後期出土の凹石と近似し、規格流通品の可能性がある。

10. 砥石　砂岩製の砥石である。平坦面・側面とも滑らかに磨られており、裏面は緩く窪む。



第139図　縄文時代の単独出土石器

第７節　グリッド出土の遺物

本遺跡から出土した遺物の内、遺構に伴わないものをグリッド出土遺物として扱った。遺物の大半は縄文時代の土器で占められているが、確認調査の際にトレンチ調査主体の地区とグリッド調査主体の地区があったため、遺物の取り上げ方が一律ではなく、調査区全体の遺物の分布域を明確に捉えることはできなかった。また、４か所に分布する礫群に伴って出土した縄文土器も早期、前期、後期と混在した状況であったが、調査区全体の縄文土器重量比では早期前半撚糸文系が11％、前期前半が25％、後期初頭から前半が56％の割合であり、遺物の状況からも後期初頭から前半の時期が本遺跡での活動の中心となることを裏付ける結果となった。ここでは、大まかな時期と種別に分け説明を加えたい。

第１群土器（第140図、図版41）

早期の土器を一括した。この時期には撚糸文系土器、沈線文系土器、条痕文系土器が出土しているが撚糸文系土器の出土比率が最も多く、早期全体の約96％を占めている。集中する地区は42Ｖ-74グリッド周辺、43Ｔ-95グリッド周辺の石器集中区である。

１～17は撚糸文系の一群である。１～11は概ね口唇部の断面が円頭状で，わずかに肥厚するものが多い。このうち１～８は撚糸の条間が密で、縦方向に施文され、９～11でやや広く、斜めに施文されている。12はＬＲの縄文が施されている。15は底部付近の破片で，条間の密な撚糸が一部で交差している。17は胴部下位の破片である。以上は稲荷台式と考えられる。14は口唇部が肥厚し、直下の沈線でくびれを表出している。その下段にまばらな縄文が施される。花輪台式と考えられる。

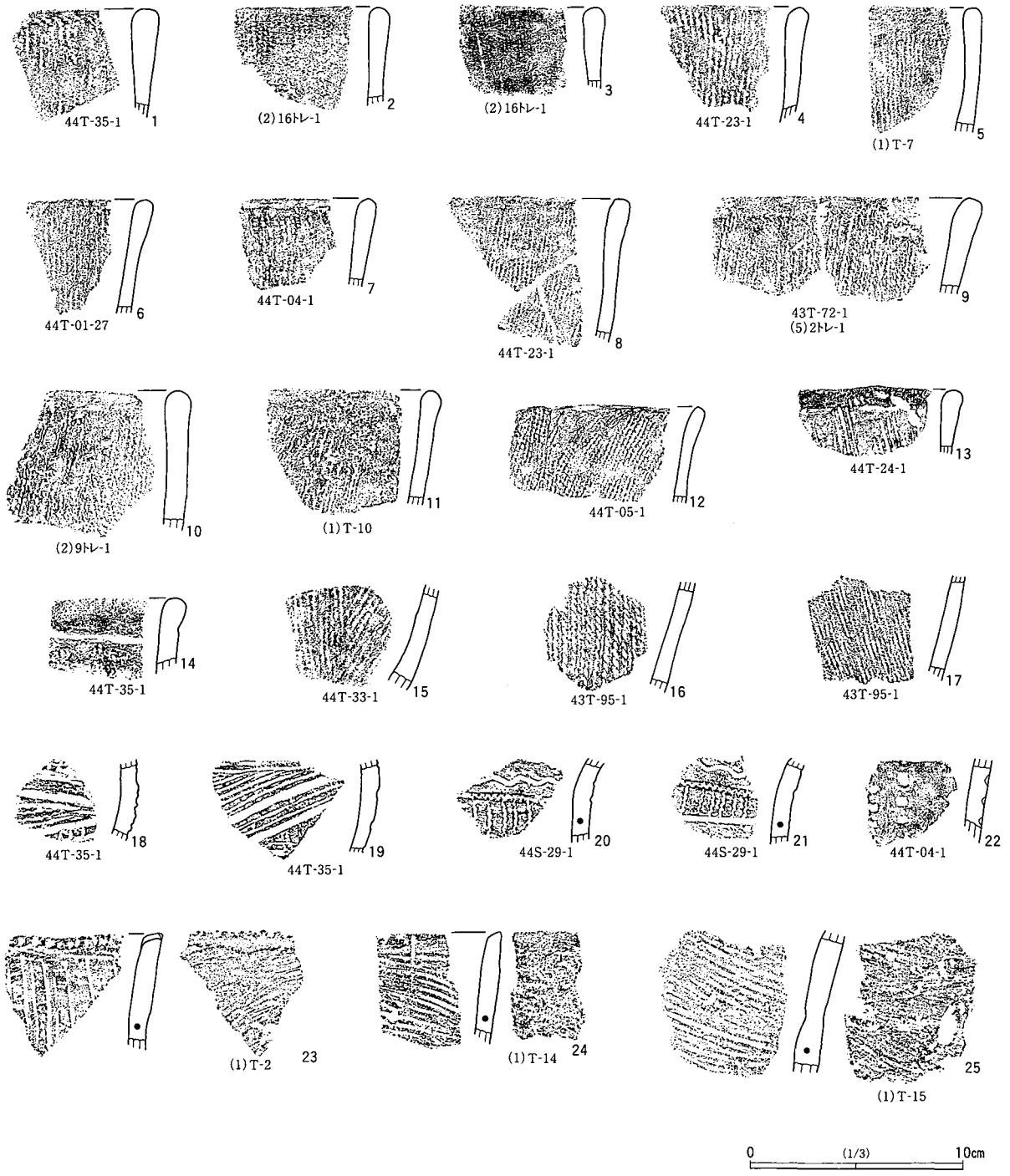
18～22は沈線文系の一群である。18・19は太い沈線と細い沈線を組み合わせて文様を構成している。田戸下層式と考えられる。20・21は胎土にわずかだが繊維を含み、細い沈線と貝殻復縁文が組み合わせられている。22は、角押し状の列点文が縦に平行して施される破片で、本来はこれに沈線が伴うものと思われる。20～22は田戸上層式と考えられる。

23～25は条痕文系土器の一群で、胎土に繊維を含んでいる。23は口縁に狭い間隔で刻みがあり、その下段は縦方向の幅の広い条痕が施される。茅山下層式に相当する。24は平縁で口縁内側が内削ぎ状となっている。表裏ともに横斜め方向の条痕を施すが、裏面は摩滅して痕跡がわずかに残る程度である。外面の口唇部直下は条痕をナデ消している。茅山下層式に相当する。25は胴部の破片で、表裏の条痕が顕著である。広義の茅山式と考えたい。

第２群土器（第141・142図、図版40～42）

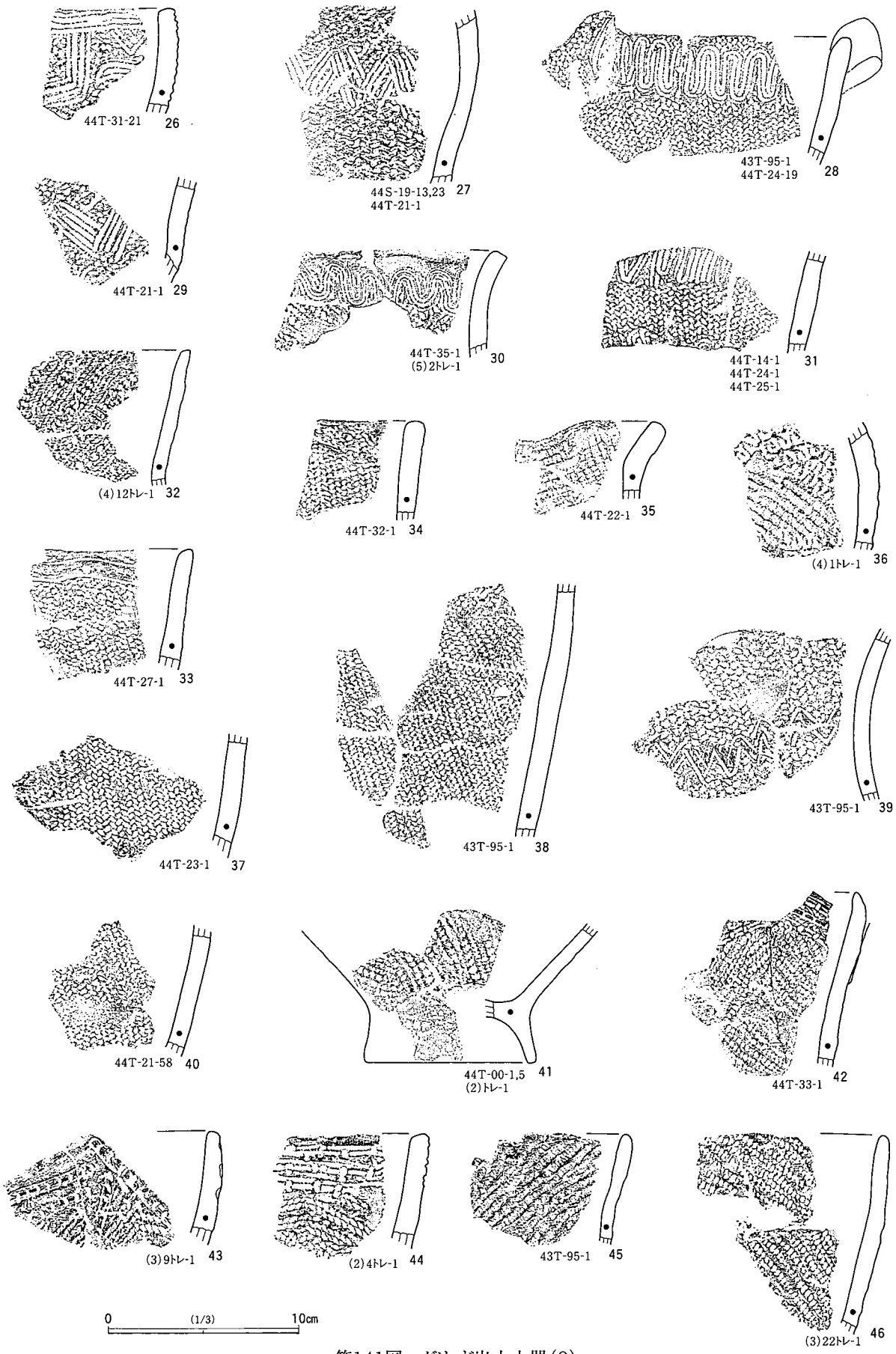
前期の土器を一括した。26～52は胎土に繊維を多く含む一群で、関山式、黒浜式に比定される。前述したようにこの一群も比較的多く出土しており、40Ｕ-49グリッド周辺、42Ｖ-10グリッド周辺、44Ｔ-21グリッド、43Ｔ-31～35グリッド周辺が主な分布域である。

26は平縁の口縁部で、組紐による縄文を地文として、櫛歯状工具による沈線文が施される。27・29もこれと同様に鋸歯状文が描かれる。また、28・30・31はコンパス文が描かれる。28の口縁は平縁で片口が付く形態である。32は平縁の口縁部で、附加条縄文が施されている。組紐縄文を地文とするものは他に34・37・38・40がある。35は弱い波状口縁で、地文は羽条縄文である。36はループ文が施される。41は台付の底部で、縄文は単節である。以上は関山式の後半段階に相当する。

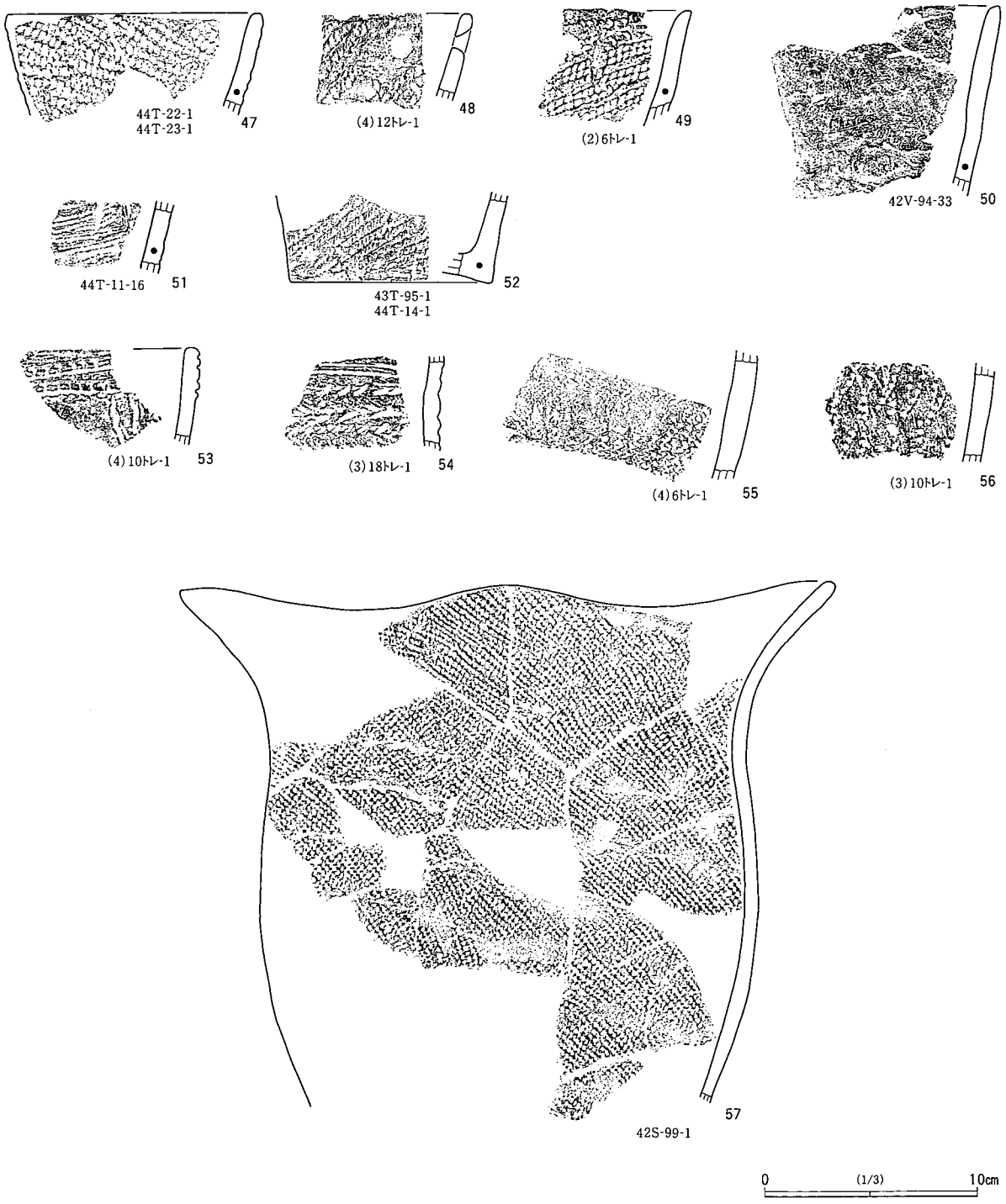


第140図　グリッド出土土器(1)

42・43は波状口縁で、口唇部直下に半裁竹管による押し引き文、その下段には全面に交互羽条縄文が施されている。44～49は縄文を地文とする平縁の口縁部である。44は口唇直下に3段の平行沈線があり、48には補修孔が穿たれている。縄文は44・49が複節、45が無節L、46～48が単節である。50は地文に縄文を持たないタイプで、表面が丁寧にナデ調整されている。51は細い工具により四角文風の文様が描かれている。52は無節縄文が施された上げ底の底部である。以上は黒浜式に相当する。



第141図　グリッド出土土器(2)

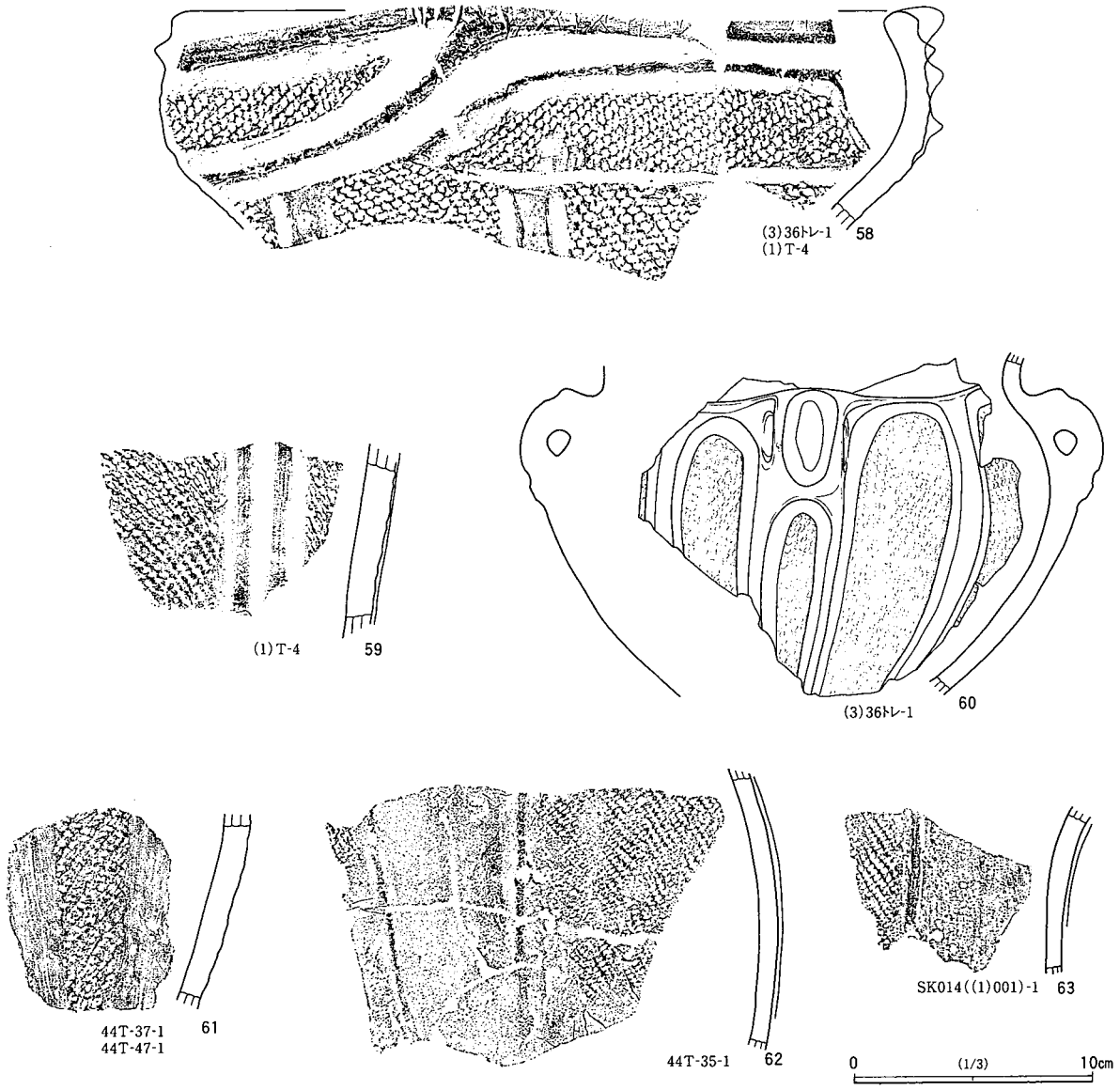


第142図　グリッド出土土器(3)

53～56は浮島式の一群である。53は平縁の口縁部で、貝殻腹縁を用いた押し引き状の平行沈線を施す。54は胴部の破片で、貝殻腹縁を用いた変形爪形文が施されている。55・56はいわゆる波状貝殻文を施している。57は口縁～胴部が残る深鉢型土器の破片である。口縁は大きく開き、緩やかな波状を呈する。文様は全体にやや粗いＬＲ縄文が斜めに施文されている。裏面は丁寧にナデが施され、胎土は白色粒、砂粒を含む。前期末葉に伴うものであろう。

第３群土器(第143図、図版42)

中期の加曽利Ｅ式に属する土器を一括した。58はキャリパー型の口縁部の破片である。口縁部文様帯は隆帯による枠状文で構成され、胴部に向かって太い沈線が垂下する。隆帯による区画内と沈線の間は縄文が充填されている。59は胴部の破片で、縄文を地文として平行する隆帯が垂下する。58・59は加曽利ＥⅡ式に相当する。60は橋状把手をもつ双耳壷の胴部である。頸部無文帯を境に逆Ｕ字形の沈線が垂下し、区画内に複節縄文を充填している。加曽利ＥⅢ式に相当する。61は垂下する縄文帯の側縁がわずかに隆起する。62・63はともに微隆起線による区画がされ、62で見えるような幅の広い無文帯となっている。61～63は加曽利ＥⅣ式に相当する。



第143図　グリッド出土土器(4)

第４群土器（第144～146図、図版43・44）

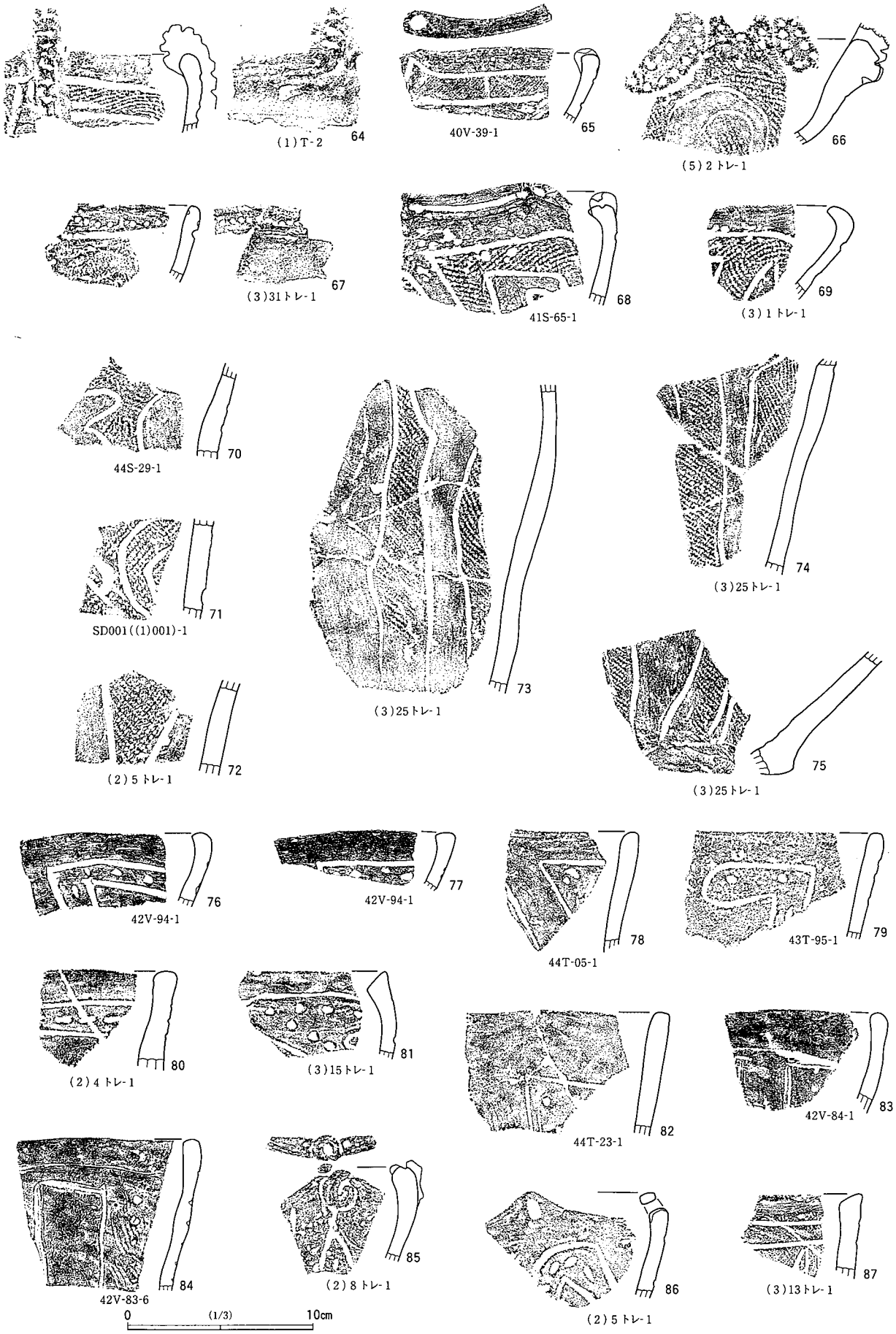
本群は、後期前半の称名寺式、堀ノ内式に属する一群である。本遺跡で最も多く出土した一群で、主な分布域は、住居跡の分布域と概ね重なっている。64は平縁でやや内傾する口縁部に突起が付く。突起上には刻みが施され、口唇部上端に無文帯が作出される。この無文部に沿って２条の平行する沈線が横走し、沈線間に縄文が充填される。65は肥厚してわずかに内傾する口縁部で、口唇上端部に円形刺突が穿たれている。文様は口唇部に沿って２本の沈線が横走するが、上部は山形に屈折している。沈線間は無文である。66は山形の突起をもつ口縁部で、突起上とその側面に細かい列点文が施される。その下部には沈線で渦巻き状意匠文を作出し、区画外に縄文が施されている。67は口唇部を横走する沈線で区画し、口唇直下の表裏面に列点文が施される。68・69は内側に湾曲する口縁部である。68はわずかに波状を呈し、口唇上端に沈線と円形刺突を加えている。口唇部は無文で、その直下から沈線による意匠文を作出し、内側に縄文が充填されている。70～75は胴部及び底部付近の破片である。何れも沈線で意匠文を作出し、その区画内に縄文を充填している。71は曲線を描くが、枠外にも縄文がはみ出し、他に比べて崩れた感じになっている。以上64～75は称名寺１式土器に相当すると考えられる。

76～83、85～93は沈線で作出された枠内に列点文が施されるタイプである。76～80は口唇上端の無文帯と沈線間の幅が比較的狭く、沈線が直線的である。81は口縁部が内湾して内削ぎ状の形態で、沈線の描線が下端では曲線となる。82・83は口唇部の無文帯が広い。84は幅の広い無文帯を配して、沈線の枠外に縦方向の列点文と縄文を施し、枠内を磨り消している。85は波状口縁の頂部に「の」字状の粘土紐を貼り付け、その下段に沈線と列点文が描かれる。86は波状口縁の頂部に円孔を穿っている。87は内削ぎ状の口縁部で、口縁に平行する沈線と分かれて下方に延びる沈線が描かれている。88～93は胴部に意匠文が作出され、区画内に列点文が施されている。以上の土器は称名寺２式土器に相当すると考えられる。94は沈線枠内に４本単位の櫛歯状工具の描線が列点文のように施される。沈線の特徴は89や92に似通っているが、堀之内式の範疇に入るかもしれない。

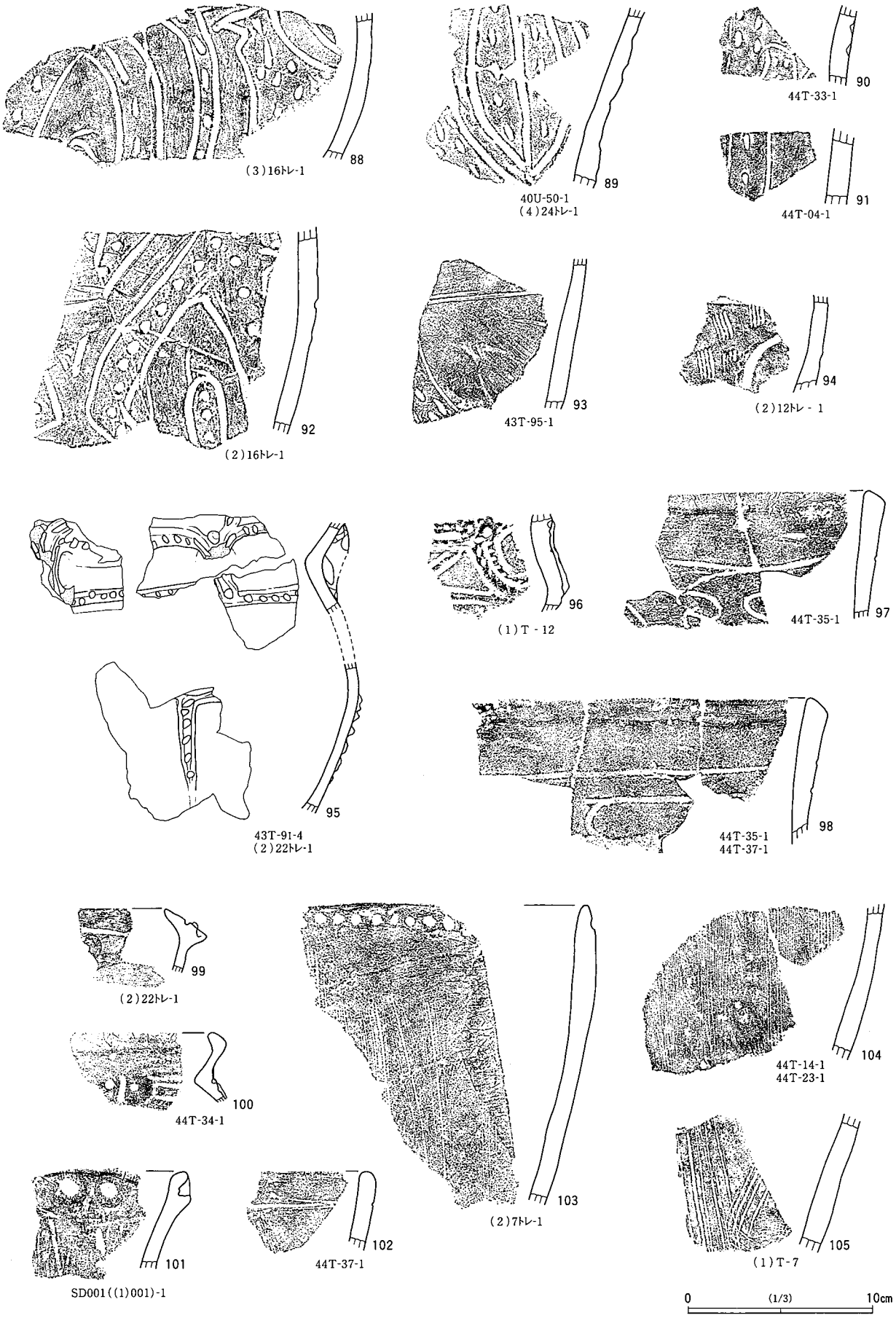
95は４点の同一個体を図上で合成した。文様は頸部の把手と刺突文のある隆帯で構成され、隆帯は頸部を挟んで横方向に２条、胴部には縦横に交差する１条が観察される。胎土が密でよく締まっており、無文部も丁寧に調整されていることが特徴である。96も刺突文のある隆帯が主文様となる破片で、隆帯の側縁には沈線が付随する。97・98は同一個体である。口縁は外削ぎ状で、幅広の無文帯を横方向の沈線で画し、その下部に意匠文を展開している。99～101はボタン状貼付文に円形刺突が施される。102～107は条線文が主文様となるタイプである。103は口唇部に沿って列点文が加えられ、106は条線で曲線を描き出している。108～111は直線的な沈線で三角或いは菱形のモチーフを描くタイプで、109には地文に縄文を施している。112は地文に縄文を施し、沈線による曲線文が垂下する。113～115は縄文を主文様とする。113は波状口縁で、口唇部は外削ぎ状となる。115は口唇部に沈線を配し、無節縄文が施される。以上95～115は堀之内式に相当すると考えられる。

第５群土器（第146図、図版44）

本群は、後期後半～晩期の土器を一括した。116～124は加曽利Ｂ式の範疇に属する。116は口唇部に沿って刻み目と沈線を配し、その下部に縄文を施す。117は浅鉢形土器で、胴部上位の縄文を沈線で区画し下部～底部を丁寧に磨いている。118は深鉢の胴部で、括れ部に無文帯を配しその上下に浅い条線文を施し



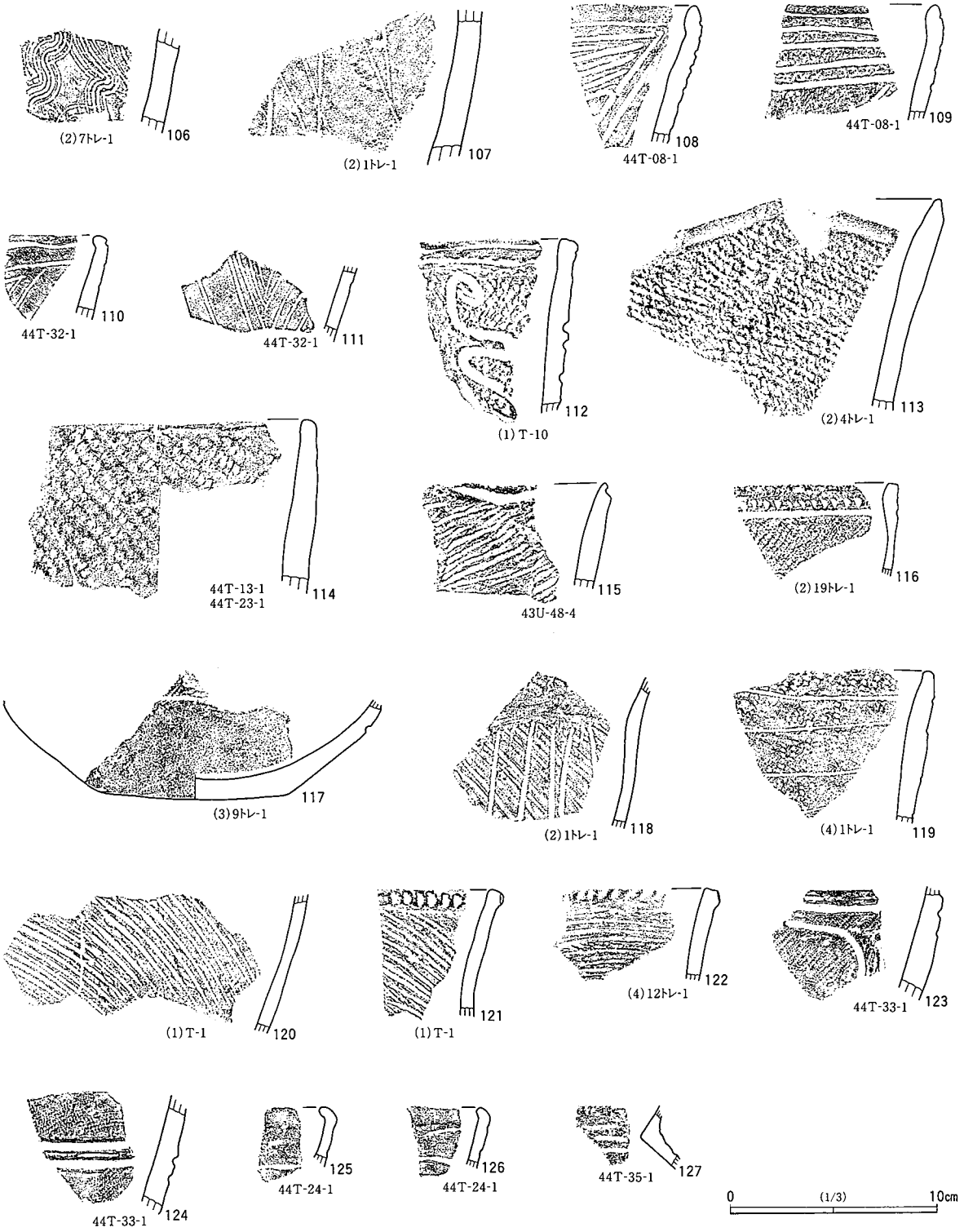
第144図　グリッド出土土器(5)



第145図　グリッド出土土器(6)

ている。119～122は条線文が施される粗製土器の一群である。119は縄文を地文として、横方向の条線がまばらに施される。口唇部内側に沿って浅く窪む。120は粗い条線である。121・122は口唇部の隆帯上に刻みが施される。123・124は同一個体である。細かな縄文を地文として彫りの深い沈線文が施されている。色調は黒褐色で、堅く締まりのある焼成である。

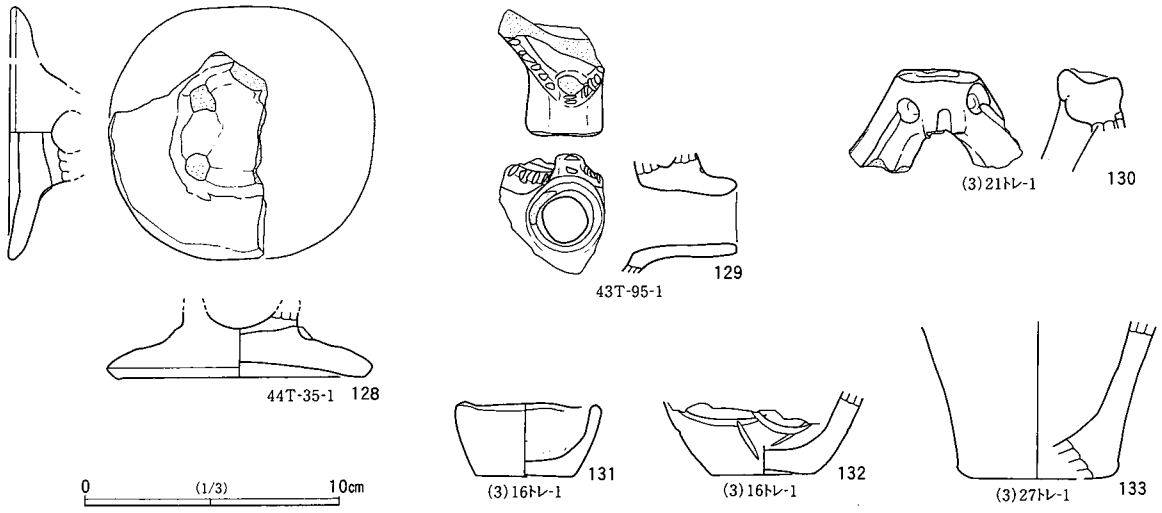
125～127は晩期の小型壷である。横方向の沈線が主文様で、荒海式と考えられる。



第146図　グリッド出土土器(7)

その他の土器(第147図、図版40)

128は蓋である。上部は欠けているが、左右一対の橋状把手が付くと思われる。129は注口土器の注口部である。注ぎ口の突出に沿って刻みのある隆帯を配し、その合流点から刻みを施した把手が上方に伸びると見られる。130は突起の一部である。頭部中央が円形にくぼみ、三叉状に分かれる脚部には沈線とその端に円形の刺突文を施している。131は小型土器である。外面は丁寧に磨かれている。132は小型の鉢形土器の底部である。先端が尖った工具により弧状の沈線とこれに交差する短い沈線が描かれている。133は深鉢形土器の底部である。外面は縦方向に丁寧にナデられている。これらの土器は後期前半に属すると考えられる。



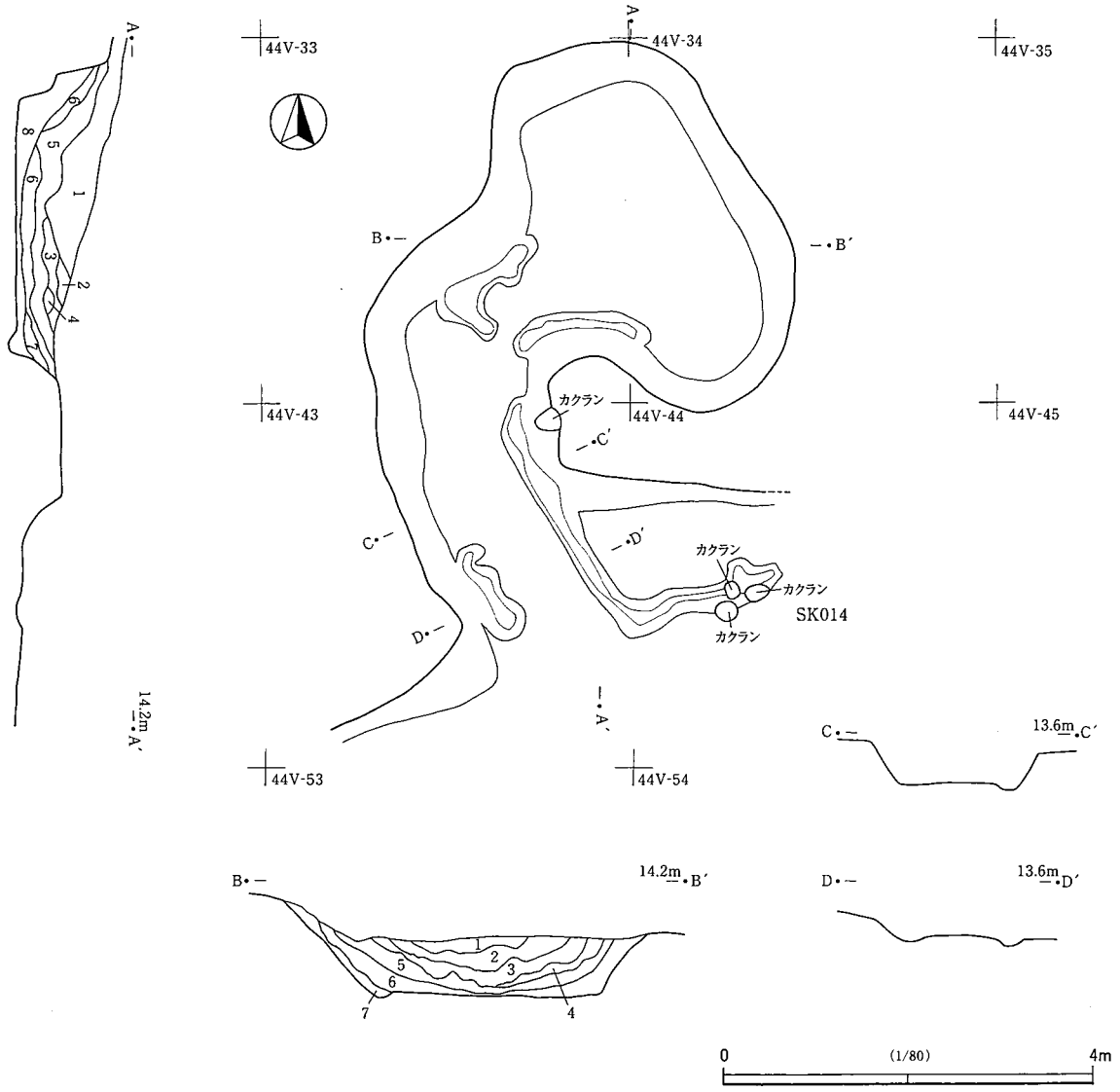
第147図　グリッド出土土器(8)

第4章　古代・中～近世

第1節　遺構

SK014(第148図、図版38)

遺跡の南端、44Ⅴ-33グリッド～44Ⅴ-44グリッドに跨って位置する。台地の下部に造られた横穴式地下室である。開口部から天井部はすでに崩落し、台地下部から進入する通路と地下室の竪穴部分だけが残存している状況であった。開口部は標高12m前後の谷津に面する台地斜面にあり、南から進入した通路は一旦東に折れ、その先に地下室が設けられている。通路の幅は入口付近で1.73m～1.90m、竪穴に接する部分で2.0mである。入口付近は西側と東側の高低差が30cm前後あり、東側は通路側壁に沿って幅25cm～30cm、深さ10cm前後の溝が存在する。地下室の竪穴部分は長軸を北西～南東に向けた隅丸方形に近い平面形である。上面での規模は長さ4.24m、幅2.41m～2.70m、底面の規模は長さ3.49m、幅(奥行き)1.90mである。深さは北側壁(斜面上方)で1.22m、南側壁(斜面下方)で35cm、奥壁(東壁)で1.28mである。底面はほぼ平坦になっており、竪穴入口付近は溝状に窪んだ箇所が認められる。覆土は黒色土、暗褐色土、褐色土が主体で、天井部の崩落土と考えられるロームやローム塊が多量に堆積している。覆土中から出土した遺物は、明らかに混入品と見られる縄文時代の土器片が少量であり、遺構の時期を判断できる資料に乏しい。

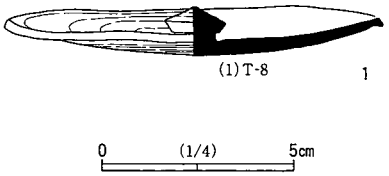


第148図　SK014

第２節　遺物

須恵器(第149図、図版40)

１は須恵器の蓋である。約1/2が欠けており、また、焼成時の歪みが著しく、全体に反り返っている。本来の器形も器高の低い平形であり、口唇部の反りが短い形態である。色調は青灰色で、胎土に白色粒が目立つ。器形等の特徴から８世紀後半～９世紀初頭の年代が考えられる。なお、同じグリッドから武蔵型の薄手の土師器甕が破片で出土していること、本遺跡内でも限られた製品であること等から、本品は蔵骨器の蓋として利用された可能性が考えられる。



第149図　グリッド出土須恵器

第5章　まとめ

旧石器時代

市野谷二反田遺跡においては12か所の石器集中地点が確認され、それらは３枚の文化層に分けられた。石器の出土量は第３文化層が圧倒的に多く、当地域におけるⅣ層～Ⅴ層の石器群の様相を把握する上での良好な資料が検出された。ここでは特に第３文化層の石器群に注視してまとめとする。

第１文化層（Ⅶ層～Ⅸａ層）

第１ブロック１か所のみで、剥片と石核、礫・礫片で構成され、剥片・石器類の石材は嶺岡産珪質頁岩３点、珪質頁岩２点、黒曜石・頁岩・チャートはそれぞれ１点ずつ出土している。礫・礫片には安山岩・流紋岩・砂岩・頁岩・チャートが用いられている。Ⅶ層下部段階に属する。

第２文化層（Ⅵ層下部～Ⅶ層上部）

第２・３ブロックが該当する。第２ブロックは良質な黒曜石５点で構成され、いわゆる下総型石刃再生技法が用いられた石器が出土している。下総型石刃再生技法が駆使される石材の多くはチョコレート色の硬質頁岩が素材であるが、ここでは黒曜石が使用されており、比較的新しいⅥ層下部段階に属するものと思われる。この時期の石器群としては千田台遺跡[1)]、栗野遺跡第Ⅱ文化層[2)]、権現後遺跡第４文化層[3)]があげられる。第３ブロックは剥片・砕片全８点が出土し、ホルンフェルス１点を除く７点はガラス質黒色安山岩である。

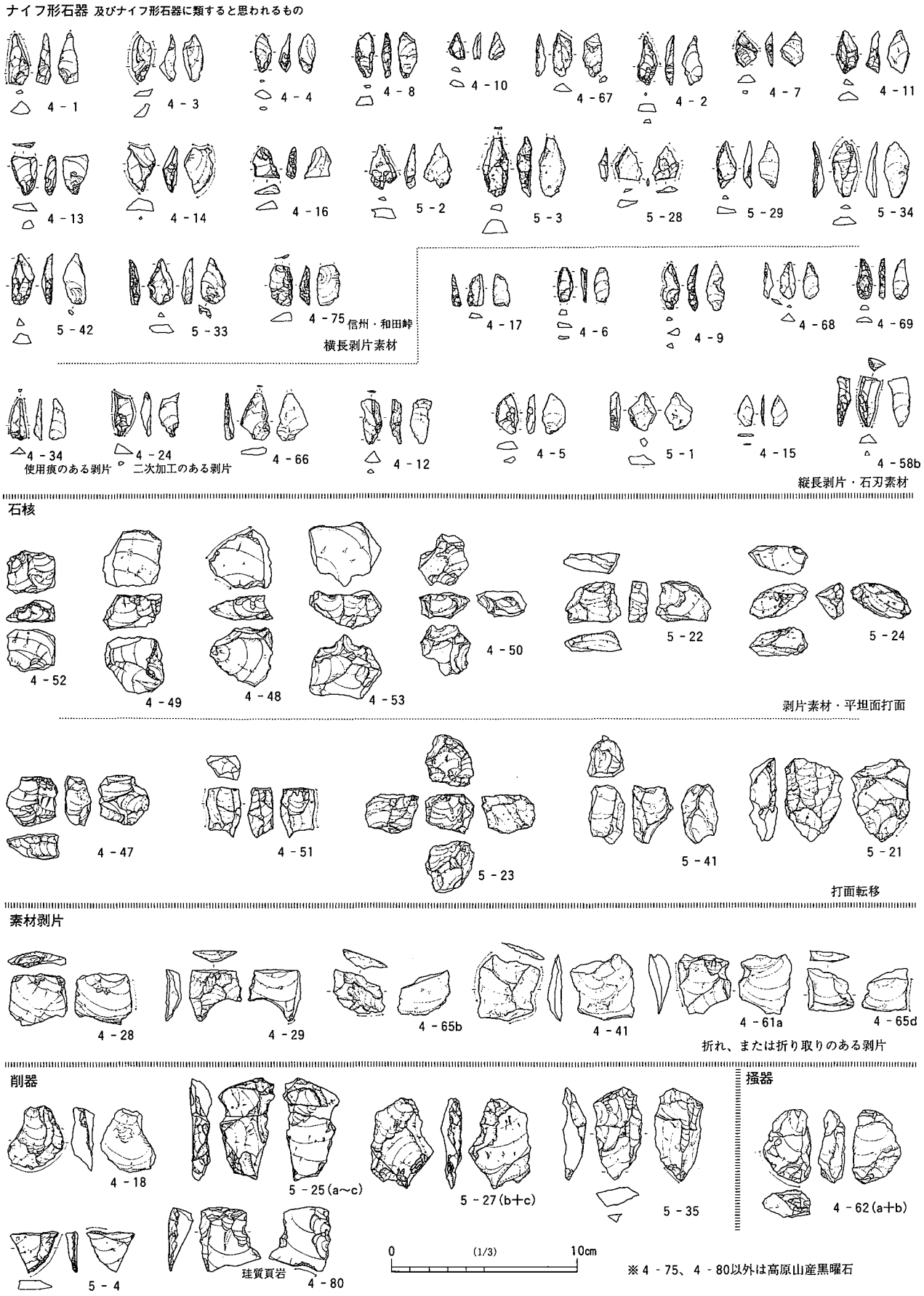
第３文化層（Ⅳ層下部～Ⅴ層）

第４～12ブロックの9か所が該当する。このうち第６・７、９～11ブロックは礫群を伴う。剥片・石器類は1,606点、礫・礫片は2,028点を数えた。大まかな括りとしてこれらを一枚の文化層に属するものと捉えたが、周辺遺跡の資料の増加や、時期的な編年研究が進めばさらに分層され得る可能性を示唆するものである。これはブロックごとに観られる特徴によって解明される。

第４・５ブロックは南側台地縁辺よりもやや高くなった中心寄りから検出された。第４ブロックの平均出土レベルは13.110ｍ、西側に隣接する第７ブロックは13.333ｍであり、南側に緩やかに下降する地形を加味しても第７ブロックよりは下位に位置する。第５ブロック（13.231m）と、南西に位置する第９ブロック（13.361m）、南東に位置する第10ブロック（13.657m）における層位差も同様である。この傾斜地では常総粘土層と思われる地盤の上に第１黒色帯が乗っており、通常の堆積状態とは異なった層序区分となっている。Ⅴ層より上位層の安定的堆積に従って生活立地環境が整い、まず第４・５ブロックが、後に礫群を伴った第６～11ブロックが形成されている。第12ブロックは北側に離れて所在するため、第４～11ブロックと時期の新旧を同一の土層断面図上において対比させることはできない。以下、第４・５ブロック、第６～11ブロック、第12ブロックを石材・石器製作技法からその相違を述べる。なお、第151図～第154図中の実測図４-34などの数字は、“第４ブロック出土の挿図番号34”の略である。

第４・５ブロック

第４・５ブロックは98％以上が黒曜石であり、第４ブロックは出土した黒曜石のうち98％に相当する608点が、また第５ブロックにおいては黒曜石289点全てが高原山産であった（不明分を含む）。第151図には主にナイフ形石器と、ナイフ形石器の素材を作出した石核・石核に類する剥片類を掲載した。第４・５ブロックは高原山産黒曜石を用い、板状剥片の平坦面を加撃して得た横長素材のナイフ形石器が多く作



第150図　第4・5ブロック主要石器

り出されている。素材剥片の幅がナイフ形石器の器長となっているため、大きさ・形状とも、規格的な印象を受ける。また、背面に残るポジ面が素材の主要剥離面を切るものも多い（4-1・4-3・4-4・4-8・4-10・4-12・4-34・4-67）。類例としては、近在では萱田遺跡群の権現後遺跡第３文化層、ヲサル山遺跡第１文化層[4]、坊山遺跡第２文化層[5]が近似する。また、高原山産の黒曜石を大量に消費しているという点においては武蔵野台地の下戸塚遺跡第1文化層[6]があげられるが、出土した器種・層位を比較すると市野谷二反田遺跡第４・５ブロックの方がやや古い段階であるといえるのではないだろうか。

一方、4-75は信州・和田峠産の黒曜石である。同一母岩は６点出土しており、第４・５ブロックで出土した遺物の0.65%にあたる。横長の素材剥片の打面部分が丁寧にブランティングされており、直線的な側縁部を作出している。この母岩である黒曜石５は信州・和田峠産、黒曜石６は信州・男女倉産であり、いずれも高原山産黒曜石が濃密な分布を示す第４ブロック集中域の西側に沿うように点在する。

第６～11ブロック

第６～11ブロックの剥片・石器類には珪質頁岩、ガラス質黒色安山岩の接合資料が多い。珪質頁岩１・18・21は中山新田Ⅰ遺跡[7]・柏市溜井台遺跡[8]にも同質の石材が存在し寺島累層産であると思われる。
ガラス質黒色安山岩のほとんどは、鶏卵大から小児の拳大であり、円礫の状態で持ち込まれている。濃灰色の地色に針でカリカリと掻いたような凹凸が刻まれた自然面を持ち、赤みのある黄褐色の粉（ローム粒か）をまとう。風化した剥離面や斑晶痕にも同様の黄褐色粒が石基に同化する。下総台地の遺跡からはごく一般的に出土しており、大きさや形状から第12ブロック出土のガラス質黒色安山岩とは一線を画す。

第６～11ブロックの剥片・石器類器種組成はナイフ形石器５点、削器４点、掻器12点、楔形石器１点、二次加工のある剥片41点、使用痕のある剥片60点、石核39点、剥片312点、砕片20点、敲石２点、台石１点である。第153図には主要器種を掲載した。多様な石材から剥片が剥離され、主要石器類の割合が少ない中で掻器12点は突出する。敲石と台石が検出されており、石器製作のための場と思われる。第12ブロックとは違い、作出された主要石器が接合する例は少なく、製品は搬出されたと考えるのが妥当であろう。ただ、二次加工・使用痕が多数の剥片に看取されるため、それらを用いて何らかの作業が行われた可能性も高い。

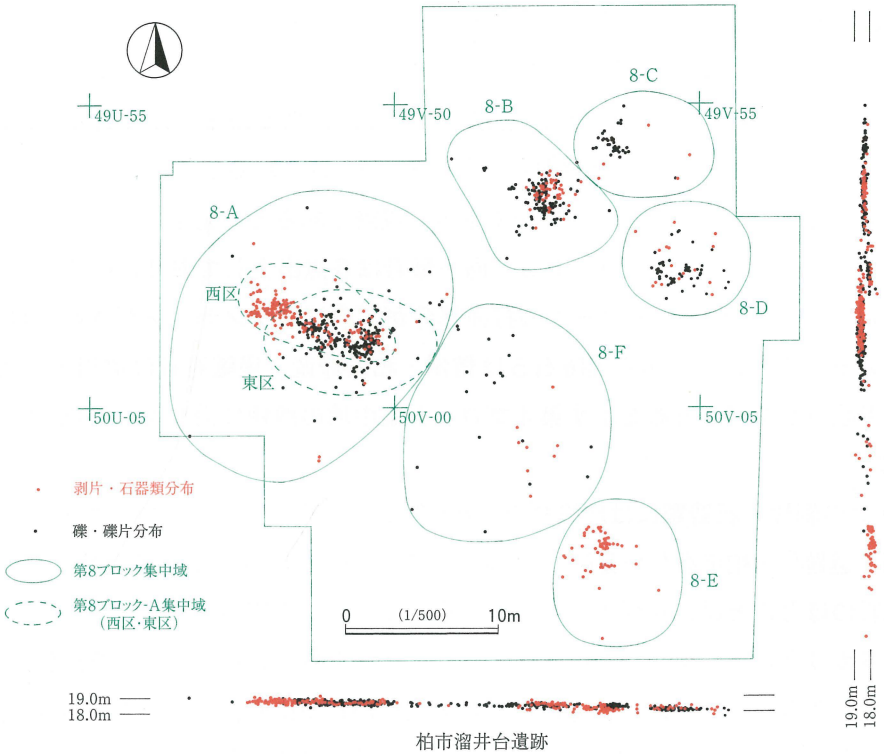
下総台地西部分水界におけるⅣ層下部～Ⅴ層段階の剥片・石器類と礫・礫片の出土状況を、市野谷二反田遺跡から直線距離にして3.9kmほど北西に位置する柏市溜井台遺跡と比較してみたところ、いくつかの共通点が確認された。

①剥片・石器類と、礫・礫片の石材がはっきりと使用区分されている。

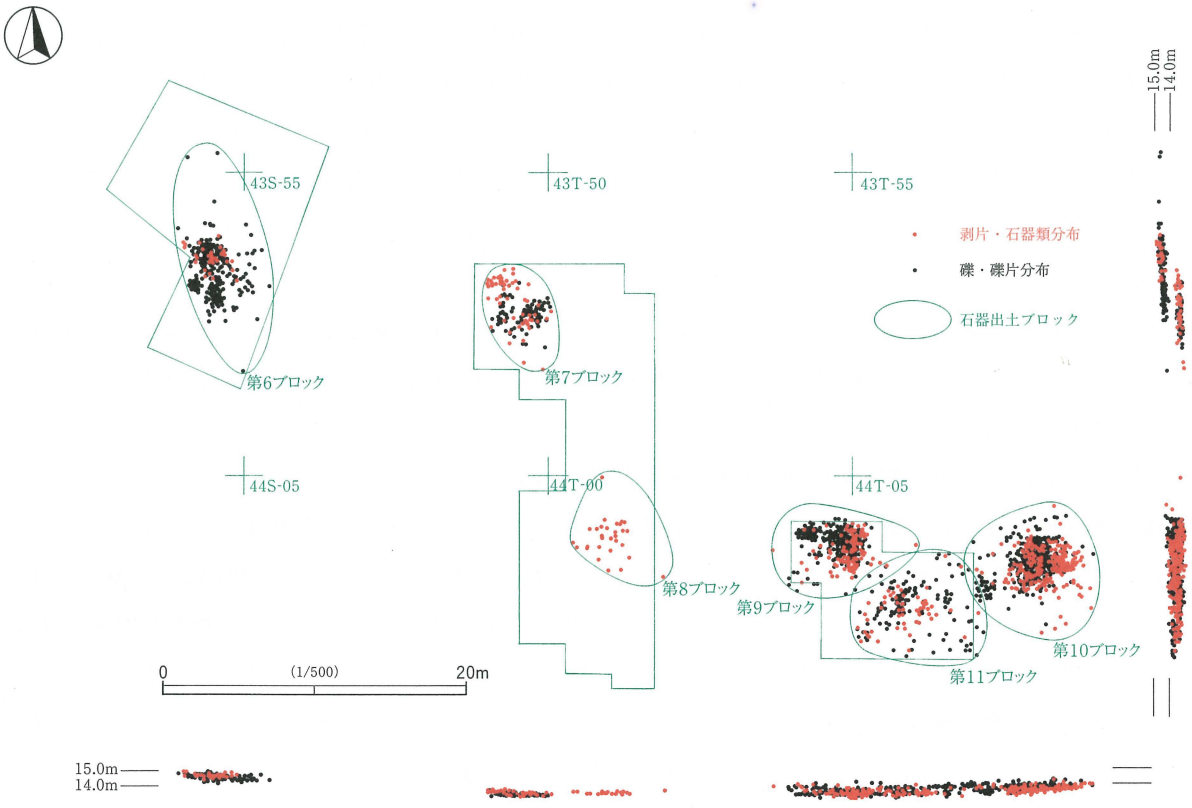
②礫・礫片を含まない、剥片・石器類のみで構成されるブロックが１か所存在する。

③剥片・石器類のみで構成されるブロックの第一石材は、均質細粒で自然面が明黄褐色、剥離面は同心円状に濃淡の層のある珪質頁岩であり、ブロック内のみならず、他ブロックとも接合関係が認められる。

溜井台遺跡では８-E集中域、市野谷二反田遺跡では第８ブロックが剥片・石器類のみが出土しており②、③にあたる。礫・礫片が混在しないブロックでは剥片剥離を伴う石器製作が行われ、製品は外部の遺跡も含む他ブロックにも供給されたものと推察される一方、対象物を切截する場であった可能性が石器に残る使用痕から推測できる。

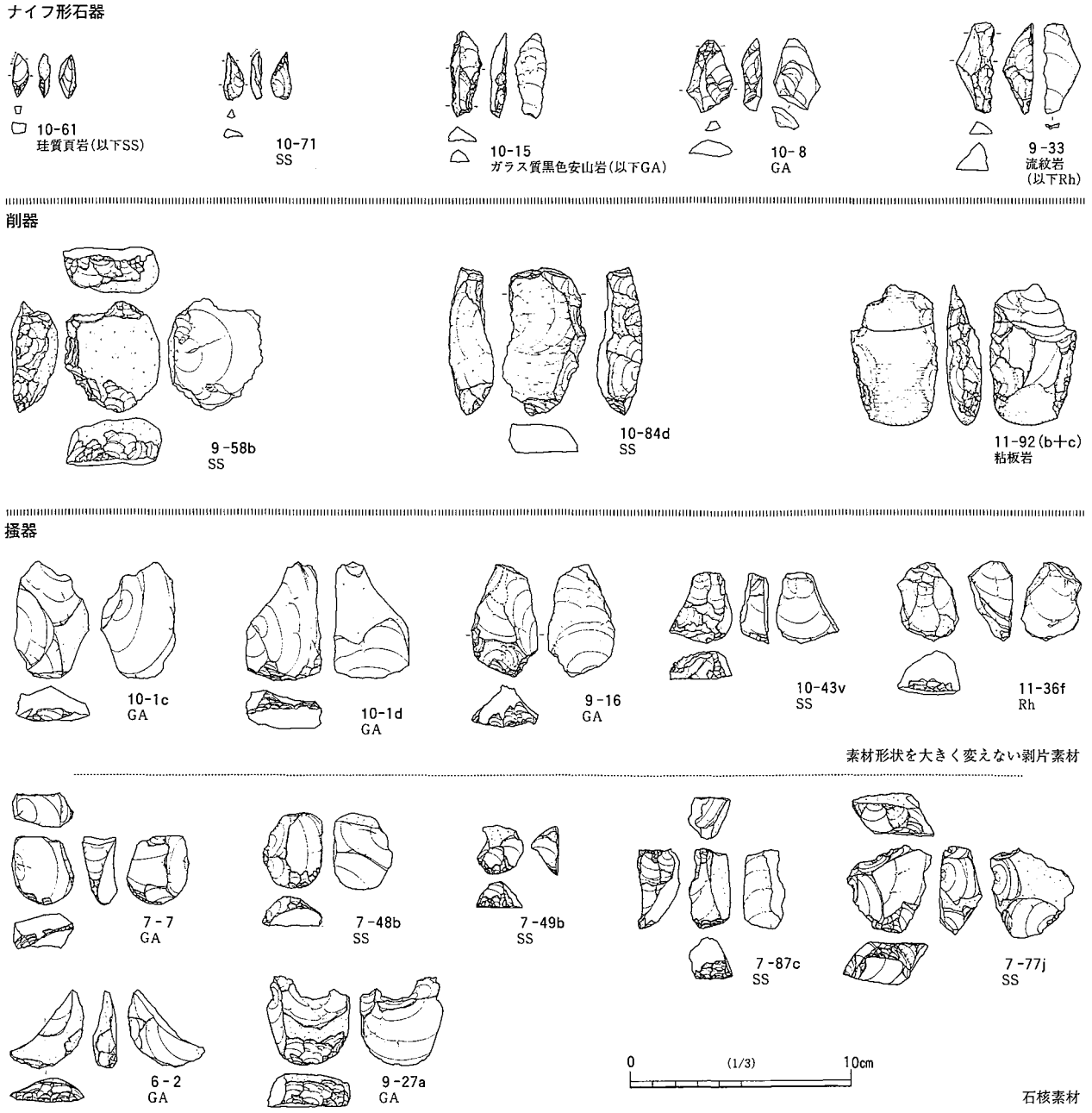


柏市溜井台遺跡

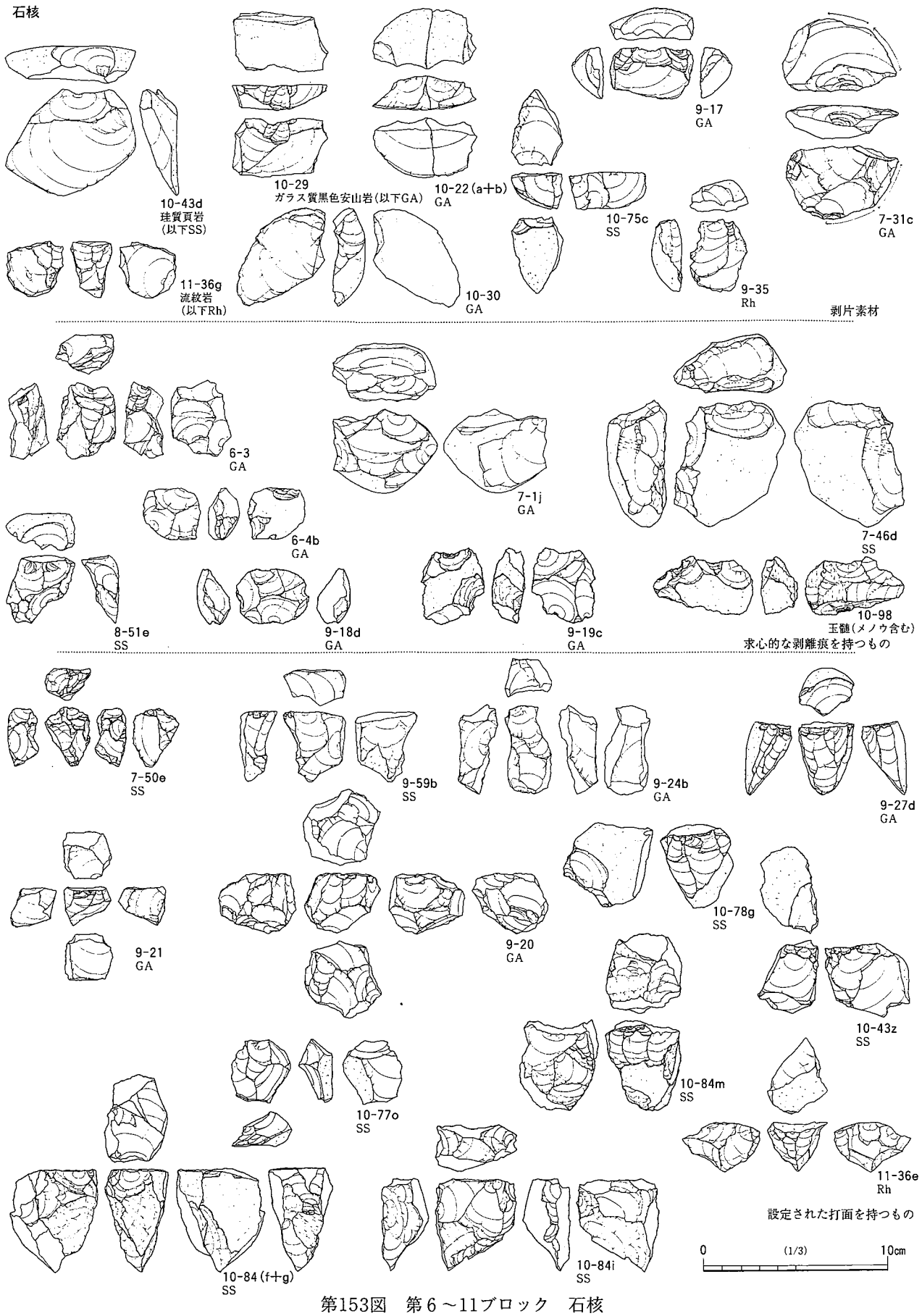


流山市市野谷二反田遺跡

第151図　Ⅳ下Ⅴ層段階における石器群と礫群の分布状況



第152図　第6～11ブロック主要石器



第153図　第6～11ブロック　石核

礫群について（第28表）

本文中にも述べたが、第６～11ブロックのうち第８ブロックを除く５地点では遺跡東側の牛飼沢（流山市史では“牛飼い池”）近辺から運び上げたと思われる大量の礫・礫片を伴っている。牛飼沢は坂川へと流入し、やがて江戸川と合流するが、古くは古期利根川（東京湾中央部で古東京川に収斂）が開析する低地であったために、上流域からもたらされた砂礫の堆積が遺跡における礫活用につながったものと思われる。長い時の中で氾濫を繰り返した古期利根川は、幾度も流路を変えながらその上・中流域から削り取った大量の礫を敷き詰めていき、人々の暮らしに密接に関わってきたものである。近在の河原石は礫として利用され、石器には遠隔地で集められた石が利用されるという使い分けの構造も関東一円に共通する。

市野谷二反田遺跡は旧石器時代のみならず、縄文時代においても礫群を伴う集中域を包蔵する。

使用石材は各時代とも多い順に流紋岩→砂岩→チャート→頁岩であり、この4石材合計の点数比はそれぞれ各時代全体の94.7%、92.8%である。さらにこのあとに続く３石材であるが旧石器時代では安山岩→石英斑岩→ホルンフェルス、縄文時代ではホルンフェルス→石英斑岩→安山岩の順となる。おそらくこのあたりまでが遺跡近在に敷延する石材であり、古期利根川のもたらした河床礫であろう。なおこの石材組成は現在の利根川上流、上武大橋付近の礫構成と近似する[9]。少量出土した石材としては、旧石器時代には粘板岩・花崗岩・礫岩・緑泥片岩、縄文時代においてはガラス質黒色安山岩・珪岩・結晶片岩・礫岩・緑泥片岩・泥岩・トロトロ石・閃緑岩・玉髄（メノウ含む）が出土しており、いずれも10点に満たない。他所から持ち込まれたものの利用されなかったか、廃棄に伴って礫群に紛れたか定かではないが、各時代の特色が現れているとすれば大勢からはみ出したわずかな出土量の石材に示されるものであろう。

第28表　礫・礫片の旧石器・縄文時代別対比表

	器種	点数	被熱した点数	被熱点数比	平均最大長 (mm)	平均最大幅 (mm)	平均最大厚 (mm)	平均重量 (g)
旧石器	礫	54	45	83.33%	74.3	55.9	35.2	256.4
	礫片	1983	1756	88.55%	32.0	27.1	16.8	27.8
旧石器 合計		2037	1801	88.41%				
縄文	礫	144	106	73.61%	55.2	46.3	23.2	86.8
	礫片	1238	995	80.37%	31.9	31.0	16.9	24.3
縄文 合計		1382	1101	79.67%				

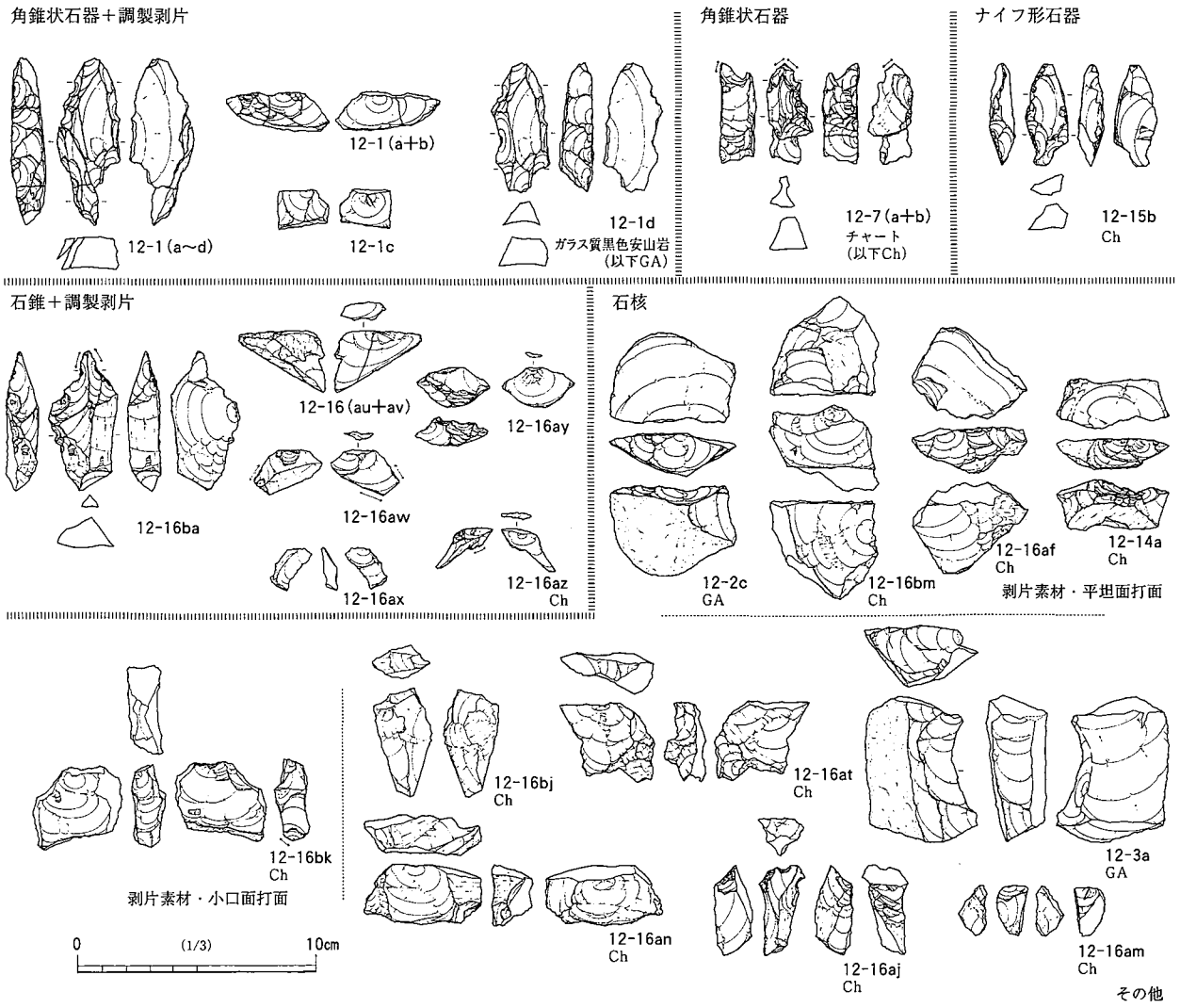
	石材	点数	点数比	重量 (g)	重量比		石材	点数	点数比	重量 (g)	重量比
旧石器	流紋岩	763	37.46%	37871.6	54.89%	縄文	流紋岩	611	44.21%	21205.2	49.95%
	砂岩	517	25.38%	15343.3	22.24%		砂岩	319	23.08%	10003.8	23.56%
	チャート	370	18.16%	4278.5	6.20%		チャート	197	14.25%	2979.5	7.02%
	頁岩	279	13.70%	4688.6	6.80%		頁岩	156	11.29%	3672.4	8.65%
	安山岩	70	3.44%	3939.4	5.71%		ホルンフェルス	35	2.53%	1302.9	3.07%
	石英斑岩	19	0.93%	1853.4	2.69%		石英斑岩	18	1.30%	1136.2	2.68%
	ホルンフェルス	11	0.54%	887.2	1.29%		安山岩	12	0.87%	1331.2	3.14%
	粘板岩	3	0.15%	22.6	0.03%		ガラス質黒色安山岩	9	0.65%	189.6	0.45%
	花崗岩	3	0.15%	2.9	0.00%		珪岩	9	0.65%	116.3	0.27%
	礫岩	1	0.05%	100.0	0.14%		結晶片岩	4	0.29%	146.5	0.35%
	緑泥片岩	1	0.05%	2.0	0.00%		礫岩	3	0.22%	211.8	0.50%
							緑泥片岩	3	0.22%	41.1	0.10%
							泥岩	2	0.14%	81.7	0.19%
							トロトロ石	1	0.07%	14.4	0.03%
							閃緑岩	1	0.07%	5.8	0.01%
							玉髄（メノウ含む）	1	0.07%	2.3	0.01%
							不明	1	0.07%	13.8	0.03%
旧石器 合計		2037	100.00%	68989.4	100.00%	縄文 合計		1382	100.00%	42454.4	100.00%

（多出石材順）

次に礫・礫片の使用状況であるが、旧石器時代の方が破砕した被熱礫の割合が高く、重量はやや重めであり、接合石片数の割合が高い。接合した礫片の割合は、旧石器時代第３文化層で56.7%、縄文石器集中Ａ～Ｄは9.4%である。礫片の接合割合の高さは、礫・礫片を使用した時間や空間の移動の多寡に関係すると推測される。旧石器時代第３文化層ではおそらく、礫の状態に熱が加えられたことが破砕の原因であり、縄文石器集中Ａ～Ｄでは破砕礫片そのものが使用意図にかなったものであった可能性が高い。場所を変えて礫片の再利用が行われたか、各所から集められた礫片が集中域を形成したものと考えられる。

第12ブロック

第12ブロックの主要石器は、チャートとガラス質黒色安山岩の２石材で構成される。油脂状光沢を持った青緑灰色のチャート(珪質頁岩)と大型のガラス質黒色安山岩は、栃木県と茨城県にまたがる八溝山地の鶏足山付近の岩帯から採集されたのち、市野谷二反田遺跡で消費される。チャートには自然面が残存しておらず、遺跡内に持ち込まれたときには既に石核の状態であったものと思われる。ガラス質黒色安山岩は石基の黒みが強く、原礫面は平坦であり、直径15cm以上と推定される。



第154図　第12ブロック主要石器

この２石材で構成されるブロックのあり方は市野谷入台遺跡第23・24ブロック[10]、元割遺跡№２地点でも検出されている。また現在整理作業中の柏北部東地区の富士見遺跡からも、同一石材と思われる緑色を帯びた青灰色のチャート(珪質頁岩)が出土している。

第12ブロックでは、角錐状石器と石錐が大型素材を打ち割って作出されており、チャートからは厚みのある柱状の素材が割り出され、少しずつ丁寧に剥片剥離されたのち、尖端部をさらに細かい調整によって整えられ、石錐が完成する工程がみてとれる。ガラス質黒色安山岩についても同様であり、粗割りで石器素材を抽出し、角錐状石器が作りだされ、加工され、完成間近で生じた折れを再調整加工して補正した過程が示されている(第155図12-1a～1d)。

チャート１の石片を接合したところ、接合資料の間隙は出土剥片、砕片を全て足したとしてもなお空白の状態であり、残核の不在、またその推察される大きさからは、剥片生産に充分な余力を残していることがうかがえ、大型の卵大の石核が遺跡外に持ち出されたことが推測される。

以上のように市野谷二反田遺跡ではⅤ層段階からⅣ層にかけての石器群が主体であり、常総粘土層に土層の堆積が始まった時期と同調するかのように土地の活用が活発になる。東部関東の高原山から持ち込まれた黒曜石を主体とした第４・５ブロック、寺島累層（一部は万田野礫層か?）の円礫を打ち欠いた第６～11ブロックの剥片石器、八溝山地からの産出と推測されるガラス質黒色安山岩・チャートのほぼ2石材で構成される第12ブロックなど、遠隔地石材と在地の河床礫の使い分けがなされている。この現象は流山新市街地地区のみならず、柏市溜井台遺跡や船橋市源七山遺跡[11]などにもみられる。下総台地、大宮台地、武蔵野台地でも同様の石器群や構成石材の共通性が報告されており、流通・文化の伝播を垣間見ることができる。

参考文献・資料

1)矢本節朗　1996「多古町千田台遺跡-BR/W南側NDB用地無線施設埋蔵文化財調査報告書-」(財)千葉県文化財センター

2)田島　新　1991「佐倉市栗野Ⅰ・Ⅱ遺跡-佐倉市第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅷ-」(財)千葉県文化財センター

3)橋本勝雄　1984「八千代市権現後遺跡」『萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』(財)千葉県文化財センター

4)藤岡孝司　1986「八千代市ヲサル山遺跡」『萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』(財)千葉県文化財センター

5)田村　隆　1993「八千代市坊山遺跡」『萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅵ』(財)千葉県文化財センター

6)亀田直美・高橋龍三郎・西村昌也　1996「下戸塚遺跡の調査」『第一部旧石器時代から縄文時代』早稲田大学校地埋蔵文化財調査室

7)田村　隆　1986「元割・聖人塚・中山新田Ⅰ」『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』(財)千葉県文化財センター

8)新田浩三・山岡磨由子　2007「柏北部中央地区埋蔵文化財調査報告書1」『柏市溜井台遺跡』(財)千葉県教育振興財団文化財センター

9)柴田　徹　2006「後期更新世におけるトネ川・ワタラセ川の流路変遷」松戸市立博物館紀要第13号

10)新田浩三　2008「流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書3」『流山市市野谷入台遺跡』(財)千葉県教育振興財団文化財センター

11)新田浩三・山岡磨由子 2006「船橋市源七山遺跡」『坪井地区埋蔵文化財調査報告書』(財)千葉県教育振興財団文化財センター

田村　隆・国武貞克・吉野真如　2003「下野-北総回廊外縁部の石器石材(第1報)」千葉県史研究第11号

田村　隆・国武貞克・吉野真如　2004「下野-北総回廊外縁部の石器石材(第2報)」千葉県史研究第12号

田村　隆・国武貞克　2006「下野-北総回廊外縁部の石器石材(第3報)」千葉県史研究第14号

田村　隆　2005「この石はどこからきたか」『考古学Ⅲ』安斎正人編

田村　隆　2004「石器石材収集資料」『千葉県の歴史　資料編　考古（遺跡・遺構・遺物）』千葉県

※石材、特に第12ブロックのチャートに関しては、田村　隆氏(千葉県立中央博物館)の踏査により、八溝山地岩帯において採取されたものであることが確認された。

第29表　文化層別器種別組成表(剥片・石器類)

文化層	ブロック	ナイフ形石器	角錐状石器	石鏃	削器	掻器	石錐	楔形石器	打製石斧	二次加工のある剥片	使用痕のある剥片	石核	剥片	砕片	敲石	磨石	台石	凹石	石皿	砥石	土器	点数	点数比	重量（g）	重量比
第1文化層	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	1	4	0	0	0	0	0	0	0	0	8	0.49%	26.15	0.30%
第1文化層 小計		0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	1	4	0	0	0	0	0	0	0	0	8	0.49%	26.15	0.30%
第2文化層	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0.31%	14.53	0.17%
	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	5	2	0	0	0	0	0	0	0	8	0.49%	45.81	0.52%
第2文化層 小計		0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	1	7	2	0	0	0	0	0	0	0	13	0.80%	60.34	0.69%
第3文化層	4	24	0	0	2	1(2)	0	0	0	30(31)	71(77)	10(11)	318	167	0	0	0	0	0	0	0	623(632)	38.84%	881.75	10.02%
	5	8	0	0	4(6)	0	0	0	0	5	44(51)	10	157	52	0	0	0	0	0	0	0	280(289)	17.76%	518.03	5.89%
	6	0	0	0	0	1	0	0	0	1	5	3(4)	20	0	0	0	0	0	0	0	0	30(31)	1.91%	243.90	2.77%
	7	0	0	0	0	5	0	0	0	1	3	6	31(32)	10	0	0	0	0	0	0	0	56(57)	3.50%	617.57	7.02%
	8	0	0	0	0	0	0	0	0	1	8	2	20	0	0	0	0	0	0	0	0	31	1.91%	127.49	1.45%
	9	1	0	0	1	2	0	0	0	6	5	12	70	2	1	0	1	0	0	0	0	101	6.21%	2444.51	27.77%
	10	4	0	0	1	3	0	0	0	26(30)	33(34)	13(15)	136(142)	7	1(2)	0	0	0	0	0	0	224(238)	14.63%	2483.72	28.22%
	11	0	0	0	2(3)	1	0	1	0	6	6	3(4)	35	1	0	0	0	0	0	0	0	55(57)	3.50%	254.72	2.89%
	12	1	2(3)	0	0	0	1	0	0	12(14)	20(23)	11	96(102)	15	0	0	0	0	0	0	0	158(170)	10.45%	1143.79	12.99%
第3文化層 小計		38	2(3)	0	10(13)	13(14)	1	1	0	88(95)	195(212)	70(75)	883(896)	254	2(3)	0	1	0	0	0	0	1558(1606)	98.71%	8715.48	99.02%
旧石器 合計		38	2(3)	0	10(13)	13(14)	1	1	0	91(98)	198(215)	72(77)	894(907)	256	2(3)	0	1	0	0	0	0	1579(1627)	100.00%	8801.97	100.00%
縄文	石器集中A	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	1	0	62	69	21.56%	1107.17	28.03%
	石器集中B	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0.63%	－	－
	石器集中C	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	17	18	5.63%	128.87	3.26%
	石器集中D	0	0	1	0	1	0	2	0	2	3	5	53	2	3	2	0	1	0	3	153	231	72.19%	2714.32	68.71%
縄文 合計		0	0	4	0	1	0	2	1	2	3	5	56	2	3	2	0	1	1	3	234	320	100.00%	3950.36	100.00%

※（　）は出土点数

第30表　文化層別石材別組成表(剥片・石器類)

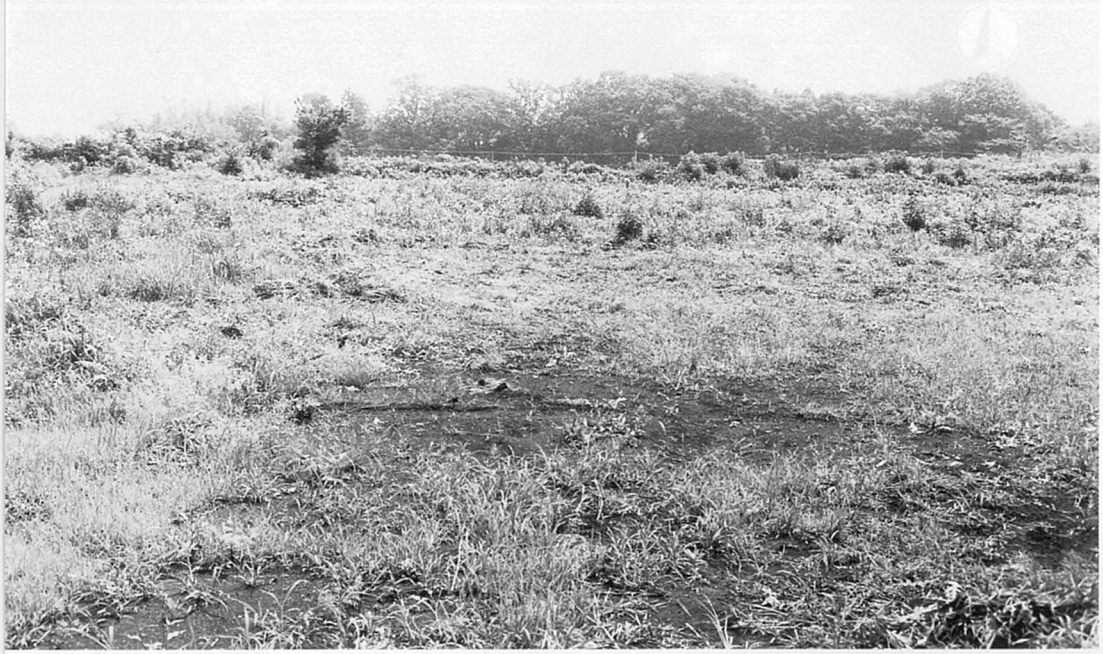
文化層	ブロック	ガラス質黒色安山岩	トロトロ石	安山岩	流紋岩	石英斑岩	黒曜石	閃緑岩	砂岩	頁岩	珪質泥岩	珪質頁岩	機岡産珪質頁岩	硬質頁岩	粘板岩	ホルンフェルス	緑泥片岩	チャート	玉髄（メノウ含む）	石英	不明	土器	点数	点数比	重量（g）	重量比
第1文化層	1	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	2	3	0	0	0	0	1	0	0	0	0	8	0.49%	26.15	0.30%
第1文化層 小計		0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	2	3	0	0	0	0	1	0	0	0	0	8	0.49%	26.15	0.30%
第2文化層	2	0	0	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0.31%	14.53	0.17%
	3	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	8	0.49%	45.81	0.52%
第2文化層 小計		7	0	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	13	0.80%	60.34	0.69%
第3文化層	4	3	0	0	0	0	612(621)	0	0	1	1	4	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	623(632)	38.84%	881.75	10.02%
	5	0	0	0	1	0	279(288)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	280(289)	17.76%	518.03	5.89%
	6	20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8(9)	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	30(31)	1.91%	243.90	2.77%
	7	17(18)	9	0	4	0	0	0	0	0	0	21	0	0	0	0	0	0	0	5	0	0	56(57)	3.50%	617.57	7.02%
	8	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	26	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	31	1.91%	127.49	1.45%
	9	86	0	0	5	0	1	0	2	1	0	16	0	4	0	0	0	2	4	0	0	0	101	6.21%	2444.51	27.77%
	10	42(46)	0	1(2)	10	0	0	0	1	0	0	165(174)	1	0	0	0	0	0	4	0	0	0	224(238)	14.63%	2483.72	28.22%
	11	15	0	0	14(15)	0	6	0	0	0	0	13	0	0	3(4)	0	0	3	1	0	0	0	55(57)	3.50%	254.72	2.89%
	12	36(41)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	119(126)	0	0	0	0	158(170)	10.45%	1143.79	12.99%
第3文化層 小計		203(213)	9	1(2)	34(35)	0	898(916)	0	3	2	1	253(263)	1	4	3(4)	3	0	126(133)	11	5	1	0	1558(1606)	98.71%	8715.48	99.02%
旧石器 合計		210(220)	9	1(2)	34(35)	0	904(922)	0	3	3	1	255(265)	4	4	3(4)	4	0	127(134)	11	5	1	0	1579(1627)	100.00%	8801.97	100.00%
縄文	石器集中A	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	62	69	21.56%	1107.17	28.03%
	石器集中B	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0.63%	－	－
	石器集中C	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	17	18	5.63%	128.87	3.26%
	石器集中D	12	0	0	3	1	4	1	8	5	0	0	0	0	0	5	1	36	3	0	0	153	231	72.19%	2714.32	68.71%
縄文 合計		14	1	1	3	1	4	1	8	5	0	0	0	0	0	6	1	39	3	0	0	234	320	100.00%	3950.36	100.00%

※（　）は出土点数

写　真　図　版

図版1
西初石五丁目
東初石六丁目第Ⅱ
市野谷宮尻
市野谷入台
牛飼沢
大久保
市野谷芋久保
市野谷三反田
市野谷立野
市野谷中島
市野谷向山
遺跡周辺航空写真
坂川
※赤ラインは事業範囲を示す
0
200m
(1/5,000)
X= -14300
X= -14500
X= -14700
X= -14900
X= -15100
X= -15300
X= -15500
Y= +7900
Y= +8100
Y= +8300
Y= +8500
Y= +8700
20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54
H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z AA BB CC DD EE FF GG

図版 2



2区調査前風景

3区調査前風景

5区調査前風景

第1文化層第1ブロック　西側壁面　東から

第1文化層第1ブロック 北東から

第2文化層第2ブロック　北から

第2文化層第3ブロック　北側壁面　南から

第2文化層第3ブロック　南西から

第3文化層第4ブロック 北西から

第3文化層第4ブロック　南から

第3文化層第5ブロック　南から

図版 4

第 3 文化層第 6 ブロック　北西側壁面

第 3 文化層第 6 ブロック　南西から

第 3 文化層第 7 ブロック　北壁　南から

第 3 文化層第 7 ブロック　東から

第 3 文化層第 7 ブロック　西から

第 3 文化層第 9 ブロック　西から

第 3 文化層第 10 ブロック　南から

第3文化層第10ブロック　南から

第3文化層第11ブロック　南から

第3文化層第12ブロック　東壁　西から

第3文化層第12ブロック　南西から

49U-47　西側壁面　東から

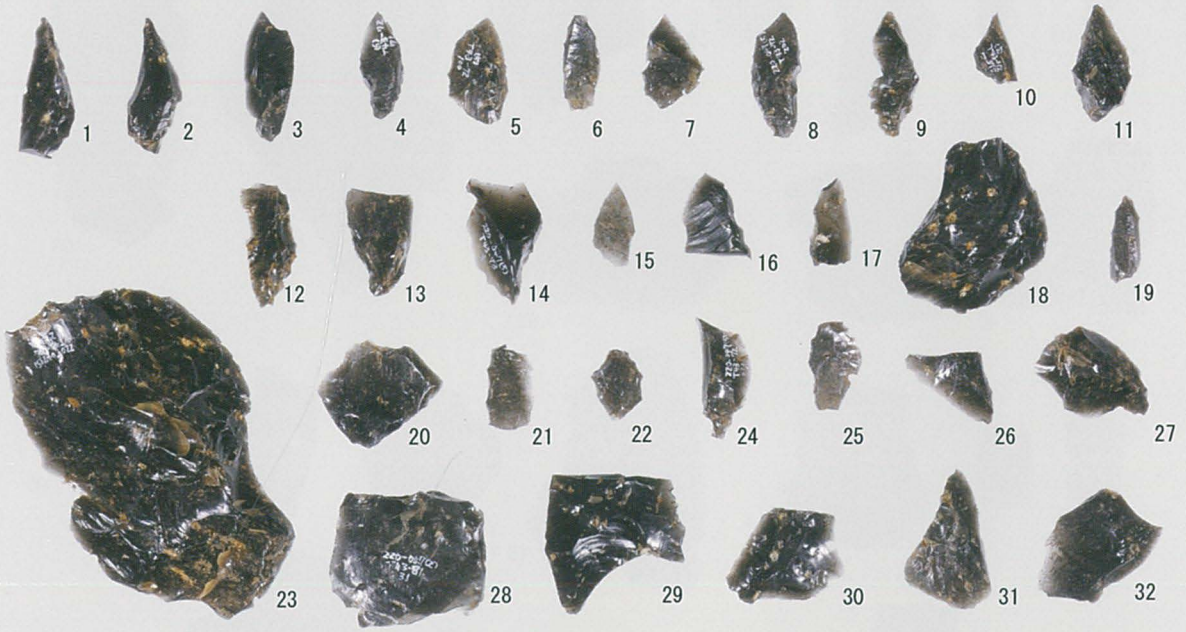
49U-47　南西から

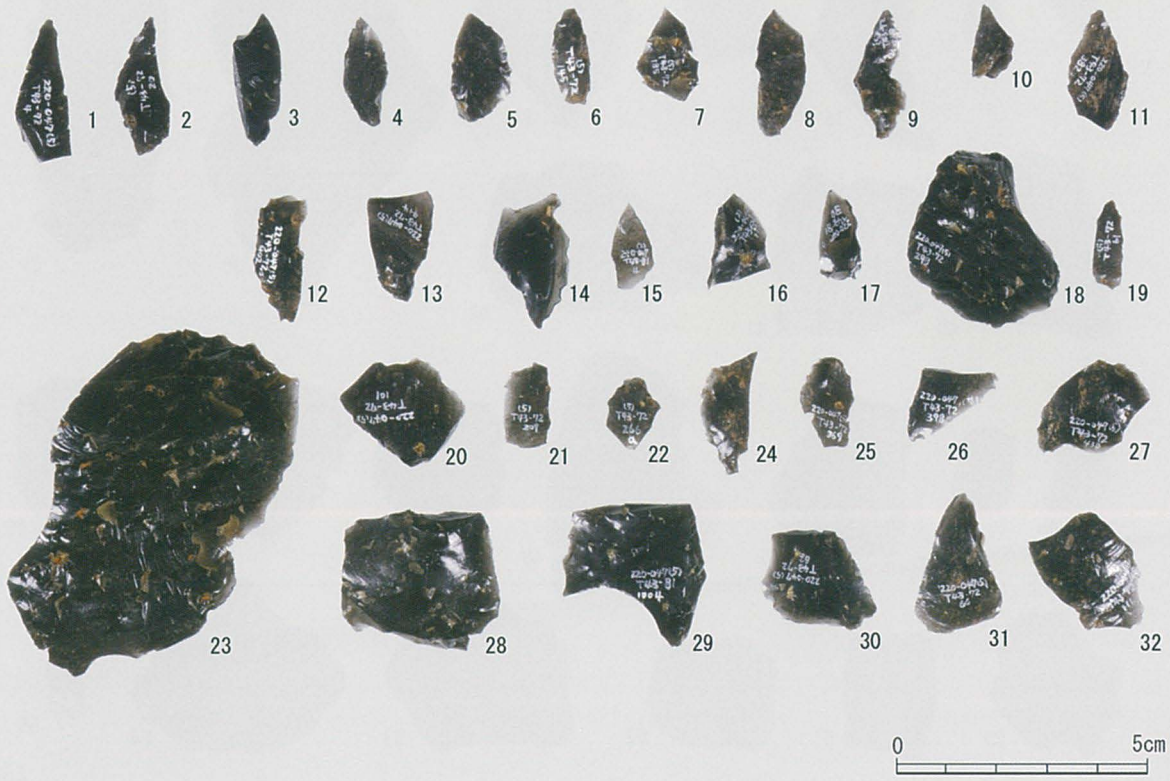
縄文時代　石器集中C地点　南西から

縄文時代　石器集中D地点　西から

第 1 文化層　第 1 ブロック、第 2 文化層　第 2・3 ブロック出土石器

第３文化層　第４ブロック（1 ～ 32）

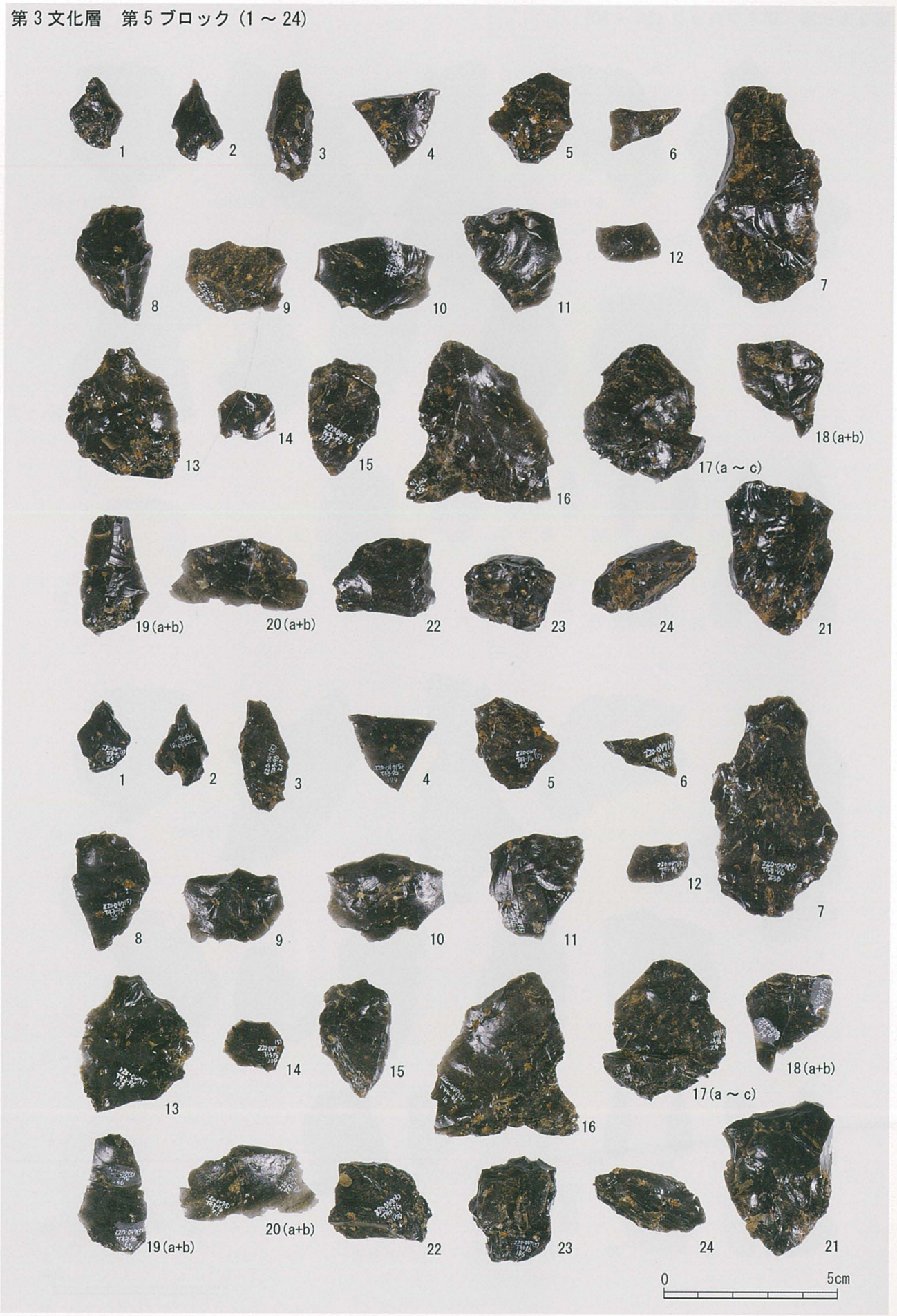




第３文化層　第４ブロック（1）出土石器

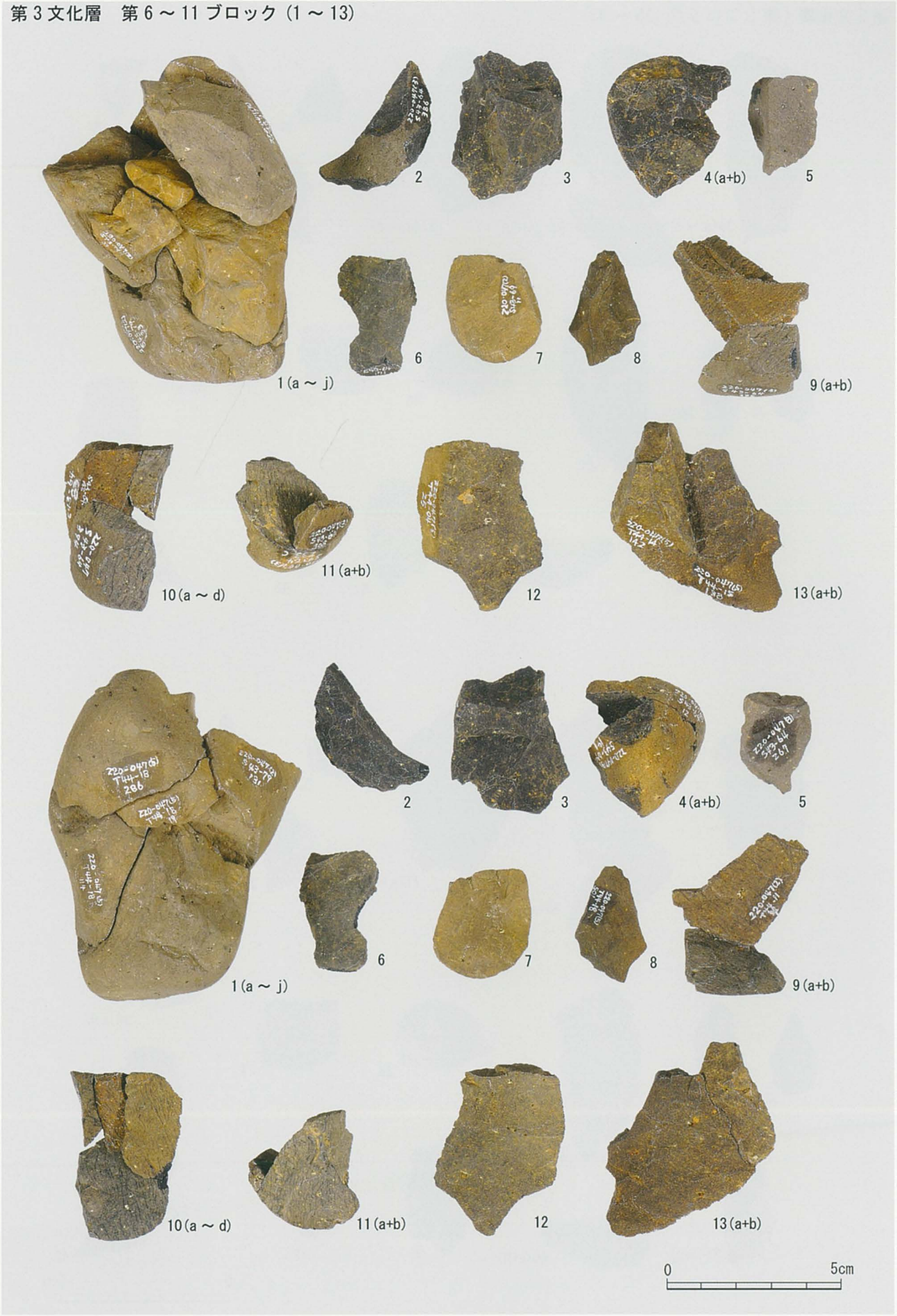
第 3 文化層　第 4 ブロック (2) 出土石器

第 3 文化層　第 4 ブロック (3) 出土石器

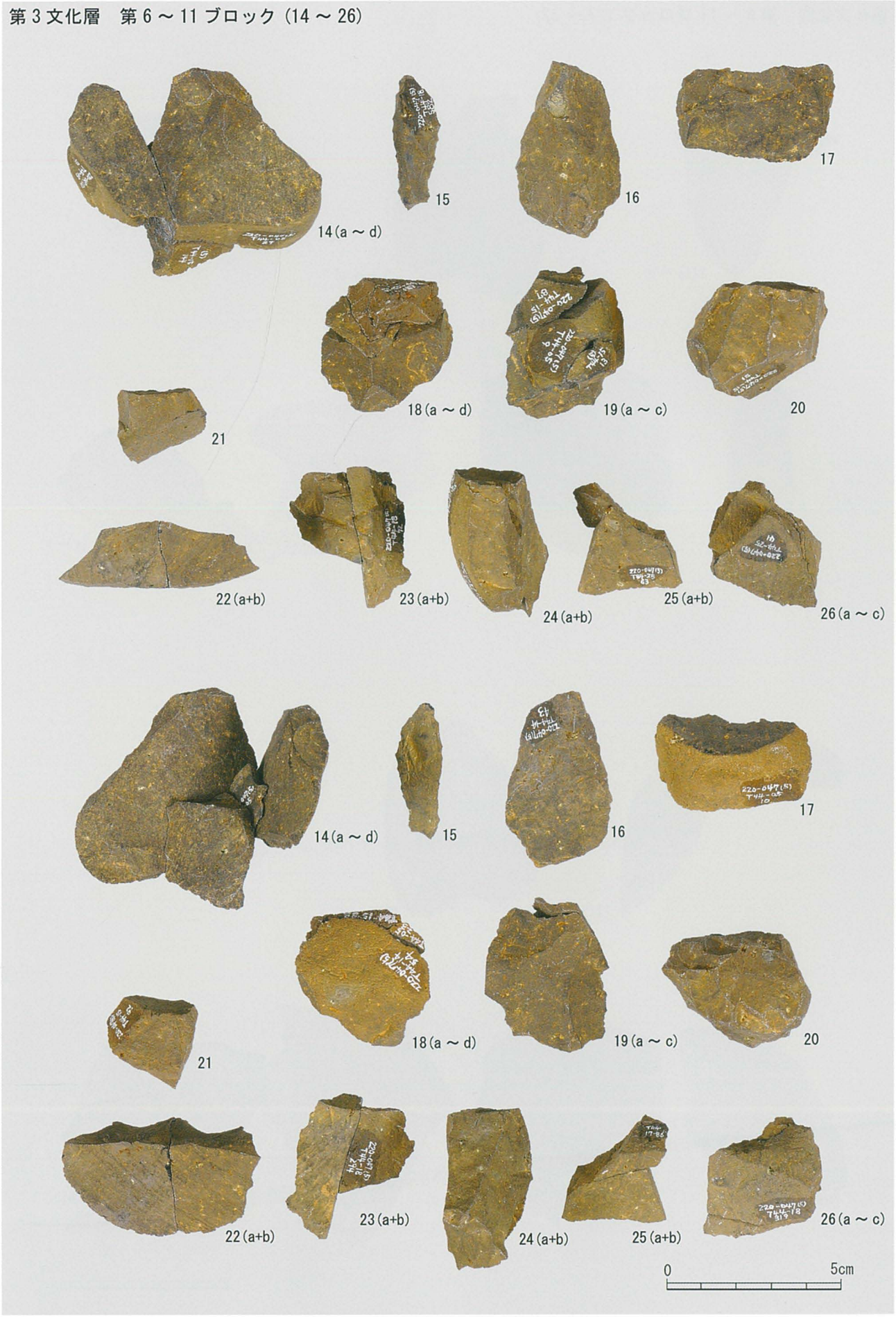


第 3 文化層　第 5 ブロック（1）出土石器

第 3 文化層　第 5 ブロック (2) 出土石器



第 3 文化層　第 6 ～ 11 ブロック (1) 出土石器



第 3 文化層　第 6 ～ 11 ブロック (2) 出土石器

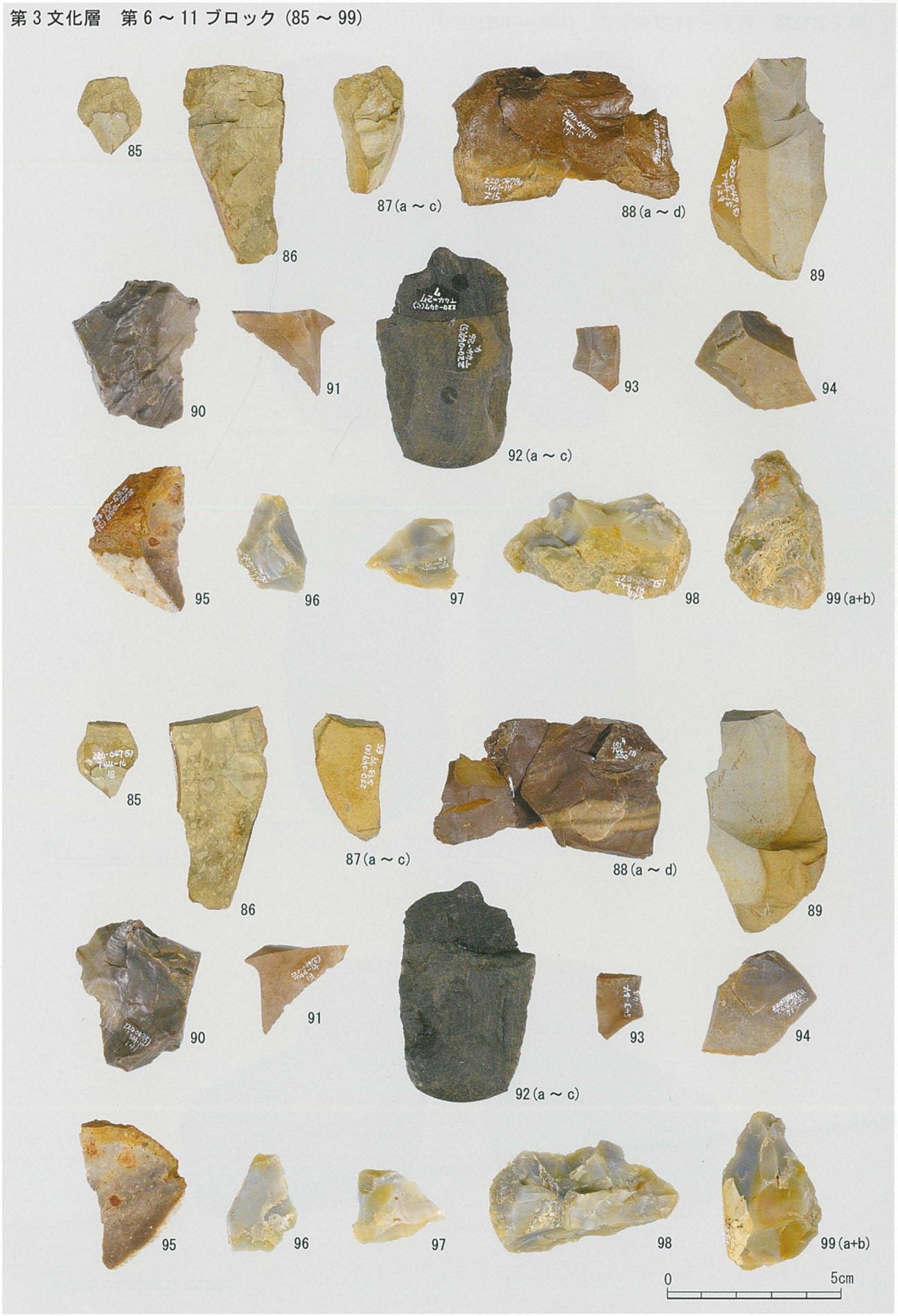
第 3 文化層　第 6 ～ 11 ブロック (3) 出土石器

第 3 文化層　第 6 ～ 11 ブロック (4) 出土石器

第 3 文化層　第 6 ～ 11 ブロック (5) 出土石器

第 3 文化層　第 6 ～ 11 ブロック (6) 出土石器

第 3 文化層　第 6 ～ 11 ブロック (7) 出土石器



第 3 文化層　第 6 ～ 11 ブロック (8) 出土石器

第 3 文化層　第 6 ～ 11 ブロック　(100 ～ 102)

100 (a+b)

101

0　5cm

102

0　10cm

第 3 文化層　第 6 ～ 11 ブロック (9) 出土石器

流紋岩 142　接 119　第 6 ブロック

流紋岩 144　接 121　第 6・7 ブロック

流紋岩 159　接 134　第 9・10・11 ブロック

流紋岩 167　接 144　第 9・10・11 ブロック

石英斑岩 102　接 179　第 6 ブロック

砂岩 123　接 194　第 7 ブロック

砂岩 127　接 197　第 7・9・10 ブロック

砂岩 144　接 210　第 10 ブロック

砂岩 147　接 213　第 10 ブロック

チャート 116　接 257　第 10 ブロック

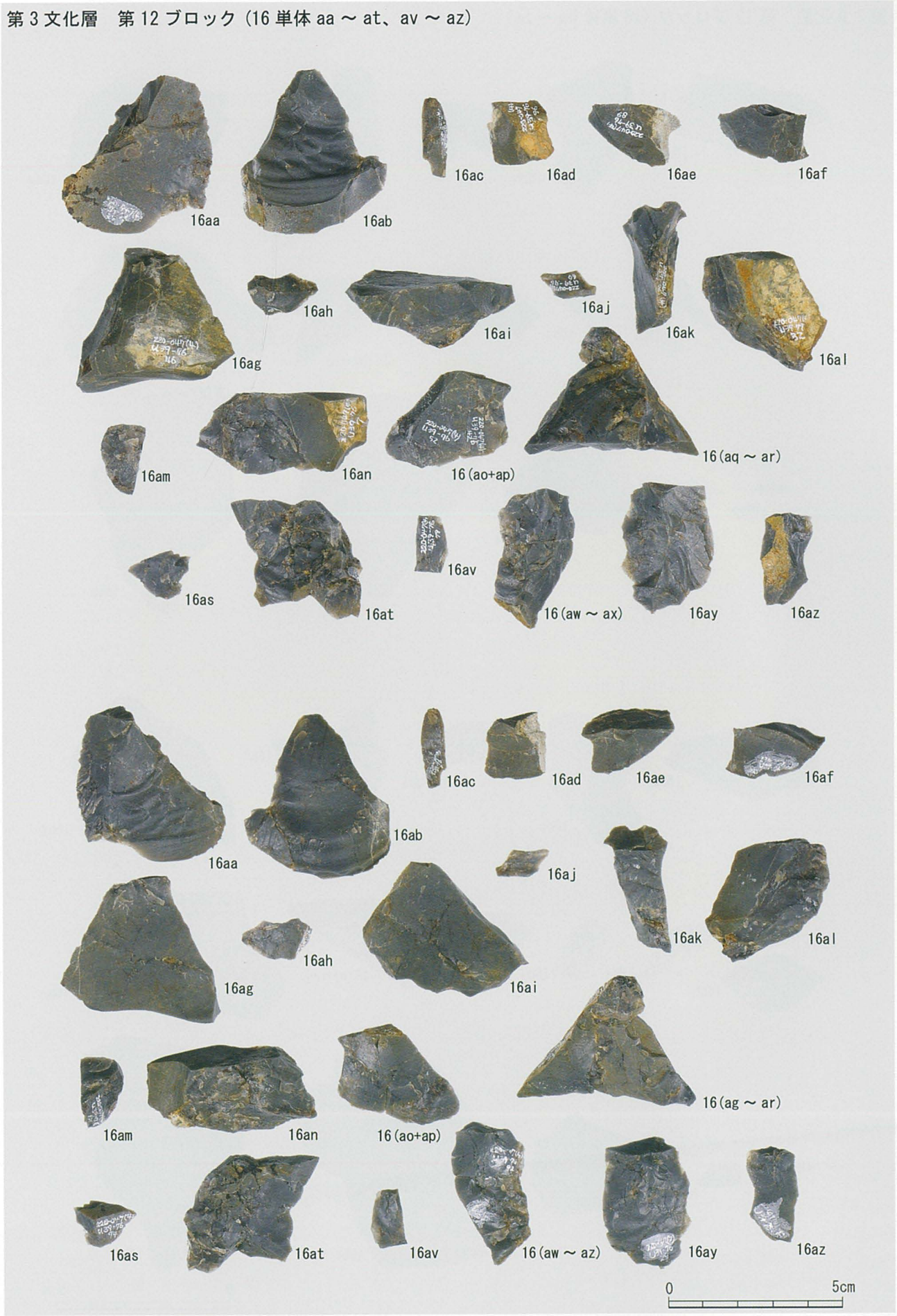
0　10cm

第 3 文化層　第 6 ～ 11 ブロック (10) 焼礫

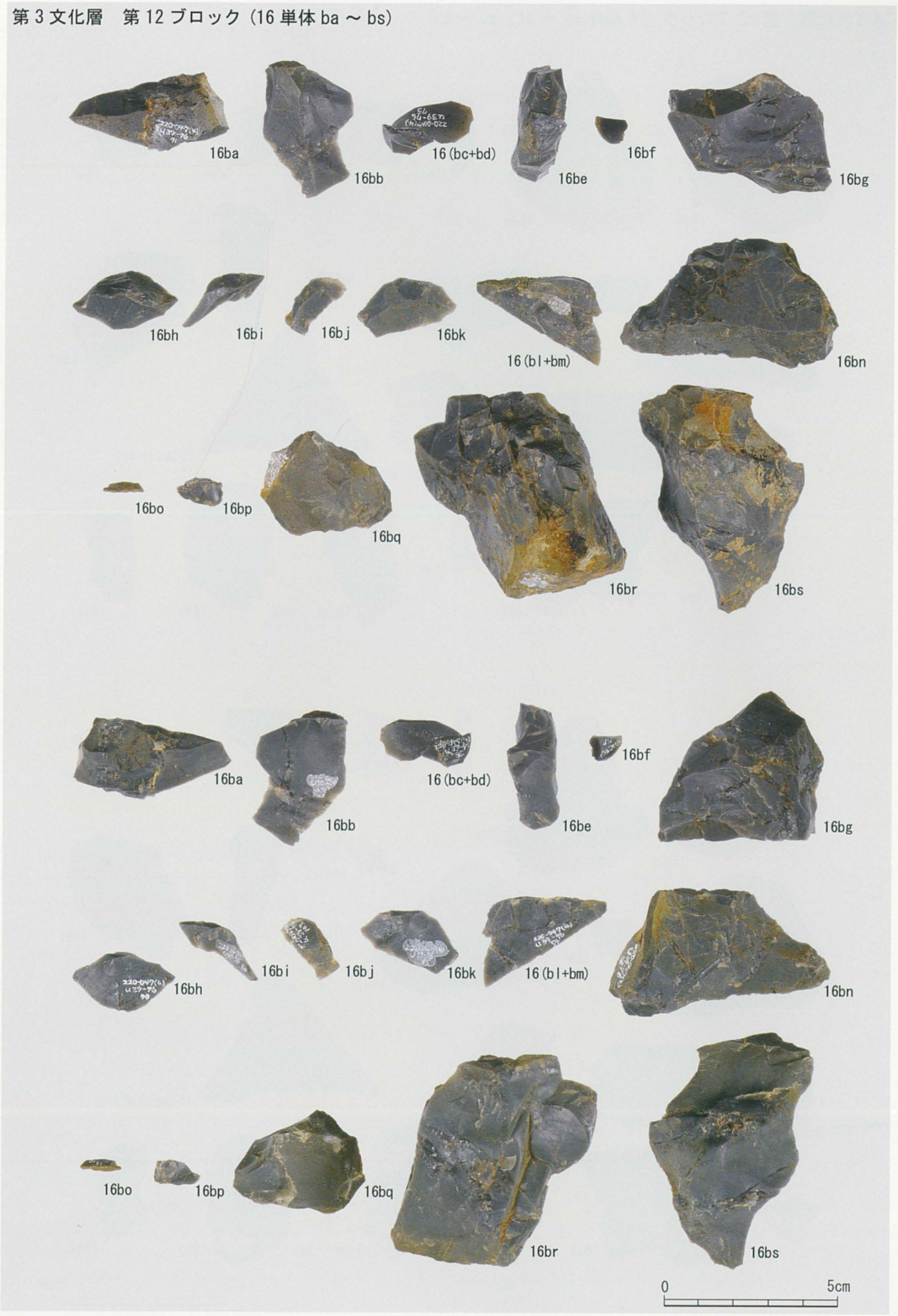
第 3 文化層　第 12 ブロック（1）出土石器

第 3 文化層　第 12 ブロック (2) 出土石器

第 3 文化層　第 12 ブロック (3) 出土石器



第 3 文化層　第 12 ブロック (4) 出土石器



第 3 文化層　第 12 ブロック（5）出土石器

旧石器時代

単独出土石器（1 ～ 4）

縄文時代

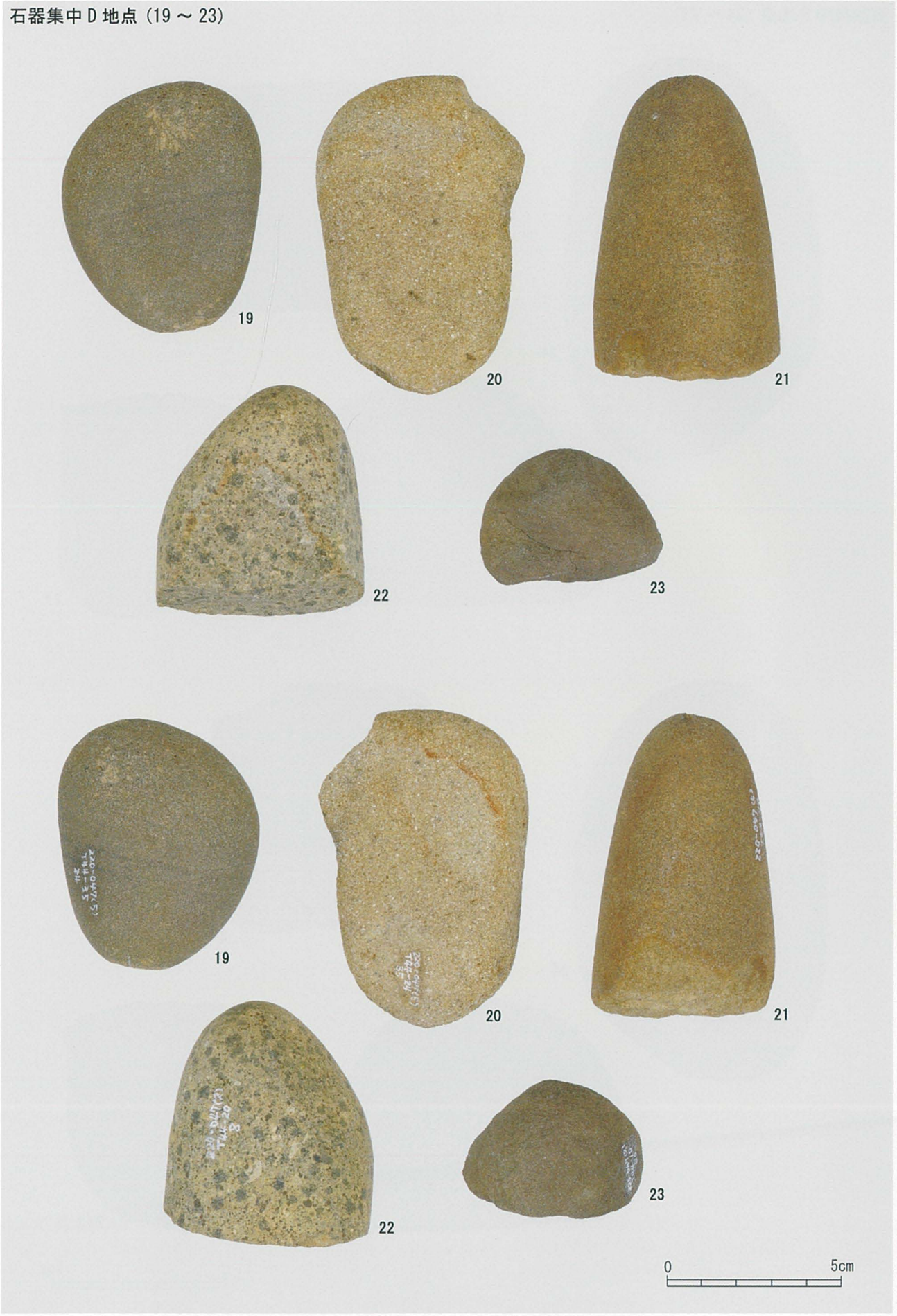
石器集中 A 地点（1 ～ 4）

石器集中 C 地点（1）

旧石器時代　単独出土石器、縄文時代　石器集中 A・C 地点出土石器

縄文時代　石器集中 D 地点（1）出土石器

石器集中 D 地点 (19 ～ 23)



縄文時代　石器集中 D 地点 (2) 出土石器

石器集中 D 地点 (24 ～ 27)

縄文時代　石器集中 D 地点 (3) 出土石器

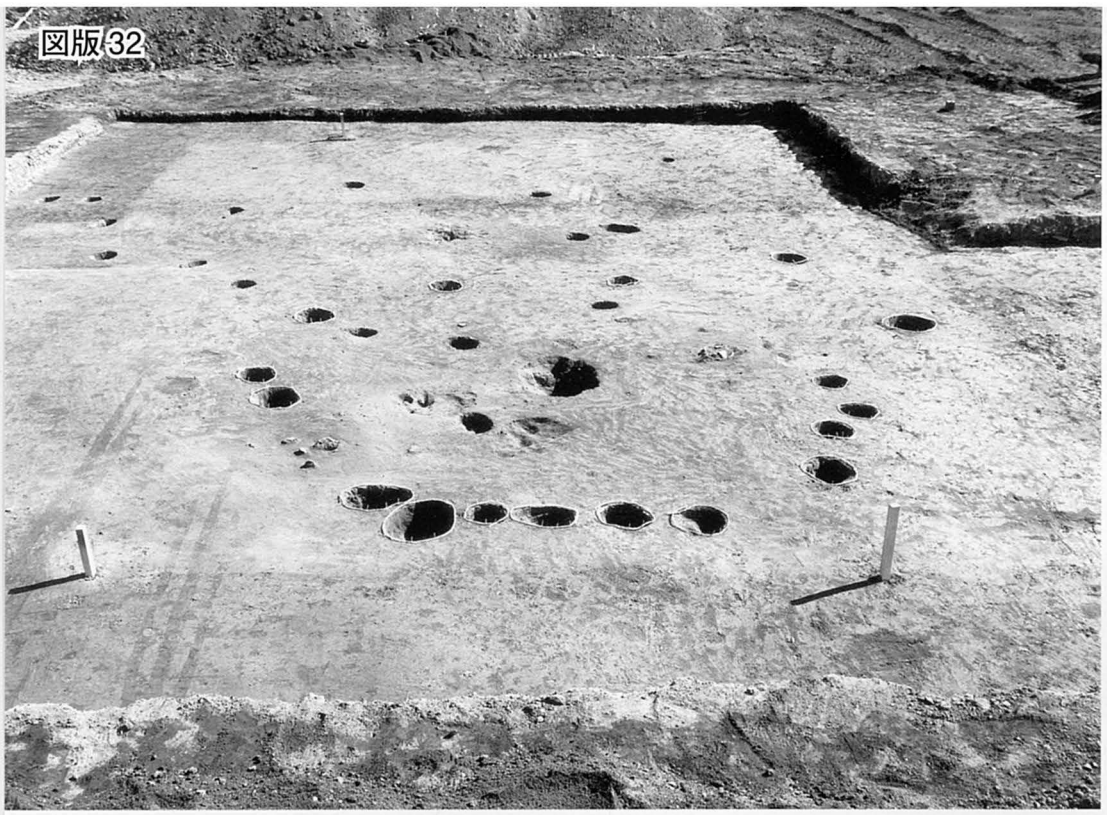
縄文時代　単独出土石器（1・2、5～7、9・10）

※３・４・８は図版40に掲載

0　5cm

縄文時代　単独出土石器

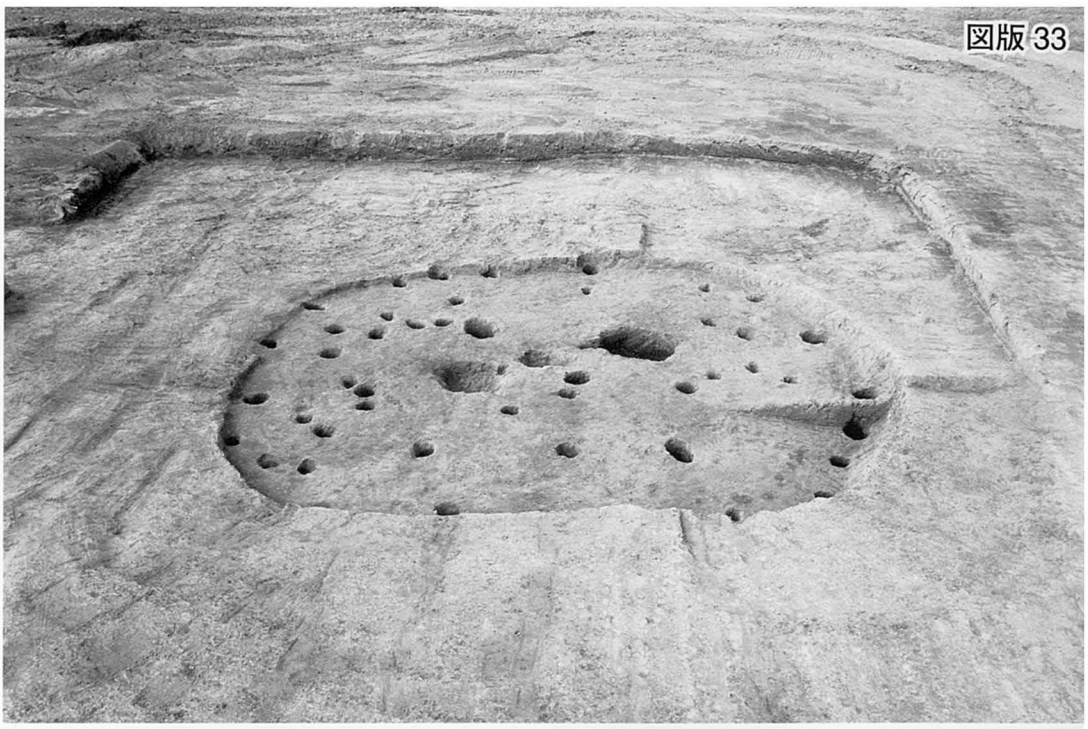
図版32



SI001

SI001 遺物出土状況

SI002



SI003

SI004

SI005
SK008

SI005 遺物出土状況

SI006

SI007

SI008

SI009

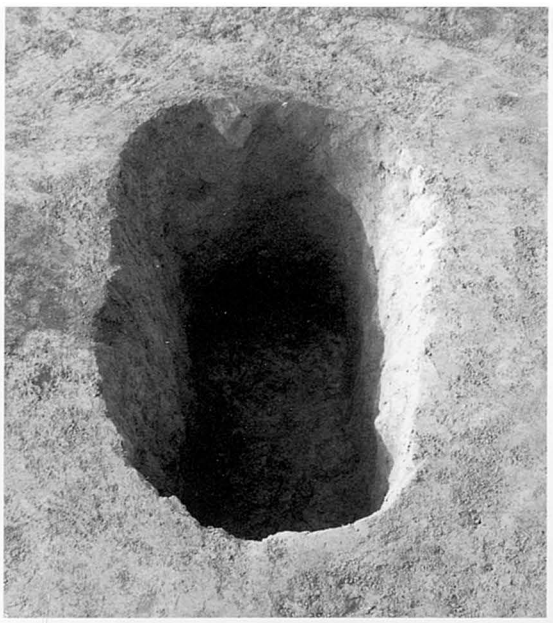
SI012

図版 36

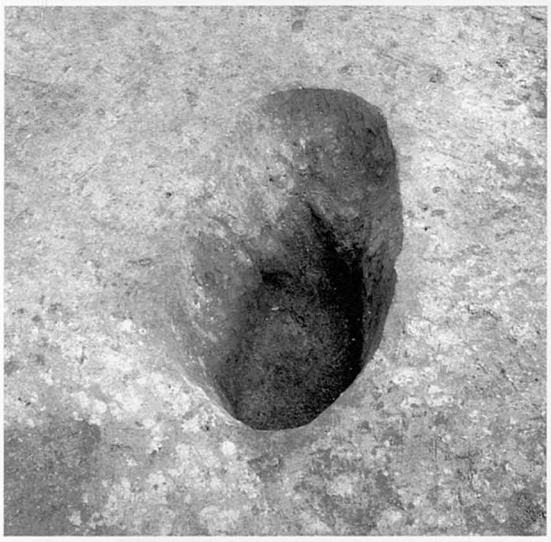
SI013

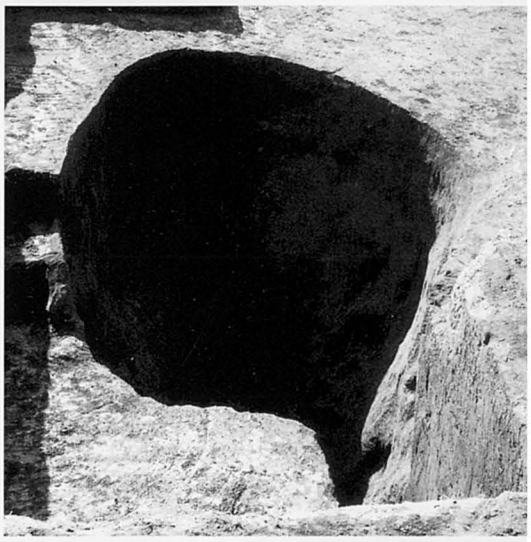
SK005 遺物出土状況

SK005

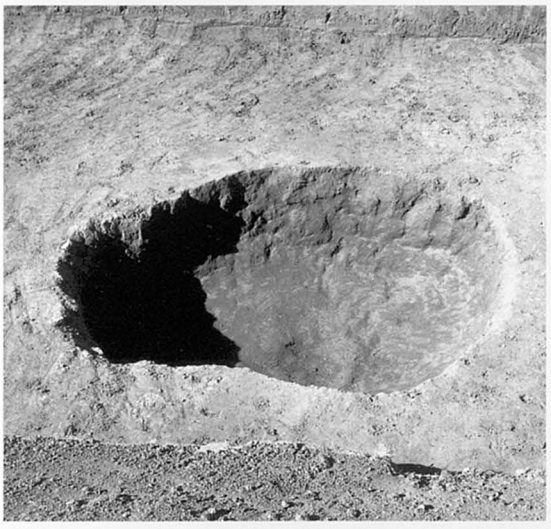


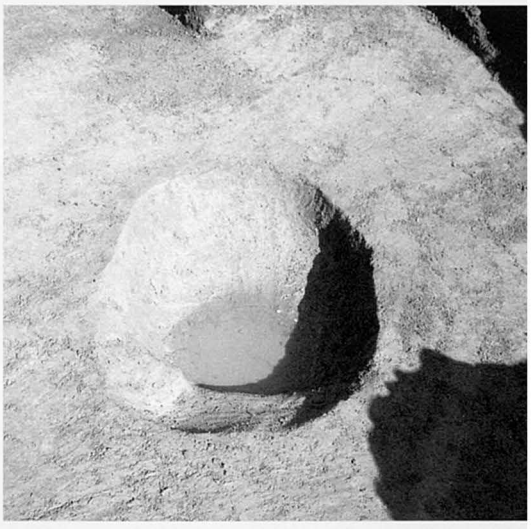
SK001（左）
SK003（右）



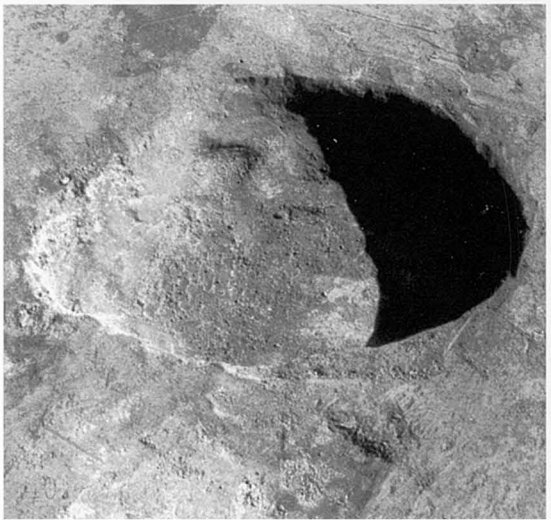


SK007（左）
SK011（右）



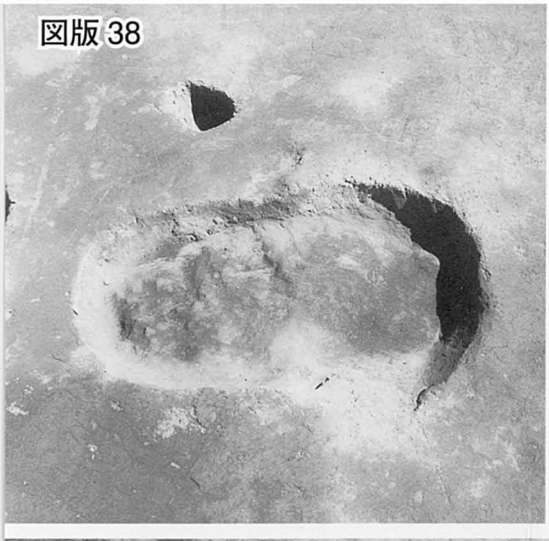


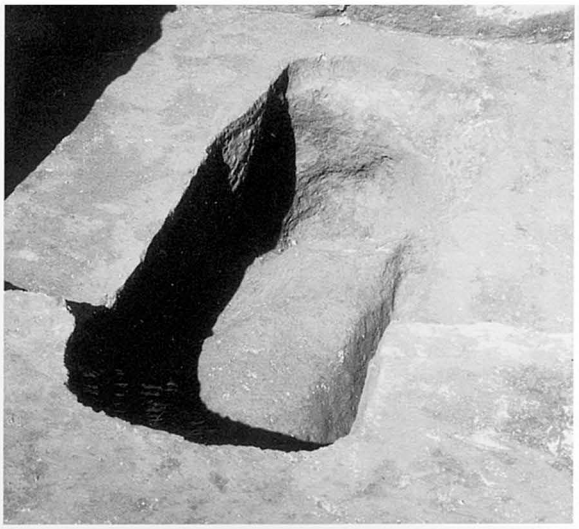
SK002（左）
SK004（右）



SK006（左）
SK009（右）

図版 38

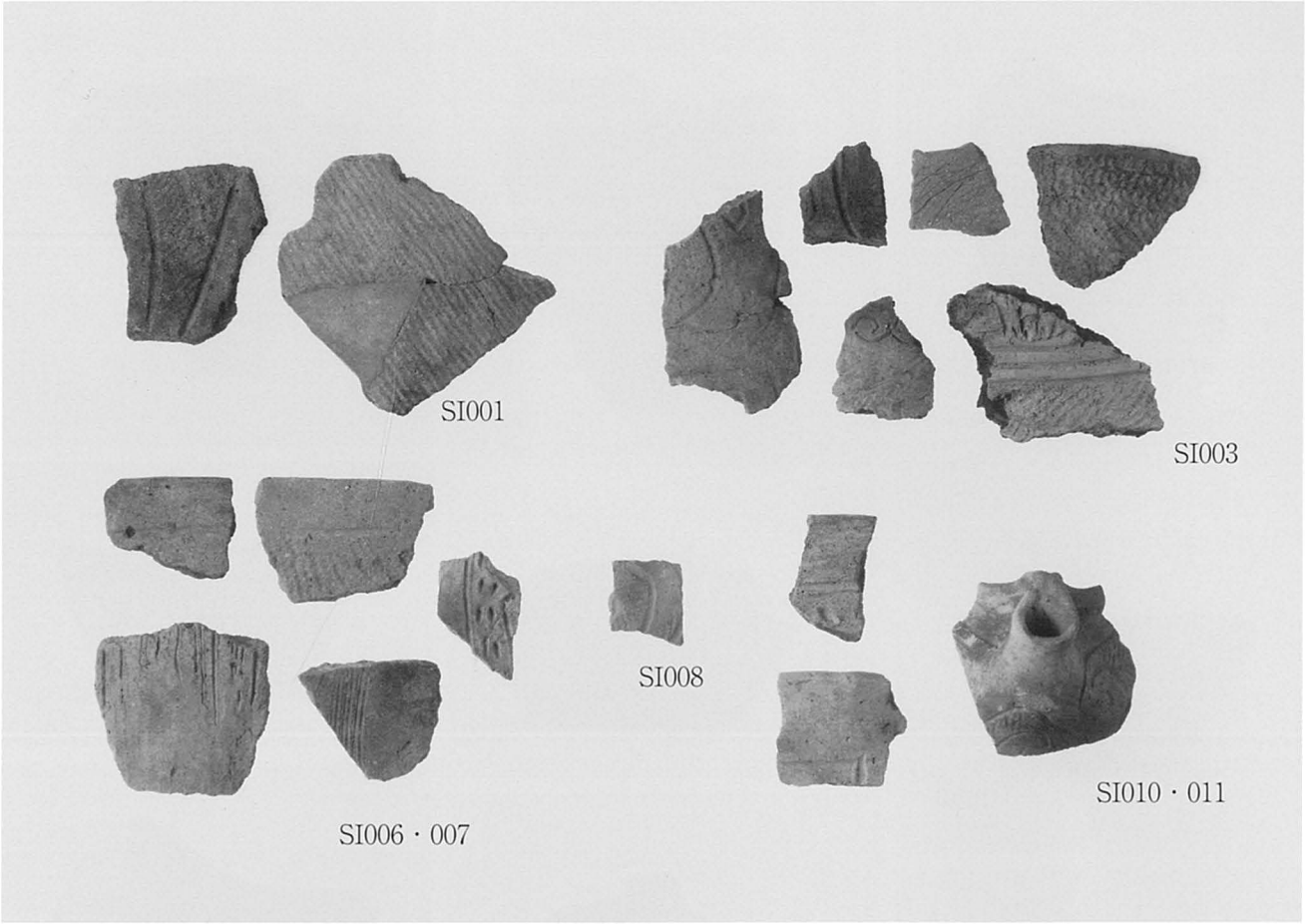


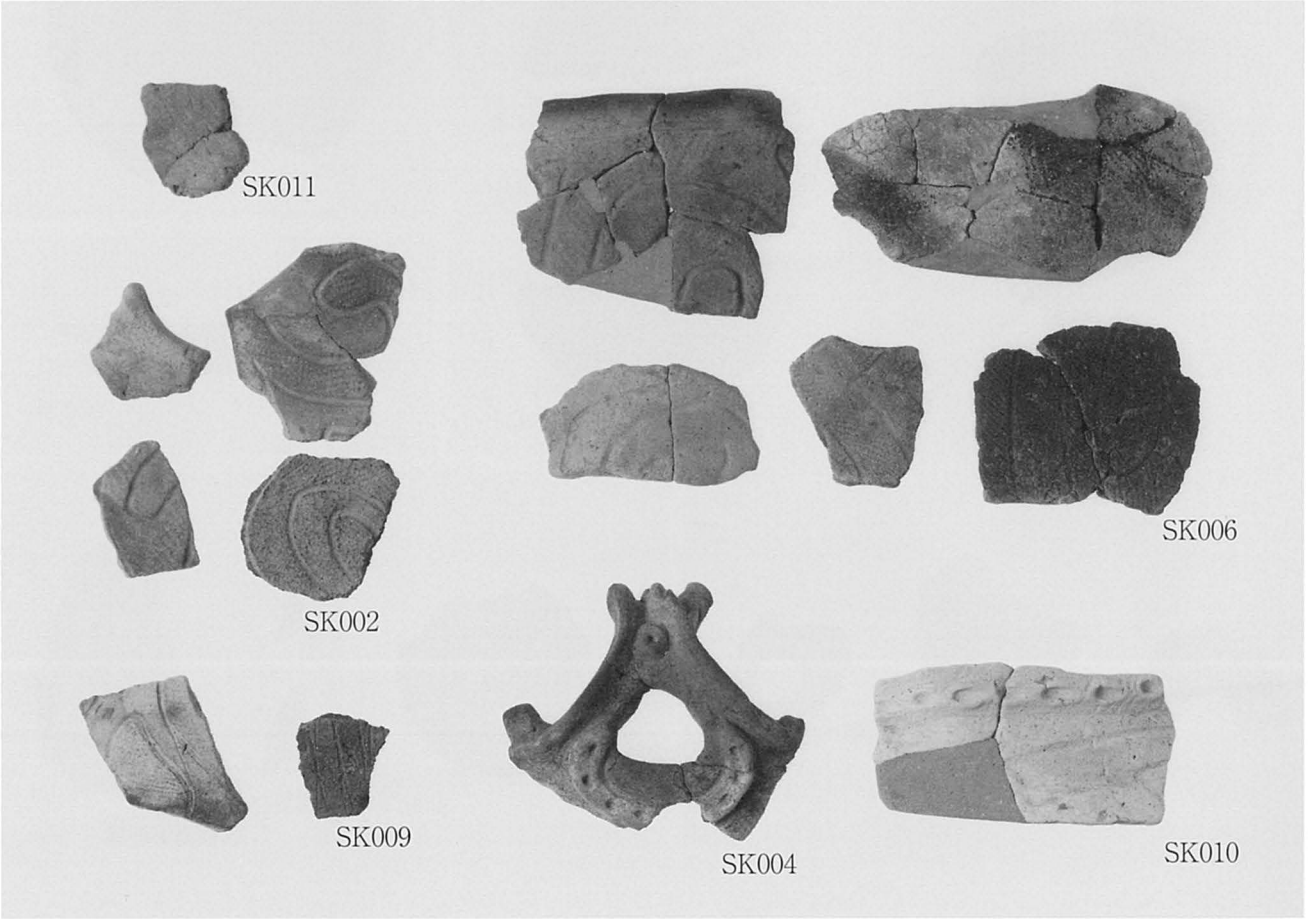


SK010（左）
SK012（右）

SK013

SK014


SI001
SI003
SI008
SI010・011
SI006・007


SK011
SK006
SK002
SK009
SK004
SK010

遺構出土土器

SI001
1

SI005
1

SK005
1

SI001
4

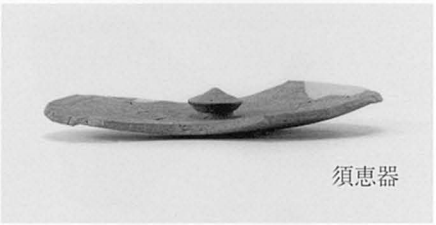
SI007
1

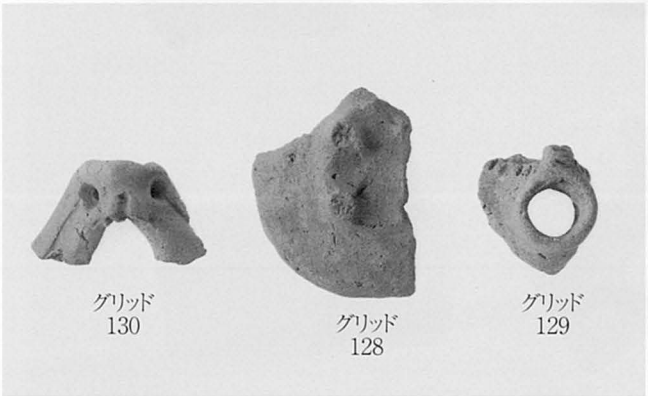
グリッド
131

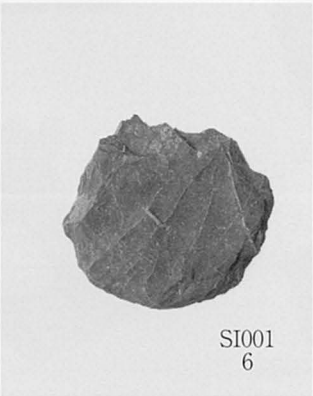
グリッド
57

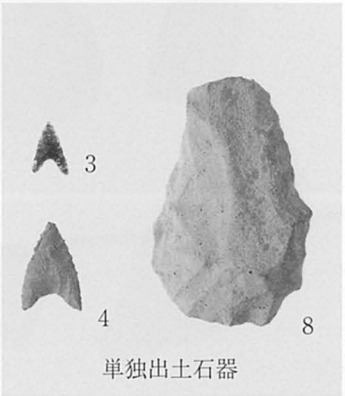
グリッド
128

グリッド
132


須恵器

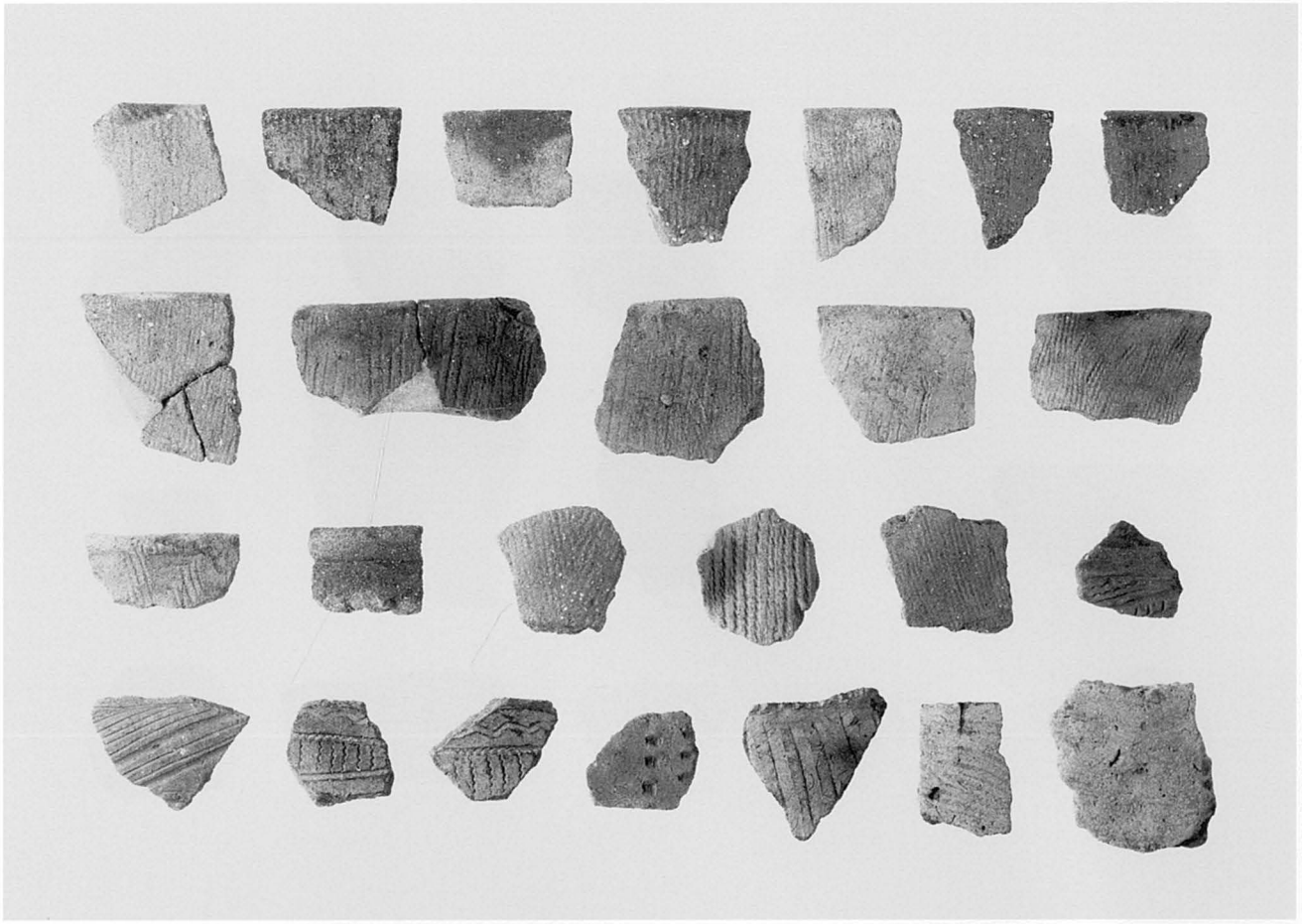

グリッド
130
グリッド
128
グリッド
129

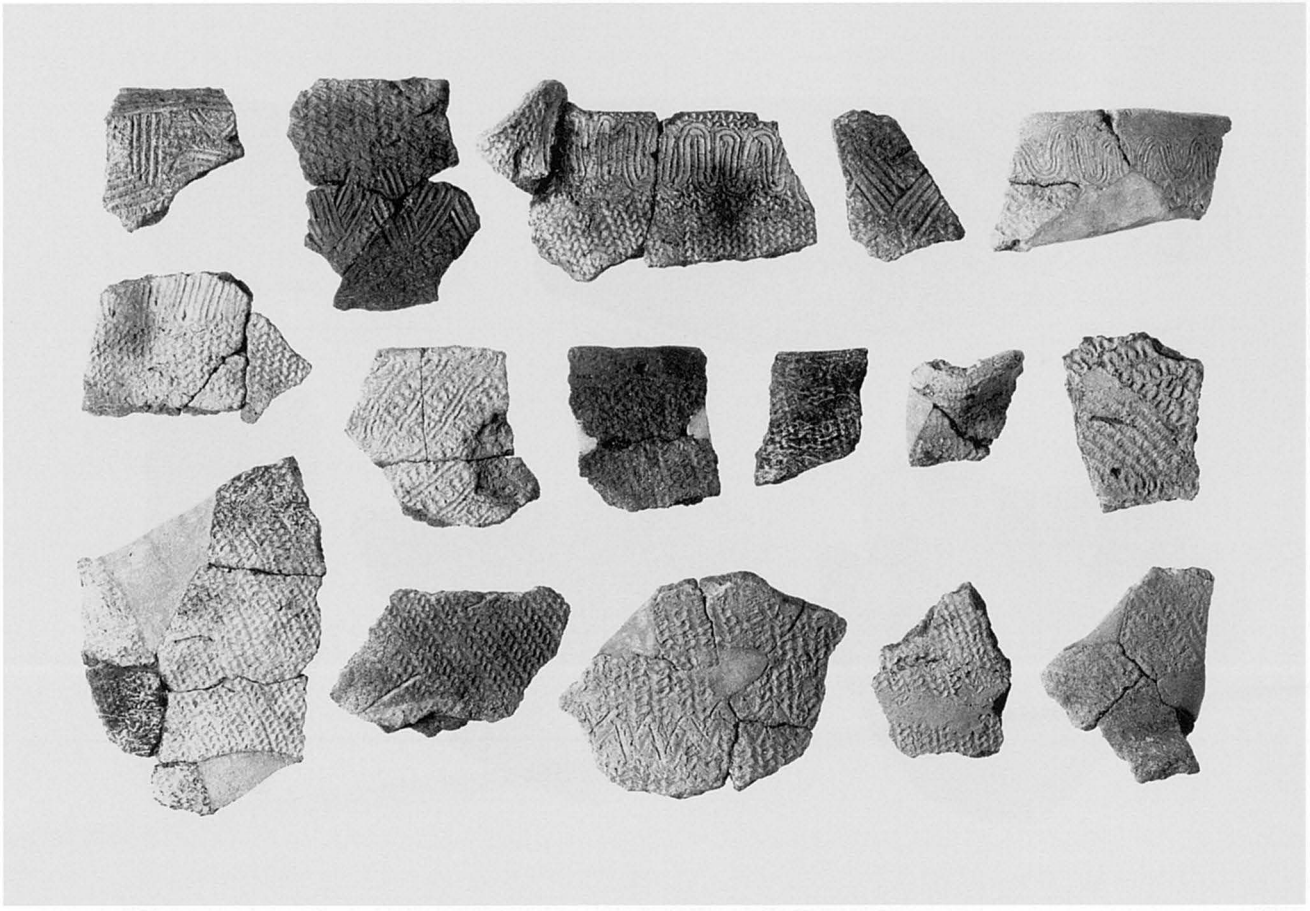

SI001
6



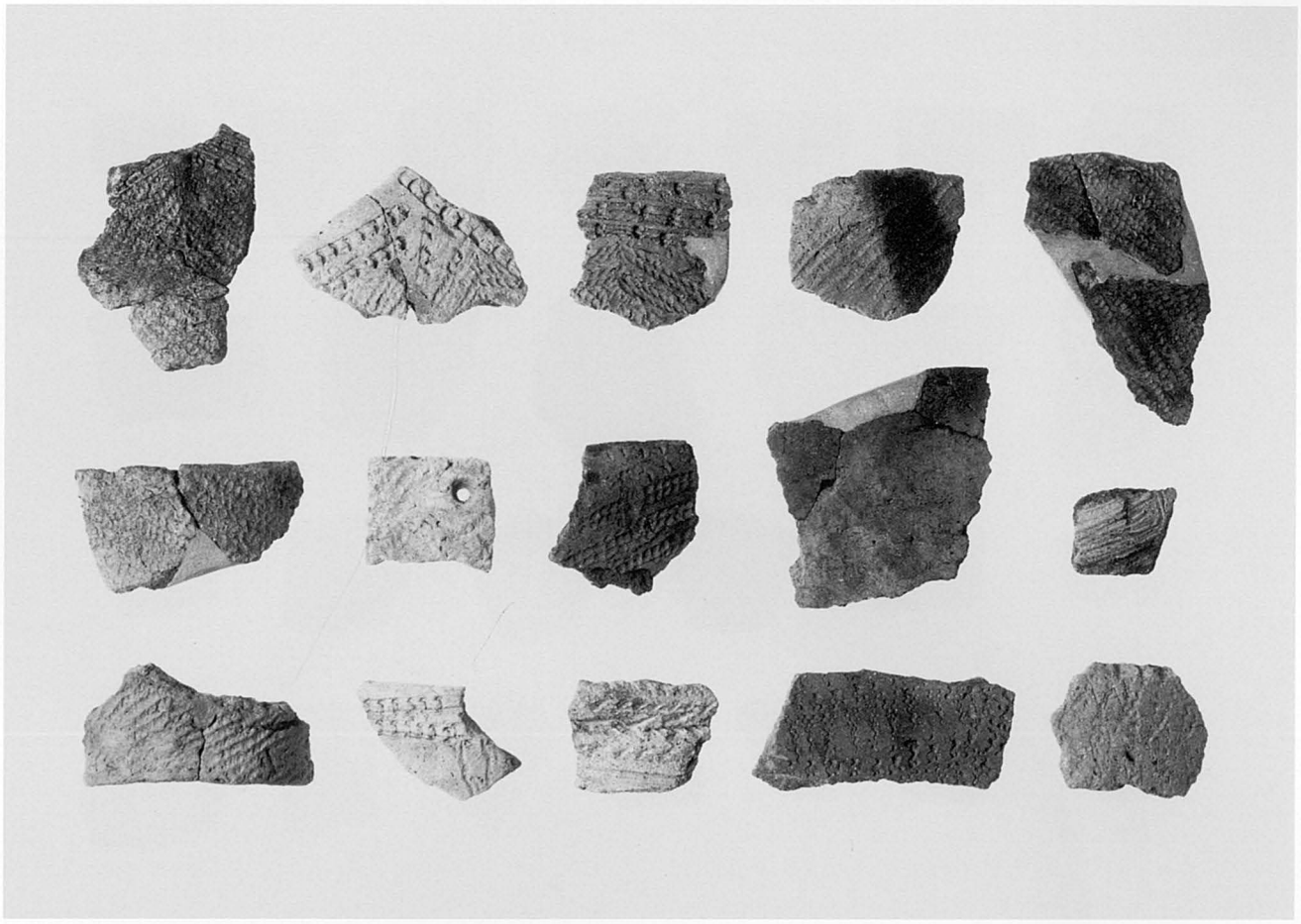
単独出土石器

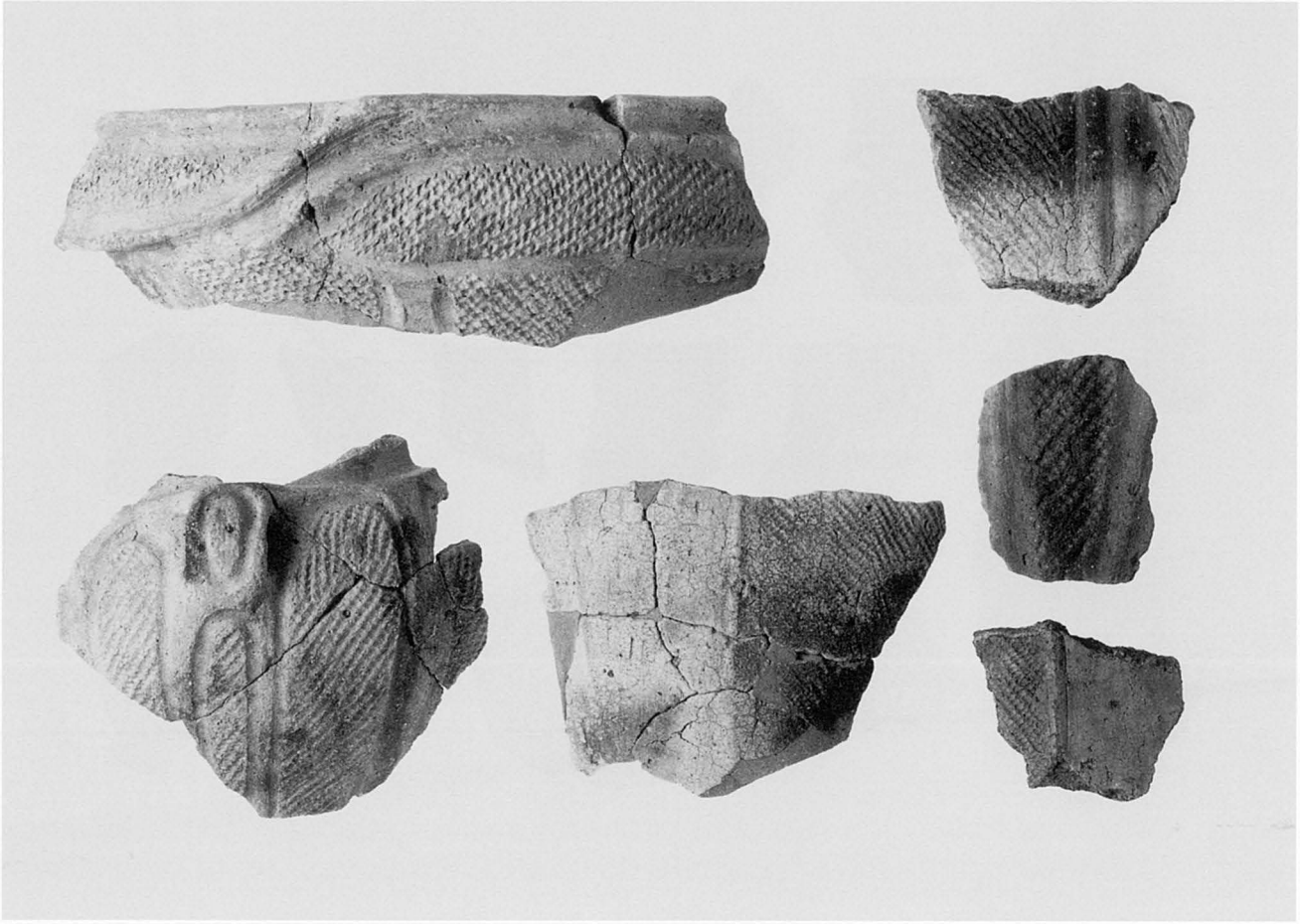
遺構・グリッド出土遺物



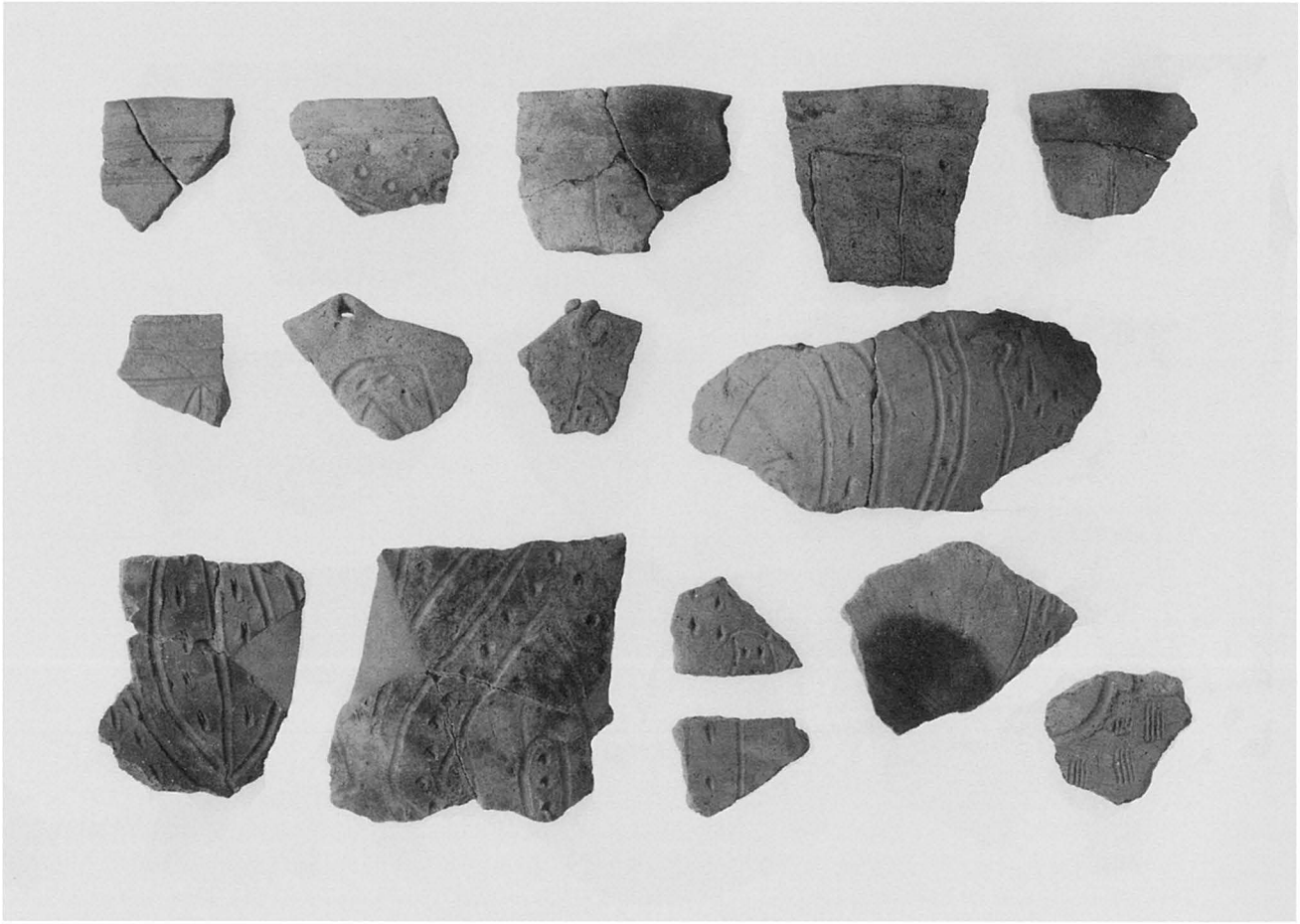


グリッド出土土器(1)

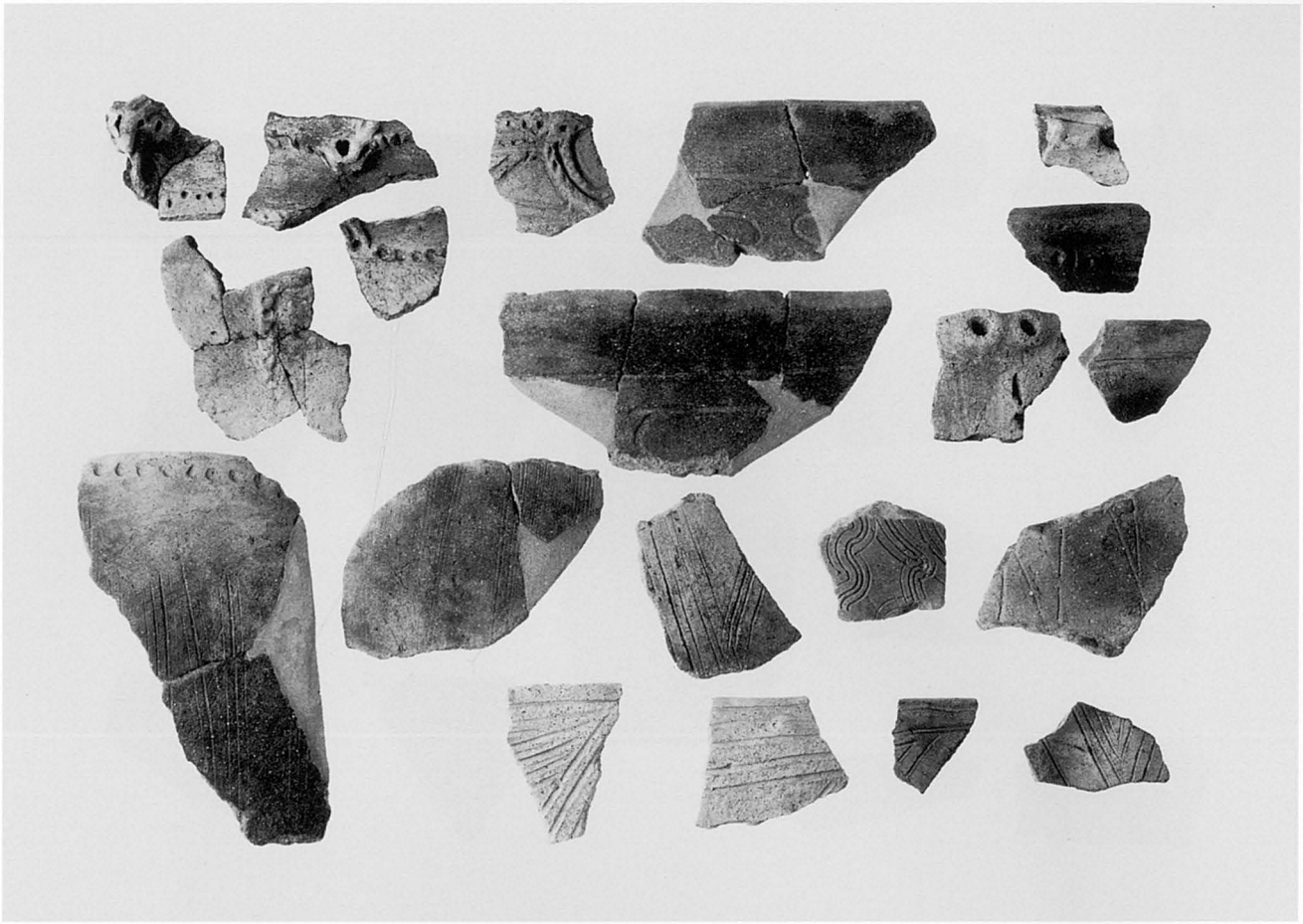


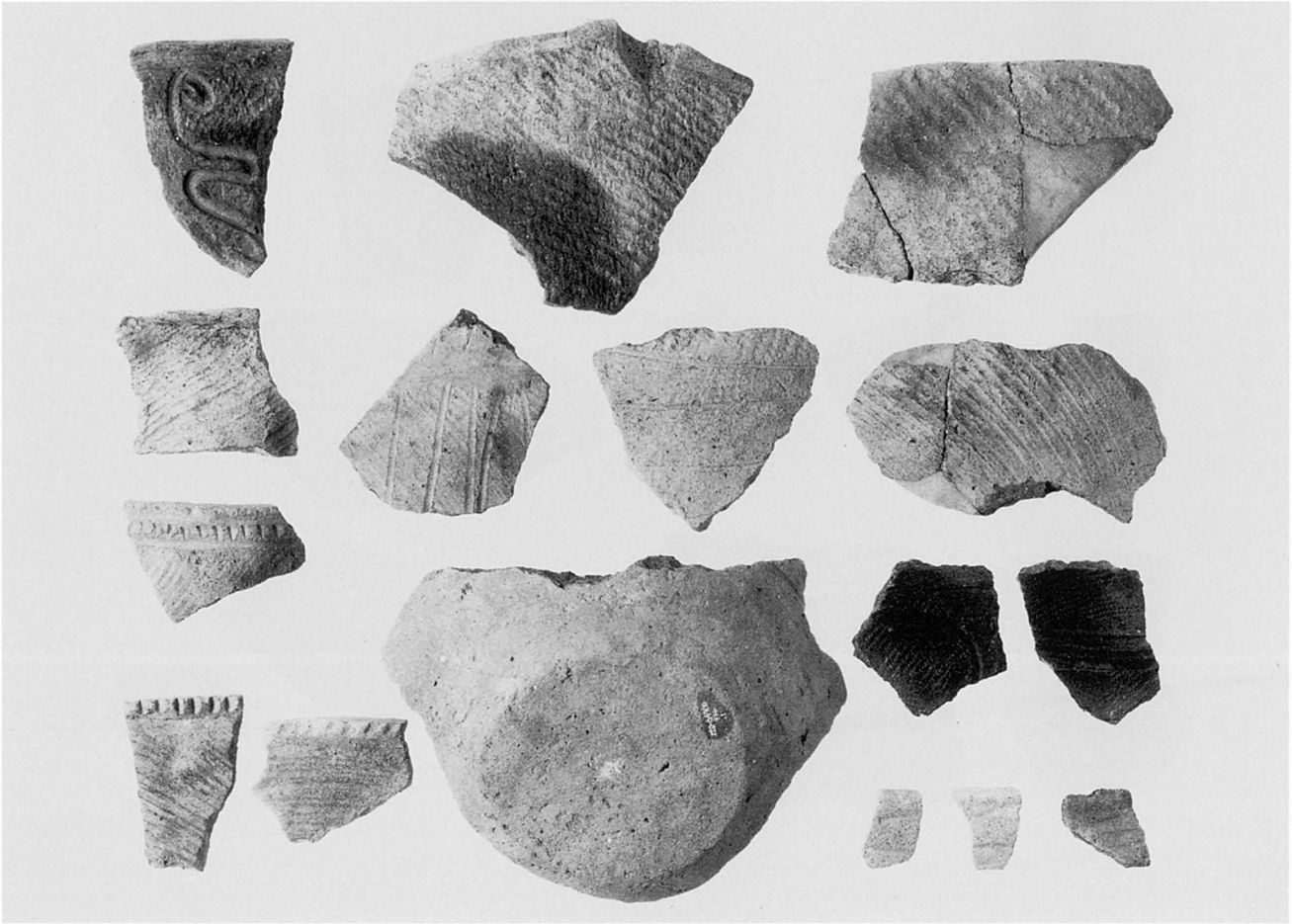


グリッド出土土器(2)



グリッド出土土器(3)





グリッド出土土器（4）

報告書抄録

ふりがな	ながれやましんしがいちちくまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書
副書名	市野谷二反田遺跡
巻次	4
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告
シリーズ番号	第629集
編著者名	伊藤智樹・新田浩三・山岡磨由子
編集機関	財団法人千葉県教育振興財団　文化財センター
所在地	〒284-0003　千葉県四街道市鹿渡809番地の2　　TEL　043（424）4848
発行年月日	西暦2009年8月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
市野谷二反田遺跡（いちのやにたんだいせき）	千葉県流山市市野谷（ちばけんながれやましいちのや）689ほか	12220	047	35度 51分 50秒	139度 55分 30秒	20000518～ 20040730	36,124	土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
市野谷二反田遺跡	包蔵地	旧石器時代	石器集中地点　12か所 礫群　5か所	角錐状石器、ナイフ形石器、掻器、削器	旧石器時代では、Ⅴ層～Ⅳ層下部の礫群を伴った石器ブロックから角錐状石器・ナイフ形石器が出土した。また900点近い黒曜石のほとんどが高原山産である。
	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡　13軒 陥穴　3基 土坑　10基 石器集中地点　4か所	縄文土器、石鏃、打製石斧	
要約	旧石器時代は3時期の石器群が検出された。Ⅴ層～Ⅳ層下部の石器群が充実しており、遠隔地石材を使用した石器製作が行われている。				

千葉県教育振興財団調査報告第629集

流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書4

— 流山市市野谷二反田遺跡 —

平成21年8月31日　発行

編　集　財団法人　千葉県教育振興財団
文化財センター

発　行　独立行政法人　都市再生機構
千葉地域支社
千葉市美浜区中瀬1－3

財団法人　千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡809番地の2

印　刷　大和美術印刷株式会社
千葉県木更津市中央1－1－6